

秋田県文化財調査報告書 第150集

東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書 I

石坂台IV遺跡・石坂台VI遺跡・石坂台VII遺跡
石坂台VIII遺跡・石坂台IX遺跡・松木台III遺跡

秋田県埋蔵文化財センター

1986・11

秋田県教育委員会

秋田県文化財調査報告書 第150集

東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書 I

石坂台IV遺跡・石坂台VI遺跡・石坂台VII遺跡

石坂台VIII遺跡・石坂台IX遺跡・松木台III遺跡

1986・11

秋田県教育委員会



上 七曲台全景（上が南）

下 石坂台VI・石坂台VII遺跡（上が南）

（西地主）相模村内野山、野瀬山等一帯

（西地主）相模郡山木村一帯

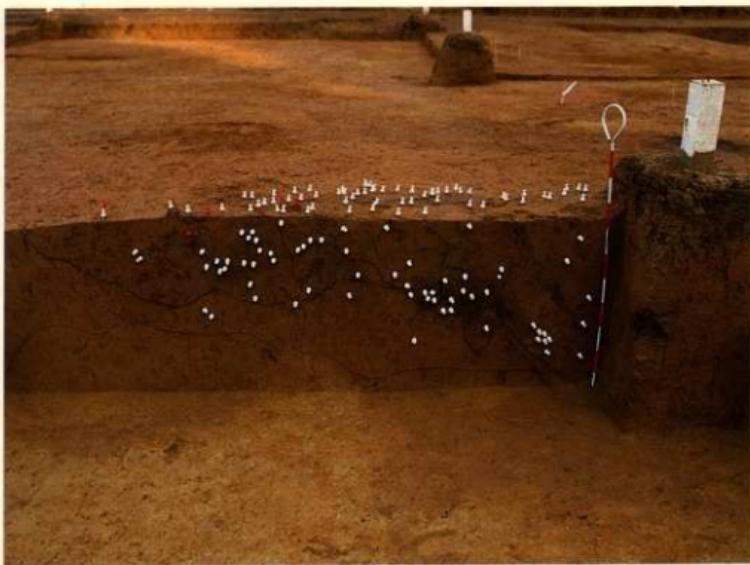


上 石坂台遺跡・石坂台Ⅸ遺跡（上が西）

下 松木台Ⅲ遺跡（上が西）



上 石板台跡 インポリューション（ブリケーション）
下 石板台跡 構造土



上 松木台Ⅲ遺跡 インボリューションと旧石器出土状況
下 松木台Ⅲ遺跡 旧石器時代炭化物と石器の集中状況

上
土
下



上 松木台Ⅲ遺跡 旧石器資料No.1 接合状況（打面）

下 松木台Ⅲ遺跡 旧石器資料No.1 接合状況



上 松木台Ⅲ遺跡 旧石器資料No.2 接合状況
下 松木台Ⅲ遺跡 旧石器時代石器群



上 石坂台IX遺跡 S101 壓穴住居跡

下 石坂台VII遺跡 SK09 土壌断面

等土木施設外側立溝 25cm 槽壁青竹木筋 上

等土木外側立溝 10cm 槽壁青竹木筋 下



上 松木台Ⅲ遺跡 SK22 繩文時代晩期の土壤

下 松木台Ⅲ遺跡 SK110 平安時代の土壤

直径約1.6m、高さ約0.5m
成層土、火成土、土

原生土 40cm、植生付近部、下

序

東北横断自動車道秋田線は、今後の秋田県発展の基となる高速交通体系の根幹をなすものであります。この建設工事は、秋田市～横手市間から開始されることになり、分布調査の結果、この区間の路線上に、旧石器時代から中世に至る37ヶ所の遺跡が確認されました。

昭和60年度は、工事に先立つ調査の初年度として、河辺郡河辺町七曲地区に所在する6遺跡について発掘調査を実施いたしました。発掘調査の結果、6遺跡からは、県内では最も古い時期に属すると考えられる旧石器や、縄文時代の土壙基群、県内では類例の少ない静止糸切技法を持つ平安時代の土師器など多くの遺構・遺物が検出され、秋田県の歴史を解明する上で貴重な資料を得ることができました。

ここに本書を刊行するにあたり、専門指導員、日本道路公団、河辺町、同教育委員会はじめ関係各位に対し、深く感謝の意を表すとともに、本書が学術上はもちろんのこと、埋蔵文化財に対する御理解、保護のために広く活用されることを切に望むものであります。

昭和61年12月1日

秋田県教育委員会

教育長 斎藤 長

例　　言

- 1 本報告書は、東北横断自動車道秋田線の建設工事に係る埋蔵文化財の発掘調査のうち、昭和60年度河辺郡河辺町七曲台地区で調査された6遺跡の成果報告である。
- 2 本書の執筆は、第2篇第6章第2節1（大野憲司）以外は各遺跡の調査担当者がそれぞれ分担したがそれ以外のものは以下の通りである。

第1篇第1章・第3篇第1章第1節・第2節5	大野憲司
第1篇第2章・第3篇第1章第2節2	谷地薰
第1篇第3章第2節・第3篇第1章第3節1	利部修
第1篇第4章・第3篇第1章第2節1	小林克
第3篇第1章第2節3・第3節2	高橋学
第3篇第1章第2節4	高橋忠彦
- 3 第1篇第3章第3節「周辺の地形と地質」は、専門指導員である秋田大学教育学部助教授白石建雄氏に執筆をお願いした。また石器・石製品の石質鑑定も同氏による。
- 4 土色の表記は、農林省水産技術会議事務局監修、財團法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』を使用した。
- 5 別篇の放射性炭素による年代測定は学習院大学理学部木越邦彦教授に、花粉分析・火山ガラスの屈折率測定・重鉱物分析・樹種同定・種子同定はパリノ・サーヴェイ株式会社に委託したものである。
- 6 調査期間を通して、また本書の作成にあたり次の諸氏から指導・助言を賜った。記して謝意を表すものである。（敬称略、アイウエオ順）

秋元信夫 稲田孝司 稲野彰子 稲野裕介 大井 康 岡田茂弘 岡村道雄 倉田万郎
越田雅司 小林博昭 小松正夫 昆 政明 肖原俊行 新野直吉 西井龍儀 西谷 隆
藤原妃敏 本間 宏 松島信吉 森 幸彦

凡例

- 1 遺構図面は原則として1/40で収載した。
- 2 遺物実測図は原則として土器1/3、石器1/2、で収載し、土器片の拓影は1/3で収載した。
- 3 各遺構の土層断面図およびプロフィール図の計測基準となった水系レベルは、特に必要とするものを除いて削除している。
- 4 各遺構の土層断面図の注記は、遺構説明分の中で行うこととし、図の中での番号も削除している。ただし説明が事実記載を越えて論述にまで至る場合には明記している。
- 5 遺構名に用いた略記号は以下の通りである。

住居跡……SI、 土壌……SK、 焼土遺構……SN、 土器埋設遺構……SR、
溝跡……SD、 挖立柱建物跡……SB、 配石遺構……SQ、
フラスコ状土壤……SKF、 Tピット……SKT、 その他の遺構……SX、
遺構図面中に記したSは縄を、RPは土器、RQは石器を示している。

- 6 遺構配置図中に使用した記号は以下の通りである。

縄文時代住居跡…… ○ 土壌…… ● 焼土遺構…… ◇
配石遺構…… ☆ Tピット…… △
平安時代堅穴住居跡…… □ 土壌…… ○ 焼土遺構…… ◆
炭焼窯…… ★ 倒木痕…… ◇

- 7 遺構図面中に使用したスクリーン・トーンは以下の通りである。

地山…… 地山逆転層…… 焼土……
炭化物…… 段丘疊層……

目 次

序

例 言

凡 例

第1篇

第1章はじめ	3
第1節 調査に至るまで	3
第2節 調査経過	4
第3節 調査の組織と構成	5
第4節 調査の方法	7
第2章 遺跡の立地と環境	8
第1節 遺跡群の立地	8
第2節 周辺の地形と地質 (岩見川および雄物川下流域の河岸段丘について)	10
第3節 歴史的環境	25

第2篇

第1章 石坂台IV遺跡	31
第1節 調査の概要	33
第2節 調査の記録	35
第3節 まとめ	43
第2章 石坂台VI遺跡	55
第1節 調査の概要	57
第2節 調査の記録	61
第3節 まとめ	64

第3章 石坂台Ⅷ遺跡	71
第1節 調査の概要	73
第2節 調査の記録	74
第3節 まとめ	89
第4章 石坂台Ⅸ遺跡	109
第1節 調査の概要	111
第2節 調査の記録	116
第3節 まとめ	195
第5章 石坂台IX遺跡	243
第1節 調査の概要	247
第2節 調査の記録	248
第3節 まとめ	271
第6章 松木台Ⅲ遺跡	309
第1節 調査の概要	311
第2節 調査の記録	314
第3節 まとめ	461
第3篇	
第1章 七曲台における遺構と遺物	547
第1節 旧石器時代	547
第2節 繩文時代～弥生時代	551
第3節 古代～近代	560
別編 自然科学的分析	
1 放射性炭素年代測定	571
2 花粉分析／重鉱物分析・屈折率測定／材・種子同定	572

第 1 篇

第1章 はじめに

第1節 調査に至るまで

東北横断自動車道秋田線は、秋田市—横手市—岩手県北上市を結ぶ秋田県期待の高速交通体系の基幹をなす道路である。これが昭和53年11月には秋田市—横手市間の第8次施行命令があり、昭和54年11月には、日本道路公団仙台建設局長から秋田県教育委員会教育長あてに、計画路線内に存在する埋蔵文化財包蔵地の分布調査の依頼があった。これに対し、秋田県教育委員会は同55、56年に周知の遺跡及び全線調査による遺跡分布調査を行い、幅200m、長さ56kmの（註1）中に44遺跡所在することを報告した。これをもとにして秋田県教育委員会と日本道路公団は協議を行い、工事によって消滅する部分については記録保存とし、路線決定に基づいて再度分布調査を実施する旨の合意に達した。秋田県教育委員会は昭和58年5～6月、同11月には、路線の決定に基づく第2次分布調査を行い、路線内に所在する遺跡は37カ所にあることを確認して（註2）これを報告した。

その後、秋田県教育委員会は昭和59年9月に河辺郡河辺町にある7遺跡について範囲確認調査を実施した。その結果、石坂台V遺跡の範囲は路線内には及んでいないことが判明し、これを発掘調査対象遺跡から外すこととした。同60年4月、秋田県知事と日本道路公団仙台建設局長は、河辺郡河辺町七曲台地区に所在する6遺跡についての発掘調査委託契約書を交わし、同年4月から調査を開始することとしたのである。

註1 秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第93集 1982（昭和57年）

註2 秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第116集 1984（昭和59年）

註3 秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第126集 1985（昭和60年）

なお、註1・註2の中で、遺跡No31～36を石坂台I～VI、No37を松木台遺跡とし、これが註3では、同じ遺跡Noに対して石坂台IV～VI遺跡、松木台Ⅲ遺跡と表記してある。これは昭和58・59年度に行われた七曲空港工業団地造成工事に係る埋蔵文化財発掘調査において石坂台I、II、III遺跡、松木台I、II遺跡と命名した遺跡があり、それとの混同を避けるためこれに続く形で遺跡名を付したことによる。従って、今回調査した遺跡の名は石坂台IV・VI・VII・VIII・IX、松木台Ⅲ遺跡である。

第2節 調査経過

昭和60年度の調査経過は大略下記の通りであるが、調査した各遺跡の詳しい調査経過は、それぞれの遺跡の報告の中に記してある。

5月8日、発掘調査作業員に対して、調査等に関する説明と諸注意をする。5月20日までに事務所の設置、諸機材の整備、石坂台IV、VI遺跡調査予定地の準備等を行い、同月22日から、本格的な調査に入る。

5月22日、まず石坂台IV遺跡、石坂台VI遺跡の調査を開始する。両遺跡とも調査対象面積が小さいため、表土除去は人力で行う。両遺跡とも、調査面積に比べ、遺跡・遺物とも検出数が少なかった。石坂台IV遺跡の調査は6月29日で、石坂台VI遺跡は6月24日で終了したが、この間に、石坂台VII、VIII、IX遺跡、松木台III遺跡の調査対象区の下草の刈り払い、伐採後の杉・雜木の枝葉の除去・焼却を併行して行い、その後重機による表土除去を行った。

6月24日からは石坂台VII遺跡、同25日からは松木台III遺跡の本格的調査を開始する。石坂台VII遺跡、松木台III遺跡は排土捨場が遠いため、排土の運搬にはベルトコンベアーや土砂運搬車を使用したが、人力に比べて非常に効率が良かった。石坂台VII遺跡では台地縁辺を中心に堅穴住居跡や各種土壙が検出され、特に土壙は範囲確認調査で予想された遺構数をはるかに上回るものであった。

8月のお盆前までは、7月の梅雨末期の長雨があったものの概して天候に恵まれたが、9月に入ると曇天か雨の日が多くなり、作業の進行にも影響を及ぼし始めた。このような中で石坂台VII遺跡の調査は台地縁辺部に構築された土壙群の調査を中心にして行なわれ、9月5日で終了し、これと相前後して石坂台IX遺跡の調査も着手された。石坂台IX遺跡では、七曲台遺跡群の中では比較的大きな堅穴住居跡と底面の焼けた土壙などが検出された。

10月の初旬には石坂台VII遺跡の調査も、実測等と補足調査を残すのみとなつたため、主力を予想以上の遺構数と旧石器の出土範囲が広い松木台III遺跡に移し、最後の調査に努力したが、最終的に現場作業の終了したのは、石坂台VII遺跡が11月1日、石坂台IX遺跡が11月9日、松木台III遺跡が11月22日となった。そして機材や遺物の運搬等を行い、完全に現場を後にしたのは、みぞれから雪に変わり始めた11月27日であった。

出土遺物の整理は、発掘調査と併行して行ったが、本格的な報告書作成作業は昭和60年12月から61年3月まで、秋田県埋蔵文化財センターで実施した。

第3節 調査の組織と構成

調査主体 秋田県教育委員会

遺跡名・所在地・面積・調査期間・担当者

番号	遺跡名	所 在 地	予定面積	実細面積	調査期間	担 当 者
31	石板台Ⅳ	河辺郡河辺町 戸島字七曲石板台271他	2,000 cm^2	1,770 cm^2	昭和60年 5月22日～6月30日	大野憲司（学芸主事） 高橋 学（講師）
33	石板台Ⅴ	河辺郡河辺町 戸島字七曲石板台233他	2,540 cm^2	1,870 cm^2	昭和60年 5月22日～6月24日	小林 克（文化財主事） 谷地 薫（学芸主事）
34	石板台Ⅵ	河辺郡河辺町 戸島字七曲石板台214他	4,000 cm^2	3,860 cm^2	昭和60年 6月19日～9月5日	小林 克 谷地 薫
35	石板台Ⅶ	河辺郡河辺町 戸島字七曲石板台168-3他	6,880 cm^2	6,520 cm^2	昭和60年 6月25日～11月1日	大野憲司 高橋 学
36	石板台Ⅷ	河辺郡河辺町 戸島字七曲石板台285-1他	4,768 cm^2	4,710 cm^2	昭和60年 9月2日～11月9日	小林 克 谷地 薫
37	松木台Ⅲ	河辺郡河辺町 戸島字松木台57他	7,960 cm^2	8,000 cm^2	昭和60年 6月25日～11月22日	高橋忠彦（文化財主事） 利部 稔（講師）

専門指導員 小林達雄 国学院大学文学部教授
 林 謙作 北海道大学文学部助教授
 白石建雄 秋田大学教育学部助教授
 進藤秋輝 宮城県多賀城跡調査研究所研究第一科長

事務担当 加藤 進（秋田県埋蔵文化財センター 主査）
 佐藤 健（秋田県埋蔵文化財センター 主事）
 高橋忠太郎（ “ ” ）

事務補助 五十嵐セツノ 石塚尚子

協力機関 河辺町・河辺町教育委員会

免擺作業員 足利幸二 安藤和彦 石井金春 石井水保 石塚悟 泉多郎兵衛 伊藤宗太郎
岡部利夫 尾形政則 加藤正明 木村重治 熊谷茂 熊谷多茂治郎 熊谷徳夫
兒玉喜太郎 金隆雄 後藤次男 佐々木久助 佐々木佐吉 佐々木信悦
佐々木隆弘 佐々木忠一 佐々木貞一 佐々木伝十郎 佐々木富蔵 佐々木衛
佐々木日出夫 佐藤竹弥 佐藤鉄弥 佐藤信義 鈴木兼治 鈴木清吉 鈴木久雄
鈴木正勝 関修一 関多千実 外山巖 高橋勝男 高橋貞夫 高屋喜代一
高屋三郎 田口勝彦 田口武雄 田近耕吉 田中三郎 長谷部三郎 長谷部長義
藤田新一郎 藤田信雄 堀井助美 堀井精一 堀井良一 山上二郎 山上友司
渡部辰雄 渡辺鉄夫 渡辺正雄 足利久美子 足利チツ 足利ヨシ子 安藤ナツエ
石井京子 石塚勝子 伊藤マサエ 伊藤マサ子 稲垣テル子 稲垣ヨシエ 浦田町子
大山なみ子 岡部アヤ子 岡部カツヨ 岡部カネミ 岡部君子 岡部キヨノ 岡部セセ
岡部トキエ 岡部ヒデ子 岡部ミエ 岡部ヤエ 尾形キヨ 尾形とし子 尾形ハルエ
尾形ミチエ 落合寿子 加賀谷カネ 加賀谷八重子 加藤ケイ 加藤節子 鎌田江美子
鎌田セツ 鎌田ハナ 鎌田リツ 熊谷ヨシ 倉田サツ 金トモ子 斎藤輝子 嶋崎キエ
嶋崎信江 佐々木愛子 佐々木栄子 佐々木カツ 佐々木カネヨ 佐々木キヨ
佐々木キワ 佐々木シツエ 佐々木志美子 佐々木セイ 佐々木千代 佐々木ヒテ
佐々木ナルミ 佐々木冬子 佐々木ミキ子 佐々木ミホ 佐藤セツ 佐藤妙子
佐藤フキ子 鈴木カツ 鈴木ひろ子 須藤アヤ子 関タミエ 外山栄子 高橋圭子
高橋ハルエ 高橋ヒデ 高橋正子 田口明子 田口タエ 田口フサ 田口美代子
竹本ハルエ 田近ハナエ 長谷部テツ子 長谷部トヨ子 長谷部モト 富山テル
早川孝子 藤島チャ 藤田シゲノ 藤田チヨ 藤田照子 藤田テル子 藤原チャ
堀井カネ 堀井シゲ 堀井トシ 堀井ハルエ 堀井ヨシエ 前田春枝 前田ワカ子
三浦アエ子 三浦栄子 三浦イマ子 三浦喜代子 三浦ツヨノ 三浦ミツ 三浦亮子
柳原いま 山上トモ子 渡部和子 渡辺幸子 佐々木るり子

整理作業員 青谷透 小山内透 小松宗仁 高橋政良 高橋久典 能登谷宣康 五十嵐博子
池田リュウ子 泉谷昭子 伊藤久美子 伊藤保子 稲葉アイ 大野甲子 小山和歌子
加藤えり子 川原礼子 熊谷雅子 小松岸子 小松美智子 小柳和子 今野啓子
後藤節子 斎藤敦子 斎藤美穂子 佐々木アイ子 佐藤マリ子 佐藤由香里 嶋津竜子
進藤里美 鈴木幸子 須田喜和子 須田智子 須田優子 須田隆子 高野ひより
高橋温子 高橋慶子 高橋トヨ 高橋萩江 高橋フサ子 高橋優子 竹村純子
土田智子 藤倉寿枝 藤倉美和子 保坂光子 皆川恵子

第4節 調査の方法

発掘調査は、東北横断自動車道秋田線路線内の日本道路公団設置の中心杭を各遺跡において1カ所選び、それを起点として磁北をとり、4m×4mの方眼杭を打設してのグリッド法に依った。各遺跡で依拠した中心杭は以下の通りである。

石坂台IV遺跡	STA533+40(MA50)	石坂台VII遺跡	STA545+00(MA50)
石坂台VI遺跡	STA536+60(LR48)	石坂台IX遺跡	STA547+60(MA50)
石坂台VIII遺跡	STA538+40(MA50)	松木台III遺跡	STA551+80(MA50)

方眼杭には東西方向にLA、LB……LT、MA、MB……MJとアルファベットの組み合わせをあて、南北方向には南から北へ向かって昇順となる連続した2桁の数字をあて、その両者を組み合わせて各グリッドを呼ぶこととした。方眼杭に囲まれたグリッドはその東南隅に位置する杭を自己の呼吸を示すものとしている。また、起点となった中心杭には各遺跡ともMA50の呼称が与えられている。

路線敷の大部分は杉林であったり雜木林であったりしたため、立木伐採後の切株が多く残っており、それらを取り除くことを含めた重機力による除土を各遺跡とも行っている。ただし、石坂台IV遺跡および石坂台VI遺跡については機械力は用いていない。

遺跡の精査は四分法および二分法に依った。すなわち、住居跡等にあっては、そのプランを確認した後、東西及び南北の二方向または長軸及び短軸の二方向に直交する断面観察用のベルトを残して、その遺構を四分割して掘り込んだ。また、土壤等の比較的小さな遺構にあってはその長軸によって二分割し、片側を掘り込んで残った他の側によって埋土の断面を観察することとした。

調査の記録は主に2つの方法に依った。1つは図面による記録であり、もう1つは写真による記録である。他に、日誌、記録カードなども用いている。遺構図面は1つの遺構について原則として平面図1葉、断面図1葉以上を縮尺1/20でとることとした。他に埋設土器や炉跡など細部の表現が必要な場合は縮尺を1/10としている。

写真撮影については、撮影機材としてニコンFBを用い、35mmフィルムにはネオパンSS及びコダクローム64、エクタクローム100を使用した。また、必要に応じては、ゼンザプロニカETR-3、プロニー版フィルムとしてネオパンSS、コダクローム64を使用している。

第2章 遺跡の立地と環境

第1節 遺跡群の立地

石坂台IV・VI・VII・VIII・IX、松木台III遺跡は、雄物川の支流岩見川がその下流域左岸に形成した河岸段丘上にあり、国鉄奥羽本線和田駅の南1.2~2.4kmに位置する。遺跡群付近の河岸段丘は低い方から七曲台面（標高39~43.5m）、上野台面（同45~49m）、椿台I面（同60~65m）である。これらの段丘面は北と北西方向から入り込む2つの沢筋（北の餅田沢、南の白熊沢）によって他の段丘面と区別され、全体が“七曲台”と呼ばれている。このため七曲台は、平面的には岩見川と2つの沢筋によって囲まれた東西約2km、南北約1.4kmの不整三角形を呈し、岩見川と2つの沢筋からは台地の中央に向かって大小の開析谷が入り込み、多くの舌状台地を形成している。七曲台における旧石器時代～近代の各遺跡は、そのような小さな舌状台地を中心として発見されており、それらは立地の上から大きく3つに分けられる。1つは岩見川に面した舌状台地上にあるもの、もう1つは餅田沢に面した舌状台地上にあるもの、他の1つは白熊沢に面した舌状台地上にあるものである。

東北横断自動車道秋田線の予定路線は、秋田市上北手古野の秋田インターチェンジが終点であるが、ここを出発点にして大曲・横手方面に向かった場合、約3kmで岩見川の左岸段丘上（七曲台面）に達する。ここが松木台III遺跡（No.37）で、路線はこれより、南～南東方向に進み、白熊沢に面した段丘端部舌状台地を飛び石様に走る。松木台III遺跡に次いで、石坂台IX遺跡（No.36）、石坂台VIII遺跡（No.35）が上野台面に、石坂台VII遺跡（No.34）、石坂台VI遺跡（No.33）、石坂台IV遺跡（No.31）が椿台I面に立地している。

これら6遺跡は、東経140度14分、北緯39度39分を中心にして位置するが、国土調査法第10座標系による遺跡中心部の位置は以下のとおりである。

石坂台IV遺跡: 第X座標系のX = -41.15km 第Y座標系のY = -51.82km	石坂台VIII遺跡: 第X座標系のX = -40.60km 第Y座標系のY = -52.80km
石坂台VI遺跡: 第X座標系のX = -41.00km 第Y座標系のY = -52.10km	石坂台IX遺跡: 第X座標系のX = -40.43km 第Y座標系のY = -52.93km
石坂台VII遺跡: 第X座標系のX = -40.94km 第Y座標系のY = -52.20km	松木台III遺跡: 第X座標系のX = -40.00km 第Y座標系のY = -53.10km



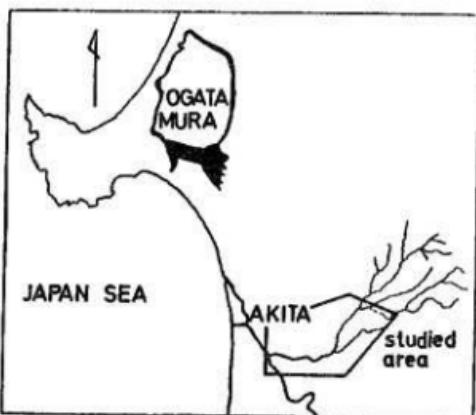
- 31 石板台IV遺跡
- 33 石坂台VI遺跡
- 34 石板台VII遺跡
- 35 石坂台VIII遺跡
- 36 石板台IX遺跡
- 37 松木台III遺跡

第1図 河辺町における東北横断自動車道秋田線路上の遺跡分布図

第2節 周辺の地形と地質（岩見川および雄物川下流域の河岸段丘について）

1 はじめに

岩見川は、太平山地の南西斜面に水源を有する、雄物川の一支部である（第1図）。この河川沿いにはほぼ全域にわたって連続的に河岸段丘が発達してくる。このため、この地域は比較的古くから地質・地形学者の注目を集め、様々な観点から研究が行なわれてきた。すなわち、杉村（1952）は各段丘面の詳細な高度測定を行い、褶曲構造と段丘面の変位との間に相関が存在するかどうかを検討した。また、関（1956）は中流

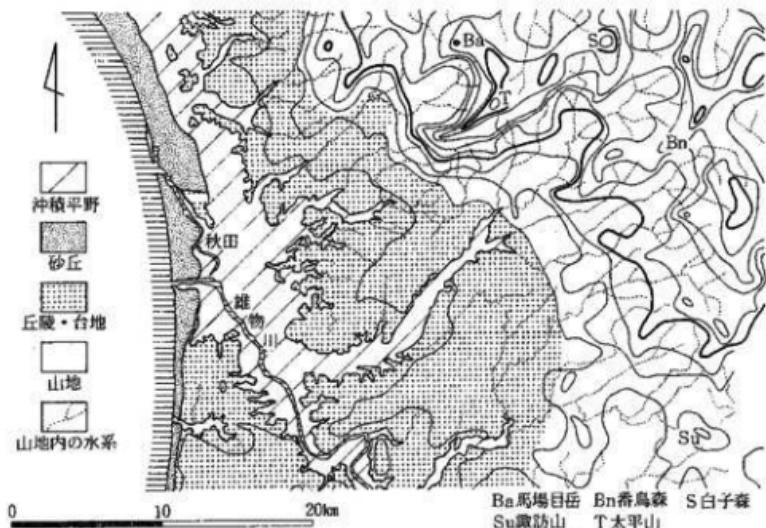


第2図 調査地域位置図

域の段丘地形について地形発達史ならびに地盤運動の観点から、また内藤（1965）は氷河制約による第四紀海水準変動とのかかわりで全流域の段丘群の地形発達史的研究を行なった。

しかし、上記の諸研究は相互に段丘面の区分が異なっている。一般に段丘地形の調査においては、空中写真の立体視および野外調査でひと続きであると認識された平坦面は同一時代の段丘面として他から区別される。しかし、この連続性の確認は、数多くの段丘がわずかな比高で配置している場合や分布が断続的である場合にはしばしば非常に困難である。岩見川流域には後述するように沖積平野面の高位に10段もの段丘が存在し、しかも同一段丘面の認定に有効な降下火山灰層も現在までのところ検出されていない。少なくとも関東ローム研究グループ（1965）が関東地方で実施したような火山灰層位学的手法で段丘面の対比が可能な地域ではない。白石（1976）は岩見川流域を御所野地域、下流域、中・上流域に3分し、それぞれの地域に分布している段丘を記載するとともに、各地域ごとの段丘群の対比を試み、それを通じて編年について考察した。なお、NAKATA（1976）も岩見川流域の段丘面分布図を発表しているが、この場合も上記四研究のいずれとも異なっている。

筆者はこのたび、東北横断自動車道建設に伴う遺跡の発掘調査に関連して、本河川流域の段丘群を再検討する機会を得た。この間、国および秋田県により、周辺地域の地質図幅が出版され、地質学的知識は著しく進展した。また、隣接する雄物川流域の段丘や秋田平野の埋没地形



第3図 岩見川流域周辺の接峰面図、地形分図（等高線間隔は100m）

など、関連する基礎的事項について若干の研究の蓄積があり、いくつかの資料については¹⁴C年代測定も実施された。本稿では以上の成果をも踏まえ、岩見川、雄物川下流域の段丘とそれに関連する二・三の問題について述べることとする。なお、後に述べる¹⁴C年代値のうち、I-14410とI-14411は秋田県産業労働部資源エネルギー課の御援助によるものである。また、ボーリング資料の収集に当たっては秋田県工業振興課白田雅郎博士の御協力を得た。記して厚く御礼申し上げる。

2 岩見川およびその周辺の地形

第3図は岩見川流域およびその周辺の接峰面図・地形区分図である。接峰面図は埋谷法により幅2km未満の谷を消去して作成した。等高線の間隔は100mである。

本地域の地形は、図示したように、東から順に山地、丘陵・台地（段丘）、沖積平野、砂丘から成る。山地は本地域の北東部を占める。北半部は馬場目岳（1,037m）、太平山（1,171m）、白子森（1,179m）、番鳥森（1,033m）、など1,000mを上回る頂高を有するが、南方へと低下し、諏訪山（455m）付近では高度300m～400mの低起伏山地に移化している。丘陵は山地の

西側に分布する。高度は標高100~200mである。山地との境界は岩見川右岸より北方の地域では明瞭であり、地形断面には高度200m付近のところにはっきりとした遷緩点となってあらわれる。この丘陵地は谷系が密に発達しており、平坦面とみなしうる部分は存在しない。しかし背面はよく揃っており、遠望するとほとんど平坦に見える。このような齊頂丘陵地は日本各地で広く認められており、侵食基準面の支配を受けた平坦面ないし低起伏面であると考えられている（中川、1967）。段丘はこの丘陵地の開析谷に沿って分布している。

以上の地形区一帯には、一部を除き後述する太平山複合ブルトン（加納ほか、1966）とそれを基盤とする新第三系が分布している（藤岡ほか、1976、1977；臼田ほか、1979；大沢ほか、1981）。このうち山地は基盤の花崗岩類と主として火山岩類から成るいわゆる「下部グリーンタフ」から構成されている。一方、丘陵地には堆積岩を主とする女川層以上の「含油第3系」が分布している。これらのこととは本地域の地形が地質構成の相違に対応したものであることを示している。

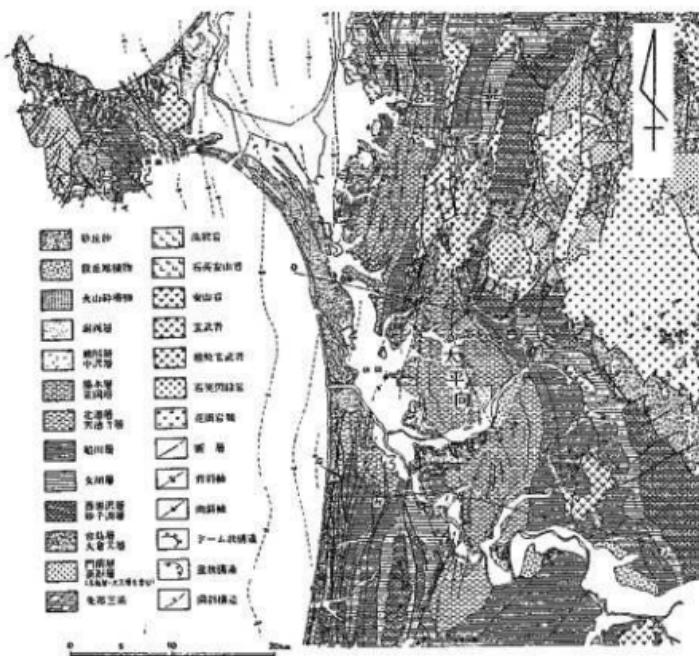
沖積平野は丘陵・台地の西方、日本海沿岸地帯には南北方向に分布するほか、丘陵地を開析した開析谷底として狭長に分布している。また、沖積平野の前面、日本海の海岸線沿いには砂丘が発達している。

主水系は山地内を流れる場合はNE-SW方向が支配的であり、接峰面の等高線に直交または高角度で交わるように配置している。したがって流路は山地の斜面の方向に支配された必従河川である。ただし、河川が山地から丘陵地へと流入する部分では、新城川、旭川、太平川、岩見川、船岡川などに見られるように、山地と丘陵地の境界に沿って大きく流路を変えている。これらの現象も地質構成の支配を受けたことによるものであろうと解釈される。

3 地質の概要

第4図は本地域周辺の地質図である。また第1表は層序表である。本地域には先新第三系花崗岩類とそれを基盤とする新第三系、第四系が分布している。新第三系は地層を構成する岩石種のちがいにもとづいて上下に二分される。下部の地層群はしばしば「下部グリーンタフ」、上部の地層群は「含油第三系」と呼称される。秋田市周辺の場合は、下部グリーンタフには下位から順に大又層、荻形層、大倉又層、砂子瀬層が属する。これらは主として安山岩や玄武岩の熔岩、火山碎屑岩から成る。含油第三系には、女川層、船川層、天徳寺層および鮮新・更新統の笠岡層が含まれる。これらは泥岩、砂岩などの堆積岩から主として構成されている。以上の地層群のうち、山地には、前記のように基盤岩類と下部グリーンタフが、そして丘陵地には含油第三系が分布している。

丘陵地に分布する含油第三系はいずれも海成層である。地層を構成する堆積物の粒径は下位から上位へと順に規則的に変化する。すなわち、女川層・船川層は細粒な泥岩から成るが天徳



第4図 岩見川流域周辺の地質図 大沢(1980)による

寺層ではシルト岩となり、最上位の高岡層は礫を伴う砂岩から構成されている。このことは女川層から高岡層までの堆積過程がこの地域に広がっていた海（堆積盆地）の淡海化の過程であったことを物語っている。

ところで、岩見川流域周辺の丘陵地を構成する含油第三系は太平向斜に規則された分布状態を示している。すなわち、和田付近を通る北々西—南々東方向の向斜軸を境として東西両側に対称的に、向斜軸から遠ざかるにつれて順次下位の地層が分布している。また、岩見川右岸以北の地域ではこの太平向斜の芯部に更新統高岡層が分布している。したがって、高岡層の分布もまた向斜構造に規制されており、褶曲運動は高岡層堆積後今まで及んでいる。この丘陵地は、前記のように、密な開折を受けているものの背面は非常に平坦である。この背面の高度分布は第3回からも明らかなように、向斜構造とは対応していない。これらのことは本地域における齊頂丘陵背面の成立を導いた基準面支配の時期が太平向斜の形成後であること、および、太平

向斜は丘陵背面成立後は運動を継続していないこと、仮に動いているにしてもそれは極めて微弱であることを示している。

4 河岸段丘の地形と堆積物

岩見川流域におよび植物川下流域には沖積平野面より高位に10段の段丘が分布している（第5図）。高位のものより順に最高位面、高位面Ⅰ、高位面Ⅱ、椿台面Ⅰ、椿台面Ⅱ、上野台面、七曲台面、宝竜崎面、赤平面、寺田面とよぶ。これらは段丘面の高度や開析度、および配置上の特徴等にもとづいて高位面群、椿台面群、七曲台面群、宝竜崎面、赤平面群の5面群にまとめられる。

第1表 地質層序表

地質系統	男鹿半島	秋田・能代	岩相
第四系 更新統	砂丘堆積物		砂丘砂
	沖積平野堆積物		疊・砂・泥
	段丘堆積物および湖西層		疊・砂・泥
	安田層 鮎川層 高巾層 園沢層		砂・凝灰質砂 シルト・砂岩
新鮮新統	脇本層 北浦層 天徳寺層	笹岡層	砂岩・シルト岩
	船川層	船川層	暗灰色泥岩・ 凝灰岩
	女川層	女川層	珪質硬泥岩
	西黒沢層 台島層	砂子湖層 大倉又層	砂岩・シルト岩・ 疊岩・玄武岩 シルト岩・凝灰岩
第三系	門前層 赤島層	萩形層 大又層	安山岩質火碎岩 変質安山岩
		基盤岩	花崗岩類

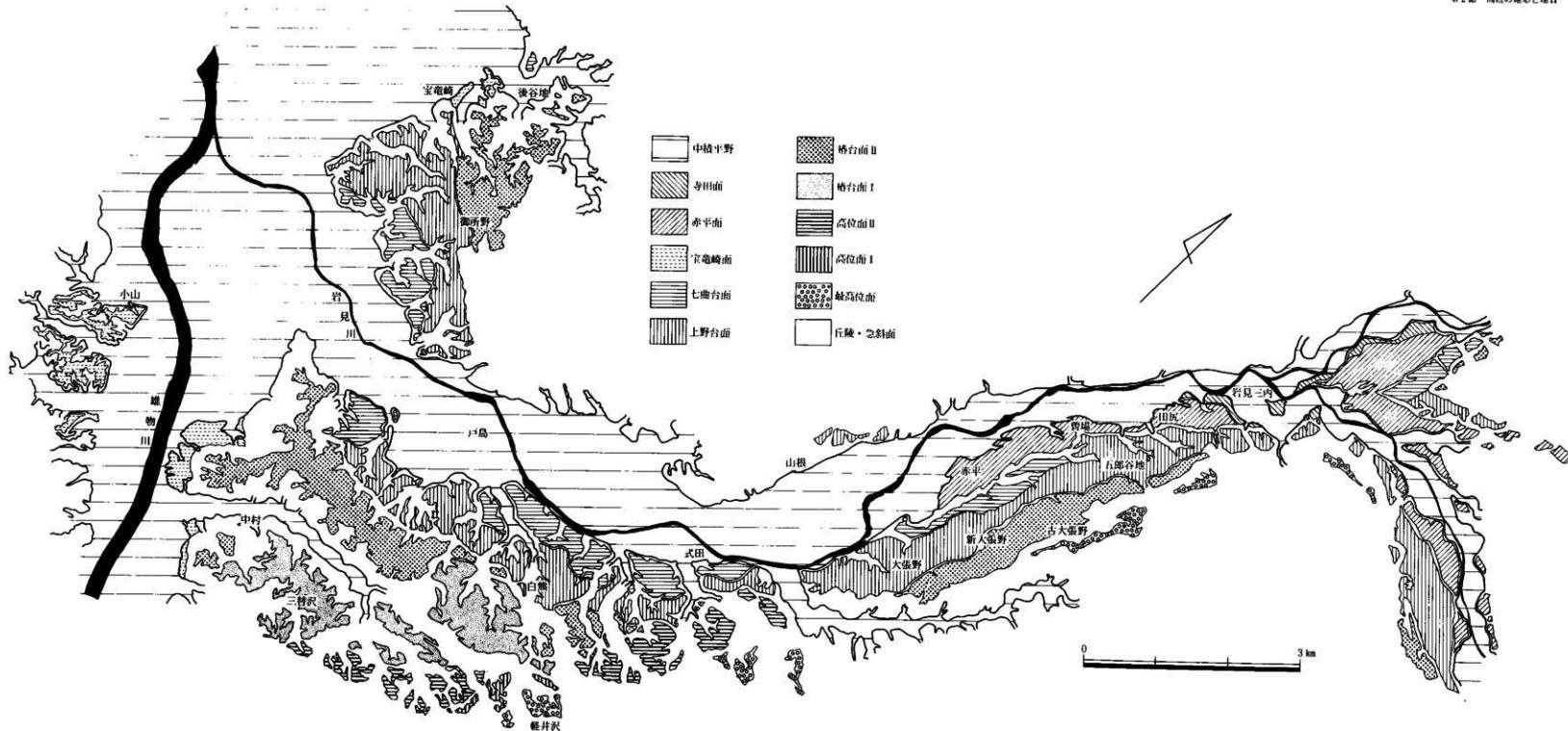
日本海中部地震災害（1983）秋田
大学地質調査班（1984）による。

（1）高位面群

高位面群には最高位面、高位面Ⅰおよび高位面Ⅱが属する。これらの面は開析が進み、相互の比高が小さい。また、岩見三内より上流には分布しない。

最高位面は本流域で最も高い面であり、安養寺川上流の軽井沢付近、式田東方および古大張野東方に分布する。面の高さでは古大張野付近で標高約130m、分布地域南端の軽井沢付近で100~110mである。非常に開析が進んでおり、空中写真では平坦な稜線として識別されるところが多い。段丘構成層は最上位に2~3mの比較的厚い赤褐色土層があり、その下位2mまでは人疊（cobble）に富む淘汰不良の礫層が続いている。この礫層中には、椿台面群以下の段丘堆積物と比較すると花崗岩の疊に乏しい。ことことは花崗岩分布地域を削除する谷系の未成熟を示唆するものであろう。層厚は直接的には不明である。ただし、軽井沢付近では本段丘面下約10mの高さに花崗岩の半固結質細粒砂層が露出しており、10mを上回ることはないと推定される。

高位面Ⅰは安養寺川上流のみに分布する局所的な段丘面である。最高位面とは約5mの比高をもってその低位側についている。段丘堆積物は最上位に約2mの厚さの粘土層があり、その下位4mまでは大疊を主とする淘汰不良の礫層である。最高位面の場合と同様、この礫層中に



第5図 岩見川および雄物川下流域の段丘面分布図

も花崗岩質疊は比較的少ない。

高位面Ⅱは三替沢南方から式田東方までの岩見川下流域に連続的に分布している。上記の二面と同様にかなり開析が進んでいるが、平坦面の保存は良好である。面の高度は分布地域全体を通してほぼ一様であり、標高90m前後である。層厚7~10mの大疊を主とする段丘堆積物を伴う。分布地域南西端に近い三替沢東方では、中~下部に3.5mの厚さの腐植質粘土層を伴い(写真1)、全層が非常に粘土質になっている。

(2) 椿台面群

椿台面群には高位より椿台面Ⅰ、椿台面Ⅱが属する。面が広く安定的に発達し、椿台面Ⅱは岩見川の下流から上流まで全域にわたって分布する。

椿台面Ⅰは面の高度が標高80~83mの段丘であり、三替沢から白熊沢南方に至る岩見川下流域の左岸側に連続的に発達している。面は広く、保存も良好である。三替沢における段丘堆積物は上位から黒色土壌(0.3m)、赤褐色粘土層(3m)、含礫粗砂(1.5m)、淘汰不良大疊層(4.5m)である。単一の露頭では段丘堆積物の基盤が露山せず、層厚は直接的には不明であるが、段丘面の下位約20mの高度に不整合面があり、本段丘堆積物の層厚は20m前後に達すると推定される。一方、白熊南方において県立スポーツゾーン建設に関連して掘削されたボーリング資料によれば、本段丘堆積物は16.4~19.7mの層厚を有する。層相は大疊層を主とするものの著しく粘土質であり、しかも側方への層相変化が大きい(第6図)。

椿台面Ⅱは椿台面Ⅰとは約15mの比高をもってその低位側につき、岩見川の全流域にわたって連続的に分布している。面の高度は御所野で標高約50m、椿台で60m、新大張野で70mである。面はよく保存されている。新大張野における段丘堆積物は上位から黒色土壌(0.5m)、赤褐色粘土(1.5m)、大疊層(8m)、含礫粗砂(5m以上)である。下部に厚い粗砂を伴うことは本段丘堆積物の特徴であり、同様な層相は大張野東方、戸島南方でも認められる。ただし、下流側に位置する中村周辺ではこの砂層の層準にしばしば粘土または砂質粘土の薄層を伴うようになる。本地域最下流側の後谷地における本段丘堆積物の層序を第6図に模式的に示した。この下部にある有機質粘土層中の木片の¹⁴C年代は>40,000Y.B.P. (I-14,411)と測定された。

(3) 七曲台面群

七曲台面群は高位の上野台面と低位の七曲台面からなる。両面とも非常に新鮮である。両面の段化は中・下流域では明瞭であるが、上流へと比高が減じ、曾場より上流側では上野台面のみが分布するようになる。七曲台面は基準面の低下に対応して上野台面から分岐した段丘であると考えられる。

写真2は岩見川下流、戸島南方における上野台段丘の段丘堆積物である。層序は上位から黒色土壌(0.3m)、赤褐色粘土層(1m)、砂礫層(1m)、白色大疊層(1.5m)、砂層(1.5m)、赤褐色大疊層(16m以上)であり、著しく厚い。しかし上流では薄くなり、五郎谷地付近では層高10mの淘汰不良の大疊層から成る。七曲台面の段丘堆積物も同様な層厚変化を示している。下流側に位置する式田では上位に灰白色のシルト層(2m)があり、その下位にレンズ状または層状の砂層を伴う疊層(12m)がある。しかし、赤平西方の本段丘堆積物は層高3mの巨礫(boulder)を含む大疊層である。

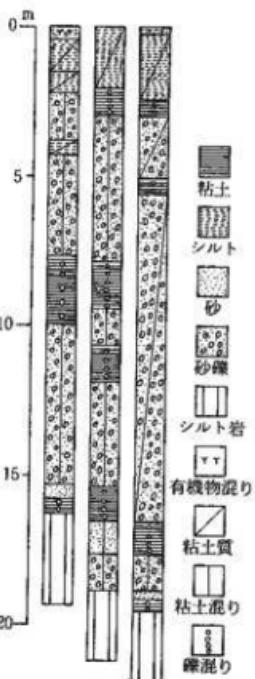
ところで写真3は戸島南方における上野台段丘堆積物の露頭の一部である。上部に見られる黒色の層は層高30~50cmの黒色土壌である。土壌の一部は人為によると思われる擾乱を受けている。この土壌層の上面が初成的な上野台段丘面であると考えられる。したがって最上位に見られる層高約3mの疊混り粘土層は上野台面形成後の局地的な再堆積層であろう。

(4) 宝竜崎面

この面は標高20~25mの面であり、上記の七曲台面より低く、後述する赤平面よりも高い。分布は特殊であり、岩見川流域には存在せず、雄物川下流域と地域北端の宝竜崎にのみ分布する。段丘堆積物は厚く、宝竜崎においては露出部だけでも15mに達する(写真4)。層序は上位から順に黒色土壌(0.3m)、赤褐色および白色粘土(1m)、粗粒砂(0.5m)、斜交葉理が発達した中疊(pebble)を主とする疊層(6m)、赤褐色含疊粗砂(7~8m)である。下限は露出していない。雄物川左岸の小山東方における本段丘構成層中の泥炭の¹⁴C年代は>37,000Y.B.P(I-14,410)と測定された。

(5) 赤平面群

赤平面群には高位から赤平面および寺田面が含まれる。両面とも縦断面勾配が大きい。そのため赤平面は赤平で、寺田面は田尻北部付近で沖積平野面と交叉し、それよりも下流部の地表には分布しない。両面とも沖積平野面下に埋没していると見られる。赤平面の段丘堆積物は大疊を主とする疊層である。層高は2.5~3mでごく薄い(写真5)。寺田面の堆積物は露頭に恵まれず観察していない。ただし、段丘旗に沿って基盤の新第三系が露出しており、段丘堆積物



第6図 ポーリング資料による白熊南方における
樅台面1の段丘堆積物

は赤平面と同様に非常に薄いと推定される。

第2表 段丘面對比表

5 段丘面の対比

中川(1961)は太平洋沿岸地帯に分布している段丘群を新期より順にⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ群に区分し、Ⅰ・Ⅲ・Ⅴが後氷期ならびに更新世における間氷期の高海水準に対応すること、およびⅡ・Ⅳは氷期に対応するものであることを明らかにした。更に、段丘群の配置は沿岸地帯の場合は氷期・間氷期のくり返しによる海水準の汎世界的な静的変動に支配されていることか

時代	中川 (1961)	岩見川・雄物川下流域		^{14}C 年代
完新世	I	沖積平野面		
	後 更	赤平面群	寺田面	>37,000 Y.B.P.
			赤平面	
	II	宝竜崎面		
		七曲台面群	七曲台面上野台面	
新 期	III	椿台面群	椿台面 II 椿台面 I	>40,000 Y.B.P.
	IV	高位面群	高位面 II	
			高位面 I	
世 中 ・ 前 期	V		最高位面	

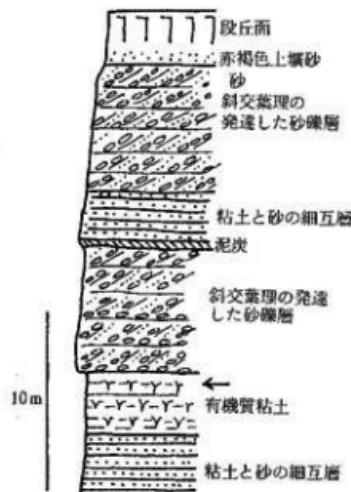
ら、それぞれの段丘の地形的ならびに構成層相の特徴を広域的な対比基準として抽出した。地形的特徴は以下のようなものである。Ⅰ面は海岸平野およびこれに連なる河岸平野面である。Ⅱ面はⅢ面を含む後背地の谷系に沿って発達する河成面群で、Ⅰ・Ⅲ両面より急傾斜し、これらと投影断面において交叉関係を示す。Ⅲ面は現在の海岸平野に先立つもとも新期の古海岸平野とこれに連なる面で、河成部は上流へ分岐することがあるが、海成部はきわめて緩傾斜する平坦面である。Ⅳ面は後背山麓から丘陵頂にかけて発達し、面はⅢ・Ⅴ面より急傾斜する。Ⅴ面は海成面を含み、きわめて緩傾斜する面で、Ⅲ面と類似の性格を有するものである。

岩見川は日本海に近接した秋田平野南部で雄物川と合流しているが、秋田平野周辺ではまだ明瞭な海成段丘は確認されていない。それゆえ、岩見川流域の河岸段丘群は一部を除き上記した中川(1961)の対比基準を直接的に適用し得る地質学的条件下にはない。白石(1976)は赤平面群が沖積平野面と交叉すること、および、椿台面群相当の段丘が比較的広く安定的に発達し厚い段丘堆積物を有していること等にもとづいて、本稿の七曲台面群、宝竜崎面、赤平面群を中川(1961)のⅡ面群に、そして椿台面群をⅢ面群に対比した。本稿における検討結果では、段丘面区分において若干の相違があるが、対比については ^{14}C 年代値も含めて上記と矛盾するわけではない。第2表に対比表を示した。以下では新しく得られた事実とその意味について若干の考察を行う。

椿台面構成層は第5・6図に示したように非常に厚い。しかもこの厚層は椿台面Ⅱの場合、少なくとも岩見川中流域の新大張野にまで及んでいる。一般に基準面が低下すれば河川は下刻作用を行い、上昇すれば側削とそれに伴われる堆積を行うと考えられる。それゆえ、本面群の堆積物の層厚が厚いことは、これらがかつての高海面期に形成されたことを示しており、上記の対比と調和的である。一方、層相はとくに下流側で著しく粘土質である。内藤(1965)も指摘しているように、細粒物質は水の運動の少ない静穏な環境で沈積する。おそらく椿台面群形成時には入江のような環境が岩見川下流域にまでびつており、そこに岩見川が間欠的に大量の粗粒物質を運び込んでいたのであろうと考えられる。

ところで、秋田平野南部には標高10mほどの川尻段丘と、四ツ小屋段丘および牛島段丘とよばれる二段の埋没段丘が存在する(白石・柴田、1986)。埋没段丘の高度は四ツ小屋段丘が-13m前後、牛島段丘が-20m前後であり、四ツ小屋段丘がやや高い。川尻段丘の段丘堆積物は中部に粘土層、泥炭層を伴う砂礫層からなり、20m程の層厚を有する。一方、埋没段丘の段丘堆積物は両段丘とも層厚10m未満の砂礫層であり、非常に薄い。段丘面の高度および堆積物の層相・層厚から判断して、川尻段丘は宝鬼崎段丘に、そして埋没段丘群は赤平面群に対比される。したがって赤平段丘群形成時の堆積物は秋田平野南部も含めて非常に薄かったことになる。このことは赤平面群に固有の大きな特徴である。この特徴の由来について、この時期にのみ碎屑物の生産量が急減したとは考え難く、別の要因が考察される必要がある。

現在の海岸平野とそれに連続する河岸平野の場合、平野面を構成する地層(沖積層)は下流側で厚く上流側で薄い。いいかえれば、上流側は基本的に侵食能力が卓越する地域であり、碎屑物の堆積は起こりにくい。一方、下流側は堆積域である。この侵食-堆積場の配置は現在の海水準が維持している。この配置は、もしも地盤運動が海水準変動速度と比較して静穏であるならば、海水準上昇期には相対的に内陸側(上流側)へと前進し、降下期には海側(下流側)



第7図 後谷地における椿台面Ⅱの段丘堆積物
横矢印は年代測定試料採取標準

へと後退するはずである。岩見川および雄物川下流一帯は油田褶曲地帯に属しているが、前に述べたように、少なくとも齊頂丘陵背面の高度分布には褶曲運動の影響は現れていない。また、最終間氷期相当の椿台面群の高度や最終氷期最低海水準に平衡した埋没谷底の深度（白石・柴田、1986）から判断してこの地域に海水準変動速度を上回る地殻運動があったとは考えがたい。埋没段丘群は最終氷期最盛期直前の低海水準時に形成された段丘である。この頃、侵食一堆積域の配置は現在よりも大きく下流側へと移動し、秋田平野南部を含む岩見川流域一帯は薄い堆積物しか堆積しない基本的に侵食宮力の卓越する地域だったのであろうと推定される。このことは秋田平野における埋没谷の地形が峡谷状を呈している（白石・柴田、1986）こととも調和的である。

6 むすび

岩見川と雄物川下流域の段丘について記載した。しかしながら重要な課題が未解決のままいくつか残されている。そのひとつは岩見川流域における段丘面の配置に關係している。岩見川の中・下流域では段丘は主として左岸側に発達しており、著しく非対称的である。右岸側には山根付近に上野台面とみられる段丘がごく断片的に分布しているにすぎない。この段丘面配置の非対称的についてはまだ合理的な解釈はなされていない。内藤（1965）の指摘にあるように齊頂丘陵背面の高度がそれより新期の高位面群とほぼ等しいこと、および本地域が新第三紀を通して北東方向に沈下していた傾動ブロック内に位置している（北村、1963）ことなどから、地殻運動による河道の一方への遷移の所産である可能性が考えられる。しかし、想定された傾動方向と岩見川の流路および段丘面配置は必ずしも調和しない。また、岩見川のような勾配の大きい河川が長期にわたる緩慢な地殻運動にどのように反応し、どのように流路を形成していくかは未知の問題であると思われる。この問題については今後の多面的な検討が必要である。

第2は、雄物川と岩見川の段丘発達の相違に関する問題である。雄物川との合流点近傍には岩見川流域の赤平面群に相当する段丘は存在しない。一方、宝竜崎面は主として雄物川流域に沿って良く発達しているものの、岩見川流域には分布していない。後者については岩見川の倒刻による消失が可能性の一つとして考えられる。前者については、両河川の勾配が非常に異なること、および、雄物川は出羽丘陵を横断して流れる先行性河川であるため、赤平面群形成時に段丘を残さなかったことなどが考えられるが、いずれも確証を欠いている。

第3は再堆積層の問題である。戸島南方の上野台面上に厚さ約3mの再堆積層とみられる地層が存在することは先に述べた。他にも再堆積層とみられる地層は少なからず存在する。七曲台遺跡群のうち、七曲台面上にある餅田沢I遺跡において、地表下約3.2mに含まれる木片の¹⁴C年代は28,900±1,900Y.B.P.と測定された（秋田県教育委員会、1985）。この木片の包含層



写真1

三替沢東方における高位面Ⅱ
の段丘堆積物の基底付近に見
られる粘土層

ハンマーの位置が不整合面。その
上位に1mほどの礫層があり、粘
土層はその上を覆っている。



写真2

戸島南方における上野台面の
段丘堆積物

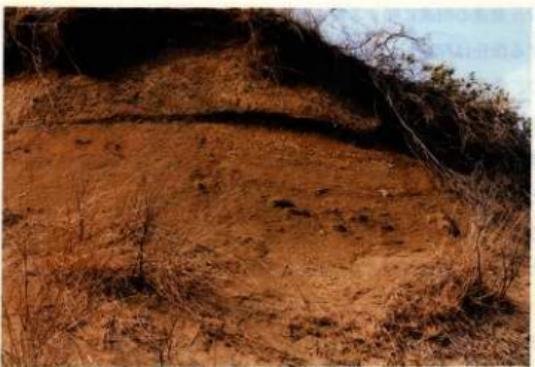


写真3

戸島南方における上野台面の
段丘堆積物の上部

黒く見える層が黒色土壤層であり
その上位に約3mの礫混じり粘土
層が堆積している。黒色土壤層の
右側の部分は下方に落ち込んでお
り、人為によるとみられる擾乱を
受けている。



写真4

宝竜崎における宝竜崎面の段
丘堆積物



写真5

田尻南方における赤平面の段
丘堆積物

は黒色土壤層である。したがってその上位3.2mは再堆積層であることになる。また、この七曲台遺跡群から出土する遺物は旧石器から中世にまでわたっているが、縄文時代以降の遺跡包含層はいずれも旧石器包含層の上位にある。このことも人為・自然を問わず再堆積層が存在することを示すとともに、このような再堆積層の産状は同層が層位学的な研究対象であることを示している。段丘面上位にあるこれらの再堆積層は従来の地形・地質の調査ではほとんど取り扱われてはいない。遺跡の層位的研究の進展のためにも、今後これらの再堆積層の堆積学的・層位学的研究が必要である。

文 獣

- 秋田県教育委員会 『七曲台遺跡群発掘調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第125集 216p 1985 (昭和60) 年
- 藤岡一男・大沢 隆・池辺 稔 「羽後和田地域の地質」『地域地質研究報告』(5万分の1図幅) 地質調査所 65p 1976 (昭和51) 年
- 藤岡一男・大沢 隆・高安泰助・池辺 稔
- 「秋田地域の地質」『地域地質研究報告』(5万分の1) 地質調査所 75p 1977(昭和52) 年
- 加納 博・矢内桂三・遠方亀雄・河瀬章貴・蟹沢 聰
「グリーンタフ地域における2・3の基盤花崗岩の構造とその意義」『地図研専報』12 1-15p 1966 (昭和41) 年
- 関東ローム研究グループ 『関東ローム』 著者書館 378p 1965 (昭和40年)
- 北村 信 「グリーンタフ地域における第三紀構造運動」『化石』5 123-137p 1963 (昭和38) 年
- 内藤博夫 「秋田県岩見川流域およびその周辺の段丘について」『第四紀研究』4 23-34P 1965 (昭和40) 年
- 中川久夫 「本邦太平洋沿岸地方における海水準静的変化と第四紀編年」『東北大地質古生物研報』54 1-61p 1961 (昭和36) 年
- 中川久夫 「丘陵地の成立に関する一考察」『佐々保雄教授還暦記念論文集』 371-378p 1967 (昭和42) 年
- NAKATA, T Quaternary Tectonic Movements in Central Tohoku District, Northeast Japan.
Sci. Rep. Tohoku Univ., 7th ser., 26, 213-239p 1976 (昭和51) 年
- 日本海中部地震災害 (1983年) 秋田大学地質調査班
「地盤地質と災害」『日本海中部地震の記録—被災要因と実例—』 秋田県 151-249p 1984 (昭和59) 年
- 大沢 隆 「20万分の1地質図 秋田および男鹿」 地質調査所 1980 (昭和55) 年
- 大沢 隆・加納 博・丸山孝彦・土屋信之・伊藤雅之・平山次郎・品田正一
「太平山地域の地質」『地域地質研究報告』(5万分の1図幅) 地質調査所 69p 1981 (昭

和56) 年

- 白石建雄 「岩見川流域の河岸段丘群」『秋田大学教育学部紀要(自然科学) 26』 117-127p 1976 (昭和51) 年
- 白石建雄・柴田豊吉 「秋田平野南部の沖積層」『秋田大学教育学部紀要(自然科学) 36』 203-215p 1986 (昭和61) 年
- 関喜四郎 「岩見川中流の河岸段丘」『東北地理 9』 14-17p 1956 (昭和31) 年
- 杉村 新 「褶曲運動による地表の変形について」『震研報 30』 163-178p 1952 (昭和27) 年
- 臼田雅郎・村山 進・白石建雄・高安泰助・乗富一雄
『秋田県総合地質図幅(5万分の1)「刈和野」、同説明書』 秋田県 77p 1979 (昭和54) 年

第3節 歴史的環境

雄物川の一支流である岩見川の南岸には戸島丘陵、北岸には和田丘陵があり、両丘陵上には旧石器時代から中世にいたる多くの遺跡が立地している。東北横断自動車道秋田線関係遺跡は、この戸島丘陵に含まれる七曲台に位置している。七曲台においては、既に七曲臨空港工業団地造成に伴い11カ所に及ぶ遺跡が発掘されている。^(註1)一方、和田丘陵の西端は末戸台地と呼ばれ、秋田臨空港新都市開発に伴う調査が継続的に続けられている。

この地域における遺跡の分布状況は、秋田県遺跡地図、東北横断道の分布調査など、さらには秋田市教育委員会の分布調査や発掘調査によって明らかにされてきている。現在までに確認されている遺跡は、未調査で消滅した遺跡や未命名の遺跡を含めると75にのぼり、そのうちの36遺跡は発掘調査が実施されている。以下では、発掘調査の実施されている遺跡を中心として概観してみる。

県内における昭和60年度末までの旧石器時代の発掘調査例はほぼ10遺跡であるが、七曲台で4遺跡、末戸台地で3遺跡と、この地域に調査例が集中している。風無台Ⅰ遺跡(第8図及び第3表の11)や松木台Ⅱ遺跡(9)では、台形様石器を主とする石器群があり、下提G遺跡(46)では米ヶ森型台形石器を中心としている。他に、台形石器、台形様石器を含まない石器組成を示す例がある。また、松木台Ⅲ遺跡(7)では周氷河現象が確認されており、石器群との関わり合いが問題となっている。

縄文時代では、遺跡の地点が広範な分布状況を示している。時代は縄文前期から晩期まであり、とりわけ中期と晩期の遺跡が多い。中期の竪穴住居跡は検出例が多く、末戸台地では湯ノ沢B遺跡(63)・坂ノ上E遺跡(51)・地蔵田B遺跡(60)と大きな集落が形成されている。これに対して、七曲台では風無台Ⅰ遺跡(10)・石坂台Ⅰ遺跡(17)・餅田沢Ⅱ遺跡(16)と、

(註2) (註3)

(註4)

4・5軒が検出されているにすぎない。また、土壤の検出されている遺跡が多い中で、松木台Ⅲ遺跡は73基の土壤が集中して検出されている。

弥生時代になると、遺跡数は極端に減る。松木台Ⅰ遺跡（8）や石坂台Ⅲ遺跡（5）のように、内容の希薄な遺跡が多い中で地蔵田B遺跡は注目される。この遺跡は、弥生時代中期の大規模住居跡や土壤墓群があり、集落を区画した遺構が検出されている。この他に住居跡を検出している遺跡には、風無台Ⅱ遺跡・湯ノ沢A遺跡（62）・坂ノ上F遺跡（53）があげられる。

古代においては、七曲台・末戸台地を中心にしていくつかの遺跡が確認されている。この地域の発掘された遺構には、竪穴住居跡、土師窯、掘立柱建物跡、土壤などがある。湯ノ沢F遺跡（67）では40基の土壤墓が検出され、鉄刀・帶金具・鉄鎌などが伴出している。また末戸台地南西端に小阿地古墳群が知られていたが、消滅している。その他に坂ノ上E遺跡からは製鉄炉と炭焼窯が検出されている。

（註5）

中世以降の遺跡としては、7つの中世城館をあげることができる。末戸台地西側の四ツ小屋・小阿地地区にも坂ノ下館が存在したが、現在消滅している。

以上、和田丘陵・末戸台地を中心とした遺跡について述べてきた。何らかの大型プロジェクトによる開発行為が計画されている地域には遺跡数が多く、逆にその周囲では遺跡の分布が疎になる。このことを含めて各時代毎の遺跡の分布状況を観ると、弥生時代以降の居住に直接係るような遺跡が少ないと気付く。おそらくは分布調査も含めた調査の及んでいない沖積低地にそれらが多く存在する可能性が高い。

註1 秋田県教育委員会『七曲台遺跡群』1985（昭和60年）

註2 秋田県教育委員会『秋田県遺跡地図』1976（昭和51年）

註3 秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』1985（昭和60年）

註4 秋田市教育委員会『秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書』1983～1985（昭和58～60年）

註5 秋田県教育委員会『秋田県の中世城館』1981（昭和56年）

第8図 東北横断自動車道関係道路と周辺の道路

This map illustrates the network of roads in the Tohoku region of Japan, centered around the Tohoku Expressway (E11). The expressway is depicted as a thick black line, with its route number 'E11' visible in the upper right corner. Numerous other roads, including national routes and local roads, are shown as thin lines. A large number of circular symbols with numbers, ranging from 1 to 15, are scattered across the map, indicating specific locations of interest along the expressway and its surroundings. A scale bar in the bottom left corner shows distances up to 2 km. In the bottom right corner, there is a compass rose.

第2回 国立の地理学地図

第3表 東北横断自動車道関係遺跡と周辺の遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
①	石坂台IV	縄文・近世～近代	⑩	駒坂台II	縄文	⑪	坂ノ上E	縄文・古代
2	石坂台V	縄文	27	蛭井沢A	縄文	⑫	坂ノ上D	縄文
③	石坂台VI	縄文	28	蛭井沢B	縄文	⑬	坂ノ上F	縄文・古代
④	石坂台VII	縄文・近世～近代	29	蛭井沢C	縄文	⑭	坂ノ上A	縄文
⑤	石坂台Ⅷ	縄文・弥生・近代	30	松沢館	中世	⑮	坂ノ上B	縄文
⑥	石坂台Ⅸ	縄文	31	坂本館	中世	⑯	坂ノ下	縄文
⑦	松木台Ⅲ	旧石器・縄文・古代	32	和田城	中世	⑰	蛭崎A	縄文・弥生
⑧	松木台I	縄文・弥生	33	戸崎館	中世	⑱	蛭崎B	縄文
⑨	松木台II	旧石器・縄文・古代	34	細谷館	中世	⑲	地蔵田A	旧石器・縄文・古代
⑩	風無台I	旧石器・縄文・弥生・古代	35	椿川	中世	⑳	地蔵田B	旧石器・縄文・弥生
⑪	風無台II	旧石器・縄文・弥生	36	古野館	中世	㉑	湯ノ沢C	縄文
⑫	風無台III	縄文	㉒	台	縄文・古代	㉓	湯ノ沢A	縄文・弥生
⑬	風無台IV	縄文	㉔	深田沢	縄文・古代	㉕	湯ノ沢B	縄文・古代
⑭	風無台V	縄文	㉖	野形	古代	㉗	湯ノ沢E	縄文
⑮	鶴田沢I	縄文	㉘	野畠	縄文	㉙	湯ノ沢H	縄文
⑯	鶴田沢II	縄文	㉙	地方	縄文	㉚	湯ノ沢F	縄文
⑰	石坂台I	縄文・弥生	㉛	下堤D	旧石器・縄文・古代	㉛	湯ノ沢F	古代
⑱	石坂台II	縄文・弥生	㉜	下堤F	縄文	A		縄文
⑲	石坂台III	縄文	㉝	下堤E	縄文	B		縄文
20	長者森	古代	㉗	湯ノ沢D	縄文	C		縄文・弥生
21	野田	古代	㉘	下堤G	旧石器・縄文	D		縄文
22	堂平	縄文	㉙	坂ノ上C	縄文	E		中世
㉓	池の沢I	縄文	㉚	下堤C	縄文・古代	F		縄文
㉔	池の沢II	縄文	㉛	下堤A	縄文	G		縄文
㉕	駒坂台I	旧石器・縄文	㉜	下堤B	縄文	H		縄文

A～Hは未名命の遺跡を表わし、○印は調査された遺跡である。

第 2 篇

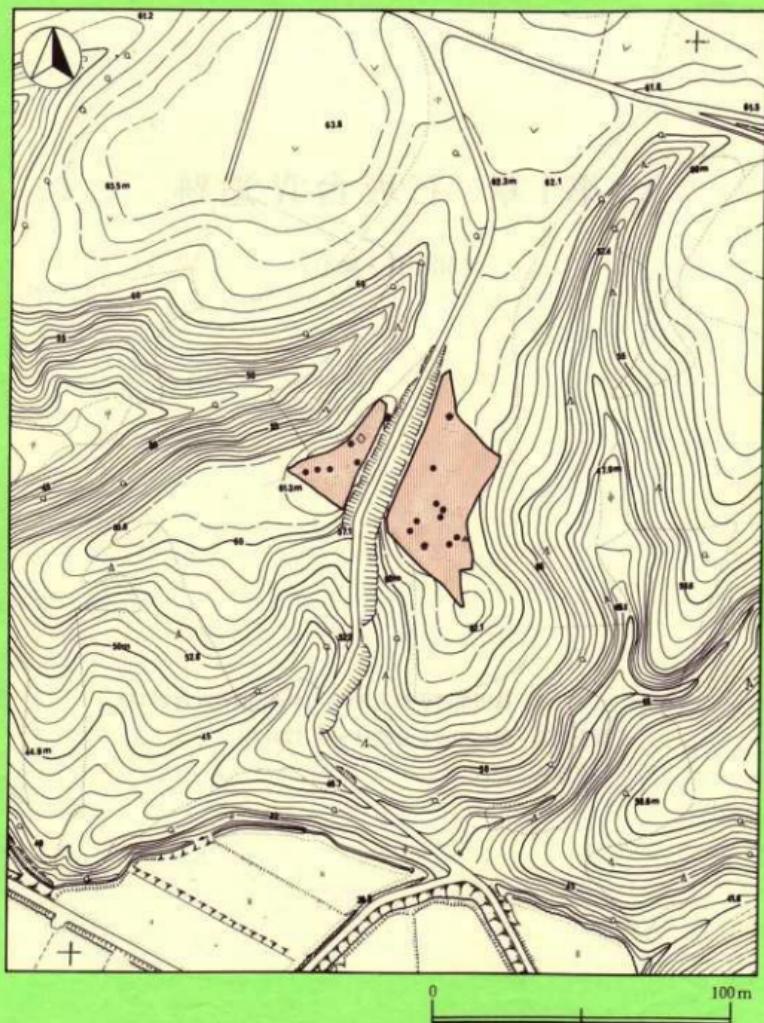
第1章 石坂台Ⅳ遺跡

(5IZDIV・No.31)

所 在 地 秋田県河辺郡河辺町戸島字七曲石坂台 271他

調査期間 昭和60年5月22日～6月29日

調査面積 1,770m²



第1図 遺跡地形図及び遺構配置図

第1節 調査の概要

1 遺跡の概観

遺跡は、岩見川によって形成された中位段丘上、椿台面南端に位置する。遺跡の所在する台地は、全体として北から南に延びる舌状を呈している。台地は、東と西の深い2つの沢によって開析されたものであり、先端部にも比較的ゆるやかな沢が作出され、先端を二分する形状を示している。遺跡は、この二分された台地の付け根部分を占地している。

調査対象地区は、遺物の分布状況等により、遺跡の南端に位置すると考えられる。標高は約61.5m、南側に下った狭長な水田面との比高差約23mを測る。

遺跡の位置する椿台面には、同年発掘調査の行なわれた石坂台VI・VII遺跡が、それぞれ北西約300m・400mに位置している。

遺跡の現況は、主として牧草地に利用されていたところであり、周辺にアカマツ・スギ等の植生が認められる。第2図に示した基本土層図は、遺跡を南北に縦断する農道の法面を利用して作成したものである。これに従うと第I層から第XVII層まで分層できる。第I層は褐色表土、耕作のため擾乱を受けている。厚さ20~25cm。第II層は褐色~明褐色土、第III層のいわゆる地山の漸移層であり、部分的に検出されない箇所もある。第III層は明褐色粘質土、縄文時代の遺構確認面はこの第III層上面である。第IV~VII層は浅黄色~淡黄色系の粘質土、下部ほど細かい砂を含む。第VIII層は明褐色砂層。第IX~XIII層は浅黄色淡黄色粘質土、第X層は微細に見ると、砂層と粘土層が互層をなし縞状を呈している。第XIV・VII層はにぶい褐色土、あざき色を示し水分を多く含む。第XV層は暗灰黄色土、第XIV層とともに層中に木片・種子などを含む。この2層は、川の氾濫等によって堆積したものと思われる。第XVII層は、浅黄色土と黄橙色砂質土が互層をなし縞状に堆積している。この層の下1mまでボーリング棒による調査を試みたが、段丘疊層まで達しなかった。

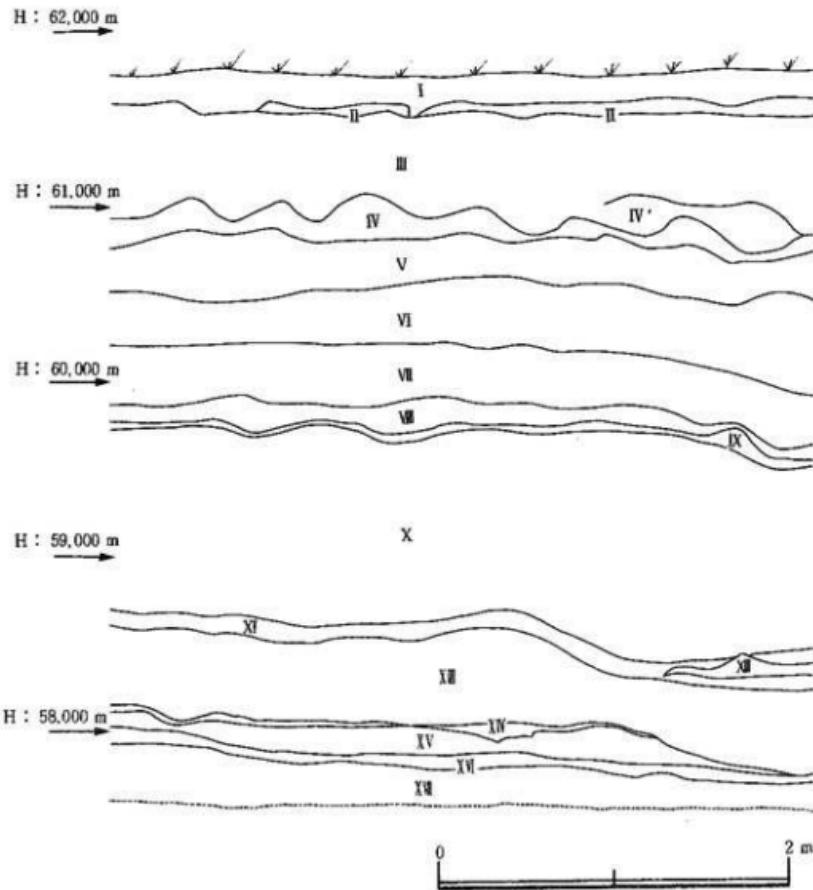
検出された遺構は、縄文時代の土壙、Tピット、焼土造構、近代の構築と考えられる炭焼窯などがある。縄文時代では、遺構のまとまりを的確には把えられないが、一応農道東側では54ライン以南に散在しているようである。土壙のうち3基については、壙底面中央に小さいピットを行する特異な形態を示している。炭焼窯と考えられるものは3基検出したが、1基は農道建設の際、大部分破壊されていた。

出土した遺物は、縄文時代前中期から後期ころの土器、石器などであるが、遺構出土の遺物は少なく、年代決定に困難を生じさせている。遺物の分布は、主に54ライン以北に認められ、遺構分布と呼応しない。遺物のうちフレーク・チップの出土比率が大きく、特に農道西側で全体の9割以上を占る。チップは、MH61グリッドを中心に200点近く出土している。なお、MB62グ

リッドから銅製品が出土しているが新しい時期のものかもしれない。

2 調査の経過

昭和59年度に行なわれた分布調査の結果、遺構確認面と考えられる地山面までの深さが20cm前後と浅いことが判明している。このため発掘は、全て手掘りで行うこととした。グリッド杭については、調査区の現況が平坦な牧草地であることから、障害となるものがないので、杭打設を当方で行なった。作業用のプレハブを設置し、本格的な発掘調査に入ったのは、5月22日



第2図 基本層位図

であった。調査は、農道をはさんだ東側と西側に分かれ、それぞれ南端より表土除去を開始した。MD49・50グリッド付近で早くも大量の炭化物が検出された。24日、この部分はどうやら炭焼きの窯ではないかと想定している。翌日確認する(SN01)。28日、調査区北側でも炭化物が検出されSN01と同様の遺構と考えられ、30日に確認(SN02)。31日、道路西側のMJ59・MI58グリッドで円形のプラン(SK03・04)、MI59グリッドで焼土の広がりを確認した(SXF12)。6月1日、SN02掘り下げ開始、3日窯底検出、明らかに火熱を受け堅く縮っている。10日、農道西側で小さい土壙3基(SK05・06・07)が東西に並ぶように確認。12日、SK03・04掘り下げる。SK04は円筒形に掘り込まれ、底面に小穴を有することが判明、SK03も同形態である。SK08・09を確認する。13日、SK08もSK03・04と同じ形態となりそうである。17日、この頃、SN02・SK03・04完掘なるも好天続きで写真とれず。20日、MA50グリッドでTピットを確認(SKT16)、農道西側法面において炭焼きの一部を検出(SN17)。基本土層を観察するため、農道東側法面を垂直に落とす作業にはいる。27日、表土から約4m下で木片・種子等が混在するあざき色をした土層が現れた。径5cm前後の木枝等が入っており興味がもたれる。28日、遺跡調査区全体のコンタ図作成、全景写真を遺跡南東方向の山の上から撮影し、6月29日、現地調査を全て完了した。

第2節 調査の記録

1 検出遺構と遺物

検出された遺構は、縄文時代の土壙13基、Tピット1基、焼土遺構1基、近代と考えられる炭焼き3基である。遺構は全て台地平坦面に位置している。

(1)縄文時代の遺構と遺物

土壙は、平面形・壙底面の状態から2つに分けられる。1つは、円形の平面を呈し壙底面にピットを有するもの(A群)。もう1つは、平面は円形ないし椭円形を基調とするもので、A群より規模が小さく、ピットをもたない類である(B群)。

A群の土壙(第4図、図版3~5)は、調査区のはば中央を走る農道の西側で2基、東側で1基検出した。3基の法量は以下のとおりである。

	開口部径	底 径	深 さ	ピット 径	ピットの深さ
SK03	1.55 × 1.50	1.05 × 1.00	1.20	0.18 × 0.20	0.55
SK04	1.38 × 1.38	0.95 × 0.85	1.30	0.15 × 0.17	0.48
SK08	1.02 × 0.98	0.80 × 0.78	0.94	0.14 × 0.13	0.50

(東西×南北、単位はm)

A群の共通点は平面形が円形を呈し、断面でみると、底部がややすぼむものの、ほぼ円筒状に掘り込まれている。壙底面中央には、深さ0.5m前後のピット1個をもつ。埋土の状態は大きくみると、上位には黒褐色・暗褐色土といった粘性のあまり強くないシルト質土がレンズ状に堆積している。中位から下位にかけては、地山土に類似する明褐色・褐色土（地山土の二次堆積土）が主体となり、黒褐色土等はあまり含まなくなる。この土層は、全体的には粘性があり、締まっているものの、中央部分だけが一部根等によって攪乱を受けたように、多少ブカブカしておりこの状態は最初SK03で確認された。隣接するSK04でも同様の現象が認められ、壙底面から20~30cm位上で、径数cmの空洞となっていた。先行するSK03で壙底面にピットが検出されたことから、近年、東北地方でも調査例の増えつつある杭（逆茂木）を立てた「陥穴」ではないかと想定するに至った。逆茂木の存在は、壙底面のピットとともに、ピット上面の土層状態から充分に説得力を有するものと考える。SK08は基本的には、SK03・04と同様の堆積状態を示すが、壙底面に近い褐色土層は、全体にボソボソしており、廃棄直後の堆積には若干の相異が認められる。遺物は、SK03埋土から縄文土器片とフレークが出土している。

B群とした土壙は、農道東側に7基、西側で3基検出した。東側の7基はおよそ50ラインから54ラインの間に散在するようであり、西側の3基は東西方向にはば等間隔で並ぶようである。

SK05（第5図、図版6）

平面は約0.7×0.8mの円形を呈する。深さは確認面より約0.25mあり、円筒状に掘り込まれている。埋土上位には、径1cm前後の炭化物が比較的多く含まれている。遺物は埋土中より縄文土器片（第3図）が出土しており、晩期と考えられる。

SK06（第5図、図版6）

SK05の西4mに位置する。径約0.5mの円形を呈し、深さは約0.25mある。SK05同様、径1cm前後の炭化物を若干含み、底面に近い部分で径2~4cmの炭化物を主体とするブロックが認められる。出土遺物はない。

SK07（第5図、図版6）

SK06の西4mに位置する。約0.8×0.5mの東西に長い不整橿円形を呈する。深さは0.25m。埋土に若干の炭化物を含む。径5mm以下の細片である。出土遺物はない。

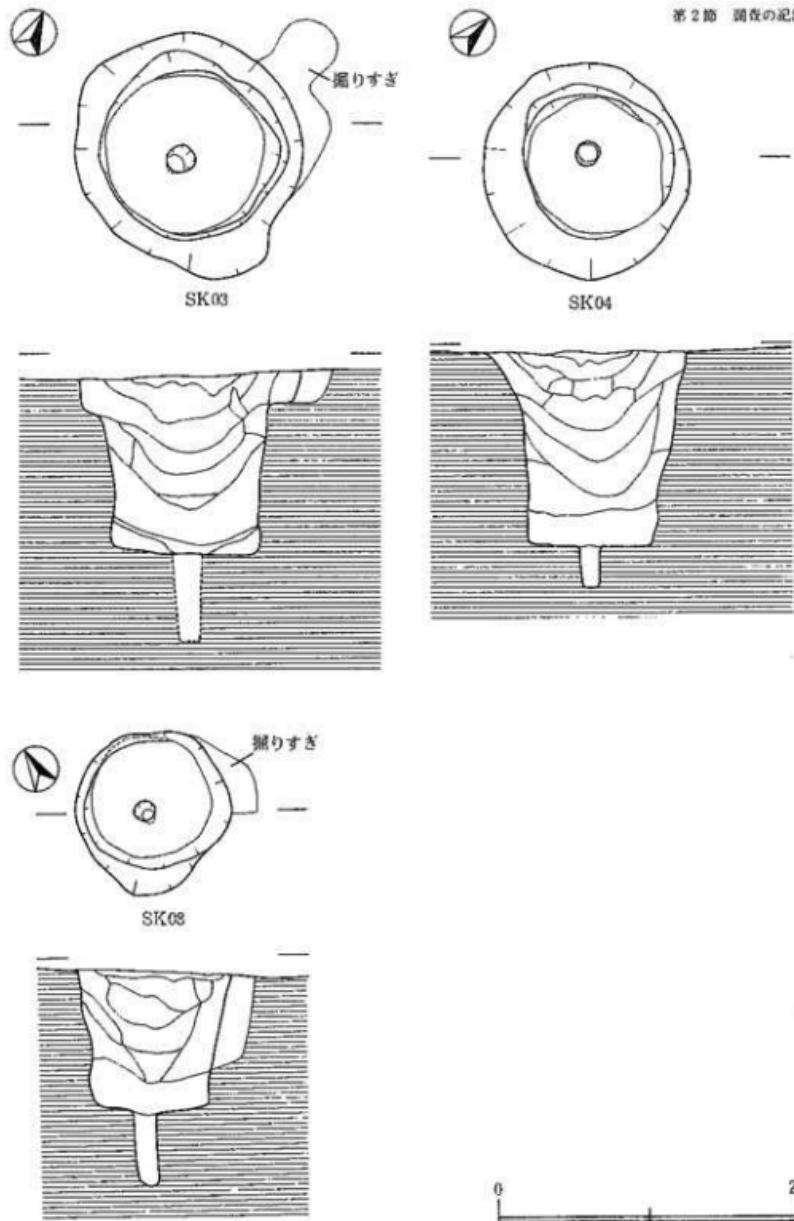
SK09（第5図）

農道東側調査区の中央SK08の南西2mに位置する。平面形は円形を示し、径約0.5m、深さ0.2mを測る。出土遺物はない。

SK10（第5図）

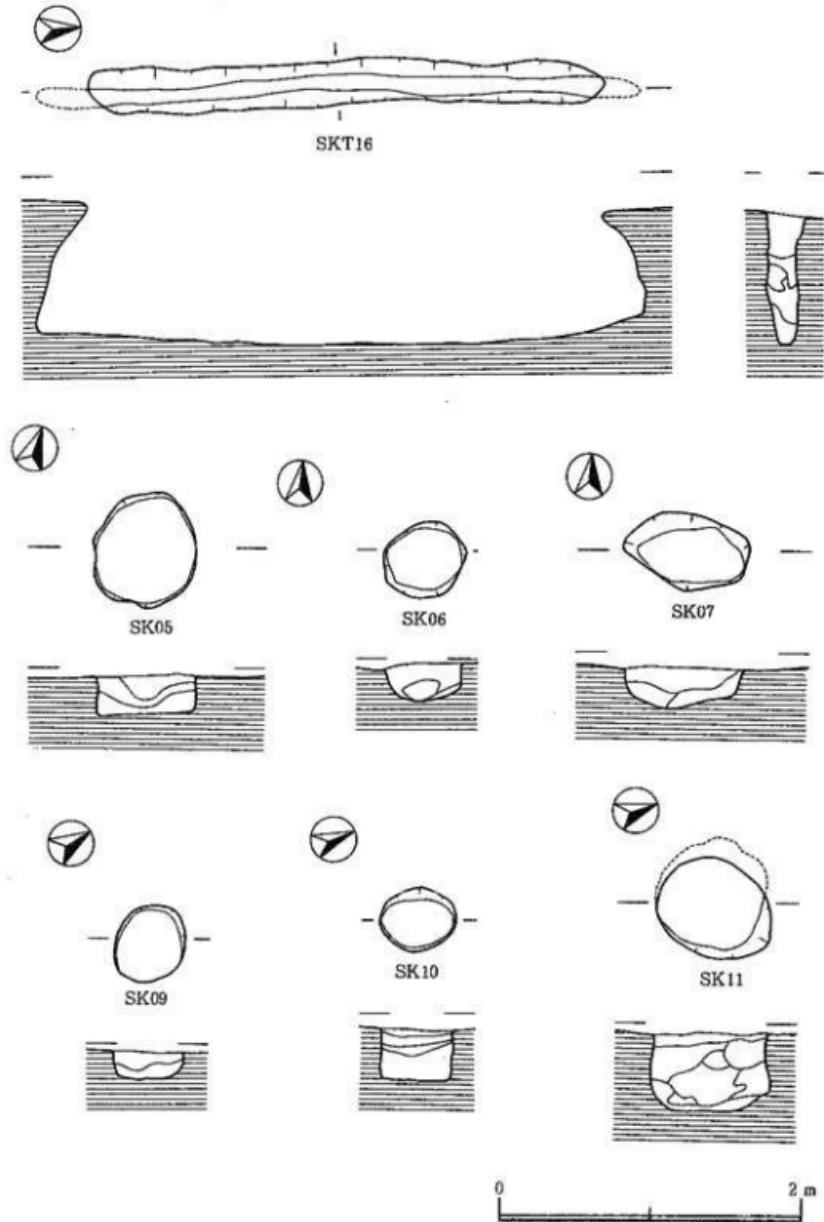


第3図 SK05出土土器

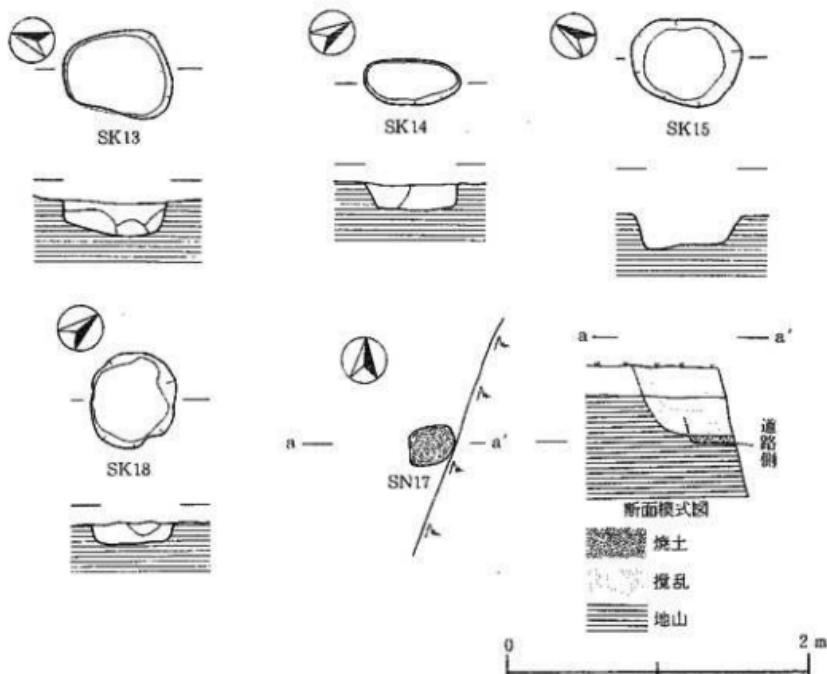


第4図 SK03、04、08

第2篇 第1章 石板台IV遺跡



第5図 SKT16、SK05~07、09~11



第6図 SK13~15, 18 SN17

SK08の北西3mに位置する。平面形はやや南北に長い円形を呈するもので約 0.4×0.5 mの規模である。深さは約0.35mを測り、円筒状に掘り込まれている。埋土上位には、比較的多くの炭化物細片を含むが、出土遺物はない。

SK11（第5図）

SK09の西8mに位置する。平面形は径約0.7mの円形である。深さは0.5~0.55mであり、袋状の掘り込みを有する。出土遺物はない。

SK13（第6図）

SK01の東4mに位置する。平面形は不整円形を呈しており、約 0.6×0.7 mを測る。深さは約0.3mである。出土遺物はない。

SK14（第6図）

SK10の北12mに位置する。平面形は南北に長い横円形を呈しており、約 0.65×0.3 mである。深さは約0.2mで浅い。出土遺物はない。

SK15（第6図、図版7）

SK13の北東4mに位置する。円形の平面形を示し、約0.6×0.75mを測る。深さは約0.25mである。出土遺物はない。

SK18（第6図、図版7）

SK11の南西5mに位置する。径約0.6mの円形を呈し、深さは0.15mと浅い。出土遺物はない。その他の造構にTピット、焼土造構がある。

SKT16（第5図、図版5）

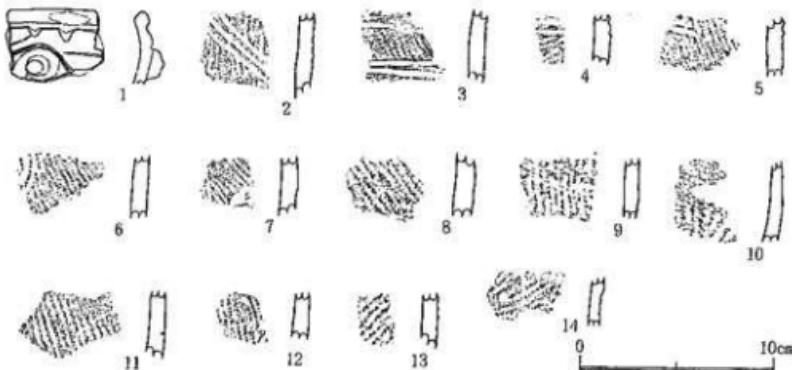
調査区南東部で検出されたTピットである。位置はちょうど平坦面から東側に下る緩斜面に移行する地点であり、長軸が南北方向をとり、等高線に対し平行している。開口部で長軸3.4m、短軸0.3m、深さ0.9~1.0mである。断面は長軸方向で底部両端が外側に広がる形態のものであり、底部の長さは4.0mになる。短軸方向では断面V字形を呈する。出土遺物はない。

SN12（第1図）

焼土造構は調査区北西部、SK03の東2mで検出した。焼土の広がりは東西1m、南北1.2m程の不整形を呈している。焼土は地山土に近い赤褐色を示し、その識別は困難であった。焼土は厚さ5cm位で土壤様の掘り込みはもたないものと考えている。遺物はフレーク・チップ類が若干出土している。

(2)遺構外出土の縄文時代の土器

第7図1は、キャリバー形に膨らむ口縁部の破片である。粘土の張り付けによる瘤が1箇所設けられ、それに収束するように隆帯がわざされている。隆帯の側縁には先端のとがった工具による沈線が施文される。また口縁部直下にも1条の沈線がめぐるが、粘土瘤の上で2箇所したに向かう抉り出しをもつ。胎土には砂粒が多く含まれる。2~6は地文に縄文を施した後、



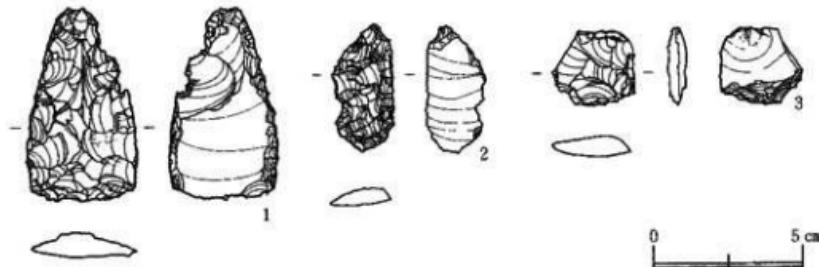
第7図 遺構外出土遺物

2～3条単位の平行沈線による文様を描画するものである。沈線は器面を水平にめぐる例(2, 3)や、垂下する例(4)、剣先状の構図をとる例(5)、円弧を描く例(6)がある。¹地文に用いられる縄文にはLRとRLの両者がある。7～14は全面縄文の施された土器片である。使用される原体にはLRのもの(7～10)とRLのものがある。

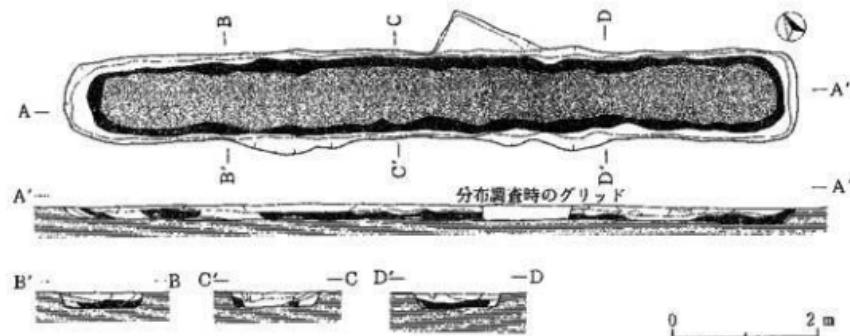
以上、遺構外から出土した土器のうち、1は縄文時代前期末葉五領ヶ台式の流れをくむものであり、2～6の複数の平行沈線で文様を描くものは、中期中葉大木8b式に比定できる。また、その他の縄文だけの破片は、胎土の状態から後期の可能性をもったものも含まれている。

(3) 遺構外出土の石器

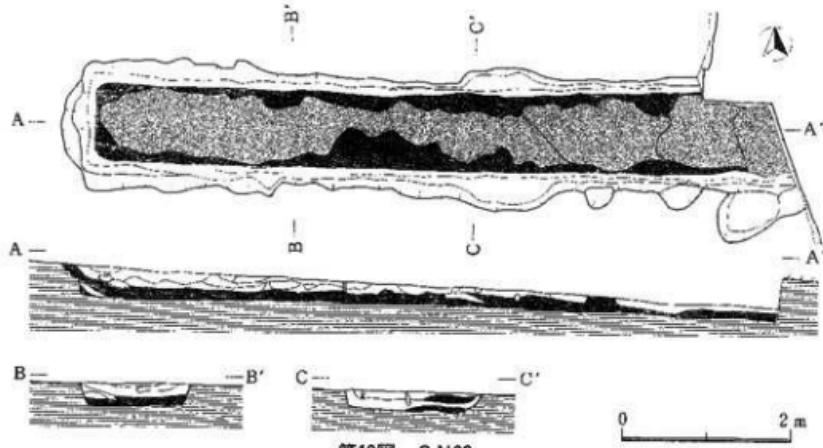
石坂台IV遺跡から出土した遺物は土器も含めて非常に少なく、二次加工のある石器は第8図に示した3点だけである。1は石箇、2は背面全面に整った押圧剥離が施された石器で、あるいは石匙の柄部の折損したものかもしれない。3は小型ながらも5角形を呈し、スクレーパーかあるいはピエス・エスキューの可能性がある。



第8図 遺構外出土石器



第9図 S N01



(4) 近代の遺構と遺物

近代の構築と考えられる遺構に炭焼窯がある。

SN01 (第9図、図版7・8)

調査区南側で検出した。昭和59年の分布調査において「焼土・炭化材の詰った土壤」とされていたものである。形状は長さ約10m、幅1.2~1.25mの長楕円形を呈している。長軸方向は西北西-東南東をとる。深さは確認面より18~22cm、床面から10~15cmの厚さで炭化物がほぼ全面に認められる。床面は平坦で堅くしまっており、よく焼けている。周壁の一部も強く焼けている。

SN02 (第10図、図版8・9)

調査区北側で検出した。SN01とは40m程離れている。遺構の東端は調査区外に延びるため全容は不明であるが、SN01と同様の形状・規模になるものと考えられる。現状で長さは8.6m、幅約1.3m、深さは確認面より14~36cmで長軸方向は東-西をとる。床面は平坦固くしまっており、幅10cm、深さ5~6cmの周溝様の凹みが認められる。床面はよく焼けしており、西側に赤変の著しい箇所がある。周壁も強く焼けている。炭化物の堆積は10~20cmの厚さでほぼ全面に認められる。炭化物の径の比較的大きい材の細片(2~3cm)と灰状のものが東側に多く、径1cm以下のものは西側に多いという分布を示している。出土遺物は炭化物層よりフレークが3点出土している。

SN17 (第6図、図版10)

遺構は調査区を北東-南西に走る農道北西側法面上で検出された。農道工事の際、炭や焼けた土がたくさん出てきた、という地元の方の話から精査して確認できたものである。遺構は

農道工事とその後の木材運搬に伴う重機により大半破壊されており、若干の痕跡を残すに留まる。検出された地点の西側には延びないようであることから、SN02と同様長軸方向を東→西にとる窯跡の西端（壁）の一部と考えられる。

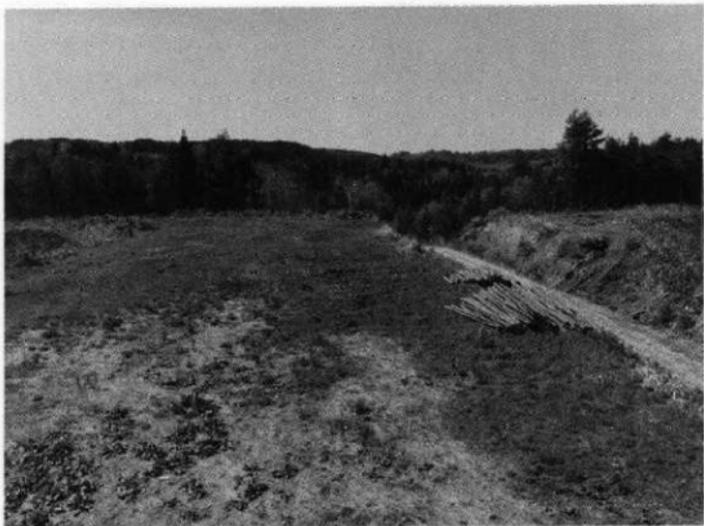
3基の遺構は、形状・埋土・床面等の状況から炭焼の一種の製炭法である「伏焼」遺構と考えられる。しかしながら、この地区で炭焼が行なわれていたこと自体、地元の方の話しても明らかにすることはできなかった。従って操業時期等は不明である。

第3節 まとめ

石坂台IV遺跡は縄文時代に1つ、近代のある時期に1つの新知見を示してくれたことになる。縄文時代には、陥し穴と考えられる円形の土壙3基が検出された。壙底面のビットやビット上面の土層状態から逆茂木を立てていたであろうことは充分に想定できるに至った。この種の遺構は近年類例の増加しているものであり、今後県内においても同様な陥し穴遺構と考えられるものが検出される可能性が大きいであろう。近代には、昨今あまり見られなくなりつつある炭窯の一形態を示す「伏焼」と考えられる遺構が3基確認できた。仮に、明治時代以降の構築とすれば、白炭窯・黒炭窯といった当時（明治末～昭和20年頃か）奨励されていた製炭法とは、明らかに形態の異なる窯を作り製炭を行っていたことから、年代観と合わせて製炭の目的、炭の用途などについて今後明らかにしていかなくてはならない。

このように石坂台IV遺跡は縄文時代には狩猟の場として、また近代には製炭の場として居住地（集落）とは異なる占地を示している。

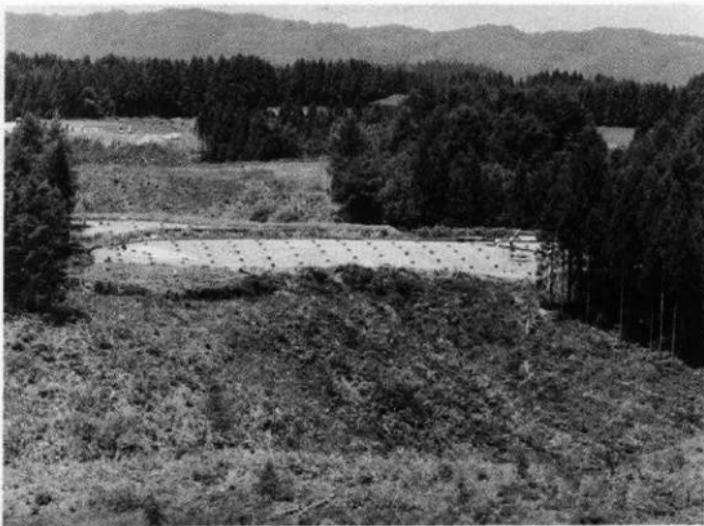
註1 炭焼窯・炭窯については、新版林業百科事典（日本林業技術協会 昭和59年）によれば、「木炭を生産するための炭化装置」を「炭窯」と呼称している。しかしながら今回検出された遺構が、通常使用されている炭焼きのための施設（窯）とは形態的にも異なり、具体的な「炭化装置」（上部構造）も想定できないため、現時点ではこの種の遺構を「炭焼窯」と仮称しておく。（第3篇第1章第3節2を参照されたい）



調査前全景（北▶南）



調査風景



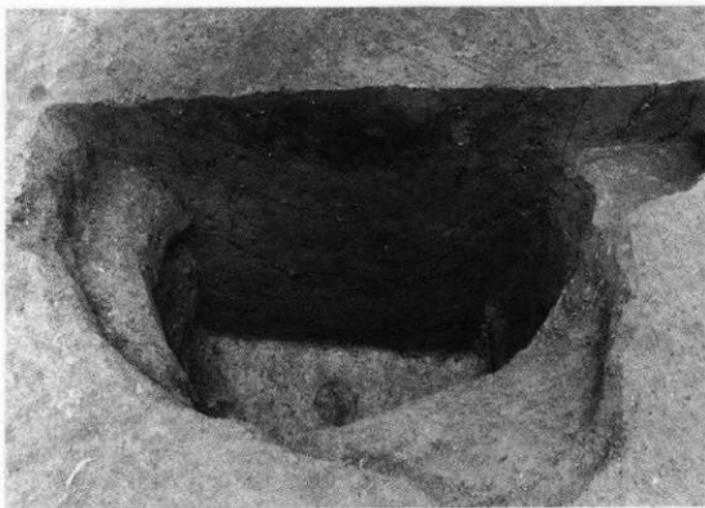
調査後全景（東▶西）



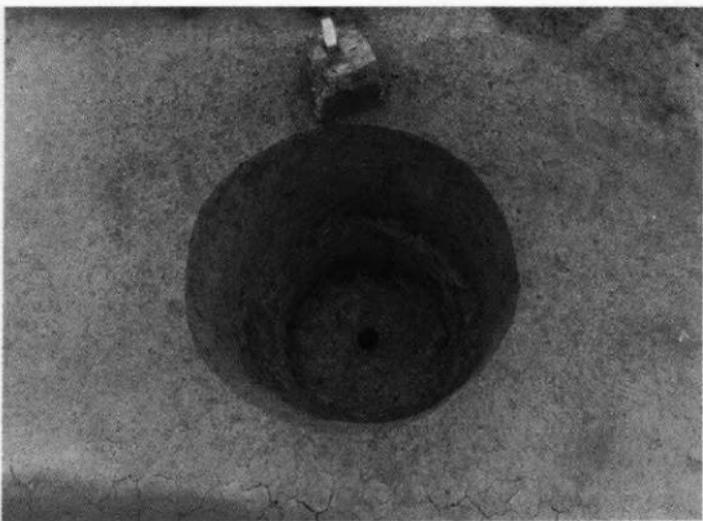
調査後全景（南東▶北西）



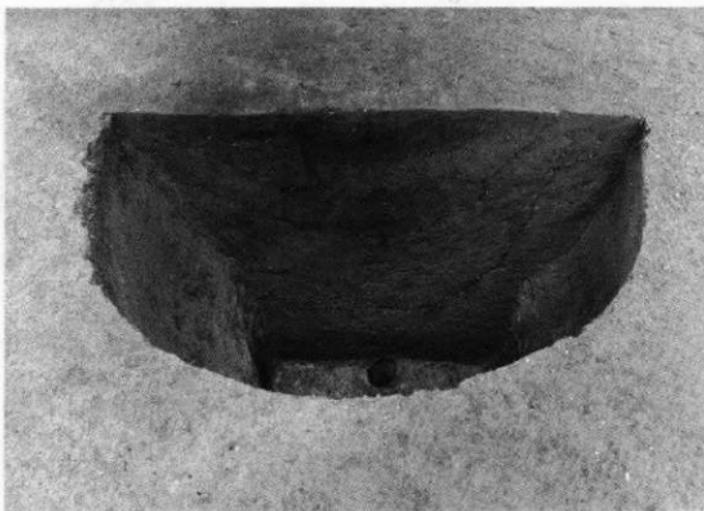
SK03 土壠



SK03 土壠断面



SK04 土壠



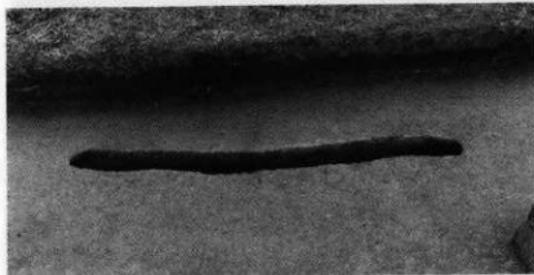
SK04 土壠断面



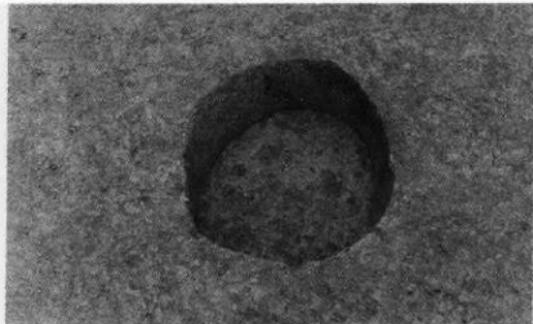
SK08 土壌



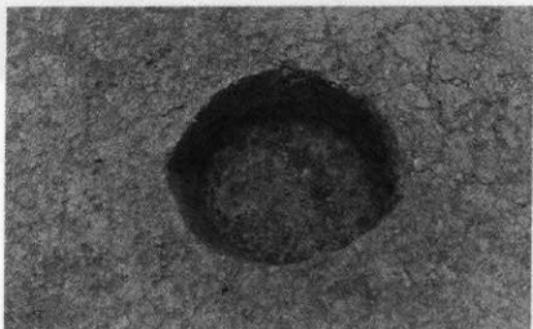
SKT16 Tピット確認面



SKT16 Tピット



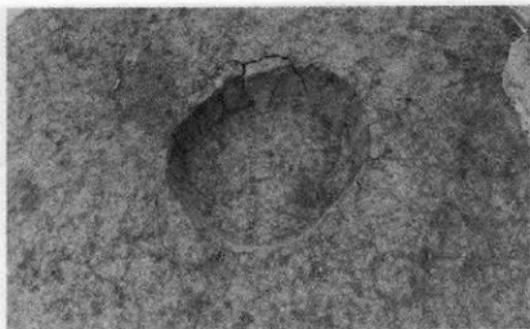
SK05 土壌



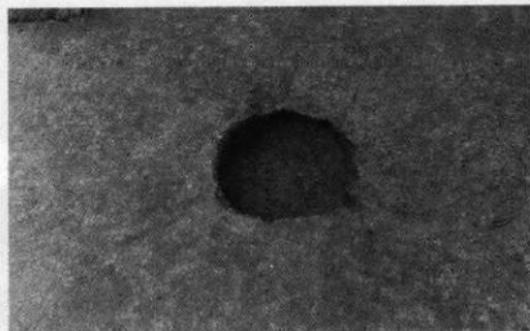
SK06 土壌



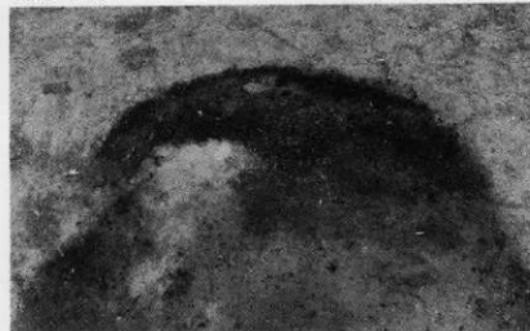
SK07 土壌



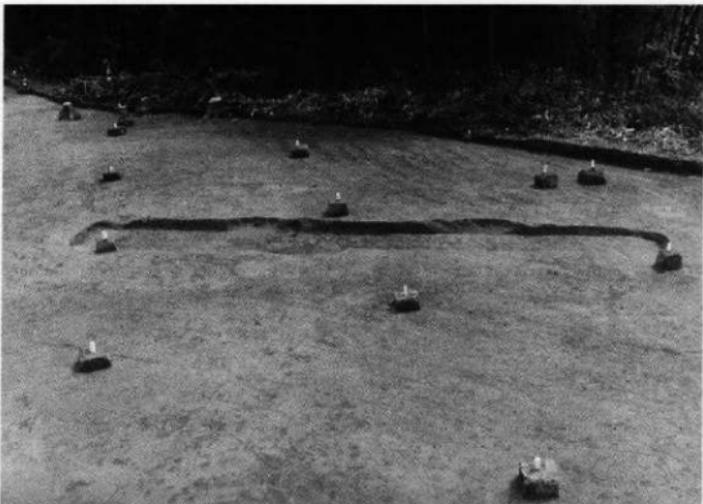
SK15 土壤



SK18 土壤



SN01 炭燒窯確認面



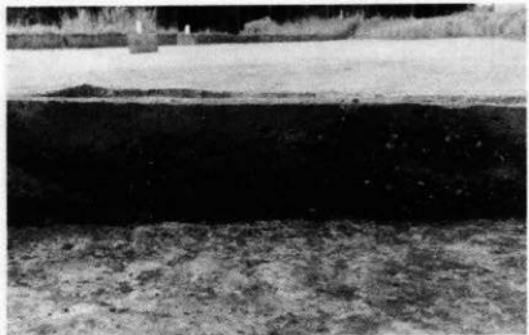
SN01 炭焼窯



SN02 炭焼窯



SN02 炭燒腐



SN02 炭燒蒸斷面

新竹縣竹北市石板台遺跡



SN17 炭燒窯



遺跡基本層位



同上 第XV層木片檢出狀況

第2章 石坂台VI遺跡

(5IZDVI・No.33)

所 在 地 秋田県河辺郡河辺町戸島字七曲石坂台233他
調査期間 昭和60年5月22日～6月24日
調査面積 1,870m²



第1図 遺跡周辺の地形と調査区

第1節 調査の概要

1 遺跡の概観

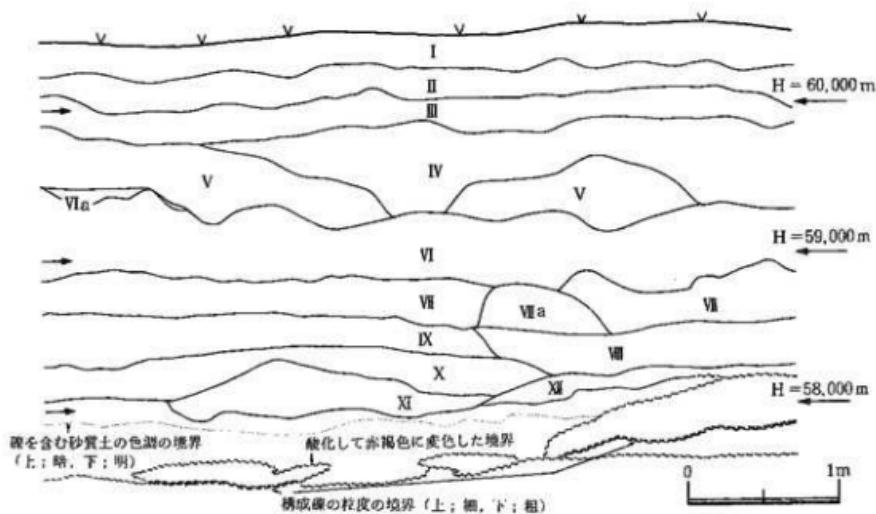
岩見川にそそぎむ白熊川は、岩見川左岸の丘陵を南西一北西に開析している。白熊川は標高70mの丘陵中腹にその源をもち、55m程の落差を延長4.4kmで下る。白熊集落はこの白熊川の開析谷のほぼ中間に位置している。石坂台VI遺跡は、白熊集落の東600mにある。

白熊川に面した丘陵の斜面は、大きくうねりながら連続する。したがって、その斜面によって縁を画される七曲台およびその東南に続く台地は、白熊沢に向かって様々な凹凸をみせ、部分的には舌状に張り出した箇所もある。石坂台IV遺跡の立地する台地も、そうした形状をもつた台地である。台地の標高は60~62m、白熊沢との比高はおよそ30mをはかる。

台地は現在その平坦地の大半が畠地、牧草地として利用されており、白熊沢に面した斜面は杉の植林地として利用されている。これらの杉は樹齢15~20年のもので、人手が加わったのはそう古いことではない。調査はこの斜面に近く、東北横断自動車道秋田線の路線敷内で実施した。

遺跡の基本的な層序は、表土から段丘礫層にいたるまでの250cmの厚さの堆積物が、I~X層まで区分されて観察された。このうち、遺物を含むのはI、II層の厚さおよそ50cmの暗褐色~褐色土である。

段丘礫層までの地山層は、(1)粒度、(2)粘度、(3)色調、(4)混入物の4つの項目によって区分さ



第2図 遺跡基本層位

れた。

全体をみわたして、(1)についてはおよそ均質でほぼ粘土～シルトの粒径範囲におさまる。また粒径の細かな粘土が固結化する傾向も、下位の粘土層にゆくにしたがって強くなるが、さらに下位のシルト質層では固結化が進んでおらず縞状の砂層が混入する。段丘礫層の直上の第XI、XII層では砂と礫の互層となるが、水成堆積による層の傾斜と関連して砂だけによって構成される層もある。(2)については、上位から下位の層にゆくにしたがって粘度が高くなり、白色粘質土ではもっとも高い。(3)については、粘土層は明瞭をくりかえす。明色として区分される層はおもに白色の粘質土で、黄褐色土に多く混じり、赤褐色の酸化斑がそれに加わることもある。礫、砂の基色は、概ね明るい。(4)の混入物には、遺物の他、炭化物、赤褐色に固結した粘土などがある。

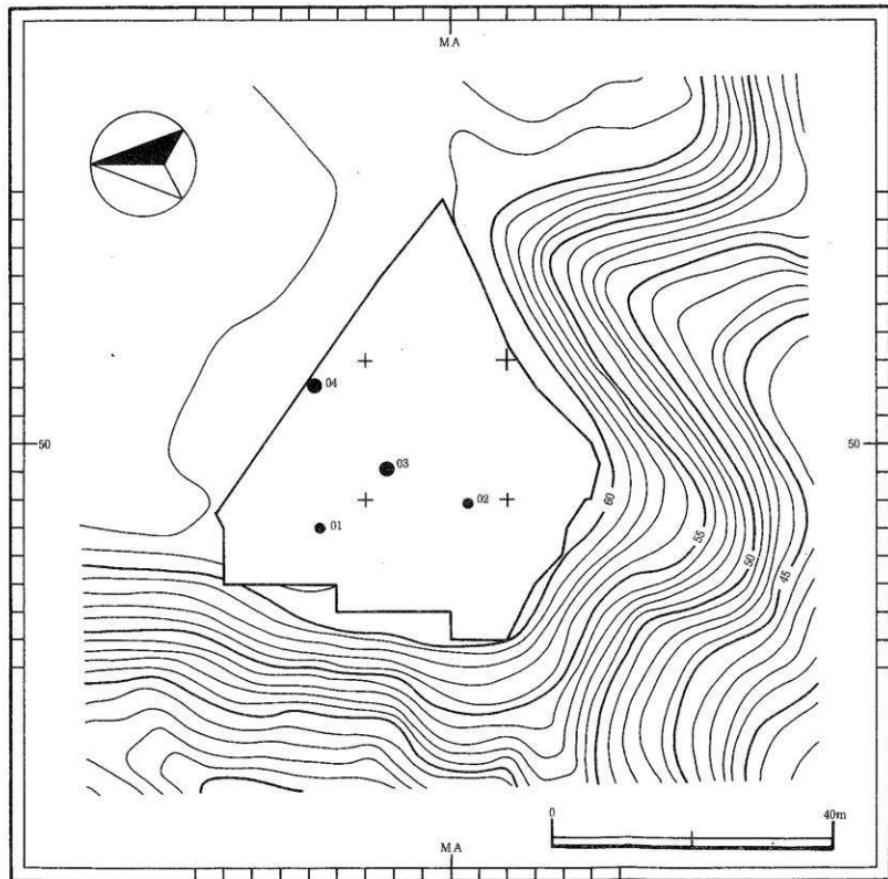
調査区内での遺構の分布は、特に偏在するというような状況を見せていない。調査区は南西方向へ突き出した小さな舌状台地上に設定されているが、遺構はその縁辺部よりはむしろ中央部、および北側につづく平坦面に散在する傾向にある。表土除去後に確認した暗褐色～黒褐色土のプランは半載した結果、明瞭な底面、壁面を確認できず、遺構としえなかつたものが多い。ただし、これらの中には地山面にできた暗褐色～黒褐色のシミの中に炭化物を周囲とは明らかに区別できるほど多く含んだものがある。これがどのような過程でできあがったものかは注意された。底面、壁面の堅固なことをもって、土壤としたものは4基ある。

遺物はほとんど縄文時代の土器片と石器の類であるが、これも量としては極めて少なく、調査区内に僅かづつ散布しているという状況である。その中でも比較的まとまって出土したのは、MA50、MA53、MA54、MA55、MA56、MC56の各グリッドである。

2 調査の経過

調査は昭和60年5月22日から開始した。調査区の西側から順次人力による粗掘作業を進め、調査区全面にわたって表土除去が完了したのが6月1日である。調査区の表土の厚さは、およそ20～60cmで、表土除去の作業によって移動した総土量は312,294m³にのぼる。表土除去と共に遺構確認の作業もおこなわれ、精査を必要とする黒褐色～暗褐色上のプランを24箇所、黄褐色地山面で検出した。また地山面よりも上に散布する遺物の採集も、粗掘作業中に実施した。5月27日には、ME57グリッドで打製石斧3点を採集。

遺構調査は、6月5日からおこなった。地山面で確認したプランを半載してゆくが、精査中に遺構と判断できないことを確認したものが大半である。遺構の実測、写真撮影は6月22日で総べて終了。その間6月12日には、調査区での層序を確認するため、テスト・ピットを掘り下げ、その記録をおこなっている。6月24日には、全体写真を撮影して調査を終了した。



第3図 造構配置図

第2節 調査の記録

1 検出遺構と遺物

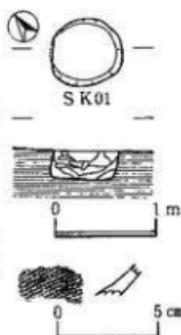
土壤(第4図、第5図)

SK01;MC54グリッドで検出した。規模70×68×27cmを測る。底面、壁面とも硬い。北西側の壁では、開口部が張り出して、底部がやや膨らんでいる。埋土は暗褐色～褐色で、炭化物を多く含んでいる。埋土中からは、縄文時代晩期前半、おそらく大洞B式もしくはBC式に比定し得る土器の破片を出土した。表面には擦りの細かなLR原体が横位に回転施文されている。破片の部位は胴部であるが、底部との接合部が剥落したものであることが観察できる。

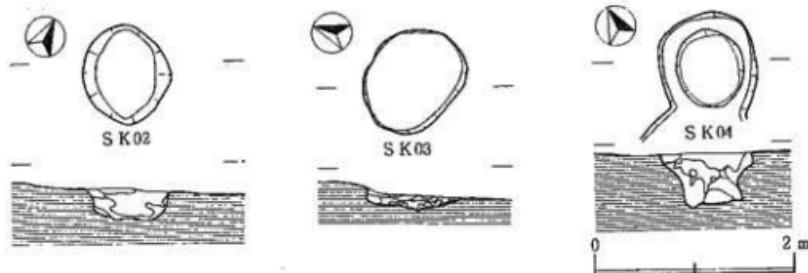
SK02;MC49グリッドで検出した。規模100×87×29cmを測る。壁面、底面とも硬く良好である。ことに底面中央は火熱をうけて焼土化し、炭化物、灰などが堆積している。埋土は黒褐色～褐色を呈し、焼土粒、炭化物などが多く混じる。

SK03;MA52グリッドで検出した。規模110×90×17cmを測る。確認面が北から南にむかって傾斜しているため、南側の壁はほとんど削られてなくなっている。底面および壁面は比較的硬いのであるが、植物根によって搅乱をうけ、僅かながら凹凸が認められる。埋土は黒褐色～黄褐色を呈するが、黄褐色土は地山上がブロック状に混入したものである。

SK04;LR54グリッドで検出した。規模110×93×55cmを測る。壁面は二段に検出された。確認面付近の埋土では炭化物が多く含まれる。下部の壙底付近では地山上がブロック状になって入り込んでいるものの、炭化物の混入は少なくなっている。



第4図 SK01および出土土器



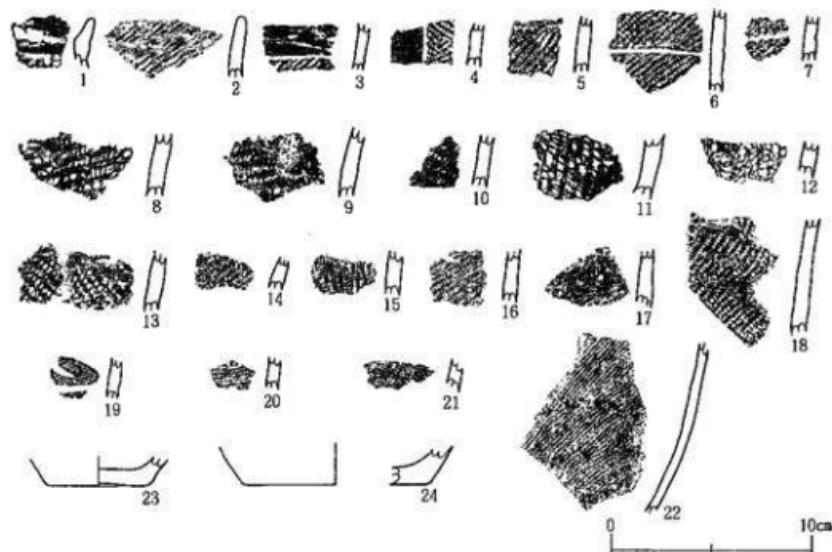
第5図 土壌(SK02～SK04)

2 その他の遺物

(1) 縄文時代の土器 (第6図)

第6図1~18は縄文時代後期の土器である。1は無文の口縁部破片。口縁上部で内面が大きく削られて尖っている。2はLR原体が横位に回転施文された口縁部破片。胎土には少量の石英、長石などが混入される。3~7は沈線と縄文原体の回転施文による文様構成をとる土器である。用いられている原体はLRの単節のものであるが、5のように0段多条と思えるような筋の詰ったものもある。縄文原体と沈線の施文の先後関係は、沈線施文後の縄文原体の回転施文であるが、3・4ではさらにその後に沈線を境として無文部の調整を行っている。いずれも胎土にはキメ細かな粘土を選んでいるが、極めて微細な砂粒も僅かに含んでいる。8~11は同一個体。LRの燃りの原体を器面に対して横位もしくは左上一右下の方向に回転施文している。原体の燃りの太さは比較的太い。胎土には石英、長石などの砂粒が多く含まれている。12・13はRL原体が器面に対して、左上一右下の方向で回転施文されたものである。8~11と同様胎土に砂粒が多く含まれる。14~18はLR原体が横位ないし右上一左下の方向で回転施文されたもの。胎土には砂粒を多く含む。

19~22は縄文時代晚期の土器である。19は燃りの細かなLR原体と沈線によって所謂雲形文が描かれている。20~22はLRの原体が横位に回転施文されている。いずれの土器も胎土はこ

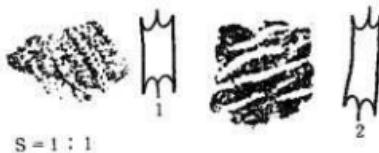


第6図 遺構外出土土器（縄文時代）

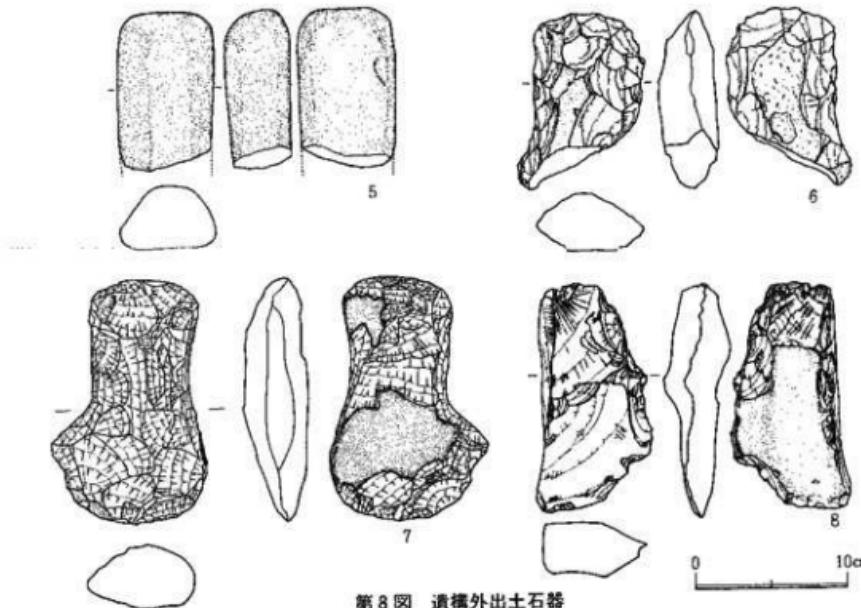
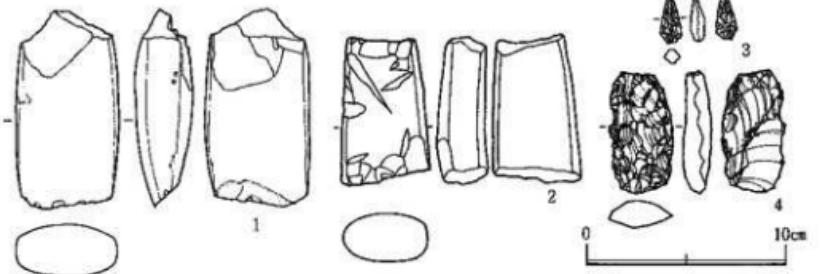
とに精選され黒色に焼成されており、亀ヶ岡式土器の特徴を示している。23・24は底部の破片であるが磨滅が著しい。砂粒を多く含む。

(2) 弥生時代の土器（第7図）

第7図1・2は器面にRの撫糸文が施された土器である。器厚は薄く5mm前後である。胎土にはキメの細い粘土を用いているが、径2~3mmの砂粒が少量混入されている。



第7図 遺構外出土土器（弥生時代）



第8図 遺構外出土石器

(3) 石器 (第8図)

1は刃部の一部および基部を失った磨製石斧である。刃部の欠損は使用時の剥落による。石材は脈石英玢岩。2も1同様刃部、基部とも失われている。残っている本体部分は、片面が彫らみ、他の面が平滑である。石材は砂岩。3は流紋岩製の石鎌である。若柄部が折損している。本体はかなり肉厚で、断面形は四角形に近い。4は頁岩製の搔器。縦長の剥片を素材としている。片面の剥離は丹念に行われているが、他の面ではごく大まかな剥離が加えられているだけである。5は細長い流紋岩を素材とした磨石である。3つの磨面と、それによってできた稜線が磨かれている。6は安山岩製の打製石斧。基部が折損している。本体表裏両面とも、その中央に素材となった礫の面を残す。7も安山岩製の打製石斧。片面には素材となった礫の自然面が大きく残る。刃部は使用による磨滅が観察される。8も6・7同様の打製石斧であるが素材は頁岩。母岩から幅の広い剥片を打割した後、剥片表面のほぼ中央部からの加撃によって半割したものを作り出している。素材剥片の半割された側には、その後の剥離は加えられていないが、他の側縁および刃部には整形のための剥離が施されている。刃部はやはり磨滅が認められる。

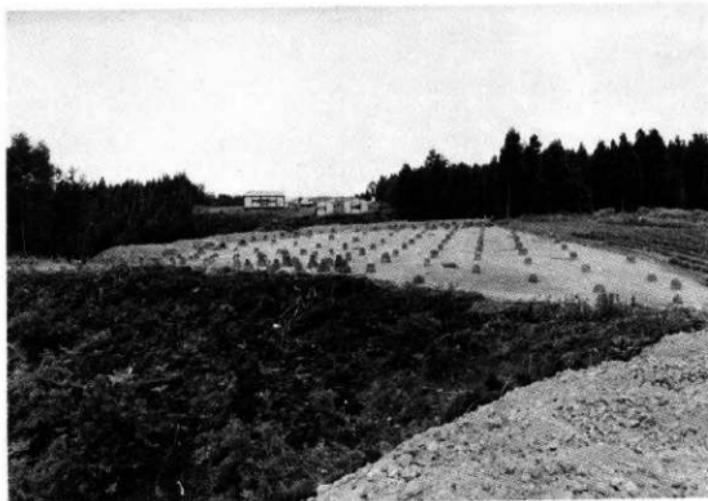
第3節 まとめ

本遺跡からは遺構として土壙4基、遺物として極めてわずかな量ではあるが縄文時代後・晚期、および弥生時代の遺物を採集した。土壙はその伴出遺物がなく、時期決定およびその構築の目的を推察することもほとんど不可能であるが、周囲から出土している遺物の時期からしておよそ前記の時期の構築を見てよい。

石器のうち3点の打製石斧は、石坂台VI遺跡を特徴づける数少ない資料のうち、特に採り上げられるものである。この種の打製石斧は現在の知見では、縄文時代晚期の土器とともに見つかることが多く、同じ七曲台遺跡群でも松木台II遺跡・松木台III遺跡・石坂台III遺跡で出土例があり、また他の地域では秋田市坂ノ上F遺跡・仙南村石名館遺跡・増田町平鹿遺跡などで見つかっている。その出土状態では、2~数本がまとまって出土する例が知られており(松木台III遺跡・石坂台I遺跡)、住居等の遺構に伴出した例はまだない。石材としては頁岩、粘板岩などの硬質の石が選ばれる他、本遺跡のように安山岩が使用される場合もあるようである。本遺跡で出土した石斧も、その出土状態は3本がまとまって出土しており、現在までに知られた他の遺跡例に追加されるべきものである。本遺跡と北を隔てた北西側には石坂台VII遺跡があり、縄文時代晚期前葉の貯蔵穴の集中域も見つかっている。石坂台VI遺跡は、この隣接する貯蔵穴群と併せて考えて、打製石斧に示される縄文時代後期中葉から晚期前葉に営まれた、何らかの作業場として性格づけておきたい。



遺跡全景（北東▶南西）



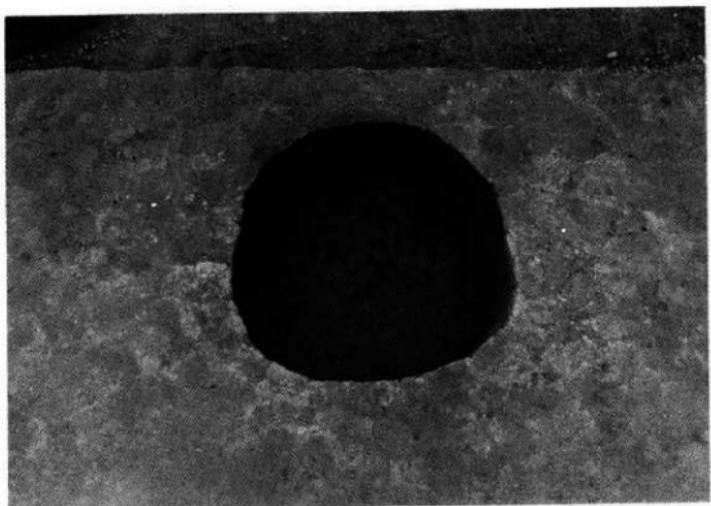
調査後全景（南東▶北西）



遺跡基本層位



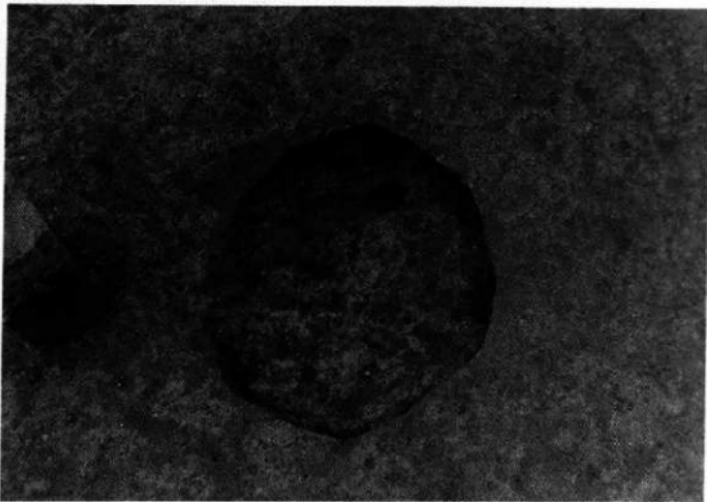
作業風景



SK01 土壙



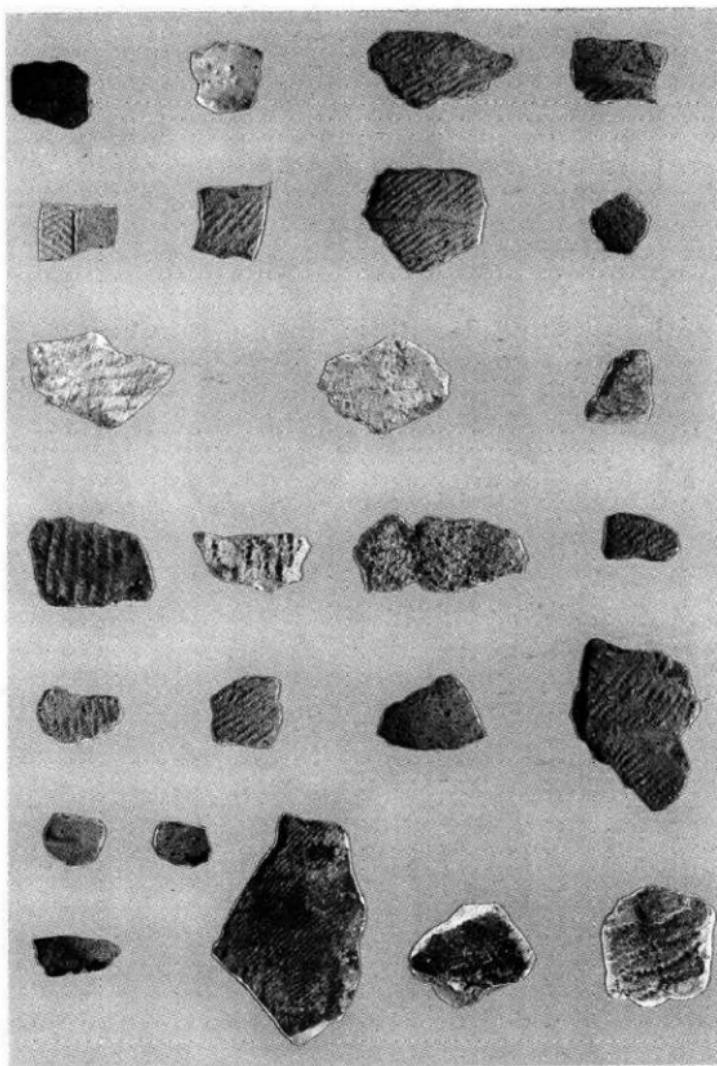
SK02 土壙



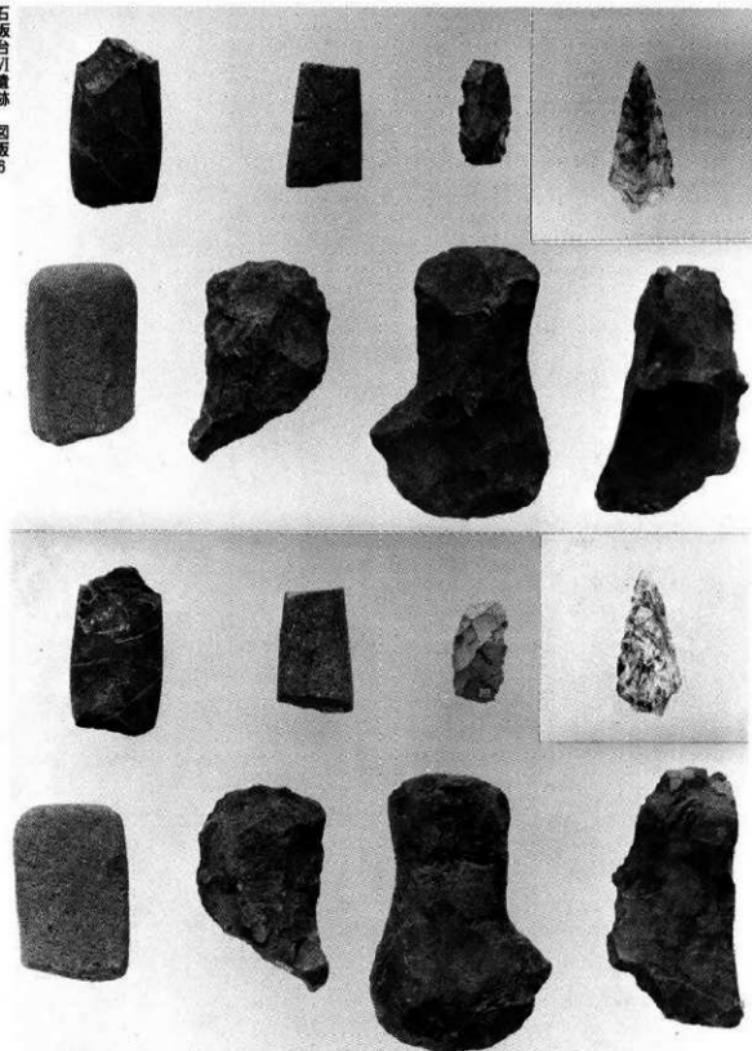
SK03 土壙



SK04 土壙



遺構内外出土土器

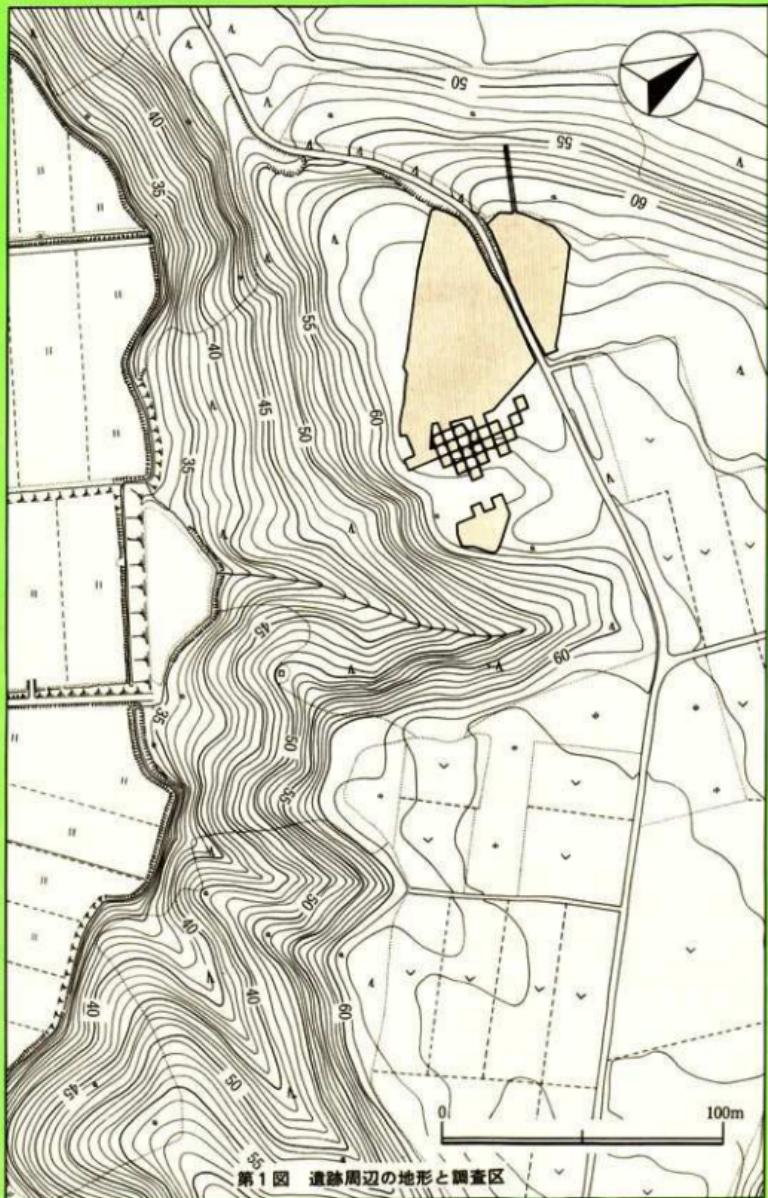


造構外出土石器（上一表面・下一裏面）

第3章 石坂台Ⅶ遺跡

(5IZDⅦ・No.34)

所 在 地 秋田県河辺郡河辺町戸島字七曲石坂台214他
調査期間 昭和60年6月19日～9月5日
調査面積 3,860m²



第1図 遺跡周辺の地形と調査区

第1節 調査の概要

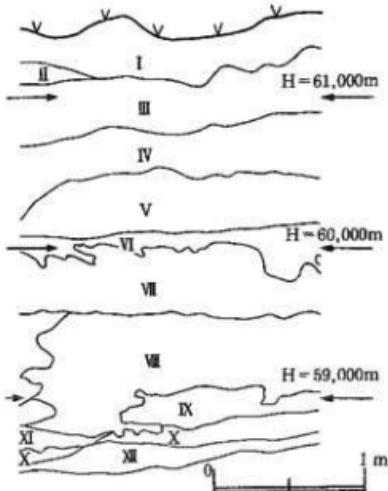
1 遺跡の概観

石坂台Ⅶ遺跡は白熊集落の東470m程に位置する。岩見川の左岸に形成された河岸段丘面は、低位の面から七曲台面、上野台面、椿台面と区分されている。岩見川にそそぎ込む白熊川とその東にある沢筋とにはさまれて、七曲台全体は白熊川を斜辺としてもつ直角三角形に近い形状を呈している。段丘面のうち七曲台面と上野台面の境界は、斜辺と岩見川に面した辺に直角に交わる辺の各々を二等分する点を連絡する線になるが、椿台面には岩見川に沿った辺の対角から東側へ伸びる台地面が相当する。本遺跡はこの上野台面の西の突端、七曲台を直角三角形としてみた場合の岩見川の辺に対角の位置にある。岩見川下流域の椿台面の標高区分は60~80mあるが、本遺跡の標高も60~64mである。

遺跡のある台地の南側は白熊川による開折谷があり、台地との比高=30m程をはかり、台地の縁からは急な斜面となっており。また、台地の西側および北西側では比高=12m程で段丘崖をおり上野台面が続く。椿台面は東側へのびているが、本遺跡の東側に隣接しては石坂台VI遺跡が、さらにその東側には石坂台IV遺跡がある。

遺跡の基本的な層序は、表土層以下段丘疊層まで12層に区分された。第I層、第II層および第III層は黒褐色~褐色を呈する表土層であり、遺物の包含層である。第II層は本遺跡だけではなく七曲台全体を通じて、表土層中に部分的にうすく混入する層である。縄文時代の構造はこの層の付近、すなわち第I層と第II層の界面近くから行なわれているようである。第IV層、第V層は褐色~黄褐色の粘土層である。このうち第V層は、台地平坦部では水分を多く含んだ白色の粘質土層へと漸移する。第VI層以下、第XII層まではシルト質ないしは砂質土層である。構成する鉱物の割合の違いにより、明色を呈する場合や暗色を呈する場合がある。さらに第VI層、第XI層では炭化物が混入する。また第VI層から第XII層まではその境界が赤褐色に酸化した沈殿層によって示される。

遺跡から検出された構造は縄文時代のフラスコ状土壙がその主なものであるが、2箇所の集中区域を認めることができた。すなわちその1つは台



第2図 遺跡基本層位

地の北西側の縁に近く、台地平坦面が次第におり始める付近と、南西に張り出した台地の東端、沢をはさんで石坂台VI遺跡を対面する位置である。この2箇所の集中区域を中心にして、その間の広い平坦面にも他に3箇所の土壌の分布する地点を確認することができた。また、ごく最近に作られたものと思われる炭焼窯は台地の南の縁近くで見つかっている。

2 調査の経過

本遺跡の調査は、6月18日から開始している。6月19日・20日の両日、重機により表土の除去を行い、その後方眼杭の打設作業を行う。台地のはば中央には農作業用の道路が東西にはしり、調査区を南北に分断している。人力による第Ⅲ層の掘り下げは、このうち道路の南側調査区の南縁から開始した。粗掘作業が始まったのは6月26日である。

遺構精査は、調査区の南縁で検出された炭焼窯を最初のものとして7月8日から行っている。その間、第Ⅲ層の剥除は継続して行っているが、道路の北側調査区での作業に着手したのは7月9日である。7月13日には北側調査区でSK06のプランを確認し、北側調査区の粗掘作業が終了した。7月23日には、SK01～SK12の道路北側調査区の全ての土壤プランを検出している。その後、8月1日までの間にこれらの土壤の精査を行う。一方、道路南側の調査区では調査区南側の縁から西側の縁へと粗掘作業が進み、SX010が7月30日に検出されている。この西側の縁にあるSK19、SK21の精査は、8月5日～8月20日までの間、継続的に行っている。

当初、調査の予定区域としていたのは道路をはさんだ南北両側の調査区だけであったが、南側調査区の南東縁、炭焼窯周辺の精査によって、SK14～16が見つかったため調査区をさらに東側へ拡張することにした。本遺跡の東側に位置する石坂台VI遺跡と対面する箇所におよそ240mの調査区を拡張設定したのが、8月24日である。この台地の東端部からはSK17～23の7基の土壤が検出され、これらの精査は9月5日まで行なわれた。また、調査後の全景の撮影も同日行い、全ての調査を終了している。

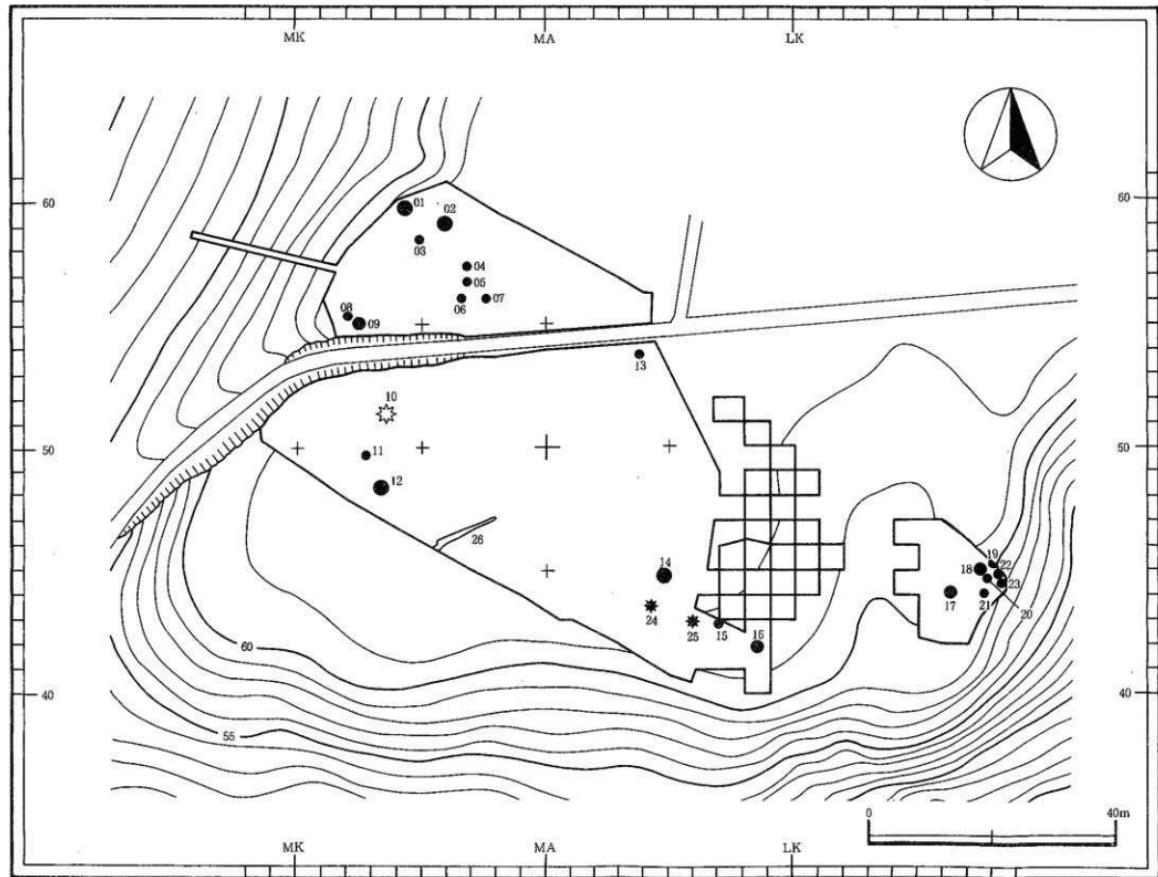
第2節 調査の記録

1 検出遺構と遺物

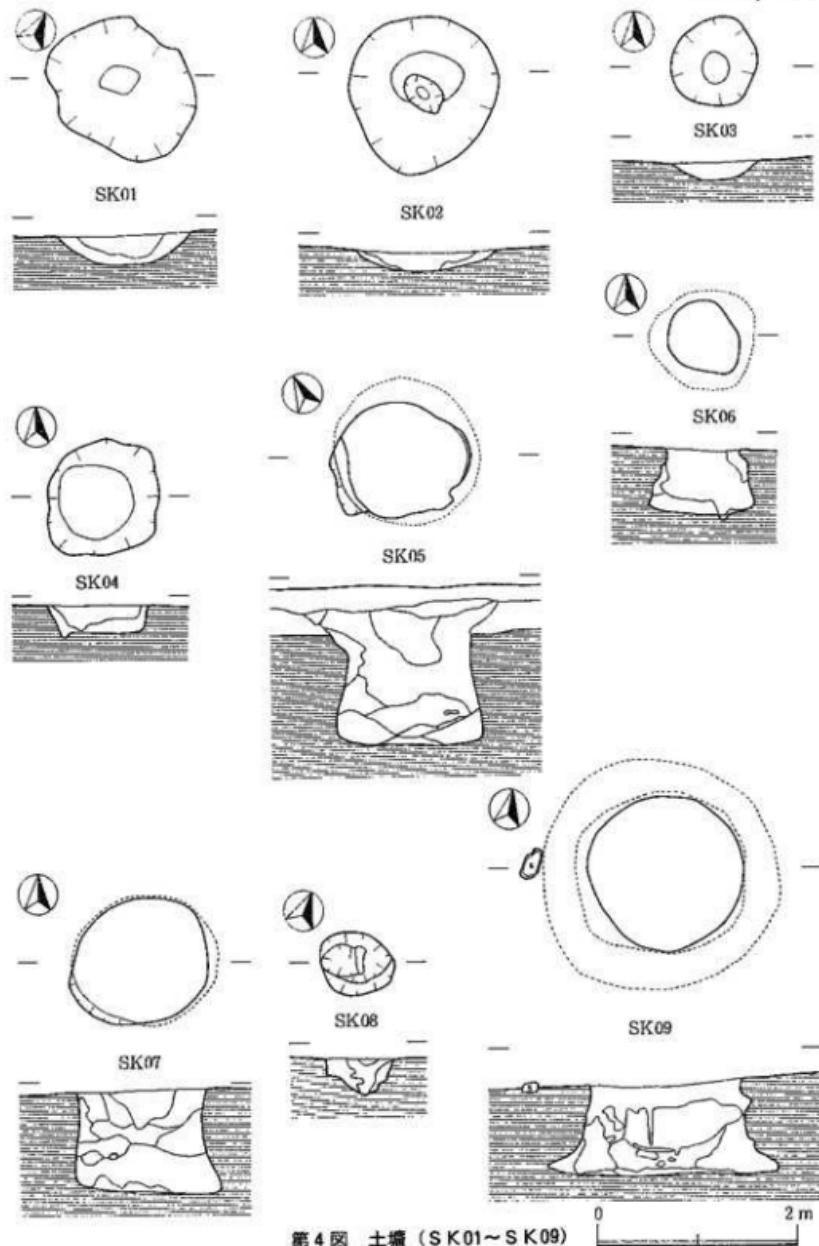
検出された遺構は縄文時代後・晩期の土壤19基と、時期不明の土壤3基、それに近代のものと思われる炭焼窯2基と溝1条である。

(1) 土壤

SK01;MF59グリッドで検出した。規模（開口部径） $1.56 \times 1.24 \times$ （深さ）0.35mを測る。断面形は擂鉢形を呈する。埋土は褐色～黄褐色を呈し、地山土がいく分混入する。



第3図 透構配図



第4図 土壌 (SK01~SK09)

SK02;ME59グリッドで検出した。規模（開口部径） $1.6 \times 1.5 \times$ （深さ） 0.21m を測る。断面形はSK01・SK02同様擂鉢形となる。埋土は褐色～黄褐色を呈する。

SK03;MF58グリッドで検出した。規模（開口部径） $0.98 \times 0.83 \times$ （深さ） 0.22m を測る。断面形はSK01と同じように擂鉢形を呈する。埋土は褐色を呈し、炭化物粒を含む。

以上、SK01～SK03は土壤内からの出土遺物はない。

SK04;MD56グリッドで検出した。規模（開口部径） $1.1 \times 1.16 \times$ （深さ） 0.3m を測る。壁面は植物根の攪乱により凹凸が著しいが、底面は平滑で堅い。埋土は黒褐色～暗褐色で地山黄褐色土混入。

SK05;MD55グリッドで検出した。規模（開口部径） $1.11 \times 1.4 \times$ （底径） $1.48 \times 1.42 \times$ （深さ） 1.04m を測る。断面形は開口部が狭くなる台形を呈する。埋土は褐色～暗褐色の土で、壁際や底面には壁の崩落土が堆積している。埋土の上層から少量の土器片を出土している。第7図1～3がそうであるが繩文時代晚期終末の大洞A'式に比定しうる変形工字文の施された同一個体の土器である。2の土器片から器形を推定すると、口縁部から底部まで直線的におりる鉢形となる。胎土は精選されたものが用いられ、器厚は薄く 5mm 前後である。

SK06;MD55グリッドで検出した。規模（開口部径） $0.8 \times 0.66 \times$ （底径） $1.06 \times 100 \times$ （深さ） 0.62cm を測る。断面形は台形。埋土は暗褐色～黒褐色を呈する。出土遺物はない。

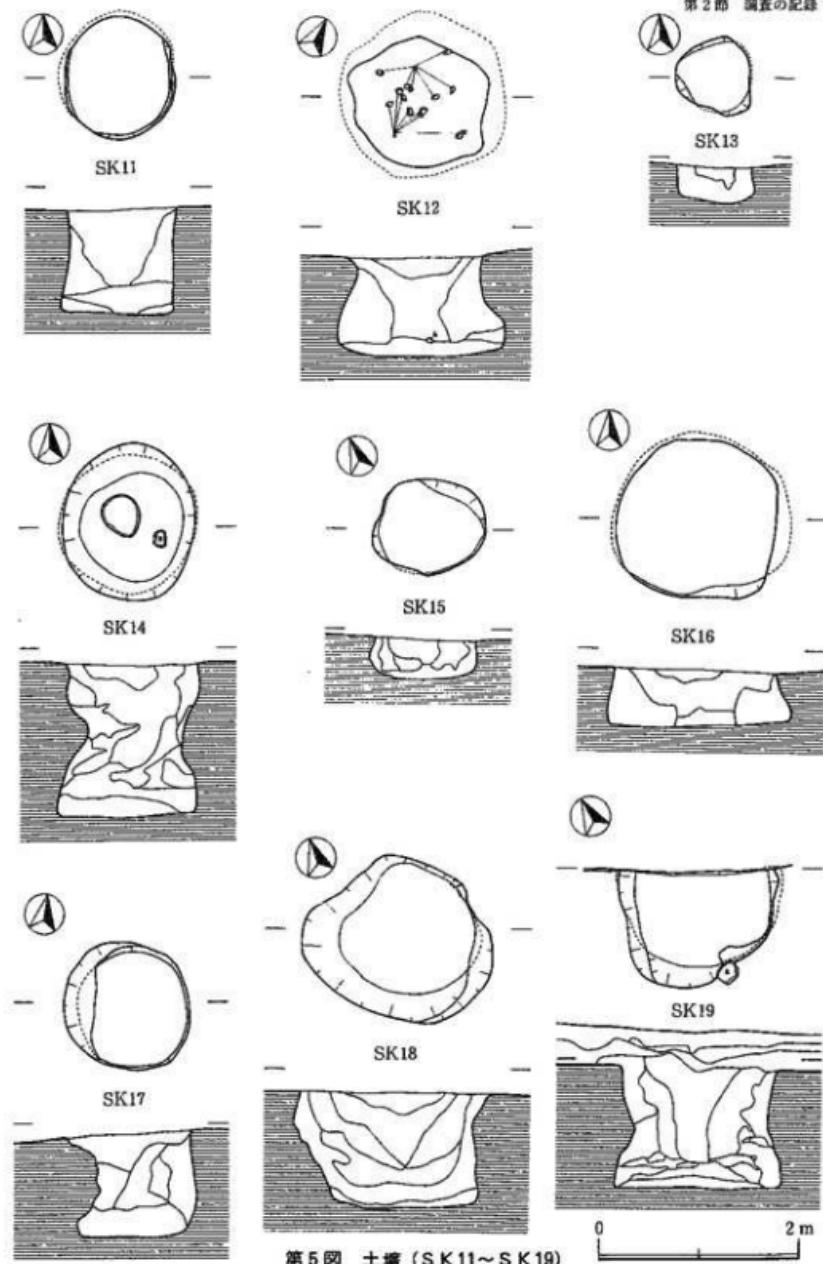
SK07;MC55グリッドで検出した。規模（開口部径） $1.4 \times 1.24 \times$ （底径） $1.46 \times 1.3 \times$ （深さ） 1m を測る。埋土は褐色～黒褐色を呈する。坑底部中央には黄褐色土が堆積している。主に西侧の壁から崩れ落ちた土と思われる。

SK08;MH55グリッドで検出した。SK09の北西側に位置する。規模 $0.77 \times 0.64 \times 0.18\text{m}$ を測る。断面形は擂鉢形を呈する。埋土は褐色～暗褐色を呈する。

SK09;MH55グリッドで検出した。規模（開口部径） $1.54 \times 1.54 \times$ （底径） $2.26 \times 2.38 \times$ （深さ） 0.87m を測る。断面形は底部の張り出したフ拉斯コ形を呈する。SK09のプランは黄褐色の粘質土層の上面ではば同色の砂の広がりとして確認された。この砂は土壤のはば上半分に充填している。その下には褐色～暗褐色の土が堆積している。土壤の底面は、遺跡基本層位の第V層の上面に作られている。

SK11;MH49グリッドで検出した。規模（開口部径） $1.1 \times 1.24 \times$ （底径） $1.12 \times 1.28 \times$ （深さ） 1.02m を測る。断面形は開口部のやや狭くなる台形を呈する。埋土は黄褐色～黒褐色を呈するが壁面の崩落土が底面壁際には堆積している。

SK12;MG48グリッドで検出した。規模（開口部径） $1.52 \times 1.24 \times$ （底径） $1.74 \times 1.52 \times$ （深さ） 1.01m を測る。埋土は黒褐色～暗褐色を呈する。底面から 20cm 程の間では径 $6 \sim 7\text{cm}$ 程の礫が13個混じっているのが見つかった。また、この礫を含む層には炭化物も多く含まれている。



第5図 土壌 (SK11~SK19)

SK13;LQ53グリッドで検出した。規模（開口部径） $0.72 \times 0.82 \times$ （深さ） 0.35cm を測る。埋土は黒褐色～暗褐色を呈する。黄褐色土がブロック状に混入している。

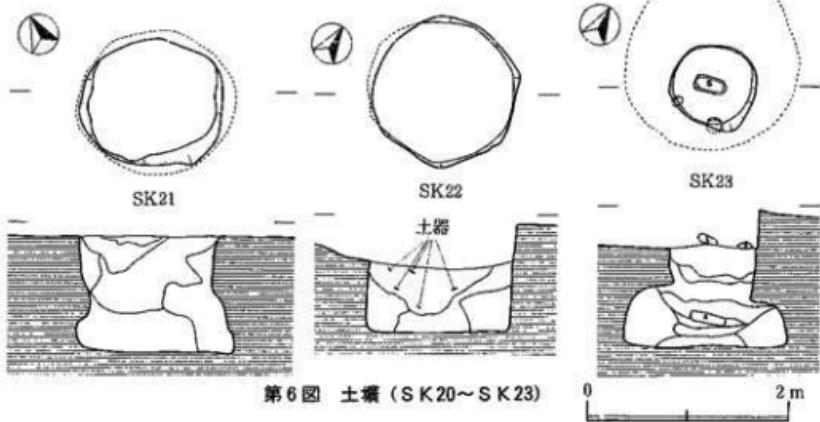
SK14;LP44グリッドで検出した。規模（開口部径） $1.58 \times 1.32 \times$ （底径） $1.38 \times 1.38 \times$ （深さ） 1.56cm を測る。断面形では壁の中程にくびれ部分をもった瓢箪形を呈する。埋土は褐色～黒褐色を呈し、くびれた部分の付近では灰白色の粘土層がある。底面には（開口部径） $42 \times 36 \times$ （深さ） 5 cm の浅いピットと、 $12 \times 16\text{cm}$ の礫があり、その周囲からは炭化した草の断片が見つかっている。

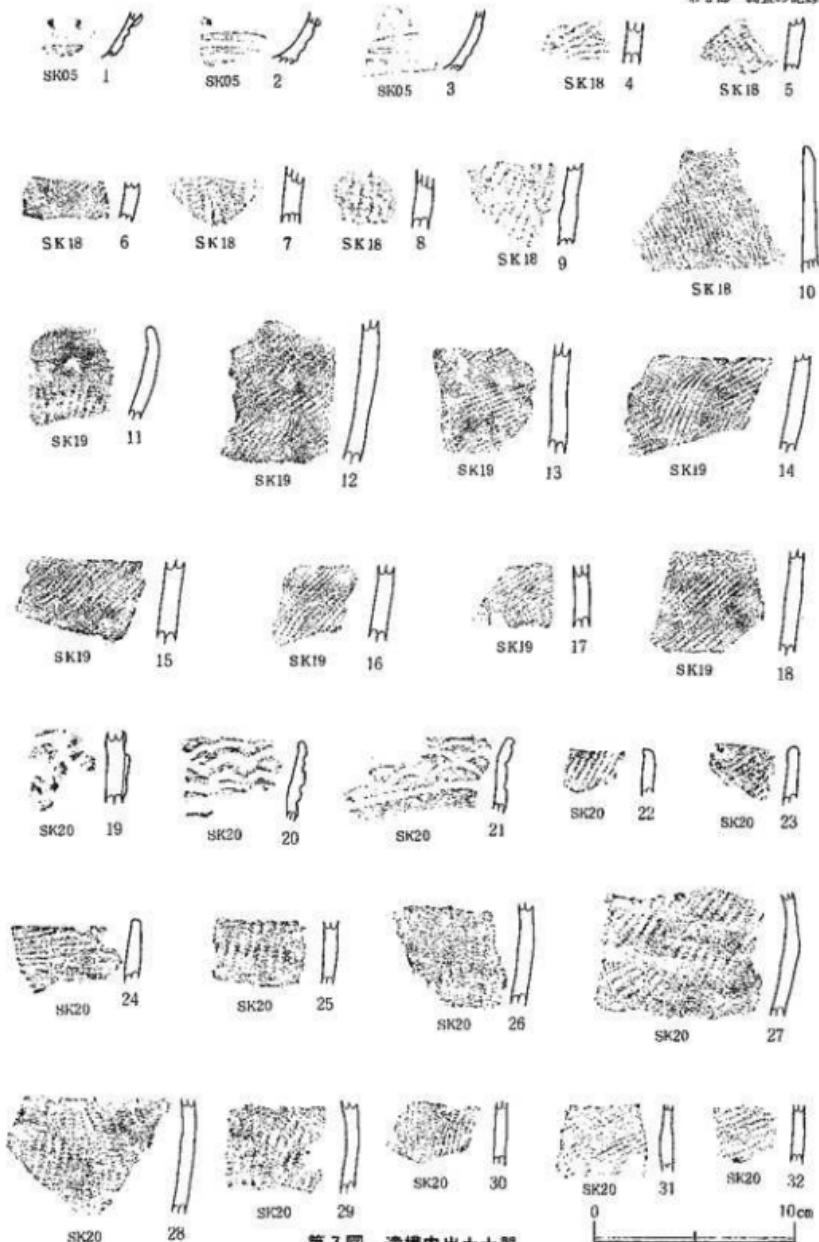
SK15;LM42グリッドで検出した。規模（開口部径） $1.16 \times 0.96 \times$ （深さ） 0.41m を測る。断面形は袋状を呈する。埋土は暗褐色～褐色で、炭化物の細粒が含まれる。

SK16;LL41グリッドで検出した。規模（開口部径） $1.7 \times 1.73 \times$ （底径） $1.78 \times 1.55 \times$ （深さ） 0.6m を測る。断面形は底部でやや括がる台形を呈す。埋土は全体に明るい。僅かな色調の違いで褐色～黄褐色に分けることができる。また炭化物がごく少量化される。遺物は縄文を施された小破片が出土しているにすぎない。

SK17;LD44グリッドで検出した。検出時には中央部でやや赤みがかった土、周辺部で暗褐色の土の円形プランとして確認。規模（開口部径） $1.38 \times 1.25 \times$ （底径） $1.2 \times 1.15 \times$ （深さ） 1 m を測る。西側の壁は張り出した部分が残っている。また、東側の壁の張り出しあは、土層の断面によって確かめることができた。埋土は褐色～黄褐色を呈し炭化物を含む。また土壤の下部に堆積する土には地山土がブロック状に混入している。壕底部北西側から木炭が検出された。

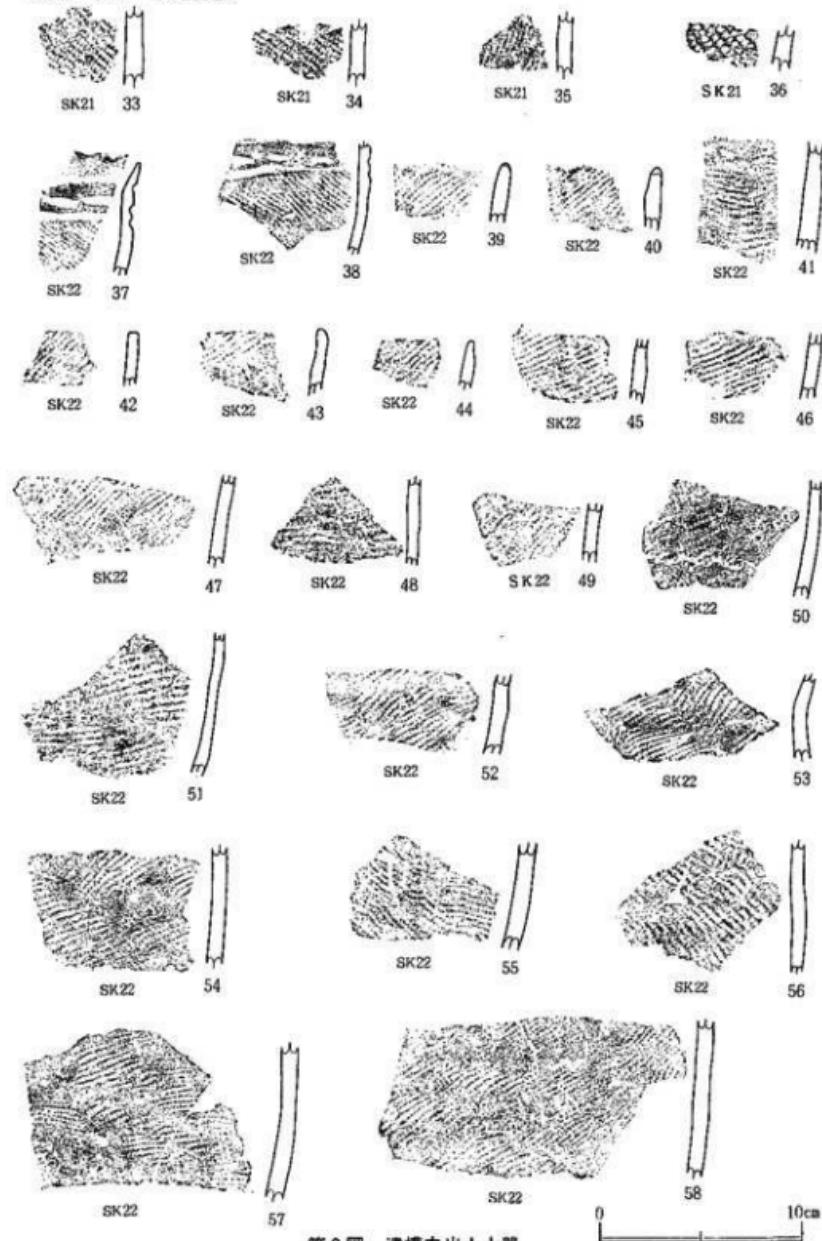
SK18;LC44グリッドで検出した。規模（開口部径） $1.55 \times 1.7 \times$ （底



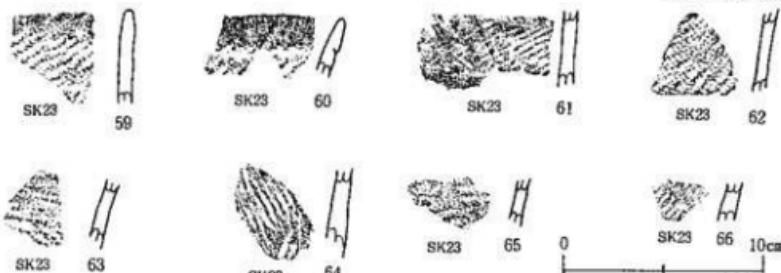


第7図 遺構内出土土器

第2回 第3卷 石板台鉢遺跡



第8図 遺構内出土土器



第9図 遺構内出土土器

径) $1.25 \times 1.25 \times$ (深さ) 1.13m を測る。断面形は逆台形を呈する。埋土は整ったレンズ状堆積をなしている。埋土の色調は黄褐～黒褐色。第7図4～10は壇内埋土中から出土した土器である。4～9は器表面に縄文の施されたもの、10は条痕文の施されたものである。また7～9は同一個体の破片である。縄文の原体は4がRL、他はLR。

SK19;LC45グリッドで検出した。規模(開口部径) $1.48 \times$ (深さ) 1.22m を測る。埋土は壇底近くでは水平に堆積するが、壇中央では垂直に近い堆積状態を見せる。色調は暗褐色～黄褐色。

第7図11～18は土壤確認面から埋土中程までの間で出土した土器である。11は内湾する口縁をもつ鉢形土器の破片。口縁部は磨かれて無文帯となり、体部には縄文が施される。縄文部分は摩滅が著しく原体の判別がむづかしいが、LR原体を左上→右下の方向で回転している。12～18は同一個体の土器である。LR原体の横位回転施文がなされている。

SK20;LC44グリッドで検出した。規模(開口部径) $0.75 \times 0.68 \times$ (深さ) 0.22m を測る。壇底部には木炭を充填しており、それに混じって土器片も多く出土した。

第7図19～32は壇底部に堆積した炭の層に混じって出土した土器である。19は器表面に幅1cm程の粘土縁を貼り付けその粘土縁上にLR原体の側面を押圧していったもの。円筒上唇式に比定できる。20は口縁部に連続する下向きの弦線列を4～5段重ねて施文したもの。21も同様の文様施文がされるが、20と異なり弧線の連結部が交互に配置される。この2片は晩期前葉大洞B式の文様表出の技法を用いたものである。22～32は器面全体に縄文が施されるものである。22・23は同一個体、25～29は同一個体である。使用される原体は全てLRである。

SK21;LC44グリッドで検出した。規模(開口部径) $1.45 \times 1.25 \times$ (底径) $1.6 \times 1.43 \times$ (深さ) 1.16m を測る。断面形は底部でやや拡がる。埋土は暗褐色～明褐色を呈する。炭化物が少量混じる。

第8図33～36は壇内埋土中から出土した土器である。全てLR縄文のみ施されたもの。33・34は同一個体である。

SK22;LB44グリッドで検出した。規模(開口部径) $1.5 \times 1.5 \times$ (底径) $1.5 \times 1.38 \times$ (深さ) 0.8m を測る。壁はほぼ垂直におり。埋土は暗褐色～褐色で、上層には多くの炭化物片と土器

片が含まれる。

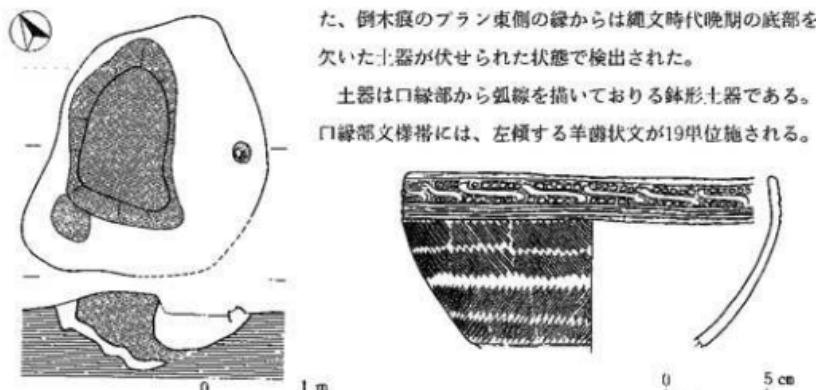
第8図37~58は埋土中から出土した土器である。37・38は同一個体。小波状口縁をなし、文様帶の上限、下限を1条づつの沈線で画す。文様帶内には、短沈線列が施される。体部の繩文はRLの横位回転のものである。39・40・41は同一個体。口唇部に斜めにおいて工具の押圧によって小波状口縁を作出している。口縁以下LR繩文が横位回転、左上一右下の斜位回転施文される。他は総て器面にLR繩文の施文されるものである。42~47、48~50、52~58は各々同一個体である。

SK23;LB44グリッドで検出した。確認プラン上に2個の礫を検出した。規模（開口部径）0.85×0.85×（底径）1.7×1.75×（深さ）1mを測る。断面形は開口部が大きく張り出したフランコ状を呈する。底面から20cm程上部から径15×32cm程の礫が検出された。埋土は黒褐色～褐色を呈する。

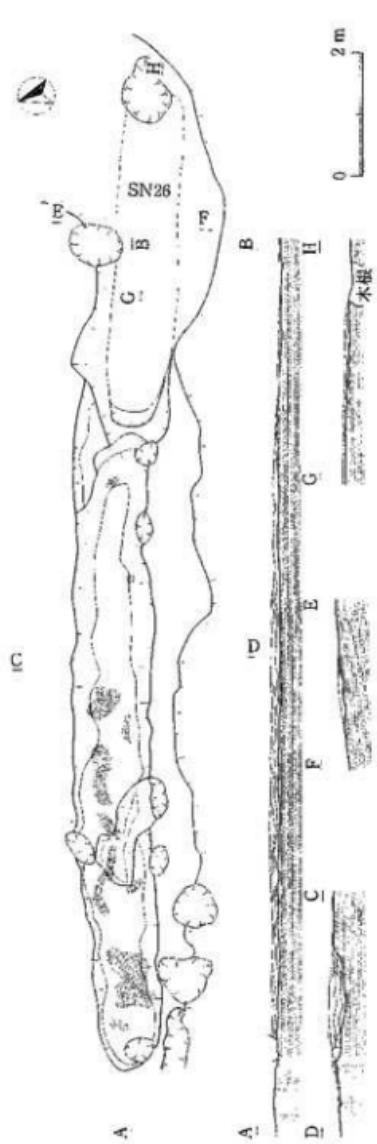
第9図は壇内埋土から出土した土器である。60は折り返し口縁となったもの。他のものを含め器表面にはLR繩文が横位回転施文される。

(2) 倒木痕

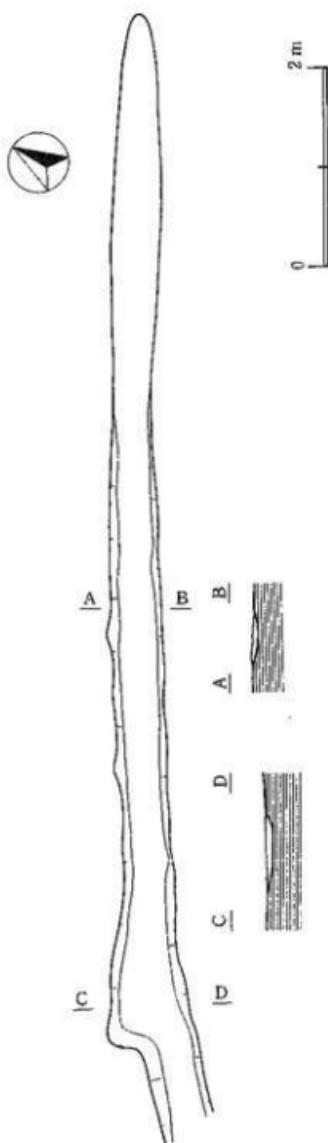
倒木痕はMDラインからMHライン、48ラインから52ラインまでの間に6基、MJ50グリッド1基、MK51グリッド1基の8基が検出された。確認時のプランは長径2.7m、短径2.1mで黒褐色土の輪郭で頗らかにできた。この黒褐色土プランの中央部からやや西側に寄った位置で黄褐色土の所謂ローム・マウンドを確認した。短径方向で断面を観察すると、このローム・マウンドは地山層に連続している。このローム・マウンドの東西両側から入り込む黒褐色土は、西側からのものが中央部までもぐり込み、典型的な倒木痕の断面の在り方を見せている。また、倒木痕のプラン東側の縁からは繩文時代晩期の底部を欠いた土器が伏せられた状態で検出された。



第10図 倒木痕 (S X10) および出土土器



第11図 炭焼窯 (SN 24・25)



第12図 溝 (SD 26)

口縁部文様帯の下限は、2条の平行沈線によって画される。体部は、RL原体とLR原体を用いての羽状繩文が施文される。RL原体、LR原体とも2段づつ施されて、体部中央で羽状をなしている。

(3) 炭焼窯

SN24・25;LN42・LO42・LP43・LQ43グリッドにまたがって検出された。調査区の南側での表土の堆積は薄く、耕作による擾乱、植林による根の擾乱が地山面まで及んでいる。SN24・25とも、表土を除去した後地山面（第IV層）の精査を行った結果中央部に黒褐色土が堆積し、周辺に炭の充填したプランとして確認することができた。

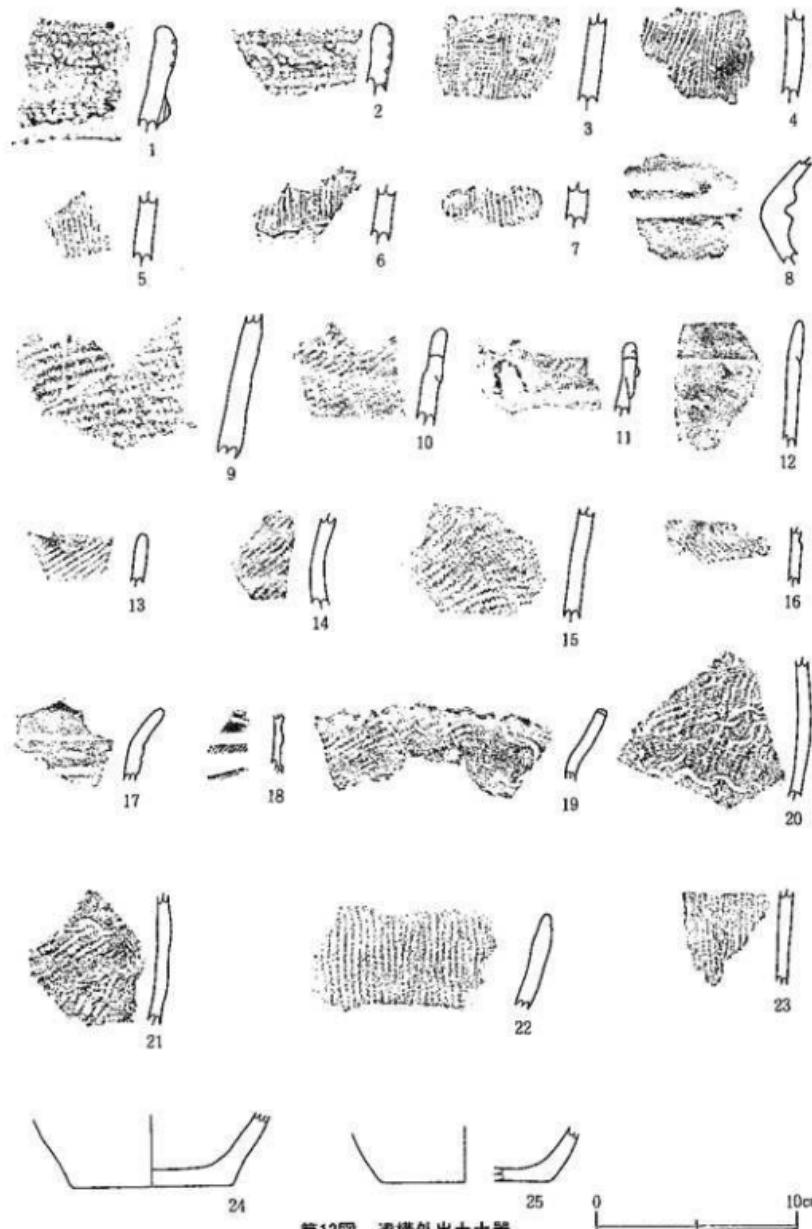
SN24は長さ10.3m、幅1.85m、深さ0.27mを測る。窯体の南側には幅0.4~1m程の土手状の高まりがあり、さらにその南側は幅2m程の平坦面が作られている。埋土は、(1)2~3cm程の炭を多量に含み色調は黒色でもろい層、(2)細かく砕けた炭と地山土の細粒が混じりやや粘性を帯び黒褐色を呈する層、(3)窯体の上にかけられた土と炭の細片が混じる黒色の層の3つで構成されている。3層とも横断面ではレンズ状の堆積層となって観察でき、炭の層は厚さ6~8cmを測る。底面西側2/3程度が高温であったために焼土化している。SN25は長さ5.8m、幅1.3m、深さ0.07mを測る。炭の堆積層は確認できず暗褐色土に炭化物の混入した層が埋土となっている。底面には焼土化した箇所は観察されなかった。SN24の窯体南側の土手状の高まりは、SN25の南側まで続いている。

SN24・25は台地のゆるい傾斜面を利用して作られた炭焼窯である。検出の状況からSN25はSN24の構築・使用以前に作られ、SN24の構築・使用時には既に片づけられてSN24の作業用の空間として利用されていたことが推測できる。すなわちSN25よりもSN24が新しいのであるが、同軸線上に構築されていること、また、この種の窯の使用は本来1回限りのもので、継続して用いられたものではないことを考えると、SN24・SN25はほぼ同一地点での2回の作業結果を示すものである。また、両方の窯ともこの南側の傾斜面が、幅2m程で削平されて平坦面となっている。これは原材である伐採後のナラ・ブナ等の薪を積み上げておくような作業空間として窯体の構築時に先られたものと推測できる。

(4) 溝

SD26;MC47・MD46・ME46・MF46で検出した。幅約25cm、深さ4~6cm、調査区内で確認できた長さは、11.3mである。溝底は水の流れた痕跡が明瞭で、平滑な面に径3~5mmの砂礫が散らばっている。埋土は黒褐色を呈し、溝底面から剥ぎ取ることができる。

調査区外では、溝が南側の斜面まで続いており、60mの等高線付近では、深さ約60cmにまで



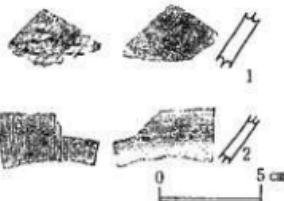
第13図 遺構外出土土器

掘られて斜面下までのびる。遺跡の付近は、昭和20年代まで陸稲の栽培が行なわれた箇所であり、この溝は、その耕作に関係して掘られたものと思われる。

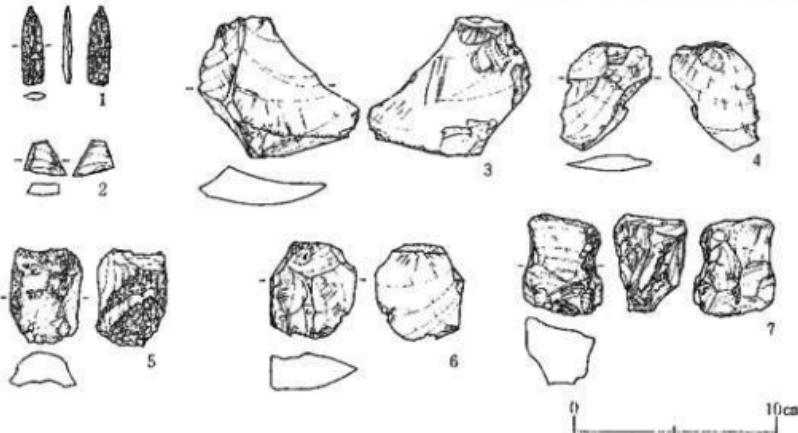
2 その他の遺物

(1) 純文時代の土器

第13図1～7は同一個体である。残存する破片によれば口縁部以下垂直に於ける円筒形の土器である。口縁部には縄文原体の先端による3～4の刺突列と撚糸文原体の側面圧痕が施される。頸部には粘土紐が貼付されて水平にめぐるが口縁部の文様帶内でも何箇所か粘土紐を垂下させている。隆帯上にも撚糸文原体の圧痕列が並ぶ。体部にはRの撚糸文による文様が施される。胎土には少量の砂粒が含まれる。また、植物の纖維も僅かであるが混入されている。8は、大きく屈には粘土紐が貼付されて水平にめぐるが口縁部の文様帶内でも何箇所か、粘土紐を垂下させている。隆帯上にも絡糸体の圧痕列が並ぶ。体部にはRの撚糸文による文様が施される。胎土には少量の砂粒が含まれる。また、植物の纖維も僅かであるが混入されている。8は、大きく屈曲する頸部の破片である。屈曲部には2本の隆帯がめぐる。隆帯間は先の鋭い工具によって抉りとられている。胎土には1～7同様少量の砂粒と纖維を含む。9は、摩滅が著しいがRL撚文の縱回転されたものである。原体先端が折り曲げられているため、ループ文に似た圧痕が表出される。胎土には同様纖維が混入される。以上は縄文時代前期の土器であり、1～7は円筒下層d式に比定し得る。他もそれに近接した時期のものであろう。



第13図 遺構外出土土器(陶器)



第14図 遺構外出土土器(陶器)

口縁部に突起が作出される。11では突起間に粘土紐がU字状にわたされ、その下に逆U字状粘土紐が貼付される。器面に施される繩文はLR縦回転のものである。13~15は繩文のみ施された破片。13ではLの繩文が縦回転施文されている。14・15はLR繩文の横位回転施文である。以上は後期の土器であるが、そのうちでも10~12は後期初頭に位置付けられる。

17は波状口縁をもつ土器である。口縁の下に2条の沈線がひかれ、その沈線間に短沈線列がひかれる。18は繩文部分が浮彫りにされたもの。使用される原体は細密なLR繩文である。19~21は同一個体の破片である。口縁部がやや外反し、頸部で屈曲する壺形に近い器形をとると思われる。口縁上端は連続した圧痕が施されて小波状を呈している。口縁部から底部にかけてLR繩文が横位回転施文されているが結節部の綾格文も同時に施文されている。22はRL繩文を左上→右下の方向で回転し、縱走する繩文として表出させたもの。23は縦位に貝殻条痕文の施文されたものである。以上は繩文時代晩期の土器であるが、23については晩期以外の時期にも作出する例があるので他の時期の可能性もある。24・25は、底部の破片であるが24は体部にLR繩文が横位に回転施文されている。

(2) 陶器

第14図1は内面にアテ具痕の残るものである。2は内面に間隔3.5mm程で条線による卸し目をひいた擂鉢である。卸し目の単位は5本を1組としている。

(3) 石器

第15図1の石鐵は両面とも丹念な剥離が施されている。石材は頁岩を用いている。素材となつた剥片の主要剥離面が図の左側に、他の面が右側に対応する。従って、図の左側においていた面が平らであるのに対し、右側では中軸に稜をつくる。断面形は偏平ではあるが、カマボコ形に近い。2~6は頁岩の剥片であるが、3では打面の反対側にできた部分に刃こぼれが認められる。7も同じく頁岩製の石核である。横断面は三角形をみせる。一方に自然面が残る。自然面からの加撃の痕跡はなく、剥片の剥き取りにあたっては自然面の反対側にできた剥離面を最も多く打面として用いている。

第3節 まとめ

本遺跡において堅穴住居跡は1軒も検出されず、土壤のみが22基検出された。いずれにも平面プランは円形もしくは梢円形であるが、断面形で大きく3形態に分類できる。一般にプラスコ状あるいは袋状土壤と呼ばれているが、上狭下広のものはSK05・06等11基検出され、全体

の半分を占めている。その他、円筒状のものが3基、深さが50cmに満たないものが8基という検出状況である。自然の営力や使用による壁土の崩落を考えると、円筒状のものも構築当時はフランコ状を呈していたとも考えられる。

フランコ状土壙については個々の事例から貯蔵穴・土壙墓・陥し穴・粘土探掘坑・ねぐら等多くの用途が考えられている。フランコ状土壙の持つ性格の違いから一つの用途に限定して考えることはできないと言えよう。また、遺物をあまり出土しないというのも、この遺構の特徴の一つである。

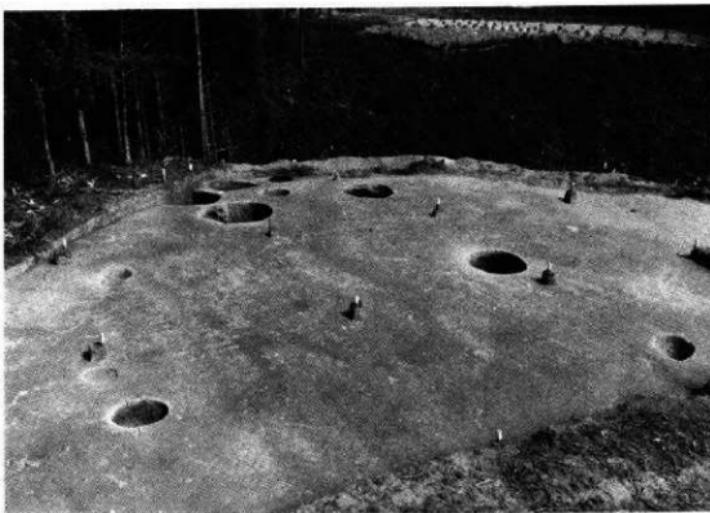
本遺跡の土壙が構築・使用された時期は遺跡全体の出土遺物から判断して、縄文時代後期・晩期と推定することができる。5基の土壙から土器片が出土したが、いずれも覆土からの出土であり土壙の使用時期並びに用途を断定させるものとはならなかった。埋土の堆積を見てみるとSK09を除いていずれも自然堆積の様相を呈しており、これらの土壙が廃棄後放置されていたことがうかがえ、少なくとも土壙墓としての使用はかんがえられないところである。SK09は廃棄後しばらくは放置されていたが、ある時期に黄褐色砂によって埋められたと思われる堆積状態を示している。埋土及び壙底部より炭化物（クリ）・木炭等が出土している点を考慮すると、本遺跡の土壙は貯蔵穴であったとする見方が有力になってくる。

次に土壙の配置状態を見てみると、土壙は台地縁辺部もしくは少し台地中央に入り込んだ所に構築されている。しかも、これらの土壙は5箇所に集中域を形成している。特にSK17~23は調査区東端の台地縁辺部に群在している。各集中域内における土壙の先後関係ははっきりしないが、それらが同時に存在していたとも考えられる。一般に、台地上に形成された集落において、フランコ状土壙は台地縁辺部に偏在するという特徴を有しているが、住居跡を検出していない本遺跡を集落の一部として捉えることができるかは疑問が生じるところである。住居跡を調査区外に求めたとしても、生活用具としての石器の出土数が少ない点を加味するとやはり、集落の一部としてのフランコ状土壙とは考え難い。

集落外におけるフランコ状土壙について考えてみた時、狩獵・採集場における仮の貯蔵穴としての用途を考えられはしないか。貯蔵の対象となったものは、ドングリ・クリ等の堅果類であったと考えられ、その採集時期は秋に限定することができる。冬期間の食料となるものであるから、かなり膨大な量の堅果類が採集されていたと推測できる。秋田市下堤遺跡・能代市館下I遺跡・山本町古館堤頭遺跡においてフランコ状土壙の中の温度・湿度が計測され、外気に関係なく土壙内は常に一定の温度・湿度を保っており、植物性物質の貯蔵には適した条件であった。この温度・湿度の一定性から察するに、膨大な量の堅果類を集落に一時に運び込むことをせず、採集地に仮の貯蔵穴を構築し、短期間ではあるが、そこに貯蔵していたことをうかがうことができよう。本遺跡より検出されたフランコ状土壙もその性格を持っていると言える。



調査前全景（南東▶北西）



調査後全景（東端調査区；西▶東）



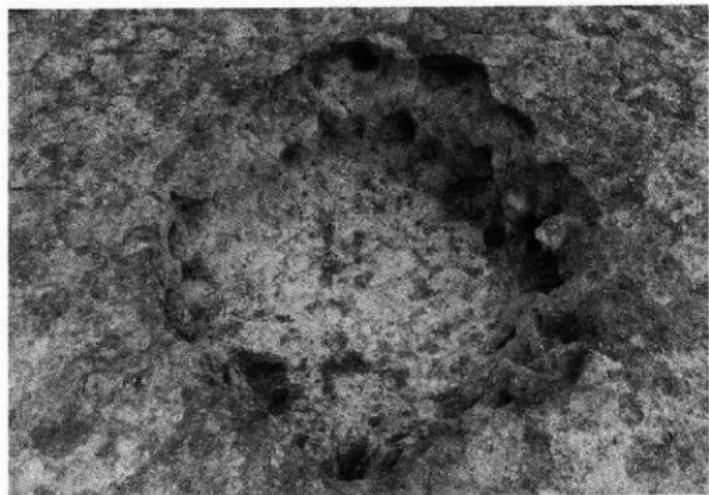
調査後全景（農道南側調査区；北▶南）



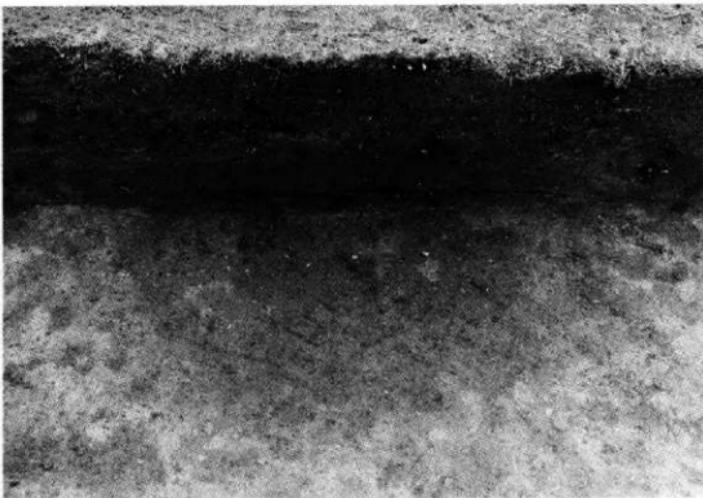
調査後全景（農道南側調査区；北東▶南西）



SK04～SK07 土壙検出状況



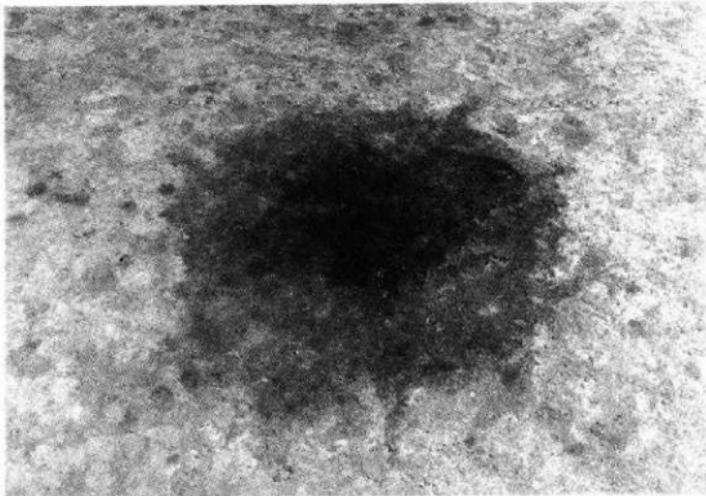
SK04 土壙



SK05 土壤檢出狀況



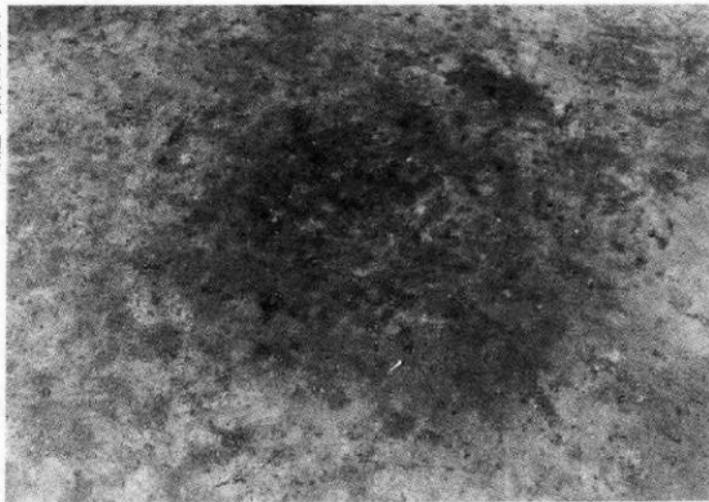
SK05 土壤斷面



SK07 土壤検出状況



SK07 土壌断面



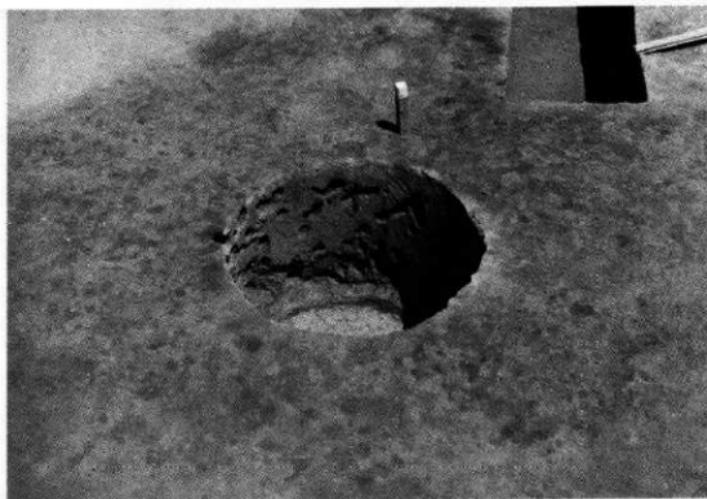
SK09 土壤檢出狀況



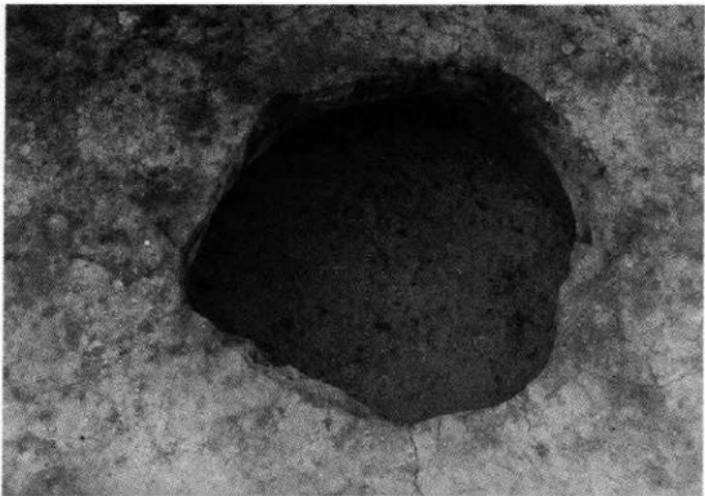
SK09 土壤斷面



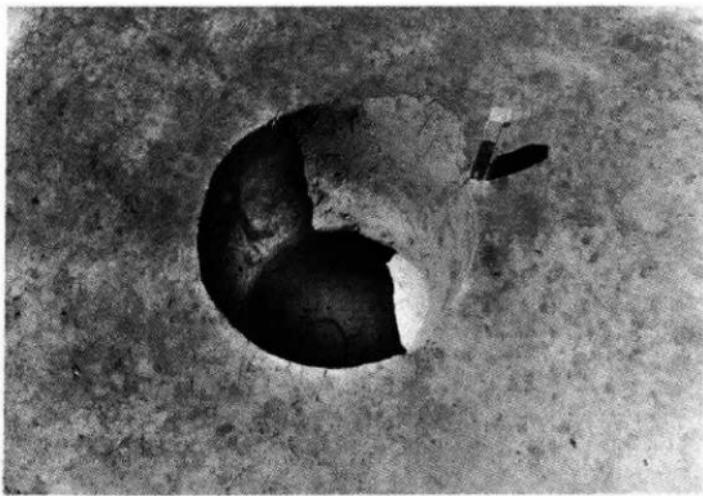
SK06 土壤断面



SK11 土壤



SK12 土壙



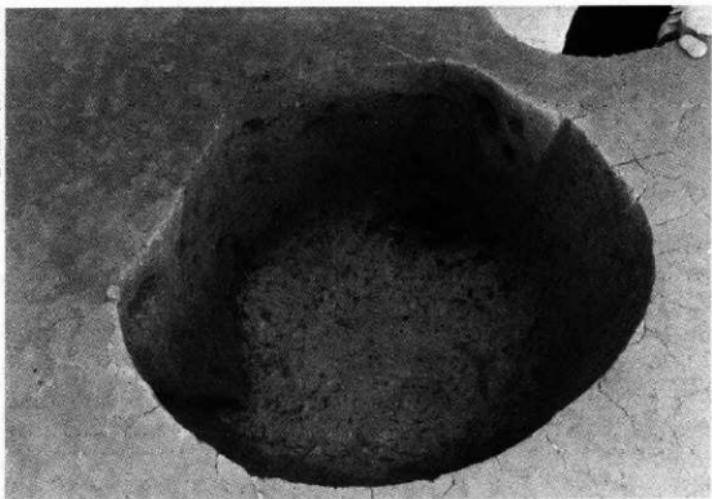
SK14 土壙



SK15 土壙



SK17 土壙



SK18 土壙



SK19 土壙



SK20 土壌



SK21 土壌



SK22 土壙



SK23 土壙



SX10 倒木痕断面



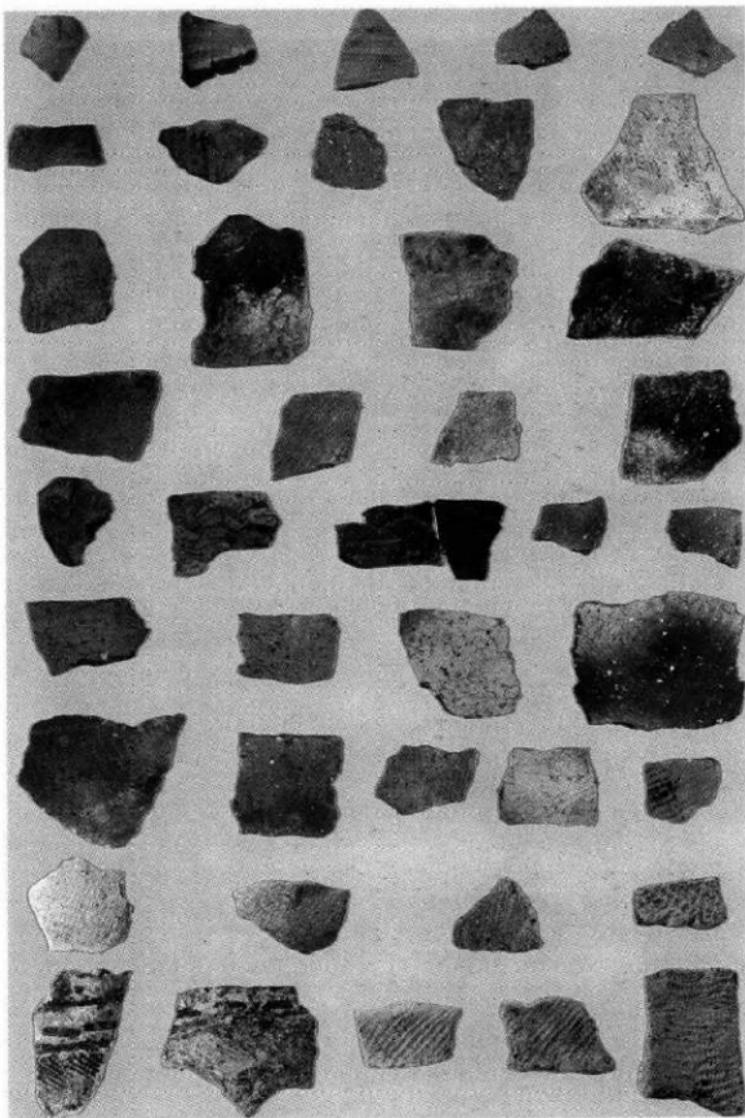
SX10 倒木痕土器出土状況



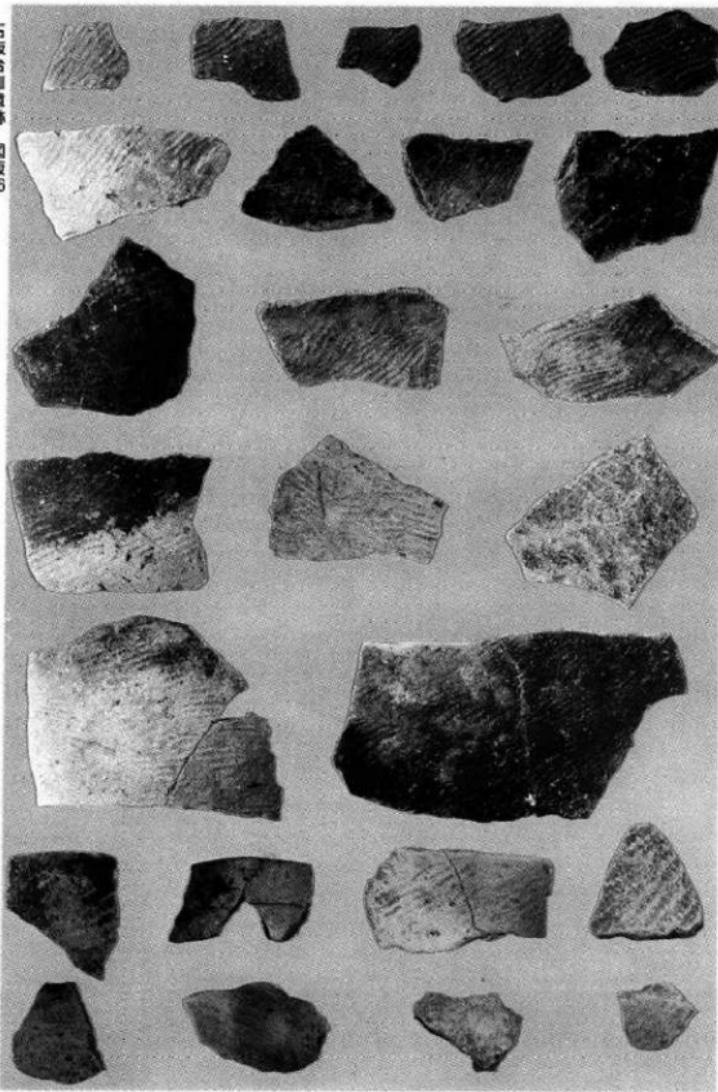
SN24 炭焼窯検出状況



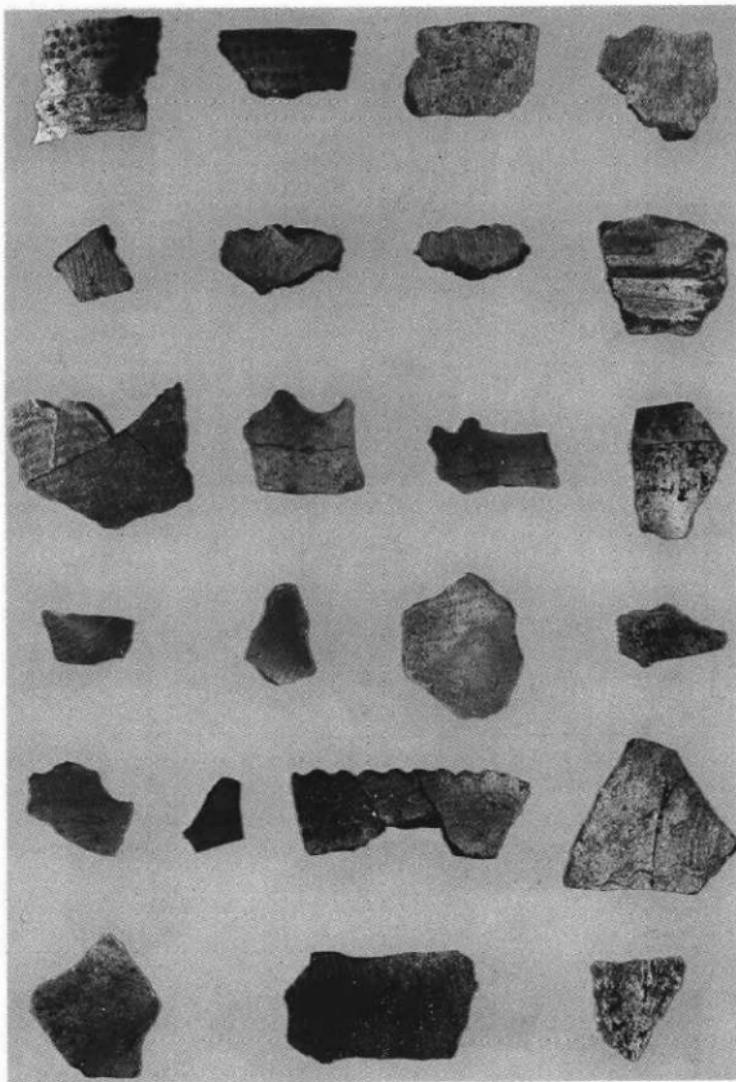
SN24 炭焼窯断面



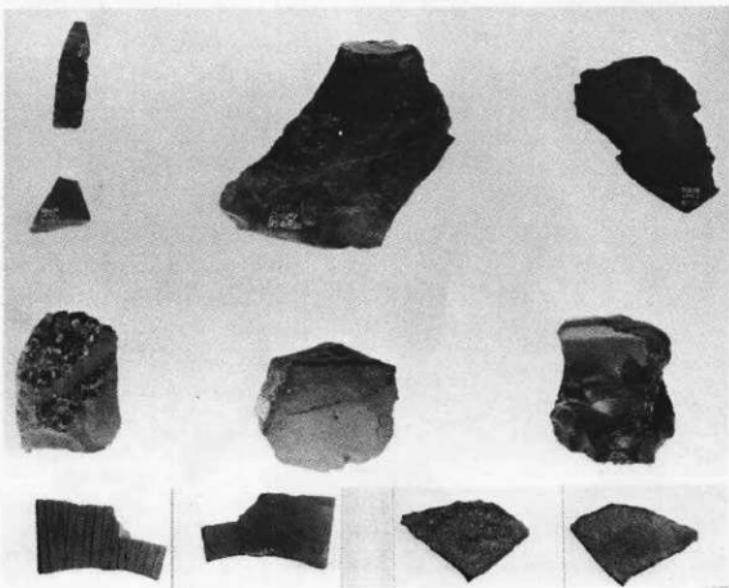
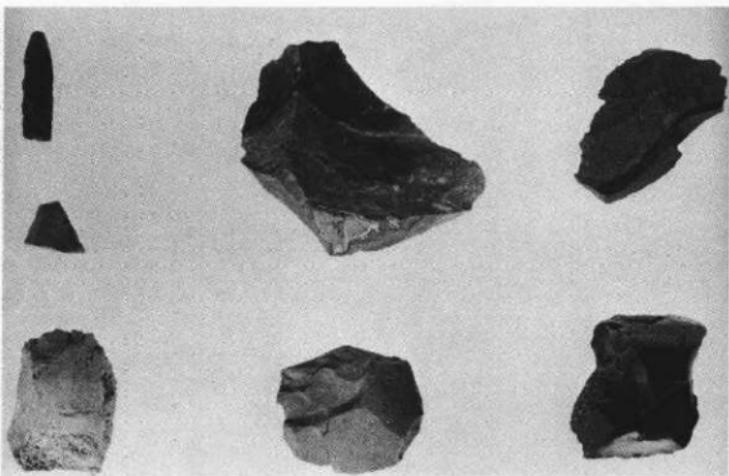
遺構内出土土器



遺構内出土土器



遺構外出土土器

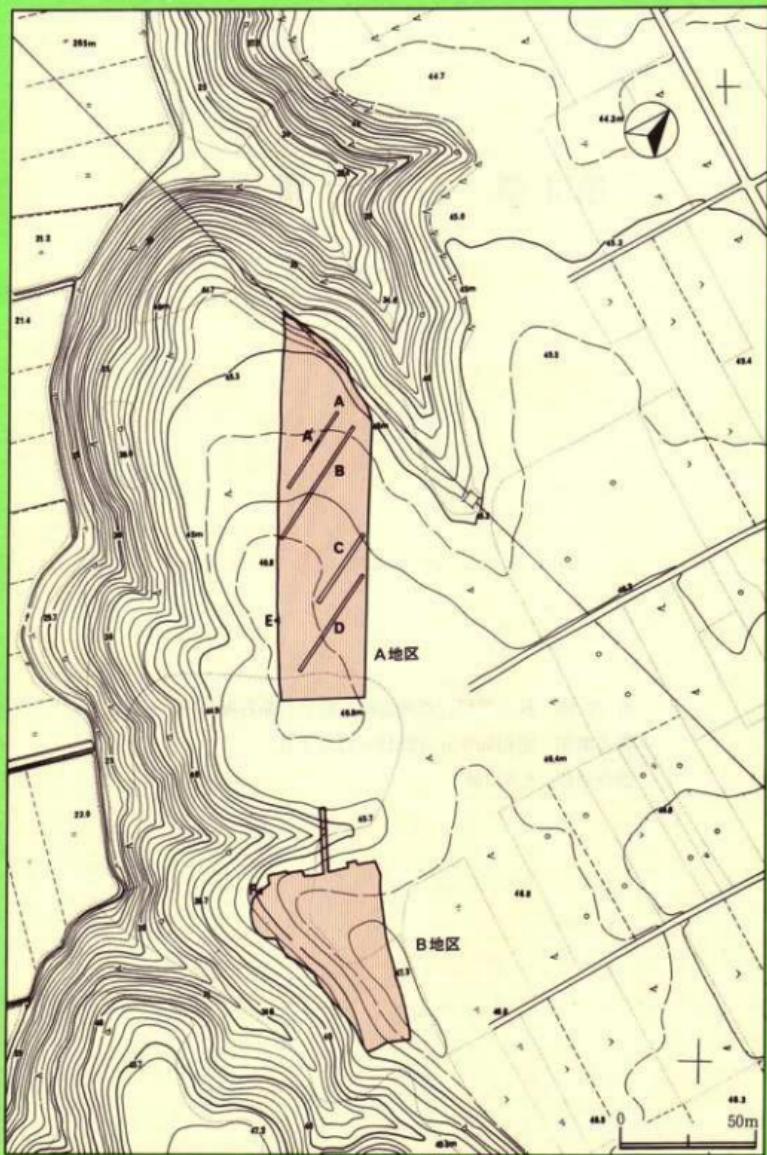


造構外出土遺物（石器・陶器）

第4章 石坂台Ⅷ遺跡

(5IZDⅧ・No.35)

所 在 地 秋田県河辺郡河辺町戸島字七曲石坂台168-3他
調査期間 昭和60年 6月25日～11月1日
調査面積 6,520m²



第1図 遺跡周辺の地形と調査区

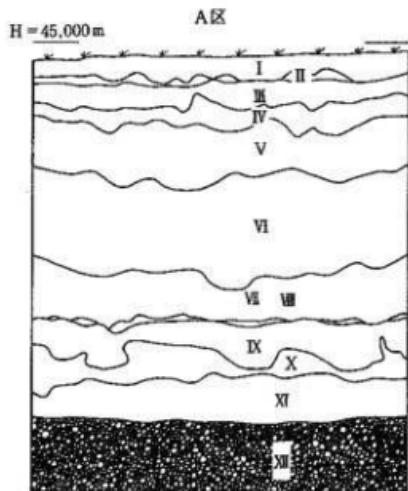
第1節 調査の概要

1 遺跡の概観

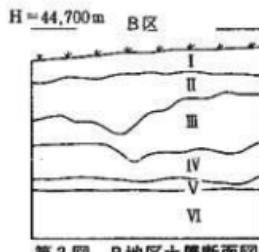
通称“七曲台”は、岩見川左岸に形成された三面の河岸段丘から成っている。それは北西側から順に七曲台面、上野台面、椿台面と呼ばれ、石坂台Ⅷ遺跡は上野台面左端に位置する。遺跡の南西側は白熊沢が入り込み比高差約23mの急峻な崖となっており、北西側と南東側も断面V字形の深い沢によって開析されている。このため遺跡全体の形状は、上野台面から南西に張り出した幅230m、長さ100mの舌状を呈し、その南東側には、南東方向から短小な沢が入り、遺跡を東西に2分している。(このため、西側部分をA地区、東側をB地区とした。)標高は45m~46mでA地区やや東寄りが最も高い。東北横断自動車道秋田線は、舌状台地の中央部を横切るように、南東から北東に幅約35mで走る。

遺跡北西側の沢をはさんで対岸には、縄文時代中期後葉の堅穴住居跡や縄文時代の土壌が検出された石坂台IX遺跡、北側には縄文時代後期末~晩期の土壌群が検出された石坂台Ⅸ遺跡(昭和59年度発掘調査)がある。

発掘調査前遺跡上面は、植林された杉と、クリ、ミズナラを中心とする雑木林で、土層上部はB地区の一部を除いて黒ボク土が比較的厚く堆積していた。第2図はA地区中央部の土層断面

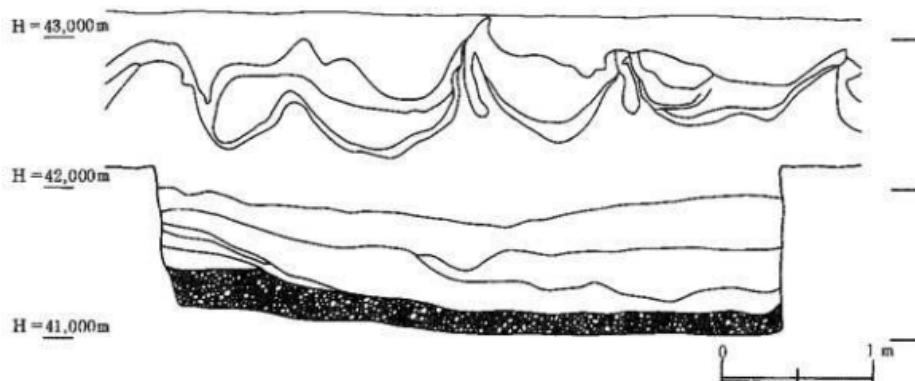


第2図 A地区土層断面図



第3図 B地区土層断面図





第4図 Aトレンチ土層断面図（ブリケーション）

図（第1図E）で、A地区全体の基本的な層序を示す。第Ⅰ層は暗褐色表土。第Ⅱ層は検出されない箇所もあり全体に分布するものではないが、赤味を帯びた暗褐色土である。第Ⅲ層は黒褐色のいわゆる黒ボクで、この上部に縄文時代の遺物を含む。第Ⅳ層は漸移層で、遺構の大部分のものはこの面でその存在の推定が可能であるが、プランの確認は第V層上面でしか行い得なかった。第V層は褐色の粘質土で後述するブリケーションはこの層の中位で平面的に把え得る。第VI層は明褐色粘質土で、第V層よりもくすんだ色に見え、粒子も細かく、締まりもよい。第XII層は黄褐色～明褐色を呈する粘質土であるが、全体としては第VI層などよりも粘性が少なく、砂粒も若干混じる。第VII層は砂に2～5mmの小礫を含む層で、ほぼ水平に連なっている。第IX層は基本的には第VII層に似ているが、黄白色粘土を少し含む。この第VII層は層厚が10～30cmであるが、全体に強く波打っており、この層のほぼ中位ぐらいで、水平にすると下の第X層浅黄色粘土が部分的に見えはじめ、平面的には浅黄色粘土が第IX層の明褐色土を取り囲んで1個の径が40～60cmの亀甲状のきれいな模様を描く（図版3）。これはいわゆる環状土といわれる構造土の一種であると見られている。第X層は浅黄色の粘土で、その上部ほど強く波打っている。第VI層はにぶい黄灰色粘土で、その間に厚さ1cm前後の砂と小礫の層が横縞状に数条入る。第XII層は段丘砂礫層で、その上位はくされ縞様のものもみえる。

第3図はB地区の土壤集中域西端の土壌図である。（第1図F）この部分にはいわゆる黒ボクではなく第I層は赤味の強い暗褐色を呈し、A地区的第I・III層に対応する。第II層は赤味の強い褐色土で、地山土と思われたが、遺物が土にこの上部から出土し、A地区的第III層下部から第IV層に対応するものと考えられる。第III層は褐色土で、粘性は少ない。第IV層は黄褐色砂質粘土で、締まりがよく硬い。第V層と第VI層がA地区的第VI層に対応すると考えられる。第V

層は明黄褐色の砂質粘土で、A地区の第VI層に対応できる。なお、この部分においては段丘疊層までは掘らなかった。

A地区においては縄文時代までの遺構の調査後、第V層以下に旧石器時代の遺物が含まれているか否かを確認するため、南北に計4本のトレンチ（第1図A・B・C・D）を入れたところ、この中のAトレンチ（第1図A'）において、第4図に示したような土層のうねりが観察された。この土層のうねりの単位は幅0.5～1.5m、深さ0.3～0.8mのもので、平面的には椿円形や円形の土壙状を呈する。また、その断面形は、袋状あるいは鍋底状のものから波頭状を呈するものまであり、インポリューションの中のブリケーションと呼ばれるものに似ている。なお、このような土層のうねりは、A地区全面に明確な形で見られるわけではなく、4本のトレンチのうち、Aトレンチの中央部において特に顕著に見られた（図版4）。

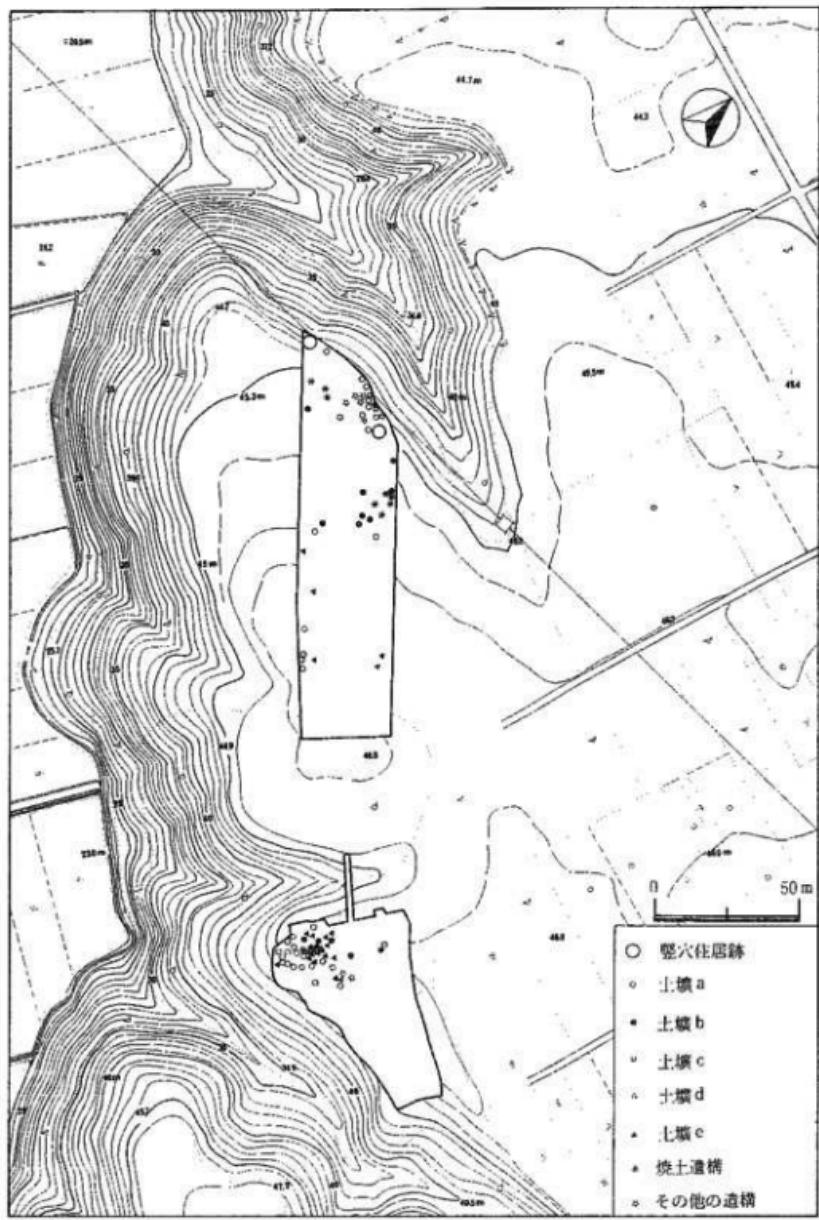
検出された遺構は、縄文時代堅穴住居跡・土壙・焼土・遺構などである。これらは第5図に示す如く、調査区内に平均的にあるのではなく、それぞれの地区で集中する部分と散漫な部分がある。A地区は、南東一北西約200m、北東一南西約80mの南西に張り出す舌状台地の中央部を南東一北西方向に長さ約130m、幅約33mにわたりて発掘調査したところ、縄文時代中期末、後期初頭の堅穴住居跡や土壙などが、台地縁辺から0～30mの帶状の範囲にそれらの大部分が存在することがわかる。さらにこれらは、その集中の状況、遺構の種類、伴出遺物や周辺の出土遺物などによってさらにいくつかのまとまりとして把握することも可能である。B地区では、南北約60m、東西約40mの略三角形を呈する台地の西側先端部約500m²の部分に縄文時代晩期の土壙群などが集中している。

出土した遺物は縄文時代前期末～弥生時代末までの土器、石器などであるが、その分布も遺構群の分布状況に似て比較的集中する部分とそうでないところがある。A・B両地区とも遺構群が集中する部分には遺物も比較的多く、その他は少ない。また、出土土器について見ると、大部分粗製土器で復原も困難なほどに磨滅しているものが多いが、1片の破片が単独でボツボツと出ることよりも、完形に近いものや、口頭部や体部、底部などがまとまって出土することが多かった。

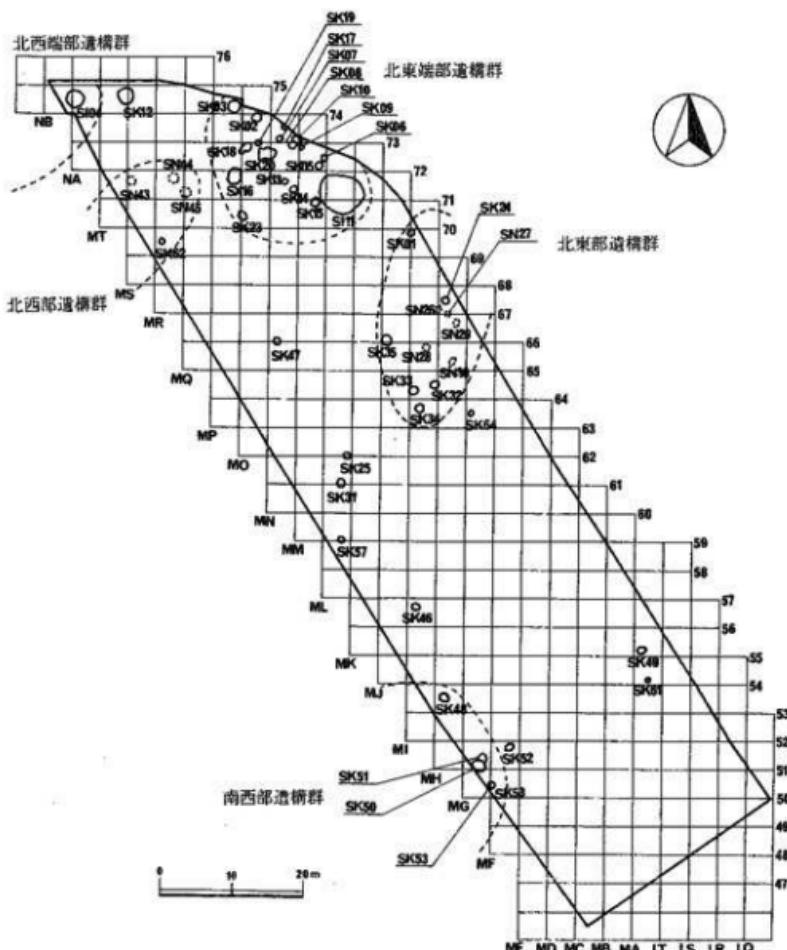
2 調査の経過

昭和59年秋に行った分布調査の結果、現地表面下約20cmの部分までは、遺物がほとんど含まれておらず遺構の確認もその下位でないと不可能であることがわかついたため、発掘調査予定地は、まず、重機によって約20cm粗掘りし、その後人力によって掘り下げ、遺構・遺物の検出を行った。

6月25日、ベルトコンベアーアと土砂運搬車を使用して調査を開始した。7月3日までに調査



第5図 遺構配置図



第6図 A地区遺構及びグリッド配置図

区端から71~70ラインまでの第IV層を掘り下げ、第V層上面でSK01・02・03・SI04をさらに西端部分でSK05~10・SK12~15・SX11などを確認した。SI04ではその埋土中に绳文時代中期末葉の大木J0式土器が包含されていることを知り、SX11は、明確なプランは把え難く、掘り込みもないように見えるものの、中央部の焼土や、その周囲の状況などから住居跡の可能性があると考えられた。7月上旬から梅雨あけの7月下旬までは雨の日が多く、調査にも支障を

きたす程であった。7月12日、前日からの雨のため調査区西端部で、夜のうちに幅8mにわたって斜面全体が地滑りを起こしていたことに気付く(図版4)。以前からこの台地の北端部第V層上面では、台地縁に沿う形で明確な土色の違いが見られ、これがどのような意味を持つのか気になっていたが、このような地滑りに関係するものであることがわかった。また、地滑りの痕の断面には、平面的には確認されていなかった小さな土壌(SK17)が半截された形で現れていた。このことからすると、本遺跡でのSI04堅穴住居跡や、SK02・03土壌などが位置する場所というのは、構築された時から台地縁の肩部といっていいほどの地点にあったものではなく、浸食が進むにつれて、台地縁辺が地滑りを起こし、結果的に、現在の位置になったということも十分に考えられるところである。

7月17日、SK12土壌の精査を行ったところ、この土壌は浅いビーカー状の土壌の壙底からその下に連続してフラスコ状の土壌が掘り込まれた二重構造のものであることが判明した。7月26~30日までにMG66~MH64グリッド周辺に5つの土壌と焼土遺構を検出。土壌埋土中及び周囲の出土土器から縄文晩期の遺構群であると判断された。

8月に入り暑さも本番を迎えたが、調査の方は台地中央部に移り、遺物・遺構とも多くは検出されなくなった。8月26日、MF51グリッドを中心にして数基の土壌(SK50・51など)が検出された。同28日、SK50・51を半截したところ、SK50においては、その埋土の堆積状況が模式的であるため、これを真横から観察し、写真撮影するため、その北西側部分を深く掘り下げることとする。

9月3日、A地区の調査は、一部の遺構の精査、実測等を残しほぼ終了したため、同4日よりB地区の調査にはいる。B地区は、太くて抜根できなかった切り株が多く、9月17日までに20数基の土壌を確認した。これらの土壌の中には、埋土上部中央に地山土の入るもののが散見され、同18日から精査を開始する。9月20日より、A地区に4条のトレントを入れ、第V層以下の遺物の有無の確認を行った。その結果、Aトレントでブリケーションを良好な形で確認できた。

9月に入ってからは雨の日が続き、作業も計画通りに進まない。また、台地先端部の土壌の集中は予想をはるかに上回る数(43基)で、しかも大きいもの多かった。10月8日までにB地区も実測、写真及び一部の遺構の精査を残すだけとなつたため作業員の半数以上を松木台Ⅲ遺跡の調査に回し、A地区的補足調査等も併せて行って、石坂台Ⅲ遺跡の全ての調査を終了したのは11月1日であった。

第2節 調査の記録

前述したように石坂台Ⅲ遺跡は、遺跡全体としては幅300m、長さ100mの舌状の台地である

が、この間に小さな沢が台地を東西に分けるように入っており、西側部分をA地区、東側部分をB地区とした。このため以下の記述もA・B地区に分けて行う。

1 A地区の検出遺構と遺物

A地区で検出された遺構の総数は47で、その内訳は縄文時代の堅穴住居跡2軒、土壙33基、焼土遺構8基、その他、縄文時代以外の時期の遺構4基である。これら遺構の確認は、大部分のものが第IV層上面で行われたが明確なプランは第V層上面まで下がないと無理であった。しかしながら、SI04堅穴住居跡やSK01土壙は、土層の観察から、第III層上部から掘り込まれていることが認められたので出土遺物のレベルなども併せ考えると、本遺跡の縄文時代の生活面は第III層上部にあったとすることができる。

(1) 堅穴住居跡

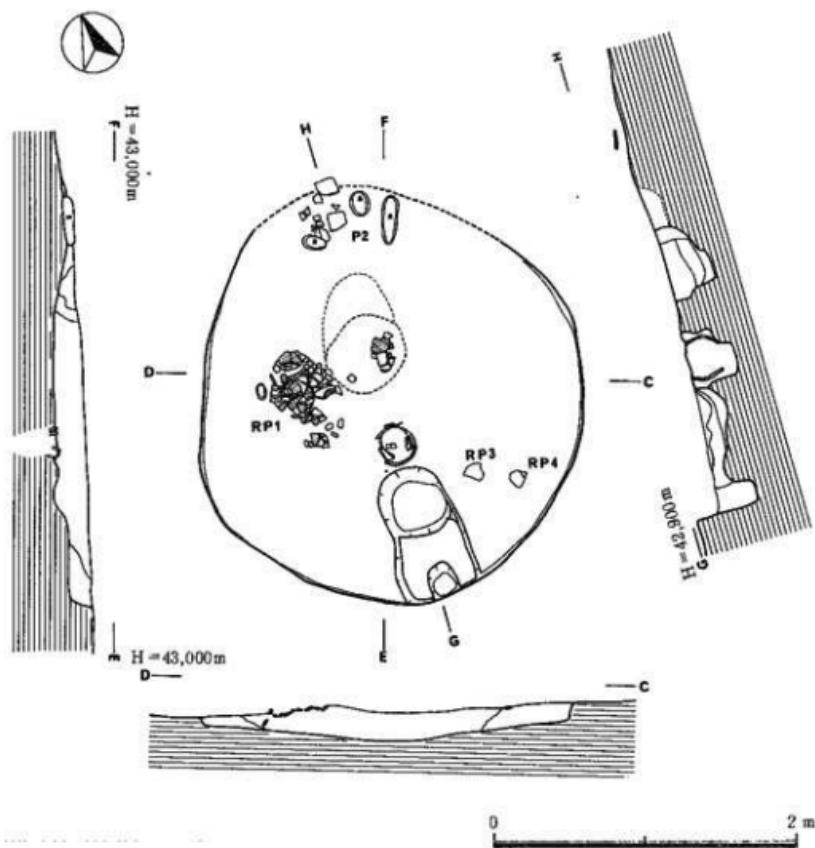
縄文時代の堅穴住居跡は、調査区西端部で2軒検出されたが、このうちSI11は、壁が検出されず本当に堅穴になっていたか否か不明である。

SI04堅穴住居跡（第7・8・9・10図、図版5・6・23・24・25）

調査区北西隅第IV層下部で検出された堅穴住居跡である。住居跡の北側は、あと1m足らずで急斜度の崖となっており、台地縁から段丘崖にかけての肩部に構築されている。このため、確認面のレベルは住居跡南端と北端では約0.2mの差があり、北側では壁を検出できなかった。平面形は南北2.8m、東西2.5mの略円形を呈する。床面は中央部分ほどやや凹む傾向にあるが、ほぼ平坦で締まっており、特に中央より南側で堅い。壁は垂直に立ち上がり南側では0.2mほどの高さがあるが、北側に行くにつれその高さを減じ、北側では認めることができなかった。柱穴及びそれに隣する小ピットは、南端掘り込み中に性格不明のものが1個あるだけでこの他は全く検出できなかった。壁溝はない。

炉は石圓いあるいは石組み部を持たないものの、複式炉として把え得るものである。床面中央やや南寄りに第8図1の深鉢形土器を埋めた土器埋設部分があり、それに連なってその南側に長径0.9m、短径0.5mの逆U字形の掘り込み部がある。第8図1の深鉢形土器の中に同図2の小型深鉢形土器が入子状に入っていた。逆U字形の掘り込み部は土器埋設側で深くなっている。その内面がよく焼けている。なおこの部分で、石の抜き取り痕跡は認められなかった。

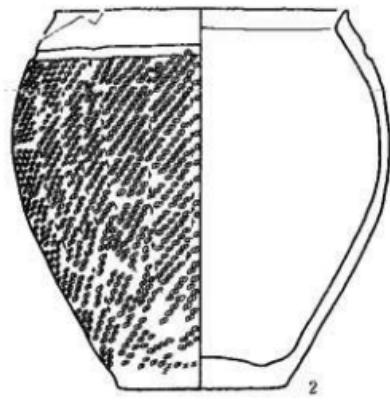
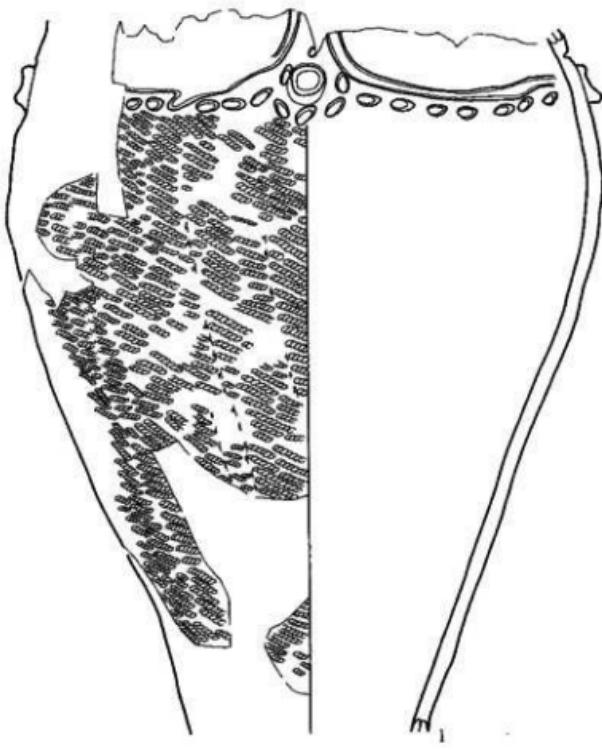
かの反対側、北端部には丸味を持つ河原石が2個と細長い河原石が1個、土器片とともに床面に接するようにしてあり、特に細長いそれは壁に直交する形になっている。また、床面中央やや北側には（図中の点線内の部分）床面精査時から焼土粒がわずかに認められ、どのような意味を持つのか不明であったが、これが床面截ち割りの際小さな土塊の掘り込みであることが判明した。そしてこの掘り込み床面から出土した土器片がゆに使用された外側の土器に接合



第7図 S104堅穴住居跡

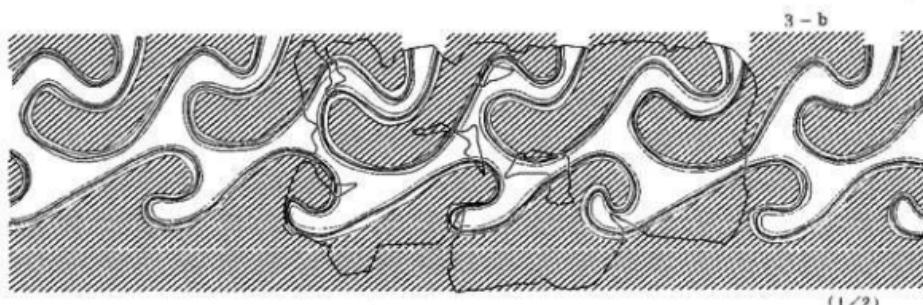
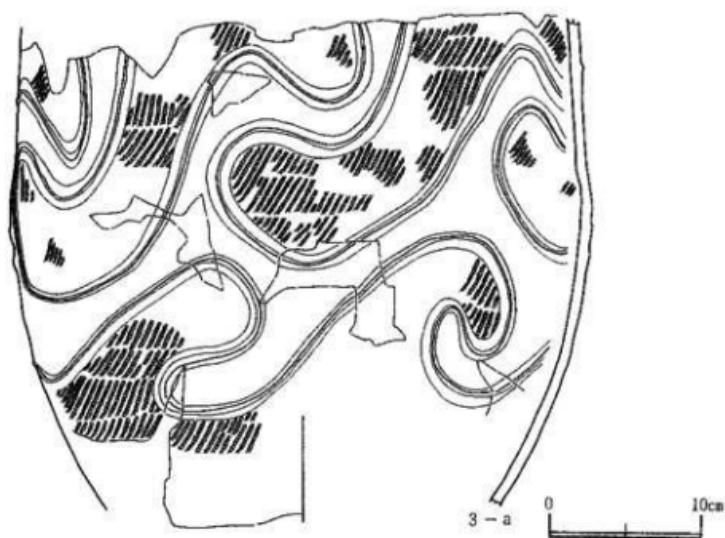
する。このように、炉に使用された土器の一部が、どのような経緯のもとに埋められるに至ったのかは明らかにすることことができなかったが、興味ある事実である。なお、この土壤様の掘り込み部分が古い炉の一部ではないかとの疑いもあったが、掘り込み部の底面もはっきりせずそれを証明するような事実は検証されなかった。

本住居跡の埋土中からは、RP1～4の土器が出上している。このうちRP1（第8図1）は床面から10cm前後、他のRP2・3・4は1～5cmほど浮いた状態で出土したものである。



第8図 S104出土土器



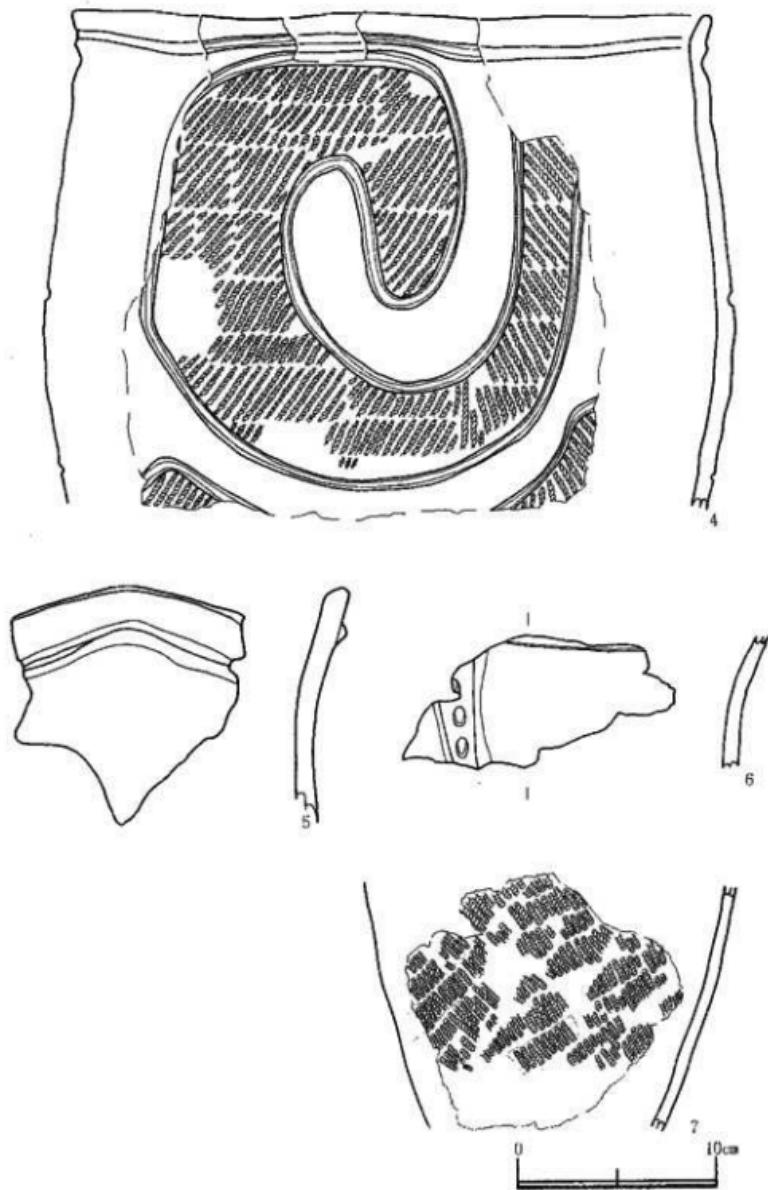


第8図 SI04出土土器

(1/2)

出土遺物

第8図1は、土器埋設坑に使用された外側の上器である。復原された結果、現存高約35cmであるが、これは住居床面や北寄りの掘り込み内から出土した土器片が接合したため、炉として使用されていた時は上半部約22cmしかなかった。この土器は口縁部の上端を欠損しているが、器高の上位1/3程に最大径をもつ深鉢形土器である。口縁部には無文帶が設けられ、体部は全面繩文が施される。第10図6がこの土器の口縁部破片である。口縁部の無文帶と体部の境界には、4箇所にボタン状の突起が貼付される。この突起に向い口縁上端から垂下する2条



第10図 S104出土土器

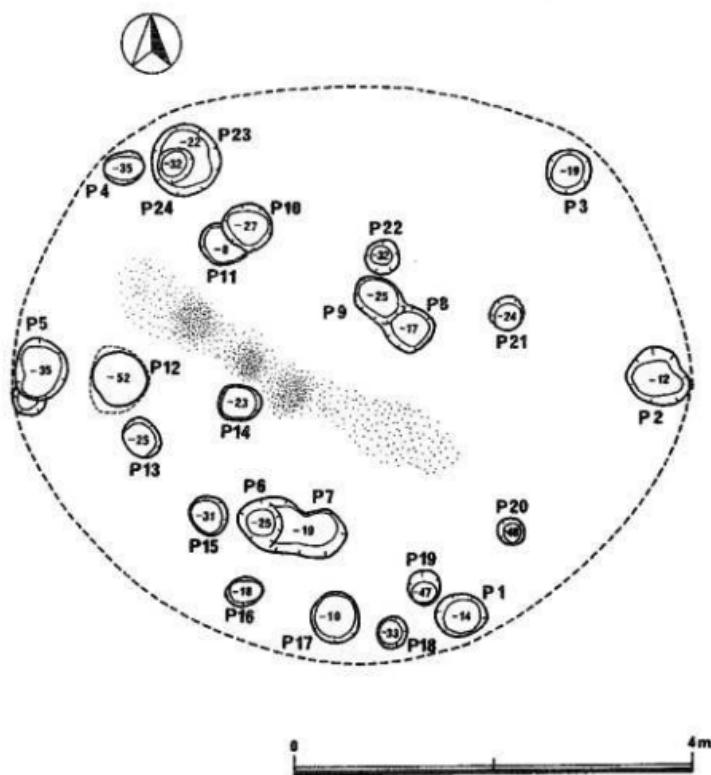
の沈線が突起部分で左右に分かれ、無文部と縄文部の境界を水平に巡る。この沈線の直下およびボタン状突起の周囲、口縁部を垂下する2条の沈線間に先端の丸い棒状工具により器面に対して左から右への方向、ならびに下から上へ向っての方向で列点文（刺突列）が施される。体部の縄文はLR原体を縦位に回転させたものだが、1段から2段へ擦り合わせた際の先端（折り曲げられた側と反対の端）を細い撚紐で縛った痕跡が、縦位の筋となって観察される。この筋によって観察される原体の長さは、18~19mmである。

第8図2は、体部の断面形が球形をなす鉢形土器で第8図1の中に入子状に入っていた。体部の最も張り出した部分で器厚が薄くなり、口縁上端、底部へ向うにしたがい厚くなる。口唇は内側がそがれて、鋭角の断面形を示す。体部の縄文はRL原体を縦位に回転させたもので、やはり原体の先端の一方を細い撚紐で縛っている。体部の縄文部と口縁部無文帶は、1条の沈線で区画している。

第9図3-aは、RP1で大形の深鉢形の体部である。体部上半ではS字状の区画文がその両側で交互に組み合うような構図で配置され、下半では、上半の区画文の配置に沿って、逆S字状の区画が描かれる、すなわち下半では、上半のS字状区画文と組み合うことによりできる三角の空間に右側へ傾いた波頭状の区画文がのびるような構図をとる。区画文の内部にはRL縄文が縦位を基調として回転施文される。したがって、縄文の条は斜行するがところどころ縦走するなど回転方向が変わる箇所も認められる。区画文自体は、縄文施文後に細い粘土紐を貼り付けてその両側を指頭によって調整し断面形が三角形の微隆起線となるよう仕上げたものである。縄文の回転方向にいく分違いがあることは、区画文が施される以前に全面縄文が施され、区画文施文後に外部が磨り消されたというものではなく、縄文はある程度区画文の割り付けがされた中に施文されたことを示している。区画文の仕上げおよび無文部の調整は最終的なものとして行われている。3-bは、この土器の文様展開図で、3-aの4分の1の縮尺である。

第10図4は、RP2で口縁上端が僅かに外反し、体部の中半が膨らむ深鉢形土器である。口縁部は、幅10~20mm程の無文帶となる。体部には沈線によってJ字形の構図の区画文が描かれ、その外周も沈線によって囲まれる。J字形の区画の内部は無文、その外側は縄文施文、さらにその外側は無文となる。体部下半では上半の区画に呼応して波状文が描かれ、波状文下が縄文施文部となる。文様施文にあたっては①沈線描画、②縄文部分となるべき箇所の抉り込みと無文部の調整、③縄文の充填施文の順序で行われている。使用される縄文原体はRLの擦りである。回転方向は充填しながら施文するため、区画のなかで縦位から横位へと変わる。

第10図5は、RP4で外反する波状口縁の破片である。口縁の形状（波形）に沿って口縁下に隆線が貼付され、その下に沈線による区画文が描かれる。7は、RL縄文の横位回転施文された底部近くの破片である。最も底部に近い部位は、ミガキ調整されて無文化している。

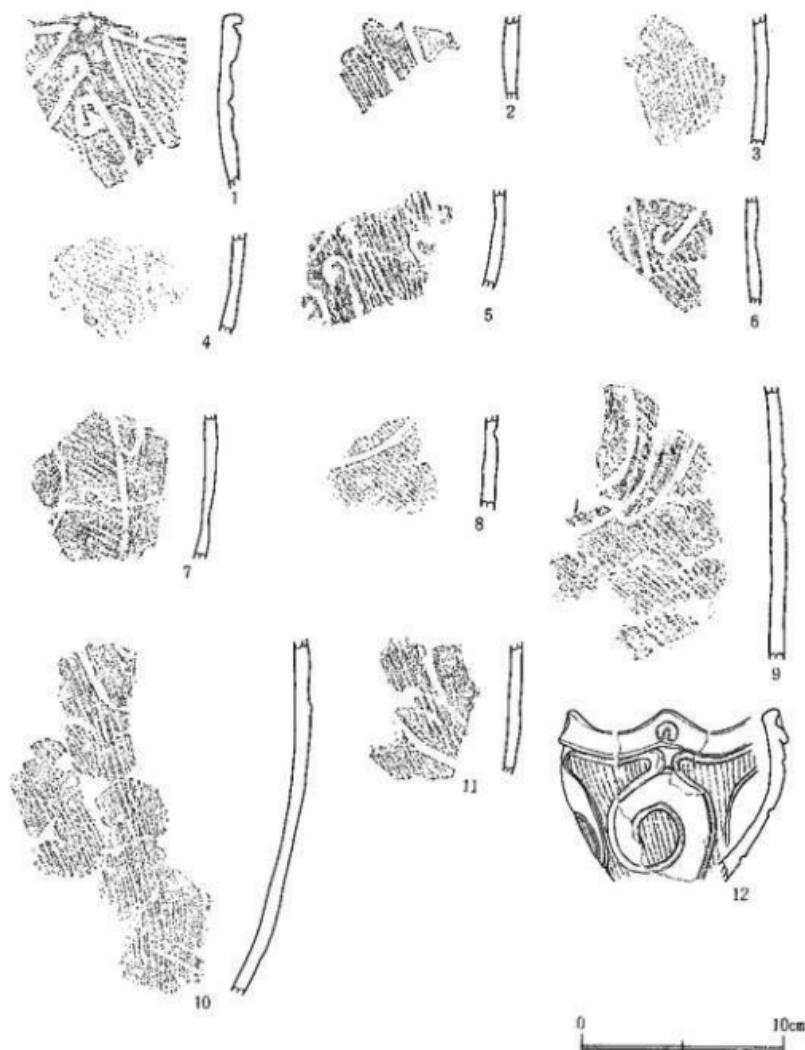


第11図 SI11堅穴住居跡

以上のことにより、この堅穴住居跡は縄文時代中期末葉のものである。

SI11堅穴住居跡（第11・12図、図版7・25）

調査区北隅、台地の肩部にある堅穴住居跡である。調査区北端部の調査中、第IV層中位で遺構の有無を確認していたが、MK71グリッドを中心にして略円形に土色の違いが見られた。精査したところ細長くよく焼けた部分が検出され、その近くからやまとまとった上器片も出土した。さらには焼上を中心にしてその周辺に径0.25～0.6mの柱穴様のビットも見つかり、プラン・壁とも不明確ながらもこれを住居跡として把え、推定される生活面からの深さも勘案して堅穴住居跡とした。



第12図 SI111堅穴住居跡出土土器

炉は南東—北西方向に4mほど連なる細長い地床炉である。この地床がよく観察すると、中央部から北西側にかけて3箇所のよく焼けた部分があり、結果的に細長い炉になっているが、径0.5~0.6mの焼土が連なったものとも見ることができる。床面は、本住居跡自体が第V層を

掘り込んだものではないため、第IV層の土との区別がつけにくく明確ではないが、中央部が少し凹むものと思われる。壁は全く検出できなかった。柱穴様のビットは炉を中心にして合計23個検出されたが、主柱穴などを決定するには至らなかった。ただし、炉との位置関係や深さなどからして、P5・6・7・8・9・10・11などをそれにあてて、炉も移動していると見られることから同じ場所での幾度かの建て替えとすることもできる。この場合、P1・2・3・4・5などが壁柱穴とも考えられる。そして、このようにすると、壁柱穴を結ぶ点線で描ける範囲をこの住居跡の平面形とすることもできよう。

第12図1～11は、同一個体で焼土周辺から、焼土とほぼ同じレベルで出土した。口縁部がゆるく外反し、体部で膨らむ深鉢形の器形を呈すると思われ、口縁は緩い波状を呈する。地文にはLの捺りの捺糸文が施される。口縁の波頂部下には竹管状工具による刺突がなされ、それを中心として口縁～体部の文様が展開する。文様の表出は沈線による区画とその外側を磨り消す手法によるが、沈線の末端が渦巻くものが用いられている。残存する破片から推定しうる全体の構図は、口縁の波頂間に刃をもつ三角形と、それがつくる三角形の空間に配置される水滴形の構図によって構成されると思われる。胎土には砂粒が含まれ、割れ面は脆い。12は、同じく^{メタリック}波状口縁をもつ鉢形土器の破片である。口縁は内済し体上部で膨らむ。口縁は折り返し口縁となる。波頂部下の口縁には、視力検査マーク（下）の施文がされる。体部の文様は、波頂部下を中心として展開する。施文手法は磨り消し纏文の手法によるが、地文としてはrの捺りの捺糸文が施される。胎土には砂粒を含むが、焼成は比較的良い。

出土土器から、本住居跡は縄文時代後期前葉のものである。

(2) 土壙

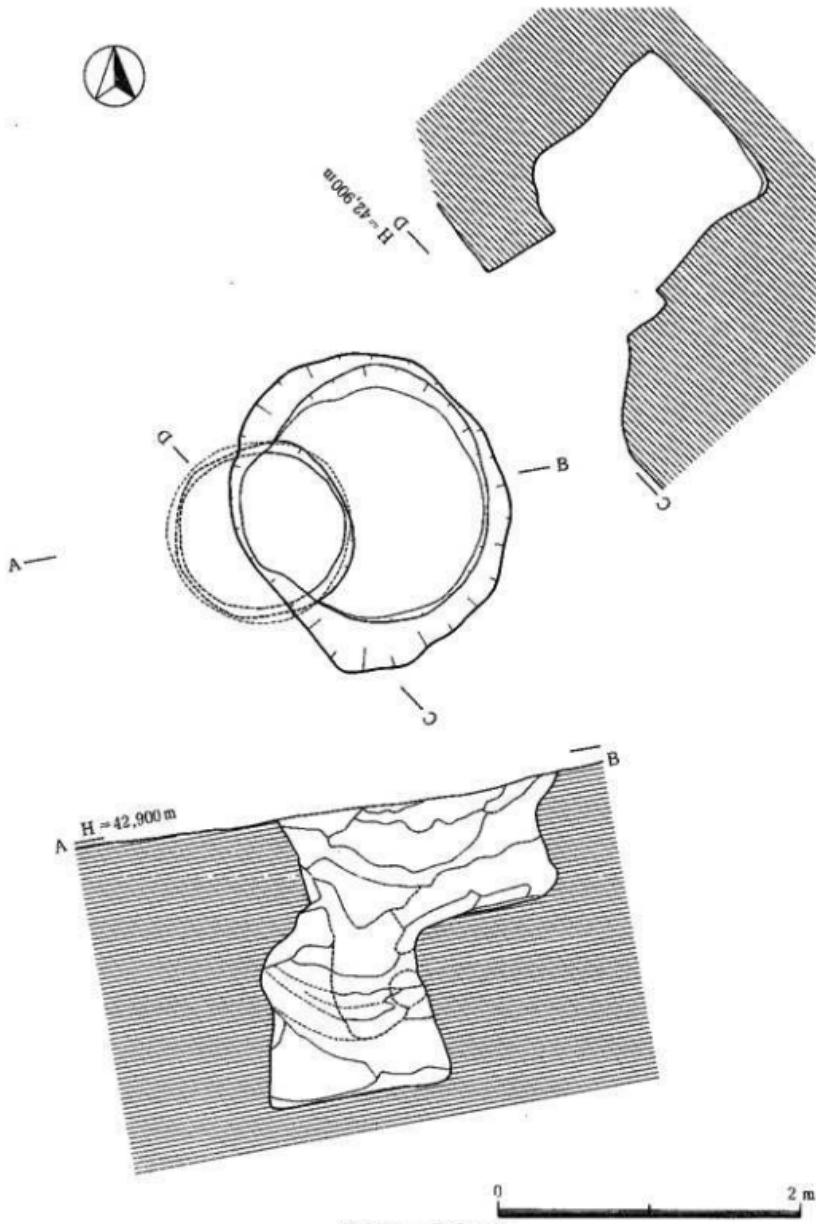
A地区からは縄文時代の土壙が33基検出された。これらの土壙はその形状及び出土遺物などから、a～eの5種類に分けられる。

土壙a:平面形は円形で、壙口部から頸部にかけてが、壙中央部あるいは壙底部の径より小さい土壙である。断面形が袋状あるいはフラスコ状を呈する。

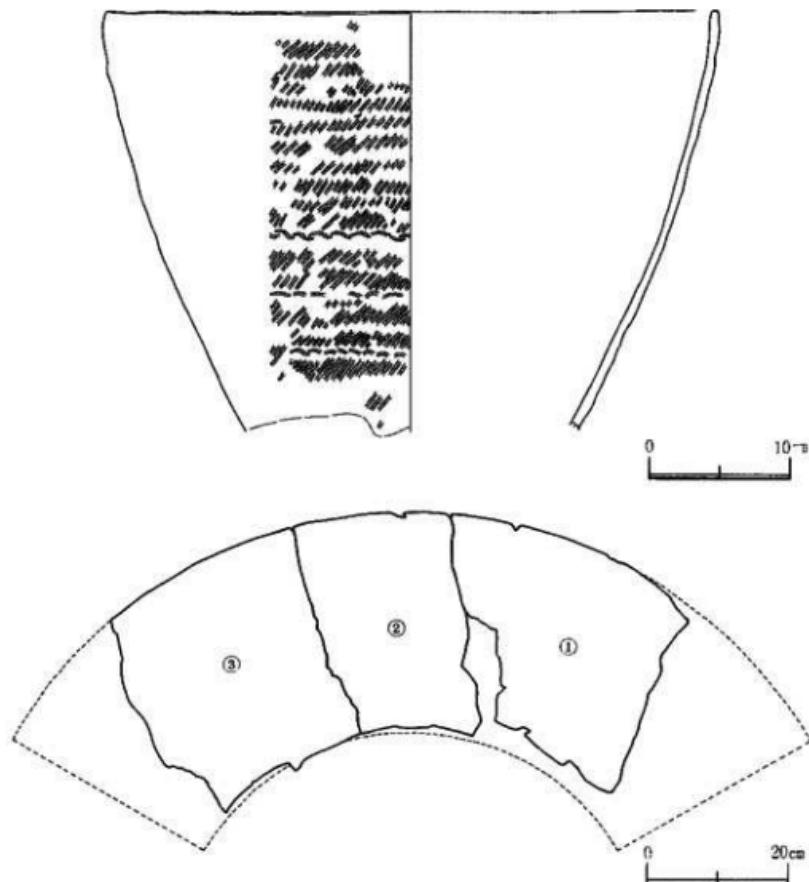
SK12（第13・14・23図、図版8・26）

調査区北西部、SI04堅穴住居跡の東方5mで検出された。この地点もSI04と同様台地縁の肩部にあたり、本土壙の確認面第V層上面は南と北で約0.3mの比高差がある。

当初、SK12は直径2.5m前後の土壙あるいは、小さな堅穴住居跡と予想されたものであるが、半蔵して掘り下げたところ、深さ0.9mまで達しても西側部分では壙底面が検出されず、さらに掘り進んだ。その結果、第13図でもわかるとおり、本土壙は大きな円形の浅いビーカー状を呈する土壙（以下「ビーカー部」とよぶ）とフラスコ状の土壙（以下「フラスコ部」とよぶ）



第13図 SK12土壤



第14図 SK 12土壤出土土器

とが重複するような形であることがわかった。このビーカー部とフラスコ部に切り合い関係があるか否かを判定するため、土壤断面などを仔細に検討したが、図に示したとおり切り合いは認められなかった。また、仮に切り合いがあるとした場合、フラスコ部の壺口部の形が不自然で狭い。このようなことから、本土壺は口径1.8~2.0m、底径1.5m、深さ0.85mの深いビーカー状の土壤の西側底面から、深さ1.05m、底径1.2mのフラスコ状の土壤を掘り込んだ二重構造の土壤であると判断された。埋土の状況からは、ビーカー部の土壤底面東側約3分の2に

は厚さ10cmの黄褐色粘土が堅くたたき締められた状態であり、これが一部フ拉斯コ部側に落ち込んでいることから、この土壙が廃棄される前は、専ら、フ拉斯コ部が使用されていたものと推定される。フ拉斯コ部の深さは確認面から1.9mあるが、底部は段丘砂礫層を10cmほど掘り込んでおり、底面には砂礫が露呈していた。底面は直径1.1~1.2mの正円に近い。

フ拉斯コ部の底面南東部には第14図、図版26のように3枚の打ち割られた土器片が、約50°の傾きをもって壁に立てかけられた状態で重なって検出された。この土器片は、口径44cm、残存高30cmの大型の深鉢形土器（底部を欠く）を縦に4分割したうちの3枚で、上と下の土器片は口縁部を下にし、中のものは逆に口縁部を上にしていた。これらの土器片の分割面を観察したが、分割方法を解明できるまでには至っていない。

埋土中から第23図1~4の土器片が出土している。第23図1は器面にLR繩文が縦位回転施文された底部近くの破片。繩文の押圧は浅い。図の下側の断面は底部と接着した粘土帶の様子が明瞭に観察できる。胎土には僅かに纖維を含む。2はやや内傾する口縁をもつ鉢形土器の口縁部破片、口唇のナデ調整の結果、口唇上端は外側へ突き出る。体部にはRL繩文が横位に回転施文される。胎土には僅かに砂粒を含む。3、4は器面に、Rの撚りの条間隔の広い絡条体が回転施文された破片。いずれも胎土に砂粒を含むが、粘土は精選したものが使われ、焼成は良好である。

SK02（第15図・23図、図版9・28）

調査区北端の遺構群中で検出された土壙で、台地縁の肩部斜面に構築されている。残存した深さは0.5mで南側底面が壙口部よりも外側に食い込んでいる。南壁中位に河原石があったが意味は不明である。

埋土中から出土した遺物は、第23図5~7である。5は直立もしくはやや内傾する口縁をもつ鉢形土器の口縁部破片。器面には左上→右下の方向でRL繩文が回転施文される。6・7は繩文の回転施文された破片。6はLR横位、7はRL縦位の原体、回転方向をもつ。

SK03（第15図、図版9）

SK02土壙の西側2mの位置から検出された土壙である。やはり台地縁の肩部に構築されている。口径1.6~1.8m、底径1.6~1.7m、確認面からの深さが0.85mで、本遺構中の土壙としては比較的大きい。底面は平坦でよく締まっており、壁もしっかりしている。遺物の出土はなかった。

SK05（第15・23図、図版10・28）

調査区北端部、SI11の1.5m北側から検出された土壙である。やはりこの部分も南北から北東側に緩く下降した台地縁で、SK02・03と同様、地山面のレベルが高い方に壙底面が食い込むように掘られている。すぐ北東側に河原石の入ったSK06があり、両土壙ともその一部が、昭和59年秋の範囲確認調査によって切られている。

第23図8、9が埋土中から出土した土器片で、8は器面にLの原体を回転方向を逆えて施文した例、9はRL縄文を継位に回転施文した例である。9は土器片の周縁が打ち欠かれており、円盤状土製品の可能性もある。

SK07 (第15・23図、図版10・28)

調査区北端部の遺構群中の土壙である。SK02・08土壙の中間に位置し、壙底部が地山土のレベルの方に食い込んでいるのは前二者と同じである。口径0.85m、底径1.1m、残存する深さ0.6~0.4mと小さい。

埋土中から第23図10・11の土器片を得ている。10はLの原体が横位に回転施文された鉢形土器口縁部の破片である。11は口縁部の直立ないしは僅かに内に傾く鉢形土器の破片で、器面にはLの縄文が継位に回転施文されている。

SK08 (第16・23図)

SK07の南東側1mにある土壙で、SK07と規模・形状ともによく似ている。SK10と北端で重複するが、前後関係は判然としなかった。

第23図12が埋土中から出土した土器片で、RL縄文が施文された鉢形土器の体部破片である。

SK13 (第16図、図版11)

調査区北端部遺構群中にあるが、台地縁の肩部よりは約4.5m内側にあり、確認面は平坦であった。口径0.7m、底径1m、確認面からの深さ0.7mの小型の土壙ながらも、断面形はフラスコ状を呈する。出土遺物はなかった。

SK15 (第16図、図版11)

調査区北西部遺構群中、SI11の西側に接するようにして検出された土壙である。壙底部が東西に膨らみ、断面形は袋状を呈する。SI11堅穴住居跡との関連も考えられるが、遺物の出土はなかった。

SK23 (第16・23図、図版12・28)

調査区北端部遺構群の中では、最も南西に位置する土壙である。本土壙は西側に風倒木痕があり、風倒木痕の東側の黒色土を切って掘られていた。確認面からの深さは0.6mと比較的浅いが、断面形に見るように壙中位で壁が僅なり袋状を呈する。

埋土中から第23図13~16の土器片が出土している。13はやや内傾する口縁部をもつ鉢形土器の破片。器面にはLR縄文が横位回転施文される。14は頭部に段差をもたせた截形土器の口縁部破片。口縁部は調整されて無文化される。体部は本来縄文を施文されたものであろうが、磨滅が甚だしく原体の判別は不能。15は、沈線による区画文をもつ鉢形土器の体部。使用される原体はRL。16はLR原体が縦位回転施文された例である。

SK50 (第17・23図、図版13・28)

調査区南部西端土壙群中にある大きな土壙である。本土壙の北東側にあるSK51土壙と重複しており、SK51の南西側の一部を切っている。口径1.65m、底径1.8mと僅かに底径が大きいだけであるが、壙中位で壁が窄って断面形はフラスコ状を呈する。埋土の状況を観ると、壙中位の窄った部分から下の壁側に、壁面の崩落と考えられる明褐色土（図中のスクリーントーンの部分）と、第Ⅲ・Ⅳ層の土と考えられる暗褐色土とが、それぞれ7～8枚の帯状になって互層に重なっていた。両者の土層の厚さは2～10cmで、明褐色土は壁から10～15cm離れた部分で厚く、暗褐色土はそれよりも中央部側で厚い。また、この両者から成る土層は壙中央部までにはほとんど達していない、断面形ではV字、あるいはU字状にその部分が残っている。そしてそこに充満されているのは暗褐色の締まった土で、硬いブロック状の塊も含まれている。恐らくは人為的に埋められた土がこれであろう。埋土上部中央には断面形中華鍋底状に第Ⅲ層の軟かい黒褐色土が入っており、この部分は自然堆積と考えられる。このような観察結果から、本土壙のような埋土の堆積状況が見られる土壙では土壙構築時においては壙中位の窄まりもあるいは壙口も現在我々が見るよりもより狭く、小さかったとすることができよう。壙底面は砂質で、非常によく締まっていて堅かった。

大きな土壙の割には伴出遺物が少ない。第23図17、18が図示し得る遺物である。17、18は器面にLR原体が横位回転施文された土器片で、17は胎土堅緻で焼成良好なのに對し、18はやや不良である。

SK51（第17図、図版13）

SK50によって南西側の一部を切られている土壙である。残存する深さは確認面から0.45mで、埋土中位には厚さ5～6cmのよく締まった堅い面があり、人為的に埋められたものと考えられる。遺物は出土しなかった。

SK31（第17図、図版14）

調査区中央西部で検出された小さな土壙で、本土壙の北側3mにbタイプの土壙SK25がある。口径1.1m、底径1.3m、確認面からの深さ0.55mのきれいな袋状を呈する。出土遺物はない。

SK64（第17図、図版14）

調査区中央部、SK32～35などのbタイプの土壙が集中する部分の南側にある土壙である。確認面からの深さは0.4mと浅いが、口径0.7m、底径1.1～1.2mのきれいな袋状を呈する。底面全面にその上の埋土とは異なって、堅い黒褐色粘質土が厚さ5cmであった。出土遺物はない。

SK48（第17・23図、図版15・28）

調査区南部西端土壙群中の一一番北側に位置する土壙である。口径と底径がほとんど同じで、深さも確認面から0.5mと浅いが、壙口近くでやや窄む。

第23図19が埋土中から出土した。頸部に緩い屈折を持つ壺形土器の頸部～体部の破片で器面

にはLR縄文が横位回転されている。

SK53（第17・23図、図版15・28）

SK51の南東2mの位置にある土壇である。口径1.05m、底径1.2m、確認面からの深さが0.55mの整った袋状を呈する。

埋土中から第23図20に示した土器片が出土している。器面にLR縄文を横位回転施文させた深鉢形土器の口縁部破片である。胎土は精選した粘土を用い焼成は良好。

土壤b:平面形が円形で、断面形が長方形あるいはフライパン状を呈する土壇である。深いものは少なく、他の土壇に比して遺物が多い。

SK01（第18・24図、図版15・27）

調査区北東端部で検出された土壇である。確認面からの深さが0.25mと浅い。口径が1.05mあるのに対し、底面の平坦な部分はせいぜい径0.6mと狭く壁が緩く立ち上がっている。

埋土中から第24図1・2の土器細片が出土している。LR縄文が横位に回転施文されている。

SK24（第18図、図版16）

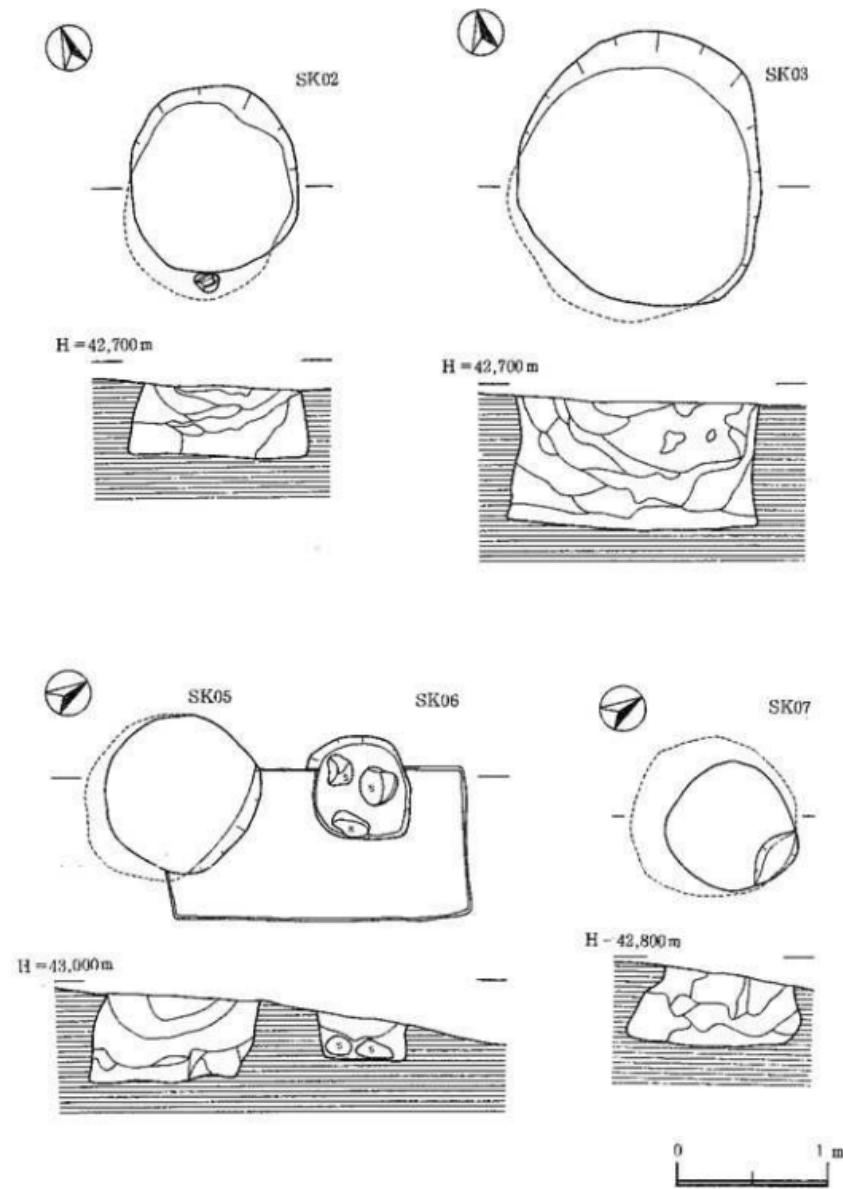
調査区中央北東部から検出された土壇で、第IV層漸移層上面で平面形を確認した。平面形は口径約1mの正円に近い。確認面からの深さは0.4mで底面もしっかりしており、壁もほぼ垂直に立ち上がる。底面から0.2mの高さのところに小さな河原石が一個入っていた。遺物は出土しなかった。

SK32（第18・21・24図、図版16・17・27）

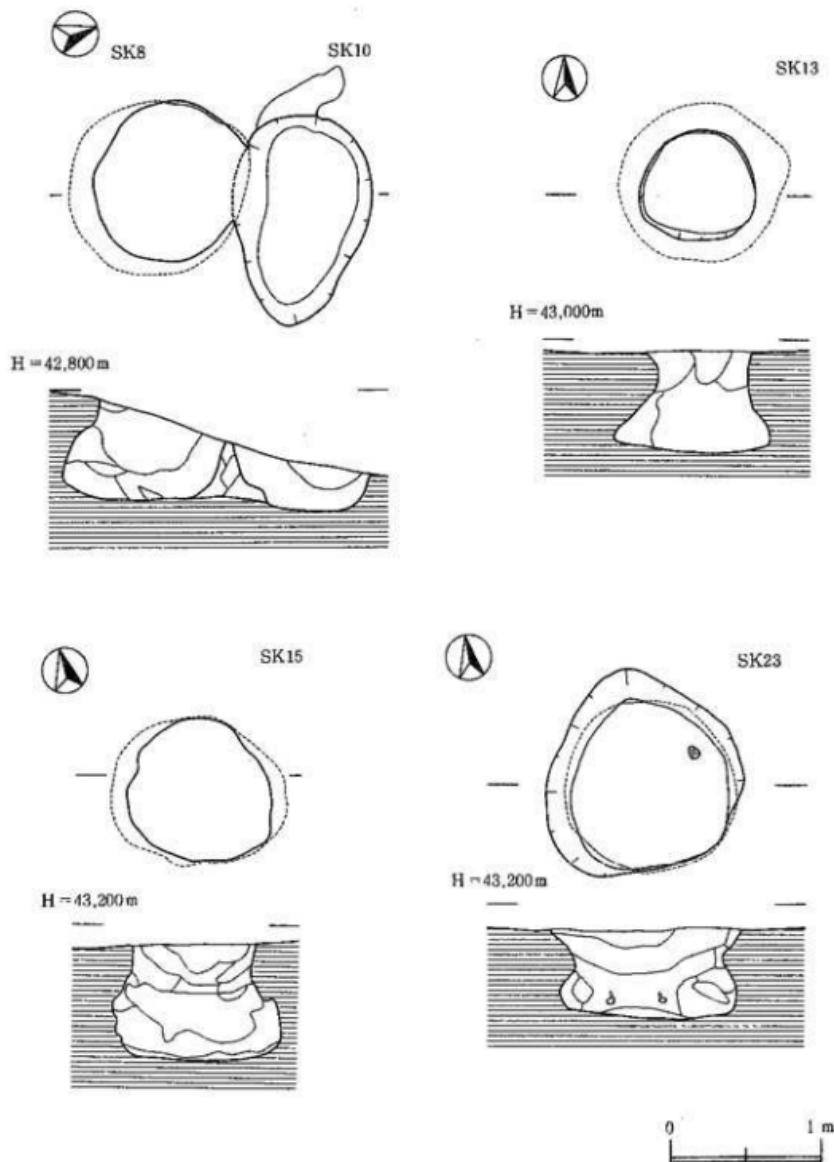
北東部遺構群中にあり、本土壇の西～南西方向にSK33・34土壇が位置する。第IV層中で割れた河原石とともに第21図1に示した深鉢形土器の一部が検出され、精査したところ、円形の土壇であることを知った。この土器片は、最も下のものでも底面から6cmほど上である。口径1.1m、底径0.9m、確認面からの深さ0.3mで、底面と壁との境は明確な稜をなさない。

第21図1、第24図3・4が埋土中から出土した。第21図1は口縁部が僅かに外反し、体部上半で球形に近く、下半では直線的におりる壺形土器である。口縁部は小波状口縁となり調整をうけて無文化し、体部にはLR縄文が横位回転施文されている。胎土には径5～7mmのきわめて粗大な石英粒子が混入され、土器の割れ口が非常に荒れている。このため、体部上半と底部がうまく接合しなかった。第24図3は頸部をもたない広口の壺形土器の破片。口縁部（肩部）には3条の平行沈線と、1列の短沈線列が施され、体部にはLR縄文が横位回転施文される。胎土には径3～4mm程の粗大な砂粒を含む。4は器面全体にLR縄文が横位回転施文された鉢形土器の破片。口唇は直角に作られている。胎土は精選された粘土を用い、砂粒はほとんど含まれていない。

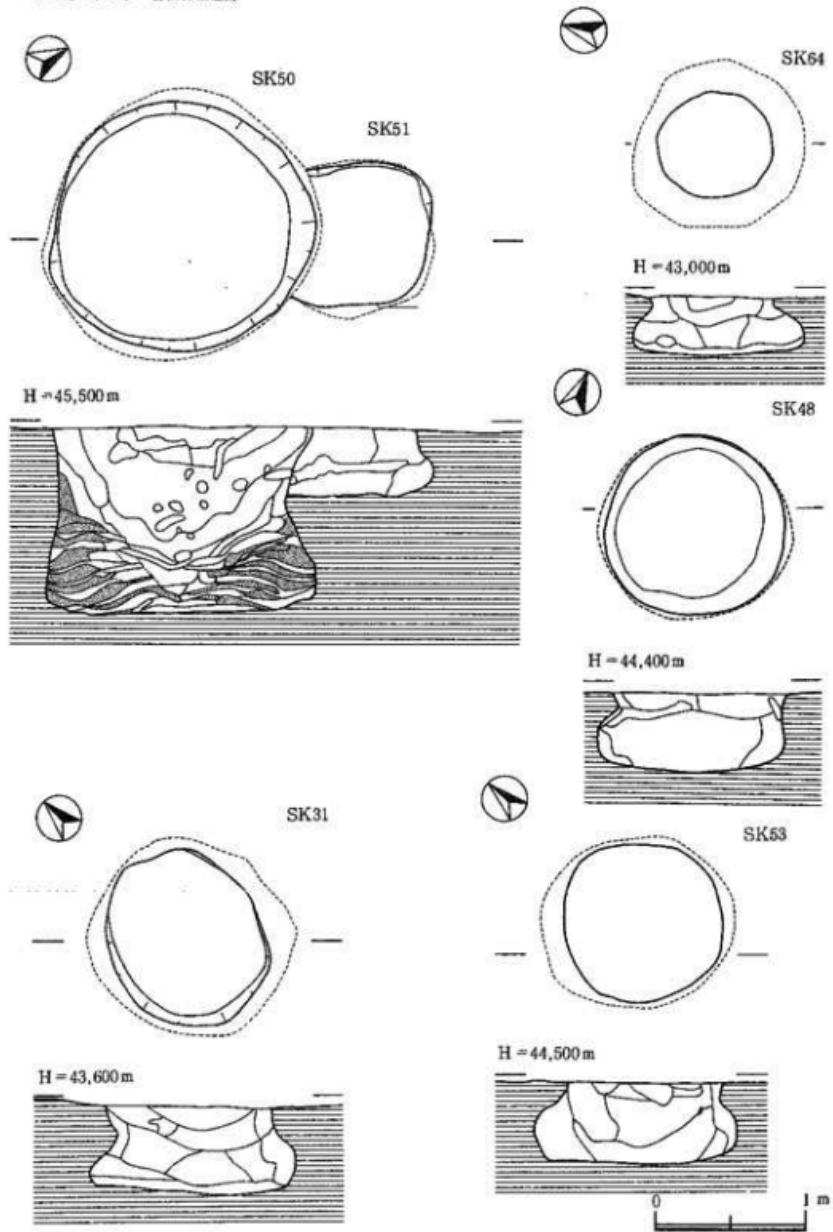
SK33（第18・21・24図、図版16・27）



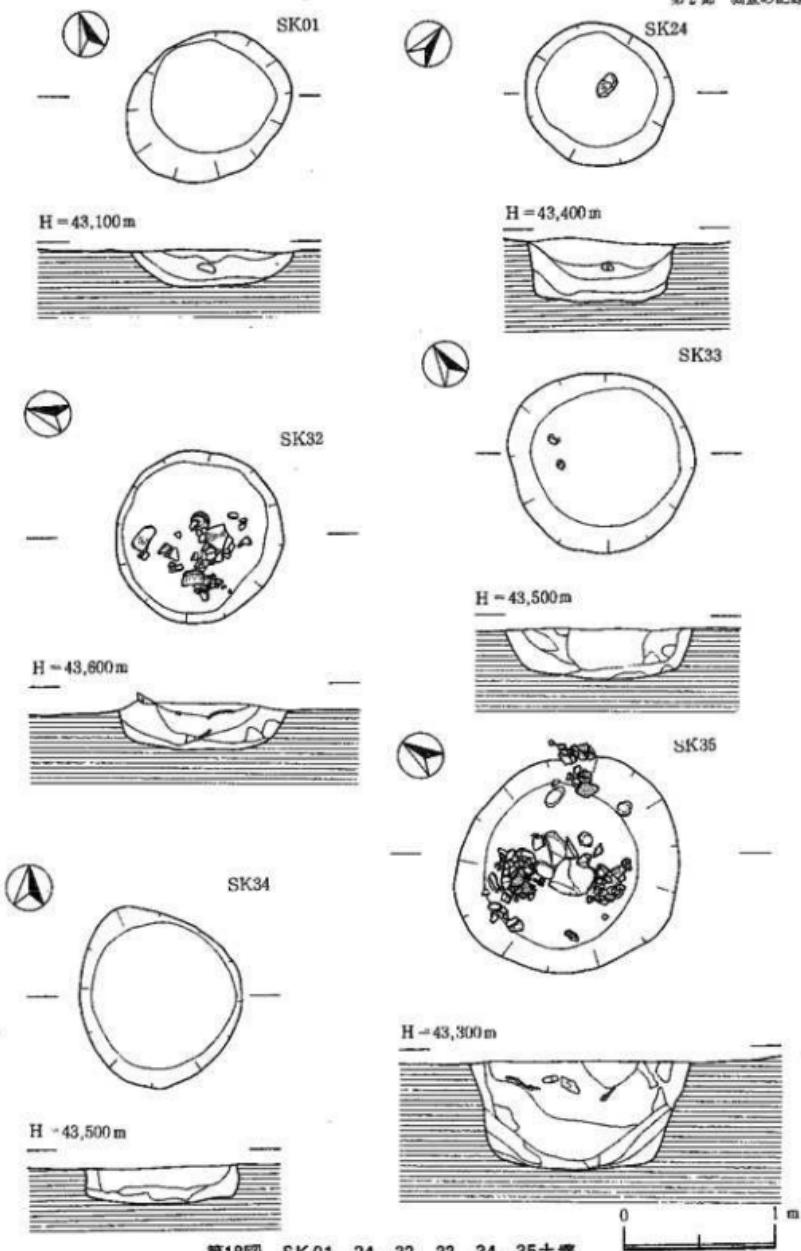
第15図 SK02、03、05、06、07土壤



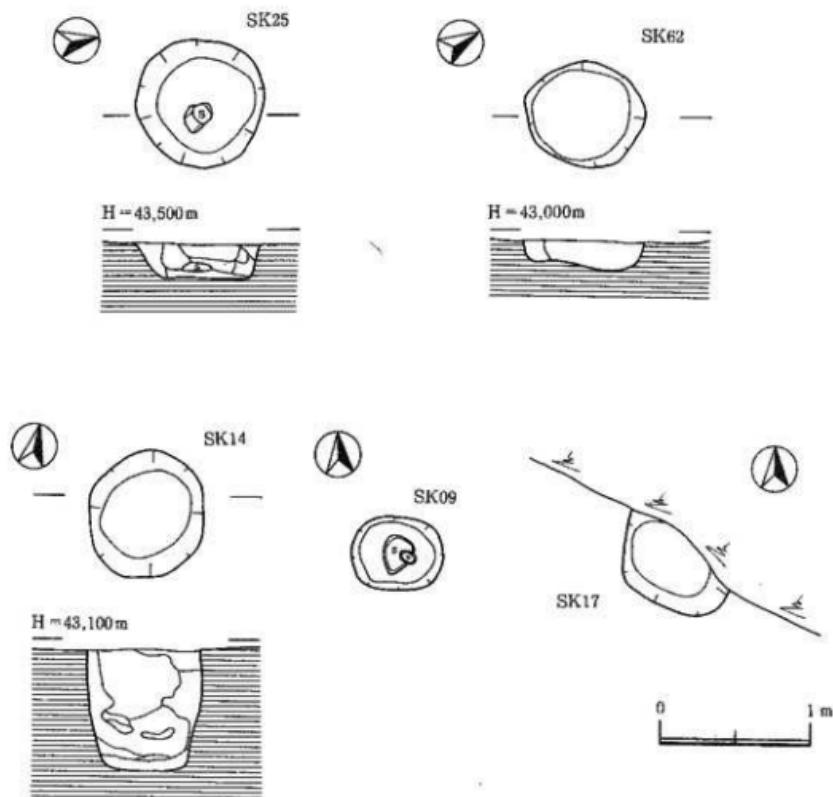
第16図 SK 08、10、13、15、23土壤



第17図 SK 50、51、64、31、48、53土壤



第18図 SK01、24、32、33、34、35土壤



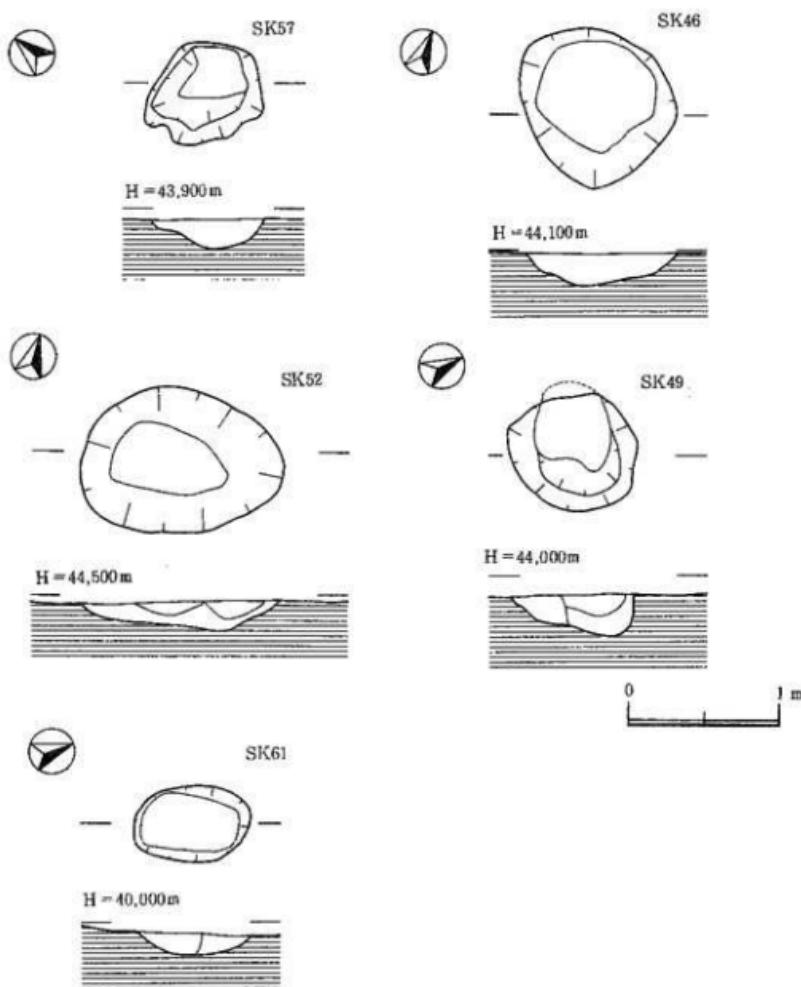
第19図 SK25、62、14、09、17土壙

北東部遺構中、SK32の西2mの位置で構出された土壙である。口径が1.2mと僅かに大きいものの、平面、断面形ともSK32に似ている。

第21図2と第24図5・6が埋土中から出土した。第21図2は台付鉢形土器の底部で、台部は欠落している。体部にはLR縄文が横位回転施文されている。第24図5～6は器面にLR縄文が横位回転施文された破片である。

SK34（第18図、図版16・18）

SK32・33土壙の南側に検出された土壙で、SK32・33などと同じく、第IV層中でその存在を確認した。確認面からの深さは0.25mと他に比べ浅く、壙底面と壁との境も比較的明瞭であるが、全体の形状などは前二者に似ている。埋土中から造物は検出されなかった。



第20図 SK57、46、52、49、61土壤

SK35 (第18・21・22・24、図版19・27)

北東部遺構群中にあり、最も遺物の多い土壌である。明確なプランの確認は第IV層下部である。口径1.4~1.55m、底径1~1.1m、確認面からの深さが0.7mで断面形が橢鉢状を呈するが、東側の遺物の出土状況からすると、掘り込まれた面はこれよりも約0.2mは高位にあり、

壙口部の径もより大きかったものと見られる。壙中央部の埋土を10~15cm程掘り下げたところで、3個体以上の完形に近い土器が数個の河原石とともにバラバラに敷かれたような状態で検出され、その中には石鏃も含まれていた。

第21図3、第22図1~4、第24図7~14が出土した土器である。第21図3は、口縁部の外反する壺形土器である。口縁部は38mm程の間隔でA突起が作出され、波状を呈する。突起の単位は24単位である。口縁部は調整をうけて無文化されている。頸部には、1条平行沈線が巡り、その下の体部にはLR繩文が横位回転施文される。また口縁内面にも突起下10mm程のところを1条の沈線が巡っている。胎土には径2~3mm程の砂粒が混入され、器外面には煤状の炭化物の付着が認められる。第22図1は、口縁部が外反し、頸部に屈曲部をもち、体上部で膨らんで以下直線的におりる壺形土器である。口縁は5cm間隔で山形のA突起をもつ波状口縁となり、残存する口縁部の破片から復原したところ、突起は20単位となる。口唇上には突起間を連絡するように沈線がひかれる。口縁部は無文帯をなし、頸部は2条の平行沈線が巡って体部との境をなす。体部にはLR繩文が横位に回転施文される。僅かに張り出し気味の底部は底面とともに調整をうけているが、わずかに纖維質の圧痕が残る。胎土には粗い砂粒を含む。2は口縁部が外反し、体上部で膨らむ壺形土器である。口縁部は無文化され、体部にはLR繩文が横位回転施文される。頸部の屈曲が比較的ゆるやかなと相まって部位を画するような施文は特になされていない。胎土にはやはり粗い砂粒が含まれる。3は鉢形土器の僅かに張り出した底部である。LR繩文が左上一右下の方向で斜位回転施文される。底面は調整をうけて平滑で、胎土には粗い砂粒が混入されるが、焼成は堅緻である。

第24図7は緩く内傾する口縁部をもつ鉢形土器の口縁部破片。口縁上端はA突起が作り出され波状を呈する。口頸部には12条の平行沈線が施され、体部にはLR繩文が横位回転施文される。胎土には砂粒を含むが、焼成は堅緻である。8は口縁上端が外側へ傾き、口頸部が緩い曲線を描く鉢形土器となろう。口頸部文様帶の上半では、5条の平行沈線によって工字文が表出され、下半では地文にLR繩文を横位回転施文しての変形工字文が描かれる。口縁内面にも沈線が1条巡る。9は口頸部に5条の平行沈線が施された鉢形土器の口縁部破片である。口縁内側にも沈線が1条巡る。10は変形工字文の施された鉢形土器の口頸部文様帶破片である。変形工字文は連続してひかれ、沈線がつくる三角形の構図内に1条の沈線を加えて描き出されている。11も同様、反転を繰り返す沈線によって変形工字文が描かれた例。12は僅かに外側へ反る口縁部をもつ鉢形土器の破片。口唇上の頂部に割を入れたA突起が1箇所つけられる。また連続した刻目が施される。

第25図5・6の石鏃が壙土中から出土した。5は土器と同じレベルで壙中位中央部で検出され、6は黒曜石製で埋土の水洗い中に見つかった。

SK25（第19図、図版20）

調査区中央部にあり、SK31土壤の2.5m北に位置している。口径0.8m前後の円形を呈し、埋土中には壇底面から3~4cm浮いた状態で扁平な河原石が1個横になっていた。出土遺物はない。

SK62（第19図、図版20）

北西部遺構群中にある土壤である。口径0.7~0.8m、底径0.6m、確認面からの深さ0.2m足らずと小さく浅い。底面は壇底面も平坦ではないが、しっかりしている。遺物の出土はなかった。

土壤c: 平面形が円形の小さく浅い土壤であるが、その中に比較的大きな河原石が1~数個入っているものである。いずれも、北端部遺構群中の台地縁斜面にあり、3基検出された。

SK06（第15図、図版10）

SK05七壇の北東側に隣接するようにしてある。土壤全体の東側3分の2が範囲確認調査時に検出されていた。平面形は一辺0.7~0.8m開丸方形を呈し、確認面からの深さは0.2~0.3mしかないが、壇底面には長径20cm以上の河原石が3個検出されている。河原石の他に伴出した遺物はなかった。

SK09（第19図）

長径0.6m、短径0.5mの小判形をなす小さく浅い土壤で、深さは0.2m前後である。壇底面中央部に扁平な河原石があった。

SK17（第19図、図版21）

平面的には検出されていなかったが、台地縁の土砂崩れの際に新しく現れた崖面を見てその存在を知った土壤である。その崖面での観察では、埋土中には拳大以上の河原石が3個以上あった。北東側半分程は残存しない。

土壤d: 平面形は小さな円形を呈し、断面形が円筒状の土壤である。北端部遺構中から1基検出されている。

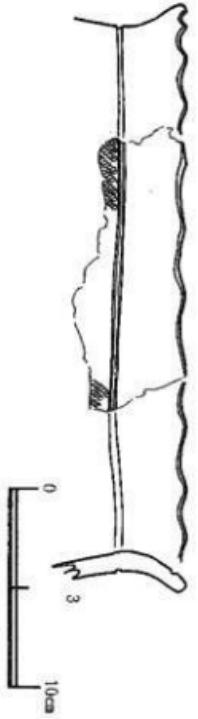
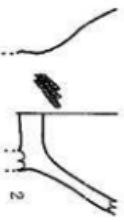
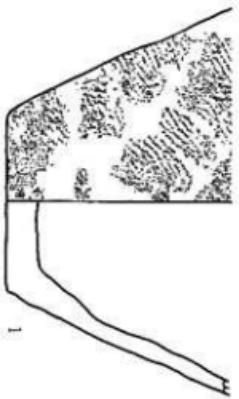
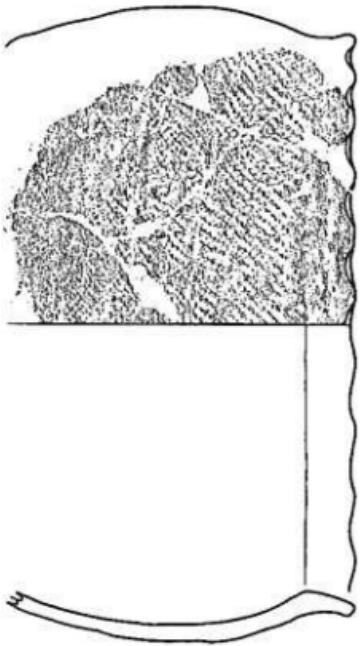
SK14（第19図、図版20）

口径0.75~0.85m、底径0.55m、確認面からの深さは0.8mの土壤である。壁は途中で窄んだりすることなく、ほぼ垂直に立ち上がる。遺物は出土していない。

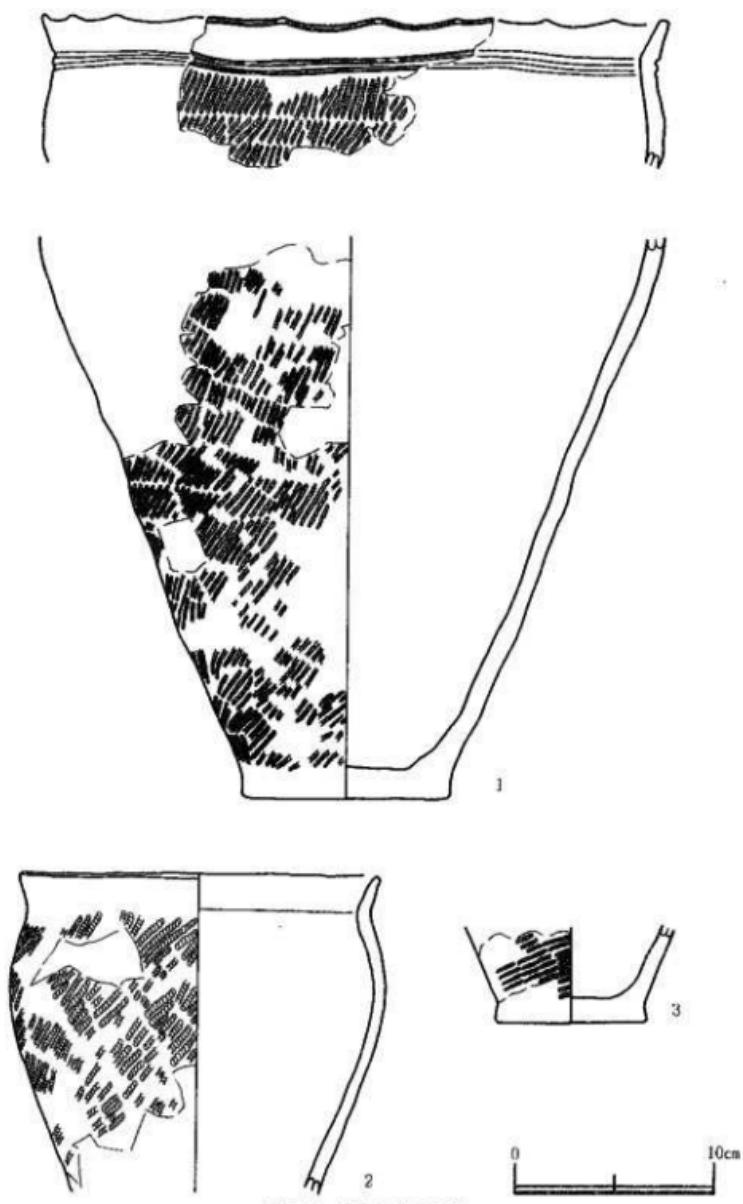
土壤e: 平面形が整った形状を示さず、壇底面も平坦でない1群の土壤である。浅く他の土壤から離れて存在するものが多い。第16図SK10、第20図SK57・46・52・49・61がそれで計6基検出されている。

(3) 焼土遺構（第6図）

北東部遺構群中と、北西部遺構群中にそれぞれ5基（SN26・27・28・29・30）と3基（SN43・44・45）の焼土遺構が検出された。これらの遺構は第Ⅲ層上部で確認されたもので、周囲の出

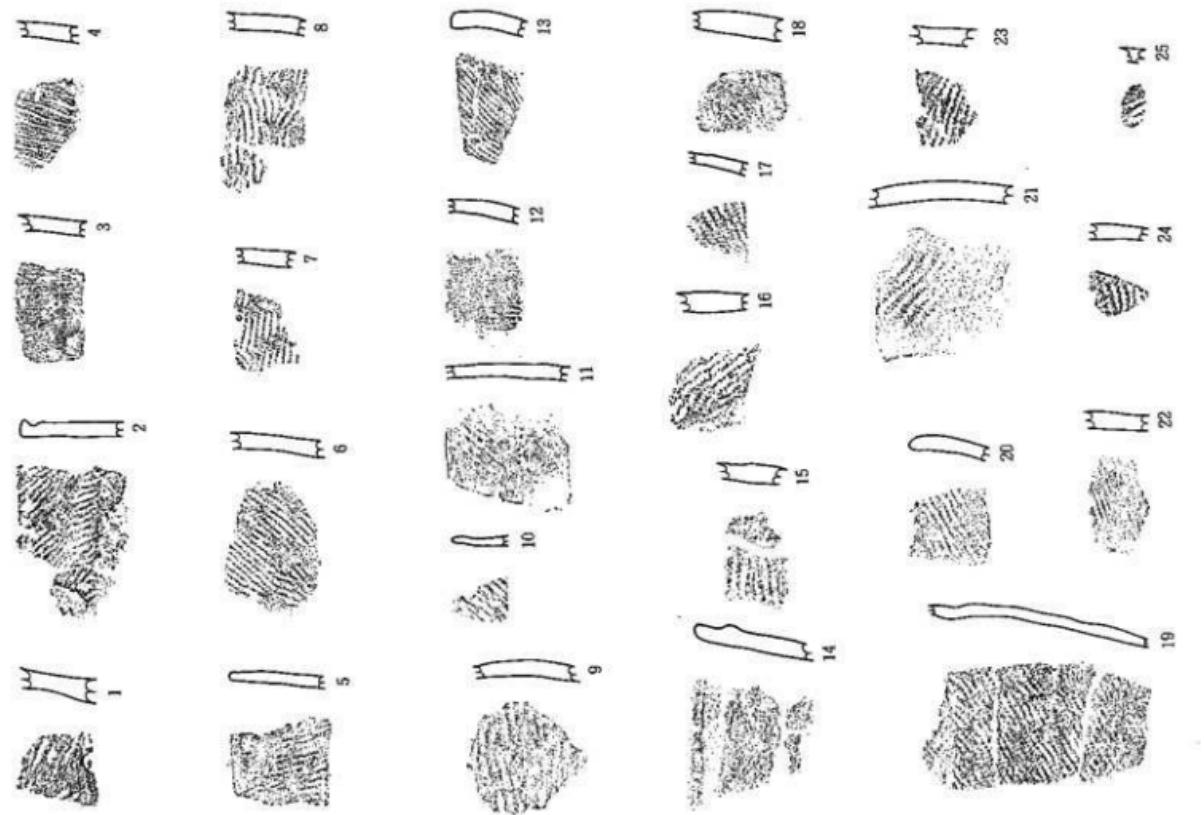


第21圖 SK 32、33、35出土遺物



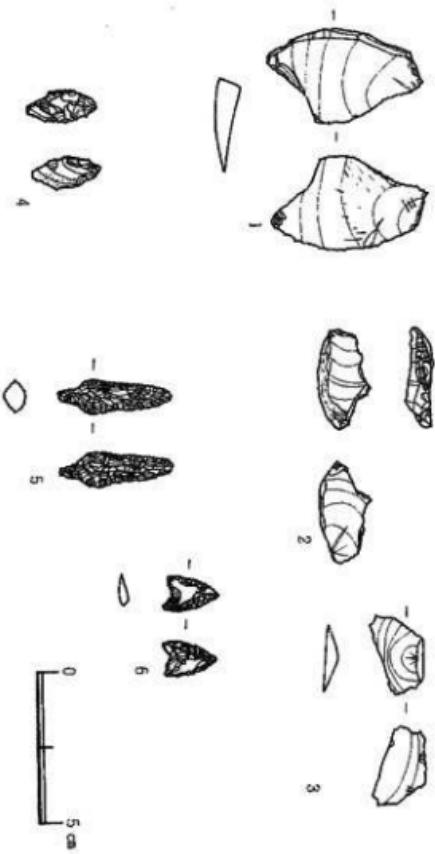
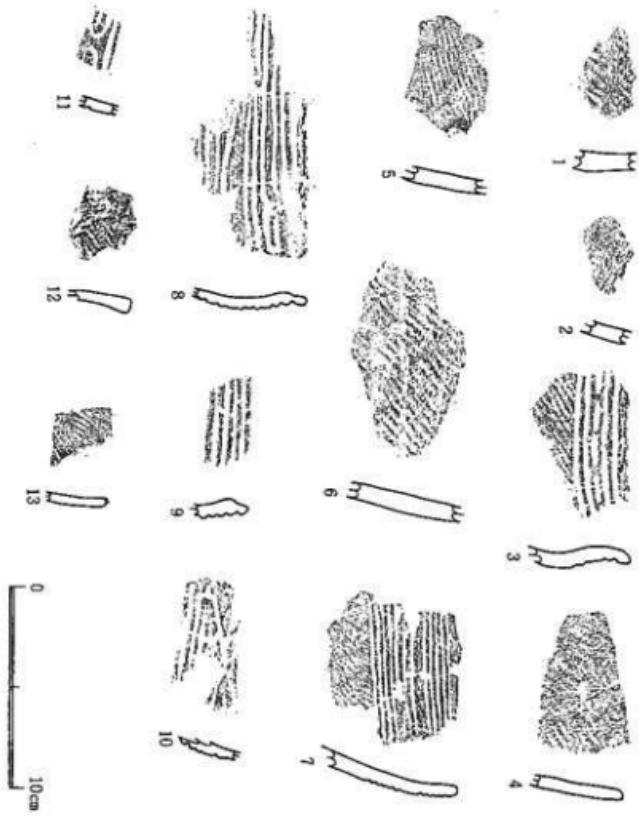
第22図 SK 35出土遺物

第2图 第4类 石砍砸器

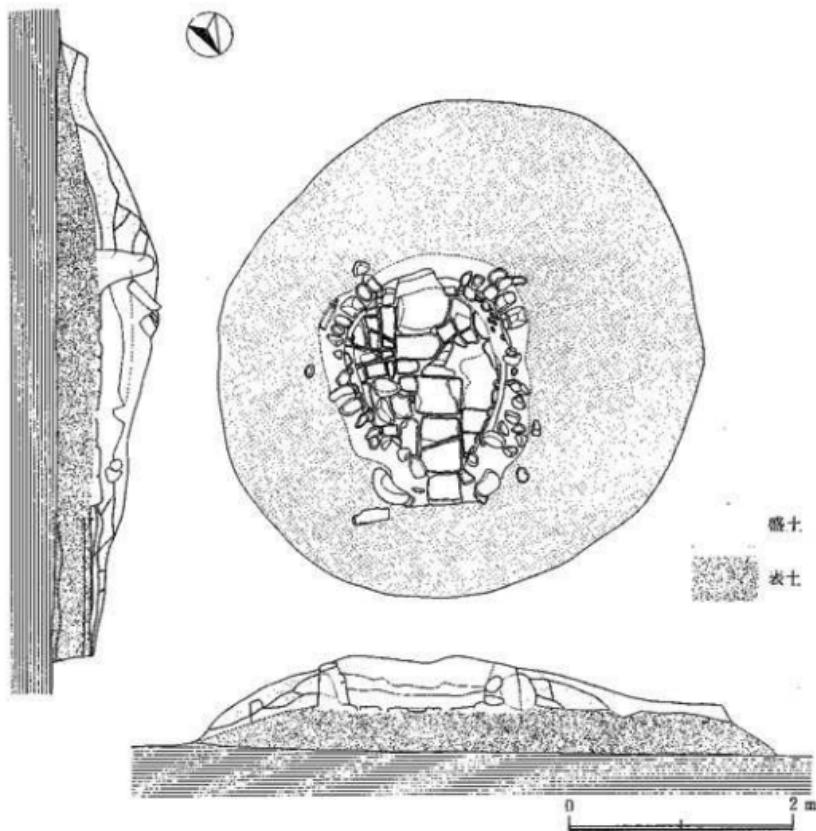


第23图 SK12、02、05、07、08、23、50、47、SN26、43出土遗物

第24図 SK 01、32、33、35出土遺物



第25図 A地区道路内出土石器



第26図 SX16炭窯跡

土遺物などから縄文時代の所産と考えられる。土が焼けている範囲は径1~1.2mの凹形か、橢円形を呈し、それ以外に石窯とかその他のものは全くなかった。焼土の厚さは5~10cmである。

SN26の焼土中から第23図22、SN43の焼土中から同図21、23~25の土器片が出土している。

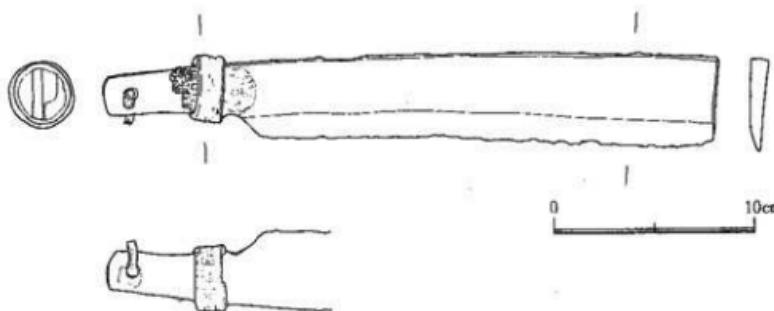
(4) その他の遺構と遺物

① SX16炭窯跡（第26・27図、図版22）

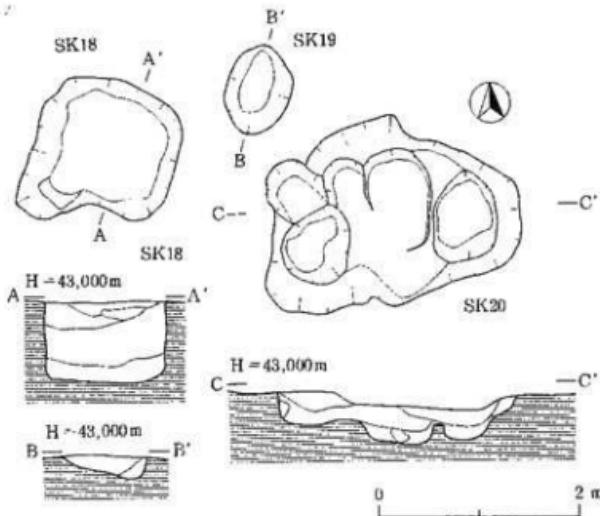
遺構は、調査区北端の平坦面で検出した。調査以前から塚状に遺存しており、周囲には炭化物、焼土、焼喰、河原石などが認められることから炭窯であろうと想定していたものである。炭窯

は河原石を主体とした窯体と周囲の盛土部分からなる。窯体は平面卵形を呈し、窯口（焚口）、煙道部が明確である。北側に窯口を有し、N-20°-Eとなる。窯口・煙道を結ぶ中軸線が長軸となり、内法で1.6m、これに直交する短軸は1.2mを計る。窯壁は、河原石が幾段にも積み重ねられ、目貼りとして粘土が用いられている。奥壁（煙道部）で底面から0.48mの高さを残している。天井部は既に失われているが、窯内部や周間に見られるレンガ状に焼けた粘土ブロックから粘土貼りの天井が考えられる。

窯底を復原的にみてみると、まず窯口部の両側に柱石を置く。1個は既になく、もう1個も



第27図 SX 16号窯出土鉄製品



第28図 SK 18、19、20土壤 (SX 16号窯周辺の土壤)

火熱を受け非常に脆くなっている。2つの柱石の上に掛石をのせる。石で囲まれた部分は、いわゆる焚口であり、炭材（木炭）の出し入れ口となる。煙道部の両側にも枕石と称されるものを埋め込む。これは2個とも遺存しており、縦、横約10cm、高さ25cm程である。枕石の上にも掛石をのせる。この部分が炭化室と煙道部を画する排煙口となる。柱石・枕石とともに軟質の岩を角材状に加工したものである。掛石はみあたらなかった。次に底面の築造である。軟質の岩を偏平に切り、方形・長方形に加工する。これを窯口と煙道部から敷いているようである。ところが途中で足りなくなり、河原石2個と粘土を敷くことによって完成させている。底面はほぼ水平である。

窯内部には、多量の焼けた粘土が粒状に入っている。径1cm前後のものから、拳大かそれ以上のものまで確認できる。あきらかに、天井・窯壁の崩壊土と理解できる。多量の粘土ブロックも火熱を受ける度合の差から、さまざまな色を呈している。底面に近いところでは、黒ずんだ赤紫色を示しているが、上面にいくにつれ、明赤褐色、橙色、浅黄褐色と次第に赤味を減じているようである。粘土ブロックの詰まった埋土には煙道部の枕石、掛石の上部にあったと考えられる岩2個が窯口に向って倒れるような状態で検出された。保存の良い1つの岩は、長さ30cm以上、幅34cm、厚さ10cmを有し、工具痕が顕著に認められる。窯体の周囲の盛土は、窯壁の崩壊を防ぐための裏込め土と考えられる。一般には、周囲に杭を立てしがらみを組み、窯壁の積み上げと平行して土砂を入れていくようである。

② 炭窯に伴う土壤

窯の前庭部には、3基の土壤が検出され、埋土の状態等から炭窯に付属するものと考えられる。

SK18（第28図）

東西1.4m、南北1.3mの隅丸方形に南西部に段状の張り出しをもつ。深さ約0.8m。埋土に軟質の岩を含むが、炭化物・焼土・焼壁はほとんど混入していない。

SK19（第28図）

0.9×0.6mの楕円形を呈し、確認面からの深さは0.2m程である。炭化物・焼土・焼壁が混じった土層を示し、明らかにこれらは炭窯から投げ込まれたものである。

SK20（第28図）

東西約2.6m、南北約1.8mの不整な楕円形を呈する。調査以前から凹んでおり、木の根等多く入り込んでいた。底面は凸凹しており、小さな掘り込み作業を繰り返した結果と考える。埋土には、焼壁のブロック等が認められることから、炭窯に伴う土取り穴と思われる。

3基とも出土遺物はない。

2 A地区遺構外出土遺物

(1) 土製品

第29図1は、口縁部の外反する截形土器である。頸部で緩く屈曲しながらおり、体上部に最大径をもつ。口縁部は調整されて無文化し、体部にはLR繩文が、左上→右下の方向で回転施文される。胎土には砂粒が多く含まれる。2は、4単位の波頂部をもつ深鉢形土器で、口縁部は緩く外反する。器面には斜行するLの撚糸文が施される。胎土には砂粒が多う混入されている。3は、緩く外反する深鉢形土器の口縁部である。口縁上部には斜めに繩文原体の側面圧痕列を施した、幅5mm程の隆帯が貼り付けられる。残存する部分に限って、この隆帯の上では3条、下には7条LR原体の側面圧痕が施される。また、45mm×7mmの大きさの透し孔が焼成前に穿たれている。胎土には砂粒が含まれるが、焼成は良好で堅微である。4は、貫孔をもつ土製品である。貫孔は図の上から下へ斜めに入っている。貫孔は径8mm程である。両側面の上部および、本体の下部では剥落した粘土の部分が認められる。

第30図1、3は風倒木痕の黒色土から出土した土器で、梢円形を呈する風倒木痕の長軸を対称軸にして左右に別々にあったものである。1は、深鉢形土器の体下半～底部である。器面にはLR繩文が左上→右下の方向で回転施文され、横走する繩文が表出されている。3は、台付の浅鉢形土器である。口縁は8単位の突起をもった波状口縁となる。口縁部は大きく外反し、頸部は直立する。体部は緩い曲線を描きながら、末広がりとなる台部へ続く。口縁部に付けられる各々の突起の上端には3箇所づつの刻目が施される。口縁直下には波状口縁に沿った沈線が巡り、頸部との屈曲部では2条の平行沈線が水平に巡る。体部には4単位づつの変形工字文が2段に施される。変形工字文は2条づつの沈線で描かれ、扁平な二等辺三角形を連繋させた構図をとる。上段の変形工字文ではその頂角の部分、下段のそれでは3つの角にあたる部分に2個づつ粘土粒を貼り付けて、沈線の結節部を形成する。また頸部と体部の屈曲部を巡る沈線上の変形工字文の頂角の中間に粘土粒張り付けの結節部が設けられる。体部と台部の境界にも3条の平行沈線が巡る。台部は水平に巡る沈線によって3段に区分され波状の沈線文が上段では1条、中段では2条の沈線によって施される。最下段は無文となる。台部下端も2条の平行沈線が巡っている。口縁内面上端にも波状の沈線が1条、また口縁および頸部内面にも水平な沈線が1条巡っている。器表面は本米全面塗彩されていたことが、沈線部分に残る朱によつて観察される。胎土はキメ細かな粘土を用いている。

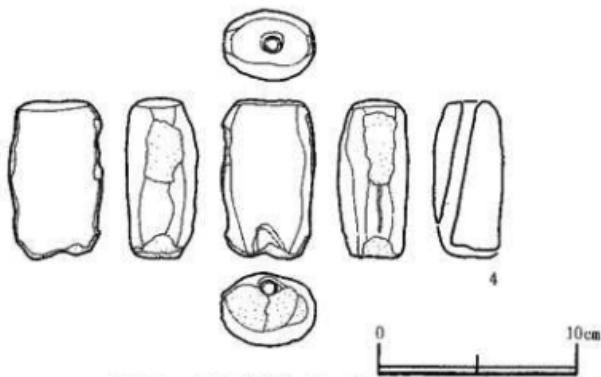
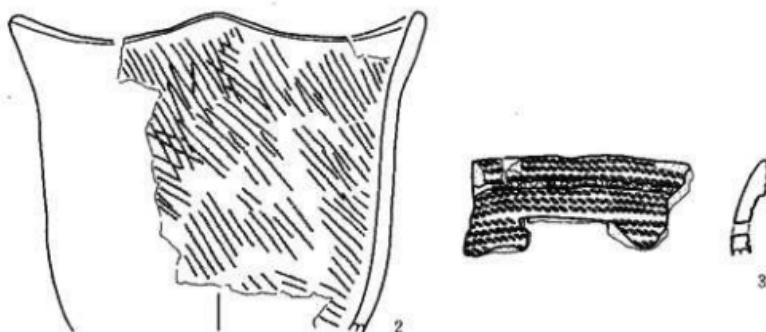
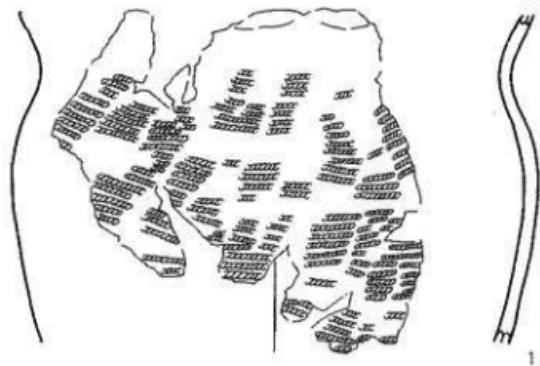
2は口縁部が僅かに内湾する截形土器の口縁部破片である。口唇上にはA突起がつけられる。また、斜位におかれた工具によって連續した刻目が施される。口縁部は削られて無文帶をなすが、体部の繩文帯よりも1段低くなっている。体部に施される繩文はLR原体を横位に回転施文したものである。

4は、緩い曲線を描いて屈曲する壺形土器の破片である。器面には擦りの細かなLR縄文が回転方向を変えながら全面に施文される。胎土には砂粒を含む。

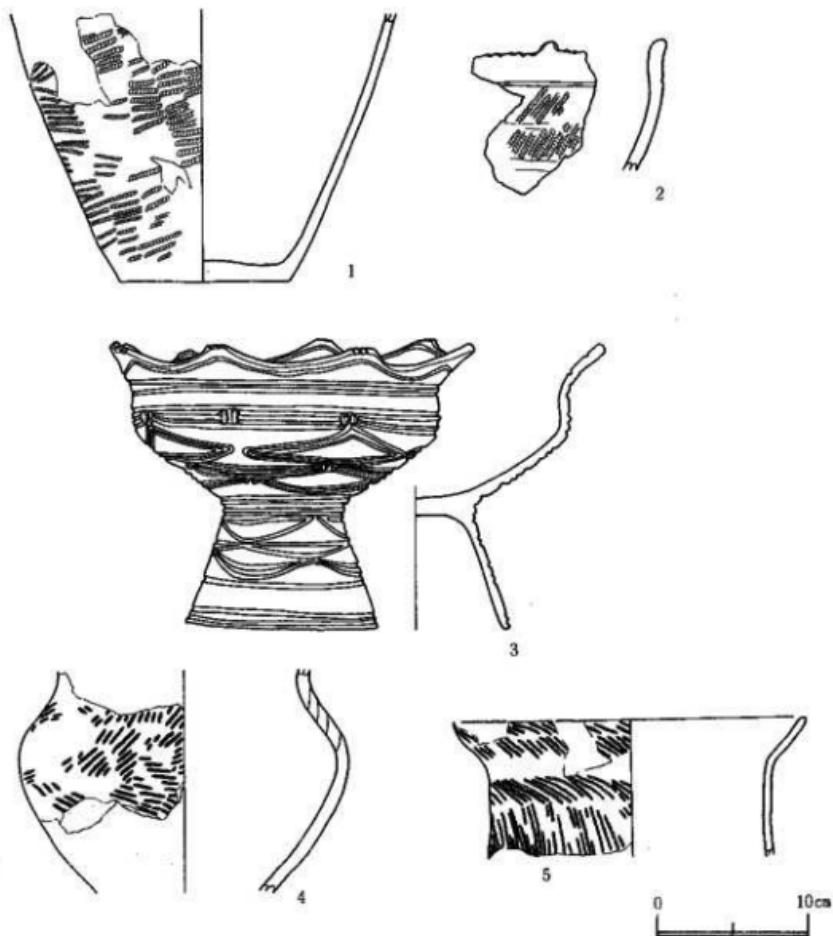
5は、口縁部が僅かに外反し、頸部以下が直立する深鉢形土器の破片である。体部は失われているが、本来は頸部から張り出す截形に近い器形をもっていた可能性もある。口縁部と頸部には条間の広いRL縄文が横位に帶状に施され、体部には、左上→右下の方向でこれもまた帶状に施文される。胎土は比較的キメの細かな粘土を用いている。口縁外面には煤状の炭化物の付着が認められる。

第31図は、大形の壺形土器の肩部である。3段、4単位の工字文が施文される。工字文の表面には上下から突き合わされる三叉状の陰刻をもった沈線と、両端で反転して描かれ環となる沈線、およびその内部にひかれる沈線の3種類の構成要素が組み合わされる。各段の工字文の間に1条の沈線が巡る。また、この3段の工字文の全体は上下で2条づつの沈線によって画されている。工字文帯の下には、いわゆる矢羽根状の沈線が右に開いた形で施文される。さらにその下は2条の沈線が巡り体部と境を画する。

第32図1は口縁部が直立し、頸部以下ゆるやかに膨らみ、体部中間に最大径をもつ小形の深鉢形土器である。頸部の文様帶には隆線による工字文が描かれる。文様と表出にあたっては6条の平行沈線がまず施文され、上位から4段目にあたる沈線の一部が広く抉られることにより、その上下の隆線が各々の上下段にある隆線と連結して工字文となる。体部にはLR原体が縦位回転施文されている。外面の下半、内面の上半には煤状の炭化物が付着している。2は口縁部が直立し、体部が緩い曲線を描いており台付浅鉢形土器である。台部は欠失している。口縁部には3条の沈線とその沈線間を磨く手法、またさらにその1部に粘土粒を貼付することにより工字文が表出される。底部内面には径22mmの円形文が描かれる。3は壺形土器の口縁部破片である。口縁下には4箇所に粘土粒と上位の沈線からの抉り込みをもった工字文が施されている。4もまた同様の壺形土器の口縁部破片である。5は、体部～口縁部が直線的に開く台付浅鉢形土器の形態をもつが使用時には蓋として機能したものであろう。台(つまみ)の部分には、10mm程の間隔をおいて2条の平行沈線が巡らされる。器表面にはLR縄文が横位回転施文される。6は小形の鉢形土器底部である。器面にはLR縄文が縦位回転施文されている。第32図7もまた小形の鉢形土器底部である。表面にはLR縄文が横位回転施文される。内面には褐色の膠着物が、ほぼ全面に認められる。8は、輪切りにした断面形が、長径18mm、短径13mmの棒状の土製品である。両端で欠損しているがゆるやかに曲がる形状から見て、腕を組む形の土偶のまさにその腕の部分であろうと思われる。9は波状口縁をもつ小形の鉢形土器の口縁部破片である。波頂部の上面観では左巻きの渦巻き文が隆帶によって表わされる。波頂下の口縁部には細い粘土紐の貼り付けによって右巻きの渦巻き文が施される。地文としてはLR縄文が縦位回転



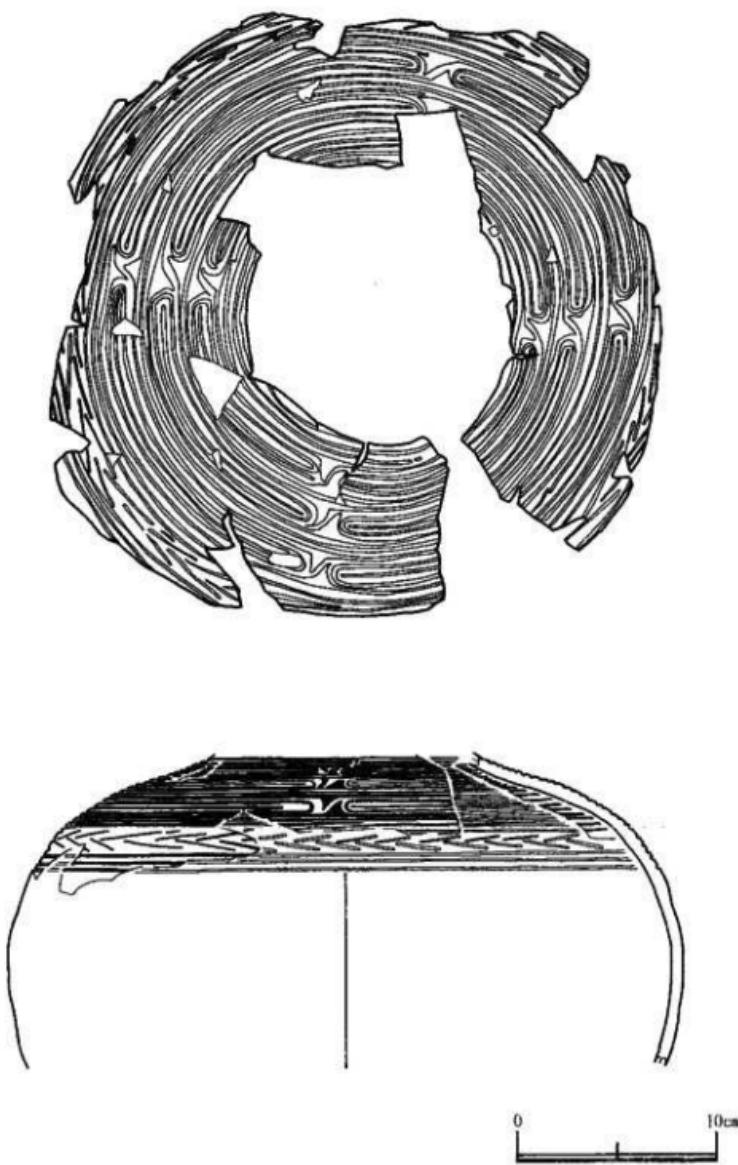
第29図 A地区遺構外出土遺物



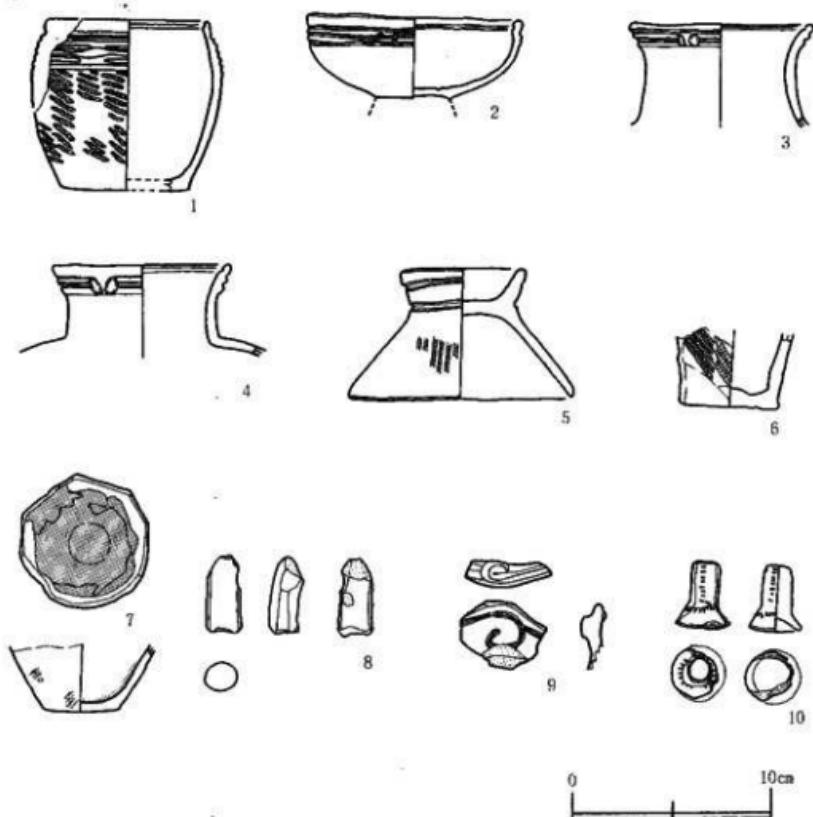
第30図 A地区遺構外出土遺物

施文されている。10はスタンプ形をした土製品である。スタンプの本体、傘状の部分では内面が大きく凹む。傘の上部には先端の角ばった工具によって刺突列が巡り、棒状の柄の部分でも4条の縱位の刺突列が施される。

第33図1～4は上面観が円形の大突起をもつ浅鉢形土器である。底部には3つの脚が付けられる。残存する突起は2個であるが、底部につく脚の数と対応して、本來の突起数は3つであろう。また突起間はA突起が作り出された波状口縁となり、僅かに外側へ反る。口縁部には4



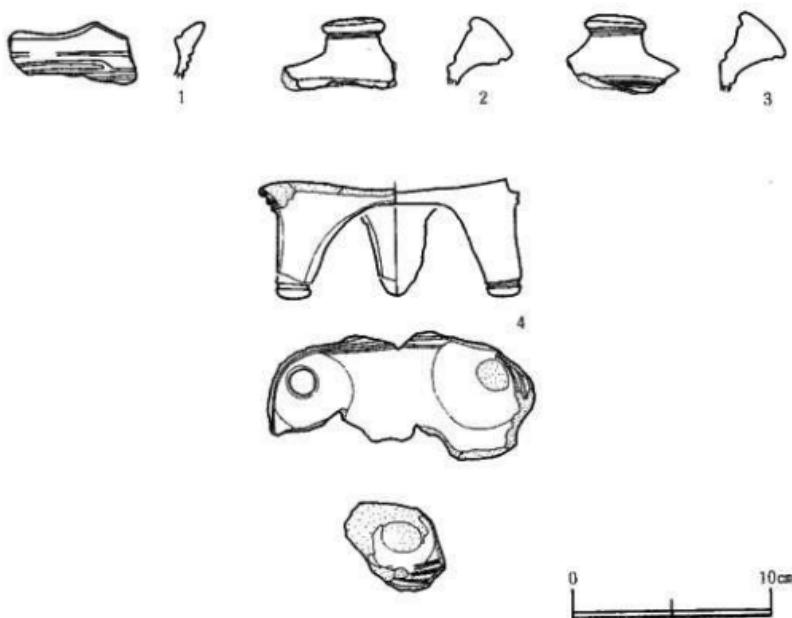
第31図 A地区遺構外出土遺物



第32図 A地区遺構外出土遺物

条の沈線とその間の隆線によって「」字文が表出される。また口縁部内面にも1条沈線が巡る。3つの脚部の先端には1条ずつ沈線が施され付け根部分でも、土器本体下部に施された変形「」字文が施される。

第34図1は、外側へ反る無文の土器片である。胎土には幾分纖維が混入される。砂粒は殆ど含まれていない。2は2種類の異なる絹条体の圧痕が、1つは横位に、他はその下の粘土紐の貼り付けによって幾分高まった隆起带上に継ぎの列をなして施されている。さらにその下にはLR繩文が横位に回転施文されている。胎土には砂粒と少量の纖維が含まれている。3は、器面に沈線による直線的な文様の描かれた土器片である。胎土にはやはり土器片が混入される。4は波状口縁の鉢形土器の波頭突起部分である。口縁部には突起下で2分する隆帶による棒状



第33図 A地区遺構外出土遺物

文が設けられ、内部には縦位の短沈線が施文される。突起内面には隆帯によって、左巻きの渦巻き文が施される。5も4と同様口縁部に沿って設けられた隆帯による枠状文内に、下方から角棒状の工具による刺突が横位に並列して施文されている。6は、肥厚した口唇に波状に隆帯が貼付される例。隆帯にはRの撚り紐の圧痕列が施される。口縁下にはRLの繩文が横位に回転施文される。7～13は同一個体である。僅かに内傾する深鉢形土器の口縁部である。口唇部は粘土紐を接着して作っているため、内面で大きく肥厚している。口唇部外面にはLRの繩文原体が連続して押圧されている。口縁部外面には、LR繩文が縦位に回転施文されている。14～18は、繩文施文後細い粘土紐を貼り付けて文様を描く例である。14では、LR繩文を縦位に回転施文した後に器面を水平に巡るように貼付された2条の隆線、その下に貼り付けられた渦巻梯の隆線が観察される。15・16は同一個体である。キャリバー形の口縁部をもつ小形の深鉢形土器であろう。口縁部に文様帶が設けられ、地文としてRL繩文が横位回転施文された後、文様帶上下限を水平に巡る隆線、それらを斜めに連絡する隆線、その結果作られる三角形の構図内の渦巻梯隆線などが、粘土紐の貼り付けによって表されている。17はRL繩文が横位に回転施文された後、先端をJ字形に曲げた隆線が縦位に貼り付けられている。18も同様LR繩文が

縦位に回転施文された後、器面に水平に2条の隆線が貼り付けられている。19は、小形の鉢形土器の口縁部である。口縁端は僅かに外側へ開く。体部にはLR繩文が縦位に回転施文されている。20は器面に比較的太い沈線が区画文を描くものである。地文にはLR繩文が縦位に回転施文される。21は、波状口縁をもつ深鉢形土器であろう。

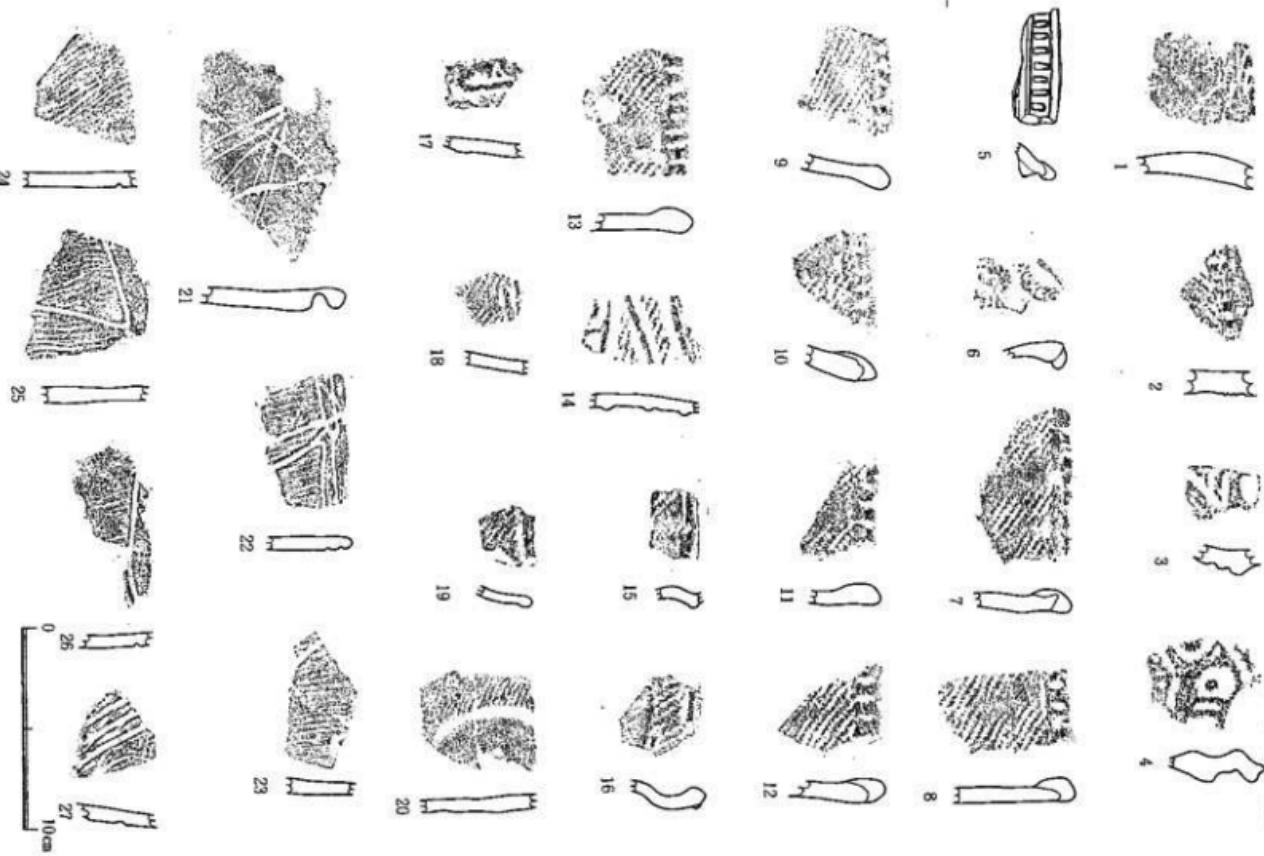
波頂部には指頭による深い刺突が施され、この刺突を頂点として2条づつの沈線が鋭角をして体部へおり、その構図内にも1条の沈線が垂下している。残存する部分では、この锐角をなす構図内にさらにまた相似形の構図が描かれるようである。22～27、および第35図1～4は同一個体である。口縁部は僅かに内傾する。口縁下には2条の平行沈線が巡る。沈線は1部で反転して連結する。この連結部分から、斜めに2条の沈線がひかれている。地文としてLの燃りの燃糸文が施される。

第35図5～10は同一個体である。Lの燃糸文が縦位に施された後、沈線による施文がなされる。9はやや丸みを帯びた体部の破片である。地文にLの燃糸文が施された上に文様が描かれている。

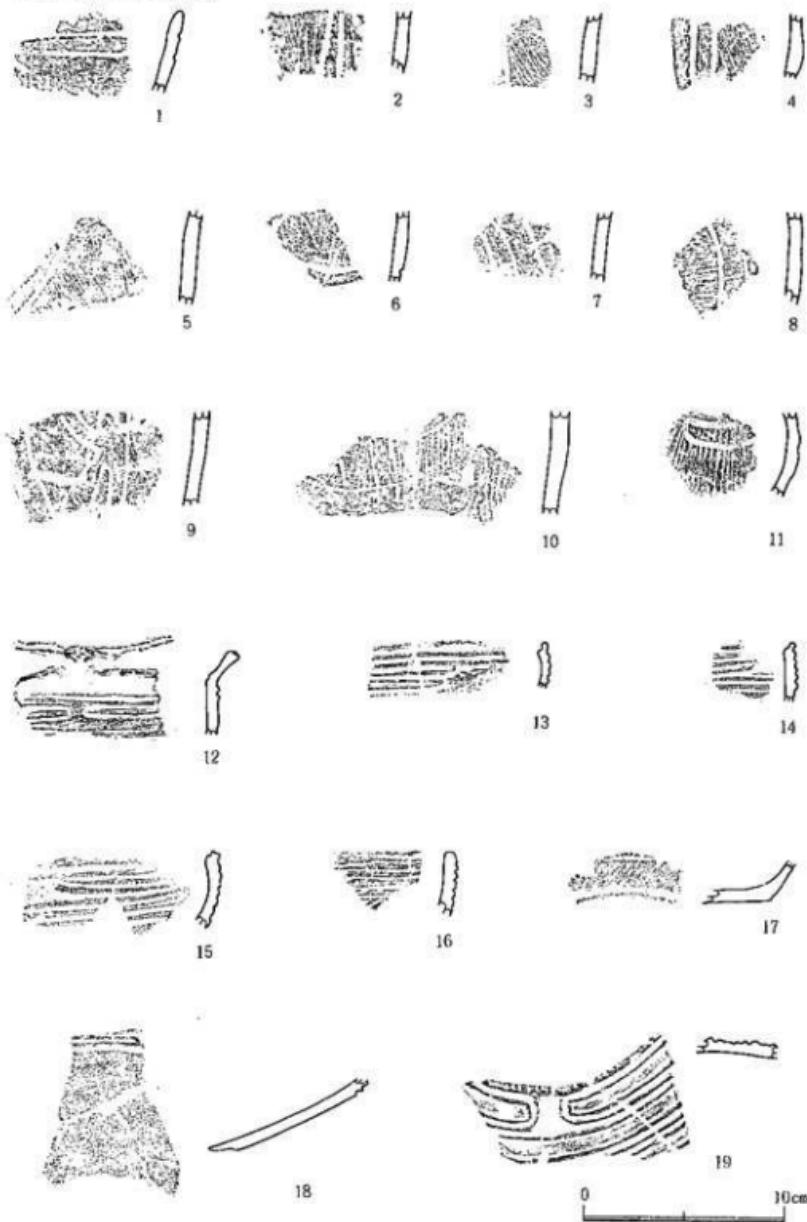
第35図12～19、第36図1・2は工字文および変形工字文の施された土器である。第35図12は口縁上端が僅かに外側へ反る鉢形土器である。口唇上には1条の沈線が巡り、上面に刺突を散らした突起が作り出される。口頸部の文様帶には文様帶の上下限を水平に巡る沈線とその内部に描かれる反転する沈線によって工字文が表出される。沈線の反転部が次々と重なる位置は、口唇上の突起の位置と対応している。13は、浅鉢形土器の破片である。口縁上端は直立し、口頸部の文様帶部分では僅かに膨らむ。文様帶には、沈線および沈線間を隆線化する手法により、上部に工字文、下部には変形工字文が描かれている。口唇裏側にも沈線が1条巡る。14は、7条の沈線により変形工字文が描かれる鉢形土器の破片。やはり口唇裏側にも沈線が施されている。15は、口縁部上端が僅かに外側へ傾き、口頸部の文様帶部分で僅かに膨らむ浅鉢形土器の破片。口縁はA突起が作り出されて波状を呈し、突起間を連結するように口唇上には沈線が施される。口頸部の文様帶では、6条の沈線によって変形工字文が表出される。16はやや内側へ傾く口縁部をもつ鉢形土器の破片。口頸部の文様帶には5条の平行沈線が描かれる。体部にはLR繩文が横位回転施文される。17は直線的な体部をもつ鉢形土器の底部である。体部にはLR繩文が施文された後、沈線が描かれる。おそらく工字文もしくは変形工字文の構図となる。18は浅鉢形土器の体部破片。口頸部には工字文の施される文様帶をもつ。体部にはLR繩文が施文されている。19は大形の壺形土器の肩部の破片である。刻目を施した隆線、反転する隆線か、沈線間を削り込む手法および隆線化する手法によって表出されている。内面は横位に丹念に調整されている。

第36図1・2は同一個体。上端が二叉に分かれるA突起をもつ波状口縁の浅鉢形土器である。

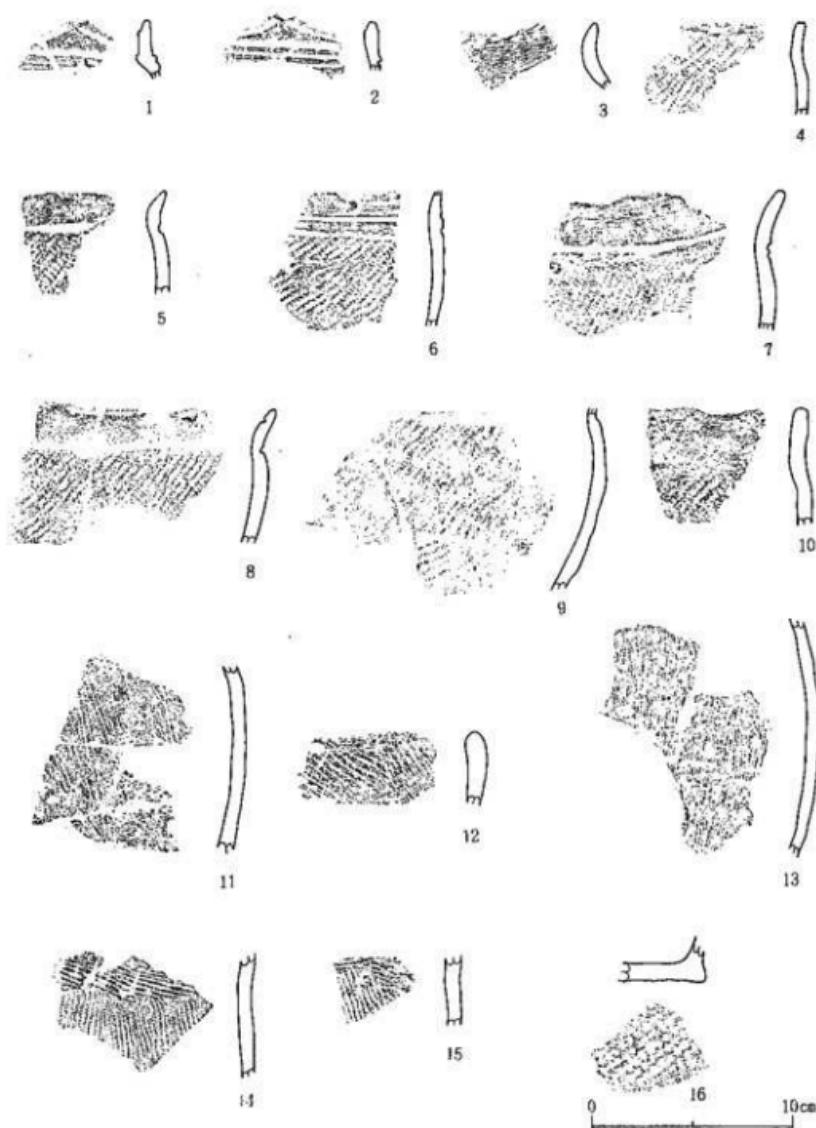
第2節 調査の記録



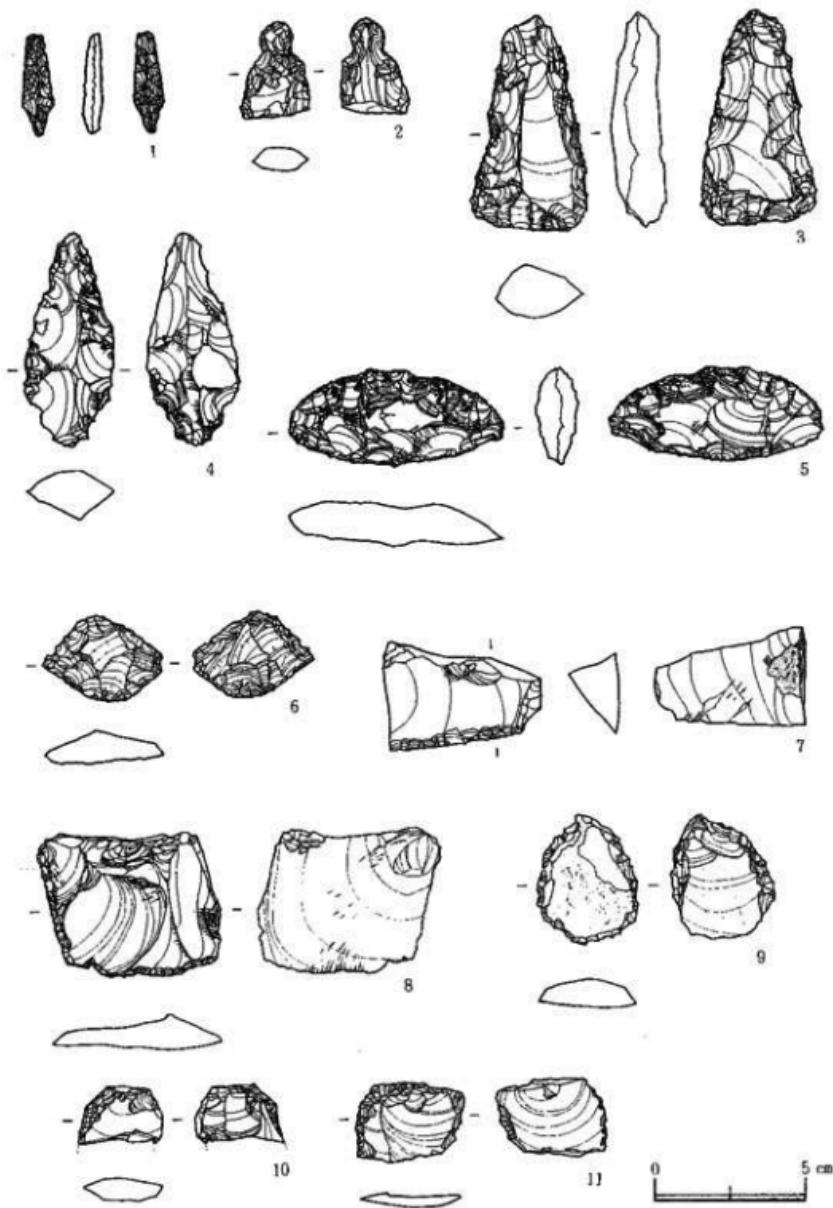
第34図 A地区調査外出土遺物



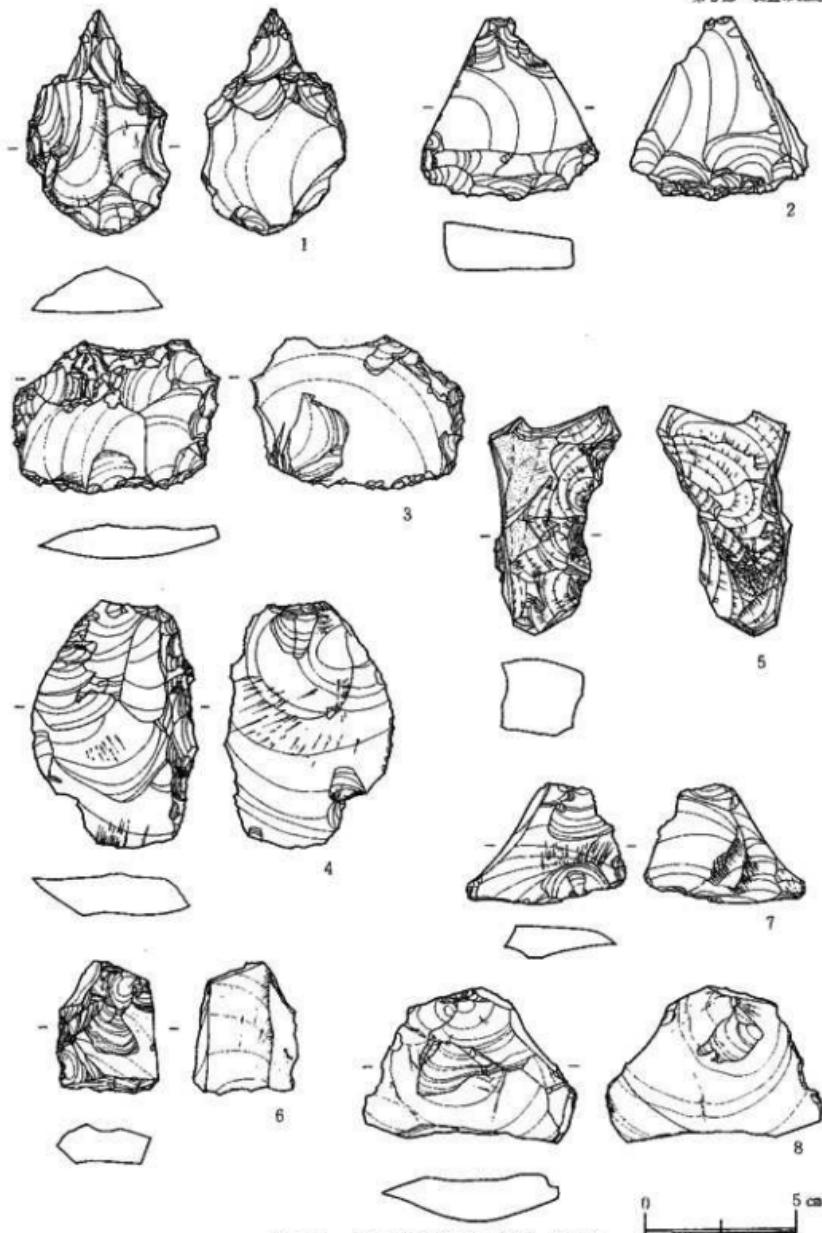
第35図 A地区遺構外出土遺物



第36図 A地区遺構外出土遺物

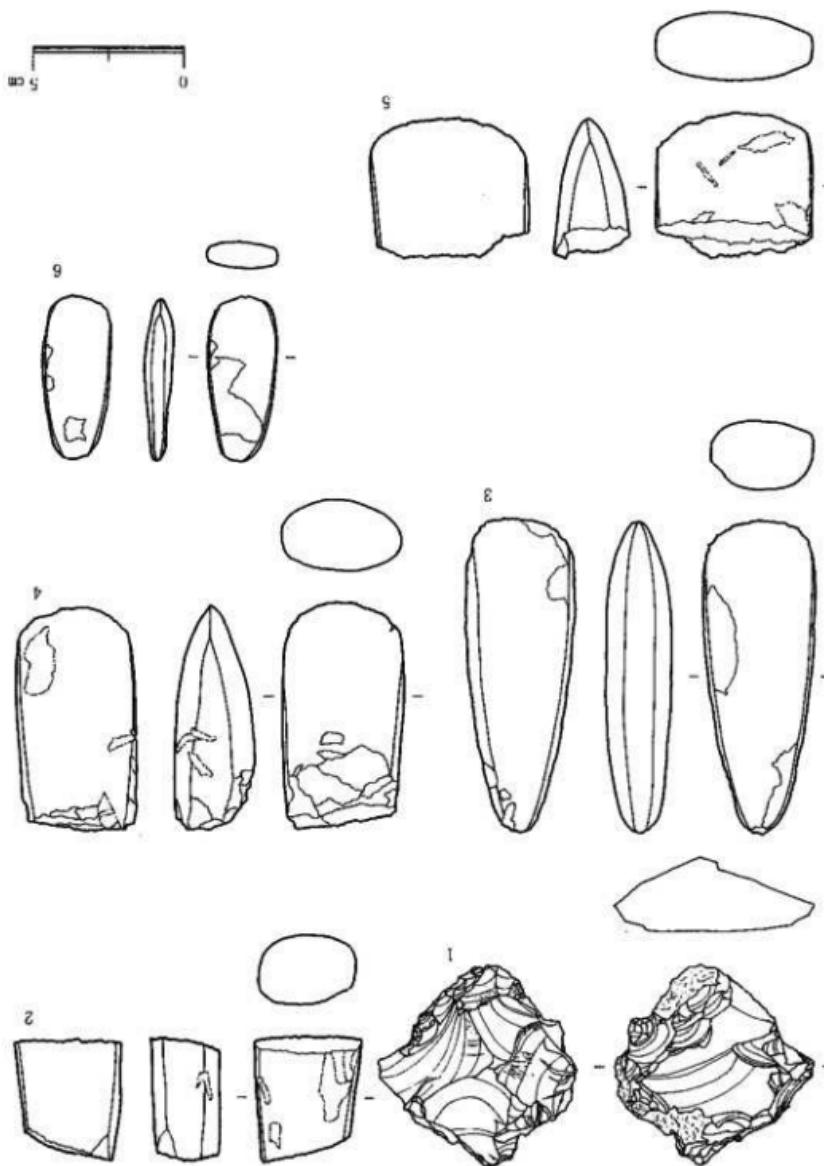


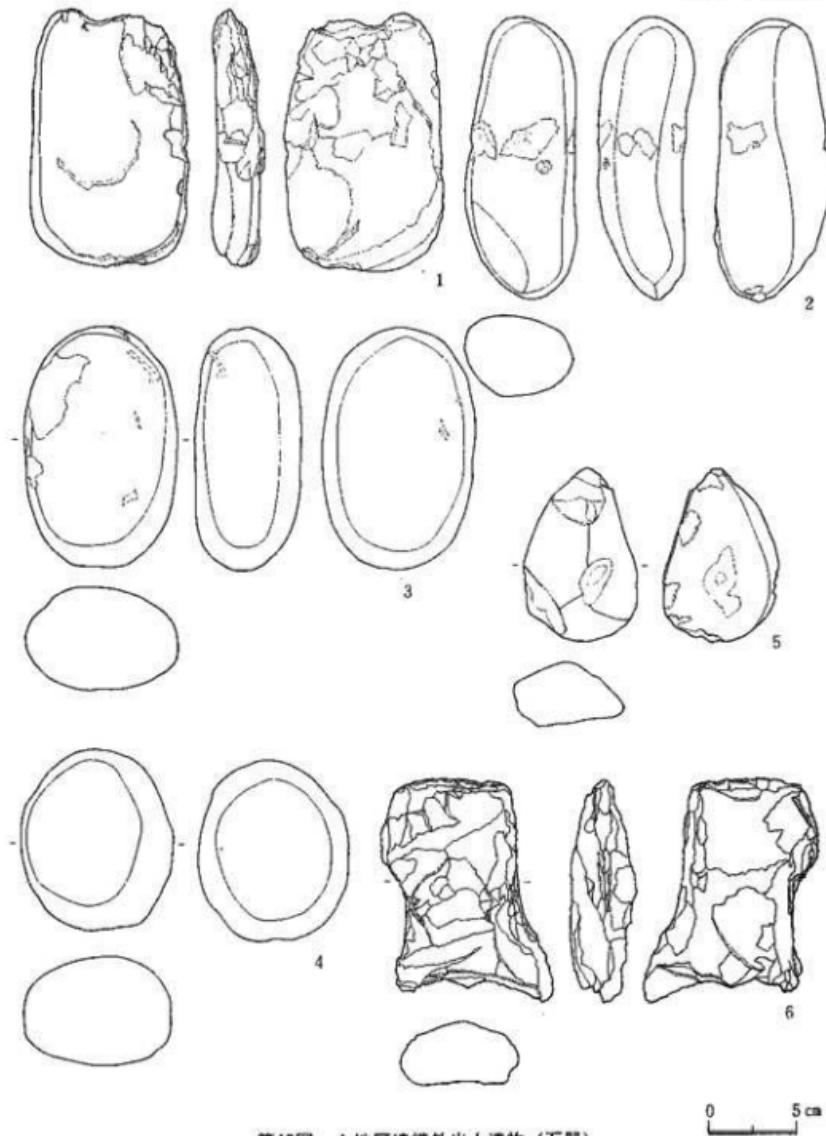
第37図 A地区遺構外出土遺物（石器）



第38図 A地区遺構外出土遺物（石器）

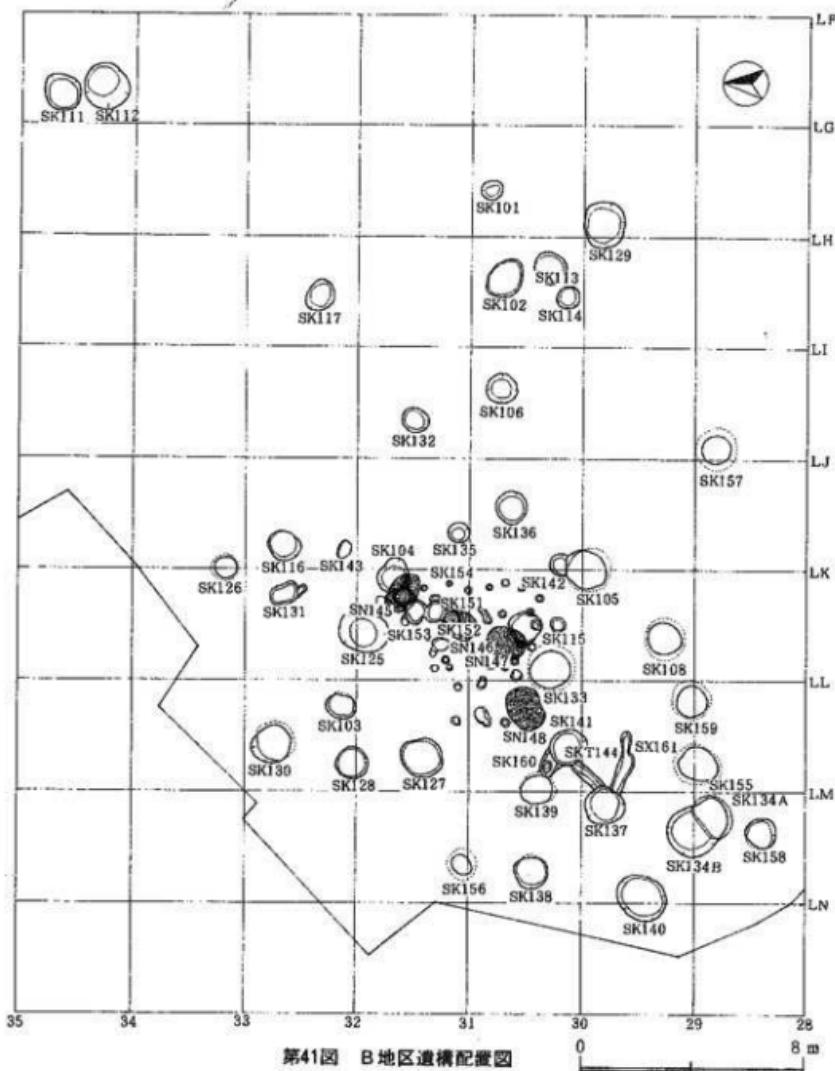
第39圖 A地區遺跡出土遺物(石器)





第40図 A地区遺構外出土遺物（石器）

う。口縁の内外面には沈線が1条ずつ引かれる。頸部の文様帶には沈線間を隆線化する手法により変形工字文が描かれる。口縁部内面には水平な沈線が1条巡らされている。3~10は体部



第41図 B地区造構配置図

に縄文が回転施文される粗製の截形土器である。3は無文化された口縁部が大きく外反し、上端と体部にLR縄文が回転施文される。4は口唇上に斜位に刻目が施され、口縁以下LR縄文が横位に回転施文される。5～9は頸部に1～2条の沈線が巡る例である。6は口唇上にも縄文の回転圧痕があり、7・8はA突起を作り出すことにより、小波状を呈する。いづれも口縁部

は無文帶となり、体部にはLR縄文が横位に回転施文される。10は頸部の沈線がなく縄文が施されるものである。口縁は7、8同様の小波状口縁となる。11は器面に条痕文が施される深鉢形土器の体部である。12・13は撚糸文の回転施文される例。12はR、13はLの撚りの原体を用いている。14・15は同一個体。絡条体の回転押圧により、条間隔の広い縄文を表出させるもの。体部と頸部とで回転方向が異なる。16の底部資料は底面に網代痕が観察される。

(2) 石製品

今回調査した面積に対し、出土した石器は非常に少ない。また、その出土状況を見ても、明らかにその箇所で剥片剥離作業を行ったと認められる場所もなく、それぞれが散発的な出土に止まつた。

第37図1は先端部が欠失した石鏨、2は下半を欠く縦型の石匙である。3は石籠、4は石槍か。5・6はエスキモーのウーマンズナイフ様の石器である。5の表裏面上半にはアスファルトが付着しており(図のドットの部分)、その機能の推定可能なものである。7～第38図1～8、10・11、第39図1は大小の片の一側縁に直線的あるいは鋸歯状の刃部の作出された石器で第38図9は円形搔器様である。

第39図2～6は磨製石斧である。3・6はほぼ完形で、2・4・5は上下端あるいは上半を欠いている。6は小型で薄い。

第40図1は、縄文時代前期後葉～中期前半の円筒土器に伴うことの多い、いわゆる半円状扁平打製石器である。上辺に抉りがある。同図2・5は凹石。同図3・4は円礫の数面が磨かれている。同図6は石鏨などと呼ばれる打製石斧の一種で、下半を欠いている。

3 B地区の検出遺構と遺物

B地区で検出された遺構は、土壙43基、焼土遺構4基、Tピット1基、溝状遺構2基。この他ピットがおよそ40基ある。なかでも土壙群が本地区的主構成をなす。SK101・102とした炭化物の詰まった土壙については、比較的新しい時代の構築と思われるが、他は出土遺物・堆積状況などから、縄文時代晩期の所産と考えられる。

遺構は調査区南西部の小さな舌状台地先端部に集中する。SK111・112を除くと、南北5グリッド、東西6グリッド内およそ500m²に集中して構築されているという特徴を見いだすことができる。この部分を土壙集中区と仮称しておく。

(1) 土壙

B地区で検出された土壙は43基で、これは平面・断面形態、埋土の状態などから5類に分け

られる。aは、平面は円形を基調とするもので、口径・底径・深さとも1mを超す位の、比較的大型の土壙である。深さより口径値の大きいタイプが多く、袋状あるいは円筒状に掘り込まれている。bは、aよりやや小型で円筒状・袋状に掘り込まれている。断面形が綾長の長方形に近いものである。cは、埋土上部中央に地山土あるいは褐色土などを意図的に埋め込んだ、土壤層と考えられるもの。dは、上記以外のタイプで平面・断面形はバラエティーに富む。eは、埋土に炭化物の詰まった土壙で新しい時期と考えているもの。

土壙e: A地区の土壙aに対応できるもの。

SK105 (第42・63図、図版37)

土壙集中区ほぼ中央で検出した。SK142を切って構築されている。開口部は1.4×1.6mでやや不整な円形を示す。断面をみると、南東部で若干外側に膨らむものの、全体にはほぼ円筒状に掘り込まれている。確認面からの深さは1.3~1.35mである。埋土には地山土がブロック状に入り込んでいる。

出土遺物は、縄文土器、凹石、フレークなどがある。第63図1は拳大の凹石である。凹面は1面のみで、明緑灰色を呈した砂岩を素材としている。

SK108 (第42・53図、図版37)

土壙集中区中央南よりに位置する。平面は口径約1.25mの円形を呈する。底径は約1.4m、最大径は底面より約20cm位上で1.6mを測り、きれいな袋状に掘り込まれている。埋土中には径2~3cmの炭化物を少量含む。

第53図1~4が埋土中から出土している。1は、口頭部が大きく屈曲する鉢形土器の破片。口唇上にはB突起が付けられる。頸部の文様帶には調整を受けた平行する沈線が隙縫を形成し、1箇所隣線上に刻日列が施される。口縁内面にも沈線が1条巡る。1~4は口縁部が僅かに内傾する深鉢形土器の破片。3・4は同一個体。3片とも口縁~体部にはR繩文が横位回転施文される。胎土には砂粒を多く含む。

SK129 (第42図、図版37)

土壙集中区東端で検出した。昭和59年の分布調査において一部プランが確認されていたものである。平面は1.7×1.5mのはば円形を呈する。底径はおよそ1.2mで同じ土壙aのなかまに比すると、底径が少し小さくなるものである。確認面からの深さは約1.2mである。

出土遺物は縄文土器片があり、1点については小片ではあるが無文の傘形土器の口縁から頭部と思われるものも含まれている。

SK130 (第42・53図、図版38)

土壙集中区北西側で検出した。土壙は北西方向に傾斜する斜面上に構築されている。平面は径約1.4mの円形を呈する。掘り込みは南側にやや膨らむ袋状を示し、深さは南側で1.3m、北

側で0.8mを測る。

出土遺物は縄文土器片とフレークがある。第53図5、は体部が直線的にひらく浅鉢形土器の破片である。口縁上端が肥厚するものであるが、口縁内面の粘土貼り付け部分は剥落している。口縁部外側には沈線間を調整することによってできた2条の隆線が巡る。体部は細かなLR縄文を横位回転施文した後、雲形文が表出される。6は、口縁部から体部まで直線的におりる鉢形土器の破片。口唇上には1箇所突起がつけられ、また8mm程の間隔で刻目が施される。口縁部には幅4cm程の文様帯が設けられるが、文様帯中には粗雑な沈線がひかれて、矢羽根状の文様を作成する。文様帯下の体部にはLR縄文が横位回転施文される。胎土には径1~3mm程の比較的大きな砂粒が含まれる。7は、頸部で屈曲する鉢形土器の破片である。口縫部に文様帯が設けられ、調整を伴わない沈線描画によって文様が描かれる。8は、連続した山形の突起をもつ波状口縁の鉢形土器の口縁部破片で、器面は磨滅が著しい。9は、器面にLR縄文が横位回転施文されている。10も器面全体に縄文を転がした深鉢形土器の破片。縄文はLR原体が左上→右下の方向で回転されている。

SK133（第43・51・54図、図版38・48）

土壤集中区ほぼ中央に位置する。平面は約1.5×1.6mの円形を呈する。深さは約0.9mあり袋状に掘り込まれている。最大径は底面から少し上で約1.7mを測る。埋上全体には黄褐色土粒子が霜降り状に含まれている。

埋上中から縄文土器が出土している。第51図1は口唇上に2個1対のB突起を付けた鉢形土器の口縁部破片で、口縁部はやや内傾する。器面にはLR縄文が左上→右下の方向で回転施文され、縄文の条の横走に近い。胎土には粗い砂粒を含む。第54図1は、器面にLR縄文が横位回転施文されたもの。2も同様にLR縄文が施文されているが回転方向は左上→右下の方向である。

SK134A（第43図、図版39）

土壤集中区南西部に位置し、SK134Bを切っている。平面は1.6×1.2mで、北東→南西方向にやや長い楕円形を呈する。袋状に掘り込まれ、深さは約0.95mである。

SK134B（第43・55図、図版39）

SK134Aに南東部を切られている。断面でみた埋土の堆積状態から、北西→南東方向にやや長い楕円形を呈していたと考えられる。残存する長さは1.3m、幅は約1.7m、深さは約1.0mである。

SK134A・Bはプラン確認面の埋土と、周囲の地山上の境界が判然とせず、確認段階では1つの大きな土壤と考えていたものである。

出土遺物には縄文土器片がある。第55図3は、口縁部のやや内傾する深鉢形土器の破片である。口縁→体部にはLR縄文が横位回転施文される。

SK138 (第43図、図版39)

土壤集中区西端で検出した。平面は $1.15 \times 1.2\text{m}$ で円形を呈する。掘り込みは、東側で一部、外側に膨らむが、基本的に筒状を意図したものと考えられる。深さは約 1.05m である。

縄文土器片が出土している。

SK140 (第43図、図版39)

土壤集中区西端に位置する。平面は $1.7 \times 1.8\text{m}$ の円形を呈する。地山面から円筒状に掘り込まれ、深さは約 1.0m である。

出土遺物には縄文土器片が出土している。

SK137 (第44・54図、図版40)

SKT144、SX161と重複する。SKT144を切っているがSX161との新旧関係は不明。平面は、径 1.4m の円形を呈する。掘り込みは側壁が丸みをもって内湾し、底盤がやや小さくなるもので、SK129の断面形態と同じである。深さは約 0.85m 。

第54図3・4が埋土中から出土している。3・4は、口縁部の内傾する深鉢形土器の破片である。3は、口縁～体部にかけてLR縄文が左上→右下の方向で回転施文されている。4も同じくLR縄文が横位回転施文されている。

SK139 (第44・54図、図版40・41)

SX160と重複するが新旧関係は不明。平面は、 $1.15 \times 1.10\text{m}$ で円形を呈する。袋状に掘り込まれ、深さは 1.0m を測る。

第54図5の口縁部が連続した突起となる波状口縁の鉢形土器が出土している。口縁部に3条の沈線が巡るが、第1条目の沈線は口縁に沿って波状に描かれる。体部には細かなLR縄文が横位回転施文される。

SK141 (第44図、図版40・41)

SKT144・SX160と重複する。SKT144を切っているが、SX160との新旧関係は不明である。開口部は $1.35 \times 1.2\text{m}$ の円形を呈する。掘り込みは、中央よりやや上方にくびれ部を有するフ拉斯コ状を示し、深さは約 1.05m を測る。縄文土器片が出土している。

SK155 (第45・51図、図版42)

土壤集中区南西部で検出した。平面は、 $1.4 \times 1.5\text{m}$ の円形を呈する。深さは確認面から $0.7 \sim 0.8\text{m}$ で、やや袋状に掘り込んでいる。底面中央西側、壁寄りに拳大の石が10数個確認された。

第51図2が埋土中から出土した。口縁上端が直立し、体上部で膨らむ小形の鉢形土器である。口唇上には細かなB突起が作り出される。丸味を帯びた頸部には2条の沈線が巡る。体部は細かなLR縄文が横位回転施文される。

土壤b:A地区的土壤dに対応できよう。

SK106 (第45図、図版46)

土壤集中区中央東寄りに位置する。平面は $1.05 \times 1.1\text{m}$ で円形を呈している。確認面では、褐色土のプランの中央に黒色土・黒褐色土が丸く配された形で検出された。確認面からの深さは約 0.95m で筒状に掘り込まれている。

出土遺物には縄文土器、フレークがある。

SK111 (第45図、図版47)

台地先端部の土壤集中区から離れた北東方向、すなわち台地中央寄りにSK112と隣接して存在する。平面は $1.3 \times 1.2\text{m}$ の円形を呈する。深さは 1.1m を測り、筒形に近い袋状に掘り込まれている。

SK136 (第45図、図版49)

土壤集中区ほぼ中央に位置する。平面は $1.2 \times 1.1\text{m}$ で、ほぼ円形を呈している。深さは約 0.85m で袋状に掘り込まれている。埋土は全体に褐色・黄褐色土で充填されており、他の土壤において認められる黒っぽい土（暗褐色土、黒褐色土）の堆積はない。

土壤c**SK112 (第46図、図版43、47)**

土壤集中区から離れ、SK111と隣接して存在する。SK111とはタイプの異なる土壤である。平面は $1.7 \times 1.6\text{m}$ の円形を呈する。深さは確認面から約 0.5m で壁が緩く立ち上がる。埋土は純い黄褐色土の真ん中に赤味を帯びた褐色土が配され、褐色土中には人頭大の石を埋め込んだように検出できた。にぶい黄褐色土には、径 $0.1\sim 1.0\text{cm}$ の大粒山土の粒子を霜降り状に含んでおり、明らかに人為的に埋められた土壤と言えよう。

遺物には、褐色土中より少量の縄文土器片が出土している。

SK114 (第47図、図版47)

土壤集中区東端、SK113の南西側に隣接している。平面は $0.9 \times 0.8\text{m}$ の円形を呈し、SK113同様漸移層で確認した。この段階で円形プランの中央に、明らかに人為的に埋められたと考えられる白っぽく見える明黄褐色粘土が認められた。確認面からの深さは約 0.3m である。

出土遺物はない。

SK116 (第46・51・54図、図版44)

土壤集中区北端に位置する。平面は $1.0 \times 1.2\text{m}$ のやや南北に長い円形を呈する。埋土中には、粗型の深鉢形土器1個体が横につぶされた状態で出土した。土器の検出された土層には、焼土を主とする褐色土が $10\sim 15\text{cm}$ の厚さで堆積している。確認面からの深さ $0.5\sim 0.6\text{m}$ で筒状に掘り込まれている。

第51図3は、口縁部が僅かに内傾する鉢形土器である。器面にはRL縄文が横位に回転施文

される。擦りの強い原体であるためか、もしくは0多状段のためか縄文の節間隔はかなり密である。胎土には粗い砂粒を含む。第54図9は、口縁部のやや内傾する深鉢形土器の破片。体部にはLR縄文が横位回転施文される。10・11は地文LR縄文を回転施文した後、彫刻的な手法によって雲形文を表出させたもの。器形は浅鉢形を呈すると思われる。

SK117 (第46図、図版44)

土壤集中区北東端に位置する。平面は $1.2 \times 0.95\text{m}$ の東西にやや長い楕円形を呈する。プラン確認面では、にぶい黄褐色土の中央に赤っぽく見える褐色土が丸く配され、人為堆積を想起させた。掘り込みは約 0.5m あり、埋土下位には、焼土・炭化物が若干混入している。

出土遺物には、縄文上器片が1点ある。外面は磨滅しているが、内面には煤状炭化物がびっしりと付着している小片である。

SK125 (第46・54図、図版45)

土壤集中区中央北寄りで検出した。平面は $1.4 \times 1.8\text{m}$ で南北に長い楕円形を呈している。プラン確認段階で、褐色土の中央に楕円状に赤味を帯びた黄褐色粘土が認められた。底面は平坦ではなく、中央にいくほどわずかづつ窪んでいく。壁の立ち上がりは緩く深さは中央で 0.7m を測る。

出土遺物には縄文土器がある。第51図4は、台付鉢形土器の台部の破片である。下端を除いてミガキ調整により無文化される。本体表面および台部の下端には、細かなLR縄文が横位回転施文される。第54図12は、器面にLR縄文が施された深鉢形土器体部の破片。原体の回転方向は左上一右下および縦位である。

SK127 (第46・54図、図版46)

平面は、 $1.4 \times 1.5\text{m}$ の円形を呈する。断面形は袋状になされ、確認面からの深さは $0.75 \sim 0.85\text{cm}$ を測る。他の土壤に比較し、黒褐色土混入の度合が大きく全体に黒っぽく見える。埋土上部中央には橙色ないしは褐色の地山土と考えられる粘質土が丸く配されている。

出土遺物には第54図13の破片がある。器面にRL縄文が横位回転施文され胎土に砂粒を多く含む。

土壤d: A地区の土壤b・eを含むものであろう。

SK103 (第47図)

土壤集中区北西側に位置する。平面は $0.8 \times 1.1\text{m}$ の南北にやや長い円形を呈する。断面形は、小さな袋状を示し、深さは約 0.3m である。

縄文上器片が出土している。

SK104 (第47・51図、図版46・50)

土壤集中区ほぼ中央で検出した。SK154・SN145と重複している。SN145より旧く、SK154

を切って構築されている。平面は $1.3 \times 1.1\text{m}$ でやや東西に長い円形を呈する。壁は丸みをもつて立ち上がり、深さ約 0.5m の底部は平坦である。

出土した遺物には、縄文土器、フレークがある。第51図5は無文の浅鉢形上器である。体部の内外面中程に暗赤色および黒色の膠着物の筋状の痕跡が認められる。漆によって塗彩された可能性が強い。胎土には細かな砂粒が混入されている。第54図14は口縁部の直立する深鉢形土器の破片である。口縁～体部にかけてRL縄文が横位回転施文される。15は1の燃りの無節の縄文が施文されたもの。原体の回転方向は横位である。16はLR原体が横位に回転施文された鉢形土器の体部破片である。

SK113 (第47図、図版47)

土壤集中区東端でSK114と並んで検出された。平面は口径 1.2m の円形を呈し、漸移断面で確認した。断面でみると、くびれ部を有する小さなフラスコ状を示し、深さは約 0.45m である。くびれ部以下の埋土は褐色土に黄褐色粘質土・炭化物等を乱雜に含んでいる。

出土遺物はない。

SK115 (第47図)

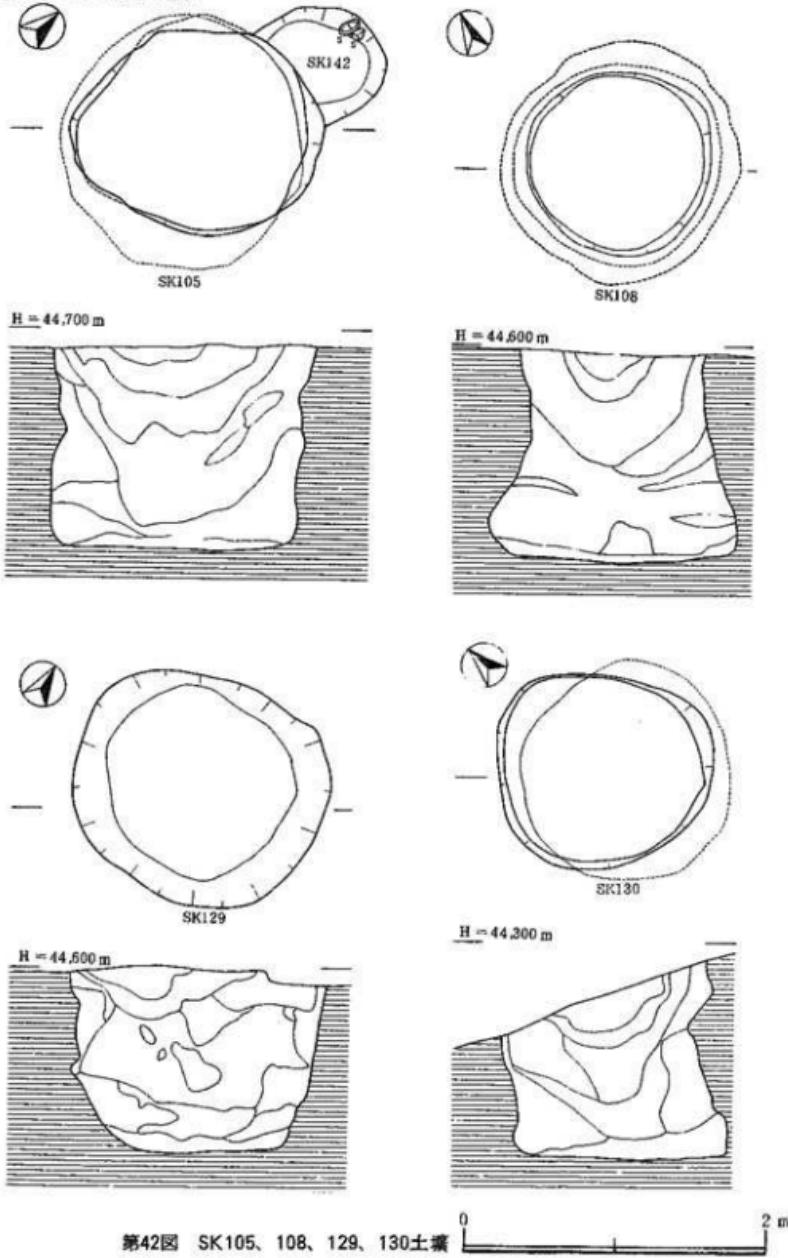
土壤集中区中央で検出した。SN147と3基のピットと重複し、前者より聞く後者より新しい。口径約 1.2m の円形を呈し、深さは 0.1m 前後と浅い。

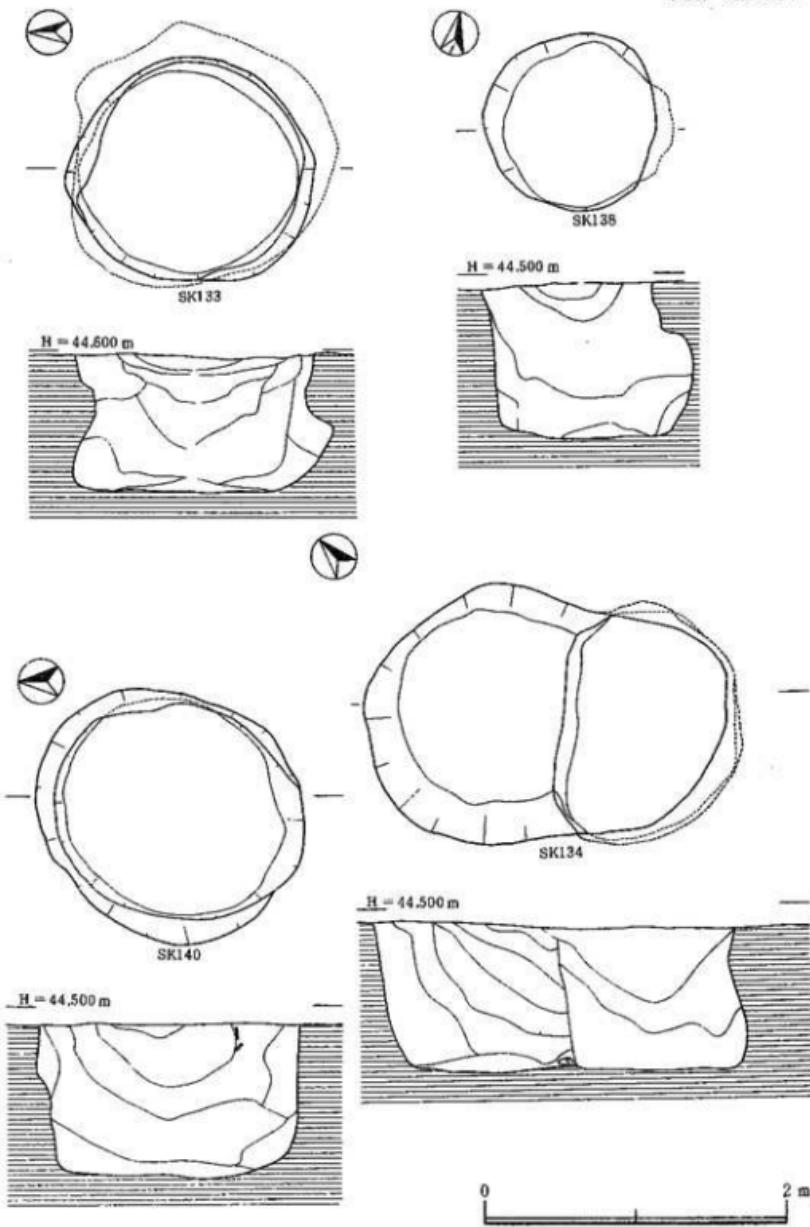
出土遺物はない。

SK126 (第47・52・54図、図版48)

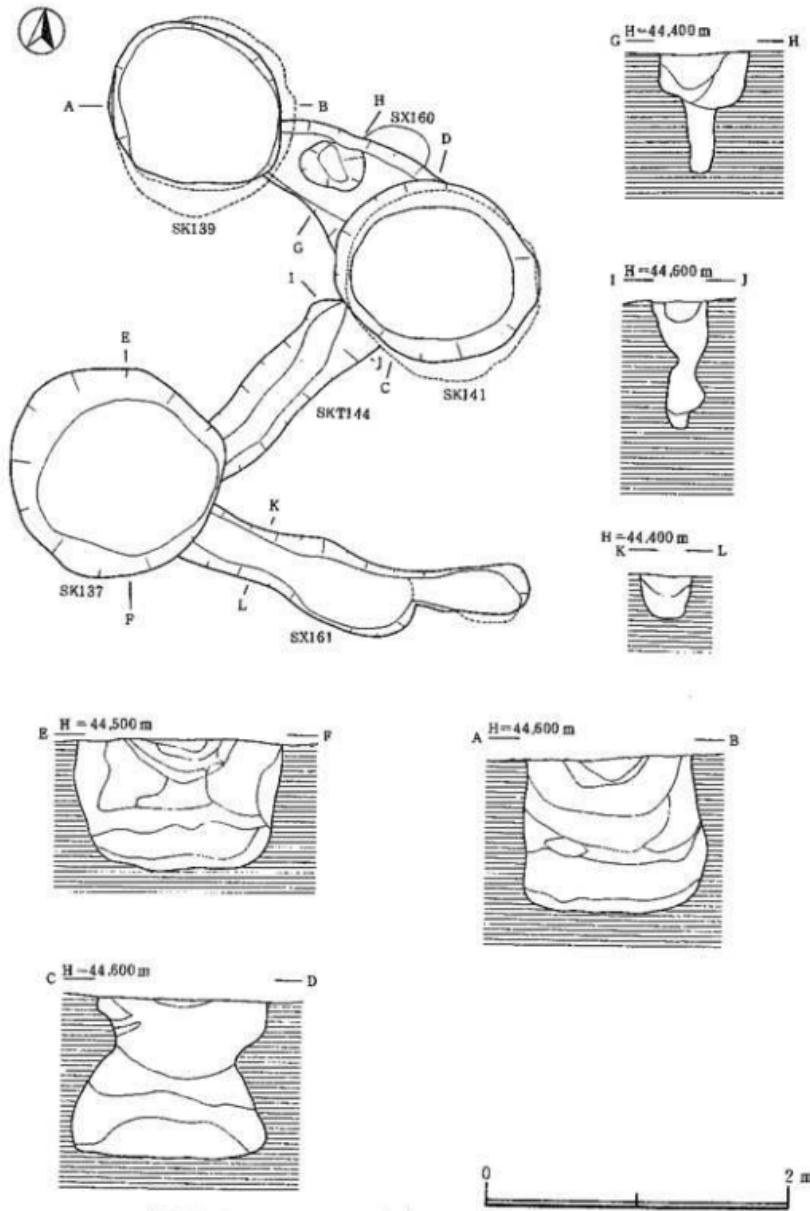
土壤集中区北端で検出した。口径約 0.8m の円形を呈し、小さな袋状に掘り込まれている。深さは約 0.45m 。埋土には全体的に炭化物の含有が認められる。炭化物は下位ほど径が大きくなるようであり、上位では $1 \sim 2\text{mm}$ 大ほどであるのに対し、底部近くになると 10mm 内外を測る。

出土遺物は、縄文土器、フレークがある。第52図6は、10片ほどの破片が接合した資料であるが、このうち3片はSK116から出土したものである。上器は口縁上端が内傾し、体部がゆるやかな円弧を描いており浅鉢形土器である。底部は体部からの弯曲にしたがって丸く膨らむが、3重の同心円文を描いて底部を作り出している。残存部からの測定で、外周の内の径は 90mm である。口縁部には2条の沈線が巡る。体部は上半が文様帯、下半は無文帯となり、その境界は2条の平行沈線によって画されている。文様帯中にはいわゆる裝形文が、磨消縄文の手法により描出される細文は、細かなLR縄文を横位に回転施文したものである。第52図7は、壺形土器の頸部の破片である。やや内側へ傾斜している。表面はミガキ調整により無文化されているが、口縁上端には粘土紐の貼付による降帶が新しく、その剥落した痕跡が明瞭に残る。また、頸部の下端も肩部との接着部で落したものである。第54図17は、口縁部にB突起列が付けられた深鉢形土器の破片。口縁部の文様帯には調整を伴わない沈線、および列点文によって文

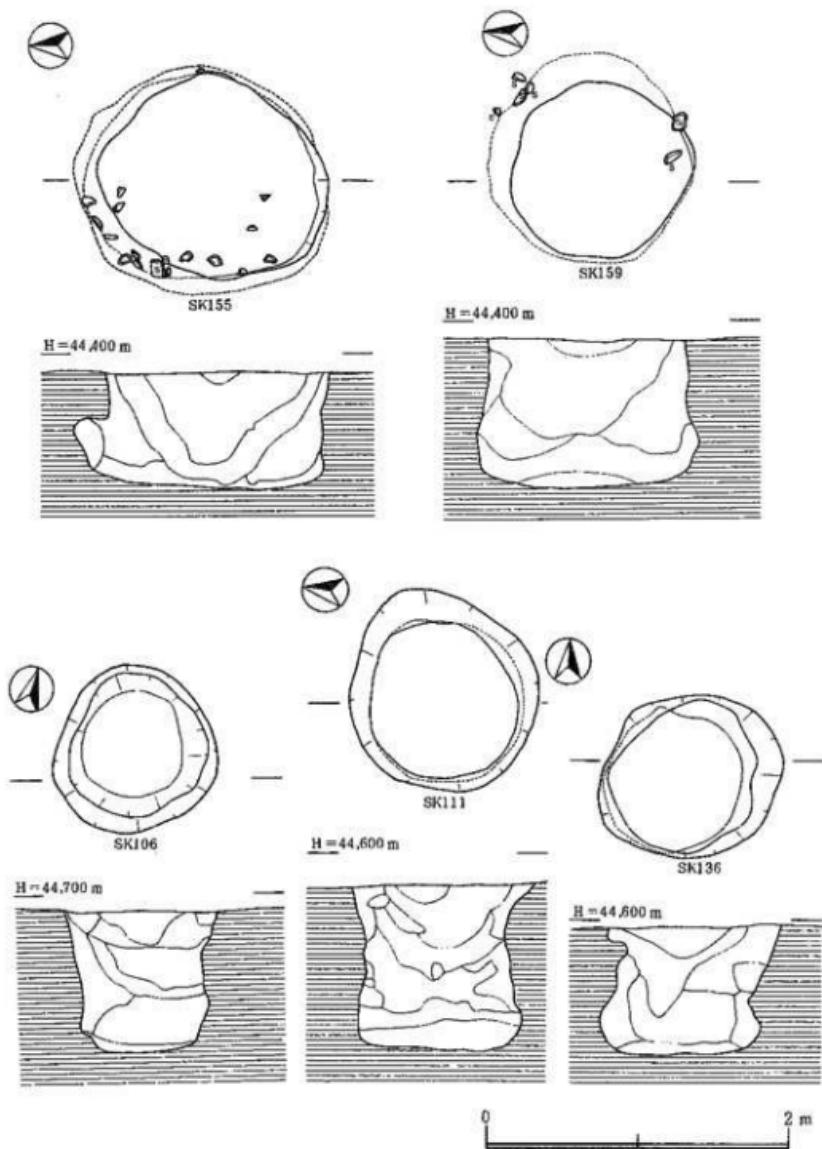




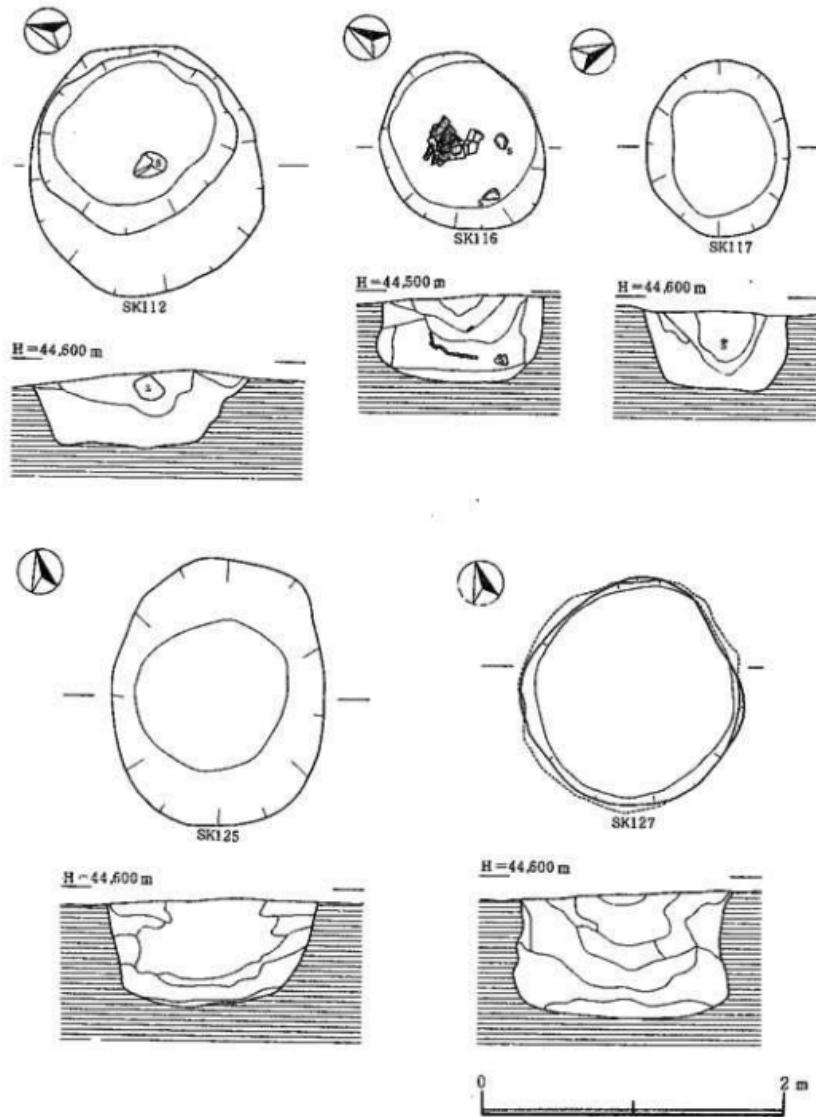
第43図 SK133、138、140、134土壤



第44図 SK137、139、141土壤、SKT144土壤、SX160、161

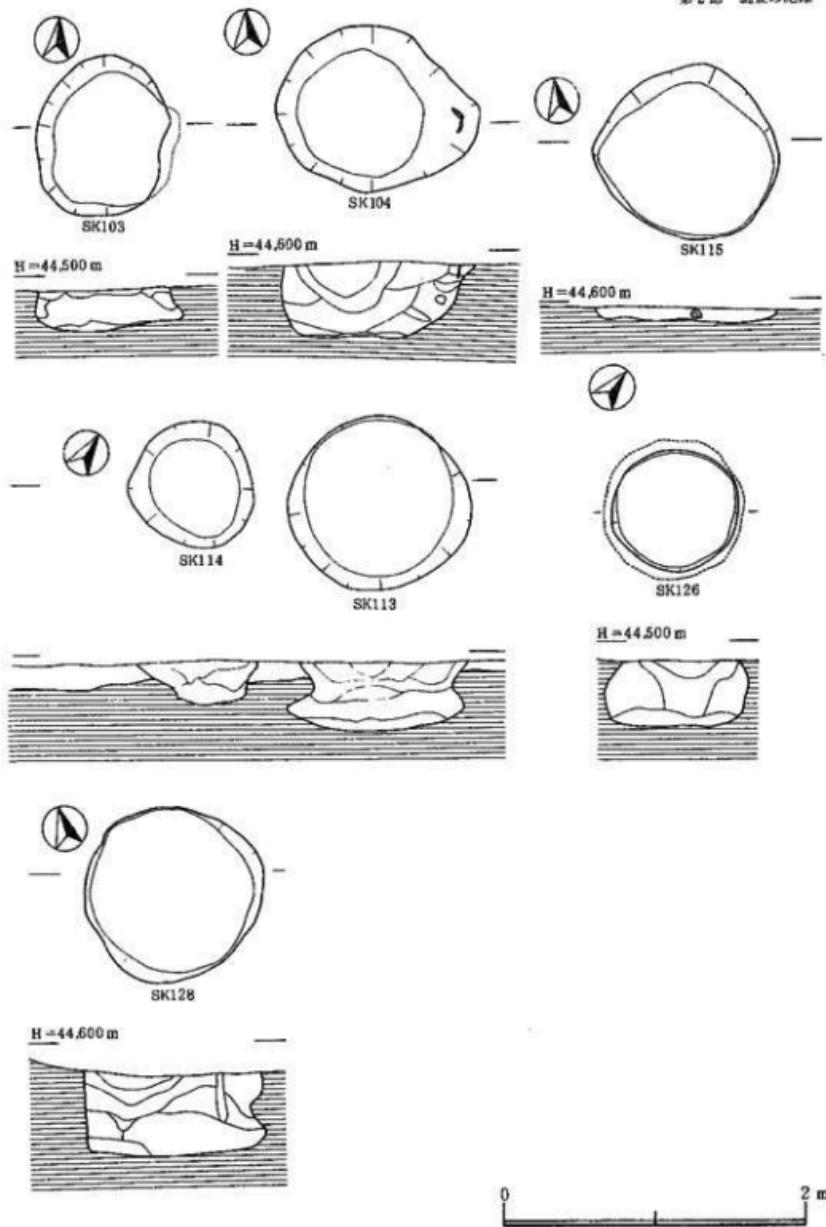


第45図 SK155、159、106、111、136土壤

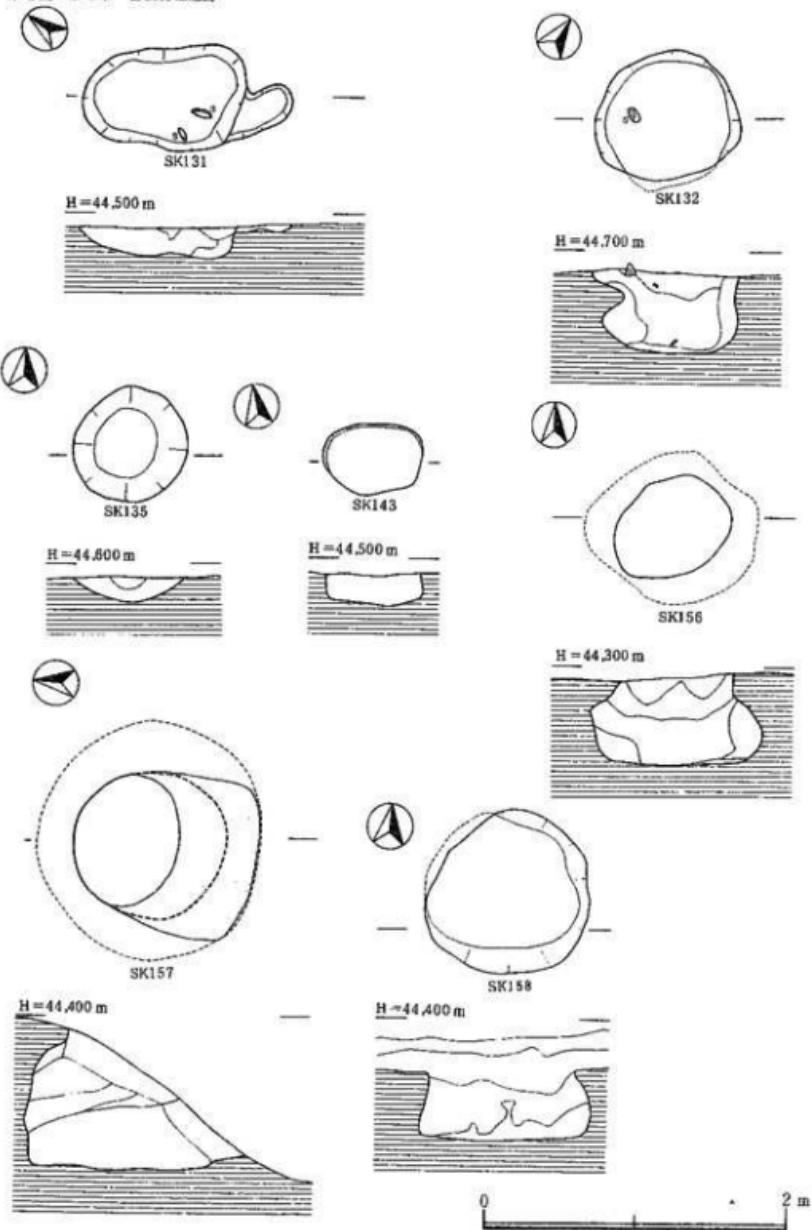


第46図 SK112、116、117、125、127土壤

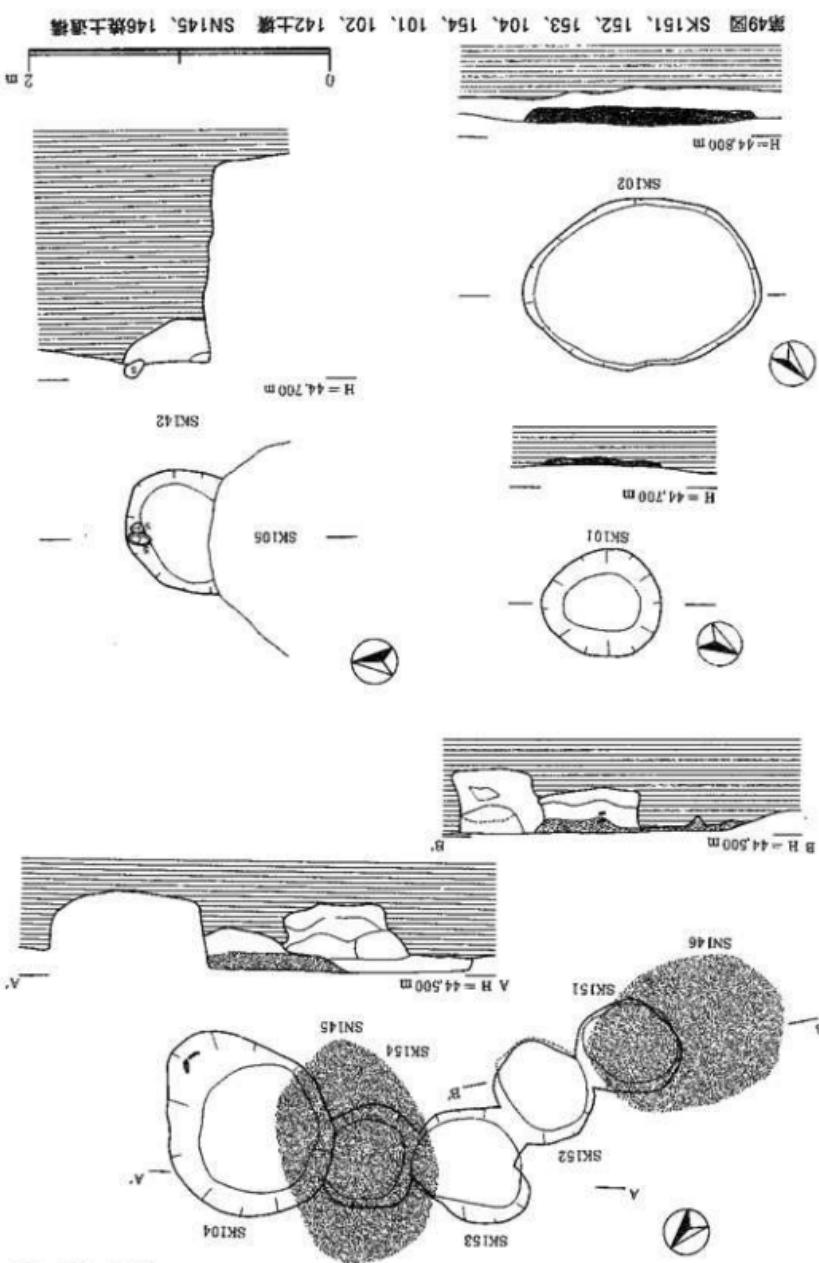
様が形成される。18は体部が直線的に開く浅鉢形土器である。口縁部上端は肥厚し、B矢起列が並ぶ。口縁内面には刻目をもった隆線が1条巡る。器外面には彫刻的な手法によって雲形文

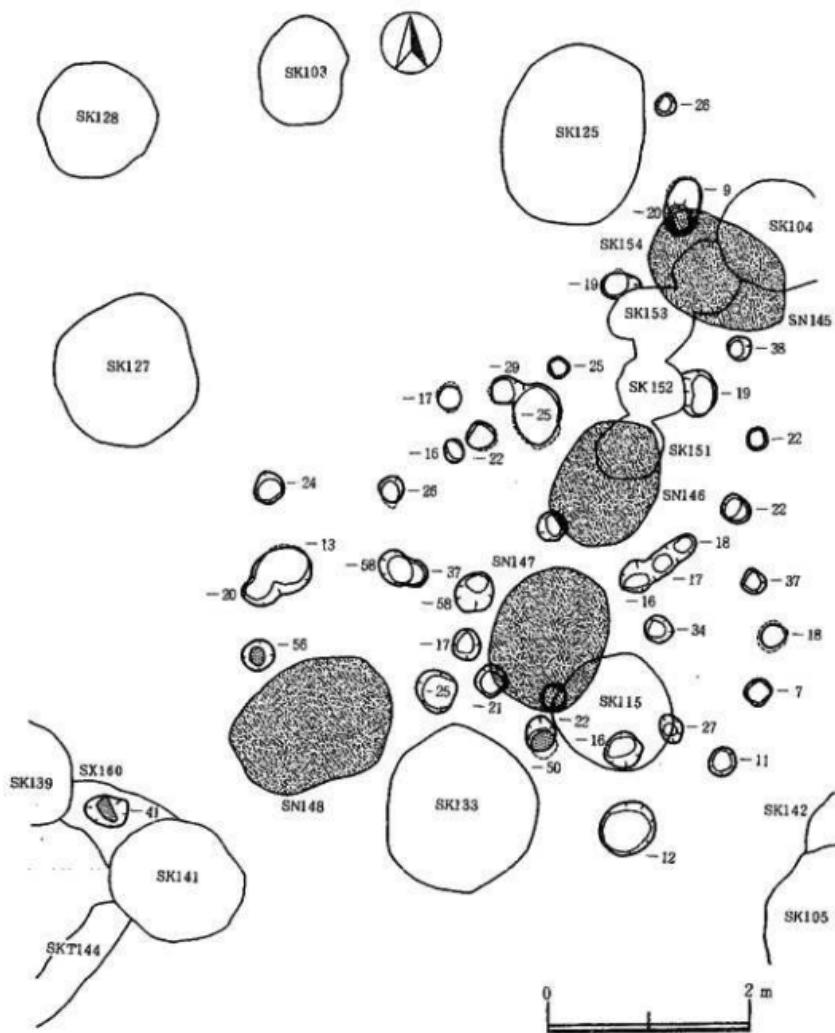


第47図 SK103、104、115、114、113、126、128土壤



第48図 SK131、132、135、143、156、157、158土壤





第50図 燃土遺構及びピット群平面図（ピット群横の「-」値はピットの確認面よりの深さを表す）

が施される。地文にはLR縦文が用いられる。

SK128 (第47・54図、図版48)

土壤集中区北西側で検出した。平面は径1.2mの円形を呈し円筒状に掘り込まれている。深

さは約0.55mである。埋土下位には、厚さ20~30cmの炭化物を主体とする土層が認められ、炭化物は粉状を示している。

出土遺物は、縄文土器、フレークがある。第54図19は、鉢形土器の体部破片。地文にLR縄文を用い歪形文が描かれている。20は、LR縄文が横位回転施文された鉢形土器の体部の破片である。

SK131（第48図）

土壤集中区北端に位置する。平面は 1.1×0.7 mの南北に長い不整梢円形を呈する。深さは、0.15~0.2mと全体に浅いが、南ほどやや深くなっていくようである。

遺物は検出されなかった。

SK132（第48・52・54・55図、図版49）

平面は、口径0.9mほどの円形を呈している。深さは約0.55mで小さな袋状を示す。

出土遺物は縄文土器、フレークがある。第52図8は、鉢形土器の底部である。胎土に砂粒を含み、また器面の調整時に砂粒の動いた痕跡も明瞭である。第54図21は、LR縄文の施された鉢形土器の体部破片。原体に粗い繊維を擦り合わせたもので、擦り紐自体も極めて太い。22は体部の直線的に開く浅鉢形土器の破片である。肥厚した口唇部にはB突起列が作り出される。第54図23と第55図1、2は同一個体である。器面にLR縄文を左上→右下の方向で回転施文し、縱走に近い縄文を表させている。

SK135（第48図）

土壤集中区ほぼ中央で検出した。平面は口径約0.8mの円形を呈する。鍋底状に0.15mほど掘り込まれたもので、底面は多少凸凹している。

遺物は出土しなかった。

SK143（第48図）

土壤集中区北寄りで検出した。平面は 0.65×0.6 mの梢円形を呈する。掘り込みは、筒状に0.2mと浅い。埋土は、暗褐色土と黄褐色粘土ブロックが混合したようなごちゃごちゃした様相を示す。

出土遺物はない。

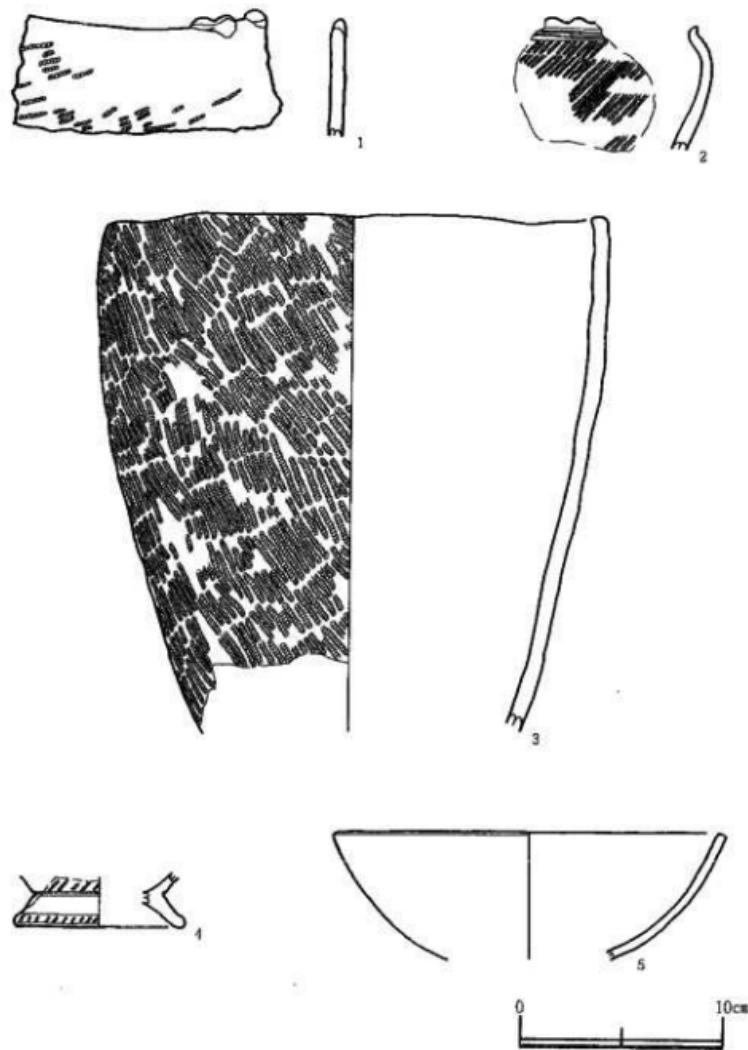
SK156（第48図、図版42）

土壤集中区西端に位置する。平面は 0.8×0.7 mのほぼ円形を呈する。底径が約1mになるフ拉斯コ状を示し、深さは確認面から約0.6mを測る。

出土遺物はない。

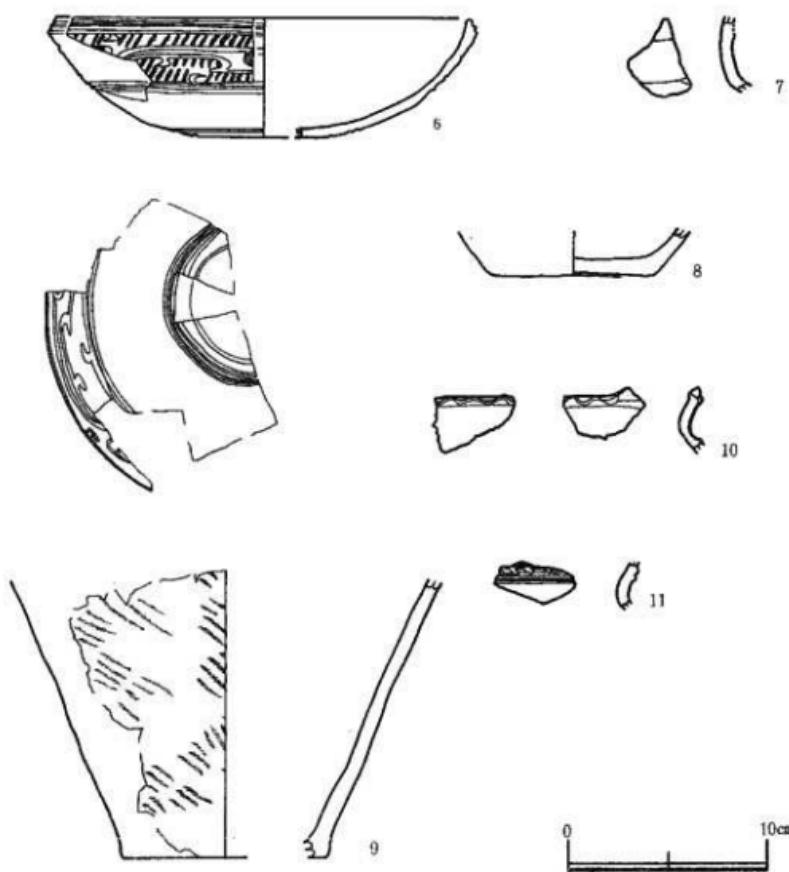
SK157（第48図、図版43）

南に傾斜する斜面上で検出した。確認時において第V層の明黄褐色砂質土が土壤の南側を覆っ



第51図 SK133、155、116、125、104出土遺物

ており、壁の崩壊土（図中のスクリーントーン部分）と考えられた。従って開口部は南側の崩落によって不明であるが、およそ径1.0mになるものと思われる。底径は 1.6×1.5 m、深さは北側で0.9mを測り、フラスコ状を呈する。



第52図 SK126、118、132、142、SN146出土遺物

縄文土器片が出土している。

SK158（第48図）

土壌集中区南西端で検出した。平面は径1.1mの円形を呈する。地山面から掘り込まれており、深さは約0.4m。埋土は、周囲の地山土と類似する褐色土が充填されており人為的に一気に埋められたものと思われる。

出土遺物はない。

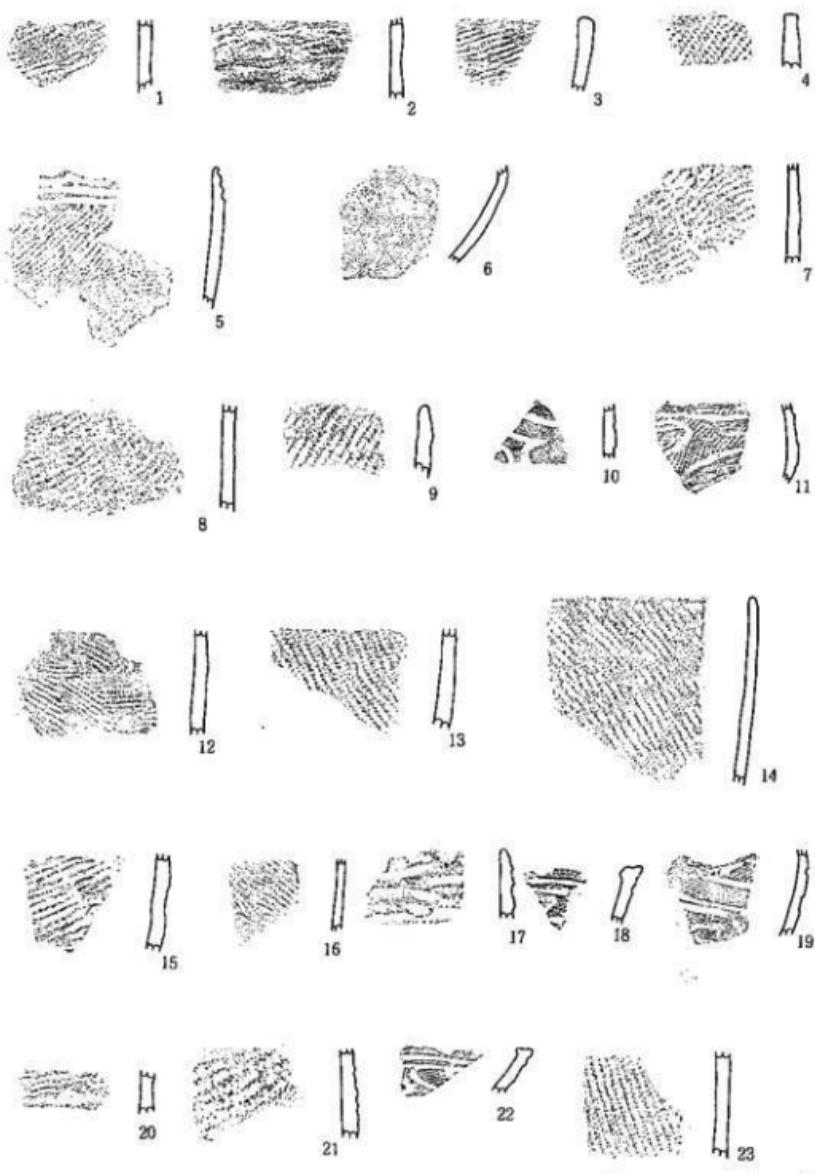


第53図 SK108、130出土遺物

SK151・152・153・154（第49図、図版50）

4基は、土壤集中区ほぼ中央で南北に連なって検出された。SK104・SN145・146と重複する。それぞれの新旧関係は、(旧) SK104→SK154→SN145（新）、(旧) SK152→SK151→SN146（新）となるが、SK152とSK153の関係は不明。

SK151は、径約0.7mの円形で、深さは0.2~0.3m。埋土には若干の焼土・炭化物を含む。SK152は、0.7×0.6mの平面円形を示す。深さは約0.4m、埋土下層には、焼土をブロック状に含む箇所が認められる。SK153は、径約0.7mの円形を呈する。地山面から掘り込まれ、ほぼ円筒形に約0.4mの深さを有する。SK154は、SN145の直下にあたり、断面観察では、両者の境界を明確にしえず、SN145に伴う土壤になる可能性がある。径約0.6mの円形を呈し、深さは約0.2mである。



第54図 SK133、137、139、159、116、125、127、104、126、128、132出土遺物



第55図 SK132、134、142、SN146出土遺物

出土遺物は、SK151を除いて縄文土器片が出土している。

SK142（第49・52・55図、図版37）

SK105と重複する。南側をSK105に切られているため、平面形は不明であるが東西0.8m、南北0.6m以上の数値を示す。深さは0.3m程で鍋底状に掘り込まれている。

出土遺物には縄文土器がある。第52図10は外傾する口頸部をもつ広口壺の破片である。体部はやや扁平な球形をなすと思われる。口唇部には2個1対のB突起（残存しているのは対になっている左側の1個のみ）が付けられ、その下に12mm程の間隔で突起列が並ぶ。頸部はミガキ調整によって無文化される。第55図4は鉢形土器の体部破片である。器面には細かなLR縄文が横位に回転施文された後に、彫刻的な手法をもって雲形文が描かれている。5・6は同一個体。縄文のみ施された体部の破片。器面にはRLの縄文が横位回転施文される。胎土には多量の砂粒を含む。

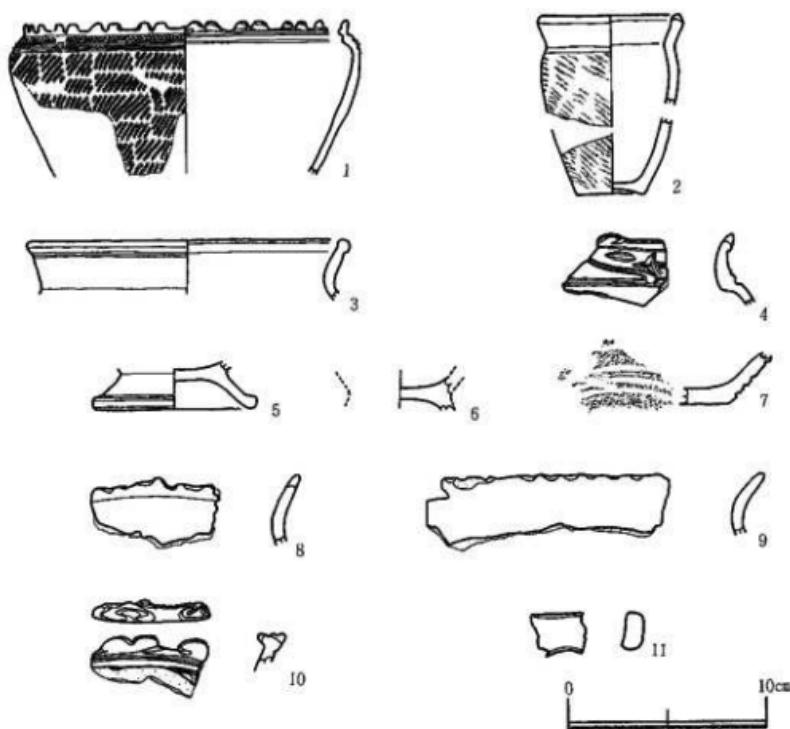
土壤e

SK101（第49図、図版50）

土壤集中区東端で検出した。SK102も同様であるが、表土除去の比較的早い段階で、炭化物の広がりとして認めていたものである。口径およそ0.8mの円形を呈している。埋土中の炭化物は5~15mm大の粒子の人きいものが多い。焼けた粘土も若干含まれている。底面、側壁は赤変している。

出土遺物はない。

SK102（第49図、図版50）

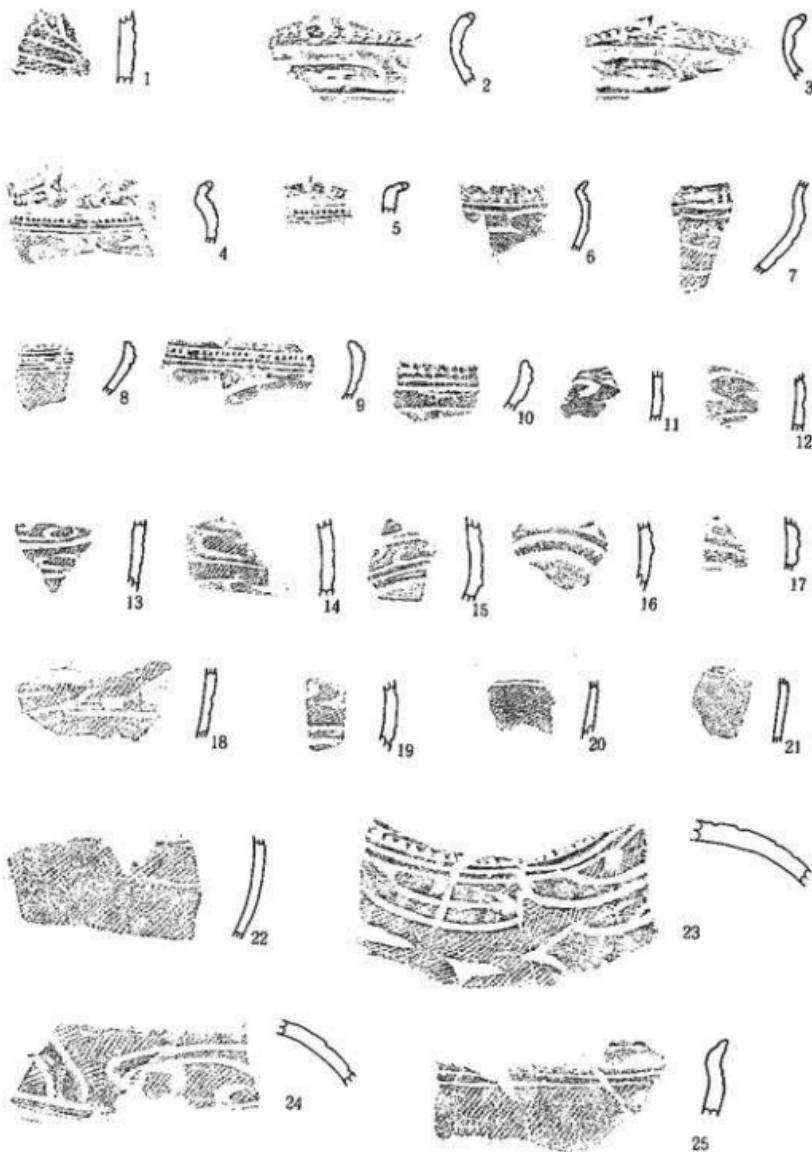


第56図 B地区遺構外出土遺物（1）

SK101の北西約6mで検出した。平面は1.6×1.1mの楕円形を呈する。掘り込みは、漸移層まで地山面までには達していない。埋土中には、粉状の炭化物が多量に含まれている。底面には赤変が認められる。

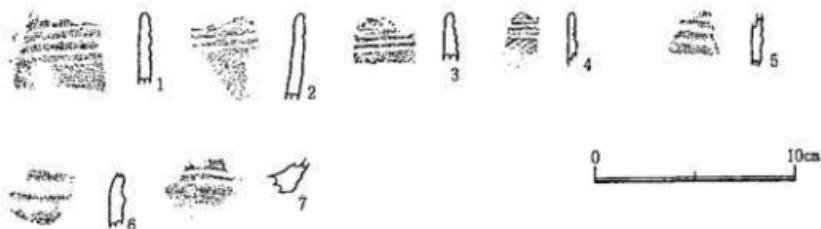
(2) 焼上遺構 (第50図)

焼上遺構は、土壤集中区ほぼ中央に4基が北東から南西方向に並ぶように検出された。平面形はいずれも長さ1.4~1.6m、幅1m程の楕円形を呈している。確認できた焼土は、一般に地山土に近い明褐色を示し分布密度は粗であるが、SN146は比較的焼土の分布が密で赤褐色を呈している。4基の焼土遺構のまわりには約40のピット群が検出されている。ピットの深さは10~30cmと浅いものが多いが、うち3個については底面がテカテカ（図中のスクリーントーン部分）しており、深さも0.41~0.56mの数値を示し、柱穴と考えられる。焼土遺構とピット群



第57図 B地区遺構外出土遺物（2）

0 10cm



第58図 B地区遺構外出土遺物（3）

から住居跡も推定はできるのであるが、現段階では両者の関係を明らかにできない。

遺物は、SN145・146から縄文土器が出上している。図示した遺物はSN146出上である。第52図9はLR縄文が縦位に回転施文された深鉢形土器底部で、擦りが弱いため、縄文の筋はその1つ1つが不明瞭となっている。第55図7は体部にLの無筋の縄文が回転施文された破片である。

(3) Tピット

SKT144（第44図、図版40、41）

SK137・141に両端を切られる形で検出された。幅は0.4m、残存長は1.2mある。深さは約0.85mを測る。確認面上の埋土が周囲の地山土と酷似し、プラン確認には困難をきわめた。
出土遺物はない。

(4) 溝状遺構

SX160（第44図、図版40）

SK139・141の間に溝状を呈して存在する。2基の土壤との新旧関係は不明。幅0.4~0.6m、残存長0.7mを測る。深さは約0.35mで、底面には柱穴様のピットが掘り込まれているが、SX160との関係は不明。

SX161（第44図、図版40）

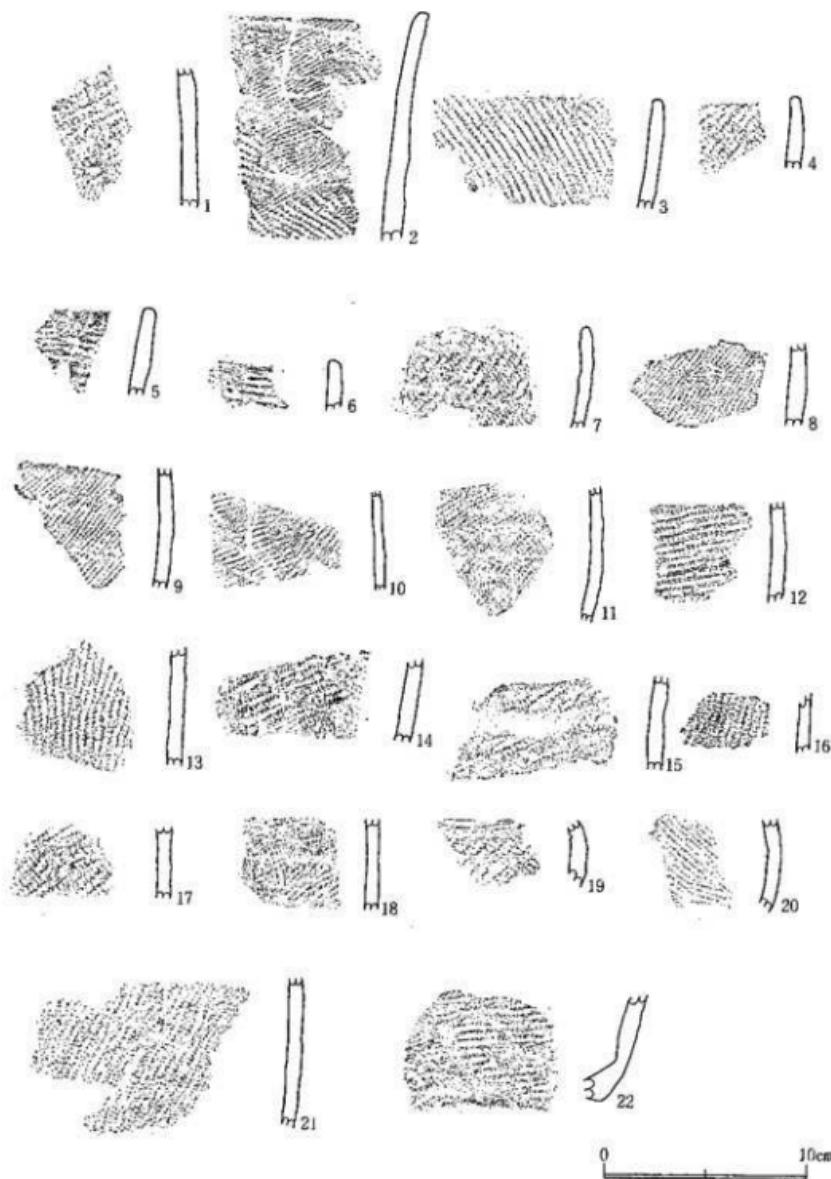
SK137と重複する。両者の新旧関係は不明。東西方向に約2.2m、幅は0.3~0.5m、深さは0.3~0.5mを測る。

SX160・161とも出土遺物はない。

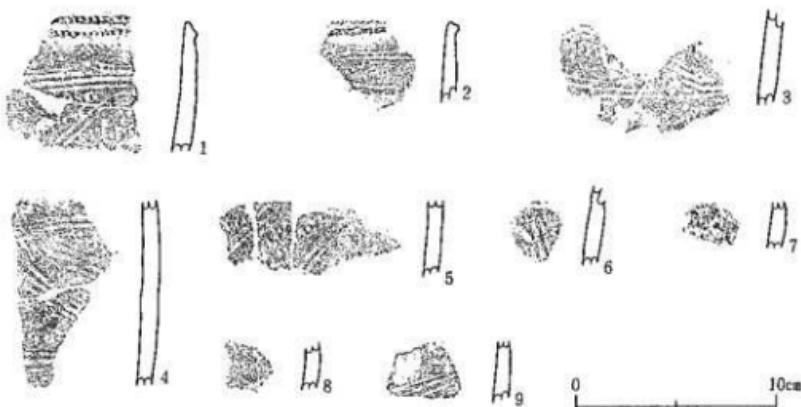
4 B地区遺構外出土遺物

(1) 土製品

第56図1は、2個1対のB突起のつけられた鉢形土器である。突起の部分を含めて口縁上端



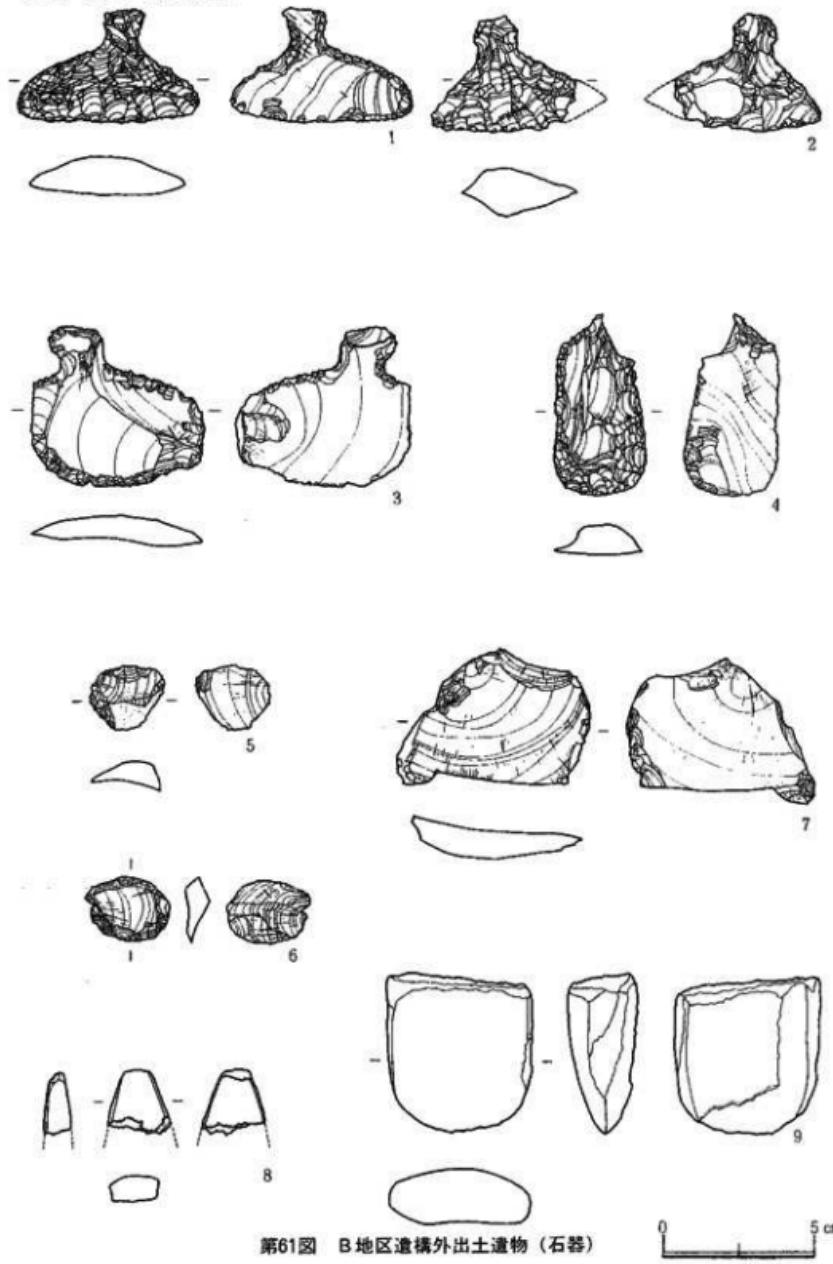
第59図 B地区遺構外出土遺物（4）



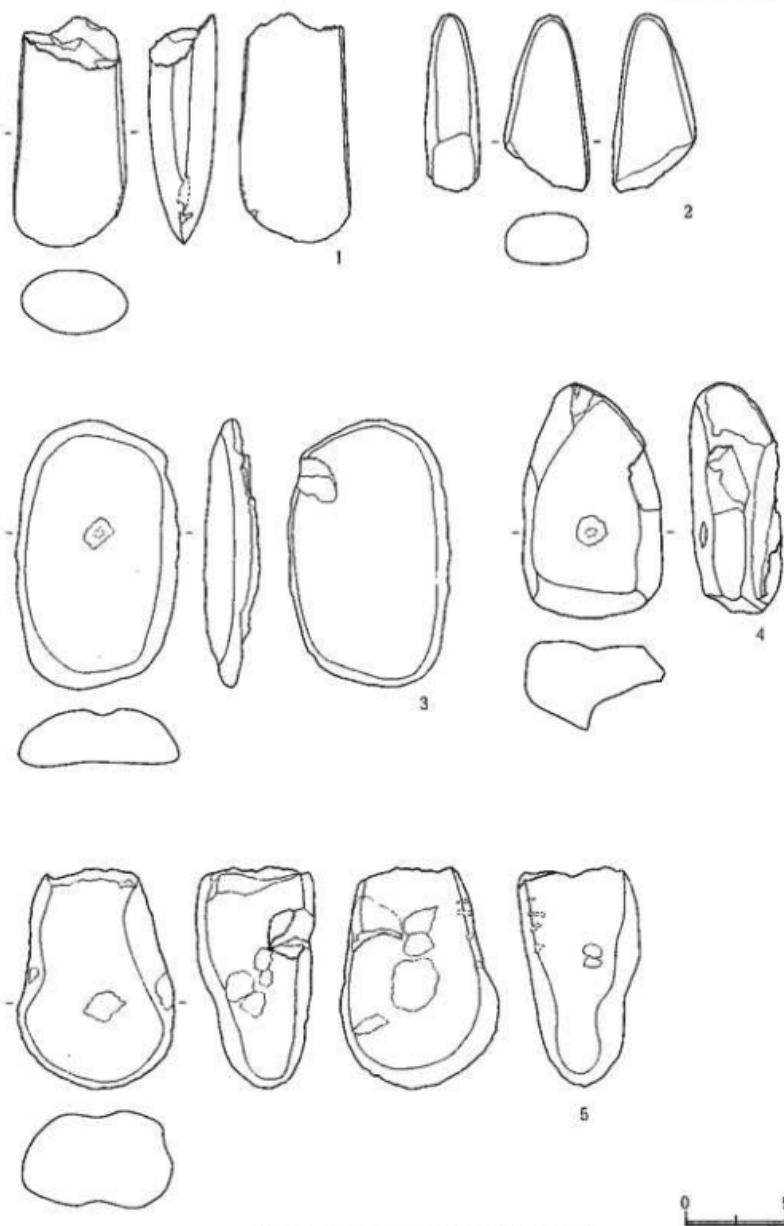
第60図 B地区遺構外出土遺物（5）

は直立し、体部の上部で大きく内側に屈曲する。以下の体部は直線的である。口唇につけられる突起の数は20個である。口頸部の文様体には、截痕列、その下に2条の沈線が巡らされる。截痕列には1部深く抉り込まれる箇所があり、沈線間に表される隆線がその部分で上へのびる。羊齒状文の名残りである。また、口縁内面にも1条の沈線が巡らされる。体部にはLR繩文が横位回転施文される。2は、口縁部がやや外側に開き、体部が緩い曲線を描く小形、細身の鉢形土器である。口唇には短い粘土紐によって2個1対のB突起がつけられる。突起の数は6単位となる。口頸部は調整を受けて無文化され、体部には、Lの無節の繩文が縦位に回転施文される。3は、口縁部の聞く広口の壺形土器の口縁部破片である。口頸部は無文化される。4は同じく広口の壺形土器の口縁部破片である。口唇上にはB突起がつけられる。口頸部の文様帶には沈線により三叉状の陰刻文が施されている。5は、台付鉢形土器の台部破片である。大きく外側に聞く台部の下端は肥厚し、調整をうけて無文化している。6も同様台部の破片である。7は、底部へ向い直線的におりる浅鉢形土器の破片である。器面には、LR繩文が横位回転施文され、その後沈線文的手法によって変形工字文が描かれる。8、9は口縁部の外反する鉢形土器となろう。口唇には粘土紐が貼付され、その後連続した指頭圧痕が施され、小波状に作り出している。口縁部は調整をうけて無文化されている。10は、口唇部にB突起がつけられる浅鉢形土器の口縁部破片である。体部は比較的直線的におりるものとなろう。突起下の口縁上端には2条の平行沈線が巡らされる。口唇部の上面観では、2個の突起間に三叉状の抉りが入り、また剣目を施した隆線が巡らされている。11は、板状の土製品。図の両端で折損している。土偶の脚部もしくは腕部であろうか。

第57図1は、地文にLの撚糸文を施文し、沈線描画によって文様を表させた土器である。



第61図 B地区遺構外出土遺物（石器）



第62図 B地区遺構外出土遺物（石器）



第63図 B地区遺構外出土遺物（石器）

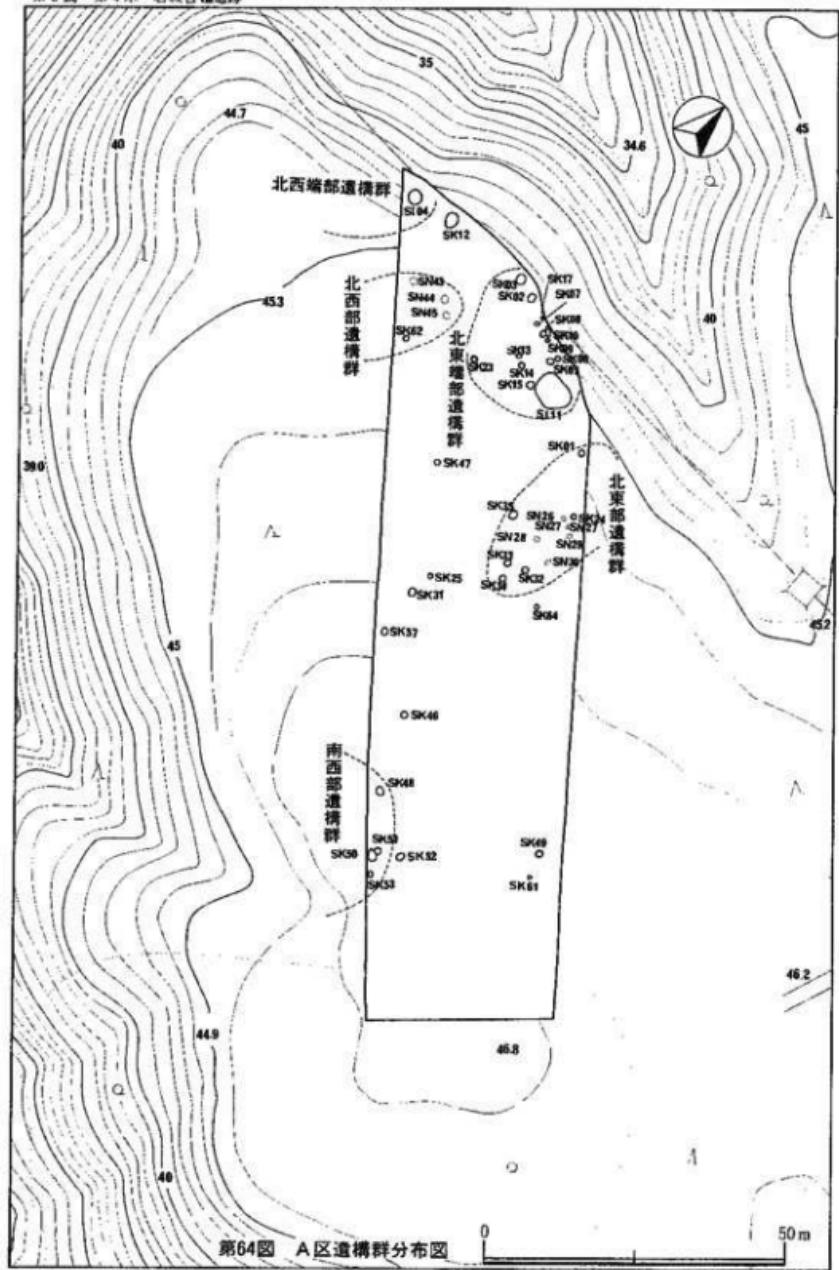
胎土に砂粒を含む。2・3は同一個体である。広口の壺形の器形を呈すると思われる。口唇上にはB突起が何箇所かにつけられ、また連続する刻目列が施される。広く設けられた頸部の文様帶には、充分に調整をうけた沈線による文様が描かれる。4・5も同一個体。口頸部の屈曲する鉢形の器形を呈すると思われる。口唇上には3.4cm間隔でB突起がつけられ、その間には刻目列が施される。屈曲する頸部の文様帶には、調整を伴った沈線によって4条の隆線が表出され、2段目の隆線には、刻目列が施される。体部にはLR繩文を回転施文した後、彫刻的手法によって雲形文が描かれる。口縁内面にも1条の沈線が巡らされる。6も、口頸部の屈曲する鉢形土器の破片。口縁上端は薄く作られB突起列が並ぶ。口頸部の文様帶には2条の隆線が表し出され、その1段目には刻目列が施される。体部にはLR繩文を横位回転施文した後、雲形文が描かれている。7も、同じく口頸部の屈曲する鉢形土器の破片。口縁上端を欠く。体部にはやはり雲形文が描かれる。8～10は、口縁部が内凹し、体部が緩い曲線を描く浅鉢形の器形を呈するものである。口縁部には2～3条の隆線が表され、その一段目には刻目列が施される。体部にはLR繩文が回転施文され雲形文が描かれる場合（9・10）と、全面LR繩文が施される場合（8）とがある。11～14は、浅鉢形土器の体部破片である。13・14および底部資料の15は同一個体で

ある。いずれもLR縄文を横位回転施文した後に、雲形文を描画している。13～15では土器内面にも1段稜線をもつ。16・17は浅鉢形土器の底部資料である。18・19は、雲形文の施された鉢形土器の体部破片である。地文に使用される縄文原体はLRの燃りである。18・19は鉢形土器の体部破片。地文にLR縄文を回転施文し、その後雲形文を描いている。20・21・22は口頸部に文様帯をもち、体部にLR縄文を全面施文した鉢形土器の体部破片である。23・24は同一個体である。肩部から体部の最大径部分まで幅広の文様帯をもつ鉢形土器の破片である。残存する部分からは文様帯が二段以上設けられていることが観察される。上段と下段の文様帯の境では、数条の沈線によって表される隆線が4条以上巡り、そのうち下から3段目の隆線上には刺突列が施される。下段の文様帯中には、全面LR縄文が施された後、太い沈線の描画と磨消縄文手法によって雲形文が描かれる。口唇上には間隔の広い刻目が施される。25は、口縁部の屈曲する鉢形土器の破片である。口縁部には無文帯が設けられ、頸部には2条の平行沈線が巡っている。体部にはLR縄文が横位に回転施文される。口縁内面にも沈線が1条巡る。

第58図1は、口頸部に4条の平行沈線が施された鉢形土器の破片。口唇上は小波状に作り出される。体部にはLR縄文が回転施文される。2は、口唇上にA突起をもつ鉢形土器の破片。口頸部に3条の沈線が巡らされるが、1条目の沈線は口唇上に作られるA突起に沿って波形を描く。体部にはLR縄文が横位回転施分されている。3は、口縁上端が直立し、口縁部から体部まで緩く膨らむ鉢形土器の口縁部破片である。口頸部の文様帯には4条の平行沈線が施され、2条目の沈線には、1箇所粘土粒が貼り付けられ工字文が表出される。4は口唇部が小波状を呈する小形の鉢形土器の破片である。口縁部に4条の平行沈線がひかれる。体部にはLR縄文が横位回転施分される。5・6は器面に隆線の表出される破片である。いずれも口縁部近くの破片である。7は2条の浅い平行沈線が底部に沿って巡るもの。胎土に含まれる砂粒は比較的多い。

第59図1は太い纖維を燃って作ったLR原体を横位回転施分した土器である。胎土には微細な孔隙が多く認められる。また砂粒の含まれる量も少ない。2は口縁部の僅かに外反する深鉢形土器の破片である。LR縄文を横位回転施分した後、部分的にそれよりも太いRL縄文を回転施分している。3～5は口縁部のやや内傾する深鉢形土器の破片である。口縁～体部には全面縄文が施されるが、用いられる原体は3がRLの横位回転、4がLRの横位回転、5がLの左上一右下方向の回転である。7も口縁部の僅かに内傾する例であるが、口唇部に連続した指頭圧痕文を施して小波状に作り出している。口縁～体部にはLR縄文を横位回転施分している。8～22は、全面縄文の施された体部の破片である。このうち8・9・14・15はそれぞれ同一個体である。器形は鉢形を呈するものが大部分と思われるが、19・20のように弯曲する例は彫形となる可能性もある。使用される原体はLRの横位回転施分のものがほとんどである。ただし、13、16、20はRL原体を用いている。ことに、13、16は左上一右下の方向に回転させて縦走に近い縄文

第2圖 第4系 石灰台遺跡



第64図 A区遺構群分布図

を表出させている。8~10を除いては胎土に砂粒を多く含み、土器内面の調整も粗い。

第60図1・3~9は同一個体である。口縁部はやや内傾する鉢形土器である。口唇部の断面は鋭角である。口縁上端には粘土紐を貼り付けた隆帯が施され、口唇上とともに刻目が施される。体部には、そのひとつひとつが三角形を呈する刺突列と、回転する単位の長い、したがって条の長い縄文帶によって幾何学的な構図の文様が描かれる。体部の刺突列と口唇および隆帯上の刻目とは同一の施具によっている。また、体部の縄文帶ではRLの織りの原体が用いられるが、回転方向に対して斜位におかれて施文されている。2は上端が僅かに外側へ反り返る鉢形土器の口縁部破片である。口唇上と口縁上に施された隆帯上には浅い刻目が施される。体部は条の長い縄文帶によって文様構成される。いずれも胎土には微細な砂粒が含まれるだけで、粘土は精選したものを使っているといつてよい。焼成は良好で堅緻である。

(2) 石製品

出土した石器は定形的なもの、二次加工のあるものも含めて19点と少ない。第61図1~4は石匙である。1~3は横型で、4は縦型の柄部が折損している。5・6は黒曜石製の母指状搔器であるが、二次加工の部位は全周の約半分にしか及んでいない。7はサイド・スクレーパーか。第61図8・9、第62図1・2は磨製石斧で、いずれもほぼ中位で横位に折れている。第62図3~5、第63図1~3は凹石である。河原石の平らな1~4面に凹んだ箇所をもつ。この他に、長径8cm前後の丸い自然石の各面を磨いた磨石が2個ある。

第3節 まとめ

今回の石坂台地の発掘調査面積は、全体で15,000m²前後と考えられる遺跡のうち約5分の2、6,520m²である。その結果、検出された遺構の大半は縄文時代に属するものであった。また、出土遺物は前期、中期、後期、晚期、弥生時代の土器、石器であるが、遺構数に比べて少ない。縄文時代に属する遺構の内訳は、A地区で中期末葉と、後期前葉の竪穴住居跡各々1軒、後期及び晚期に属すると考えられる土壙33基、焼土遺構8基を数え、B地区では、晚期の土壙41基、焼土遺構4基である。従って、A・B地区を合わせた縄文時代に属する検出遺構は、竪穴住居跡2軒、土壙74基、焼土遺構12基となる。

1 縄文時代の遺構群の分布について

第5図は個々の遺構の形状、埋土の状態、遺物の出土状況などから分けられる遺構の分布を、遺跡全体の地形の中で見たものである。この図でわかるように、性格の同じような遺構が比較的まとまりを見せ、それらは遺跡の立地する台地の縁辺と、縁辺から30cm程内側にはいった線

を結ぶ範囲内に集中し、それを外れると分布が疎になる傾向を見せている。この傾向は七曲台の他の遺跡においても同様であり、特に本遺跡でそれが際立っている訳ではない。

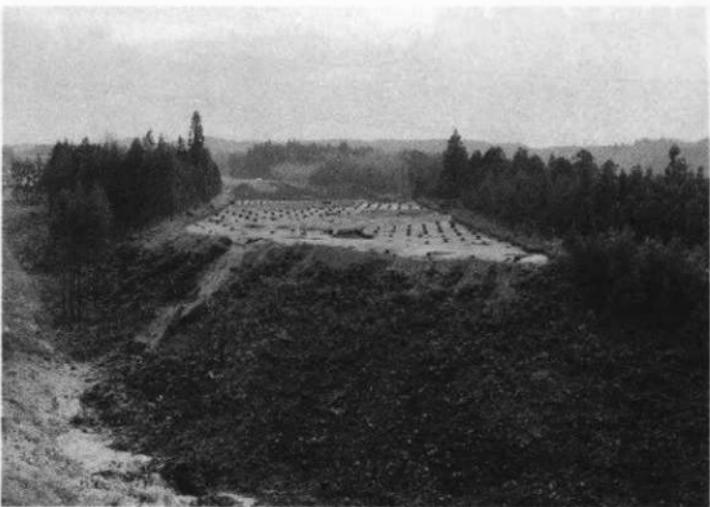
第64図はA地区における遺構群の分布を、A地区的台地に限って見たものである。合計43基の遺構群を、その性格、推定される時期、近接具合、周辺の出土遺物の時期などから大きく5つのグループに分けて見た。北西部遺構群は、中期末葉大木10式土器を炉に使用した竪穴住居跡(SI04)1軒だけである。同期の遺構は他には今回の調査区には全くなく、周辺からも関連する時期の遺物は全くといって良いほど検出されていない。この住居跡よりももっと北西の地域に同期の遺構群が集中するものと思われる。北東端部遺構群は後期前葉の竪穴住居跡(SI11)1軒と、袋状あるいはラスコ状を呈する土壙8基(SI02・03・05・08・13・23)、小円形で大きな河原石の入る土壙3基(SK06・09・17)、円筒状土壙1基(SK14)、その他の土壙1基(SK10)から構成される。その範囲の長径は25m、短径は18mである。SI11を除いてはその時期を決定づける遺物の出土がほとんどなく、推定の域を出ないのであるが、同グリッド、あるいは、この遺構群の周辺からの出土土器を見ると、その大部分はSI11にはば同じ後期前葉のものである。のことから、この遺構群の時期は後期前葉とすることができよう。

北東部遺構群は、6基の土壙墓様の上壙(SK01・24・32・33・34・35)と、5基の焼土遺構(SN26・27・28・29・30)からなり、その範囲は未調査の部分も含めて、長径30m、短径16mと推定される。そして、その時期は土壙内埋土中の出土遺物から晩期後葉とすることができる。北西部遺構群は1基の土壙墓様土壙(SK62)と、3基の焼土遺構(SN43・44・45)からなる。遺構内からの出土遺物がなく、明確な時期は不明とせざるを得ないが、同じグリット及び、周辺からは後期前葉、晩期後葉の土器片が多く占める。南西部遺構群は、袋状あるいはラスコ状の土壙が4基(SK48・50・51・53)と、その他の土壙1基(SK52)の5基から構成されるだけであるが、発掘調査によって検出された遺構は本遺構群の東端部にあたるものと推定され、本米はもっと大きな群となろう。遺構群の時期を決めつけられるような遺物はないが、この周辺からは弥生時代の土器片が出土しており、あるいはその頃に属するかもしれない。

以上、5つのグループ分け可能な遺構群についてみたが、このことは、広い台地であっても縄文時代、あるいは弥生時代の人々がそこを何らかの形で使おうと選定する場合、必ずしも台地全体にその存在した証をまんべんなく残すような利用の仕方をしていないことを示している。また、広い台地の中から“この場所”と選定され、遺構・遺物が遺されるような場所であっても、ごく狭い範囲でしかそれが見られない。このようなあり方は、前述したように、これまで調査された七曲台遺跡群に共通することもある。大きな集団が、定住的な場所としては利用しなかったことが主因であろうが、岩見川をはさんで対岸にある御所野台地の遺構群のあり方とは鮮明な対象をなしている。



発掘調査前 A 地区全景（南東▶）



発掘調査終了後遺跡全景（北西▶）



発掘調査風景



発掘調査風景



A地区土層断面



構造土（環状土）



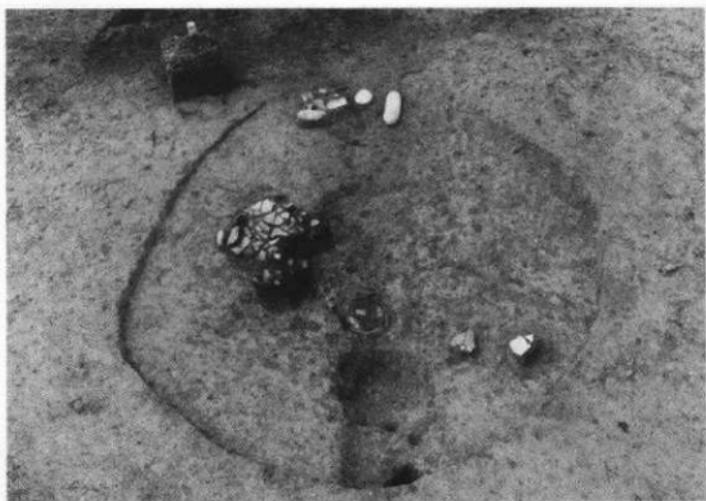
インボリューション（ブリケーション断面）



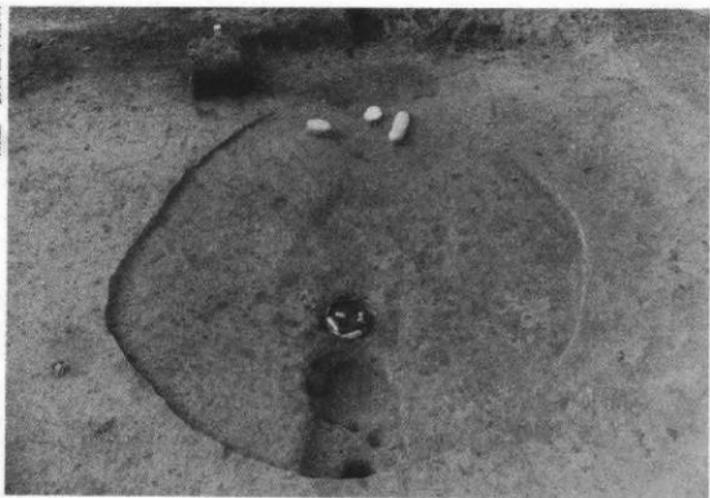
土砂崩れ



SI04 整穴住居跡確認狀況（南▶）



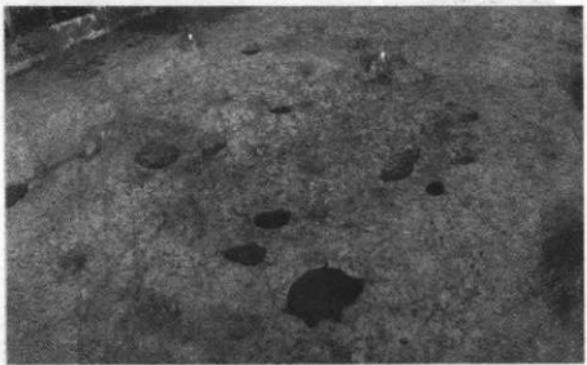
SI04 整穴住居跡（南▶）



SI04 壓穴住居跡完掘状況（南▶）



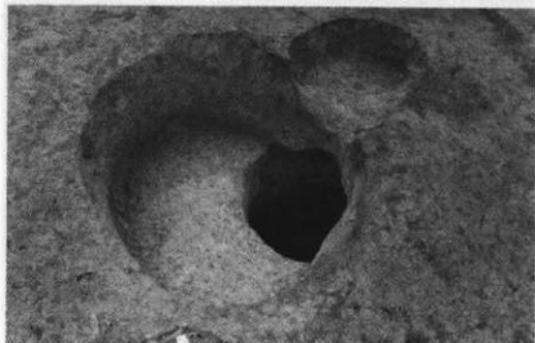
SI04 壓穴住居跡炉（東▶）



SI11 積穴住居跡（南▶）



SK02 断面



SK02



SK02

SK02 土壙

SK02·03 土壤

SK03



SK02



SK02 面面

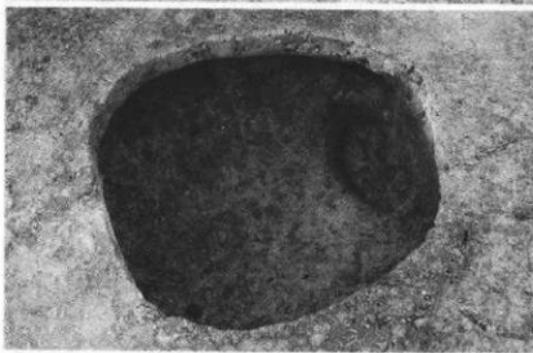




SK05・06
断面



SK05・06

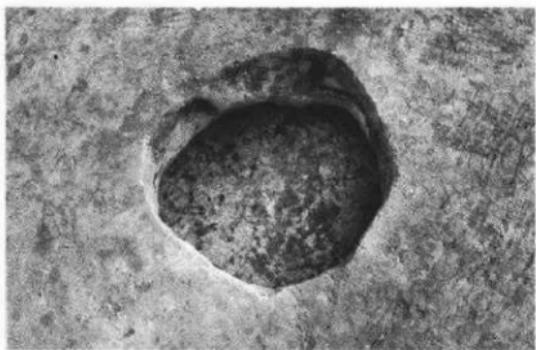


SK07

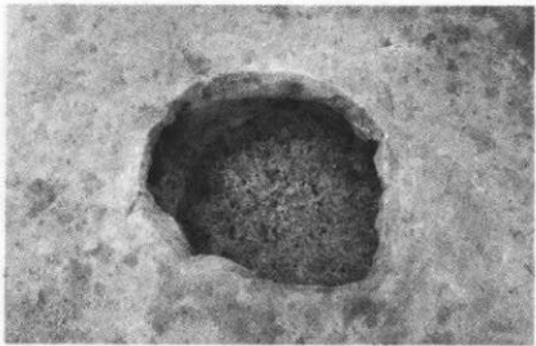
SK05・06・07 土壙



SK13 斷面

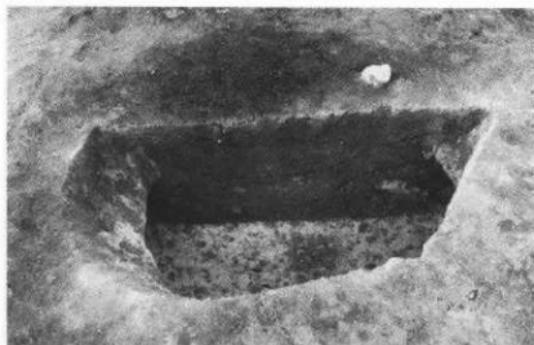


SK13

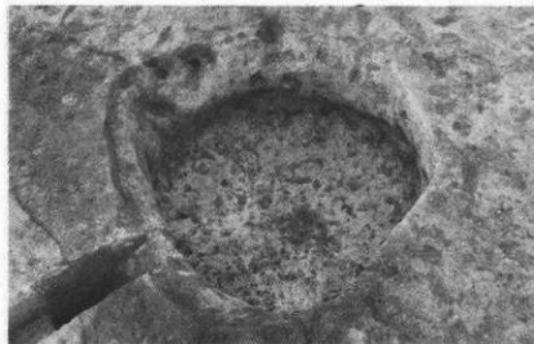


SK15

SK13・15 土壙



SK23 断面

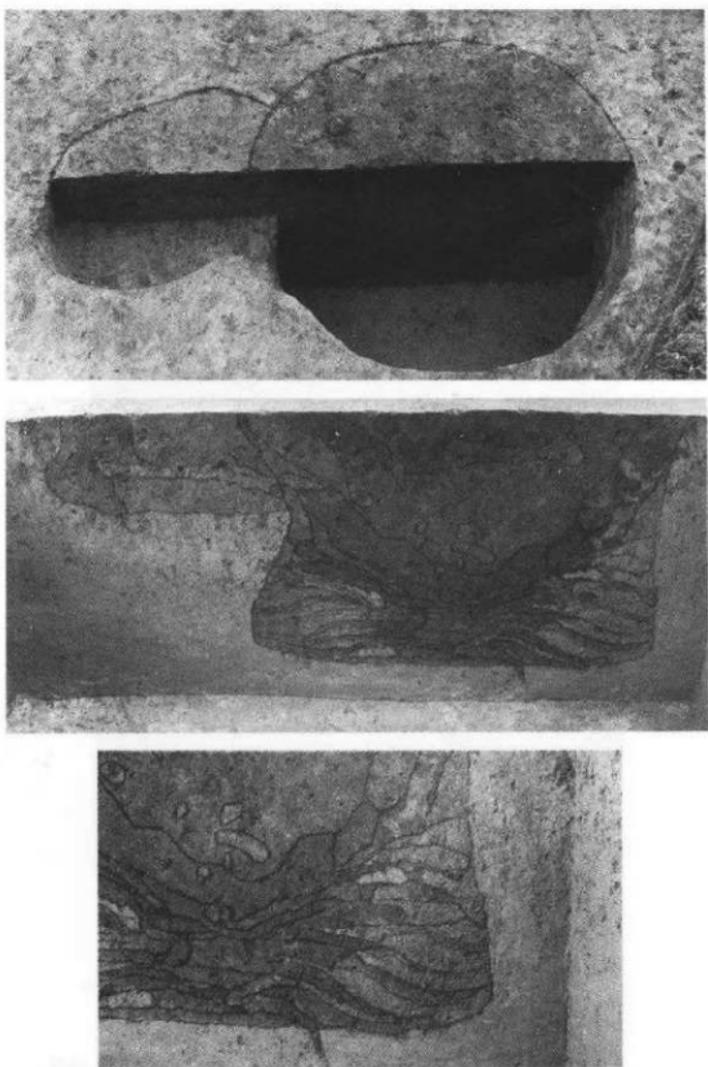


SK23

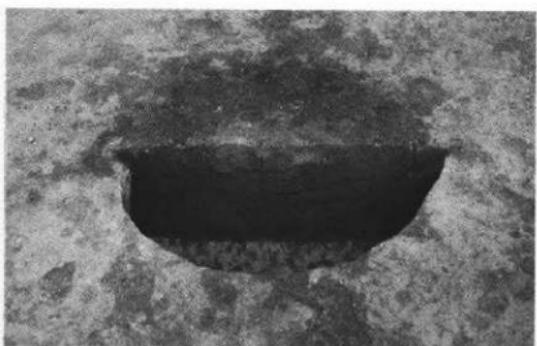


発掘調査
風景

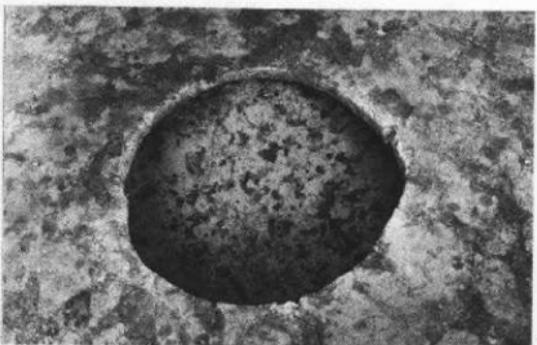
SK23 土壙



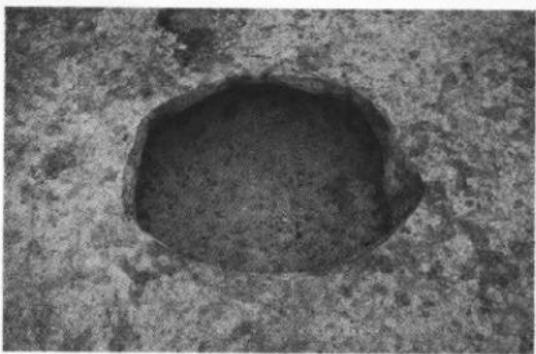
SK50・51 斷面



SK64 斷面

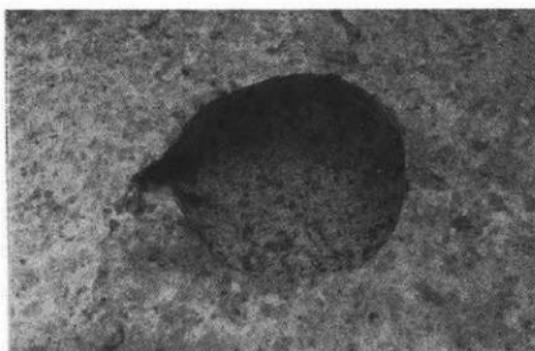


SK64

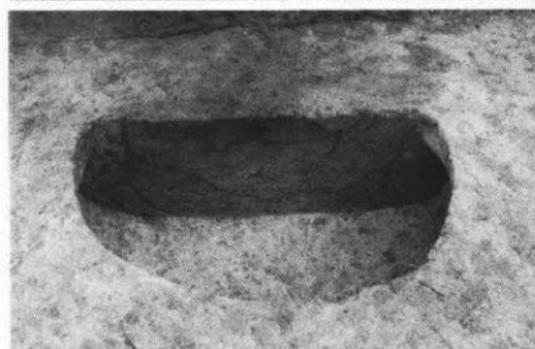


SK31

SK64-31 土壙



SK48



SK53 斷面

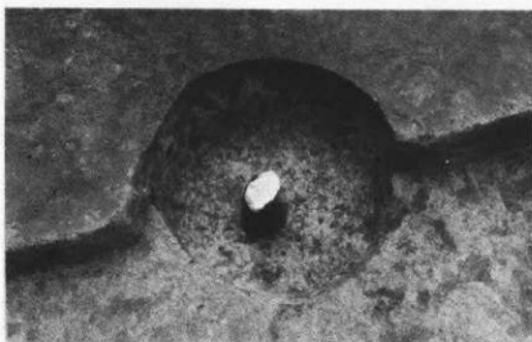


SK01 斷面

SK48・53・01 土壤



SK24 断面



SK24

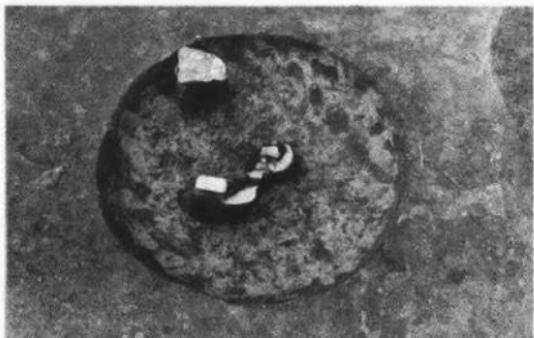


SK24・32・33・34
・34確認状況

SK24・32・33・34 土壌



遺物出土狀況

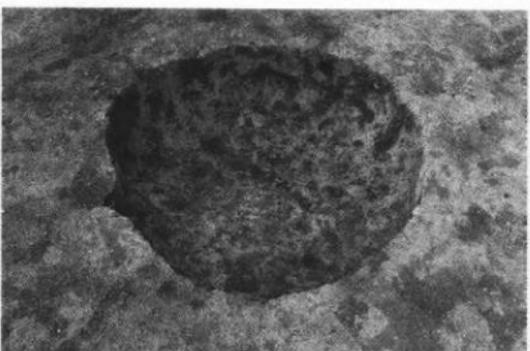
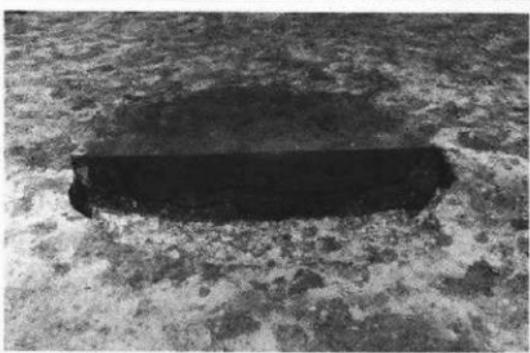


遺物出土狀況



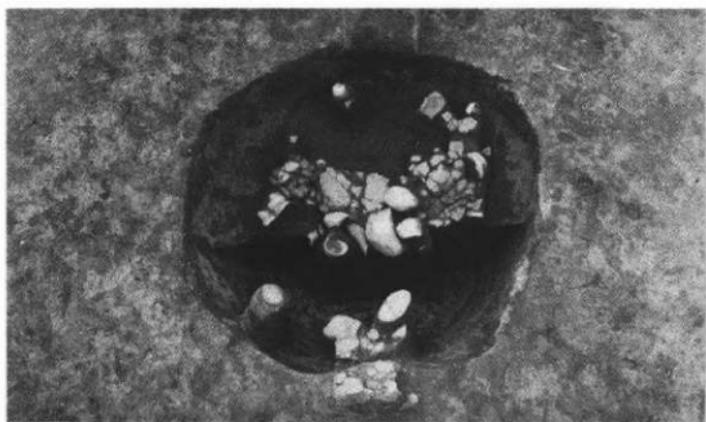
完面狀況

SK32 土壙



SK34

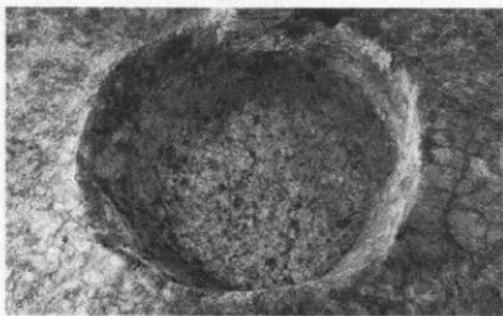
SK33・34 土壙



遺物出土狀況

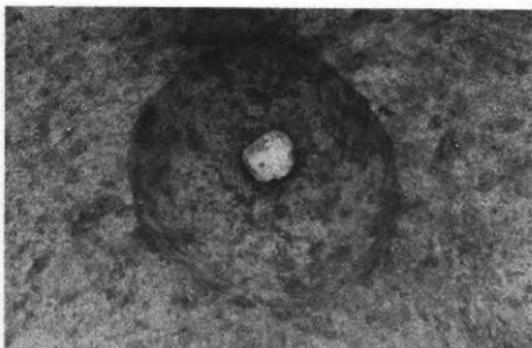


斷面

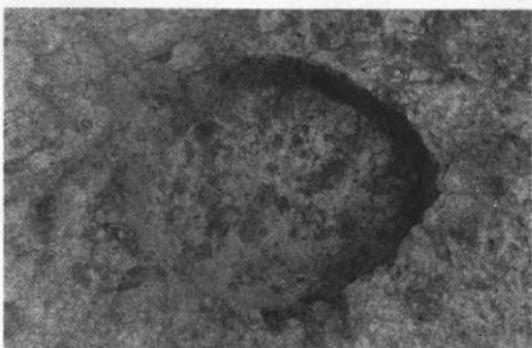


完掘狀況

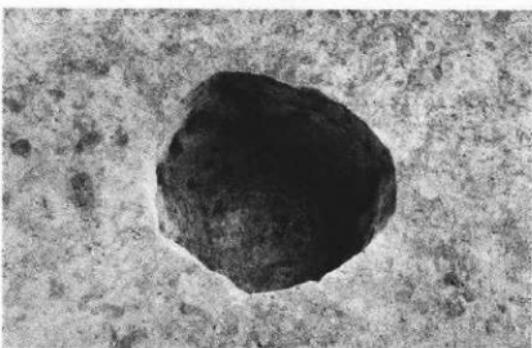
SK35 土壠



SK25



SK62

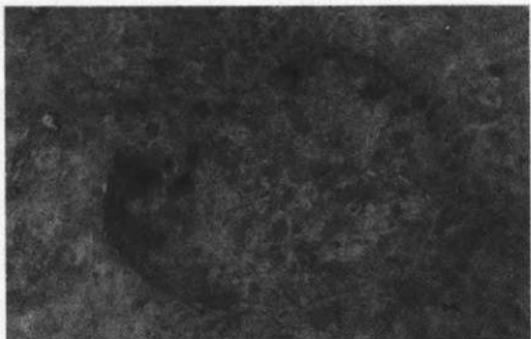


SK14

SK25・26・14 土壌



SK17

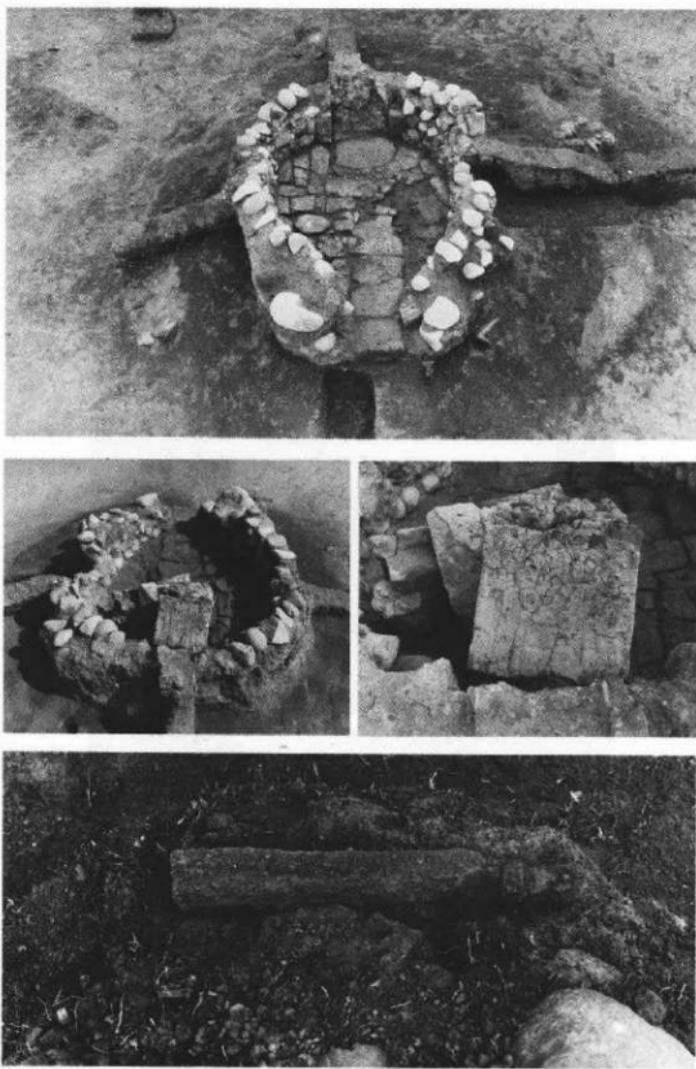


SK46



遺物出土
狀況

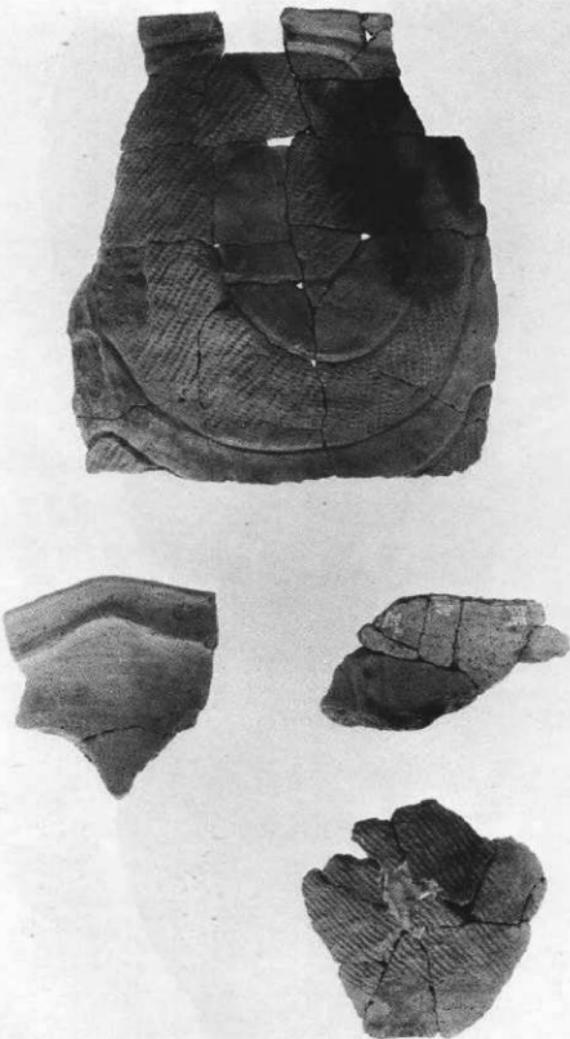
SK17・46 土壤



SX16 炭焼窯・遺物出土状況



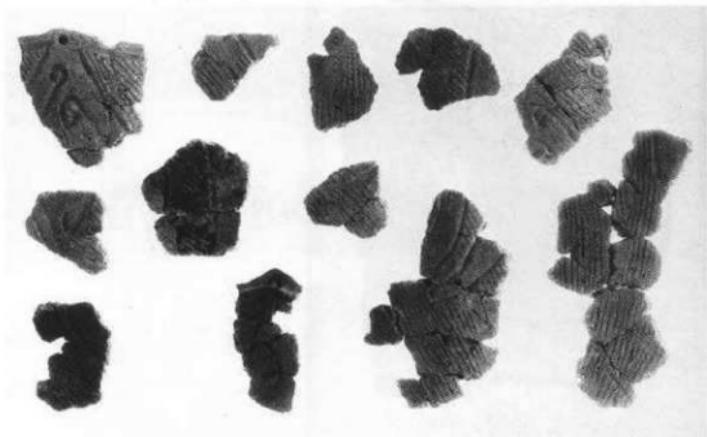
S104 壓穴住居跡出土遺物



SI04 壓穴住居跡出土遺物



SI04 壓穴住居跡出土遺物



SI11 壓穴住居跡出土遺物



①

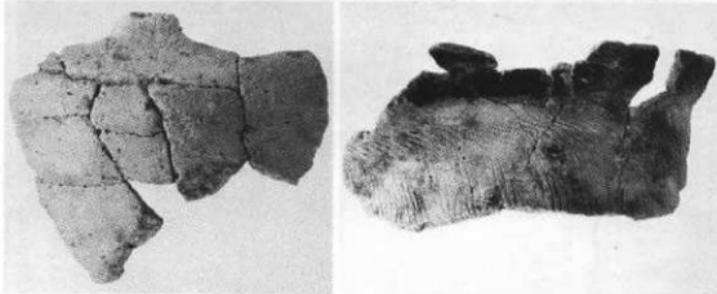
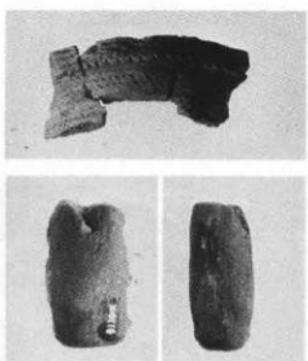
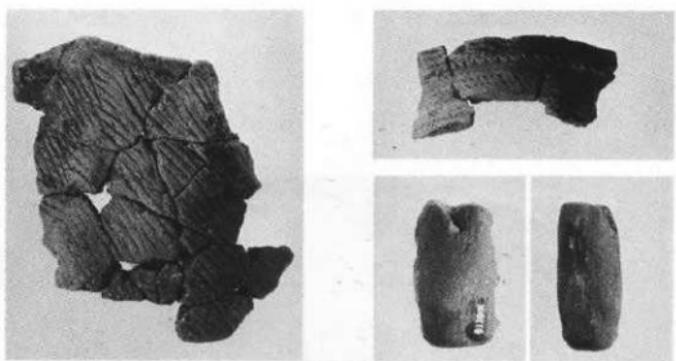


②

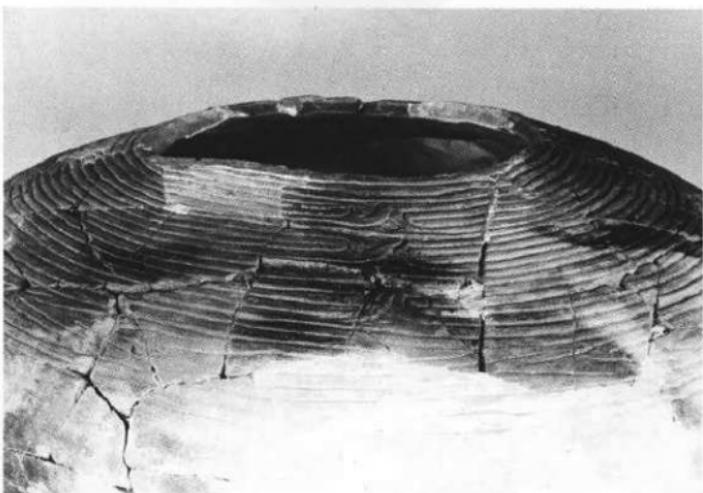
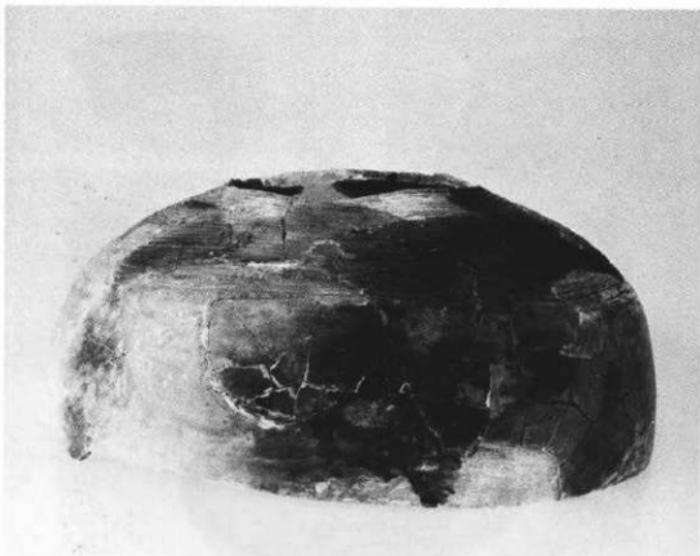


③

SK12 出土遺物



その他の出土遺物 (1)



その他の出土遺物 (2)



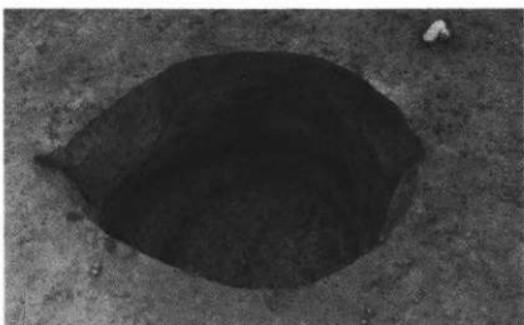
その他の遺物 (3)



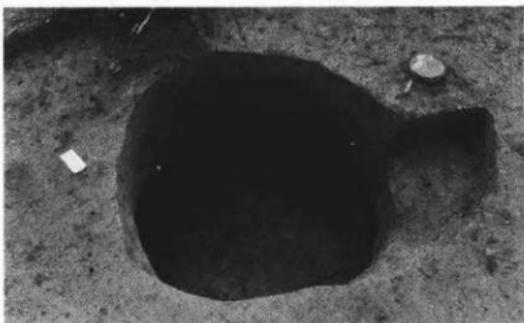
B地区南西部土壤集中区全景（西▶東）



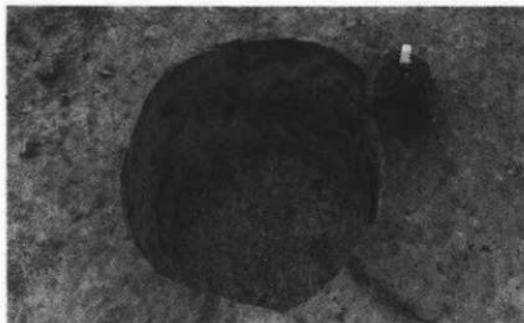
同上（北▶南）



SK105

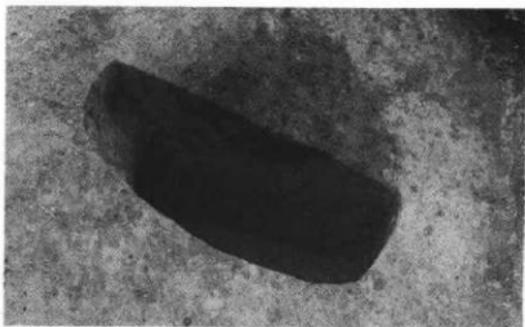


SK108

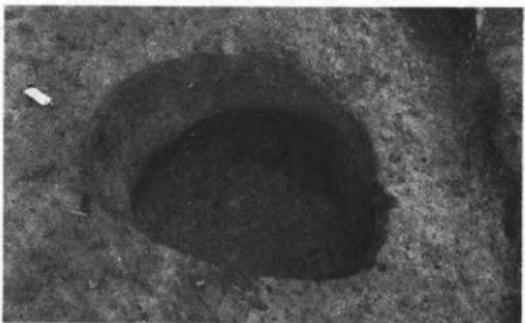


SK129

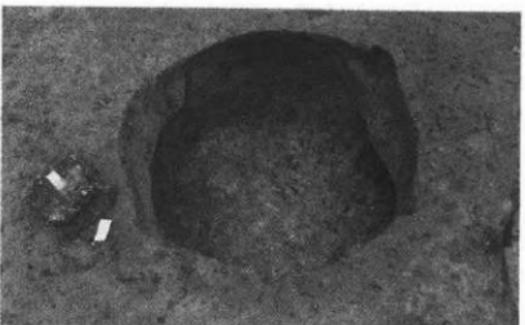
SK105・108・129 土壙



SK130断面

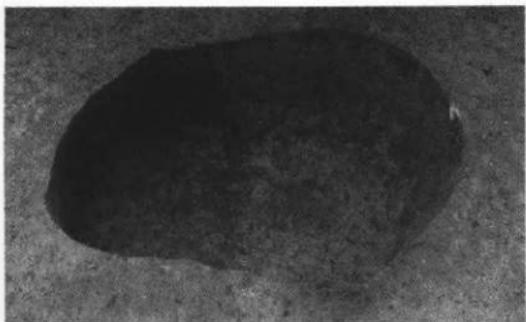


SK130

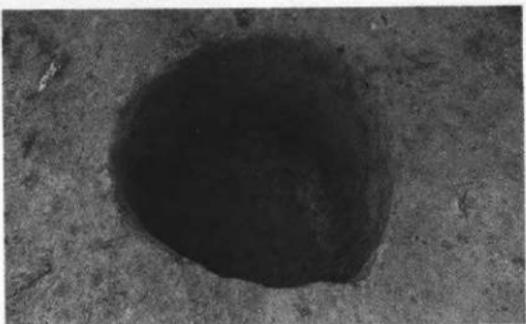


SK133

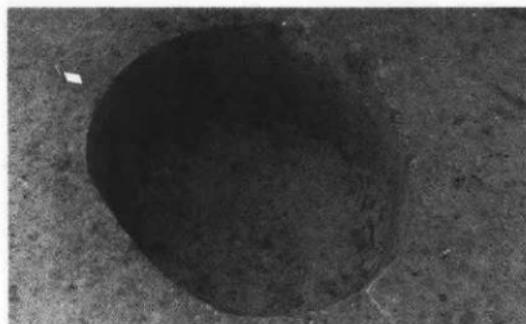
SK130・133 土壙



SK134

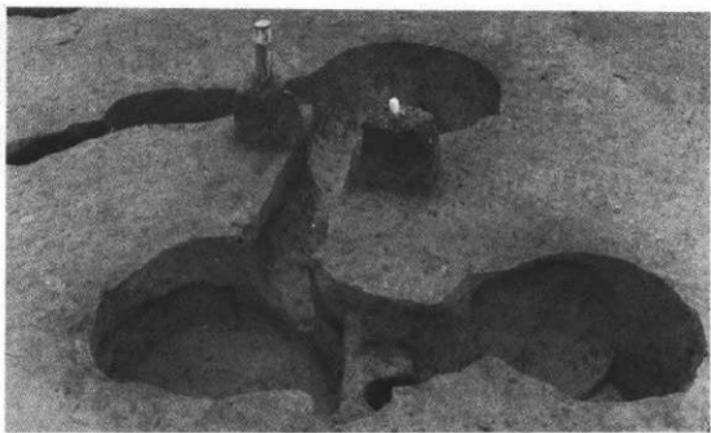


SK138



SK140

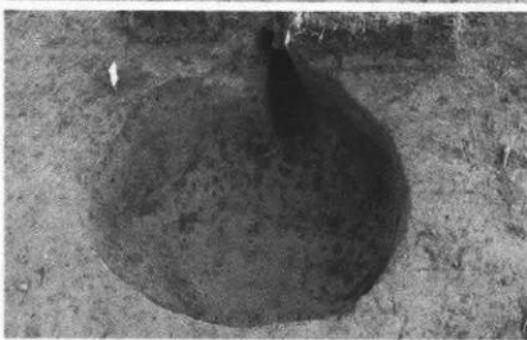
SK134 • 138 • 140 土壙



SK137・139・141・SKT144 SX160・161



SK137断面

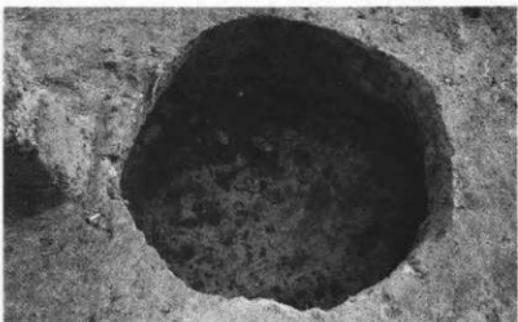


SK137

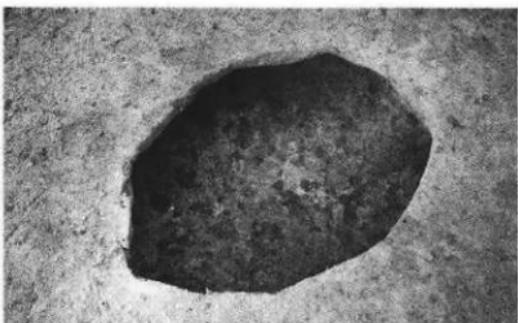
SK137・139・141・SKT144 土壤・SX160・161 清状遺構



SK155



SK159

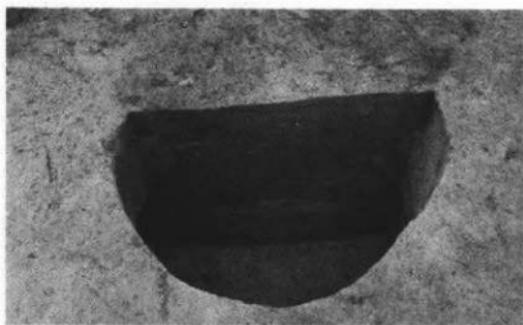


SK156

SK 155・159・156 土竇



SK139

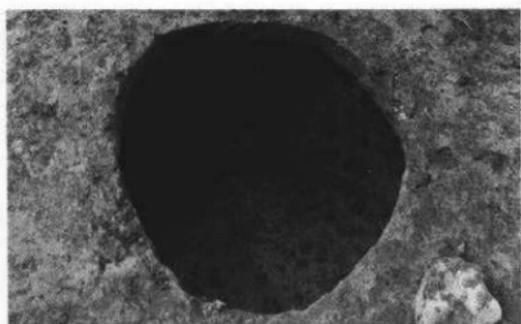


SK141

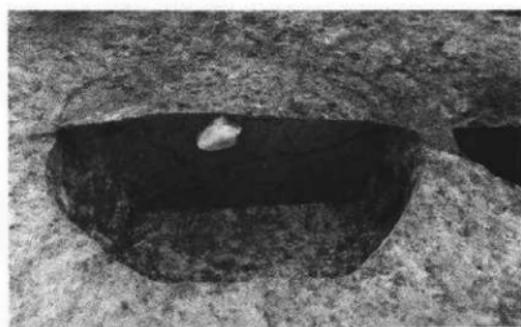


SKT144

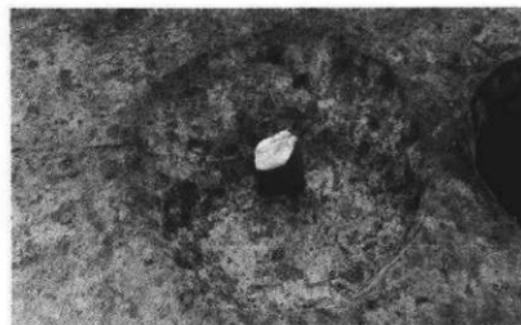
SK139・141・SKT144 土壌



SK157



SK112断面

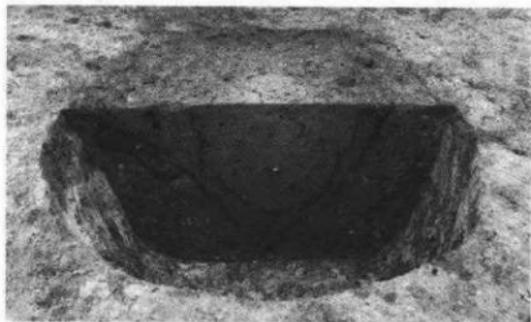


SK112

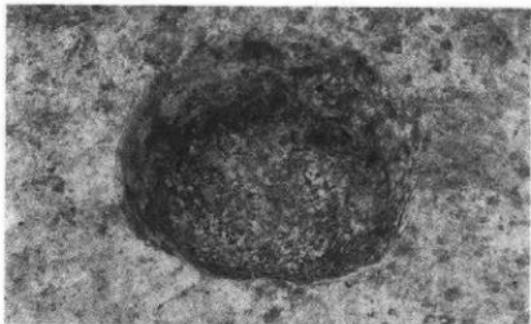
SK157・112 土壌



SK116

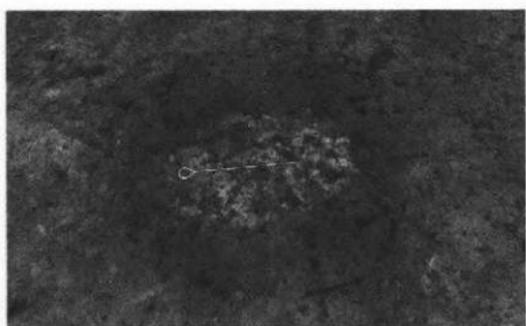


SK117断面



SK117

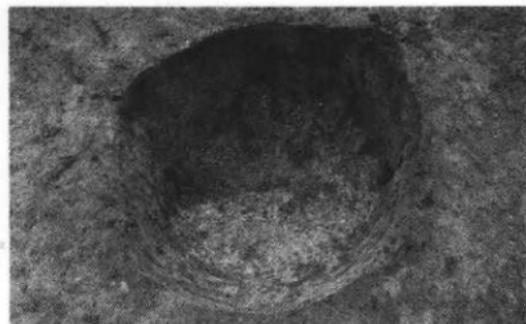
SK116・117 土壙



SK125確認

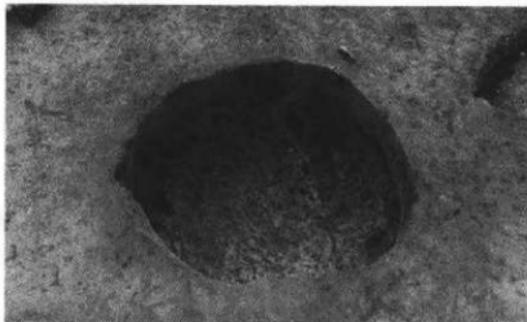


SK125断面

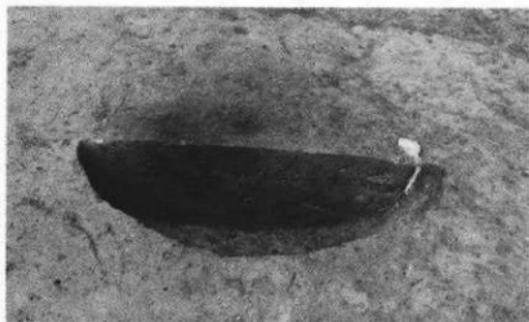


SK125

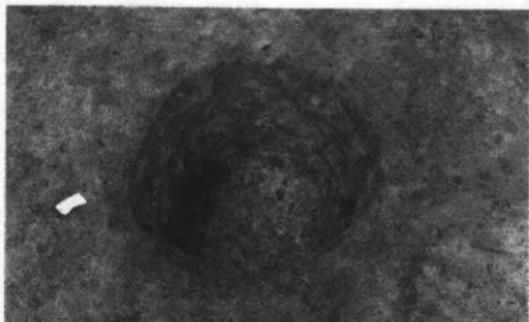
SK125 土壙



SK127

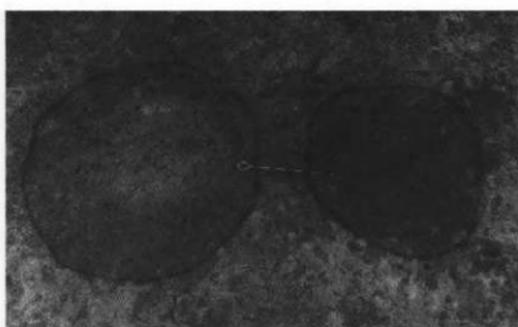


SK104

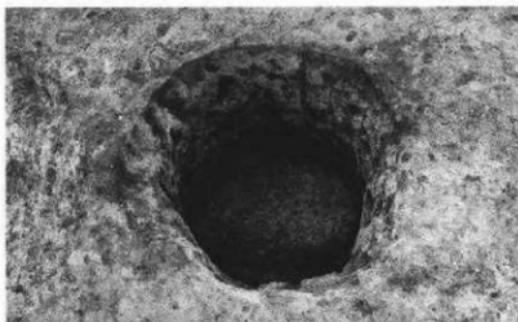


SK106

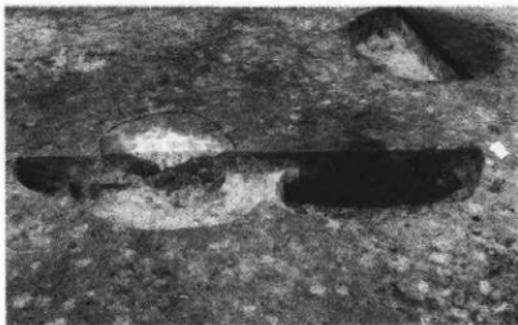
SK127・104・106 土壌



SK111・112

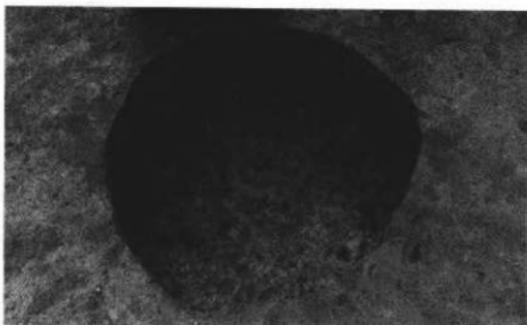


SK111

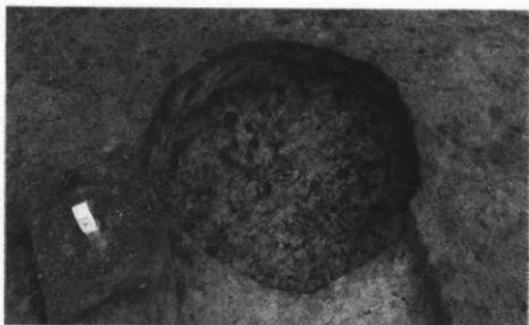


SK113・114

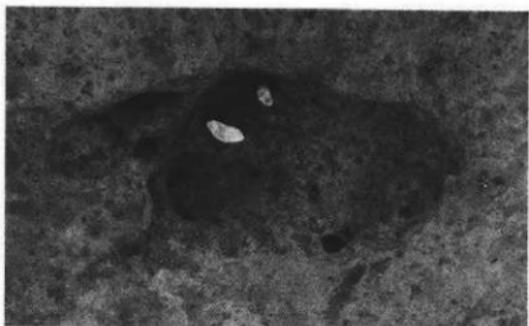
SK111・112・113・114 土壙



SK126

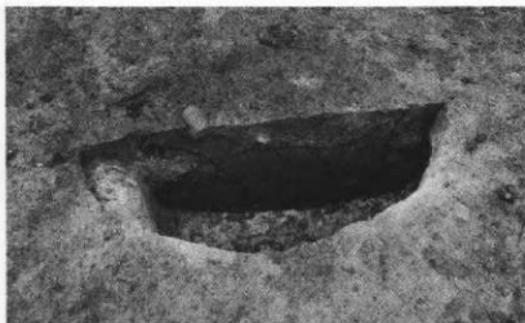


SK128

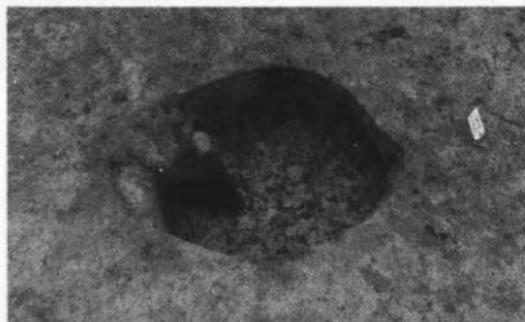


SK133

SK126・128・133 土壠



SK132斷面

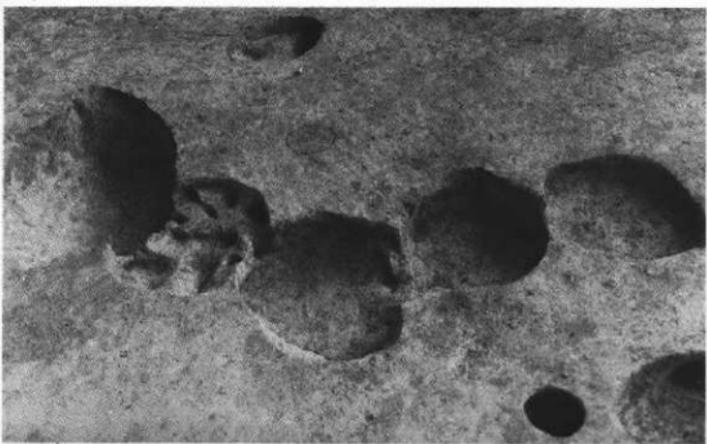


SK132

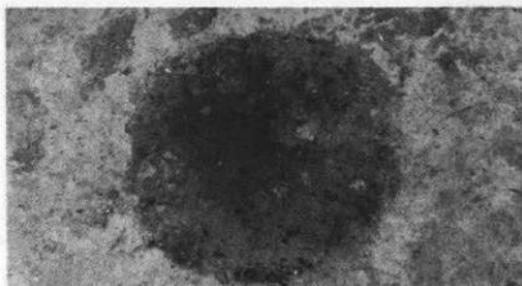


SK136

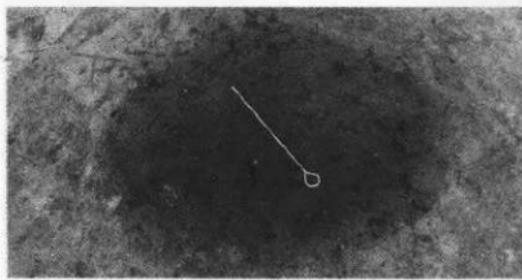
SK132・136 土壙



SK151・152・153・154・104

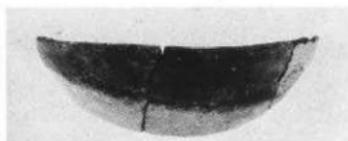


SK101



SK102

SK 151・152・153・154・104・101・102 土壙

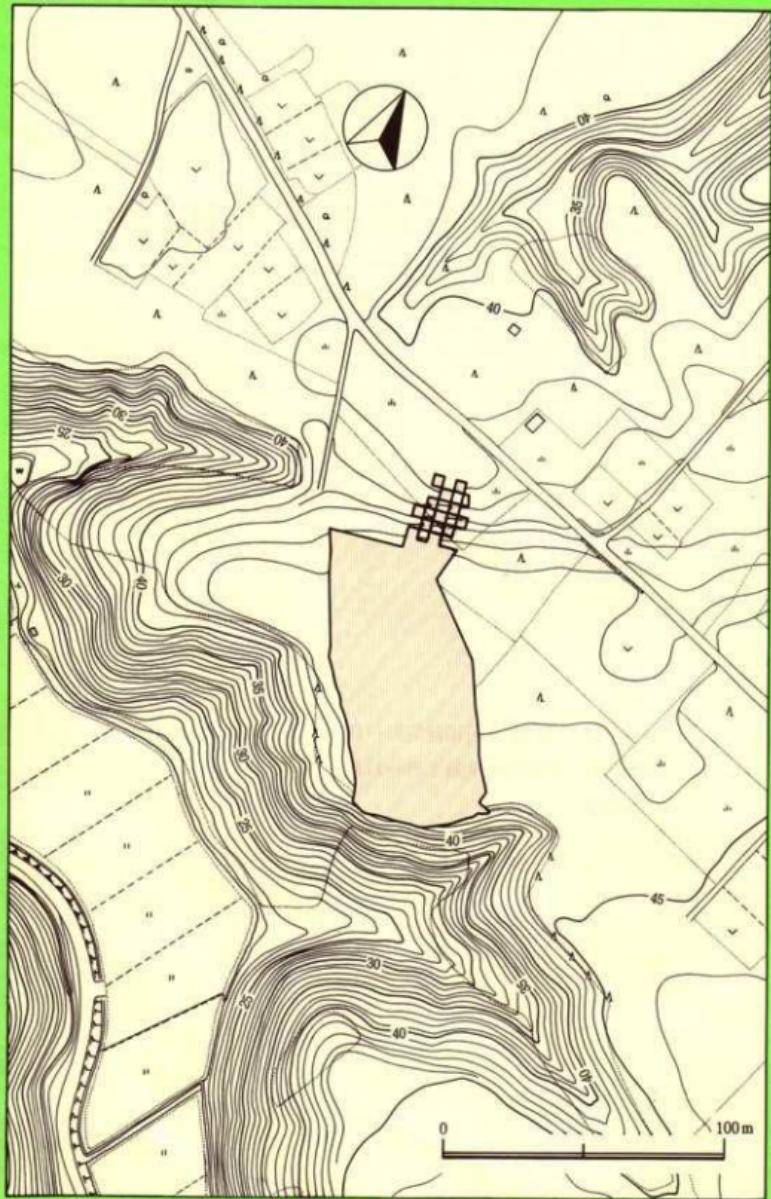


SK116・133・104・155・125・126 出土遺物

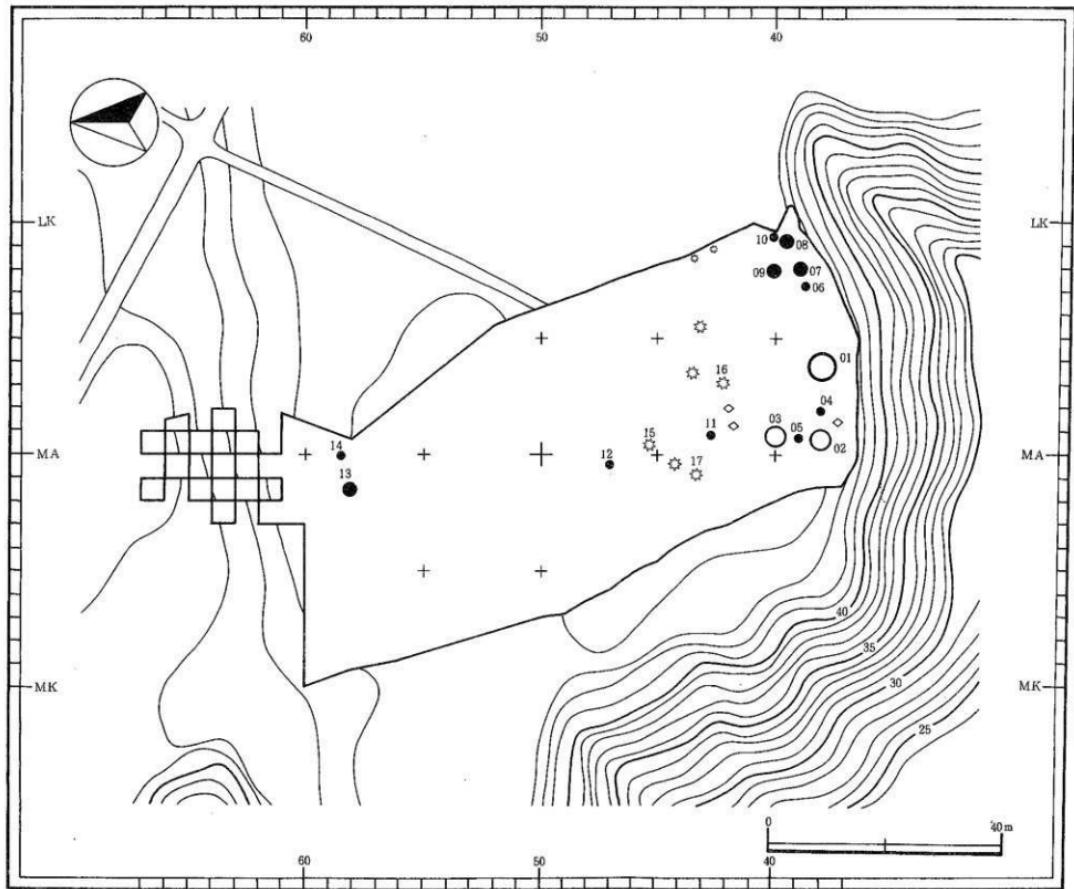
第5章 石坂台IX遺跡

(5IZDIX・No.36)

所在地 秋田県河辺郡河辺町戸島字七曲石坂台285-1他
調査期間 昭和60年9月2日～11月9日
調査面積 4,714 m²



第1図 遺跡周辺の地形と調査区



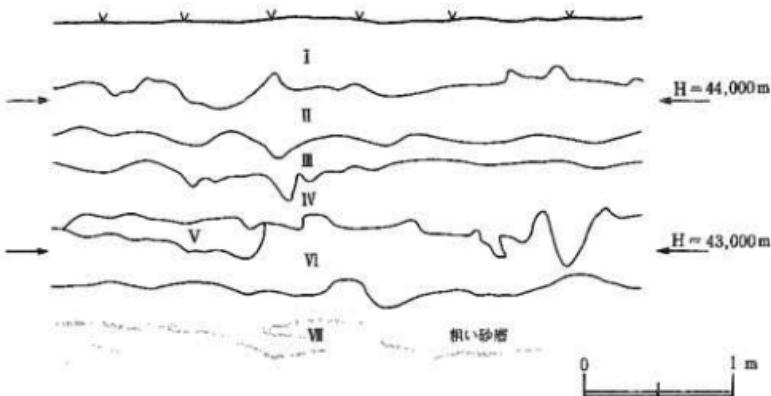
第3図 造構配置図

第1節 調査の概要

1 遺跡の概観

本遺跡は、岩見川左岸の低位段丘上野台面の西端に位置する。西側は白熊沢の急斜面で区切られ、北側は低位段丘七曲台面に続く段丘崖で、比高差約5mの斜面になっている。南側は白熊沢から東に向かって、幅約100m、断面V字形の大きな沢が入り込み急斜面の崖になっていて、東から西に張り出す平坦な舌状台地を形成している。標高は約40m～45mである。南側に入る沢の対岸には石坂台Ⅳ遺跡、沢頭には縄文時代後期～晩期の土壙が検出された石坂台Ⅲ遺跡がある。台地の南端から中央部付近までは梅を植林した際地山を50～80cm程掘り込んだ穴が多数あり、また中央部東側一帯は黒ボク土の採掘によって攢乱されている。

遺跡の基本層位は第I層から第VII層（段丘疊層）まで8層に分けられる。第I層（黒褐色土層）は表土の黒ボク土で厚さは30～50cm、植物根による攢乱をうけている。この層の下部には粘質の赤褐色土が部分的に堆積する。これは主に遺構が埋没していく際に形成されるような窪地に堆積している。第II層（粘質褐色土層）から第VII層（浅黄色砂層）までは、更新世の段丘堆積物である。第II層（褐色土層）から第IV層（明黄褐色土層）までは粘土質でよくしまっており、下層になるにつれて色調が褐色から明黄褐色に変化していく、第V層ではそれにやや砂がまじる。第VI層は粘性の大きい淡黄色土層で、まだらに赤褐色のよごれがある。第VII層は砂層で、粗い砂層が細かい砂層の中に縞状に入る。第III層と第VI層には炭化物粒が少量混入する。2カ所（MH52・LK41）で行なった深掘りでは、いずれの層位にも石坂台Ⅳ遺跡や松木台Ⅲ遺跡で認められたようなインボリューションは認められなかった。遺構は、第I層（黒褐色土



第2図 遺跡基本層位

層）から第Ⅱ層（褐色土層）を掘りこんで構築されている。遺物は第Ⅰ層に包含される。

検出された遺構は、縄文時代の竪穴住居跡3軒、土壙1基、焼土3カ所である。遺構は台地の南縁端から幅およそ20mの縁辺部に集中する。竪穴住居跡は複式炉をもつものが2軒（SI01・03）、地床炉をもつものが1軒（SI02）である。いずれも床面および埋土から出土した土器からみて縄文時代中期後葉の竪穴住居跡である。遺物が出土した土壙は3基（SK05・07・09）である。SK05からは縄文時代中期後葉、SK07・09からは縄文時代後期の土器片が出土した。

遺物は縄文時代中期中葉から晩期後葉のものまで出土した。中期の土器片は円筒上層式が2点の他はすべて大木式である。遺跡内における遺物の散布状況には時期によって偏りが認められる。縄文時代中期後葉・大木9式の遺物は調査区の南側で広範囲に出土したが、大木8b式の遺物はSX15・16からのみ出土した。後期の遺物は主にSK07・09の周囲および調査区南西部から出土した。また、SI02竪穴住居跡から出土した小型深鉢形土器（第9図1）のように、隣接する遺構内あるいはかなり離れた遺構内から出土した土器片が接合したり、同一個体だったりする例があった。

2 調査の経過

調査は重機による表土除去およびグリッド杭打設の後、9月2日より調査区南端から手掘りによる表土除去を開始した。9月5日までにかなりの遺物が出土し、竪穴住居跡3軒、土壙4基のプランを確認した。9月14日からはそれまで検出した遺構の精査と並行して調査区東側からも粗掘りを行い、台地北東端で2基の土壙を検出した。その後調査区域が台地中央部に進むと遺構は検出されなくなり、遺物の量も減少し、46ラインから北側ではほとんど出土しなくなった。10月にはいると雨天の日が多くなり、精査が進まず、台地中央部の粗掘りに終始する日が続いた。この間にSI02とSK09の埋土を水洗し、SI02埋土からは黒曜石と頁岩のチップが、SK09埋土からは炭化栗が検出された。10月22日からは調査区南東部の再精査と拡張および北側斜面の調査を行った。その結果、南東隅で新たに2基の土壙が検出された。北側斜面からは遺構は検出されず、陶器が1点出土したのみであった。11月9日に全遺構の精査を終了した。

第2節 調査の記録

1 検出遺構と遺物

(1) 竪穴住居跡

SI01竪穴住居跡

調査区南端の台地縁辺部で検出された。平面形は南北5m、東西4.7mの不整六角形を呈す

る。壁は床面からほぼ垂直に立ちあがる。残存する竪穴壁の高さは北側で約45~50cm、南側はやや削平されていて約25~30cmである。床面積は約17.2m²である。

中央部北側に土器埋設炉があり、その北側に隣接して南北約48cm、東西約68cm、深さ約28cmのピット、さらにその北側から北側壁までの間を浅く掘り込んだ複式炉をもつ。炉の主軸方向はS-2°-Eである。埋設土器は火熱を受けて非常に脆くなっている。ピットも強い火熱によって壁および底面が硬化・赤変している。それに対してピットと北側壁の間の浅い掘り込みは、底面が火熱によってやや硬化しているものの、埋設土器やピットほどは焼けておらず、機能の違いを窺がわせる。また、中央部東寄りには火熱をうけて硬化・赤変した部分があり地床炉と認められる。

南側を除いて壁直下には幅約10~20cm、深さ約5~10cmの壁溝がめぐる。主柱穴は炉の主軸方向を軸として3組6本が対称に配されている。(北西隅の1本は攪乱坑内にわずかに痕跡をとどめる。) これらの他に壁溝内には小ピットが部分的に不規則に認められる。竪穴住居跡の出入口には壁溝がまわらないと仮定すれば出入り口は南側になるが、この部分が特に踏み固められている形跡はなく、断定はできない。又、竪穴住居跡の中央に深さ約20cmの円形ピット、南側壁の中央付近に深さ約50cmの円形ピットが検出された。

竪穴住居跡北東隅および南東隅の外側には径約50~60cmの円形ピットが検出された。主柱穴の配置が壁際に近く、いずれの柱も直立していたことを考えればこれらのピットは住居外の施設と考えるよりも、住居内部の施設と考えたほうが妥当であろう。

この他に、竪穴住居跡の中央に深さ約20cmの円形ピット、南側壁の中央付近に深さ約50cmの円形ピットが検出された。

埋土は基本的には、1:粘性の強い暗褐色土(炭化物粒を含む)、2:軟質の暗褐色土、3:軟質の褐色土(焼けて硬化した黄褐色土粒と炭化物粒を含む)、4:しまりのある褐色土(焼けて硬化した黄褐色土粒と炭化物を多量に含み、中には木材の原形をとどめているものもある)、5:ややしまりのある暗褐色土、に分けられる。6:木根等による攪乱である。埋土中には細い丸太材の形状が推測できるものも含め、多量の炭化物が含まれており、床面からもかなりの量が検出された。また床面には焼土粒がかなりの範囲にわたって認められた。竪穴住居跡の上屋が焼失した可能性が強い。

出土遺物

埋設土器(第5図1);口縁部および体上部を欠失している。残存する部位から推定して、口縁部がややひらき体部中半に最大径をもつ深鉢形の器形となる。文様は体上半から沈線による逆「U」字状の懸垂文が18単位描かれる。懸垂区画の中にさらに縦位の構造区画、および逆

「U」字状区画が施される文様とそれらをもたない文様とが9単位づつ交互に配される。縄文はLR原体を用いて沈線の区画後に縦位回転施文されている。胎土には径2~3mm程の石英・長石などの砂粒が多く含まれるが、焼成は良好で堅緻な仕上がりとなっている。

埋土中の土器（第5図2、第6図、第7図）；SI01の埋土中の土器は炉の周辺から最も多く出土している。これらの土器は、第5図1・2のような懸垂区画文もしくは楕円区画文をもつ土器（第6図5~7、10~18）と、そのような区画文をもたず全面縄文を施す土器（第5図4・8・7・19~25、第7図26~35）とがあり、その他第6図3のような条痕文の施される土器がある。懸垂区画文をもつ土器では口縁部は直立するかやや外反するかであるが、第6図5のような内凹するものもある。縄文はLR原体を用いるものとRL原体を用いるものとがあり、また第6図10~13はLRLRの複々節の原体を縦回転させたものである。摩滅の著しいものを除いた縄文の観察可能な土器では、沈線区画は縄文施文後に行なわれている。第5図2は口縁部が外反する深鉢形土器である。口縁部は研磨されて無文帶をなし、頸部には一条の沈線がめぐる。体部は懸垂区画文と、「S」字および逆「S」字区画文が交互に配される文様構成をとる。縄文はRL縄文の横位回転施文であるが、沈線の区画は縄文施文後に行なわれている。胎土には砂粒が含まれる。

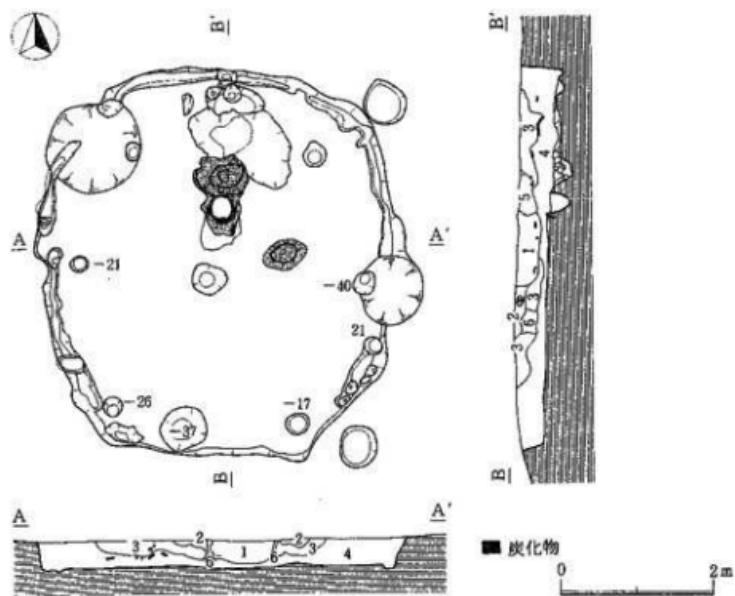
全面縄文が施文された土器では、縄文に複節と単節のものと2種がある。複節のものは第7図28・29・31~35で、RLRの縦回転が28・29・31、LRLの縦回転のものが32~35である。30はLRLRの複々節の原体が縦回転施文されている。

第6図1は口縁部に無文帯をもち体部に条痕文が施文された鉢形土器である。頸部には一部沈線が横位に描かれ無文部分と条痕文部分の施文の目安となっている。条痕文の原体は幅22mmで、頸部の沈線施文後に施されている。第6図2は全面縄文の施された小型の鉢形土器である。縄文は燃りの細かなLR原体を用いて縦位に回転施文しているが、回転する長さは3~5cmと短い。

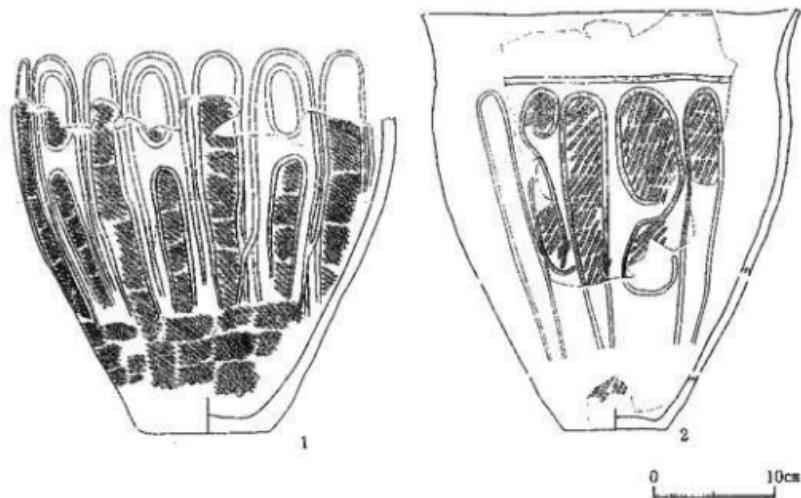
他に土製品として土器片利用の土製円盤（第7図17・18）が出土している。図における上下端は輪積み痕部分であるが、両側縁を弧状に打ち欠いて円盤状に整形している。

出土した石器は搔器3点、二次調整のある剥片7点、磨製石斧2点、石皿1点である。

搔器（第8図5~7）には横長の剥片を素材としたもの（5）と、縦長の剥片を素材としたもの（6・7）がある。5では素材剥片の両面に整形のため剥離が施され、その際打面も剥除されている。6・7では主に素材剥片の表面に限って整形剥離が施され、また打面も残る。1~3・8~10は、もとの剥片の縁辺部に細かく二次調整の施されたものである。1・2・9・10は折損し、もとの剥片の打面や先端が失われているが、1および10は搔器であった可能性もある。4は菱形の剥片の表面から数回加撃して打面をとり去ったものである。裏面には手が加えられておらず打瘤は残る。また縁辺部には使用による刃こぼれが認められる。以上の石材は全て頁岩である。

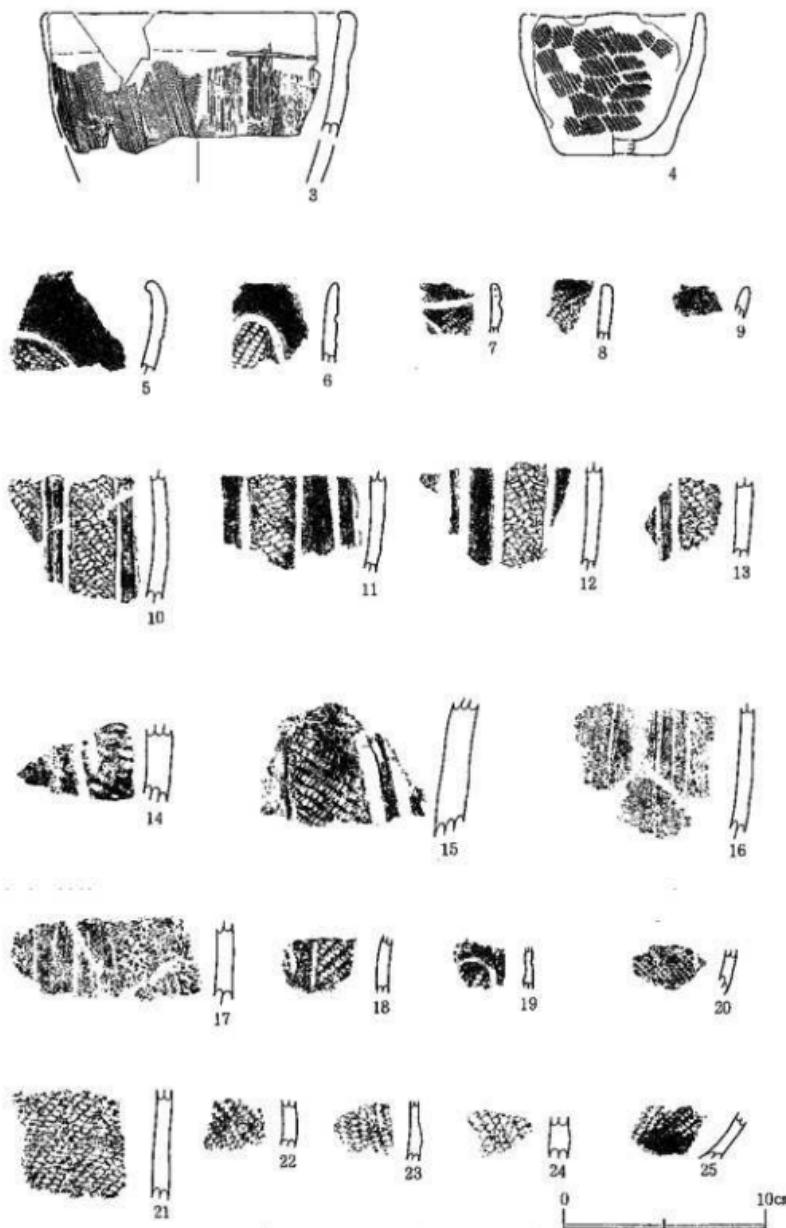


第4図 SI01竪穴住居跡



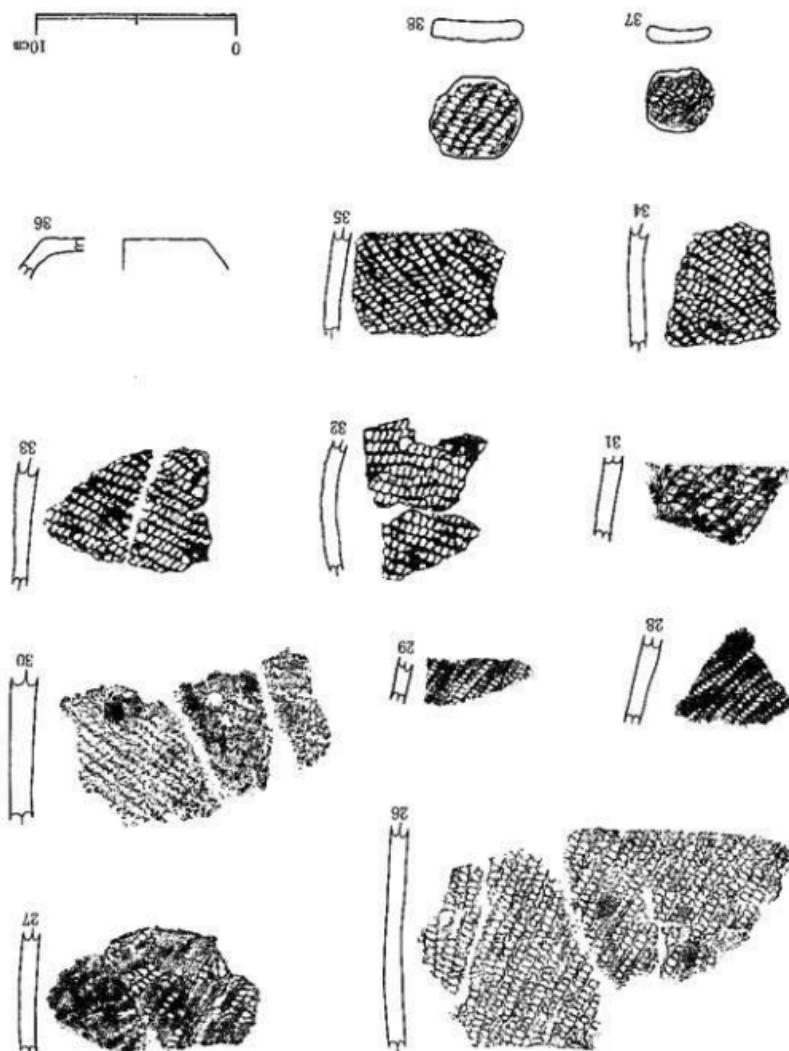
第5図 SI01竪穴住居跡出土遺物

第2回 第5章 石板台匁遺跡



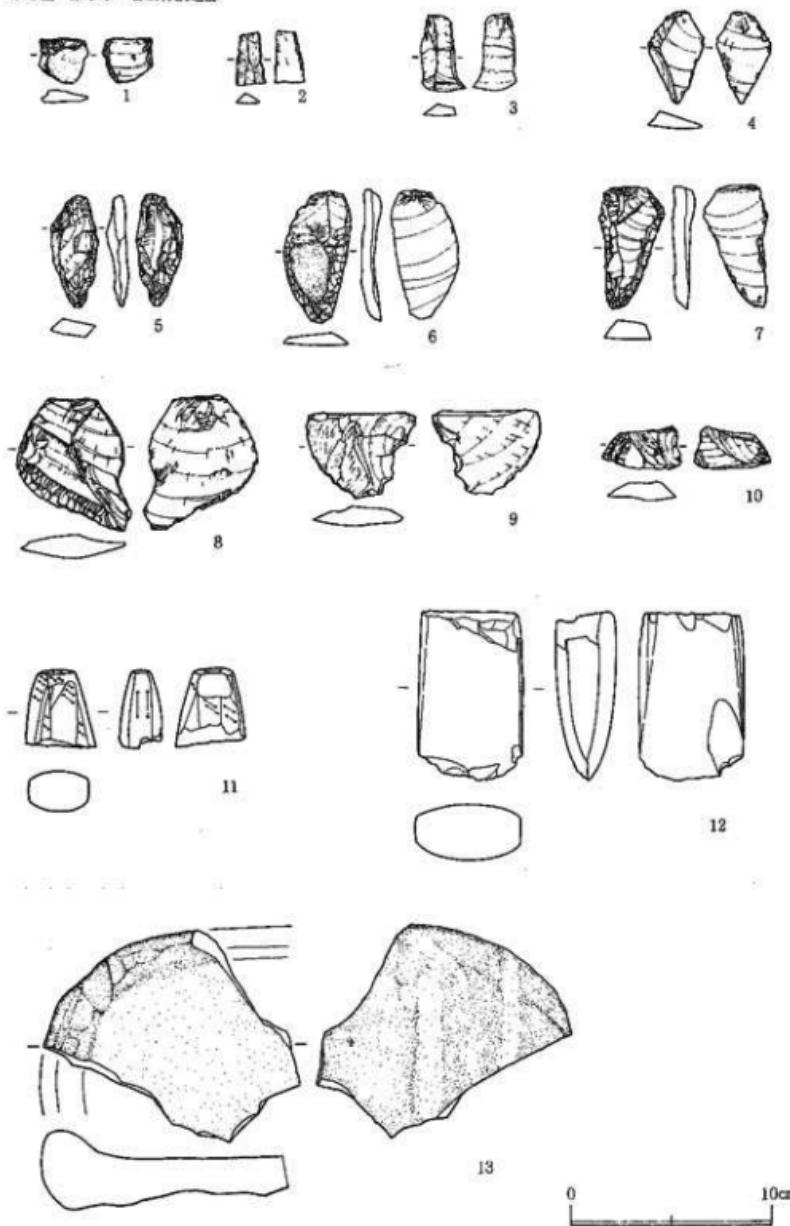
第6図 SI01堅穴住居跡出土遺物

第7圖 S101號文化遺跡出土土壤物



11件鐵頭器皿，12件穿山器皿的磨礪石片7件。11件水桶狀土器皿，12件基盤器皿共失去12件。12件刀頭器皿的刀片樣本各2件。13件鐵質的裝置的石頭的鐵片7件3件，表面有
13件鐵頭器皿，12件穿山器皿的磨礪石片7件。11件水桶狀土器皿，12件基盤器皿共失去12
件。12件刀頭器皿的刀片樣本各2件。13件鐵質的裝置的石頭的鐵片7件3件，表面有

第2圖 第5章 石板台Ⅸ遺跡



第8圖 SI01整穴住居跡出土遺物

SI02堅穴住居跡

調査区南西端の台地縁辺部で検出された。SI01堅穴住居跡とは壁間距離約8.3m、SI03堅穴住居跡とは壁間距離約3.9mを計るが、その間にSK05があり、SK05とは約1.3mしか離れていない。平面形は円形を呈し、径約2.8mと小型である。壁はほぼ垂直に立ち上がる。残存する堅穴壁の高さは約20~30cmを測る。中央部の径1m程が僅かに盛り上がり、かなりの火熱をうけて硬化・赤変しており、地床炉と考えられる。この地床炉のすぐ脇の床面から第9図1の小型深鉢形土器が斜めに倒れかかった状態で出土した。床面積は約5.7m²である。

主柱穴かと思われるビットは4ヵ所検出されたが、北東隅では検出されずその配置は三角形である。北東隅では径約50cm、深さ約15cmの円形ビットが検出され、その中に長さ約28cmの長大な河原石が1個、直徑約10cmの礫が2個置かれている。これらのビットと礫は火熱を受けていない。

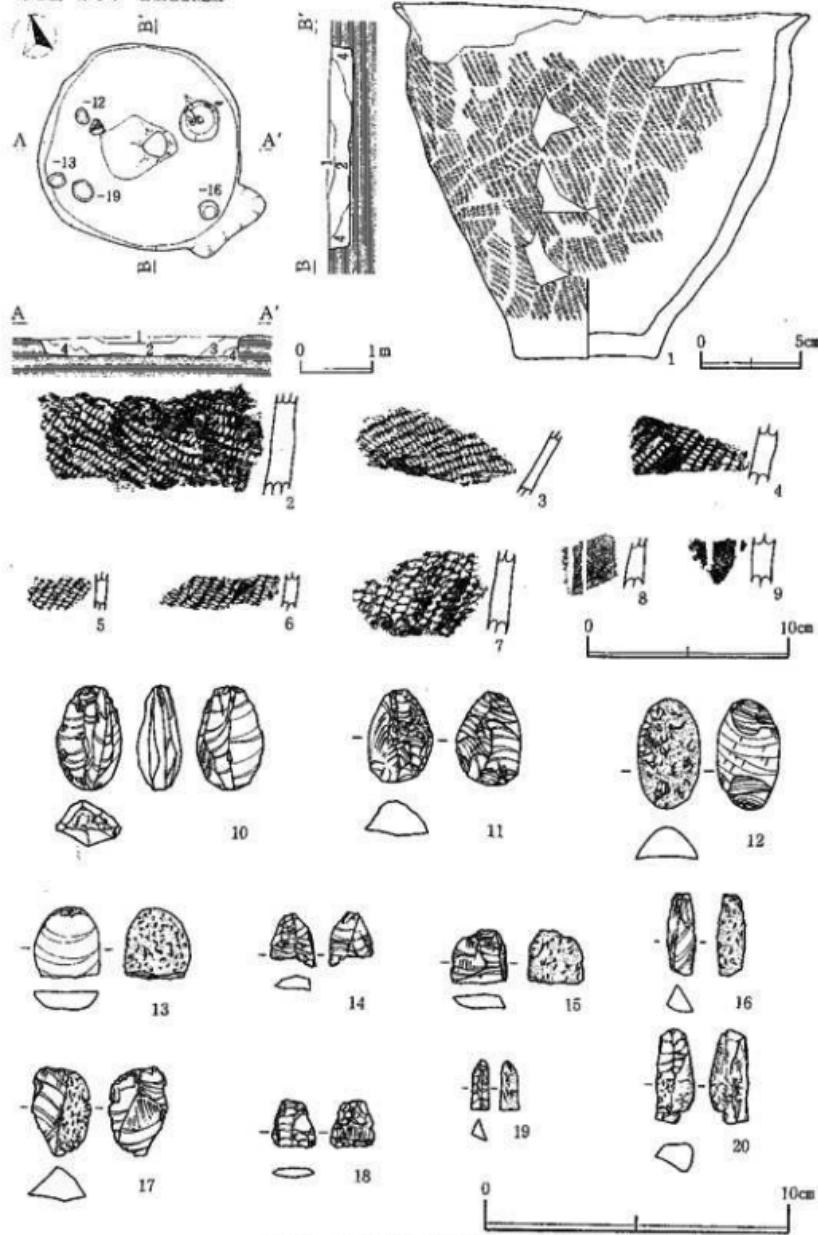
埋土は、1:粘質の褐色土、2:やや孔隙がありボソボソした感触をうける褐色土、3:粘性が弱く孔隙が多い褐色土、4:2に比べて孔隙が少なくやや暗い色調の褐色土の4層に分けられる。周囲から流れ込んだ土が自然堆積したというより、短時間で埋め立てられた可能性が強い。埋土の2層からは第9図2~9の土器片の他、10~20の黒蠅石製石器、剥片および黒蠅石と頁岩のチップが出土した。

出土遺物

第9図1は口縁部が外反し、体部がゆるいカーブを描きながら降り、底部近くで外側へ反る小型の深鉢形土器である。口縁部は拇指によるナデ調整の後、ミガキ調整によって無文化している。体部にはLR原体の縱回転施文による無節の縄文が施される。底部近くおよび底面も丹念なミガキ調整がなされる。胎土は精選した粘土を用い、砂粒混入の程度は極めて低い。2~9は埋土中から出土したものである。2~7は全面縄文の施されたもの、8~9はおそらくは懸垂する区画文の沈線によって、縄文部分と無文部分とに分けられるものである。使用される原体は、1がLR、3~6がRLRであり回転方向は全て縦位である。

10は紡錘形の楔形石器である。側面の剥離は全て図の上方からの加撃による。上端は数回の加撃によって薄く尖り、下端は素材となった円礫の自然面を残す。11も同様楔形石器であるが10の素材が円礫核であるのに対し、11はその打割後にとられた肉厚の剥片を素材としている。素材の表面には一部自然面が残る。上下端からの剥離は主に裏面に多く、上端では1箇所、下端では2箇所から加撃されている。12~17・19・20は、10・11の楔形石器をつくる際の剥片ならびにその欠損品である。12・13・15は原材の円礫の外皮の部分であり、12ではその裏面（主要剥離面）の上下端に加撃痕が観察される。13~15は下半を欠損している。16・19・20は、10・12のような製品を作る際に剥ぎ取られたスパール状の剥片である。断面が三角形をなし背

第2圖 第5章 石板合団遺跡



第9図 SI02堅穴住居跡と出土遺物

面側が原材の自然面である。17では上端に加撃痕が認められるが、下端は第一次剥離面をそのまま残す。18は両面から細かな剥離の施された石器である。尖端は折損している。以上石材は全て黒耀石である。これらの石器は住居跡東側埋土の径50~70cm程の範囲から、多量のチップとともに出土した。18の石器を除いた楔形石器およびその製作に関わる剥片は、同一の原材である可能性が強い。

SI03堅穴住居跡

SI01堅穴住居跡、SI02堅穴住居跡が台地の南端の斜面に極めて近い所に位置するのに対して、この堅穴住居跡はSI02堅穴住居跡の北側に位置し、台地の南端からはやや離れている。南側には90cm離れてSK05がある。平面形は径約3.8mの円形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、残存する堅穴壁の高さは約40cmを測る。

炉は住居跡中央部から60cm程南寄りの所に土器埋設炉があり、その南側には径約20cm、深さ約15cmの小ピット、さらに南側に径約40cm、深さ約10cmの掘り込み部分がある複式炉で、そのすぐ側には径約20cm程の河原石が置かれている。埋設土器（第10図1）は深鉢形土器の口縁部を口縁端から約18cmの所で切断し、さらに同じ土器の底部も下から高さ約18cmの所で切断し、それらを二重に埋設したものである。内側に埋設された底部は上の部分が火熱を受けてやや脆くなっている。炉の土器埋設部分では火を焚いていたことは窺えるが、隣接するピットや掘り込み部分ではほとんど火を焚いた痕跡は認められない。炉の主軸方向はN-10°-Wである。

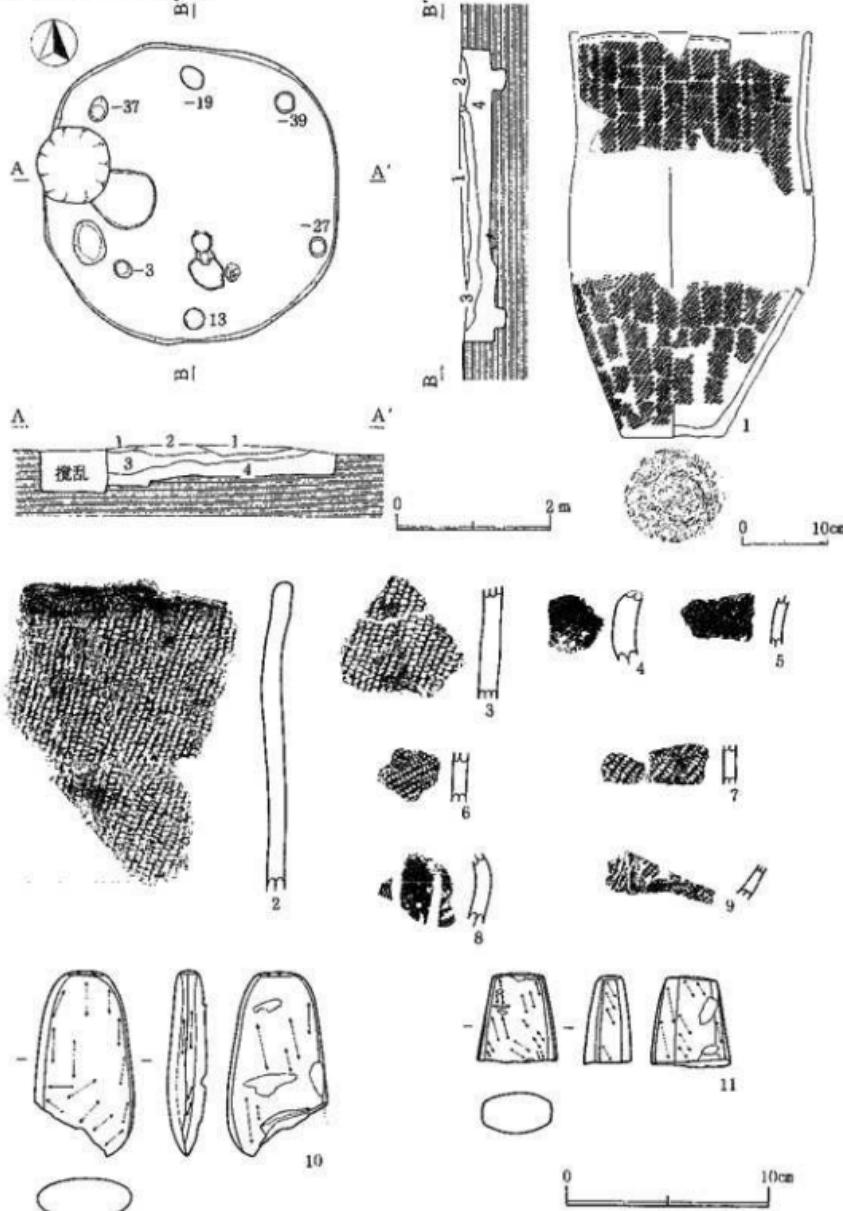
柱穴は対称位置に2本一組で計6カ所検出された。南北方向で対をなす一組は浅く他の二組は比較的深い。この他に床面西側からは長径約80cm、深さ約10cmの深いピットが検出された。

埋土は、1:粘質の褐色土（炭化物を多く含む）、2:孔隙が多く粒が粗い黒褐色土、3:粘質の黒褐色土（焼けて硬化した黄褐色土粒をふくむ）、4:粘質の褐色土（炭化物を含む）の4層に分けられる。埋土中からは第9図2~9の遺物が出土している。

出土遺物

埋設土器（第10図1）;体部の中程を欠失しているが、体部上半でわずかにすばまり体部下半で膨らむ深鉢形土器である。口縁部には幅1.3cm程で無文帶があり、体部はRLRの原体が全面縦位に回転施文される。底面は調整をうけているが、網代痕跡が一部残る。胎土にはいく分砂粒が混入されるものの焼成は堅緻である。

第10図2~9は埋土中から出土したものである。2は埋設土器同様口縁部に無文帶が設けられる深鉢形の土器である。口縁部の断面形が丸味を帯びたつくりとなっている。使用される原体はRLRで縦回転施文。3は2と同一個体の体部破片。4・5は口縁部の無文化された破片である。8は口縁の内凹する器形をもつ深鉢形土器であろう。懸垂区画文が施文されている。



第10図 SI03整穴住居跡と出土遺物

石器は埋土の上層から磨製石斧が2点出土したにとどまった。10は凝灰質砂岩製である。素材として偏平な精円盤を選んでおり、片面に素材の風化した面が残る。11はシルト質砂岩製である。素材の層状構造にそって本体部分中半で折損したものである。

(2) 土壌 (SK04~14)

土壌は堅穴住居跡群の周辺に2基、調査区南東端の台地南縁部で5基、台地中央部のやや南寄りに離れて2基、台地北縁部で2基の計11基が検出された。

①堅穴住居跡の周辺

SK04: SI01堅穴住居跡とSI02堅穴住居跡のほぼ中間で検出された。東西約70cm、南北約80cmでほぼ円形を呈する。深さは約30cmである。南西約2mの所に焼土があり、あるいはこの土壌に関連するものかも知れない。遺物は出土しなかった。

SK05: SI02堅穴住居跡とSI03堅穴住居跡のほぼ中間に位置する比較的大きな土壌である。平面形は円形で東西約1.4m、南北約1.6m。その割には浅く深さは約35cmである。埋土は孔隙が多く軟質でSI02堅穴住居跡の埋土に似ている。遺物は埋土中から第12図1、2が出上している。1は口縁部文様帯に貼付された渦巻様の隆帯の剥落したものである。2は黒耀石の剥片でSI02堅穴住居跡から出土したものと同一のものである。

②台地南縁部

SK06: 平面形は径約1.2mの円形を呈する。深さは約60cmを測る。断面形は開口部よりも底部が若干ふくらむ袋状である。埋土中には少量の炭化物粒を含むが、SK07やSK09のような炭化栗や遺物は検出されなかった。

SK07: 平面形は径約1.2mの円形でSK06とほぼ同じであるが、深さは約80cmと少し深めである。断面形は袋状を呈する。この土壌は底面全体が非常に強い火熱をうけて焼土化しており、他の土壌と比べて特異である。埋土中には多量の炭化栗が含まれており底面に近いほどその量は多く、底面直上からも検出された。遺物はSK09から出土した土器（第12図7）と同一個体の土器片が埋土中から出土している。

SK08: 平面形は径約1.2mの円形でSK06、SK07と同様であるが、深さは約40cmと浅めで、断面形はピーカー状を呈する。遺物は出土しなかった。

SK09: 平面形はSK06~08と同様径約1.2mの円形を呈する。開口部よりも底面がかなり奥に広がるフラスコ状土壌である。深さは約80cmを測る。埋土中には焼土のブロックや小粒、炭化物含まれている他、炭化栗が多量に含まれている。埋土の2分の1を水洗してみたところ約900グラムが検出された（図版23）。遺物はこの炭化栗の他に第12図3~7の縄文時代後期の土器片が埋土中から出土している。3~5は同一個体の破片である。同時施用具による2条の沈線

によって文様が構成される。胎土には雲母・長石などの砂粒を含み、焼成は堅く仕上がってい る。6はLR原体の右上一左下の方向で回転施文された体部の破片である。7は口縁部がやや 外反し、体部でゆるいカーブを描いており深鉢形土器である。最大径は体部中半にある。口 縁部には幅3.7mmで無文帯が設けられ、その下2.8cm程の体部が文様帶となる。文様帶中は3～ 5同様同時施文具による2条の沈線によって文様が描かれる。文様帶と上下限にめぐる沈線に は各々の沈線に向かって開く連弧文、その間に3組の沈線によって菱形と楕円形の構図が交互 に配置される。楕円形の構図内にはさらに蛇行しております2組の沈線文が描かれる。地文とし てLの掘りの撫糸文が施されるが、回転の方向は一定していない。胎土には砂粒を含むが、薄 手で堅い焼成である。

SK10:平面形は円形で径約1.1m、深さ約30cmの比較的浅い土壇である。遺物は出土しなかつた。

④台地中央部

SK11:SI03堅穴住居跡から約10m北側で検出された。この土壇をとりまくように焼土が2カ所 と遺物が出土した倒木痕が位置する。平面形は円形で径約80cm、深さは約20cmの深いビーカー 状の土壇である。埋土上面には径20cm程の扁平な河原石が置かれている。遺物は出土しなかつた。

SK12:SK11のさらに北側約15mの黒褐色土層（第Ⅰ層）中で検出された。径約1mの隅丸方 形の傾斜の緩やかな掘り込みに一面に焼土が堆積し、その上を炭化物粒を多量に含んだ黒色土 が覆っている。掘り込みの深さは確認面から約20cmであるが、地山（第Ⅱ層）にまで達してい るのは一部分のみである。遺物は出土しなかった。この土壇は第Ⅰ層中のかなり地表面に近い 所に構築されており、新しい時期（おそらくは近世以後）のものと思われる。

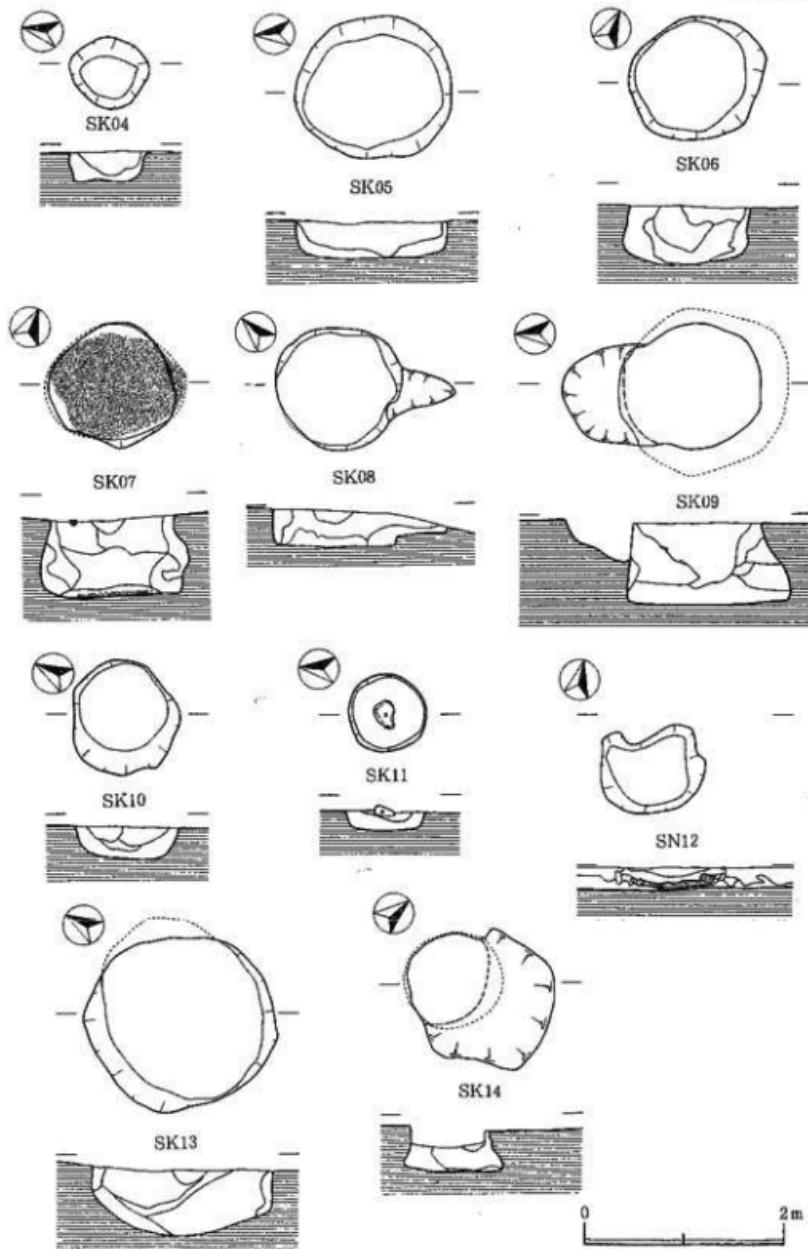
⑤台地北縁部

SK13:平面形は円形で径約1.9mと大型である。深さは約70cm、断面形はビーカー状を呈する。 遺物は出土しなかった。

SK14:開口部の径が約1m、底面はそれよりも若干広がる円形のフラスコ状土壇である。深さ は約50cmを測る。遺物は出土しなかった。

以上の土壇のうち、他と全く様相の異なるSK12を除き縄文時代と考えられる土壇を断面形・ 深さ・開口部の径から大まかに分けてみると、A:断面形が袋状で比較的深く開口部の径が大き いもの（SK06・07・09・13）、B:断面形が袋状で比較的浅く開口部の径が小さいもの（SK14）、 C:断面形が矩形で浅く、開口部の径が大きいもの（SK05・08）、D:断面形が矩形で浅く、開 口部の径が小さいもの（SK04・10・11）の4種類に分けられる。

AのうちSK06・07・09の3基は近接し、いずれの埋土からも炭化した果が出土しているこ



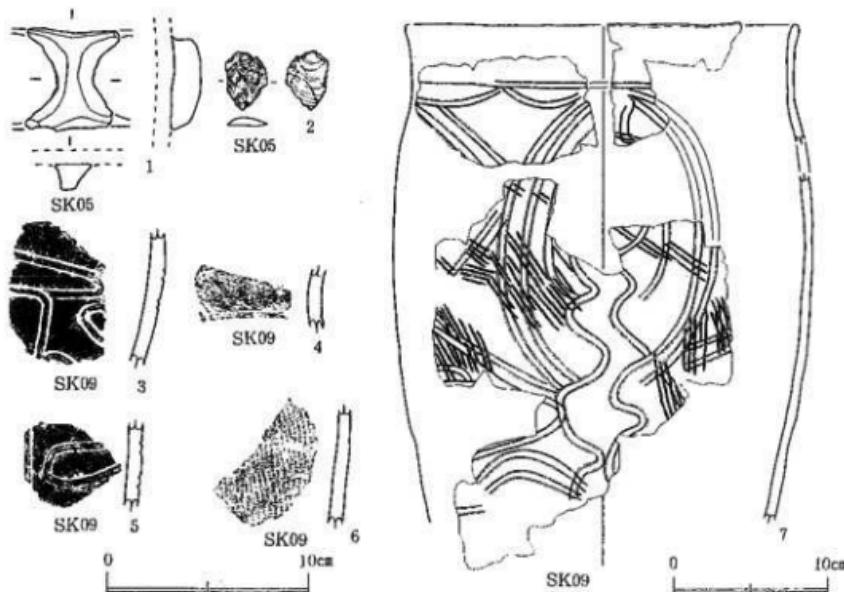
第11図 土壠 (SK04~SK14)

とから貯蔵穴と考えられる。SK07・09の出土遺物から時期は縄文時代後期である。SK13及びBのSK14は他の上層から離れた位置にあり、土壤内及び周囲から全く遺物が出土していないため機能や時期は不明と言わざるを得ない。CのうちSK05からは、SI02竪穴住居跡の埋土中からは多量に検出された黒曜石の剥片が出土しているので、SI02竪穴住居跡とほぼ同時期の縄文時代中期後葉に埋没したと考えられる。しかし、SK08の周囲からは縄文時代中期の遺物は全く出土しておらず、SK05と形態が類似することをもってSK08も同時期であるとは断定しがたい。Dのうち、SK11の中央には大きい石が置かれ、周囲から縄文時代晚期前葉の土器片が出土しているので、縄文時代晚期の土壤である可能性が高い。このような形態の土壤は、松木台Ⅱ遺跡や松木台Ⅲ遺跡でも検出されており何らかの関連があるのかもしれない。

(3) 倒木痕 (SX15~17)

調査区の南側を中心にかなりの数の倒木痕が検出されたが、それらの中で台地中央部に近い3カ所から遺物が検出されたのでSX15~17として記載する。

SX15: 径約3mの円形を呈する。第13図1~8の土器片が出土した。1・2は同一個体である。口縁部が内弯しキャリバー形を呈する深鉢である。RLの繩文施文後、粘土紐の隆起の貼付に



第12図 土壌内出土遺物

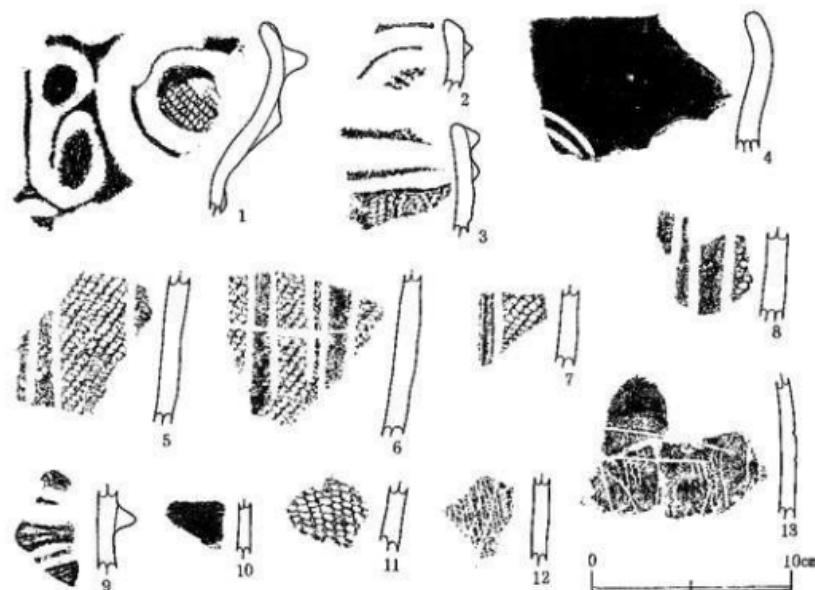
よって渦巻文を表出させている。3も隆帯とその間の縄文によって文様の構成がなされるが、破片の下部に沈線部分が残り両者の技法が用いられている。4は内凹する口縁をもつ深鉢形土器であろう。口縁下は幅広の無文部となるが、その下に2重の沈線による区画文が施される。

5～8は同一個体であり、いずれも懸垂区画をもつ体部の破片である。縄文部と無文部が繰り返し表現される。使用される原体はRLRの複節のもので縫位に回転施文されている。他にSI02堅穴住居跡床面から出土した小型深鉢型土器（第9図1）の口縁部が出土し、接合した。

SX16：長軸約5mの卵形を呈する。第13図9～11の土器片が出土した。9は1・2同様粘土紐の隆帯の貼付された破片。10は無文の破片。11はLRLの複節の縄文が縫位に回転施文されたものである。他にSI01堅穴住居跡から出土した土器口縁部（第6図3）の一部が出土し、接合した。
 SX17：長軸約7mの楕円形を呈する。第13図12・13の土器片が出土した。12・13は同一個体である。地文にLの撚糸文が施され、その後沈線によって文様が描かれている。

2 その他の遺物

第14図1は口端の断面形が三角形をなす、折り返し口縁をもつ土器である。器外面に折り返された部分に鋸歯状に粘土紐が貼り付けられ、LRの縄文原体の側面圧痕列が施される。口縁



第13図 倒木痕 (Sx15～Sx17) 出土遺物

下はやはり粘土紐の貼付文とその間に施される角押文列によって文様構成される。2は土器口縁部に付された弁状突起の破片である。表面には径5mm程の断面形の丸い粘土紐が突起の外縁に沿って貼付される。3はLR繩文が左上→右上の方向で回転施文され、横走する繩文を表出させたものである。4はキャリバー形深鉢の口縁部文様帶の破片である。丸味を帯びて膨らみ、地文としてRL繩文が縦位回転施文された後、粘土紐の貼付文によって文様構成される。5は口縁部がやや外側へ向かって開き、頸部で屈曲する深鉢形土器であろう。地文としてRL繩文が施される。口縁部文様帶での主たるモチーフは、隆帯による連続した波状文（文様帶中に上下から交互に突き合せた三角形の構図をつくる）と、口縁下にめぐる沈線と隆帯側縁に沿って施される沈線が、隆帯による区画中に枝線を伸ばす構図をとるものと思われる。6は口縁部がやや内窪し、体部は直線的における小型の鉢形土器である。口縁部は調整をうけて無文部分となり、体部にはLR原体が縦位に回転施文され、逆「U」字状の懸垂区画文が描かれる。この区画文により無文部と繩文部が交互に配置されるが、無文部の上部ではこれもまた逆「U」字状の隆帯が貼付され、懸垂区画文どうしを連結している。7は口縁上部が内窪し体部でゆるいカーブを描いており深鉢形土器である。体部には逆「U」字状の懸垂区画文が描かれさらに内部に梢円区画文、懸垂区画文が施されるものと、施されないものとが交互に配置される。区画文内に施文される繩文はRLR原体の縦回転施文されたものである。

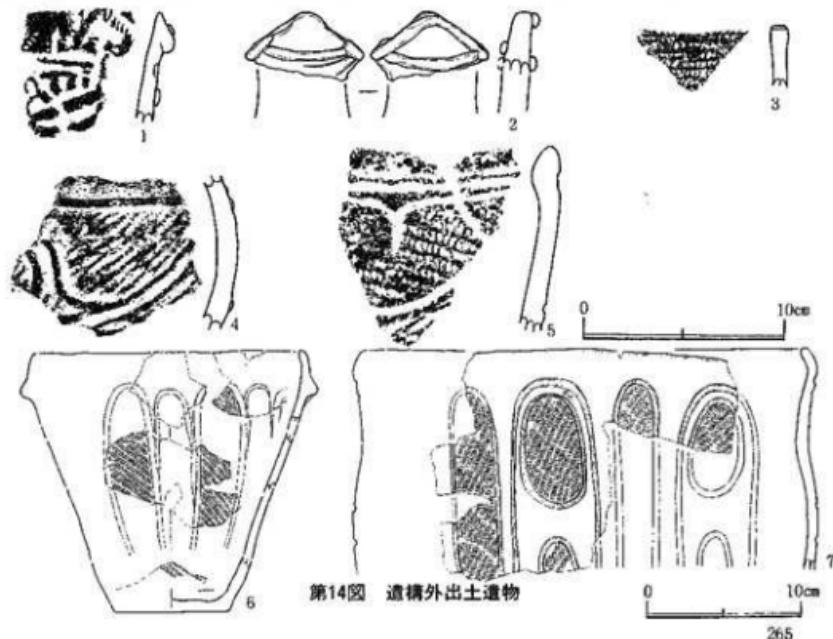
第15図8は内窪する口縁部の破片である。2重の沈線によって懸垂区画文もしくは梢円区画文が描かれる。使用される原体はRLで縦位回転施文。第15図14は口縁部の外反する鉢形土器の破片である。口縁部は無文部となり、体部は懸垂区画文が施される。区画文間には上端にやや膨みをもたせた沈線が1条ひかれる。区画文内の繩文はRLの縦位回転施文されたものである。16~30は沈線による懸垂区画文の施された体部の破片である。使用される繩文原体は、17・19・22・25・29がRL、16・18・24・26がRLR、27がLRである。回転方向は29を除いて縦回転である。9~15は口縁上端に無文部をもち体部には全面繩文の施される例である。原体は15がLRL、他はRLである。回転方向は11・12が横位、他は縦位である。34~39は全面繩文の施された体部の破片。施文される繩文原体は34・35・37がLR、36・38・39がRLRである。回転方向は35が横位。他は縦位。40~43の底部資料のうち、40・41には網代痕が残る。

第16図44~47は口縁部が外反し、ゆるい波状を呈する深鉢形土器の破片である。口縁直下には1条の沈線がめぐり、体部には横向きに組み合わされた2重の弧線によって梢円形文等が描かれる。地文にはRの撻糸文が施される。底部には網代痕が残される。48・49は波状口縁の波頂部に突起がつき、その突起から粘土紐の隆帯が口縁に沿って貼付される土器である。体部の主要モチーフは、44~47と同様2~3重の弧線を組み合わせての梢円形文と思われる。地文にはLの撻糸文が施されている。50~57・59~61も文様構成、施文法とも47~49と同様のものの体部破

片であろう。62は4重の沈線によって円弧文が描かれた破片である。63・64・65は体部に全面縄文の施された土器である。施文される原体はLRで左上一右下の方向で回転施文している。66・67・68は口唇上に突起をもち口縁部文様帯に刻目文帯、細かな縄文が施される例。66の突起頂部には棒状工具による刺突が見られる。縄文はRL原体を横位回転施文している。69は沈線区画の縄文帯に三叉の抉り込みの施された土器である。70は口唇上に三叉の抉り込みを入れ、B突起状に作出している。71は口縁部上端に工字文の施されたものである。隆線間に粘土粒が貼付されている。

土製品としては72の土器片利用の土製円盤が出土している。また北側の傾斜面に近いLT66グリッドからは73の擂鉢片が出土している。単し目は10条が1単位となった幅30mmの工具によって施される。

第17図1は小型の搔器である。調整は粗く、素材の剥片の打面は除かれているが裏面には一部主要剥離面が残る。2は薄手の剥片を素材として利用した搔器である。両面に丹念な剥離が施され、全体の形状を櫛形に仕上げている。3・4は縦形、5・6は横形の石匙である。石匙は通常、つまみ部分を除いた本体部分の成形のための剥離は素材の剥片の表面側に施されるが、3は逆に裏面つまり素材の主要剥離面側に行なわれている。7~10は比較的大形の剥片を素材として利用した搔器である。7・10片面加工、8・9は両面加工である。7は表面右側縁から丹念な調整を行い、左側縁の突出部および打面は折断されている。8は肉厚の剥片を素材としている。両

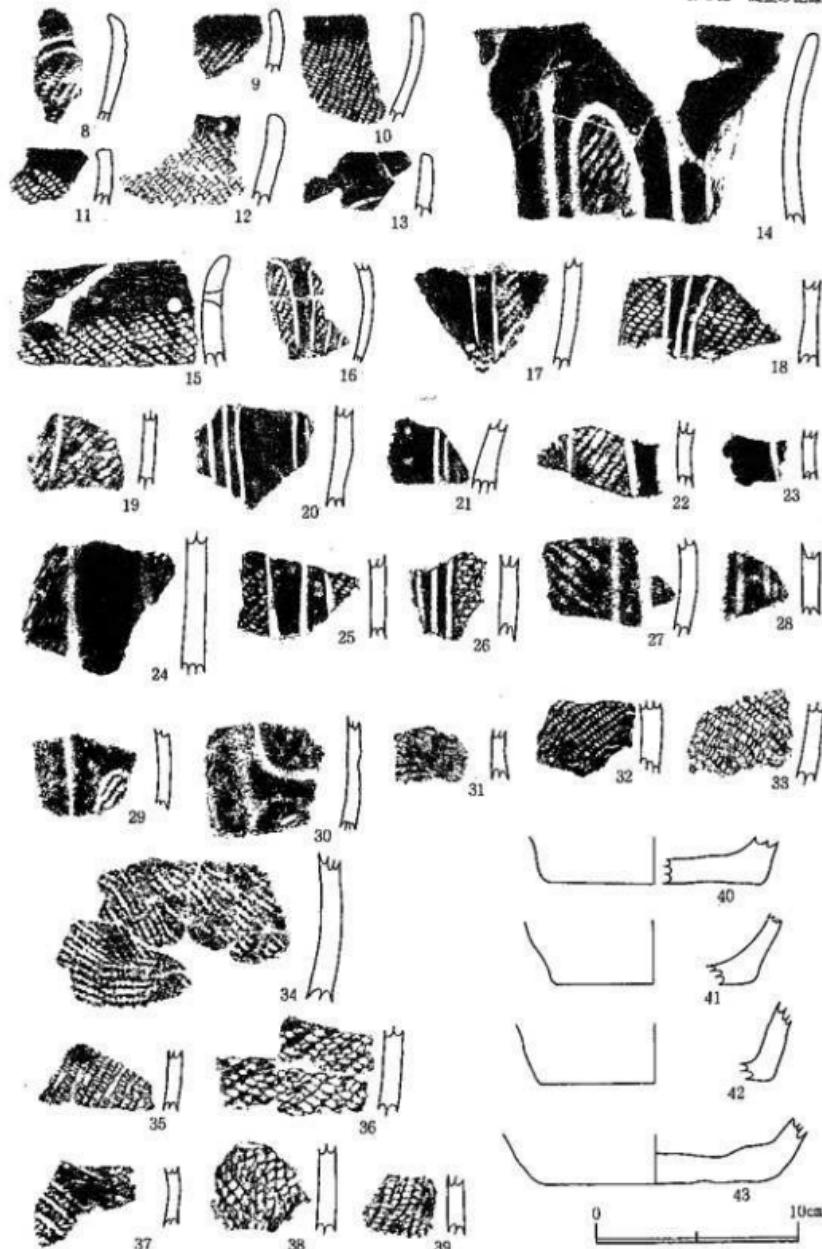


第17図 遺構外出土遺物

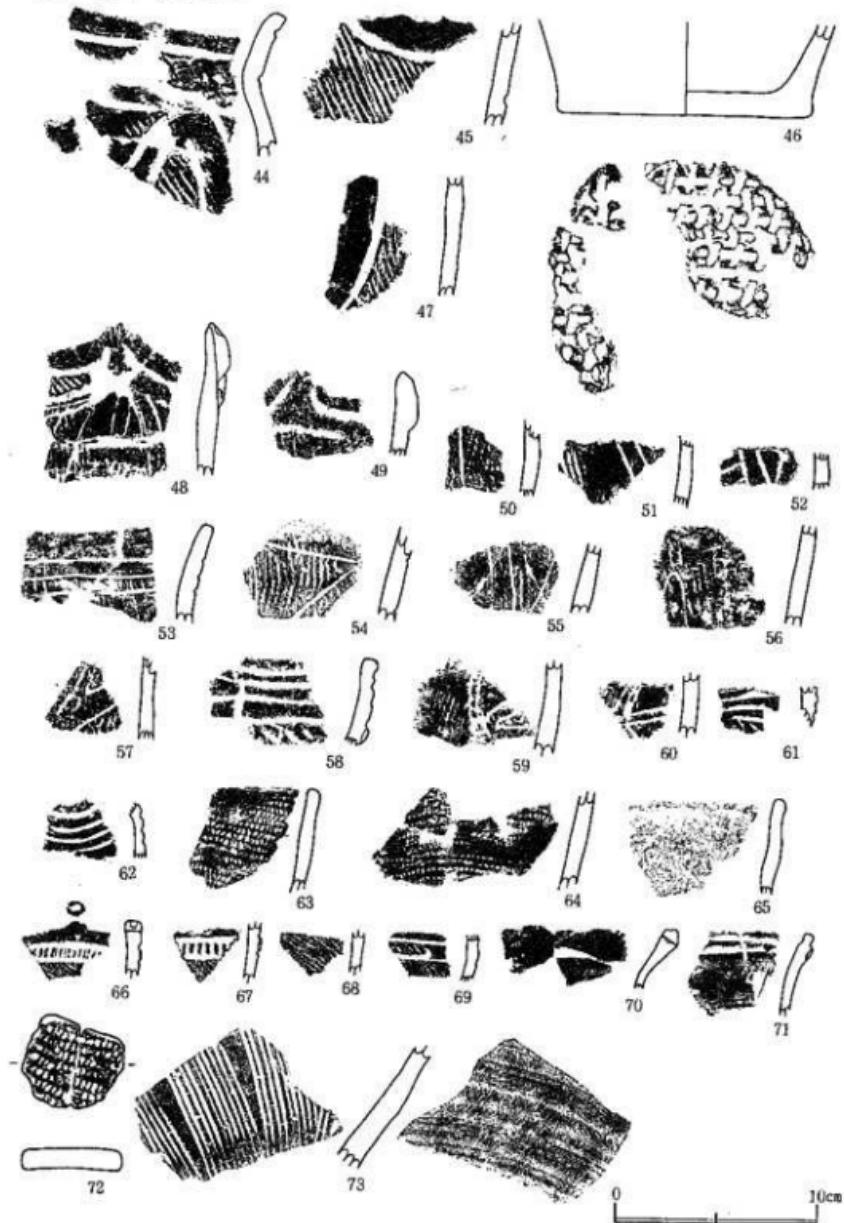
面とも側縁から本体中央まで及ぶ大きな調整を行って仕上げている。9は比較的薄手の剥片を素材としている。裏面には素材となった剥片の平らな主要剥離面が大きく残される。10は中央に大きな陵をもつ素材の側縁にごく粗い調整を施しただけのものである。製作後火熱をうけて、表面に弾けとんだ痕跡が残る。11～14は剥片であるが、11は裏面下端に刃こぼれを認めることができる。15は偏平な円盤を利用した搔器である。素材となった円盤の長軸上下端からの加熱による、素材の自然面を剥ぎ取るような薄い綫長の剥離が認められる。図の上端は数度の強い加熱のため潰れている。SiO₂出土の楔形石器の形態・製作法に共通する点も認められるが、下端では刃部が形成されること、また断面が三角形となるような綫長の剥片が剥ぎ取られていないことから搔器と推定した。

以上は全て頁岩を素材としている。

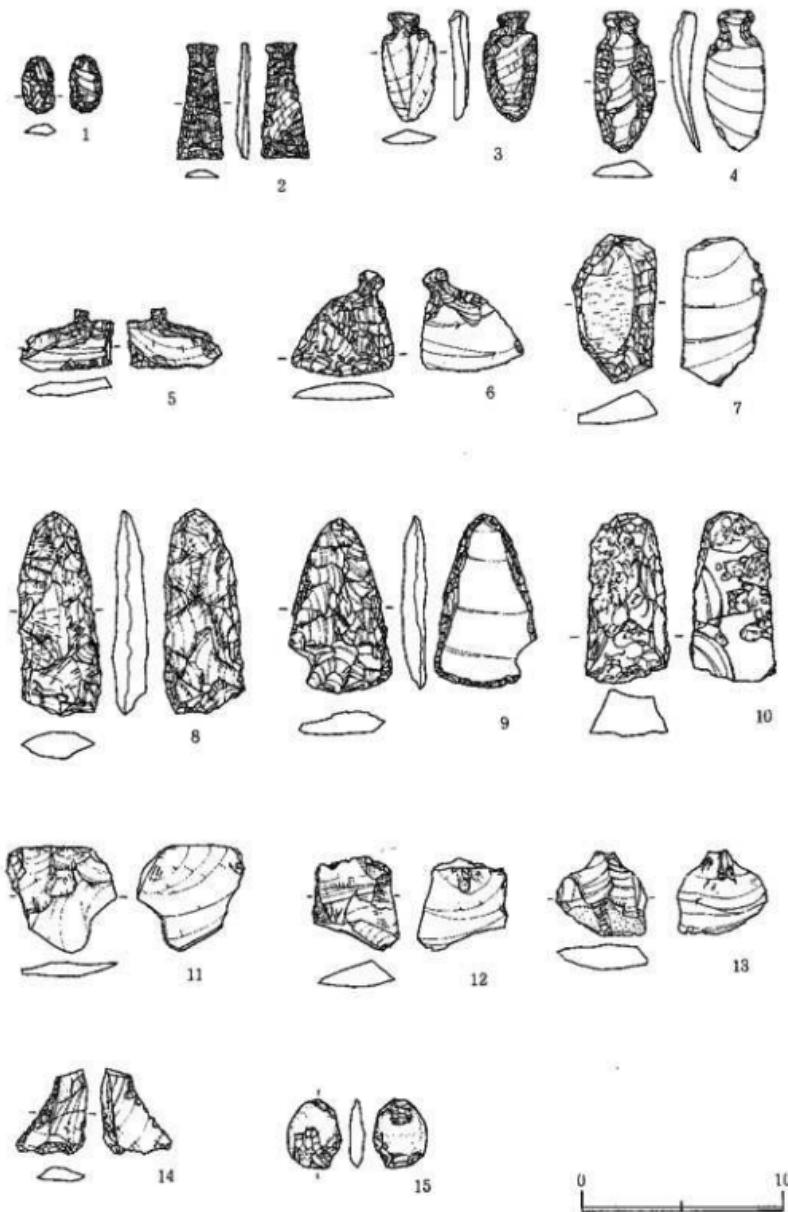
第18図16は凝灰岩製の磨製石斧である。下端の周縁に溝を削り込んで折断した痕跡を残す。折損品を再加工する過程のものである。17は凝灰質砂岩製の磨製石斧基部である。18はガラス質安山岩の磨石である。火熱をうけて下部が弾けとんでいる。19は安山岩を磨いて作った石製品。側縁の外周を尖端の鋭い工具で深さ8mm程削り込んでいる。20は凝灰岩製の打製石斧である。全体の形状は分銅形に仕上げられている。表面にみられる剥離は外周からの加熱によるものではなく、素材の表面を叩くことによってできあがったものであろう。



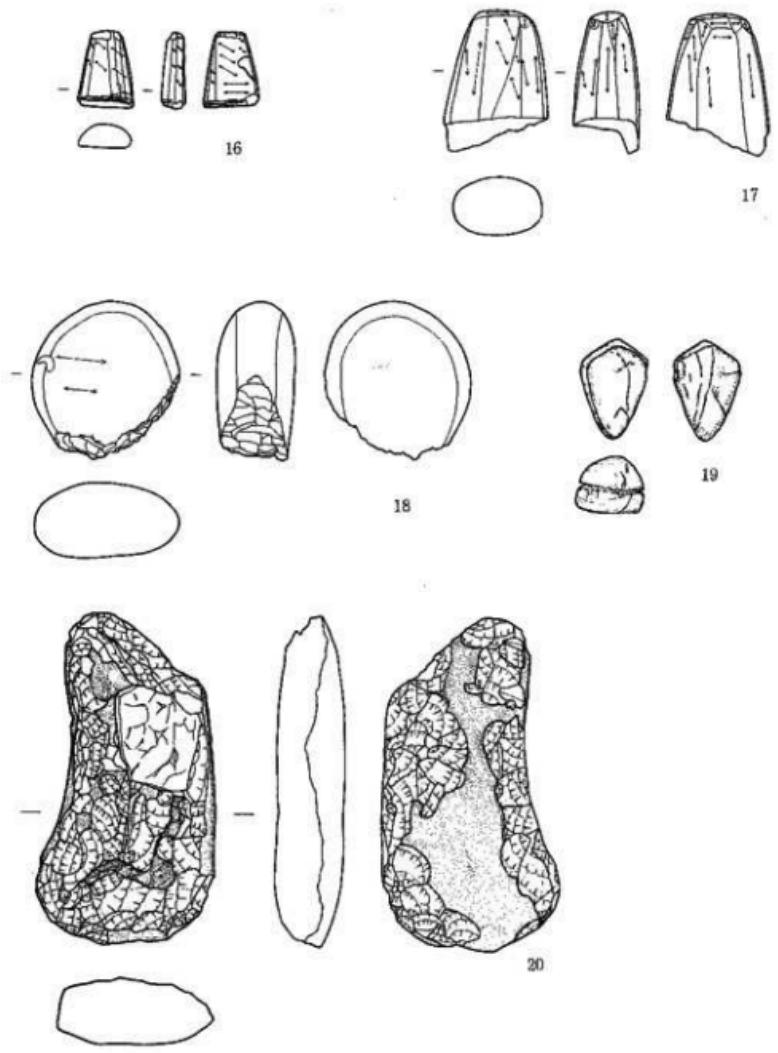
第15図 遺構外出土遺物



第16図 遺構外出土遺物



第17図 遺構外出土遺物



0 10cm

第18图 遗物外出土遗物

第3節 まとめ

1 土器について

本遺跡から出土した土器は、縄文中葉～後期初頭の時期にその中心を求めることが出来る。他に後期中葉、後期後葉、晚期前葉、晚期末葉のものが僅かづつではあるが出土している。これまで図示した資料を表としてまとめると第1表のようになる。

第1表 出土土器とその時期

挿図番号	時期	型式	挿図番号	時期	型式	挿図番号	時期	型式
5-1,2	中期後葉	大木9式	12-6	後期(?)		14-5	中期中葉	
6-3,4	中期後葉		12-7	後期前葉		14-6	中期後葉	大木9式
6-6~20	中期後葉	大木9式	13-1~3	中期中葉	大木8b式	15-8~30		
6-21~26			13-4~8	中期後葉	大木9式	15-31~43	中期後葉	
7-27~38	中期後葉		13-9	中期中葉	大木8b式	15-44~49	後期初頭	
9-1~7			13-10	?		15-50~62	後期前葉	
9-8,9	中期後葉	大木9式	13-11	中期後葉		15-63~65	後期(?)	
10-1~7	中期後葉		13-12,13	後期前葉		15-66,67	晚期末葉	
10-8	中期中葉	大木9式	14-1	中期中葉	円筒上層c式	15-68	晚期(?)	
10-9	後期前葉		14-2	中期中葉	円筒上層d式	15-69	晚期中葉	大洞C ₁ 式
12-1	中期中葉	大木8b式	14-3	?		15-70	晚期中葉	
12-3~5	後期前葉		14-4	中期中葉	大木8a式	15-71	晚期後葉	大洞A式

中期中葉とし得る土器としては、円筒上層c式、同d式、および大木8a式、同8b式の各型式に比定可能な土器がある。円筒上層c式土器の特徴としては、文様施文法において、縄文原体を回転させた粘土紐の貼り付けによる隆帯と、その隆帯間へ施文する刺突列があげられる。第14図1にあげた土器はこの特徴を備えており、当該型式として認められる。円筒上層d式の段階に至ると、粘土紐の隆帯は細いものへと変化し、隆帯上の縄文も施文されなくなる。また、口縁部に4単位の扁平な突起の付くこともある。第14図2の土器はこの段階の土器である。

第14図4の土器は残存する部位から推定すると、ゆるく膨らむ口縁部をもつ深鉢形土器となるが、この曲線的な口縁部文様帶は円筒土器の系列上では培われない。文様の表出技法としては、地文である縄文の上に粘土紐を貼り付ける点で、円筒上層c式およびd式との共通性を見い出だし得る。しかしこの技法は中期中葉の時期に大木式土器系列、円筒土器系列を問わず広

く流布することから、むしろ口縁部の膨らむ文様帯をもつ器形的特徴をもつことと、文様帯内に三角形を連続して配置する区画のとり方から、大木8a式に編入されるべきものと考える。第14図5の上器もやや直線的となるものの、キャリバー形の口縁部をもつ深鉢形土器と観察される。文様の表出は、地文として縄文を転がした上への沈線描画と隆帯の貼り付けによっている。口縁部に設定される文様帯にはやはり連続した三角形の構図が区画されるもので、同じく大木8a式に比定されるものである。

第13図1～3の土器は、地文として縄文を施した上に隆帯を貼り付け、渦巻を基調とする文様を施している。大木8b式に比定可能である。

本遺跡から出土した中期後葉の土器には、大きく分けて、地文として縄文を施文した後、沈線によって懸垂区画文を描き、磨消縄文手法をもって文様を施文するものと、全面に縄文を施すものとの二者がある。前者ではその器形に口縁部が内凹する例（第6図5・第13図4・第14図6・7・第15図8～13）と外反する例（第5図2・第15図14）とがある。器面に施される懸垂区画文は口縁から体部へ伸び、口縁部を独立させて文様帯として区分する横位の沈線区画は用いられないのが通常であるが、口縁部の外反する例ではそうした区画線がめぐる例（第5図2）もある。

懸垂区画文の他、その変化形態として梢円区画文（第5図1）や「S」字状区画文（第5図2）が用いられるが、変化形態の種類としては、ごく狭い範囲のものを採用しているにすぎない。单调なものである。地文としての縄文は文様の縦方向の展開にしたがって、原体を縦位に回転しているものがそのほとんどを占めている。原体の擦りはLRが多く、次いでRL、またRLRのものも含まれる。

器面全体に縄文が施されるものでは、口縁部が直立するか僅かに外反するものが多い。縄文の回転方向はやはり継回転のものが圧倒的である。縄文の擦りはLRが多く複節のものではRLRのものが多い。この他に第6図3図の、条痕文を施した土器もあるが、この種のものを含めてこれら三者は、中期後葉の土器群として括して扱うことが可能であると考える。

懸垂区画文をもつ土器は、おそらく次の段階では文様の展開方向を横位とする大木10式併行の段階へと進むものであるが、本遺跡で出土した土器群にはそうした横方向の文様展開を示すものは一点もない。したがって中期後葉のうち、遺跡の営まれた時期は大木10式期以前に一旦終結するのであり、これらの土器は大木9式の新しい部分に相当し、きわめて短い時間幅の中にあるものである。

後期初頭～前葉に位置づけられる土器としては、第12図3～5・7の土壇内から出土した土器と、第16図44～61の土器を充てることができる。前者、後者とも地文に撚糸文を施した後、沈線による文様を描くが、前者では沈線が細く鋭いに対し、後者では沈線が太く沈線による区画の内外を磨消縄文手法を用いて分ける施文法が用いられる。また波状口縁、粘土紐の貼り付

けによる施文がされるのも後者の特徴である。文様の構図としては、両者とも楕円形の区画文が中心的な意匠として配置されているが、前者（第12図7）では加えて菱形の構図も採用される。

この両者ともその共通する点である楕円形文は、大木10式併行の土器にその出自を求めることが可能であるが、その他の差異は、前者よりも後者が分類上先行することを示している。したがって第16図44～61（ことに44～47の同一個体の土器）は、大木10式期併行期直後の土器として、また、第12図7はそれに後続する土器と位置づけておく。

この他に本遺跡では、第16図66・67の後期末葉の入組文系土器群に比定可能なもの、また69のように晩期中葉大洞C式に比定可能な土器、さらに71のように大洞A式としうる土器等が断片的に出土しており、それらの各時期に生活の足跡が残されたことが示されている。

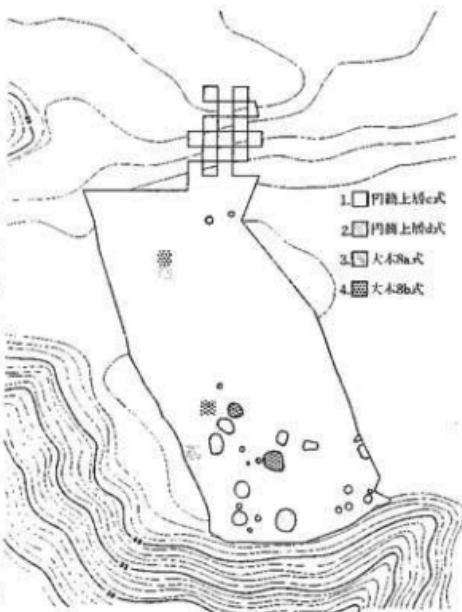
2 遺構について

この発掘調査で検出された遺構・遺物は、SK12及び陶器破片1点を除きすべて縄文時代のものである。以下は縄文時代の時期ごとに、この台地の利用のされかたに留意しつつ調査で得られた知見を略述する。

(1) 縄文時代中期中葉

本遺跡が人間活動の場となったことを示す発掘資料の中で最も古い時期のものとしては、円筒上層c式土器の破片が一点出土している。これに後続するものとして円筒上層d式の土器片が1点、大木8a式の土器片が1点、大木8b式の土器片が2点出土している（第14図）。これらの土器片はいずれも台地の南縁から西縁及び北縁に沿ってやや内側に入った所で出土した。

（第19図）。また、調査区南半では多くの倒木痕が検出されたが遺物が出土したのは3カ所で、そのうちの2カ所（SX15・16）から大木8b式の土器片が出土した（第13図1～3・9）。しかし堅穴住居跡は検出されず、これらの時期を通して本遺跡は居住以外の場として利用されていたと



第19図 遺物散布状況（中期中葉）

言える。

(2) 縄文時代中期後葉

この時期と考えてよい遺構は、竪穴住居跡3軒、土壙1基それに倒木痕1カ所である。本遺跡は人々の移動に関わる場から主に居住の場へと変わり、人々は諸活動の最も中心をなす生活の場としてこの舌状台地の一部を利用するようになる。

大木9式期の遺物は最も多く、本遺跡で検出された遺物の大半を占める。それらは台地全体から均等に出土するのではなく、集中して出土する範囲と全く出土しない所にはっきりと分かれる（第20図）。本遺跡の南側は、白熊沢から東に入り込んで台地の南端を画する沢の沢頭のうち、北に入る沢頭によって東側を画される小さな舌状台地となっているが、遺物、遺構ともにこの部分のLR42グリッド杭を中心とする半径20mの範囲に集中する。この範囲は中期中葉において本遺跡に活動の痕跡を残した人々の、主たる活動の場の範囲を示しているのではないだろうか。さらにいくつかの遺物で同一個体の散布状況をみてみると、一つの傾向が認められる（第21図）。各同一個体片は概してかなりの距離を隔てているが、図示した12例のうち9例までがSI01竪穴住居跡・SI02竪穴住居跡・SK15を結ぶ範囲の内側で出土し、他の3例は竪穴住居跡の周辺と遺物出土範囲の外縁部とで出土している。SI01竪穴住居・SI02竪穴住居跡・SX15を結ぶ範囲の内側は、LR42グリッド杭を中心とする半径約20mの主たる活動範囲の中でも特に土器の移動に関わる活動の密度の高い場所と考えられる。

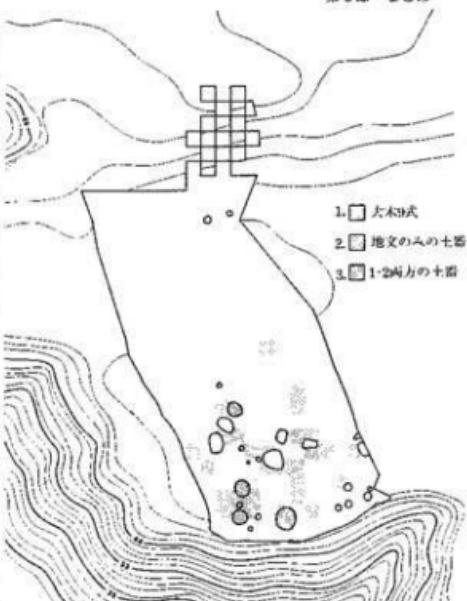
SX15から出土した遺物の中には、それぞれの竪穴住居跡から出土した遺物と同一個体のものが含まれている他、中期中葉の大木8・9式の土器片、それに図示していないが後期の土器片も少数ながら出土している。これと同様の状況は、時期は異なるがSX17の周囲にも認められ、中期後葉から晩期までの多様な土器の破片が集中して出土している。このように種類の多様な土器の、しかも破片のみが集中して出土している状況から、SX15やSX17は、木が倒れた跡にできた窪地を土器片などの捨場として利用していた場所と考えることも可能ではないだろうか。そう考えるとSX15は中期中葉までには木が倒れて窪地が形成され、後期の途中までには自然に埋まってしまい、SK17は中期末～後期初頭に形成され晩期以降には埋まってしまったということになるであろう。

検出された3軒の竪穴住居跡の埋土からは、いずれも大木9式の土器片が出土している。しかしそれに後続する大木10式の土器は、3軒の竪穴住居はもちろん本遺跡内からは1点も出土していない。したがって3軒の竪穴住居跡は、遅くとも大木10式期より前には廃絶していたことになる。以下、3軒相互の関係について埋土の状態や出土遺物等から検討を加える。

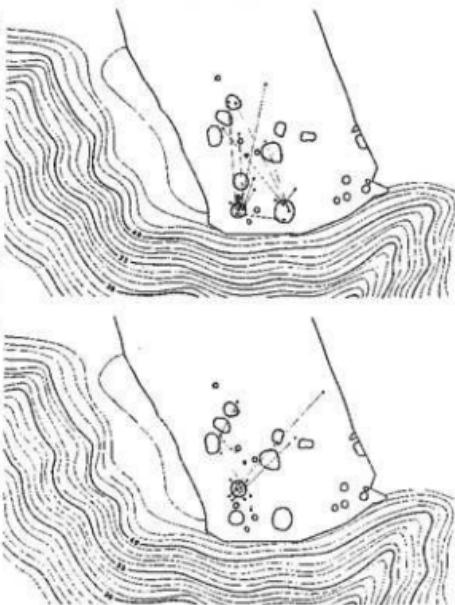
SI01竪穴住居跡は埋土中の炭化物や焼土粒の状態等からみて、火災による焼失家屋である

可能性が高い。また埋土の上層には、他の遺構の埋土と同様の粘質の暗褐色土が堆積していること等から、焼失後に人为的に埋め立てられたというよりも、焼失後に放棄され次第に埋没したと考えられる。それに對してSI02竪穴住居跡は埋土中に孔隙が多く、上層には粘質の暗褐色土が堆積していないので、短時間に埋まったと思われる。人为的に埋め立てられた可能性が高い。またSI03竪穴住居跡埋土の上層には、SI01竪穴住居跡の埋土上層と同様の粘質の暗褐色土が堆積し、自然に土が流れ込んで埋没したと考えられる。竪穴住居跡から出土した遺物の接合関係で注目されるは、SI02竪穴住居床面に倒れた状態で出土した、小型深鉢形土器の下になっている部分の口縁部破片がSI01竪穴住居跡から2点出土していることである。したがってSI02竪穴住居跡が構築される前に、SI01竪穴住居跡が既に埋没していたとは考えられない。またSI01竪穴住居跡の炉とSI03竪穴住居跡の炉は形態が類似するが、焼け貝合からみてもSI01竪穴住居の炉のほうが、SI03竪穴住居跡の炉よりもかなり使用頻度が高く、長期間使用されていたと思われる。

以上のことを中心とし、更にいくつかの仮定に基づいて、3軒の竪穴住居跡がどのような変遷をたどったのかを推測する作業を試みてみよう。



第20図 遺物散布状況（中期後葉）



第21図 遺物接合状況

仮定1

原則として堅穴住居が廃絶・放棄された直後に、堅穴住居の跡地をそのままにしてすぐ近接する所に居住はしないのではないか。SI01堅穴住居跡のような焼失家屋であれば尚更である。逆に堅穴住居がなんらかの事情で不要となって、廃絶した後も近接する所に居住しようとすれば、堅穴住居の跡地はSI02堅穴住居跡のように埋め立てられるのではないか。つまり堅穴住居跡を埋め立てるという行為は、それによってこの地での居住が終了したことを見示すのではなく、更に居住が継続していく中での一変化点であるととらえたい。

i) SI01堅穴住居跡の廃絶時期とSI02堅穴住居跡が営まれていた期間との関係

この関係だけを取り出して単独で考えれば、第22図 i) に示す（あ）～（お）の5つの場合がある。しかし、（あ）だとすると土器の接合関係から得られる結果と矛盾する。（い）・（う）の場合はSI01堅穴住居跡の焼失した跡地をそのままにしてSI02堅穴住居跡に居住したことになって、仮定1に反する。（え）の場合はSI02堅穴住居跡の廃絶時、またはそれ以前にSI03堅穴住居跡が構築され、SI02堅穴住居跡が埋め立てやれた後も継続することになるが、そうするとSI01堅穴住居跡の焼失した跡地をそのままにしてSI03堅穴住居跡に居住したことになり、仮定1に反する。したがって以下では（あ）～（え）の場合を除いて（お）の場合のみを取り扱う。

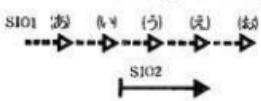
ii) SI01堅穴住居跡の構築時期とSI02堅穴住居跡が営まれていた期間との関係

この関係だけを取り出して単独で考えれば、第22図 ii) に示すA～Eの5つの場合がある。A～Dの場合はいずれも上述の諸条件とは直接抵触しない。Eの場合はSI03堅穴住居跡が営まれていた期間次第で、仮定1に適合する場合と反する場合がある。

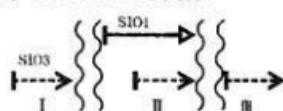
iii) SI01堅穴住居跡が営まれていた期間とSI03堅穴住居跡が営まれていた期間との関係

両者の炉の状態からSI03堅穴住居跡の継続期間よりSI01堅穴住居跡の継続期間が長かること、及び仮定1から次の3通りの場合が考えられる（第22図 iii）。

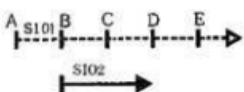
i) SI01の廃絶時期とSI02の関係



iii) SI01とSI03の関係



ii) SI01の構築時期とSI02の関係



第22図 堅穴住居跡相互の関係概念図

I : まずSI03堅穴住居跡が営まれ、廃絶後しばらくして跡地が埋没してからSI01堅穴住居跡が営まれた。

II : まずSI01堅穴住居跡が構築され、その後にSI03堅穴住居跡が構築されて両者が並存する期間があり、両者が同時に廃絶した。

III : まずSI01堅穴住居跡が営まれ、焼失・放棄後しばらくして跡地が埋没してからSI03堅穴住居跡が営まれた。

i) の(お)、ii) のA~E、iii) のI~IIIの組み合わせのうち、上述の諸条件に抵触しないものを選び出せば第23図に掲げる24通りの場合が想定される。

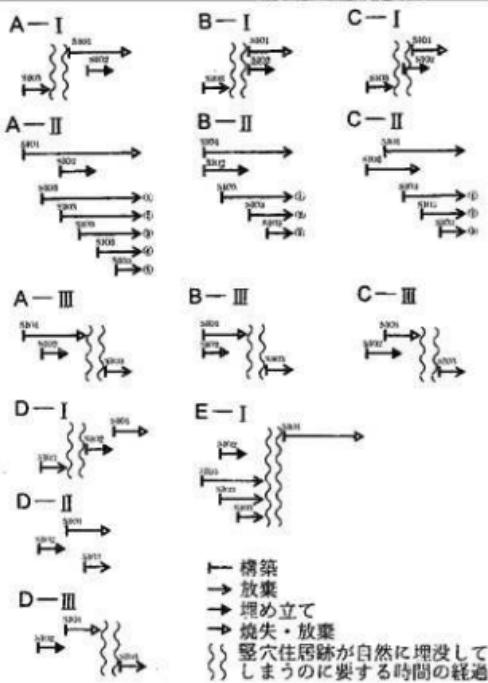
仮定2

3軒の堅穴住居跡が埋没しきるまでには、かなりの量の土が必要である。それが自然に流入して埋没していくとなればかなりの時間を要すると思われる。故に、まずSI01堅穴住居跡またはSI03堅穴住居跡のいずれか一方が営まれ、廃絶後しばらくしてその跡地が埋没してから他方が営まれ、その後に廃絶するという変遷が大木9式の期間内に完結されるとは考えにくい。

仮定2に拠れば24通りの場合のうちで、ii) SI01堅穴住居跡とSI03堅穴住居跡の関係がIIである13通りのいずれかである可能性が高い。

仮定3

SI02堅穴住居跡の埋土とSK05の埋土はよく以ており、埋土中からは同一母岩と思われる黒耀石の剥片が出土しているので、SI02堅穴住居跡が埋め立てられた時に同時にSK05も埋め立てられたとみてよい。この両者を埋め立てるためには、遺構確認面より下の部分だけでも約2.3m³の土が必要である。この上は何処から調達されたのであろうか。機械力がなく現在より道具も貧弱であつただろうから、そんなに遠くから運んだ



第23図 堅穴住居跡の継続期間概念図

とは考えにくい。たぶん豎穴住居を構築する際に出る土を利用したのではないだろうか。その際には、豎穴を掘って出た土を直接SI02豎穴住居跡に投げ入れた場合と、一旦近くに積んでおいてしばらく後にSI02豎穴住居跡に投げ入れた場合が考えられる。双方を比較してみると、（ア）一連の作業に投入される労働量は前者の方が少ない、（イ）前者は、豎穴を掘る・豎穴を埋める、という作業の2つの目的が同時に達成されるので、作業の効率がよく合理的である、という違いが認められる。豎穴住居の構築やその埋め立てといった相当の労働量を必要とする作業は、当時の人々にとってはかなりの重労働であったと思われる所以、前者であった可能性が高い。

以上の仮定2・仮定3を前提とすれば、より蓋然性が高い場合としてA-II-④、B-II-②、C-II-②、D-IIの4通りの場合が考えられる。

以上やや長くなつたが、3軒の豎穴住居跡の相互関係について検討を加えてみた。そして3つの仮定を設定し、それを前提とすれば可能性の高い場合として4通りの場合を想定し。どの場合をとってもそれぞれ固有の特殊性があり、どの場合であるかによって一軒一軒の豎穴住居跡のもつ意味は異なるのであって当然発掘資料においてそういう結果をもたらしたところの人間の諸活動も異なつて理解される。ここでは主に扱った資料が豎穴住居跡なので、どの場合を探るかによって、個々の豎穴住居の種類と機能、及びそれらに居住した人々相互の関係が大きく違って解釈されることになる。たとえば上の4例に限つて、単に同時期に於ける総床面積の変化だけを取り出してみても、A-II-④・B-II-②では緩やかな増加を示すのに対し、C-II-②・D-IIでは急激な増加を示す時期がある。総床面積の変化が総居住人員の変化に比例するとすれば、前者は人口の社会的増加現象をも想定せざるを得ない。それには同じグループや他グループの人々の合流、グループの交替等々の多様な事態が考えられ、それぞれの場合に於ける人間相互の関係もまた多様な理解が可能であろう。さらに豎穴住居跡の種類がその機能の違いを示すものだとすれば、当初からSI01豎穴住居跡とSI02豎穴住居跡の両者を備えていB-II-②の場合に対して、居住の途中でSI02豎穴住居跡を建て増ししているA-II-④の場合は、人口の増加の他に、豎穴住居内で行なわれる作業の量的増加または質的変化があつたことも想定されよう。本遺跡の豎穴住居跡群からは、上述のごとく、仮定を前提としていく通りかの変遷の可能性を想定するのが限界であつて、それ以上のことは残念ながらわからない。いずれにせよ大木9式期の一定期間本遺跡が居住の場として利用され、大木10式期より前にはそれも終了していたと思われる。

(3) 繩文時代後期

後期の遺物はそのほとんどが初頭～前葉の土器片である。これらの散布状況は、調査区の中央部から北側では遺物がほとんど出土しないということでは中期後葉と共通するが、南側では異なった偏りが認められる（第24図）。即ち中期後葉には調査区南側の中央部を中心に散布していたのに対して、後期初頭～前葉では調査区南西部及び南東隅に集中し、中期後葉の散布範囲であった南側中央部はむしろ希薄である。この台地の中でも特にこれらの遺物が集中している範囲が、人間活動の中心的な舞台となっていたと推察される。この時期の土器片が出土した遺構は、貯蔵穴と思われる土壙2基（SK07・09）及び倒木痕2カ所（SX15・17）である。SK06も形態、埋土、出土遺物がSK07、SK09に類似するので同じくこの期の貯蔵穴であろう。これらの土壤が集中する台地南東隅から竪穴住居跡は検出されなかったのでこの台地南東隅は貯蔵の場として利用されていたと考えられ、たぶんこからそう遠くないところでは食糧の採集活動が行なわれていたと思われる。調査区南西部から検出された土器片は南東隅から検出されたものとは若干異なるものである。SX17の周開およびSX17の南西側に集中する。台地の南西部は調査対象範囲外で、遺物散布範囲がどの程度の広がりをもつか確認できないが、或いは台地南西部までの間に竪穴住居跡や土壤等の遺構があるのかも知れない。



第24図 遺物散布状況（後期）

(4) 繩文時代晚期

晩期の遺物はすべて遺構外からの出土である。この時期の遺物もほとんどが調査区の南側で出土した。晩期前葉の土器片はSX17の近くからも出土している。この時期の遺構と考えられるのはSK11である。平面形が円形で比較的浅く中央に大きな石が置かれている形態は、晩期の土壤塙と考えられている松木台Ⅲ遺跡のSK29・78・89・99等と極めてよく似ているからである。松木台Ⅲ遺跡では土壤群の近くでかなりの数の焼土が検出されており、SK11の南側で検出された焼土もSK11と何等かの関係があるのかも知れない。SK11と形態が類似し近くで焼土が

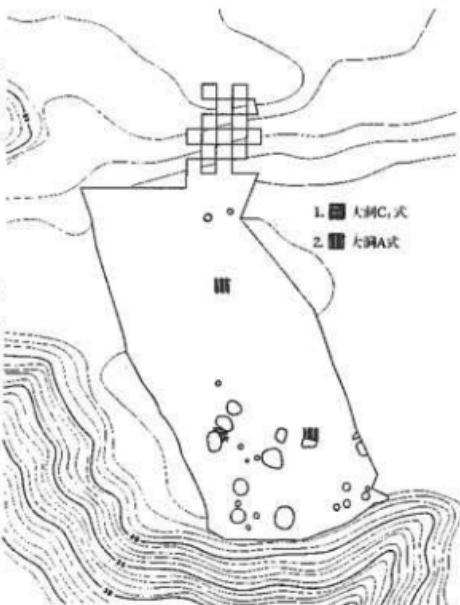
検出されたSK04・10、SK10に近接し比較的浅いSK08も、松木台Ⅲ遺跡の例からして同様に晩期の土壙墓の可能性がある。

晩期にはこの台地はそれまでとは全く異なり、墓域として利用されようになる。しかし同じく墓域であっても松木台Ⅱ遺跡、松木台Ⅲ遺跡、それに本遺跡に隣接する石坂台Ⅲ遺跡等のように多くの土壙が群としてあるのではなく、数は少なくしかも散在しているところが本遺跡の特徴である。

これまで本遺跡で検出された縄文時代の遺構・遺物について述べてきたが、同じ台地の一部でありながら、それぞれの時期の自然的、社会的諸条件の相違によって、大地に対する人間の関わり方は多様なあり方を示すことが窺えるのである。すなわち本遺跡固有の自然的特性が各時期の人々に様々に認識・評価されていたといえるのである。

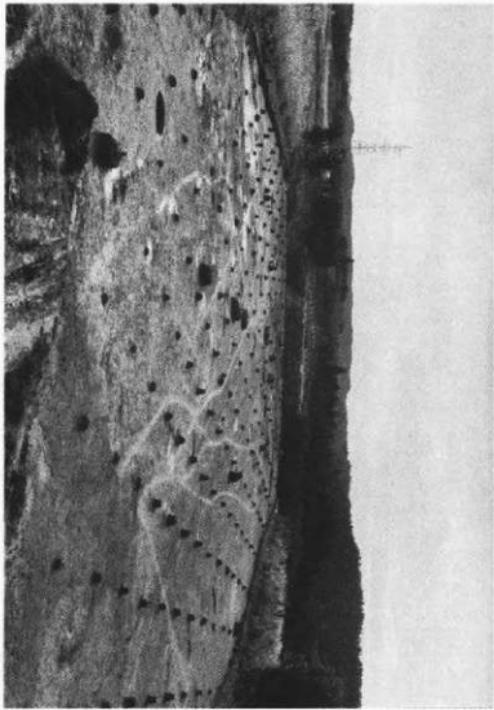
たとえば、自然的条件の中には広範囲にわたる気候の変動の他に、前時期の人々が土地の一部を利用したことによって起こる植生や地形の変化も含まれよう。本遺跡においては中期後葉の遺物散布区域と、後期初頭～前葉のそれとは明らかな違いがみられる。これは後期初頭～前葉の人々の意識の中に、他ならぬこの台地を利用するという目的意識とともに、中期後葉に居住の場であったことによって引き起こされた微妙な植生や地形の変化が認識されており、そこを避けてその東側と西側に諸活動の場を求めたとも理解できよう。また、大木10式期になると岩見川下流域では居住の場所であった遺跡の数が急増する傾向が認められるが、この直前の時期の居住地である本遺跡では、先に述べたように複式炉を持つ竪穴式住居が1軒から2軒に増る現象が起っていた可能性があり、この現象を引き起こす人間関係の変化は、大木10式期に竪穴住居跡および居住地の数が急増する変化に対応するものではないかとも考えられる。

しかし、上述のような変化を引き起こす自然的・社会的諸条件の相違にもかかわらずどの時期にも共通する台地縁辺部の利用は、本遺跡を諸活動の場とした縄文時代の人々が越えるこのできなかった土地利用の限界を示すものであろう。



第25図 遺物散布状況（晩期）

図版一
古跡石碑遺跡



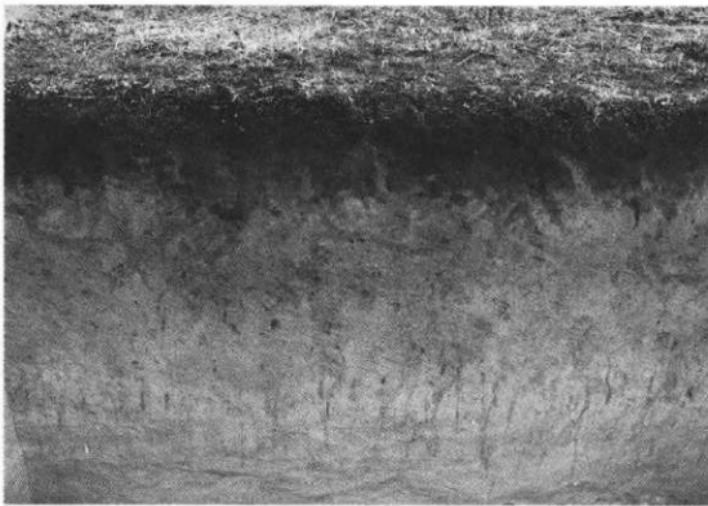
調査後全景（北西▶南東）



調査後全景（石坂台地道路から；南▶北）



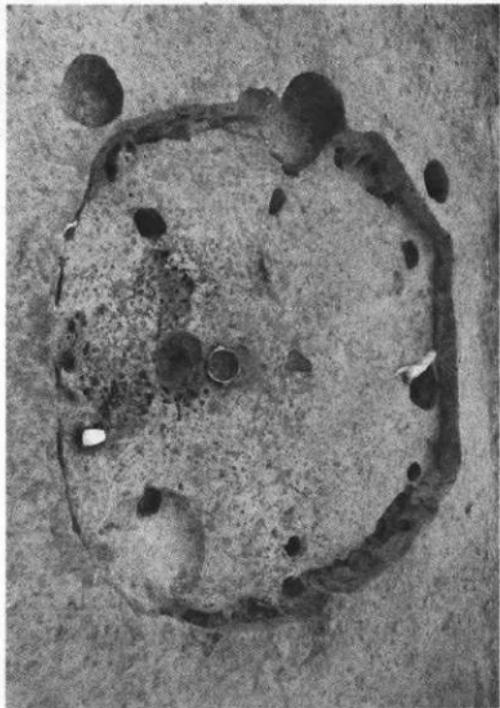
遺跡基本層位 (MH52)



遺跡基本層位 (LK41)



调查区南端遗存群



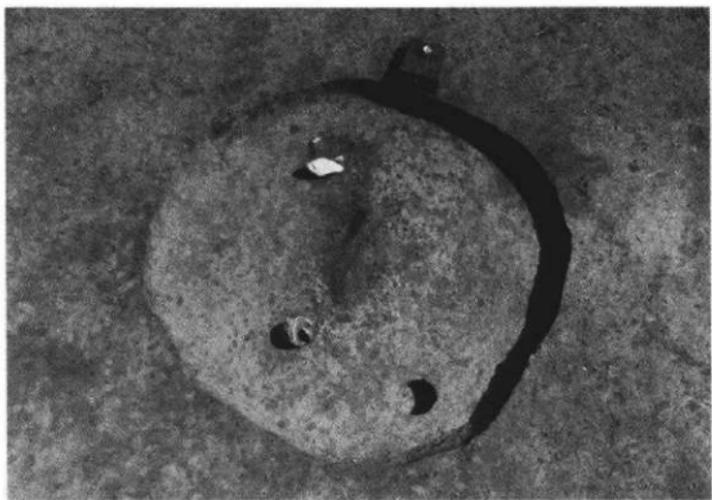
SI01 壁穴住居跡



SI01 壺穴住居跡炉



SI01 壺穴住居跡炉埋設土器



SI02 壘穴住居跡



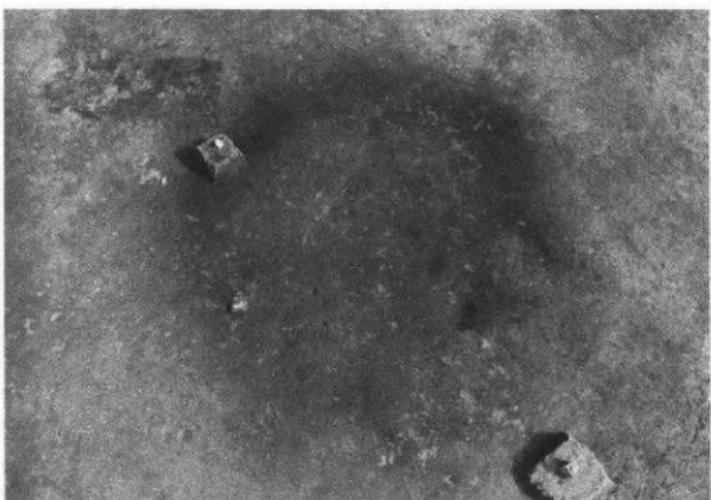
SI02 壉穴住居跡埋土断面



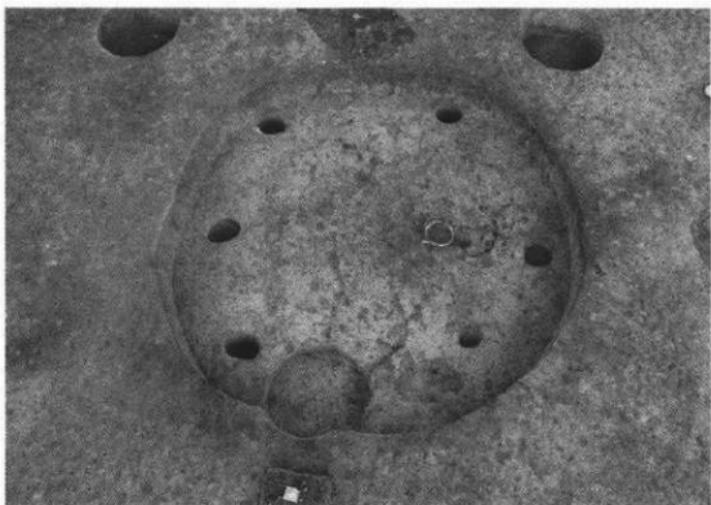
SI02 整穴住居跡土器出土状況



SI02 整穴住居跡



SI03 整穴住居跡検出状況



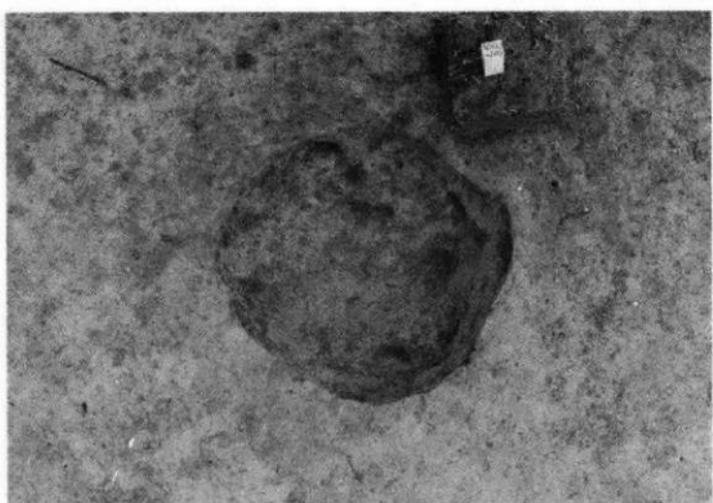
SI03 整穴住居跡



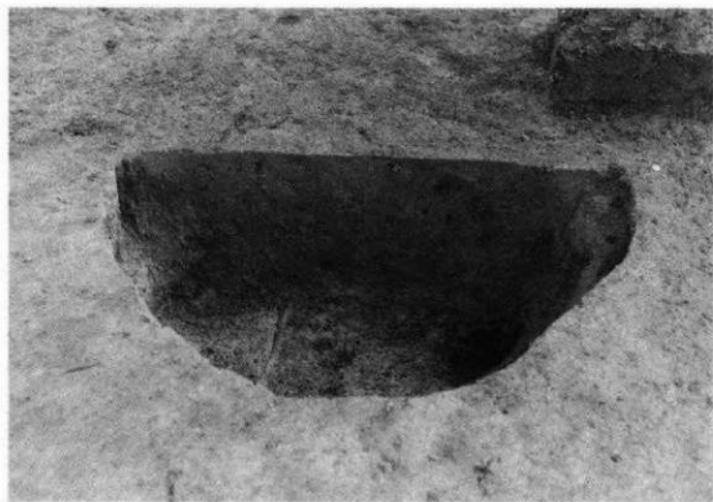
SI03 壓穴住居跡埋土断面



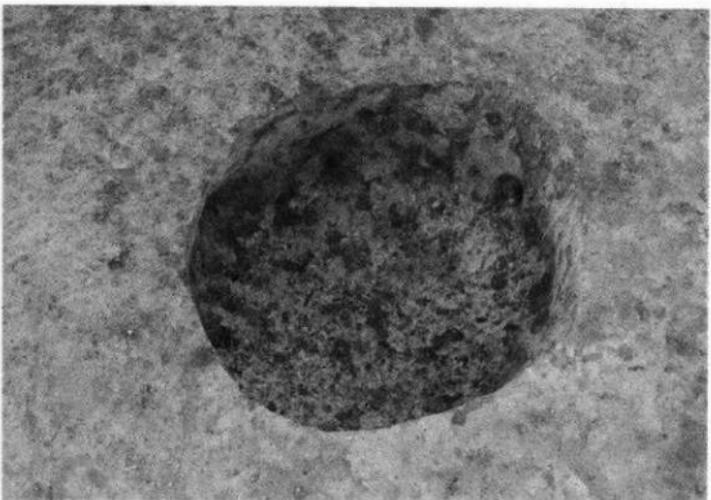
SI03 壓穴住居跡炉埋設土器



SK04 土壤

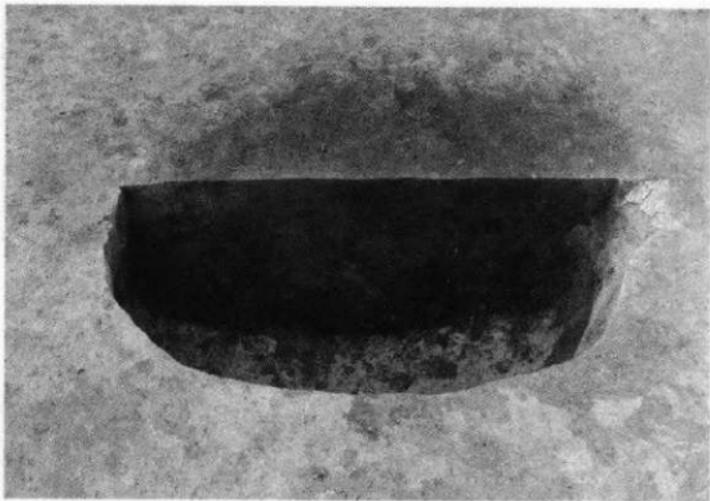


SK04 土壤断面



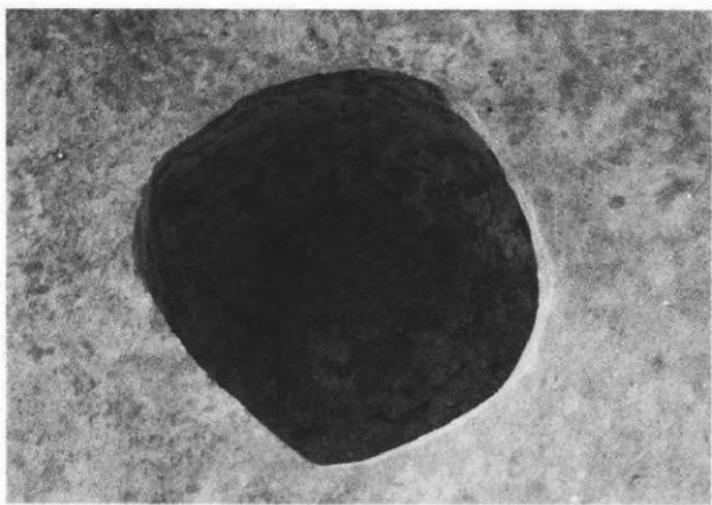
SK05 土壙

直径 1.0m

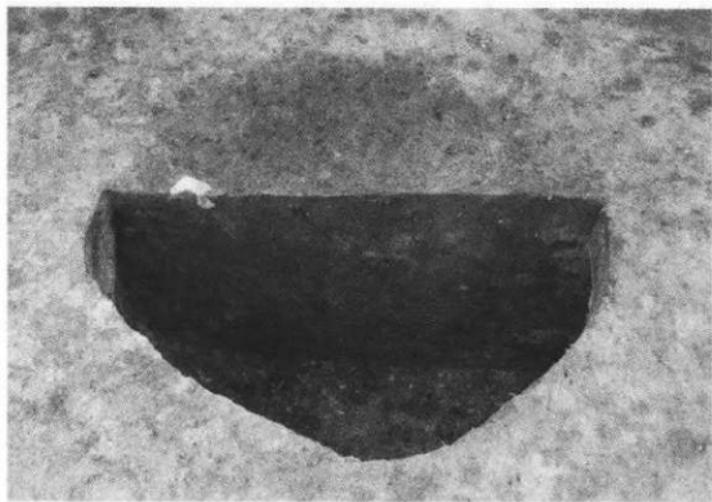


SK05 土壙断面

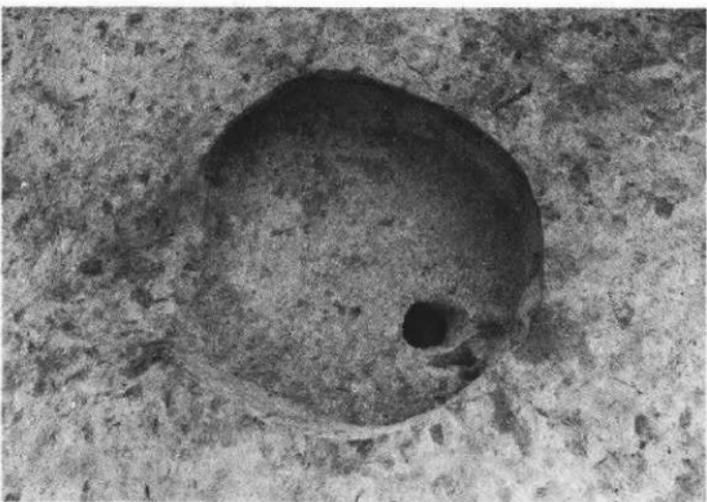
直徑 1.0m



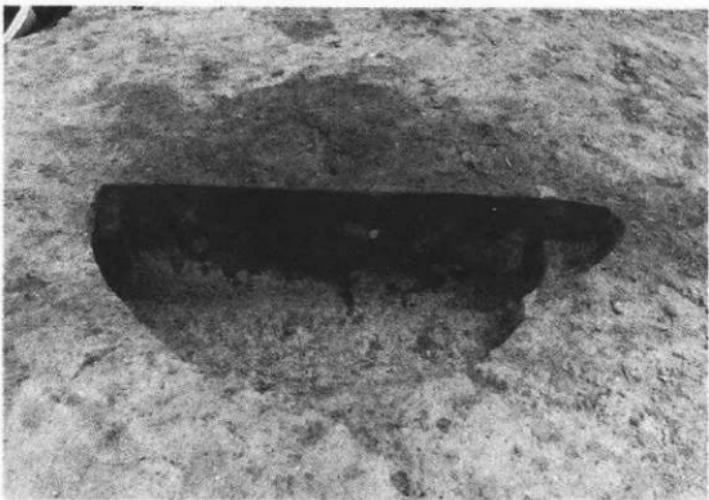
SK06 土壤



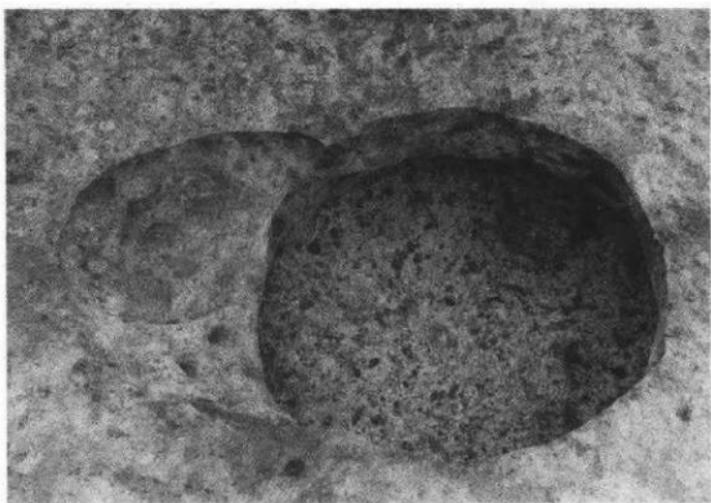
SK06 土壤斷面



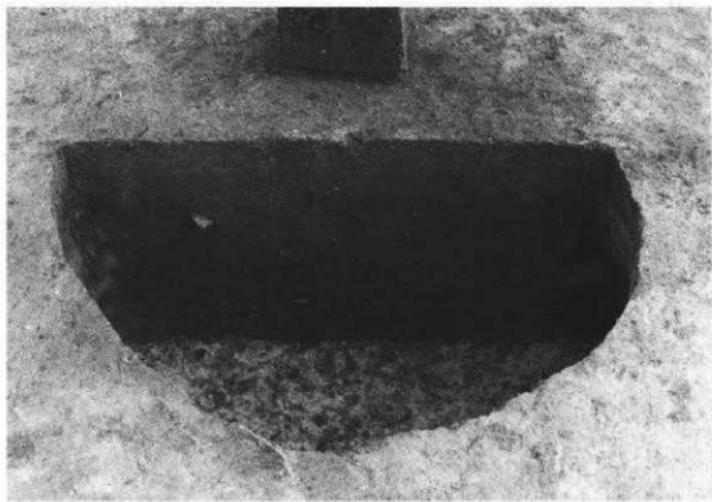
SK07 土壙



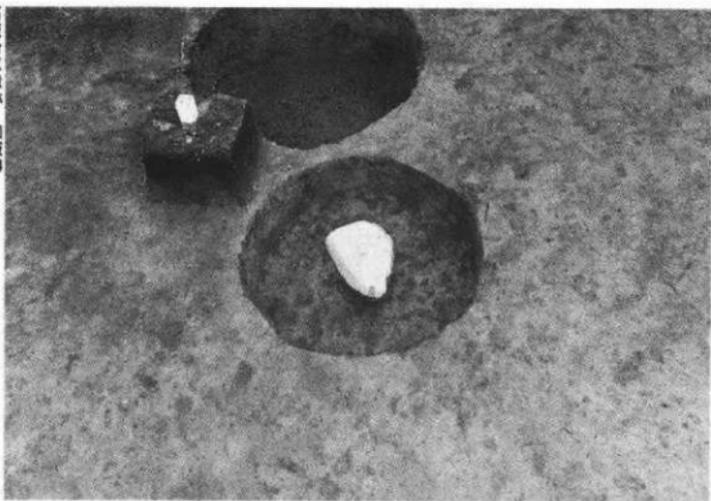
SK07 土壙断面



SK09 土壙



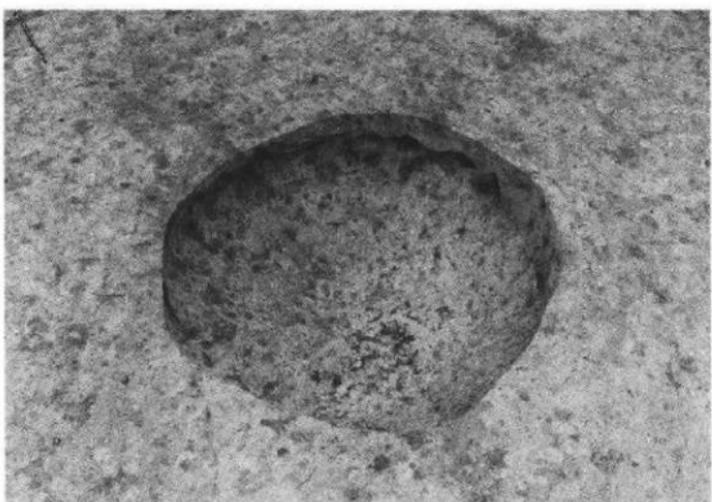
SK09 土壙断面



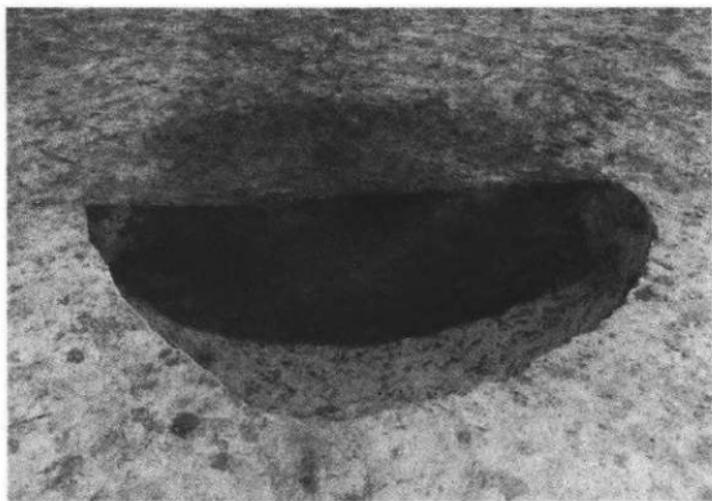
SK11 土壤



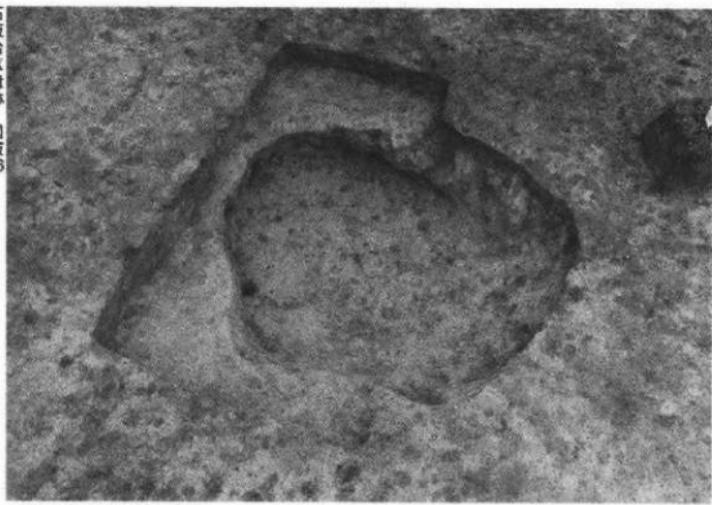
SK11 土壤断面



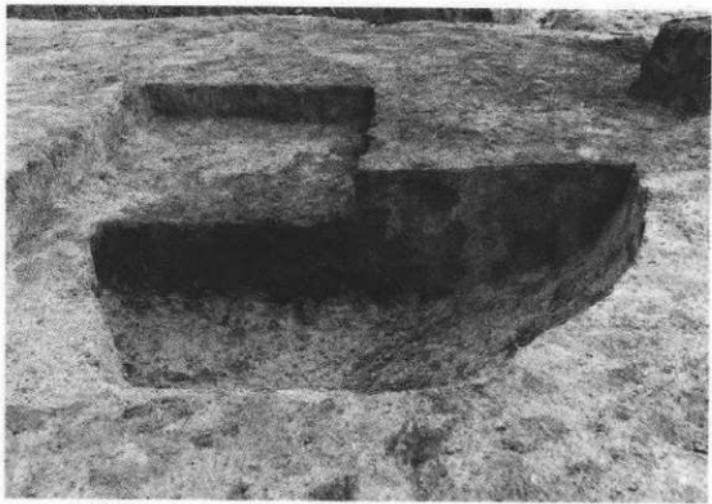
SK13 土壠



SK13 土壠断面



SK14 土壤



SK14 土壤斷面



SI01 壓穴住居跡埋設土器



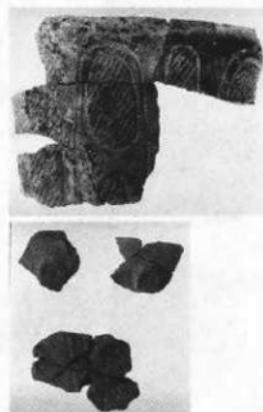
SI01 壓穴住居跡埋土出土土器



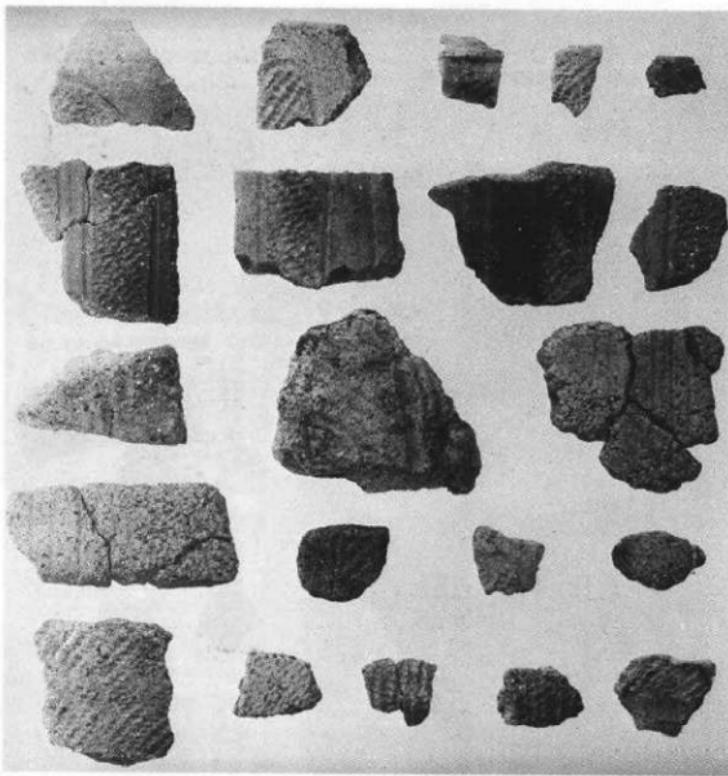
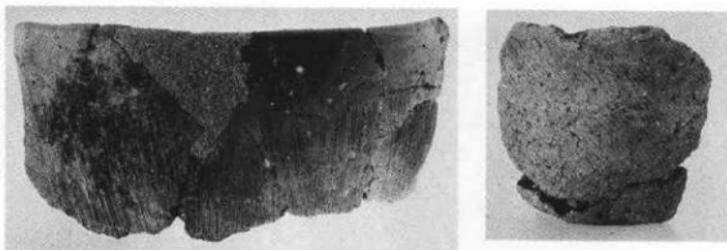
SI02 壓穴住居跡床面出土土器



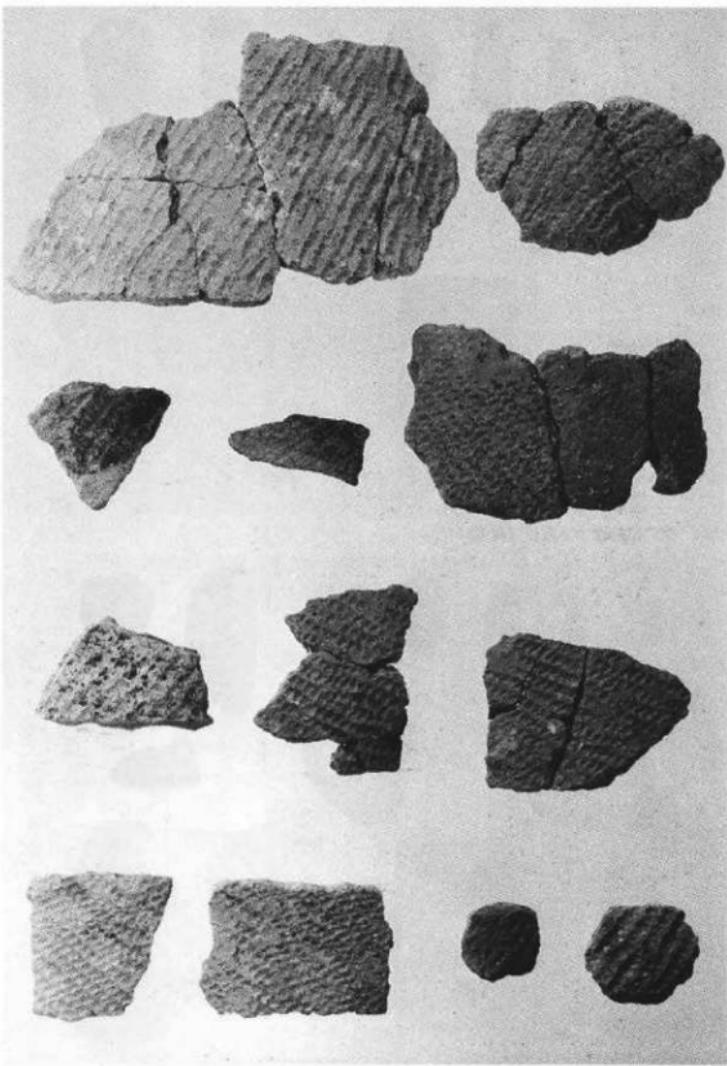
SI03 壓穴住居跡埋設土器



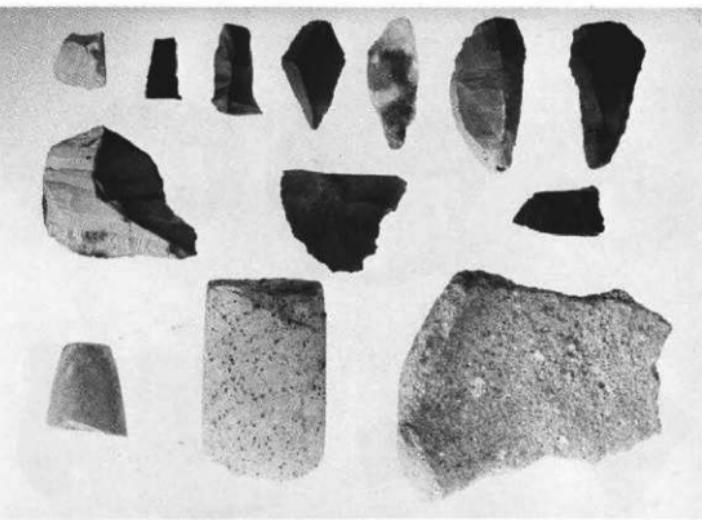
遺構外出土土器



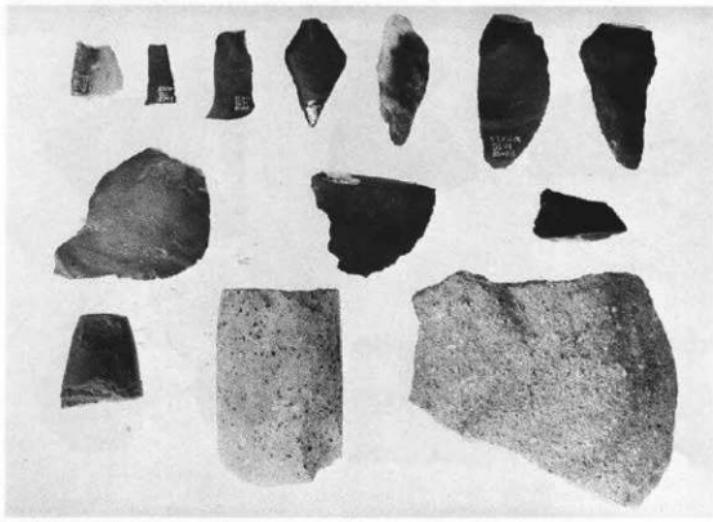
SI01 壁穴住居跡出土遺物



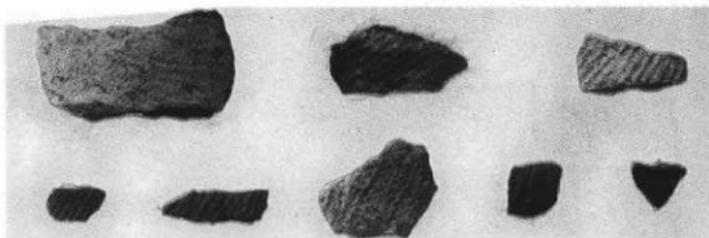
SI01 壓穴住居跡出土遺物



SI01 壘穴住居跡出土石器（表面）



SI01 壉穴住居跡出土石器（裏面）



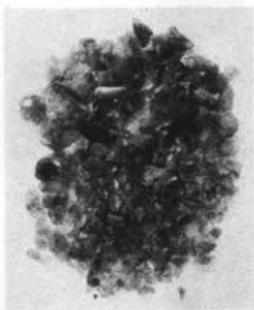
SI02 壺穴住居跡出土遺物



SI03 壺穴住居跡出土遺物



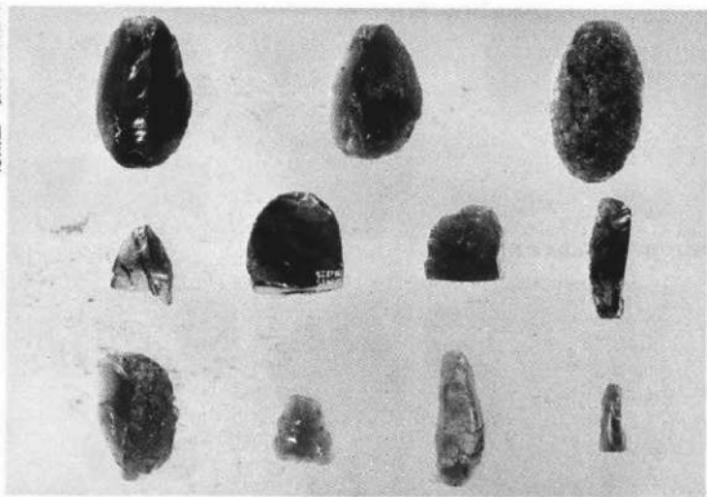
SI03 壺穴住居跡出土石器（表面）



SI02 壺穴住居跡出土チップ



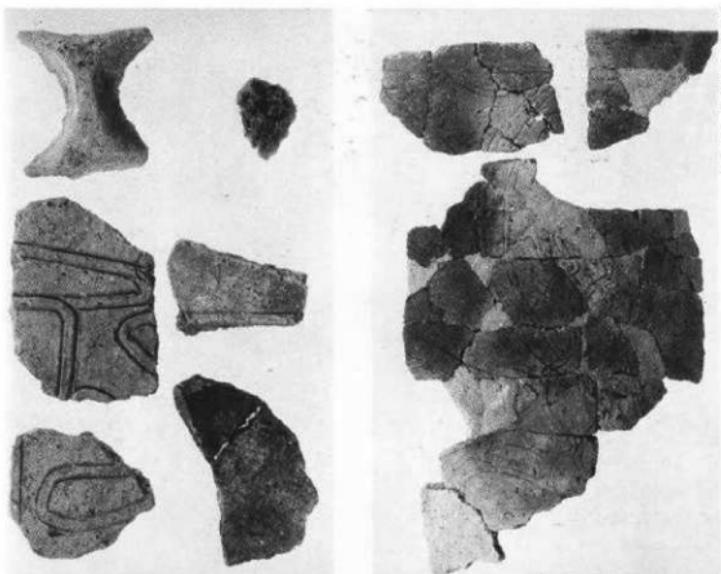
SI03 壺穴住居跡出土石器（裏面）



SI02 壓穴住居跡出土石器（表面）



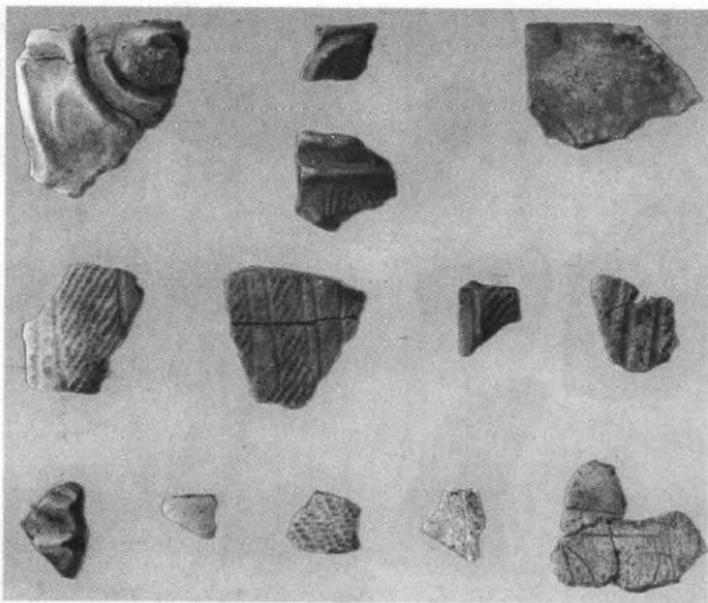
SI02 壓穴住居跡出土石器（裏面）



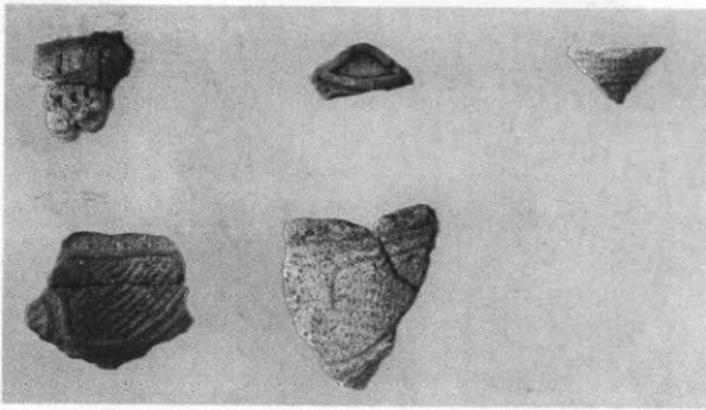
土壤內出土遺物



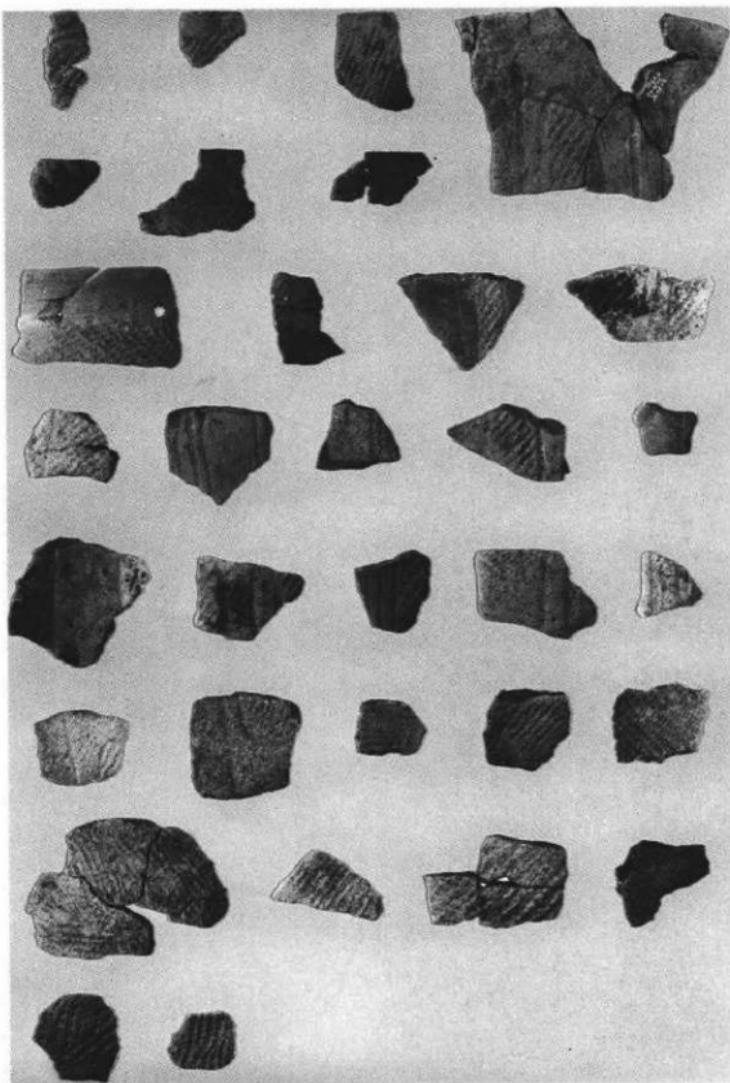
($\times 1.4$)



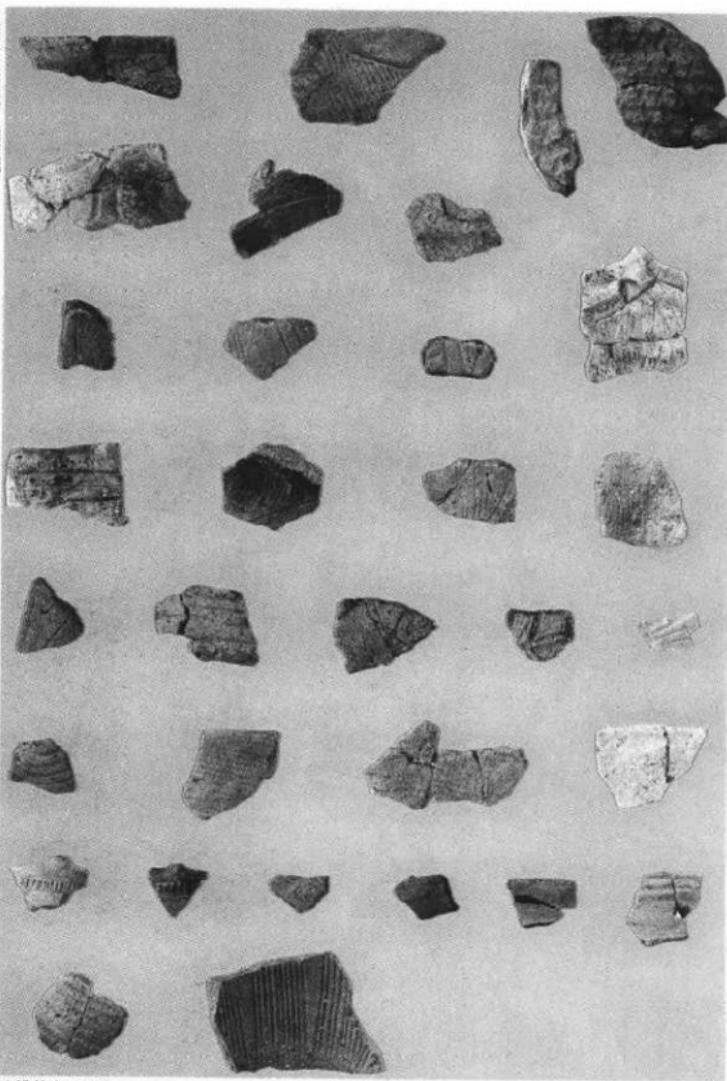
倒木底出土遺物



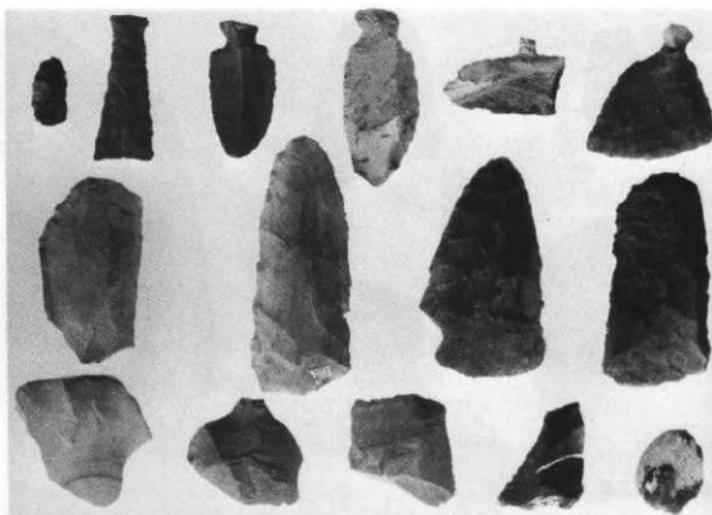
遺構外出土遺物



遗构外出土遗物



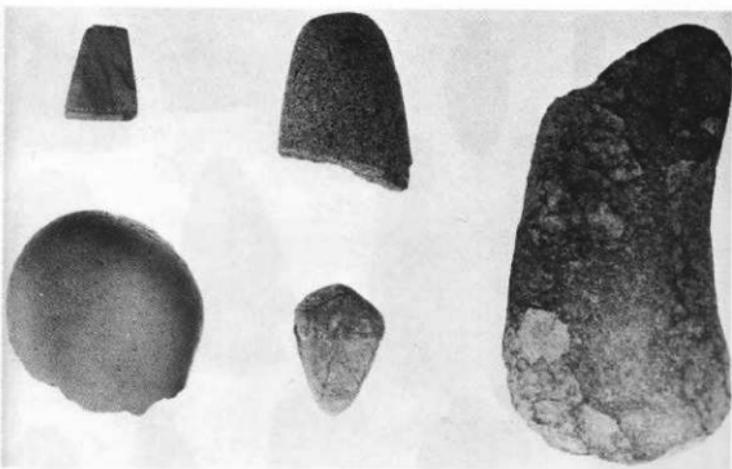
造構外出土遺物



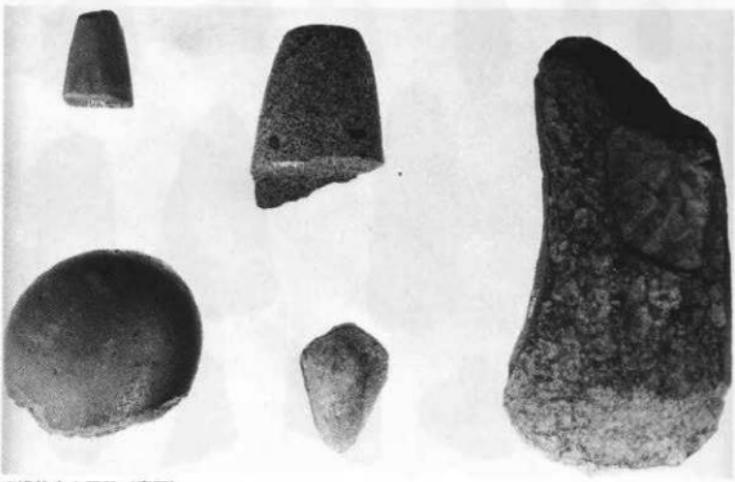
遺構外出土石器（表面）



遺構外出土石器（裏面）



遺構外出土石器（表面）



遺構外出土石器（裏面）

第6章 松木台Ⅲ遺跡

(5MKDⅢ・No.37)

所 在 地 秋田県河辺郡河辺町戸島字松木台57他

調査期間 昭和60年 6月25日～11月22日

調査面積 8,000 m²



第1図 遺跡地形図（スクリートーン部は調査範囲）

第1節 調査の概要

1 遺跡の概観

松木台Ⅲ遺跡は、東北横断自動車道関係遺跡群の中では最も北西に位置する。遺跡は河岸堆積物によって形成されている台地の縁辺部にあり、北側の崖下約27mには岩見川が西流する。

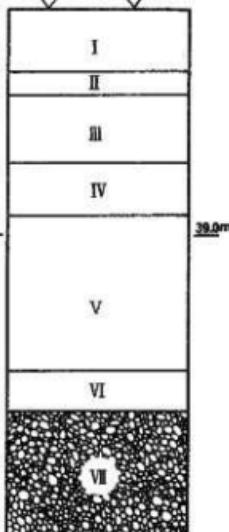
標高約40mの台地はほぼ平坦といえ、調査面積は8,000m²である。調査前の現況は杉の植林地となっており、伐採後の杉株が広範囲に及んでいる。また、遺跡の黒色土は平均30cm前後であるが、調査区の北東と南西側では1m以上を測り、地山面は中央部周辺で高くなる。

本遺跡の基本的な層序は第2図の通りである。I層は黒色土（耕作土）で搅乱を受けており縄文時代や平安時代の遺物を包含している。II層は漸移層で、III層は粘性・締まりの強い黄褐色土（10YR 5/6）、IV層も粘性・締まりの強い明黄褐色土（10YR 7/6）である。V層の明黄褐色土（10YR 7/6）は砂質で、粘性・締まりが強く酸化鉄分を顕著に含み、また灰白色粘質土（10YR 7/2）も見られる。VI層はオリーブ黄色砂質土（5Y 6/4）、VII層は礫層である。

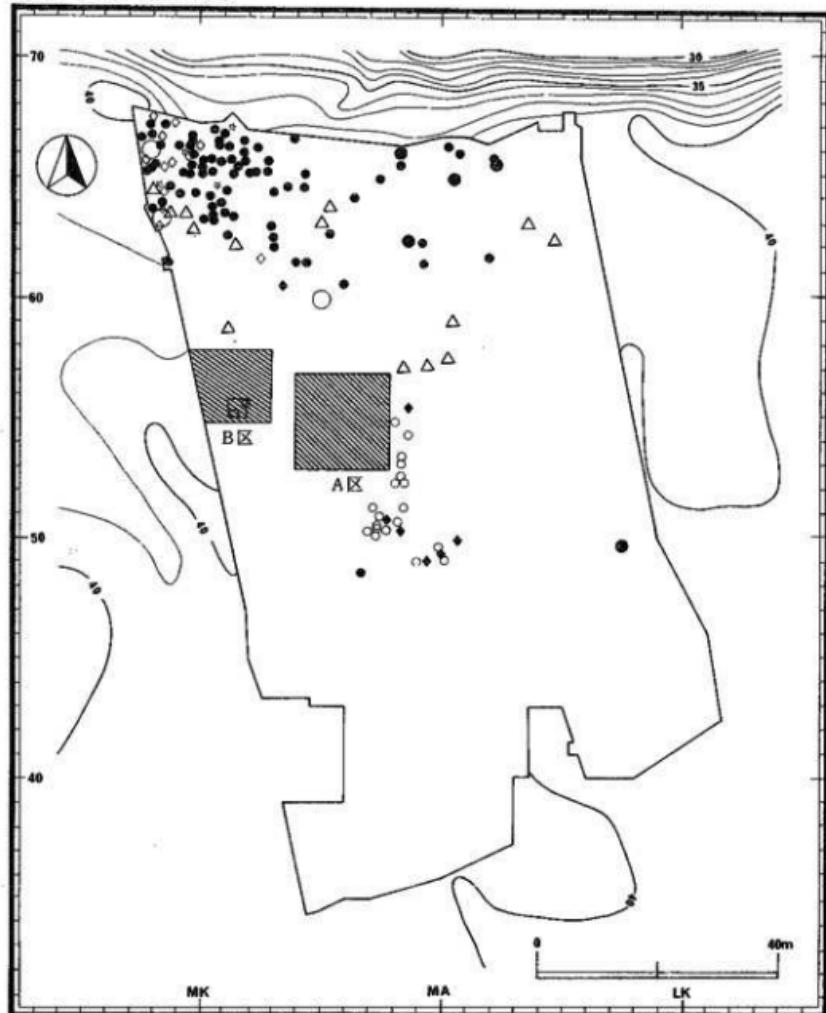
遺構は主にIII層で確認されるが、平安時代と縄文時代時代晩期の土壌はII層で確認されることが多い。また遺構の底面はIII・IV層に達するが、Tピットの底面はVI層まで及ぶものもある。旧石器は主にⅣ～V層にかけて出土している。

検出された遺構・遺物は、旧石器時代・縄文時代・平安時代のものである。これらの遺構や遺物の分布状況は、調査区の北西側が縄文時代、中央部北寄りが旧石器時代、中央部分が平安時代と集中する部分が明瞭であり、時代ごとに占地の様相が異なっている。旧石器時代では、遺物の出土する地点を当初2地区（A・B区）に分けて考えていたが、調査時の所見や整理過程のなかで、同一の広がりとして判断されるに至った。石器はナイフ・石刃・搔器・剥片などで総数3,168点を数える。遺構としては、MF55グリッド杭を中心として炭化物の集中地点が認められ、当時の遺構と思われる。また地山の中には平面が楕円形・円形で断面袋状を呈するインボリューションが確認されている。

縄文時代では、中期の竪穴住居跡が3軒、同Tピットが15基、その他に晩期の土壌が73基、同焼土遺構が14基、同配石遺構が4基検出されている。Tピットは配置上いくつかのまとまりがあり、住居跡は調査区よりさらに西側に中心を持つようである。土壌は西側に集中し、東側



第2図 土層柱状図



■ 旧石器出土範囲

縄文時代

- 壺穴住居跡
- 土壙
- フラスコ状土壤
- △ Tビット
- ◊ 烧土遺構
- ◊ 配石遺構

平安時代

- 壺穴住居跡
- 土壙
- ◆ 烧土遺構

第3図 遺構配置図

ではフ拉斯コ状土壌が検出されている。焼土・配石遺構は、土壌集中地区にまとまって検出されている。SK05・08は半截状態で検出され、台地が当時北に延びていた証拠を示している。

平安時代では、堅穴住居跡が1棟、焼土遺構が7基、土壌が19基他にピットが5個検出されている。住居跡から南東へ約30m離れた地区には土壌と焼土遺構が集中している。特にMC50グリッドを中心にして土壌の集中が見られ、SK110では羽口・鉄滓・砥石が検出されている。焼土遺構の中には甕と壺が設置されている例がそれぞれ認められる。遺構群は歴治に関わっていたと考えられる。

時代の不明な遺構としては、LQ・LR63グリッドを中心にして北西方向をもつ溝状遺構(SD156)とMC44グリッド北西に位置する土壌がある。両遺構ともかなり新しいと思われる。

本調査の成果は以上であるが、台地縁辺部で時代の異なる占地の様相の一端が明らかにされた。そして、大河川を臨む台地の重要性が指摘される。また、すでに調査が及んでいる七曲台遺跡群との関連でさまざまな知見が得られると思われる。

2 調査経過

本遺跡の調査は、6月25日から表土除去作業を開始した。初日から、調査区北西隅で焼土・配石遺構や遺物が検出される。以後、新たな遺構が続出ししばらく確認調査を続ける。7月20日には住居跡・土壌・配石・焼土遺構・Tピットなど一応の集中範囲が調査区西側でとらえられ、現時点での確認全景写真を撮る。表土除去作業は、調査終了まで続く。

8月29日からは、縄文時代の調査と並行して旧石器時代の本格的な調査を実施する。本地区では遺物の取り上げと地層剥ぎが繰り返し行なわれる。調査は遺跡調査の終了時まで続く。この間、9月9日には、縄文時代の遺構群を中心として全景写真を撮る。

9月26日には、旧石器・縄文時代の調査と並行して、平安時代の住居跡を除く遺構群について、本格的な調査を実施する。このころ、調査区北東側から土壌・Tピットがある程度のまとまりをもって検出される。また、雨が頻繁に続くようになり、調査終了まで支障をきたす。以上の調査経過の結果、10月中旬時点の進捗状況では調査終了が危ぶまれ、11月5日より、他の二遺跡から人員をさいて調査にのぞむことになる。このような加勢を得て、11月20日には旧石器地区や遺跡の全景を撮影し22日をもって全調査を終了することができた。

第2節 調査の記録

1 旧石器時代の遺物

昭和59年度に行われた範囲確認調査で、本遺跡中央部やや西寄りから旧石器時代の遺物と考えられる大型の剥片が数点検出された。しかしその出土状況は、それまで発掘調査されていた風無台Ⅰ・Ⅱ遺跡、松木台Ⅱ遺跡とは様相が異なり、散発的なものであった。

調査の結果、本遺跡における旧石器時代の遺物は、北側が急峻な崖面となる段丘縁から35～50mほど南側に入った調査区中央北西部から比較的広範囲に出上した。出土した遺物の大部分は、ナイフ形石器・搔器・残核・剥片・石屑などの石器で、他には自然礫や、炭化物などがある。出土した位置やレベルなどを登録した石器・自然礫は、総数で3,168点を数えるが、この他に後世の耕作などによって攪乱を受け黒色土中から出土した石器を含めると、その数は約3,250点に達する。また、調査中、石器などの平面的な出土状況から、それらの石器群が東西別々のまとまりとして把え得るのではないかとして、東側をA地区、西側をB地区としたが、整理の結果、母岩によっては、A・B区どちらか一方に集中する母岩もあるが、A・B区双方から平均的に出土しているものもあり、それはお互いに接合する。従って、今回出土した約3,250点と石器・自然礫は、全て同一時期の所産るものであると考えられる。

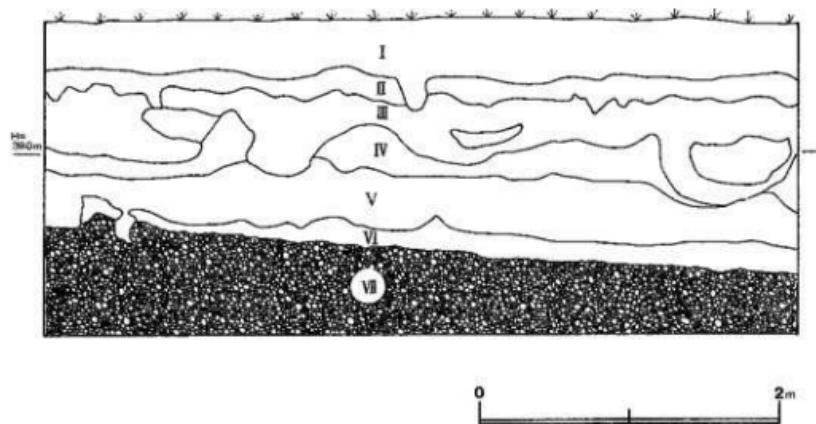
(1) 基本層序

第4図はB区の西端調査区西辺の土壠断面の一部で、基本的な層序を示す。第Ⅰ層はいわゆる黒ボクと呼ばれる黒～暗褐色の表土である。第Ⅱ層は暗褐～黄褐色漸移層。第Ⅲ層は黄褐色粘質土で、よく締まっている。本図や第5図でもわかるように、この第Ⅲ層中位以下がインボリューションの影響を受けており、その下部が強く波打つ部分がある。第Ⅳ層は明黄褐色の粘質土。第Ⅴ層は明黄褐色粘質土と、青灰色砂質土との混土で、部分的には両者が厚さ1cm前後で竪状を呈する。第VI層はこの下の第VII層段丘砂礫層の直上によく見られる灰白色粘質土である。このうち旧石器時代の石器群は一部第Ⅰ・Ⅱ層に散出するものの、大部分は第Ⅲ層中に包含されている。

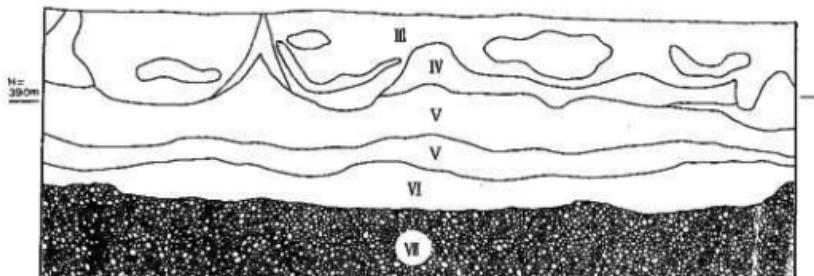
第5図はA地区西端の土壠南北断面の一部で、第Ⅰ・Ⅱ層削平後のものである。（基本的な土質は第4図のに同じ）。第Ⅲ層がインボリューションによって強く波打っており、その個々の規模は長径0.8～1.2mで深さは0.6m前後である。

(2) 遺物の出土状況

第6図（巻末付図）は、今回の調査範囲における遺物の平面及び垂直分布を示している。こ



第4図 旧石器出土地区土層図（B区）



第5図 旧石器出土地区土層図（A区）

これからもわかるように、石器群は長径2～3mの円形あるいは梢円形にまとまりを見せながらも、全体としてはA区12グリット、B区5グリットにわたって出土している。同図に引かれている線は、標高39.300m前後で、平面的に把えられた個々のインポリューションの単位である。このインポリューションと石器群の分布を重ねてみると、大わくでは、特に石器群が集中する部分とインポリューションの個々の単位とが重複し、このことは垂直分布図の上でも看取できる。つまり、A区の場合では、長径15～20mの不正な円で囲まれる範囲から出土している石器群の中に径2～3mほどにまとまる単位がありそうに見えるが、あるいはこれはインポリューションの影響を受けて石器群が二次的に移動した結果であるとする可能性の方が強い。これはB区も同様である。ナイフ形石器・搔器などの定形的な石器は、ほとんど集中せず全体に散在す

る。しかしながら、A区ME55グリッドの西側からMF55グリッド東側に集中する石器群中からは他所で見られないくらい炭化物の集中があり、あるいは何らかの遺構の存在した可能性もあるが、明確にすることはできなかった。

石器群は約0.6mほどの垂直分布幅を持っているが、これはインボリューションの波頂部と底部との差と一致している。また、石屑などの細片と比較的大きな剥片・石核などを分けて垂直分布の上で差があるか否か見てみたが、同図垂直分布に示したごとく、明確な差はなかった。

(3) 出土遺物

出土した石器群は、擾乱を受けて黒色土中から出土したものも含めると約3,250点で、その内訳は定形的な石器66点、残核27点、剥片約1,900点、自然隕9点、その他は石屑となる。定形的な石器はナイフ形石器と椎器が主体で他に削器と彫器が僅かにある。

石屑・自然隕を除いて接合作業を行った結果、ほぼ1つの母岩としてその数をまとめることができたものも多いが、石材が全て頁岩であるため、母岩の中心部から剥片剥離された剥片になるとどの母岩に属するものかわらないものもあり、全ての剥片を母岩別に帰属させることはできなかった。

以下、定形的な石器、接合資料の順で説明する。

①ナイフ形石器（第7～11図、図版4～8）

一部折損したものも含めると32点出土している。全て縦長の石刃を素材とし、素材の形状をほとんど変えることなく、石刃の基部両側刃を中心に細かな二次加工を施したナイフ形石器である。二次加工の施されていない側刃の一部及び先端部には、使用によるものと考えられる微細な刃こぼれが例外なく見られ、素材となった石刃の打面も残されている。

素材となった石刃の形状及び施された二次加工の部位の差などによって大きくI・II類に分けられ、さらにそれぞれがa・bに細分される。

I類（1～10）：長さに比べ幅が広く、先端部にも刃を持つ石刃を素材としたナイフ形石器である。二次加工は基部両側刃に限られ、先端部へのそれはほとんどない。先端部の刃のあり方によって2つに分けられる。

I-a（1～5）：先端部の刃が石器の長軸に対し、ほぼ直交する形のものである。大きなものが多い。

1～5とも基部両側刃に腹面から細かい連続的な二次加工が施されており、それが比較的急斜度である。1・2は同一母岩から得られた石刃で、先端部に腹面（主要剥離面）とは逆方向からの剥離面を持つ。そしてさらには1は第9図16に示したごとく、ナイフ形石器II-b類の17・18とも接合する。2つの腹面中央部には光沢（ポリッシュ）が見える。3・4は石器の最大幅

が先端部にあるので、4が特に極端である。

I-b (6-10) : 先端部の刃が短く、石器の長軸に対し、やや斜交するものである。大きなものはなく、すんぐりしている。10の右側邊上端には腹面側からの二次加物が僅かに見える。第11図68は器中位で折れた後、先端部が搔器に転用されたものであろうか。

II類 (11-15, 17-19, 23-29) : 長さが4~9cmの先端部の尖る石刃を素材としたイフ形石器である。折損しているもの (20・21, 30-32) も大部分この仲間であろう。二次加工が先端部にも施されるか否かでa・b 2つ分けられる。

II-a (11-13, 28) : 二次加工が基部両側刃の他に、先端部の左右どちらかの位置にも施されるものである。11・13・28とも先端部への二次加工はほんの僅かであるが、12のそれは本遺跡のナイフ形石器の中にあっては顕著なもので、急斜度である。

II-b (14-15, 17-19, 22-27, 29) : 二次加工が基部両側刃に限られたものである。二次加工は19のように顕著なものであるが、大部分は細かく短い範囲にしか施されない。また、17・18のように16で見るように連続して剥離された石刃の基部片側刃の同一の部位にしか二次加工が施されないものもある。

②搔器 (第11図34~14図64、図版8~12)

本遺跡における剥片剥離技法は、後述するように石刃技法の他に不定形に近い剥片だけを得るようなものもあり、石刃技法そのものも整った形状の石刃が連続的に得られるものではない。そのようにして得られた不定形の剥片や部厚い石刃状剥片の他、打面再生剥片や残核を用いて種々の搔器が作られている。31点出土しており、それらは刃部の形状などによってI~V類に分けられる。なお、いわゆる典型的なエンドスクレーパーはない。

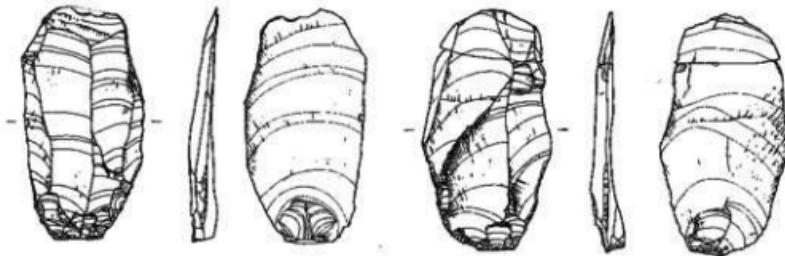
I類 (34-36) : 厚みのあるやや大型の剥片の一部にゆるい弧状の部厚い刃部を作出したもの。刃角は85°~120°を測る。34の表面・36の裏面の一部に光沢 (ポリッシュ) が見られる。35は第44図217に示した接合図の中にある。

II類 (37-38) : 厚みのある石刃あるいは石刃状剥片の先端 (38) 、あるいは基部側 (37) に緩い弧状の小さな刃部を作出したもの。刃角は80°~90°。

III類 (39-42) : 厚手の石刃あるいは石刃状剥片の先端に直線的あるいは中央部が若干凹むような急斜度の刃部を作出したもの。39は完形品で、資料No.2のもので第42図206に示したような部分の縦長剥片である。40~42は石器の中ほどで折れている。刃角は80°~95°。

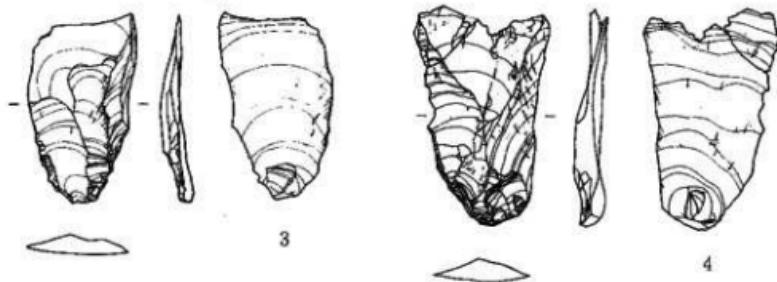
IV類 (43-52) : 厚手の剥片あるいは折面再生剥片や残核の一辺に直線的あるいは鋸歯線状の刃部を作出したもの。刃角は70°~90°。

V類 (53-64) : 形の一一定していない剥片や残核の一部 (小さく突出している部分) に小さな刃部を作出したもので、刃角は60°~90°であるが、刃部は比較的薄い。



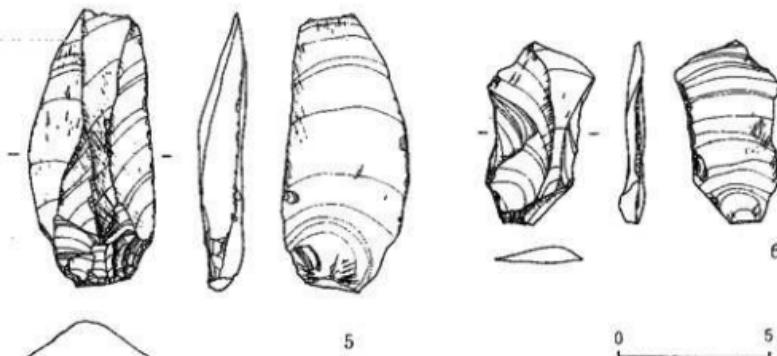
1

2



3

4

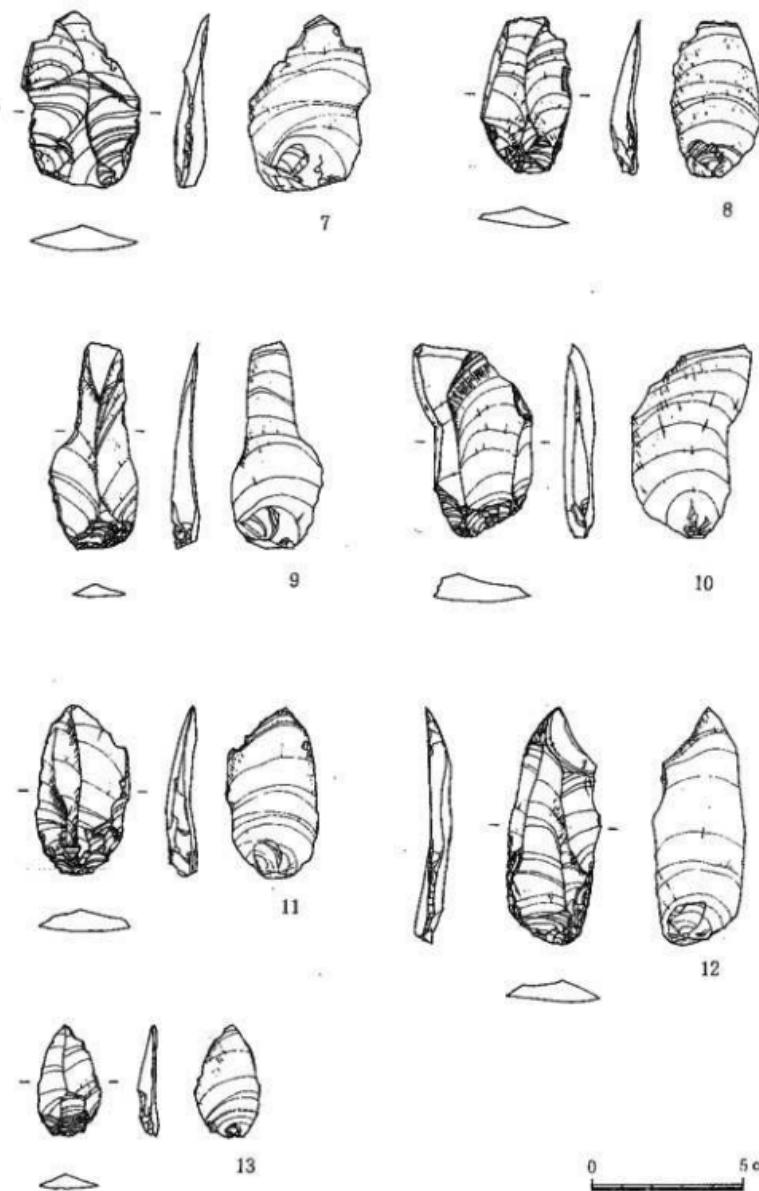


5

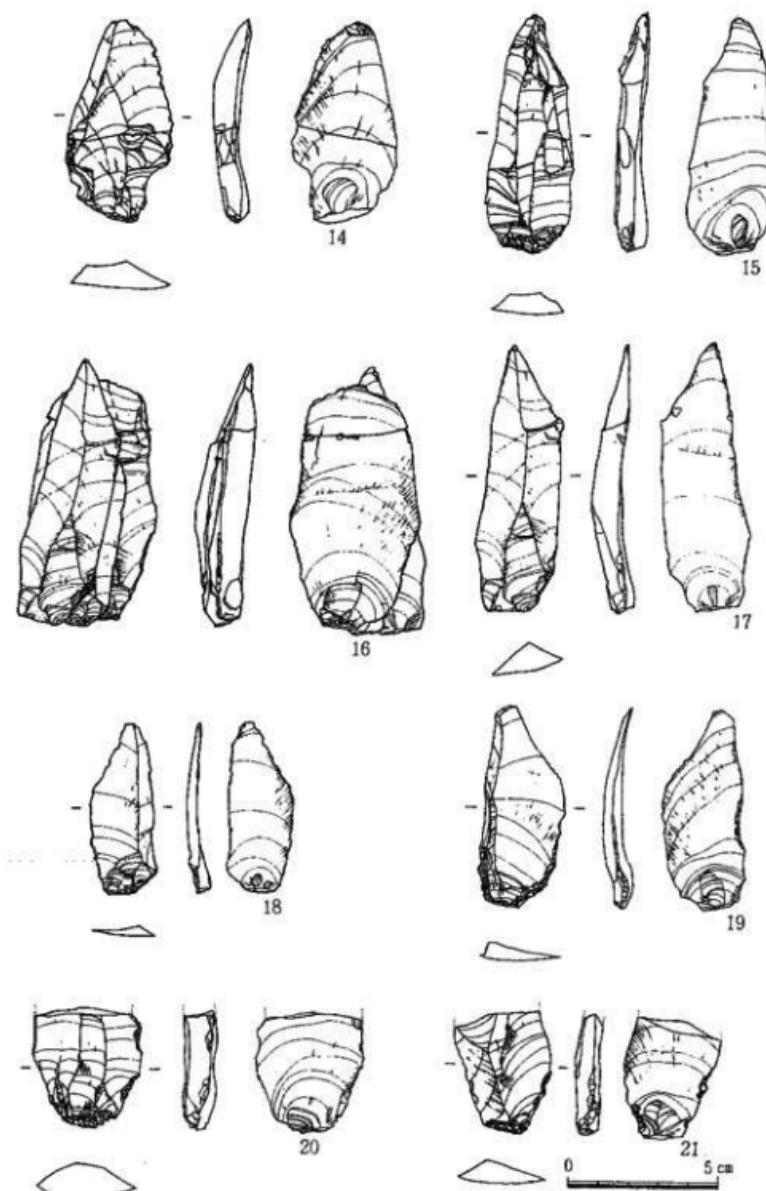
6

0 5 cm

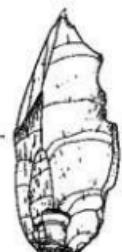
第7図 ナイフ形石器 (1)



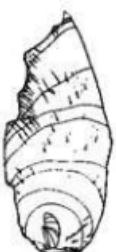
第8図 ナイフ形石器（2）



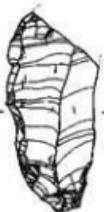
第9図 ナイフ形石器 (3)



22



23



24



25



26



27



28



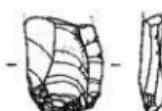
29



30

第10図 ナイフ形石器 (4)

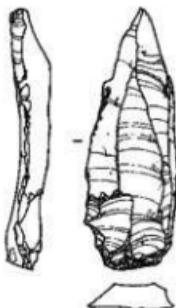




31



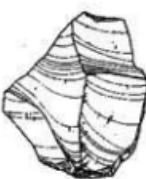
32



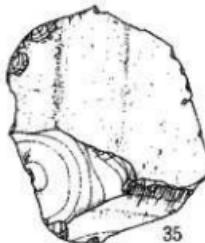
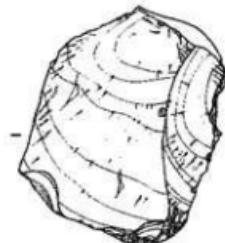
33



34



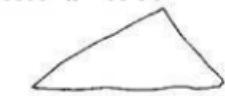
37



35



37



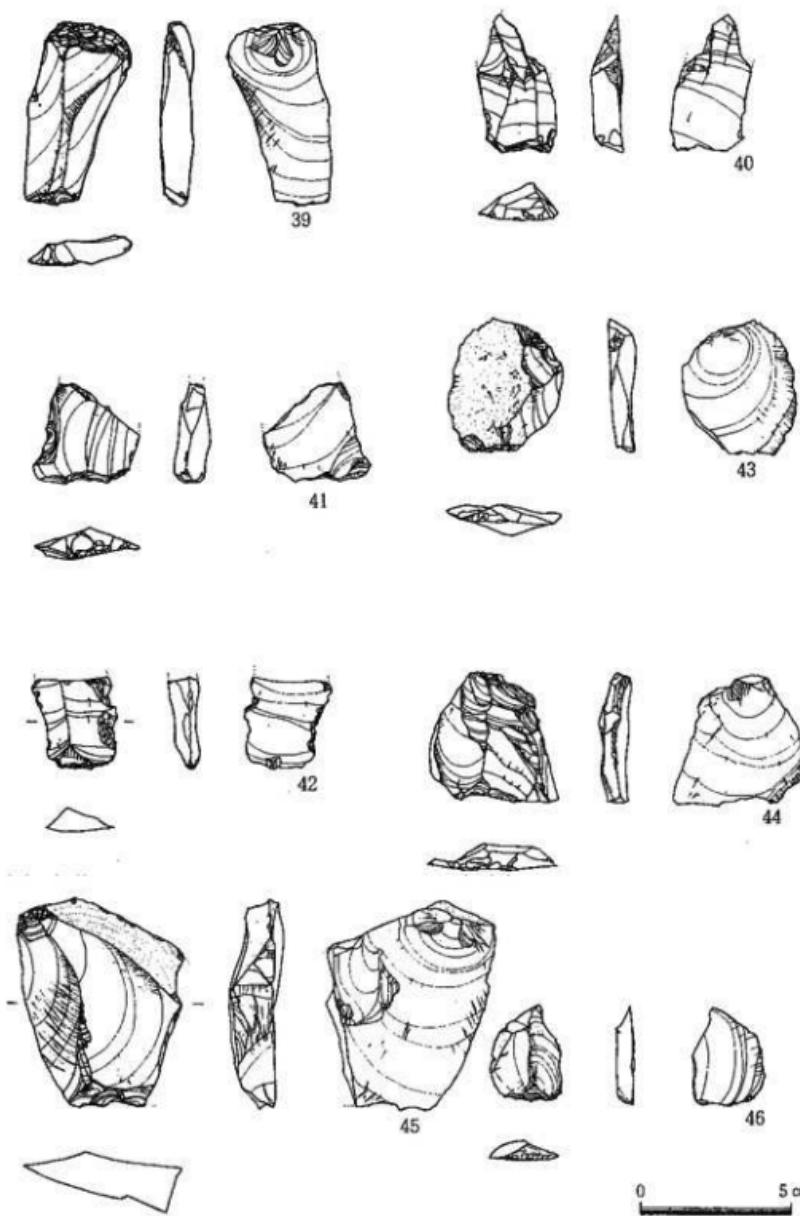
36



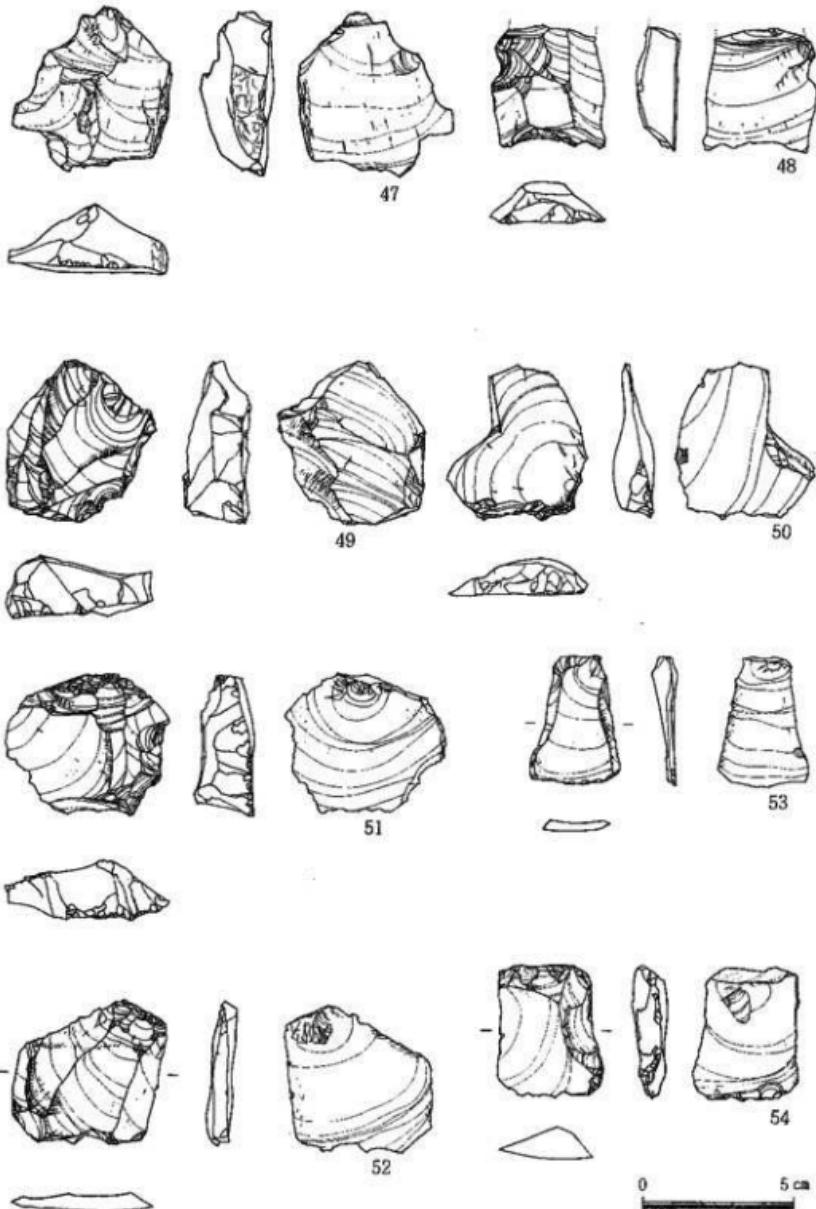
38

0 5 cm

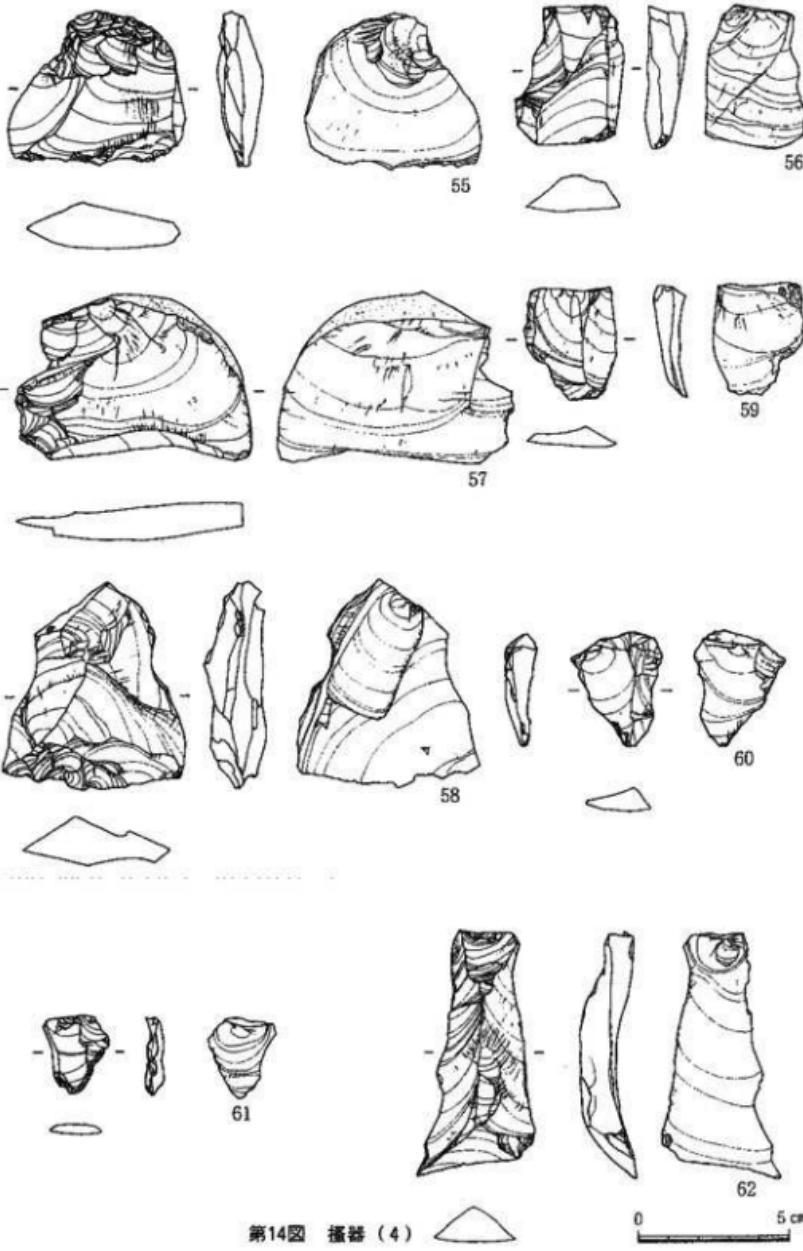
第11図 ナイフ形石器（5） 振器（1）



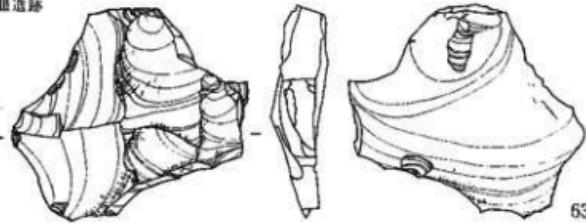
第12図 挖器（2）



第13圖 撞器 (3)



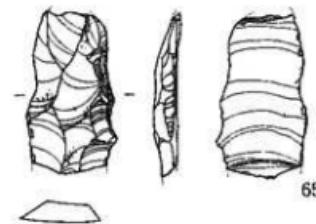
第14図 挖器(4)



63



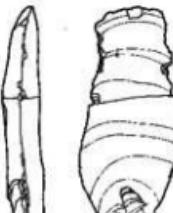
64



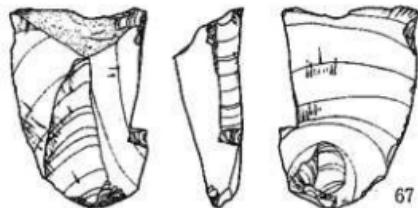
65



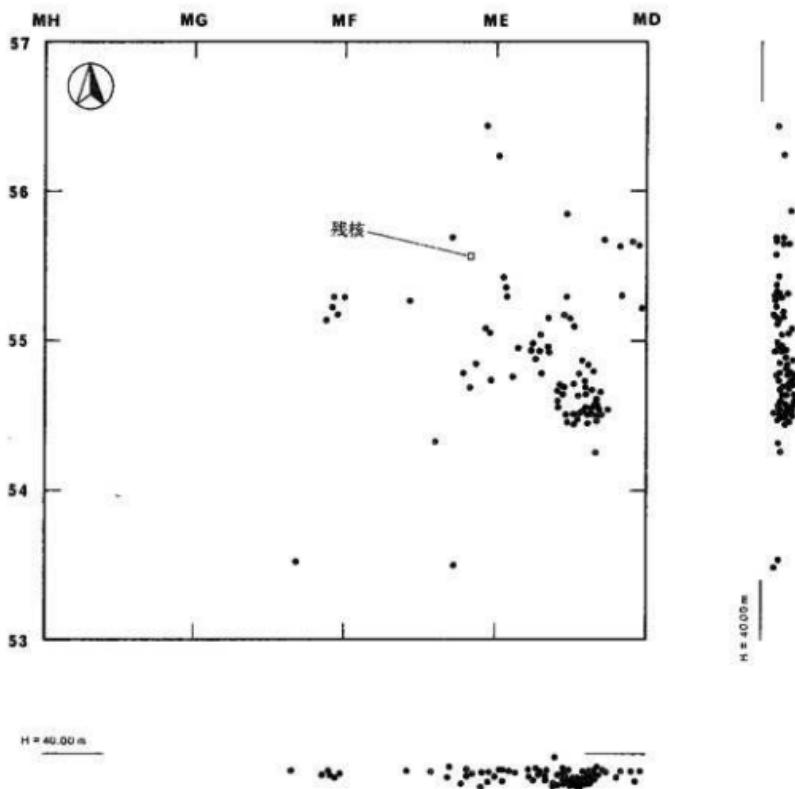
66



67



第16圖 搗器（5）刮器



第16図 資料No.1 出土平面・垂直分布図

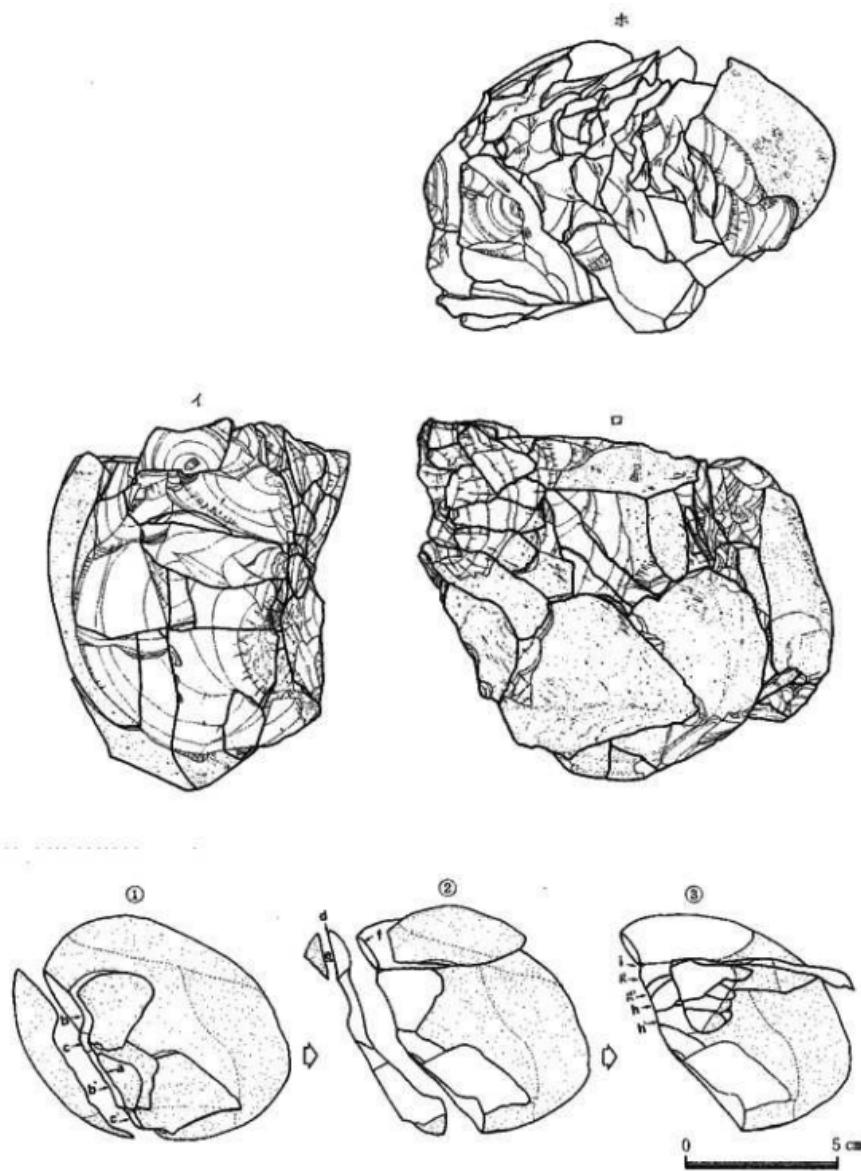
④削器（第15図65・66、図版12）

種々の剥片の一側辺に細かな二次加工を施して直線的な刃部を作出したものである。2点出土している。

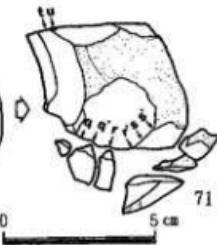
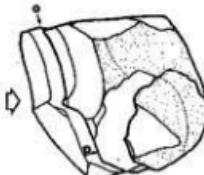
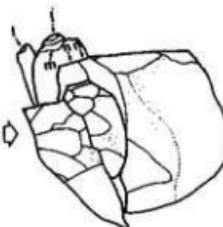
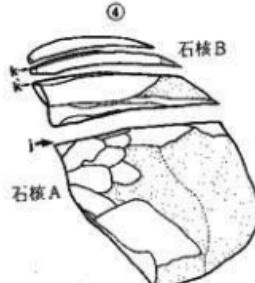
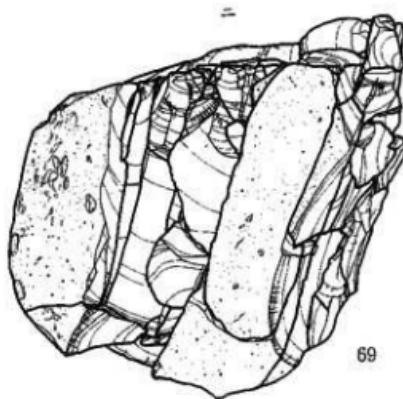
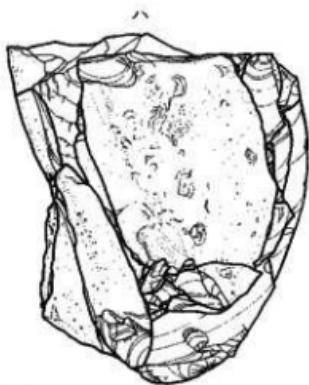
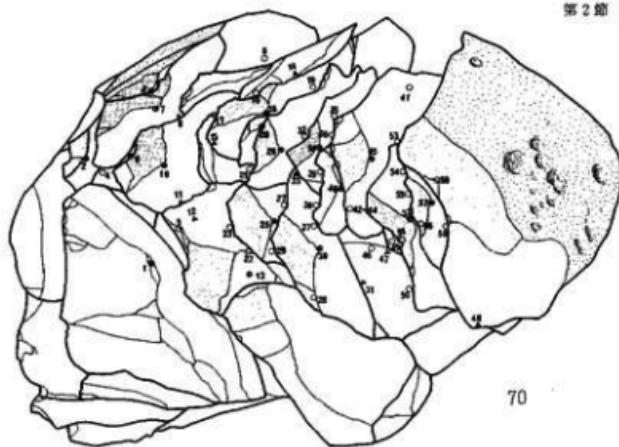
⑤彫刻刀形石器（第11図33・第15図6、図版8・12）

確実な彫刻刀形石器は1点（第15図67）で、他に後述するような理由で不確実なもの1点（第11図33）がある。

67は末端が広がり厚みのある剥片の、打面とは反対側にある自然面に小さい打面を用意し、そこから剥片の長軸に並行する橢状剥離によって彫刻刃面を作出した側刃型の彫刻刀形石器である。橢状剥離の末端には、あらかじめ側辺からの剥離が施されていたようであるが、橢状剥離



第17図 資料No. 1 ($\frac{1}{4}$)



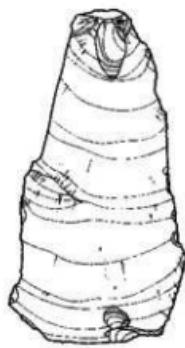
第18図 資料No.1 (2/4)

0 5 cm



72

73



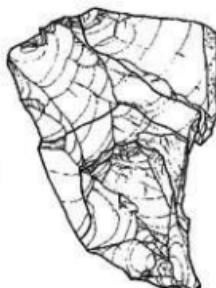
74



76



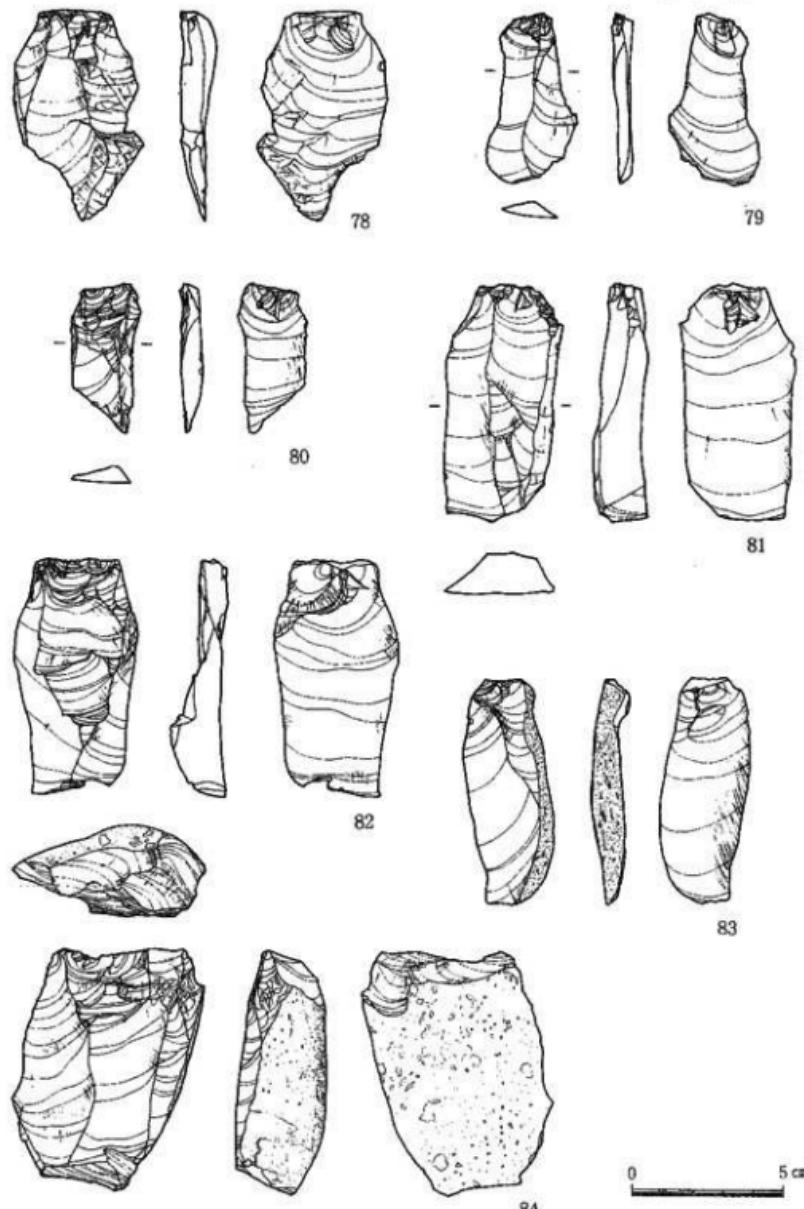
77



78

第19図 資料No.1 (3/4)





第20図 資料No.1 (4/4)

離そのものはこの部分で階段状に終わっている。

33は石刃の先端側から交叉する2回以上の加撃によって彫刻刀面が作出された交叉刃型の彫刻刀形石器かと思われた。しかしながらこの石器は、黒色土中から出土しており、彫刻刀面と他の面では風化の度合が異なっていて彫刻刀面がやや新鮮である。このことからこの石器については、彫刻刀形石器の可能性はあるものの、不確実なものとしておきたい。

(4) 各資料

今回の調査した400m²の中から出土した石屑を除く石核・剥片など約1,900点について接合作業を精力的に行い、母岩別の資料として剥片剥離技術を復原しようとしたが、母岩の中心部分から剥離された剥片になると、どの母岩のものなのか判然としないものがあり、結局は全てを母岩別の資料としてまとめることができなかった。このため、ここでは単に資料として説明するが、これらの中には資料No.1・4・5・11のように1つの母岩として把え得るものも含まれている。また、他の資料No.7・8・9・10・12などのように、母岩の分割から剥片剥離に至る行程を全て復原することはできなかったものの、分割後の剥片剥離技術をある程度示すことができたものもある。

なお、ここで説明する資料の各々は、各母岩として検出された片数などを明確にはし得なかつたが、基本的には1つの母岩あるいはその一部として把えてもよいものである。このようにしてみた場合、松木台Ⅲ遺跡における母岩の数は20個前後が考えられる。そしてそのうち10~14個は本調査区内で剥片剥離作業をしたものであり、他の5個前後の母岩のものは、石刃などの单品の形で本遺跡に持ち込んだものようである。

さらに、各資料に見られる剥片剥離技術は、大きくは石刃技法によるものと、そうでないものとに分かれる。石刃技法によるものの場合でも、単設打面によるもののか、両設打面のか、打面再生はあるのか否かなど複雑である。

資料No.1（第16・17・18・19・20図、図版13・14）

本資料はA区の中央東部9グリッドに散在して検出された合計96点の剥片と1点の残核からなり（第16図）、この他に黒色土中から出土した3点がこれに加わる。このうちの86点が第17・18図の69-イ・ロ・ハ・ニ・ホのように接合した。接合の結果、この母岩は長さ約18cm、幅約13cm、厚さ約10cmの少しだけ角のあるやや細長い円錐であったと推定される。

これをもとに、69-ロ側から見て、母岩の分割から剥片剥離の行程を模式的に表したもののが第17・18図の71-①・②・③・④・⑤・⑥・⑦及び70である。その行程は以下のように進められる。① やや細長い円錐の左端をaによって大きく除去し、これによってできた面を打面

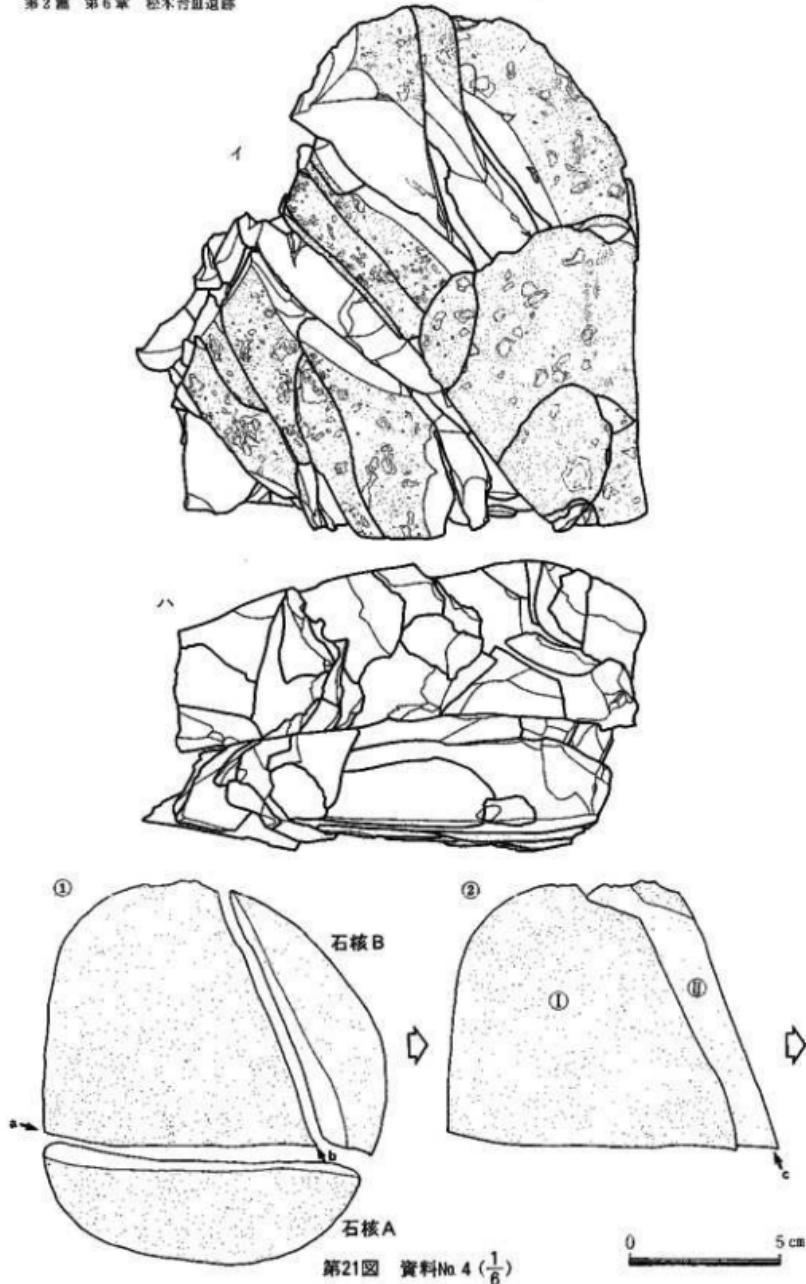
としてb～c'によって左側の礫皮面を除去する。⑤ dによって左上を小さく除き、dを打面としてeで上部礫皮面を除去した後、そこからfによって左側片をさらに落とす。⑥ さらにfを打面としてi～h'で左側の礫皮面などを除く（この部分から中央部下端にかけては母岩そのものの風化が進んでおり獲得したいと思う鋭利な縦辺の付いた剥片は取れないと判断したものと思われる）。⑦ fを打面として、上から約4分の1のところでjによって左から右に大きく分割し、石核A・Bを得る。石核Bではfを打面としてk・k'のように剥片剥離が進められたと思われるが、その残核は検出されなかった。この石核Bから得られた礫皮面付きの石刃が83である。⑧ 石核Aではjによる分割面を打面として、左端からl～n'のように剥片剥離作業が進められ、72のような剥片が得られている。⑨さらにこの作業はo（これによってできた剥片が74）まで続けられ、oを打面として下端部をpによって除去する。⑩ pによって大きく除去された面を打面として、g～s'によって石核Aの作業面の長さが約8cmに規程され、再びjによる分割面を打面とした剥片剥離作業が左→右に進められる。この時点から本格的な剥片剥離作業が開始されるのであるが、その順序は第18図70に示した番号の11～59のように進められる。

このように本格的な剥片剥離作業を開始してから石核が放棄されるまで約50回の打撃を行っているわけであるが、検出された縦長剥片（石刃）は14点（礫皮面が大きく残っているもの1点を含む）、検出されていないが縦長剥方であったと考えられるものが4点、他は頭部調整剥片であったり、礫皮面の大きく残る剥片であったと考えられり。つまり打面に打ちおろした打撃回数の4割弱が目的とする縦長剥片に近い形状を呈する剥片であり、6割強がそれらを得るために何らかの準備作業であったとすることができよう。なお、残存する縦長剥片のうち、代表的なものは72～82であるが、それは第18図70の番号で言えば、72が2、74が10、75が13、76が25、77が26、78が30、79が34、80が40、81が52、82が45となる。打撃順序の52の後、57と59で縦長剥片を取ろうとしたが、末端がヒンジフラクチャーで終わる不良のものしか取れず、石核Aを放棄したものであろう。84が残核である。

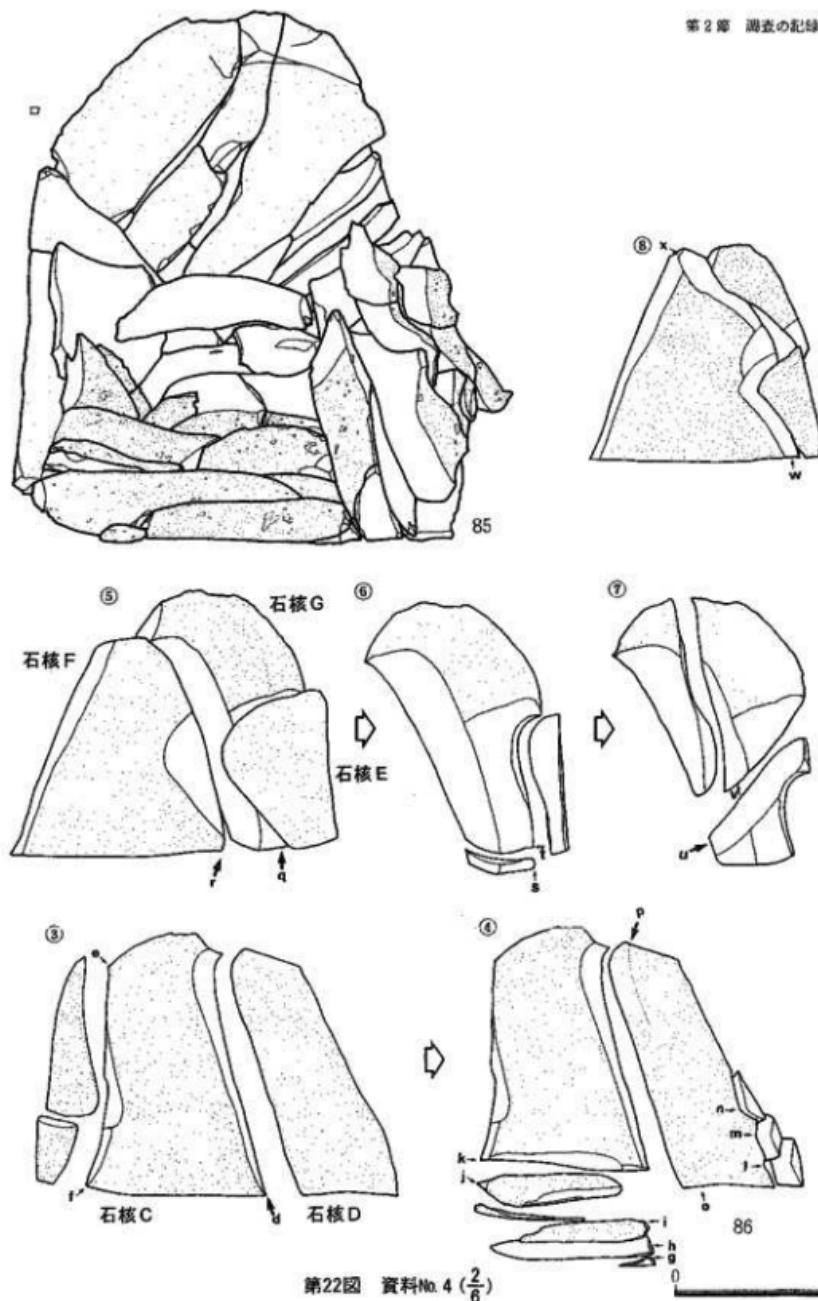
以上でわかるとおり、資料No.1は、打面調整や稜形成のための作業面調整の介在しない単設打面による剥片剥離作業が行なわれたものということができる。

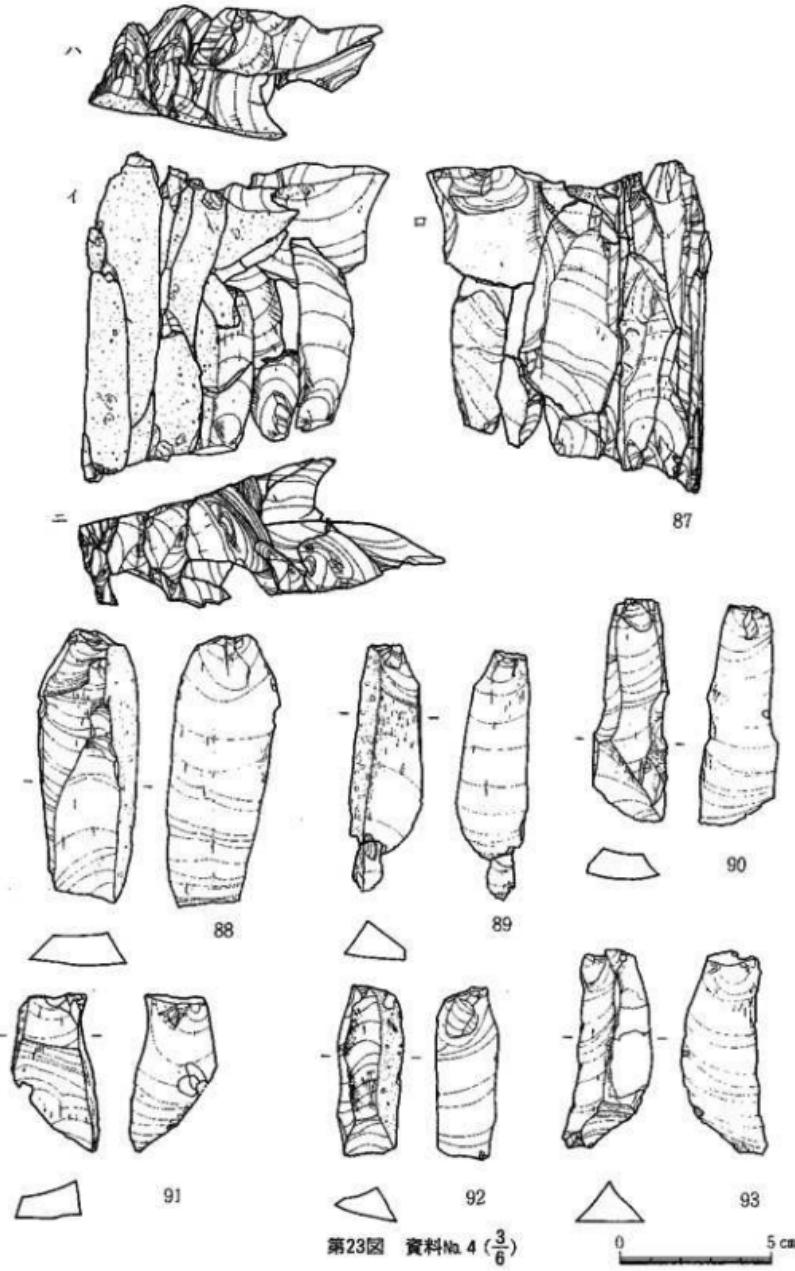
資料No.4（第21・22・23・24・25・26図、図版15・16・17・18）

合計64点の剥片と3点の残核が接合したもので、この他にも同じ母岩のものと思われる剥片が86点と多く、本遺跡の中でも最も大きく復原できた。第21・22図85-イ・ロ・ハが最終接合図である。これから推定すると、分割あるいは、剥片剥離前の母岩の大きさは、最大長約24cm、最大幅約21cm、最大厚約9cmの扁平な躰であったと思われる。

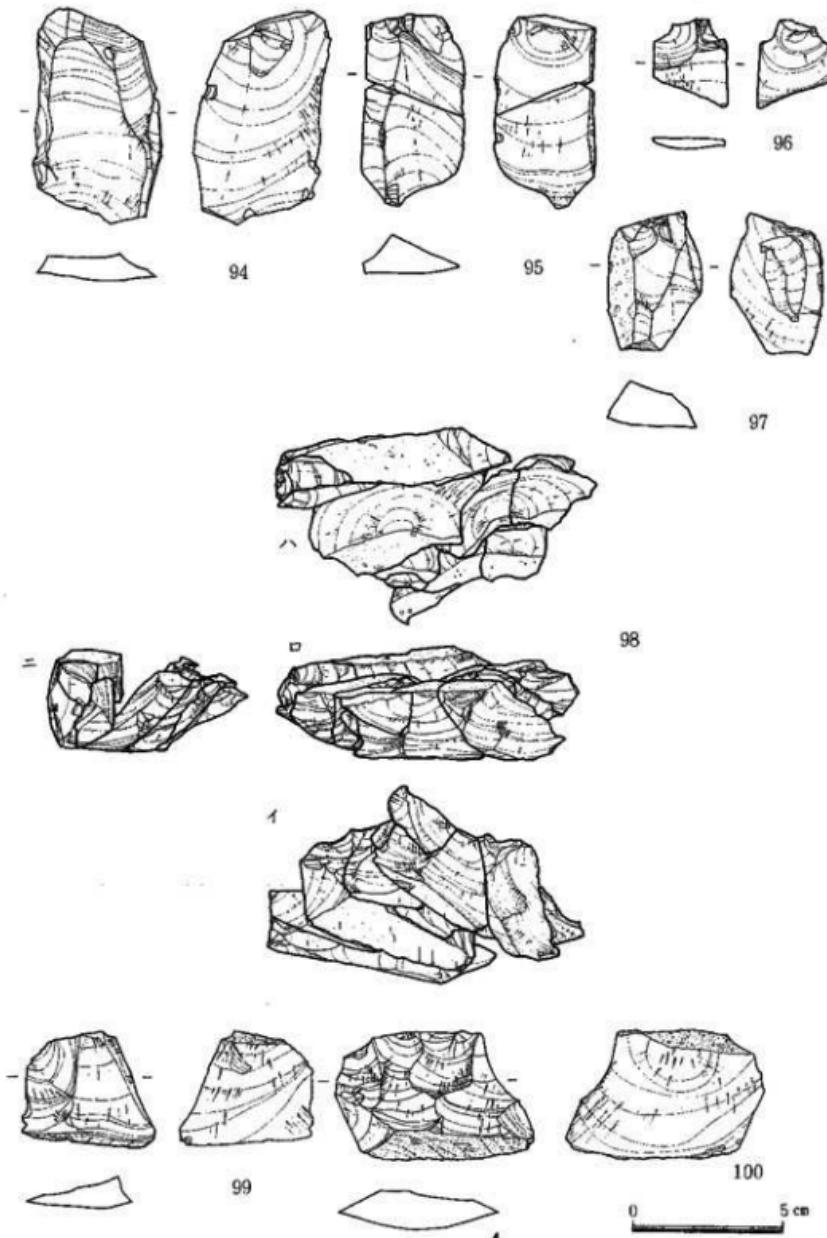


第21圖 資料No. 4 (1/6)



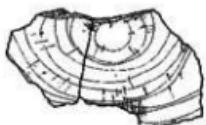


第23図 資料No. 4 (3/6)

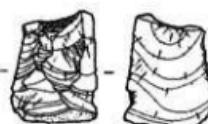


第24図 資料No. 4 (4/6)

第2図 第6章 松木台Ⅲ遺跡



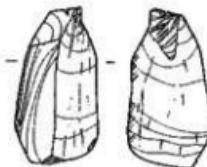
101



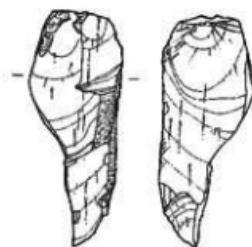
102



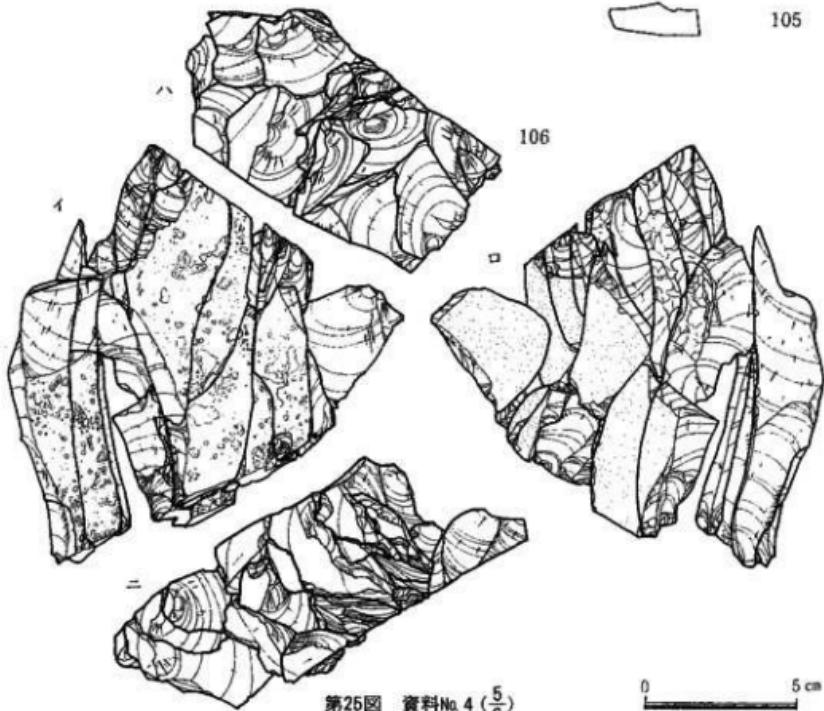
103

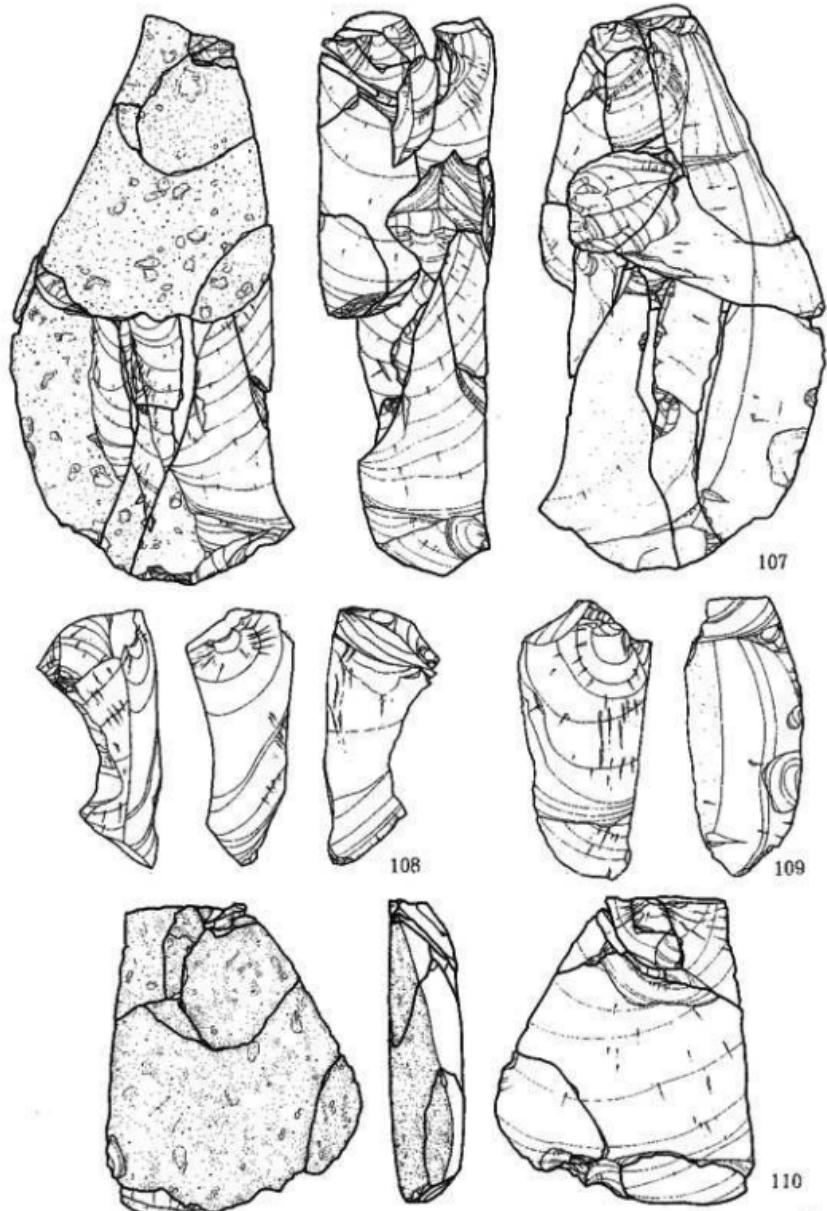


104



105



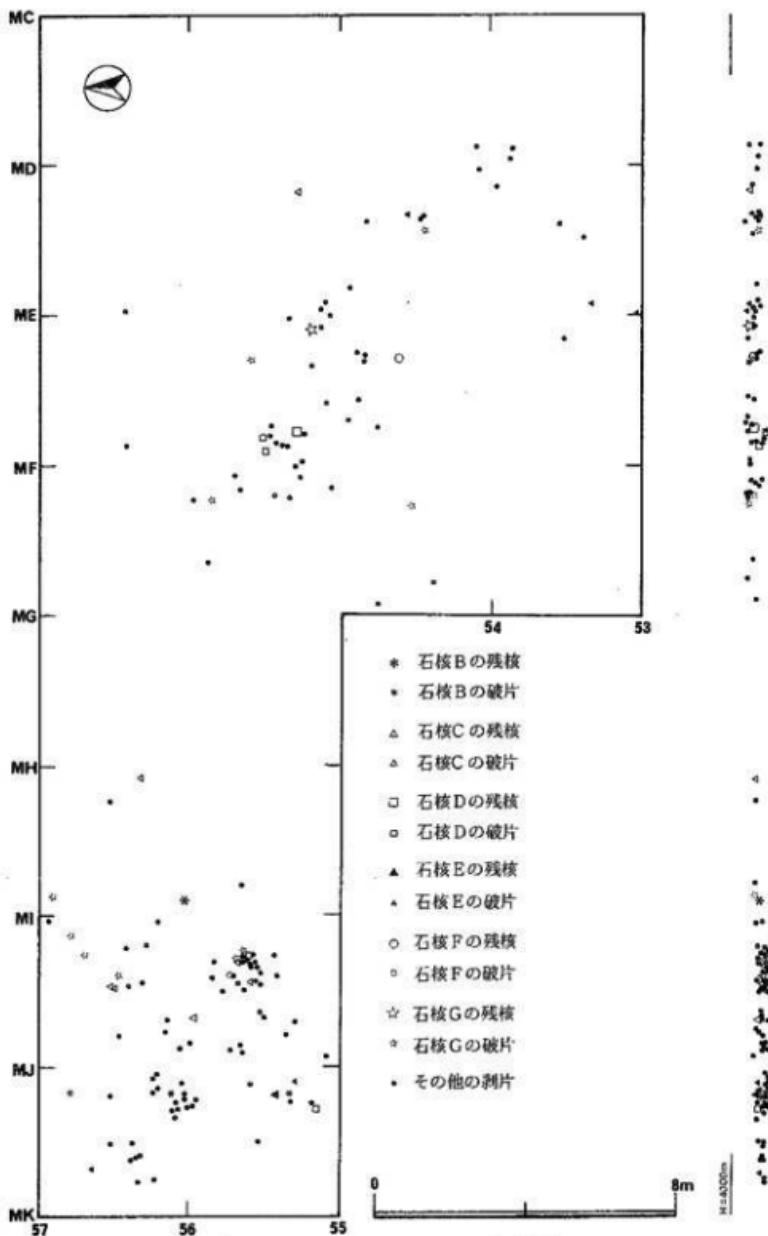


第26図 資料No. 4 ($\frac{6}{6}$)

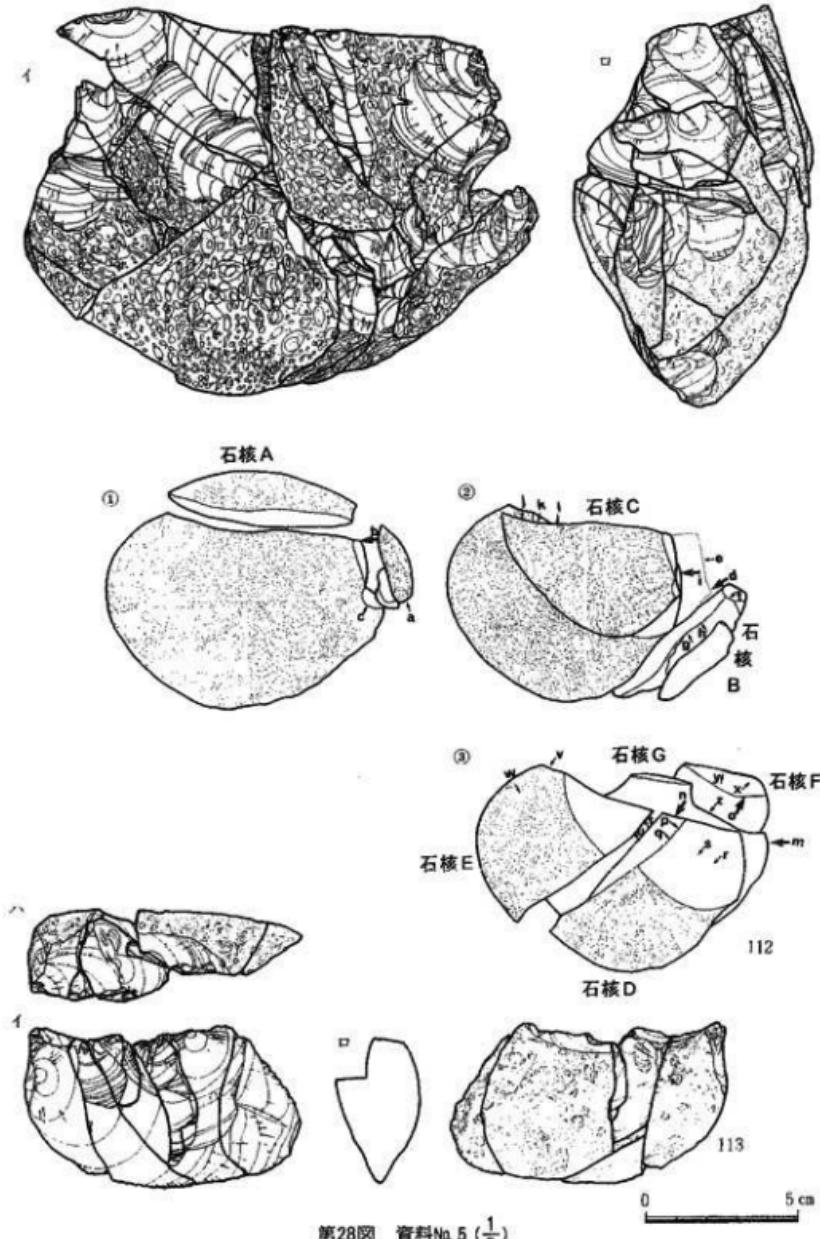
0 5 cm

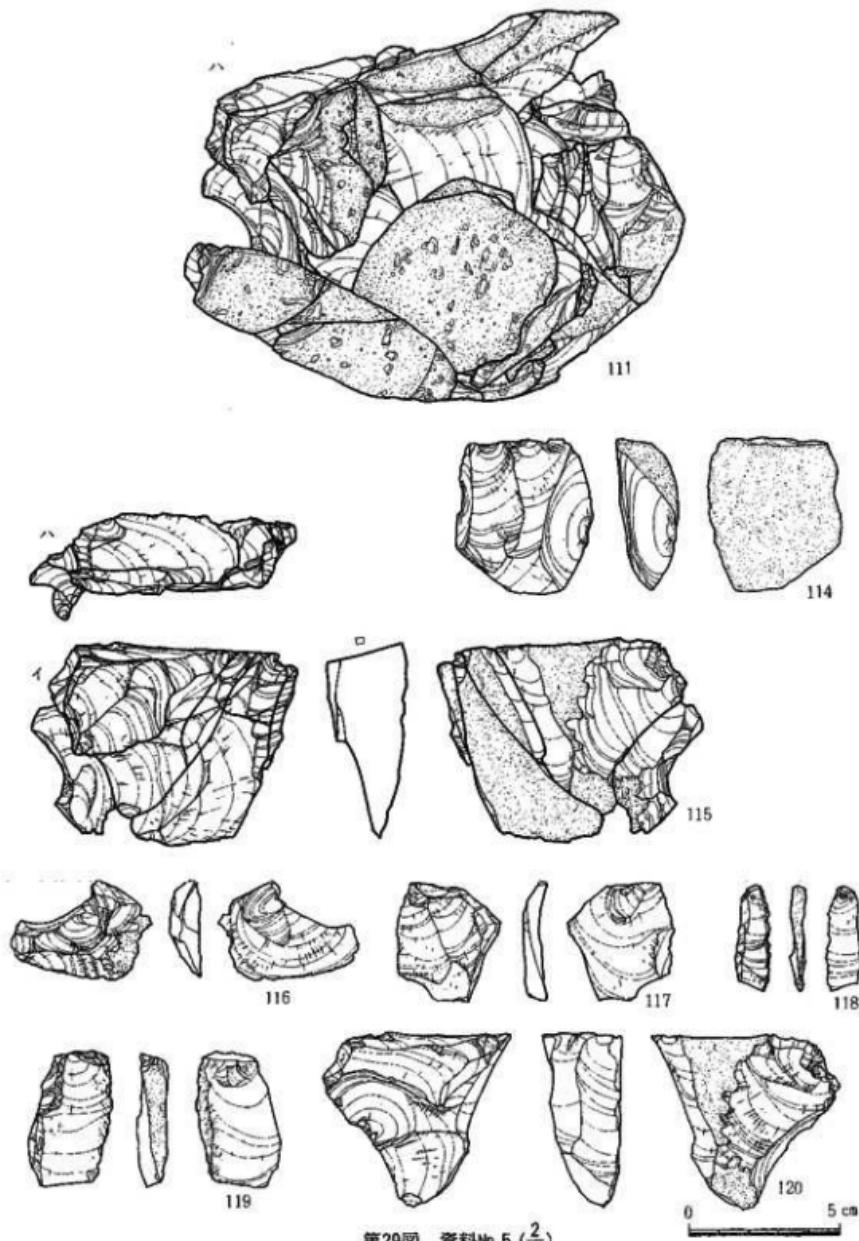
同図86-①・②・③・④は85-ロ側から、⑤、⑥、⑦、⑧は85-イ側から見た分割及び剥片剥離行程模式図である。その行程を復原してみよう。① 扁平な礫の左辺下部からaによって分割し石核Aを得、この分割面を打面としてbによって右辺を分割し石核Bを得る。石核A・Bともに、今回の調査範囲内からはその一部とおぼしき剥片等も検出されておらず、あるいはこの2つの石核は他所に置かれて来たか、他所に持ち去られたものであろう。② 残った母岩を右下隅からcによって2枚に分割する。この母岩にはもともと扁平な礫を2枚に断ち割るような節理面が入っており、この分割後の新しい表面は他の分割面などよりも風化の進度が速いようで現在ではザラザラしている。また、cによって分割された2つの大きなかたまり①・⑩は、それがすぐに石核となることはなく、それぞれがまた細分されて石核にされている。そして、以下の③・④は①の、⑤・⑥・⑦・⑧は⑩の分割行程模式図で⑨～⑩は85-イ側から見ていている。⑨ aによる分割面を打面として下辺から上方にdによって左・右に分割し石核C・Dを得る。石核Cは左辺の上下からe～fなどによって礫皮面が除去される（あるいはこのe・fは石核Cの一方の打面を作るための剥離とすべきかもしれない）。⑩ 石核Cでは、dによる分割面とe・fによる面を上下の打面とする両設打面によって、g～kなどのように剥片剥離が進められる。一方、石核Bは厚さが僅か3cm前後という板状の石核であるが、その右辺から礫皮面を打面にしてl・m・nなどによって横長の剥片が剥離され、最終段階で、o・pのように、aによる分割面と上辺を打面とした両設打面で縦長の剥片が剥取られている。⑪ Ⅱはまず、bによる分割面を打面にq・rによって石核E・F・Gが得られる。⑫ 石核Gでは右下辺からsによって部厚い剥片を剥し（あるいはこれは打面作出とすべきかもしれない）、sを打面としてtなどによって枚数の短小な剥片を剥取る。⑬ sを打面とした剥片剥離作業では良好な剥片が得られなかったのであろうか、その途中でtにより大きく打面を作り出し、これまでの部分は放棄される。そしてtを打面としてvなどによって大きく部厚い剥片が数枚剥離された後、本石核は放棄される。⑭ 石核Fではa・bによる分割面を両設打面としてw・xなどのように縦長の剥片が剥離されている。

第23図87は石核Cの剥片接合図である。87-イにおける下の打面が86のd、上の打面がe・fによる面である。これからもわかるとおり、両設打面は並行する2つの面ではなく、86-イの右側では交わる形であり、その平面形はaによる分割面（86-イでは左側辺）を底辺とする二等辺三角形を呈するように思われる。三角形の頂点側が接合していないので確認できないが、分割および剥片剥離行程模式図の⑨の段階でe・f以外に上方が何らかの形で取り除かれて、全体として三角形あるいは縦長の台形様に仕上げられたものであろう。石核Cが二等辺三角形だとした場合の頂角は約30°と推定される。89～97が石核Cから得られた比較的形の整った縦長剥片（石刃）である。両設打面による剥片剥離であるため、背面に腹面とは逆方向からの剥離

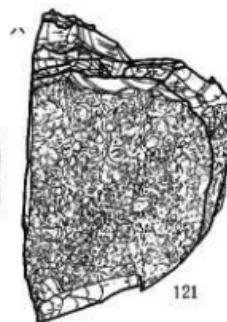


第27図 資料No.5 出土平面・垂直分布図

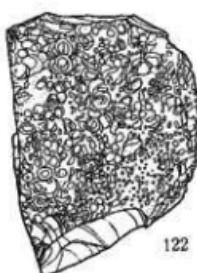
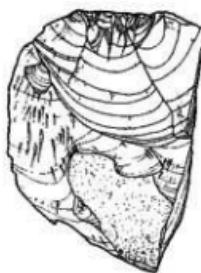




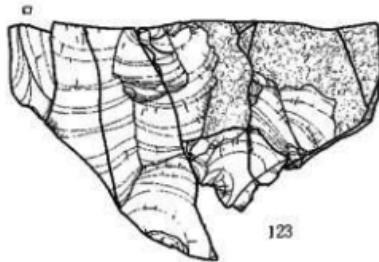
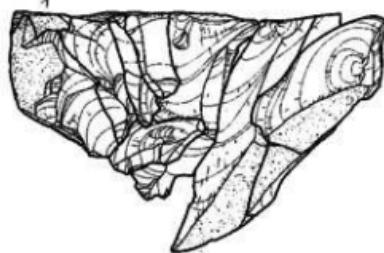
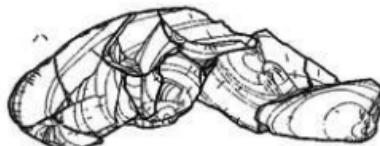
第29図 資料No. 5 (2/5)



121



122



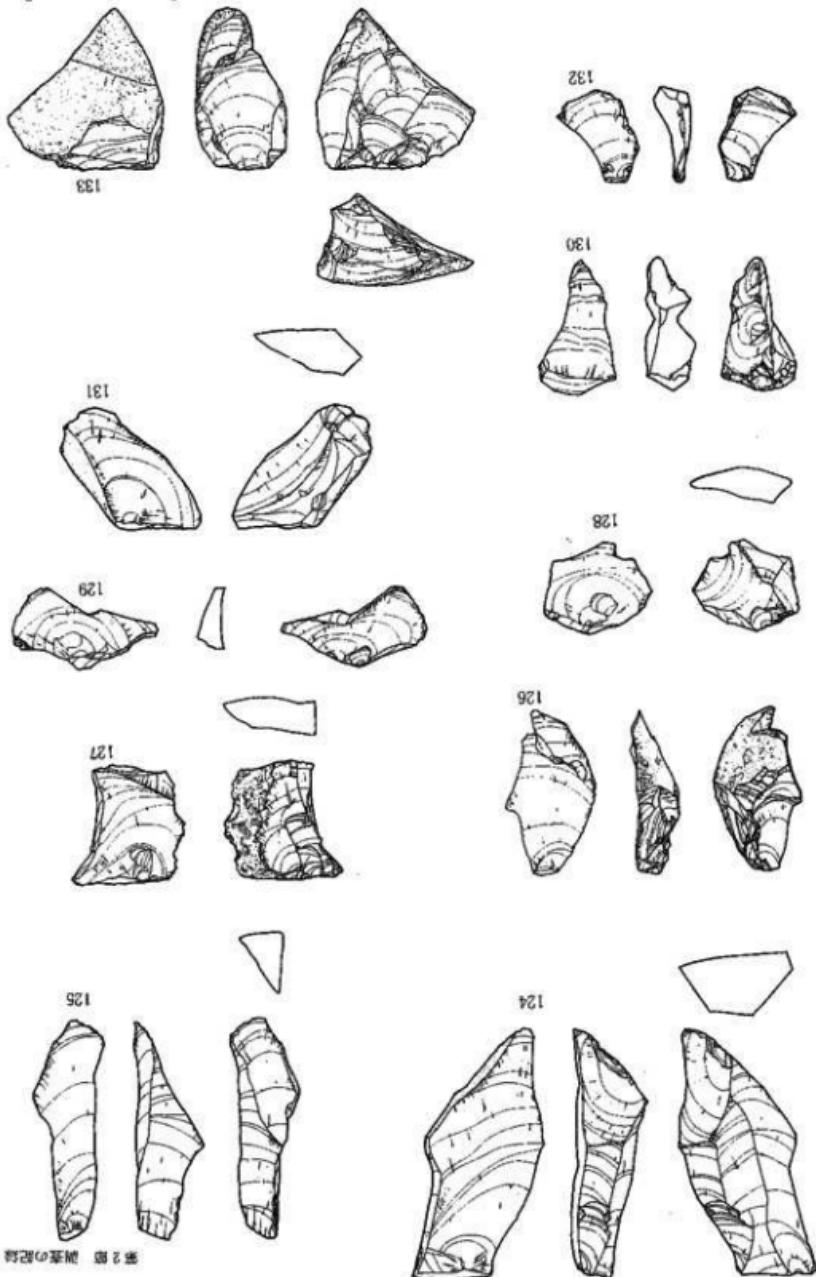
123

第30圖 資料No. 5 ($\frac{3}{5}$)

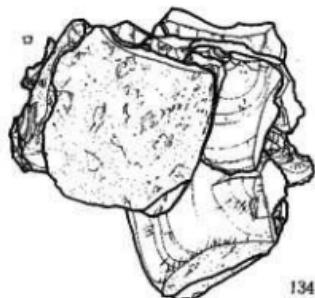
0 5 cm

345
0 5 mm

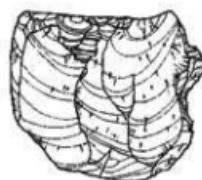
第31圖 資料號 5 (6)



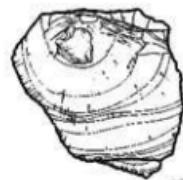
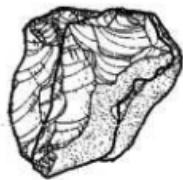
第2圖 開蓋的品種



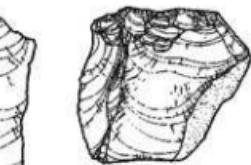
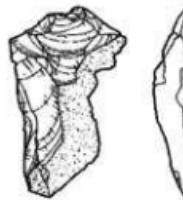
134



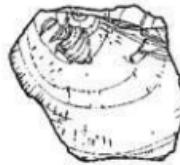
135



136



137



138

第32図 資料No.5 (5/6)

0 5 cm

面が入っている。また、石核Cは厚さ2.5~4.5cm前後の板状で、それを縦割するように剥片離されているため、ほとんどの剥片の側辺には、礫皮面か②のcによる分割面（節理面）が明確な面として背面あるいは腹面と直交するような形で付いている。

第24図98は石核Dの剥片接合図である。98-ロの上面が礫皮面、下辺が86-②cによる分割面（節理面）、左辺が86-③dによる分割面となる。この石核も長さ17cm前後、幅5~6cm、厚さ2~3cmのうすい板状を呈しており、98-ロの手前側（86-①bによる分割面側）がうすい。このような板状の石核のうすい側から、礫皮面を打面として、左右に打点を移動させながら刺身状の横長剥片を剥離し、最終段階で打面を石核の長軸方向の両端に求め両設打面による剥片剥離を行っている。ただし、この両設打面による剥片剥離作業開始前に86-④のp側には何らかの形で新しい打面が形成されていた可能性もある。99~103が得られた横長剥の一部である。下方にはいわゆる底面（この場合は分割面である節理面）が明瞭に面として付いており、その面の腹面とが鋭い線辺を形成している。104は最終段階の両設打面による剥片である。105の腹面のバルブは86-③dによる分割時のもので、これが本石核の残核である。

第25図106は石核Fの剥片接合図である。これによると、この石核は三角錐を輪切りにしたような形で、厚さは5~6cmである。このような形状の石核から剥片剥離を行うに際しては、残核（検出されなかった）側を三角形の頂点とした場合の他の二辺を打面にして底辺側から開始している。106-イの左辺が86-⑤r、右上辺が86-①a、右下辺が86-①bによる分割面である。得られた剥片は縦長のものが多いが、石核の形の上からの規制で長さ11cm~3cm前後のものまでバラエティーに富む。また、側辺の一方には礫皮面か分割面を残すものが多く、この面と背面あるいは腹面とは、直角に近い角度をなす。従って部厚い剥片も多い。石核を残核側を頂点として平面的に見た場合の頂角は60°~65°である。

第26図107は石核Eと石核Gの接合図である。108は第22図86-⑦uで最初に放棄された石核Gの残核、109は最終的な石核Gの残核。110は石核Eの残核と剥片の接合図であり、剥片は石核の上下部から礫皮面を打面して剥離されており、形状も整ったものは少ない。このため、本石核においては剥片剥離ではなく、あるいはショッパー状の石器を作るためのものであった可能性もある。

以上、資料No.4の母岩の分割から各石核における剥片剥離技術について説明した。この結果、本資料では両設打面による石刃技法と、石核Dに見られるような横長剥片を得ることを目的とした技術が同居しているといえる。

本資料から得られた剥片を素材とする定形的な石器は第7図3のナイフ形石器、第13図47、14図56、15図64の櫛器がある。

資料No.5 (第27・28・29・30・31・32図、図版19・20・21・22)

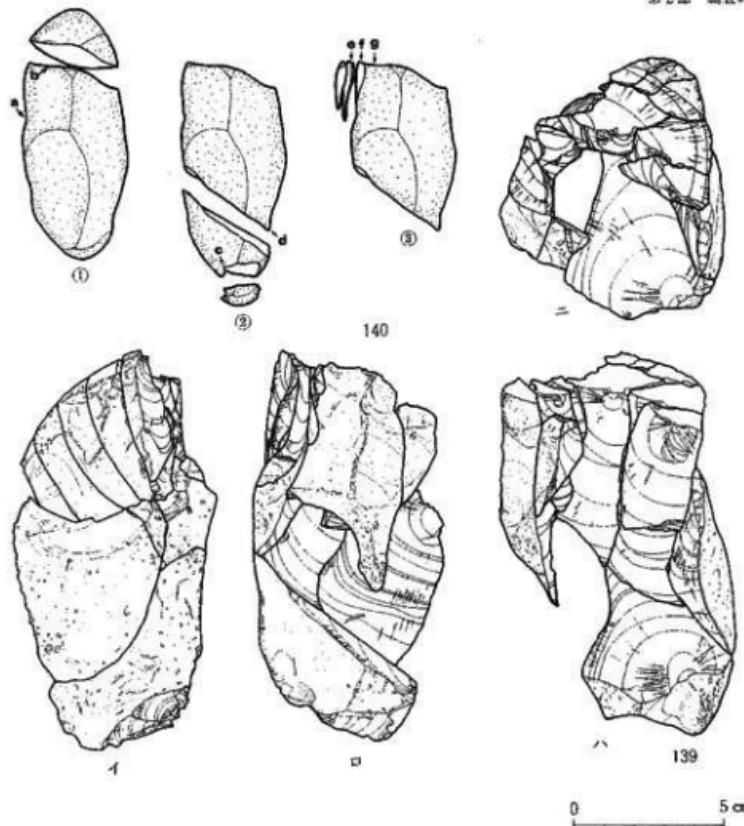
合計53点の剥片と6点の残核が接合した資料で、この他にも接合しなかったのが約30点の剥片がある。

第27図は本資料の剥片・石核の平面及び垂直分布図である。この中の各マークは石核B～Gに対応し、同種のマークのうち大きいものは残核を示す。その他の剥片としたのは、接合しなかったが本資料と母岩を同じくする剥片である。これで見るとおり、本資料はB区(MHより下半)にやや集中する傾向のあるものの、A区(MGより上半)でもほぼまんべんなく検出されていることがわかる。また、これを石核別にみると、石核EはB区にしか存在しないが、他の石核ではこれがA・B両区から出土している。

第28・29図111一イ・ロ・ハが本資料の最終接合図である。これから推定される母岩の大きさと形は、最大長18.5cm、最大幅14.5cm、最大厚8cm、横断面形が凸レンズ状を呈する丸味のある礫である。このような母岩となる礫を幾度かの分割によって合計7つの石核にしているが、第28図112-①・②・③が行程模式図である。この図は111-イ側から見たもので、以下、その行程を見てみよう。① 右端の突出部をaによって除き、これを打面に上部をbによって分割する。このbによって分割された上部は、石核Aになったものと思われるが、今回の調査範囲内からは検出されていない。② ①のcによる小さな剥離面を打面として、右上から左斜め下にdによって分割し、石核Bを得る。石核Bではさらにfによって打面を作出し、h・gなどで剥片剥離を行う。石核Bを離した部分では、eなどによって小さな突出部の除去を行い、aによる剥離面を打面にiによって石核Cを分割する。石核Cでは、bによる分割面を打面に左から右方向にj・k・lなどによって剥片剥離作業を行う。③ 残った母岩を右上端からmによって断ち割るように2つに分割する。また後方側ではoによって分割し石核F・Gが得られる。mによって生じた2つのかたまりのうち手前側ではaを打面にしたnで左右に分割し、石核D・Eを得る。その後、石核Dではnによる分割面を打面にp・qなどによって剥片を剥取った後、その剥離面を打面にして(打面を90°転移)r・sなどによって剥片剥離作業を行う。石核Eではnを打面としてt・uなどで剥片の剥取をした後、左端からs・v・wなどによって打面を転移させながら剥片剥離が進められる。一方、後方の石核Fではaを打面としたx・yによって、石核Gでは下辺を除く3辺を打面として剥片剥離作業が行われる。

以上母岩の分割などを行程模式図で示したが、このようにして得られた石核は、その断面形からもわかるとおり、いずれも凸レンズを表裏に二分割した後、さらにそれぞれを4分割したような形状を呈している。

第28図113は石核Bの接合状況を示し、第29図114がその残核である。剥片剥離作業は②-eを打面として進められているが、最後に凹側面からもそれが行われている。



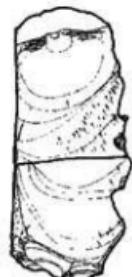
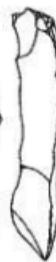
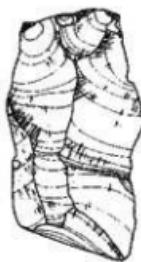
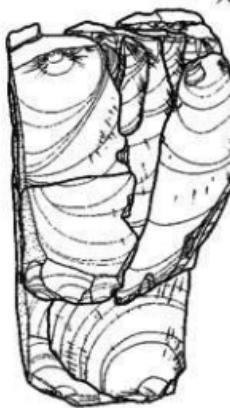
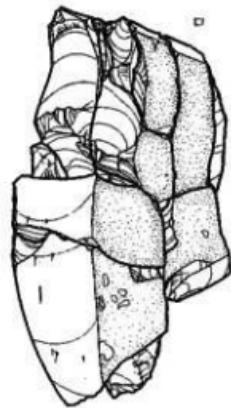
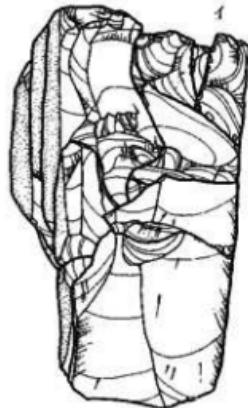
第33図 資料No.11(1/1)

第29図115は石核Cの接合図で、116～119がその中の剥片の一部、120が残核である。115-イの上辺がbによる分割面でこれを剥片剥離作業の主な打面としているが、図のように左右側面への打面の転移が見られる。得られている剥片は、118・119のように縦長のものがあるが、116・117のように不定形あるいは横長のものの方が多い。

第30図121は石核Dの接合状況図で、イの右側面がnによる分割面である。122はその残核。

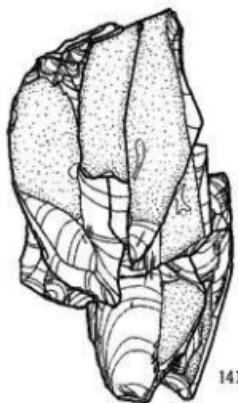
第30図123は石核Eの接合状況図で、124～132はその剥片、123が残核である。剥片の中には124～127のように縦長のものもあるが、総じて厚手でゴロゴロした形の不定形のものが多い。

第32図134は石核Gの、136は石核Fの接合状況図で、135は石核Gの、138は石核Fの残

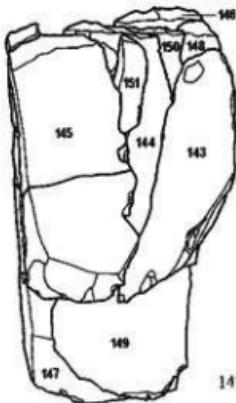


0 5 cm

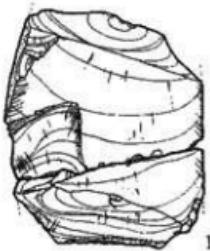
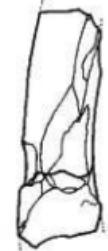
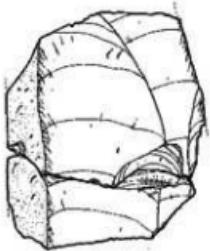
第34図 資料No.7 (1/2)



141



142



147



148



149



149



151

第35図 資料No. 7 ($\frac{2}{2}$)



核である。

以上、資料No.5における、母岩から石核を作出するための分割、各石核における剥片剥離作業を説明した。これによって得られた剥片は縦長のものも散見されるものの、大部分はいわゆる不定形剥片であり、本資料における剥片剥離技術は石刃技法とは異なる技法であるとすることができる。

これだけ多くの剥片が得られているにもかかわらず、本資料から得られた剥片を素材とする定形的な石器は、第14図58の搔器1点しか検出されていない。

資料No.11（第33図、図版22）

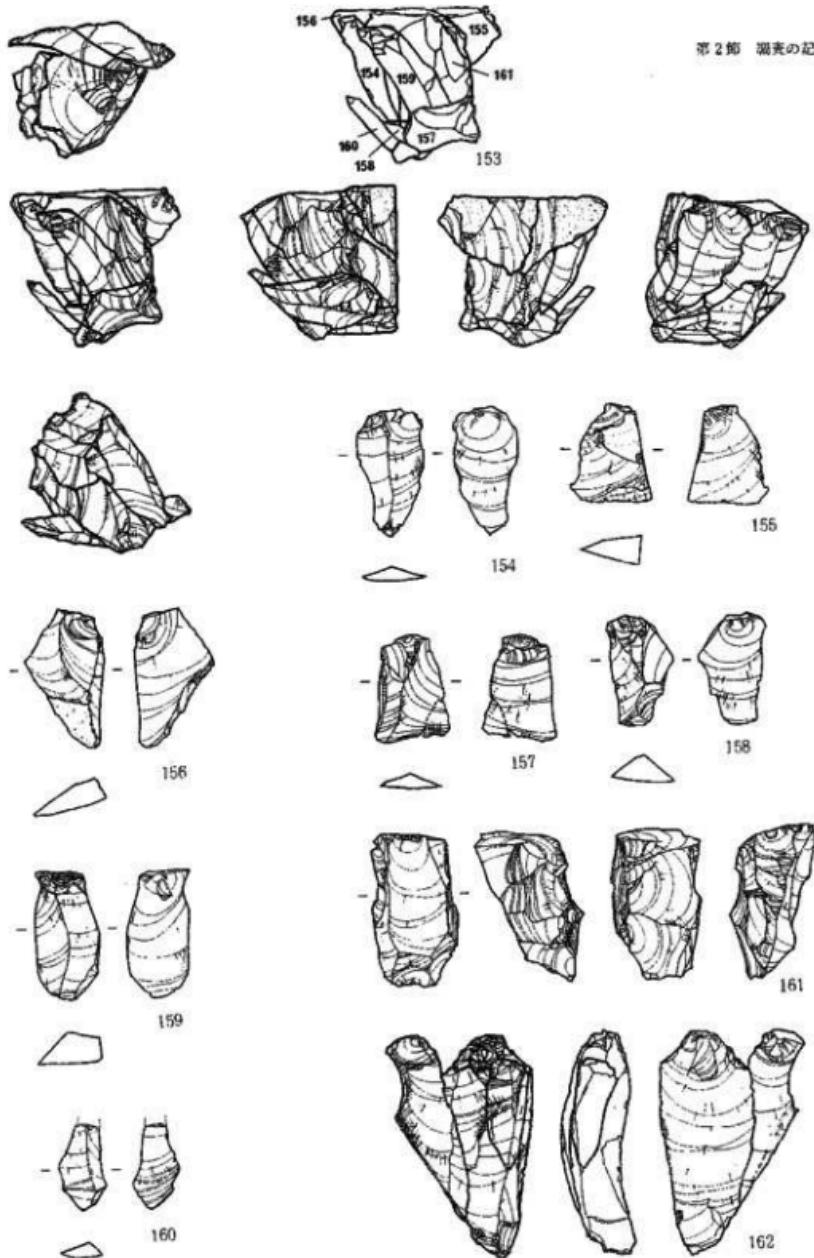
第33図19が、No.11の最終接合図である。これによって推定できる本母岩の大きさと形は、最大長約15cm、最大幅・厚とも約7cmの細長いやや角のある円錐となる。礫皮面には風化の進んでいる部分と、そうでない部分があり、後者では、本母岩のような形になる前に他の礫などとぶつかってできた剥離面のリング等がよくわかるところもある。

140-①・②・③は、139-ロ側から見た本母岩の分割から剥片剥離の行程を模式的に表したものである。① まず、裏面左側にある突出部をaによって除き、bで上部に打面を作出する。② 次に、cで下端を除こうとしたが、2回以上の打撃でもうまく行かなかったのであろうか。結局dによって下半を除去して、高さ7~9cm、打面径5~7cmの円錐状の石核としている。③ このような形状の石核からbを打面として、d・e・fなどによって剥片剥離作業を進めることの順序は、140-③の右端を手前に置き、その反対側（140-③の左側）から、時計回りを4分の1周づつくり返すようにして行われている。これで得られている剥片は縦長のものであるが、残存するのは礫皮面の付いた剥片ばかりで、石核中央部から剥離された剥片と残核は検出されなかった。

以上からわかるとおり、本資料での剥片剥離技術は、単設打面の石刃技法であるといえる。なお、石刃技法ではあっても、打面調整、棱形成のための作業面調整などの諸調整技術は介在しない。

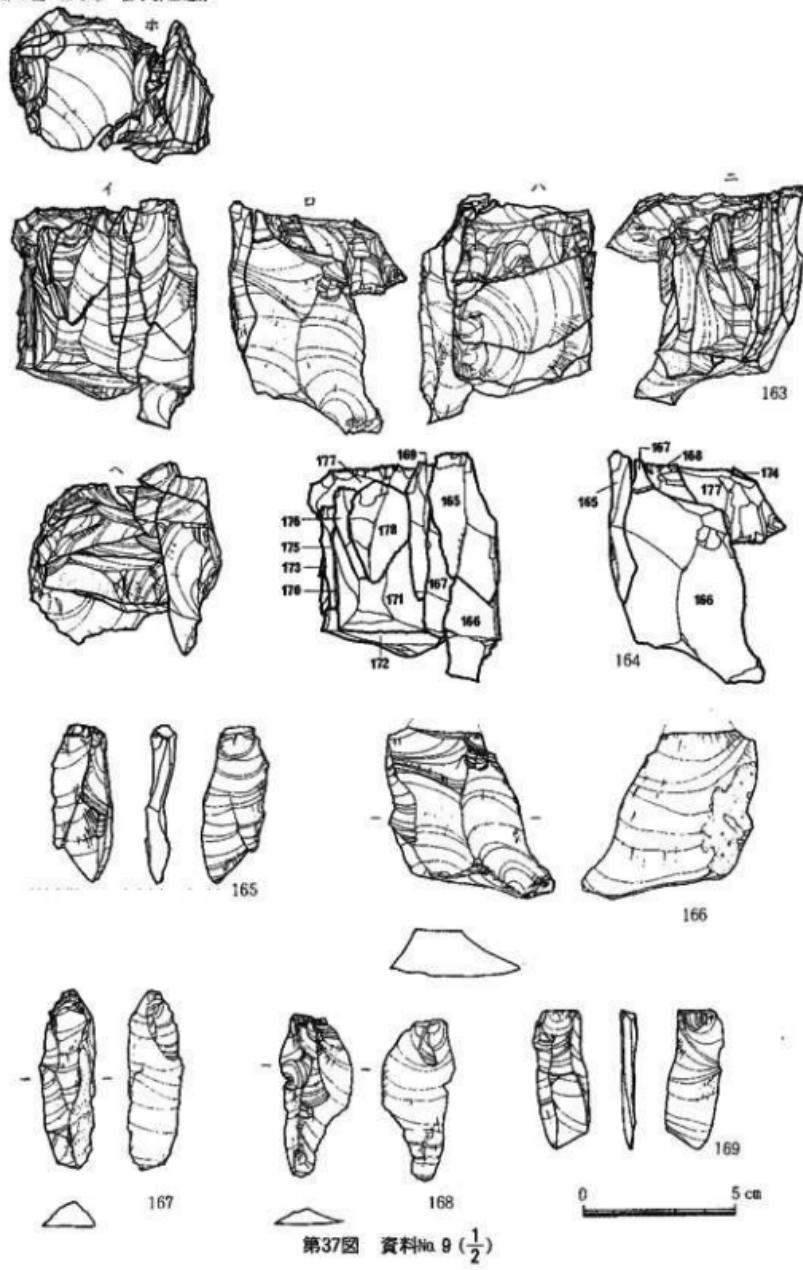
資料No.7（第34・35図、図版23・24）

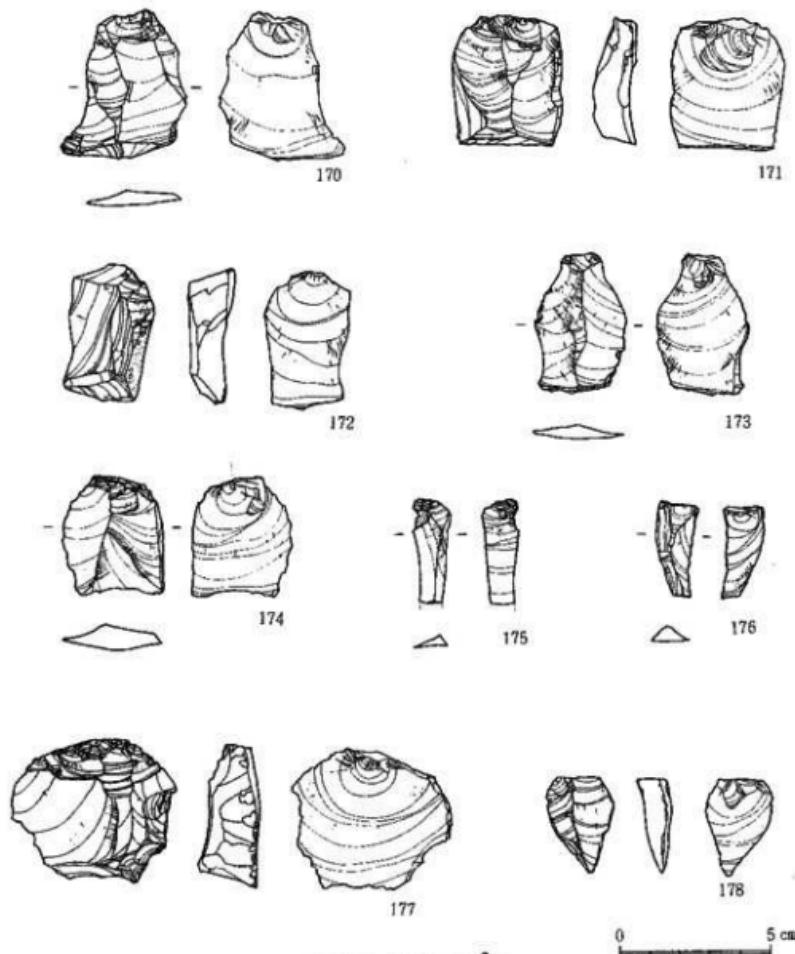
第34・35図、141-イ・ロ・ハ・ニが最終接合図であり、1つの石核の部分をなす。この石核は、両設打面を持ち、長さ（高さ）約12cm、長さ約7cmの（幅は不明で残核は検出されていない）板状を呈するものである。2つの打面は141-ロの上・下面にあるが、やはり並行せず約40°~45°で交わるようで、141-ロ側から見た場合の平面形は三角形を呈する。三角形の頂点を2つの打面が交わる側にすると、剥片剥離作業は底辺側から開始されることになる。



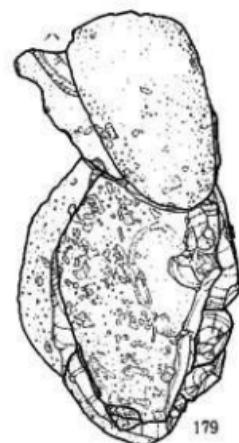
第36図 資料No.12(1/1)

0 5 cm



第38図 資料No. 9 ($\frac{2}{2}$)

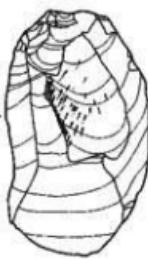
この石核から得られている剥片の主なものは143～151に示したが、石核の高さが約12cmあるのに対し、長さが8～9cm、3.5～4.5cmくらいの縦長剥片が多い。これは各剥片の末端がヒンジフラクチャーで終わるものが多く、剥離が反対の打面側まで達する例が見受けられないことに起因するようである。その末端には腹面の剥離方向とは逆の、しかもヒンジフラクチャで終わる剥離面の入っているものが大多数で、縦長剥片とはいえ、形の整ったものは少ない。また、剥片の両側辺も整った石刀のように鋭利な縁辺が両側にあるというものはまれ



179



180



181



182



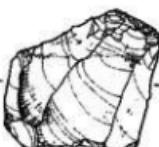
183



184



185



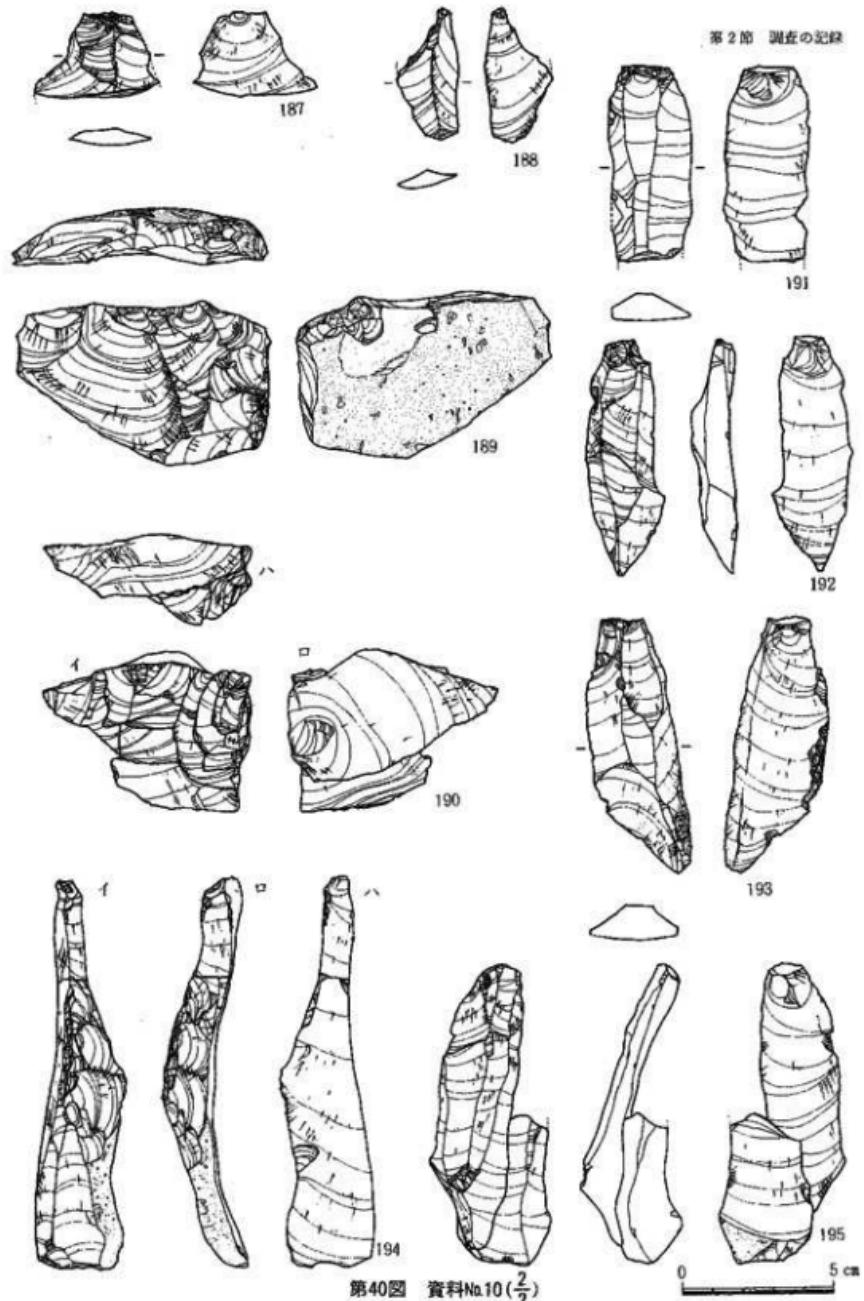
186

0

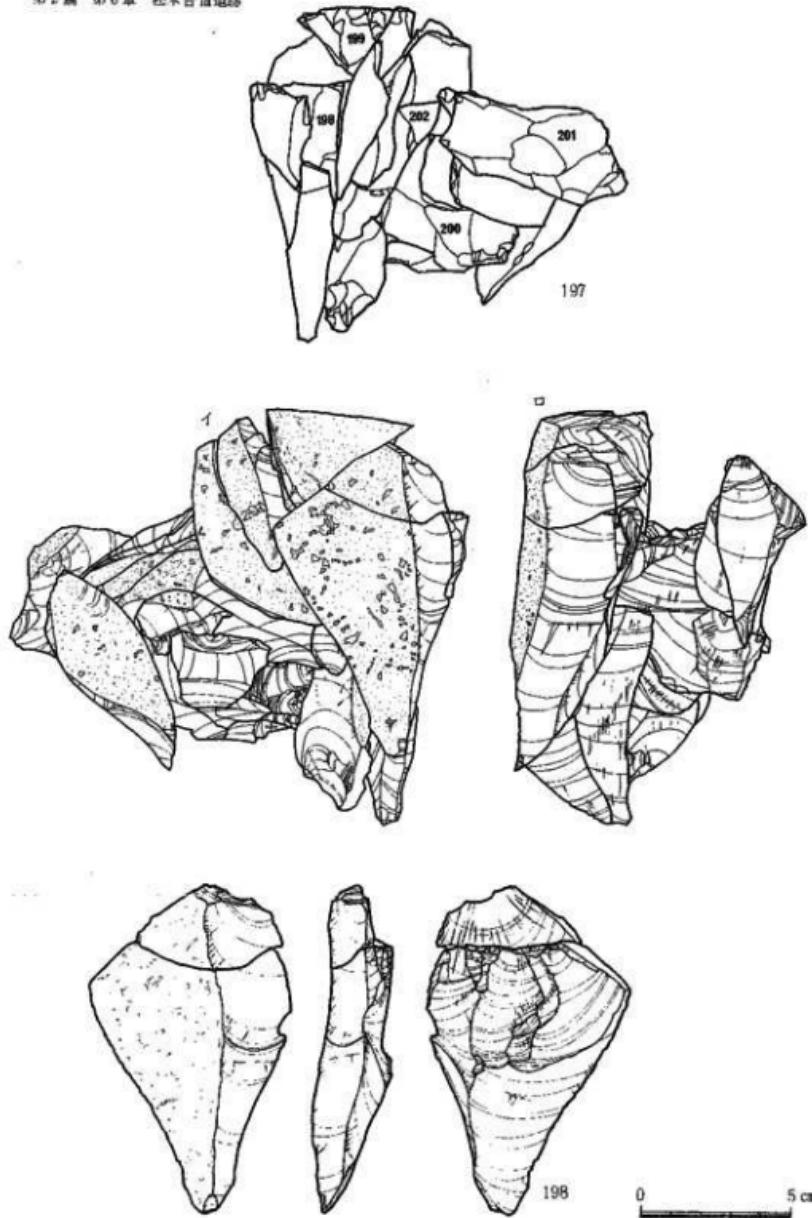
5 cm

第39図 資料No.10(1/2)

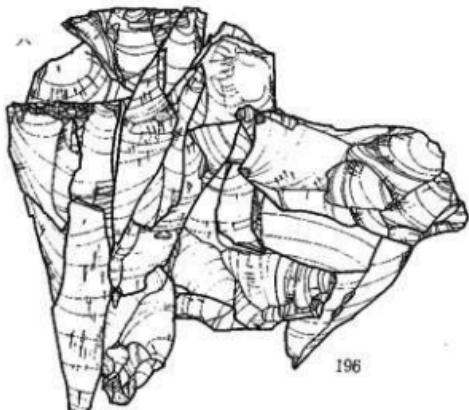
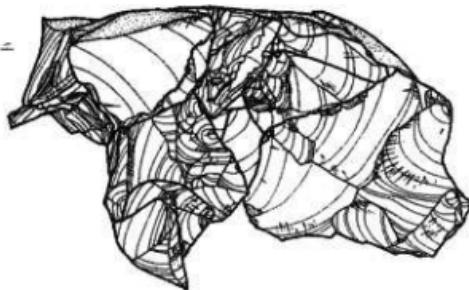
第2節 調査の記録



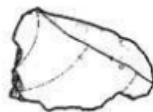
第40図 資料No.10 (2/2)



第41図 資料No. 2 ($\frac{1}{3}$)



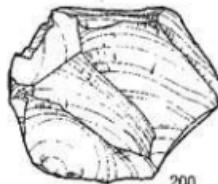
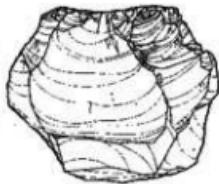
196



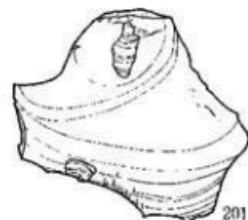
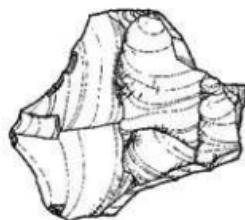
199



200



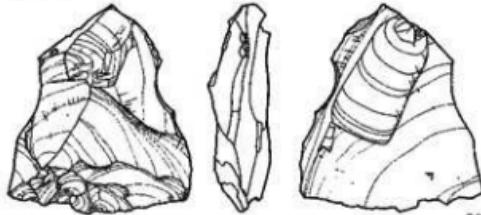
200



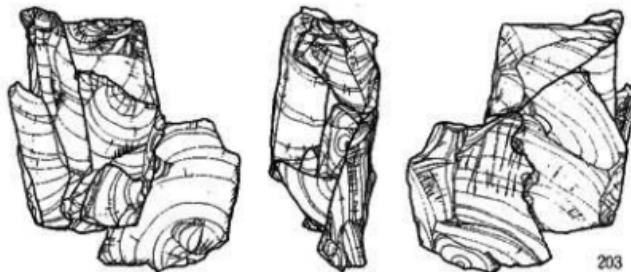
201

第42図 資料No. 2 ($\frac{2}{3}$)





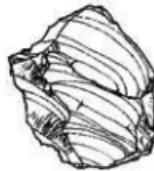
202



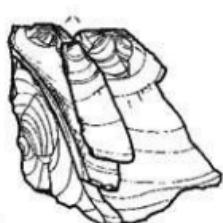
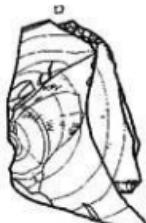
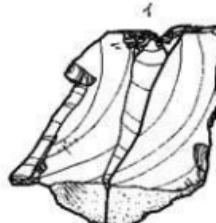
203



204



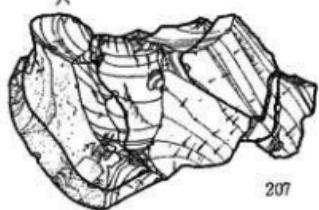
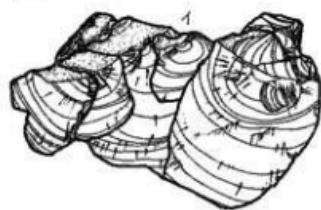
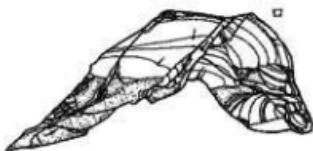
205



0 5 cm

第43図 資料No. 2 (3/3)

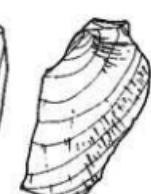
206



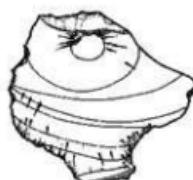
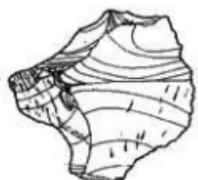
207



208



209



210



211



212

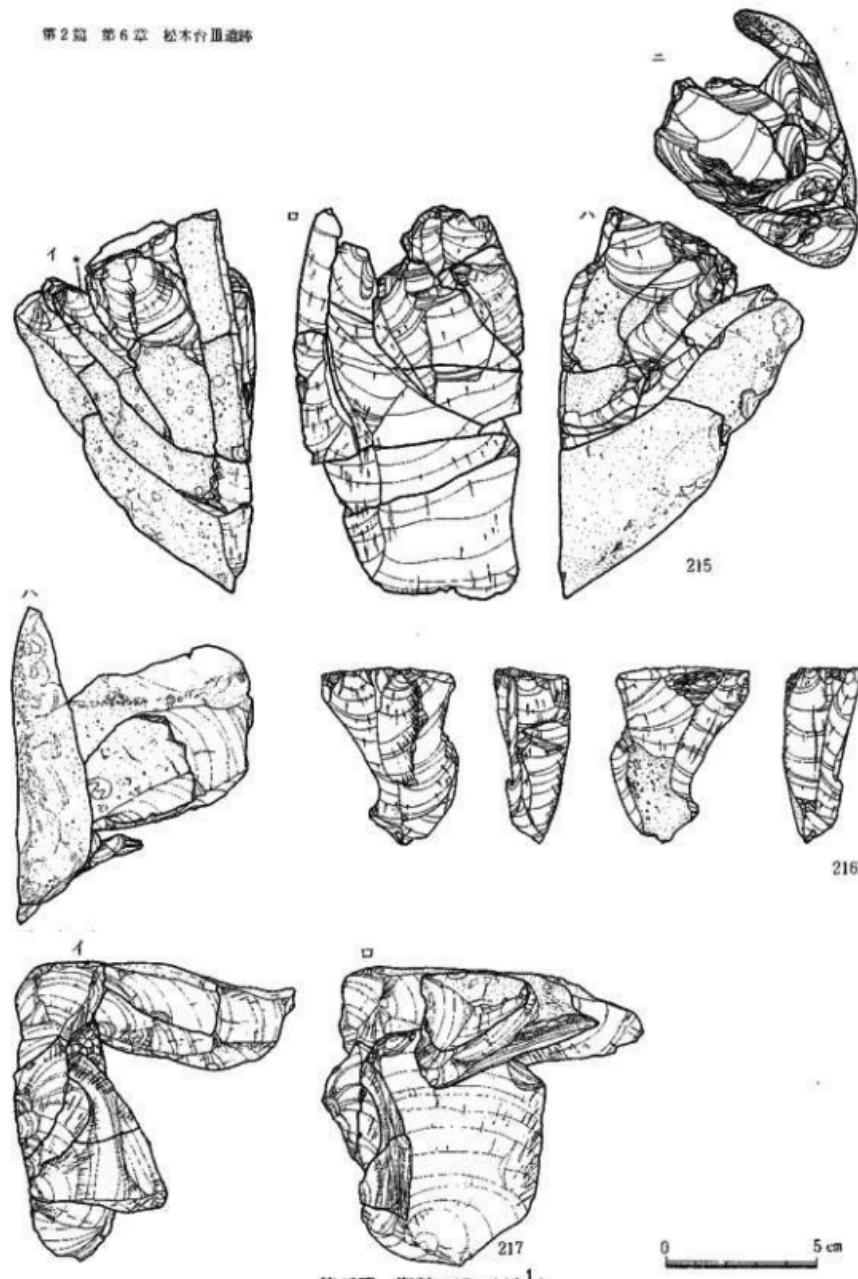
213



214



第44図 資料No. 8 (1/1)



第45図 資料No.15・14(1)

で、片側には面をなす疊皮面付きのものが多い。分厚い剥片では切断されているものが目につくが、それらの一部は何かの素材となったのであろうか。調査区内からは検出されなかった。

資料No.7では得られている剥片に多少問題はあるものの、両面打面を持つ石刃技法によって剥片剥離作業が行なわれているとすることができよう。

資料No.12（第36図、図版23・24）

第36図152-イ・ロ・ハ・ニ・ホへが本資料の最終接合図で、1つの石核の剥片剥離状況を示す。また、同図162も152とは接合しないものの、同じ石核から剥離された剥片の接合状況図である。152-イの上面が本石核の主な打面と考えられるが、152-ロ・ホへなどからわかるように、特に打面を限定せず、約90°づつの転移が行われていることを示す。また、162のように、152の高さよりも長い縦長剥片が存在することから、この石核では打面の再成が少なくとも1回以上行われ、162に示した各剥片は152のような形になる前に剥離されたものとすることができる。153は、154～160の各剥片が152との部分のものか番号で示している。161は残核で、上面が本石核の主な打面であり再生された後のものである。全体の形は角柱状を呈し、数面が打面及び作業面になったことが明らかである。

得られている剥片は、162のように、打面再生前のものでは長さが7cmを越える形の整った石刃状のものも見られるが、打面再生後では長さが3～4cm、長幅指数150～200の小さくずんぐりした縦長剥片だけである。

本接合資料に見られるような剥片剥離技術をどのように呼ぶべきか確信はなく石刃技法と、これとは全く異なる不定形剥片を剥離する技術の中間的なものとして把えておく。

資料No.9（第37・38図、図版25・26）

最終的には第37図163-イ・ロ・ハ・ニ・ホへのような大きさにしか接合できなかつたが、本資料と同じ母岩から剥離された剥片はこの他にも多く、その中には大型のものもある。163からわかるようにこの石核においても、前述の資料No.12と同様に、しばしば打面の転移や再生が行われている。ただしその場合も石核そのものは平坦な面を数面持つ角柱状のもので、それらの面が打面及び作業面となっている。

165～177が163のように接合した個々の剥片で（一部細片を除く）、164がその位置を示す。178は163-ハの上部に見える打面再生剥片で、搔器IV類（第13図51）に転用されている。残核は検出されているが、163には接合しなかつた。166を除く大部分の剥片は、石核の大きさに規制され長さが4～6cmの間にある。165・167～169などのように比較的整った形状の小型の縦長片と、170～174のような幅広の剥片が生産されている。

本資料は、資料No.12よりも大きな母岩で、図に示した接合資料の石核もNo.12のそれよりはかなり大きなものであったと思われる。剥片剥離術は、やはり資料No.12と同様と考えられる。同一の母岩から得られた比較的多くの縦長剥片及び不定形剥片がナイフ形石器や搔器の素材となっている。ナイフ形石器には第7図6、8図9・11、9図19があり、搔器としては第11図32・34、12図45、13図51・53・54が検出されている。

資料No.10（第39・40、図版25・26）

比較的大きな母岩であったと思われるが、第39図—179、第40図—190・195のような資料しか得られなかった。180～188（この他に翻片はあるが個々には図示していない）の剥片と残核189、それに打面作出のための剥片2点が接合したのが179—イ・ロ・ハである。179—イ・ロ・ハの上部に見える躰皮面付きの2点の剥片は、その下に接合している石核の打面作出剥片で、ロの正面に見える剥離面から、この打面作出の際の打面が既に用意されていたことを示している。さらにその打面はその状況からすると、かなり大規模な剥離面であり、最大長15cm以上はあったと考えられる母岩の分割面である可能性が強い。つまり、この母岩がどのくらいの大きさか、それがいくつに分割されたのかは不明であるが、179に示した接合図は分割後の1つの石核の状況を表している。この石核の打面は、母岩の分割面を打面として3回の剥離で用意され、作業はこの用意された面を打面として、縦長剥片を剥離したものである。180・181・183・185・186・188などはこの作業の最終段階に剥離された剥片で、その後、打面を179—ロの左側に転移させている。この打面の90°転移前には、これまでの作業面側から新たな打面の作出が行われている。その後、これを打面として、182・184・187などのようすづまりの剥片が得られているが187を最後に剥片剥離作業は中止され、189の残核が捨てられた。

190は4点の剥片が接合した図である。190—イの上面が打面となって末端がヒンジフラクチャードで終わるすづまりの剥片を10枚前後剥離した後（本図では2枚しか接合していない）、同じ打面から比較的大きな不定形の剥片を剥取り、さらに打面を右側面に90°転移して大きな剥片を剥離している。194は分割後の大きな石核から初期の段階に剥離された長い剥片である。194—イの左側面は分割面で右下には躰皮面が付いており、下端からはこの剥片の剥離された方向とは逆方向からの剥離面が4枚見える。この剥片が剥離された石核は、192・193などから、両設打面を持つものであったと推察される。また、194—イ・ロの中位には稜形成のための調整痕とも見ることのできる剥離面があるが、資料No.1のように稜形成のための調整とは異なる同様の例もあり、即断はできない。この他資料No.10と同一母岩から得られた縦長剥片の代表的なもので191～195などがある。石核から連続的に剥離された石刀と見ることができよう。

以上、資料No.10について説明してきたが、これによって本資料における剥片剥離技術は、単設

あるいは両設打面を持つ石核から石刃状の縦長剥片を連続的に剥離するが、時には 90° の打面転移も行うものであるとすることができる。

資料No10から得られた剥片を素材とする定形的な石器としては第8図13、9図14、10図26・27・30のナイフ形石器や、第12図44、13図52の搔器が検出されている。

資料No 2 (第41・42・43図、図版28・29)

第41・42図の196—イ・ロ・ハ・ニ、第43図の203・204がこれである。全て同一母岩のものであり、この他に同一母岩のものと思われる剥片は多いが、接合しない。(残核も196のような形状のものが2点ある。)

最も多くの剥片などが接合したのが196である。しかしこれでも疎皮面は少なく、本資料の母岩は相当の大きさであったと推定される。この196には、4点の残核と2点の打面再生剥片、それに2点の剥片が接合した。残核は198・200・202(198の上部には打面再生剥片が1点接合している)で、199は198の打面再生剥片である。残核と打面再生剥片の196の中における場所は197に示した。母岩からの石核の分割に際しては、時には疎皮面を、時には分割面を打面にした分割をくり返しており、これを順序立てて説明することはできない。また、分割された石核個々の打面も一定の場所に停っていないものが多く、不定方向からの剥片剥離が目立ち、打面再生も行われている。そして得られた剥片も196の中では形状の整ったものは少なく、バラエティーに富んだ不定形剥片という表現があたっている。

203は残核(205)に1つの打面再生剥片(204)と4点の剥片が接合した例である。203—イの右下端及び中央下部の不定形剥片が剥離された後、左側の2点の石刃状剥片が剥取られ、上部で打面再生が行われている。204がその打面再生剥片、205が残核である。

206は2点の幅広がりで部厚い剥片と、2点の整った縦長剥片が接合した図である。これによって接合できる剥片剥離行程は以下のようになる。石核から、分割面を打面として、3点の剥片(1点は206—イの中央部の間部分で、接合するが検出されなかった)が剥離された後、搔器Ⅲ類に仕上げられた縦長剥片(第12図39)が剥取られ、さらに206—ハの中央部に見える小型の縦長剥片の左側で1点の剥片を剥離し、打面を再生している。再生された打面は、前の打面の約7mm下であり、この後に前述の小型縦長剥片が剥離したことになる。

この他の接合しなかった剥片には、比較的形の整った石刃状の縦長剥片も数点あるが本資料における剥片剥離技術からは、主に不定形剥片が獲得されているといえる。このことは搔器が196の中に5点(第12図41・46、第14図55・58、第15図63)、203の中に1点(第13図49)、206の中に1点(第12図39)、その他同一母岩から剥離された剥片を素材としたものに3点(第11図36、第12図43、第13図50)の計10点もあり、彫刻刀形石器も206の中に1点(第15図67)あ

るにもかかわらず、ナイフ形石器の素材となったものが1点（第10図23）しか検出されていないこととも符号するのかもしれない。

資料No.8（第44図）

同一母岩から剥離されたと思われる剥片も多いが、最終的に接合したものの代表的なものが第44図207である。打面は単設で風化の進んでいない礫皮面をそれにてていている。この打面の中に、207一ロに見えるように一部に打面調整のような剥離面も見られるが、定かではなく、全体としては打面の作出も母岩の分割も行われないままに、不定形剥片を剥離したもののように看取される。208～214がその剥片で、残核は検出されなかった。

資料No.15（第45図215・216、図版30）

本資料は母岩から分離された1個の石核で、あるいは資料No.10かNo.4の一部かとも思われたが、うまく接合せずNo.15として独立させた。第45図215一ロの下半に母岩からの分割面が見える。打面はやはり分割面と思われる平坦な面で、平面形は三角形を呈し、その頂点側から底辺方向に単設打面による剥片剥離を連続して行っている。216がその残核である。

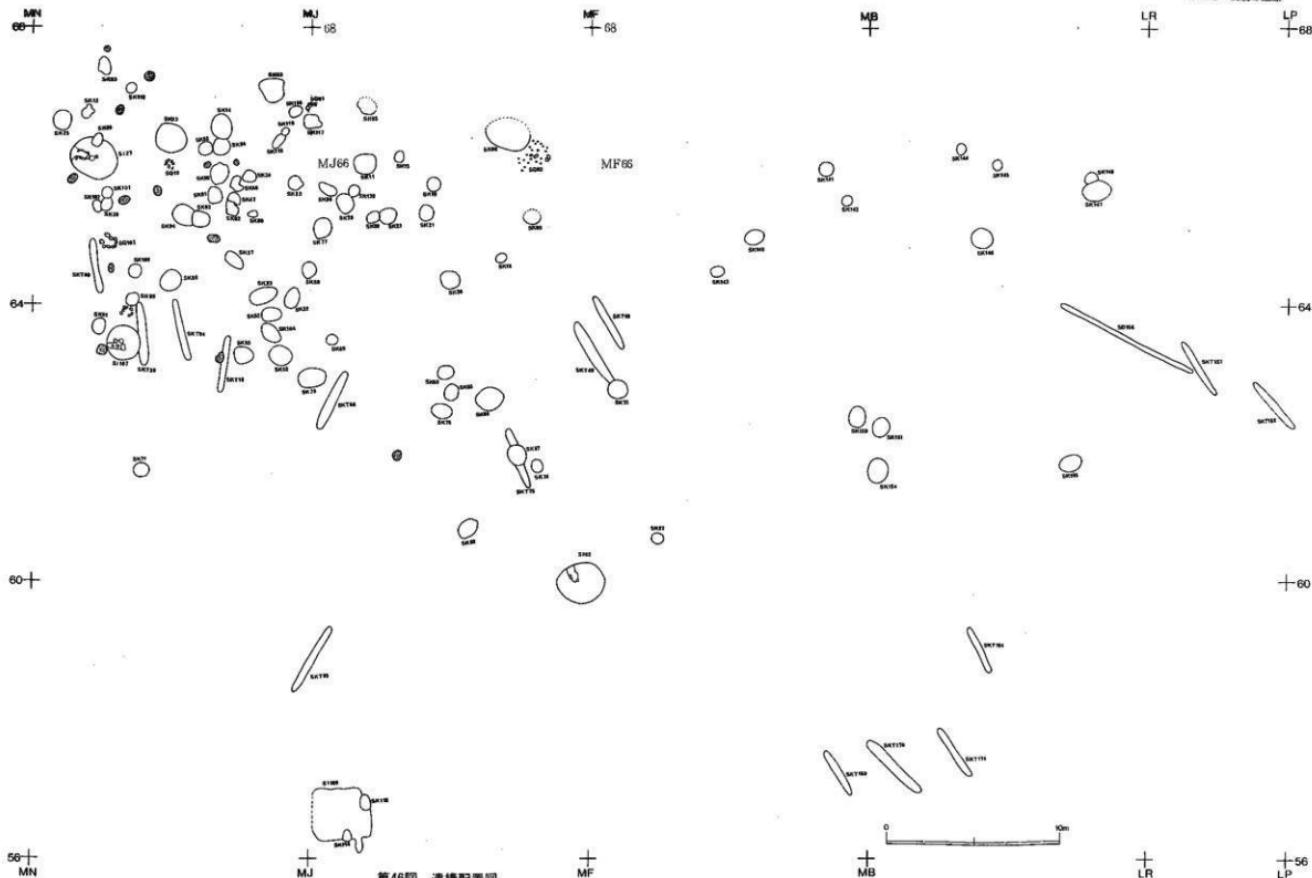
本資料における剥片剥離技術は単設打面による石刃技法であったといえる。

得られている剥片は比較的厚手の縫長のものであるが、中に1点ナイフ形石器（第8図10）にされたものがあり、215一ハの★印の剥片がそれである。

資料No.14（第45図217、図版30）

本資料では、第45図217に接合した以外に、同一母岩から得られたと思われる剥片は少ない。217からわかる剥片剥離の行程は、打面が頻繁に変えられているということである。1つの剥片の剥離面が次の打面になることもあり、打面の転移がこれまで説明してきたどの資料よりも激しい。ただし、剥片剥離作業1回毎に変わるものではなく、残核がサイコロ状あるいは6面体以上の多面体になるものではなかろう。得られている剥片の形状は一定していないが、部厚く、大きめの剥片が椎器（第11図35）の素材となっている。

のことから、本資料における剥片剥離技術は石刃技法とは異なったものであるとすることができる。



第46図 遺構配置図



第47図 楼閣時代遺構配置図

2 縄文時代の検出遺構と遺物

(1) 検出遺構と遺物

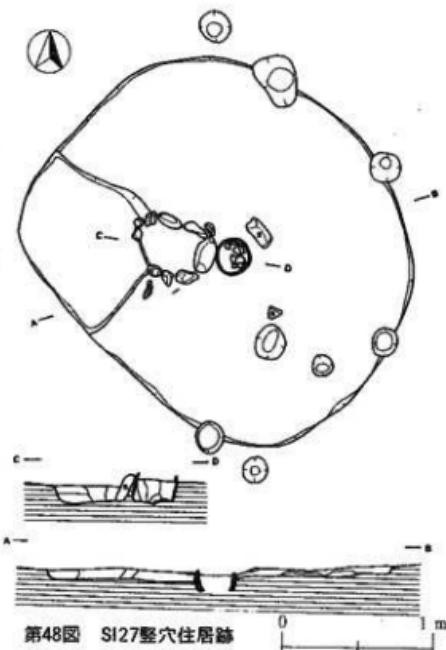
堅穴住居跡

SI27(第48図、図版32)

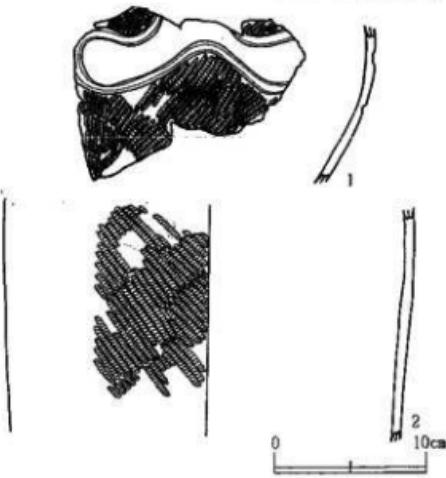
調査区北西隅で、地山面で確認されている。確認時には、極暗褐色土(7.5YR 5/2)が直径2.5m前後の円形に認められたが、西側では確認しにくい状況にあり、また北側では壁の一部と、柱穴とがSK89によって切られている。

住居の平面形は、直径2.4mの円形であるが、西側は複式炉中軸線の延長線上で角度をもつ。壁は高さ6cmほどではば垂直に立ち上がり、床面は平坦で全体的にやわらかいが、炉周辺は固くしまっている。ピットは住居内外に8個検出されているが、このうち壁にまたがって検出された4本は、深さ20~30cm、直径20cmでこれが柱穴と考えられる。炉は住居中央から西側に構築され、土器埋設部は石墻いを伴わないが北側で長さ20cmほどの礫が土器からやや離れて東側にある。石組み部は0.5×0.4mの梢円形を呈し10数個の拳大の礫を用いて造られているが土器に接する礫は、20×30cmほどの偏平な自然礫で、土器を支えるように配されている。埋設土器は加熱のため非常に脆くなっているが、石組部の礫はそれほど焼けていない。掘り込み部は床面より3~4cmほどの深さで、石組部から横「ハ」の字状に開いて、礫面に接している。

炉埋設土器(第49図2、図版58)は口縁部、



第48図 SI27堅穴住居跡



第49図 SI27出土遺物

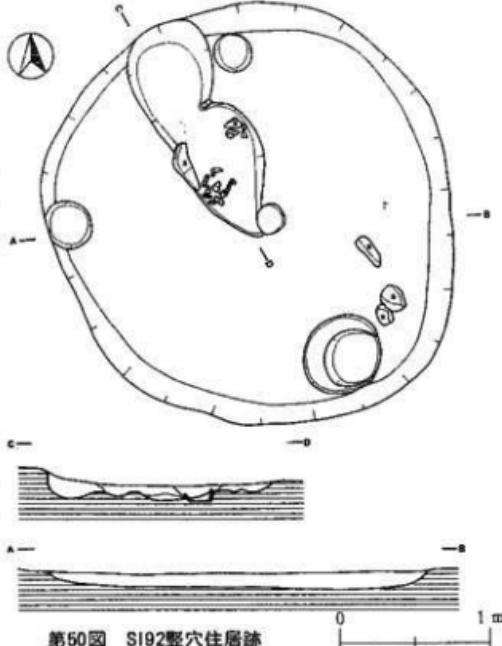
底部とも欠き胴部だけのもので、器厚8mm、現在直径27cm、高さ16cmで縄文はLR縄文が施されている。第49図1は埋設土器内部から出土したもので2次加熱の痕跡は認められない。胴部上半に最大径をもち一度口縁部下でゆるくすぼまる深鉢形土器であろう。LR縄文施文後、幅広の浅い沈線が横「S」字状の文様を描き、沈線間は磨り消される。中期末葉大木10式であろう。

SI92(第50図、図版33)

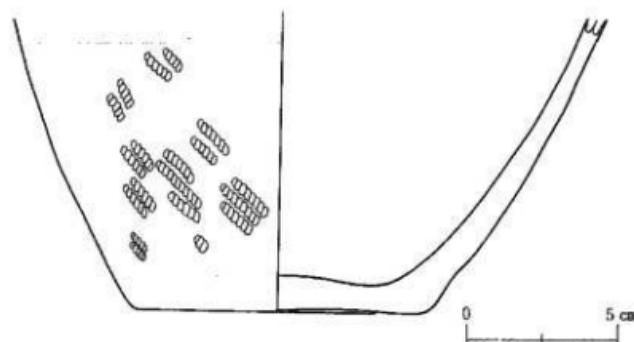
調査区中央の北側地山面で確認されている。確認時には焼土粒子、炭化物を含む褐色土(7.5YR 3/2)が径3.0mの円形に認められる。住居の平面形は直径約2.8mの円形で中央から北西に炉がある。壁は高さ0.1~0.2mで、北→東→南の壁は0.2mほどでゆるく立ち上がるが、西側では高さ10cm程である。床面は、平坦で比較的固くしまっている。柱穴は炉周辺の壁際の2個で、径30cm深さ20cm前後である。また、住居南側の壁際にある径0.5mのビットは深さ20cmほどで、埋土状況から住居跡と同期のものと考えられるが、性格は不明である。

炉は土器埋設部と

堀り込み部からなる炉であるが、中央の小ビットは、土器の抜き取り壠と考えられ、土器埋設部と堀り込み部からなるほぼ同規模の炉が存在し、二度目のものが壁際に作り変えられたものと考えられる。



第50図 SI92整穴住居跡



第51図 SI92炉埋設土器

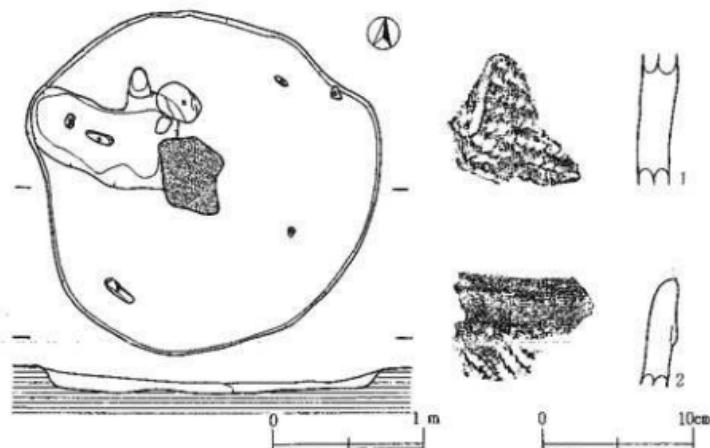
土器埋設部には、長さ40cmほどの縁が配され、掘込み部は07×0.6mで凹凸が激しい。

埋設土器（第51図、図版58）は、底部から胴部下半を残す深鉢形土器でRL縞文が施される。

SI107（第52図、図版34）

調査区北西側で、SI27より南へ9mほどの地山面で確認される。確認時には、焼土・炭化物の多量に混入する黒褐色土（7.5YR 3/2）が径2.5mほどの円形に認められ、東側ではSKT 58を切っているが、西側ではSN109が住居跡の一部を覆っている。住居の平面形は径2.3mほどの円形を呈するが、北と西側の一部がやや内側に入り込む。壁は20cmの高さで傾斜をもって立ち上がるが、ピットは全く検出できず、床面も緩く起伏している。炉は住居中央部に0.4×0.5mほどの範囲で焼土が広がり、そこから西側の壁まで不整格円形の深さ10cmほどの掘り込みがある。床面からやや浮いた状態で大小の縁が検出される。

出土土器（第52図1・2）は、縞文時代中期後半のもので1は、胎土・焼成とも良好でLR縞文を施した後に垂下する沈線が引かれる。2も胎土・焼成とも良好で、やや外反する折り返し口縁をもち、体部にRL縞文の施される土器である。

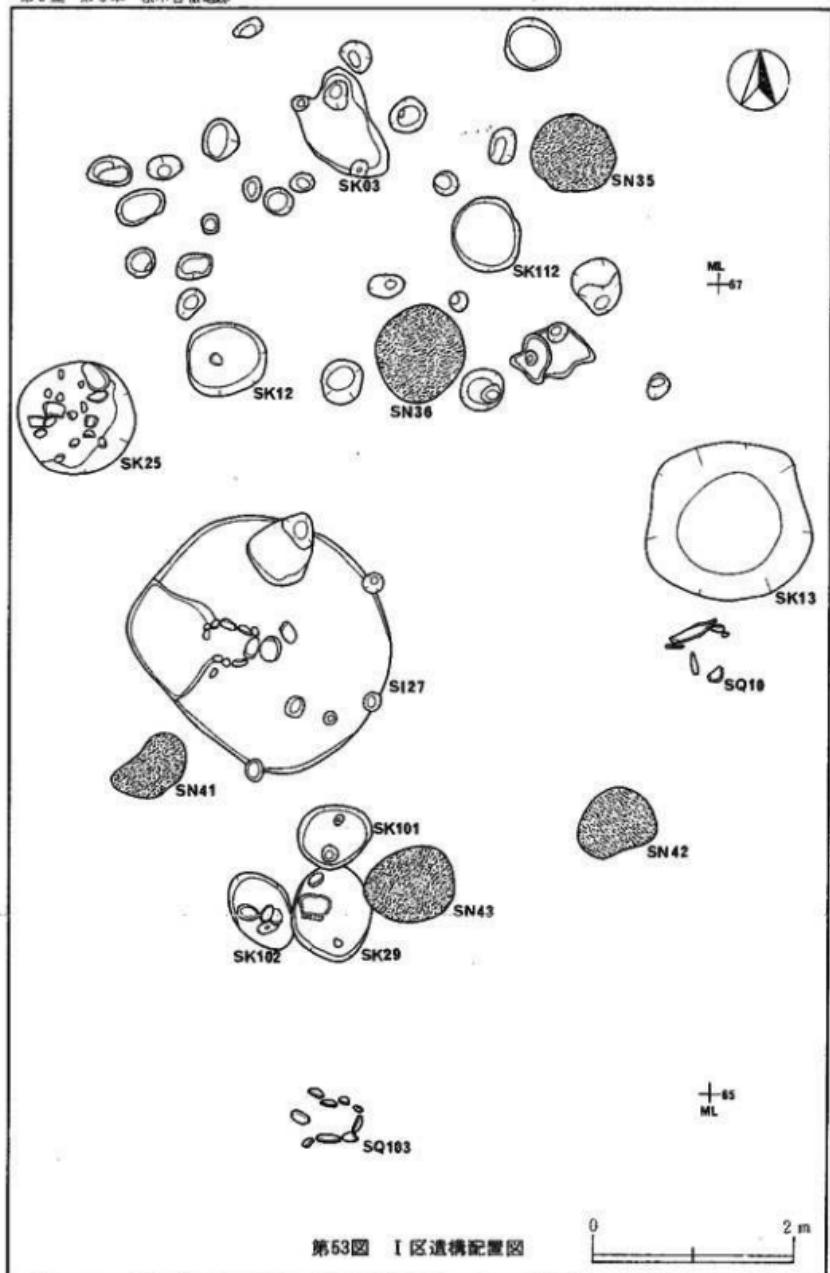


第52図 SI107堅穴住居跡と出土土器

土 壤

フラスコ状土壤を除く73基の土壤群は、調査区の北西に集中している。また焼土造構・配石造構の検出範囲もほぼこれら土壤群の範囲と重なっている。

ここでは土壤群の集中範囲を便宜上Ⅰ～Ⅷ区に区分して、説明を加えたい。



第53図 I区遺構配置図

SK03（第54図）

長軸1.1m、東西0.7mの楕円形を呈するが東側と北側は内側に入り込んでおり不整なラインを示す。深さは中央部で0.4m、底面には小ピットが検出されているが凹凸が激しく、壁も凹凸をもちながら立ち上がる。埋土は焼土・炭化物が混入する黒褐色土（10YR2/3）である。

出土土器（第56図1～9、図版51）：縄文施文の破片である。胎土には粗い砂粒が含まれており、そのためかいづれも焼成は不良である。縄文原体はLR（1・5・6・8・9）、RL（2～4・7）が使用され2は縦位に、5・7～9は横位に付される。

SK12（第54図）

直径0.8mの円形を呈する。確認面では中央に礫が置かれている。深さは0.2mほどで、底面は平坦ながらも西から東へ傾斜し、壁は緩く立ち上がる。埋土は暗褐色土（10YR3/3）で焼土や炭火物が少量ながら混入する。

出土土器（第56図10～12、図版51）：10は浅鉢形土器片、11は深い条痕のある土器、12はLR縄文の横位に施された土器である。

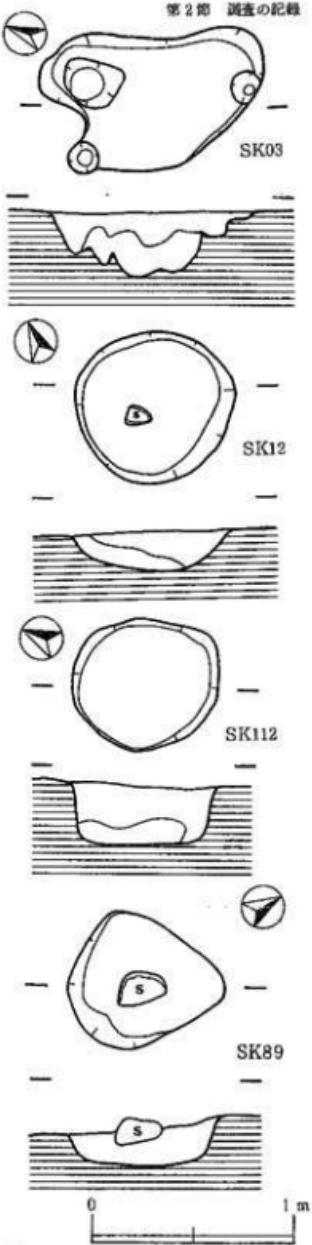
SK112（第54図）

直径0.7mの円形を呈し、深さ約0.3m、底面は平坦で壁はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は褐色土（7.5YR4/4）、暗褐色土（7.5YR1/3）からなり、炭化物が混入している。

出土土器（第56図14・15、図版51）：両者とも同一個体で直立する平縁の深鉢形土器であろう。RL縄文である。

SK89（第54図）

長軸0.8m、短軸0.7mで不整の円形を呈し、SI27の北側を一部切っている。深さは0.25m、底面は平坦で壁は垂直に立ち上がる。埋土は黒褐色土（10YR2/3）で炭化物・焼土が多く混入する。確認面で、土壤中央に人頭大の礫が配される。



第54図 SK03・12・112・89土壌

SK25 (第55図、図版35)

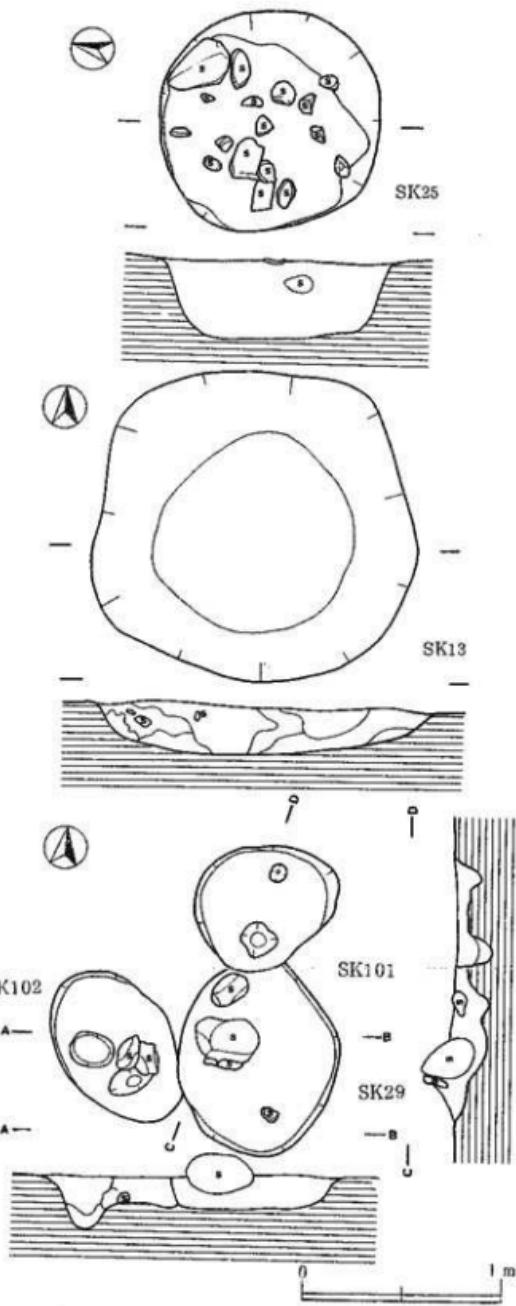
径1.1mの円形を呈し、深さ0.4m、底面は平坦で壁は外反しながら立ち上がる。埋土は黒褐色土(7.5YR3/2)で非常に縮まりがあり、炭化物や焼土粒子が多量に混入している。土壤内には上面から底面まで多量の土器片と大小の礫が確認されており、大きな礫は底面近くに多い。

出土土器(第56図16~22、図版51)：多くの土器片が出土したもののは細片ばかりである。浅鉢形土器と考えられる20を除けば、全て深鉢形土器の破片である。16は小波状を呈し、やや内湾する口縁部破片である。施されるのは全てR1繩文である。

SK13 (第55図)

径1.6mのはば円形を呈し、深さ0.3m、底面は平坦で壁は緩く立ち上がる。埋土は黒褐色土(10YR2/2)と暗褐色土(10YR3/3)が中心で混入する焼土粒子・炭化物も極めて少ない。土壤内には小礫と、土器片が検出されただけである。

出土土器(第56図23~30、図版51)：浅鉢・深鉢形土器の破片が多い。23は口縁部に突起を有し、頸部と体部の境に刻目をもつ、24は口縁部に繩文圧痕のある内凹ぎ



第55図 SK25・13・102・29・101土壤

みの口縁部破片で、細い2条の沈線以外は縁位のRL縦文が施される。

SK102・29・101（第55図、図版36）

3基の土壙が切り合い、古い方からSK102→29→101の順になる。

SK102

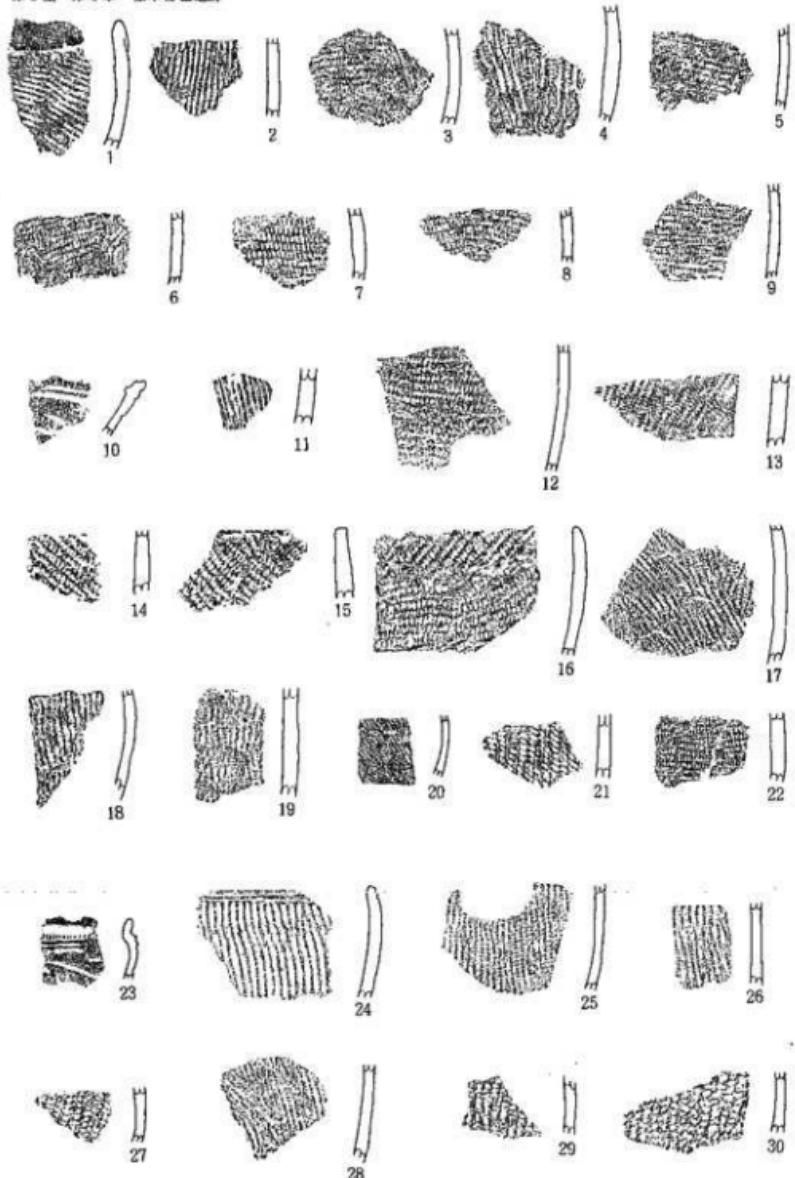
長軸0.85m、短軸0.7mの橢円形を呈し、深さ0.15m、底面は平坦で壁はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は黒褐色土（10YR2/1）、黒褐色土（10YR3/2）で締まりがなく遺物もない。底面には2個のピットがあり、西側のものは径20cm、底面からの深さが15cmでこのピットの東側には2個の角礫が配されている。

SK29

長軸1.0m、短軸0.8mの橢円形を呈し、深さ0.2mで底面はやや凹凸があり、壁はやや外反して立ち上がる。埋土は黒褐色土（10YR3/2）でSK102の埋土よりも暗い。底面からやや浮いた状態で大小の礫が配されているが、中央の大型の礫は立てられたようである。

SK101

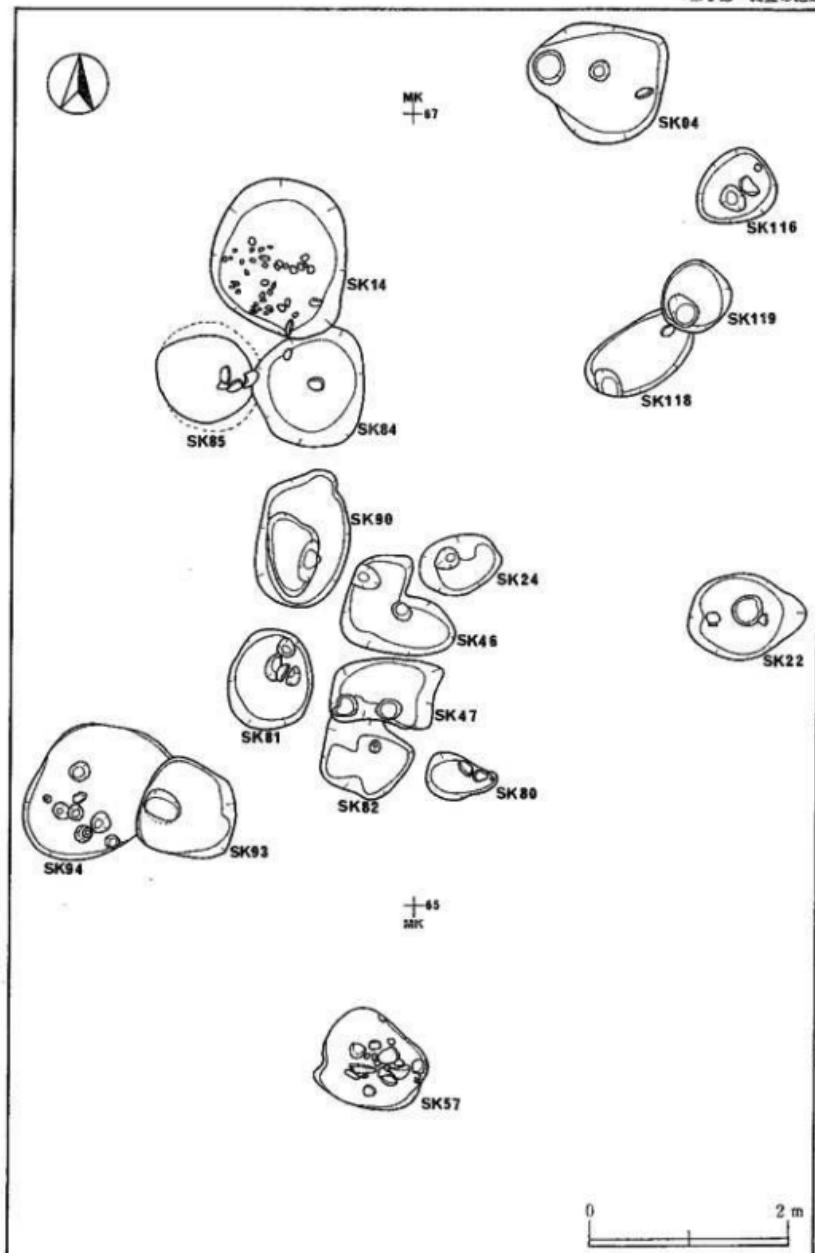
径0.7mの円形を呈し、深さは約0.1mで、底面は平坦で壁は外反して立ち上がる。2個の小ピットは径20cm、土壤底面からの深さは10~15cmである。埋土は黒褐色土（10YR3/2）で締まりがある。



1~9 SK03 16~22 SK25
10~13 SK12 23~30 SK13
14~15 SK112

第56図 土壌内出土土器

0 10cm



第57図 II区造構配置図

SK24(第58図)

長軸0.7m、短軸0.6mで不整の円形を呈し、深さ0.2mで底面はわずかに凹凸がある。壁は東西では垂直に立ち上がるが、北側では緩やかである。北西隅に径25cm、土壤底面からの深さ10cmほどの小ピットがある。埋土は、暗褐色土(10YR3/3)で、少量の炭化物を含むが、礫や遺物は出土していない。

SK57(第58図、図版37)

長軸1.1m、短軸0.9mの梢円形を呈し、深さ0.34m、底面は平坦で壁は垂直に立ち上がる。埋土は黒褐色土(10YR2/2・2/3)で、底面に近くなるにつれて焼土粒子・炭化物が多くなる。埋土中には大小の礫や土器片が含まれるが、特に大型の礫は底面に接するか、やや浮いた状態で検出される。

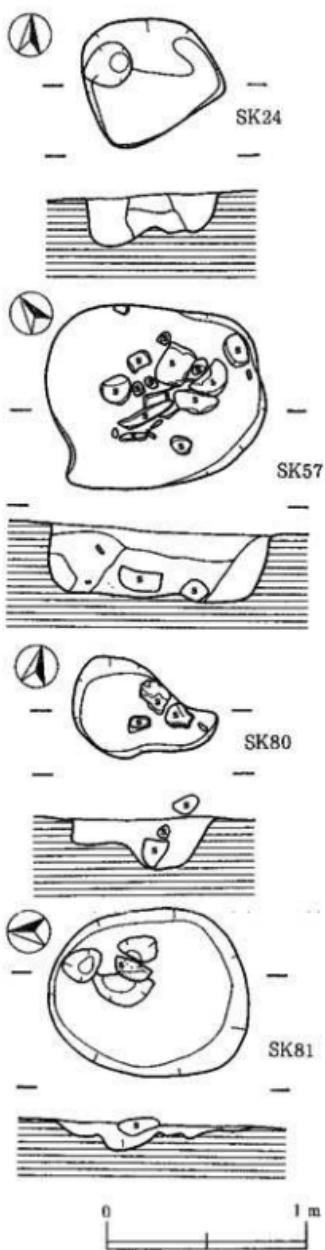
出土土器(第60図1・2、図版52)：縄文施文の土器片のみで、胎土には粗い砂粒を含み焼成も不良である。
LR縄文である。

SK80(第58図)

長軸0.7m、短軸0.5mで不整の梢円形を呈し、深さは0.1mほどで、底面は西側では平坦であるが、東側で落ち込んでいる。壁は西側では垂直に、東側では外反して立ち上がる。埋土は黒褐色土(7.5YR2/3)で焼土・炭化物が混入している。確認面で土壤東側に礫があり、また底面の落ち込んでいる部分には半截された礫が立てられている。

SK81(第58図、図版37)

長軸1.1m、短軸0.8mの梢円形を呈し、深さは中央部で0.14mである。底面はかなり凹凸が激しく、壁はなだらかに立ち上がる。北東隅に3個のピットがあるが非常に残るものである。埋土は褐色土(7.5YR4/3)で堅く締まっており炭化物・焼土粒子が混入している。確認面で土壤中央部分に大型の礫がある。



第58図 SK24・57・80・81土壤

SK82 (第59図)

1辺0.7m前後の方形を呈し、深さ0.1~0.25m、底面には起伏がある。壁は北側で緩く立ち上がるが、東・西・南側では直立に立ち上がる。埋土は、暗褐色土(10YR 3/3)で、SK47に切られている。

SK47 (第59図)

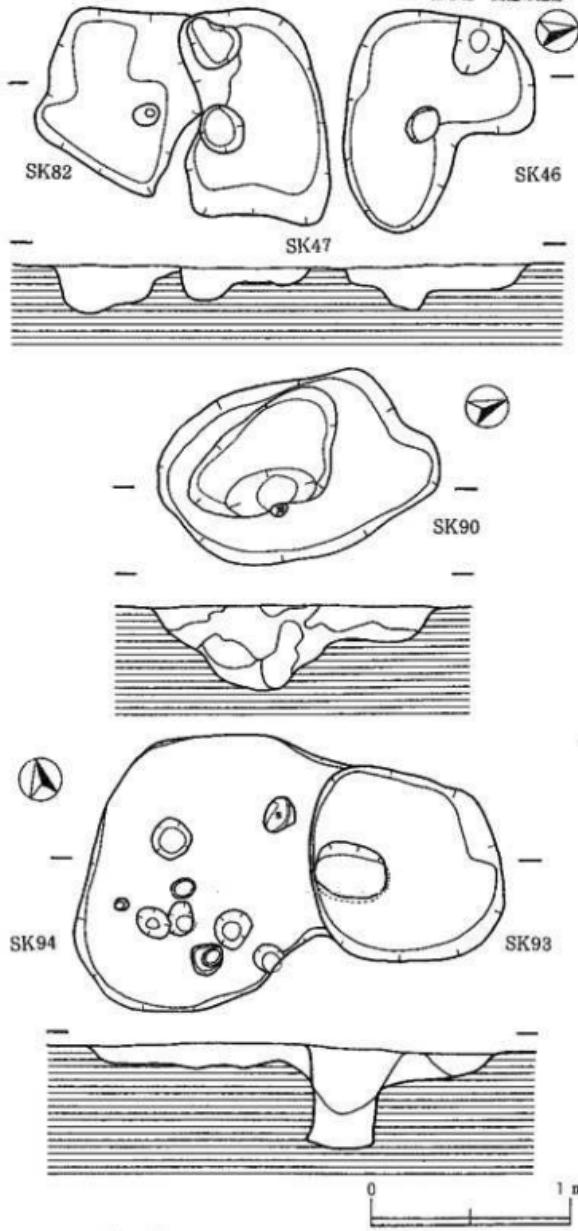
0.7×1.0mの長方形を呈し、深さ0.1mで底面は平坦である。南側には径20cm、深さは土壤底面から10cmのピットがある。壁は緩く立ち上がる。埋土は暗褐色土(10YR 3/3)で、SK82を切っている。

SK46 (第58図)

長軸1.0m、短軸0.6mの楕円形を呈しているが、南側で東に大きく0.5mほど張り出している。底面は平坦であるが、南側で急に落ち込んでいる。埋土は暗褐色土(10YR 3/3)である。

SK90 (第59図)

長軸1.4m、短軸0.6mの楕円形を呈していて、深さは0.2mほどで底面は平坦であるが、南側では幅



第59図 SK82・47・46・90・94・93土壤

鉢状に大きく落ち込んでいる。埋土は褐色土（7.5YR 4／4）。明褐色土（7.5YR 5／6）などで、両者とも締まりがあり、炭化物や土器片が混入している。また底面近くには黒褐色土（7.5YR 3／1）がブロック状に入っている。遺物は、縄文の施された土器断片で晩期のものと考えられる。

SK94（第59図）

長軸1.4m以上、短軸1.4mの楕円形を呈し、深さは0.15mで壁は緩く立ち上がる、底面は堅く締まっているが、径10~20cmの浅い小ビットがある。埋土は暗褐色土（10YR 3／4）で炭化物をわずかに含んでいる。SK93によって切られている。

SK93（第59図）

径約1.0mの不整円形を呈し、深さ約0.2mで壁は緩く立ち上がる。底面は比較的堅い。西側には40×20cmの楕円形で、土壤底面から深さ50cmほどの大きなビットがある。埋土は暗褐色土（10YR 3／5）が主である。

出土土器（第61図3～5、図版52）：3は粗い条痕、4は無節の縄文、5はRL縄文の施されたものである。

SK85・84・14（第60図、図版38）

3基の土壤が切り合い、古い方からSK85→84→14の順になる。

SK85

上面では径0.9mの円形を呈し、一度0.8mとすばまって、底面も径1.1mの円形を呈する。深さ0.7mの袋状の土壤で底面は堅く締まっている。埋土は黒褐色土（7.5YR 3／2）・明褐色土（7.5YR 5／8）であるが、上面ほど炭化物や焼土の混入が著しい。確認面において土壤東側に、自然縫が数個配される。

SK84

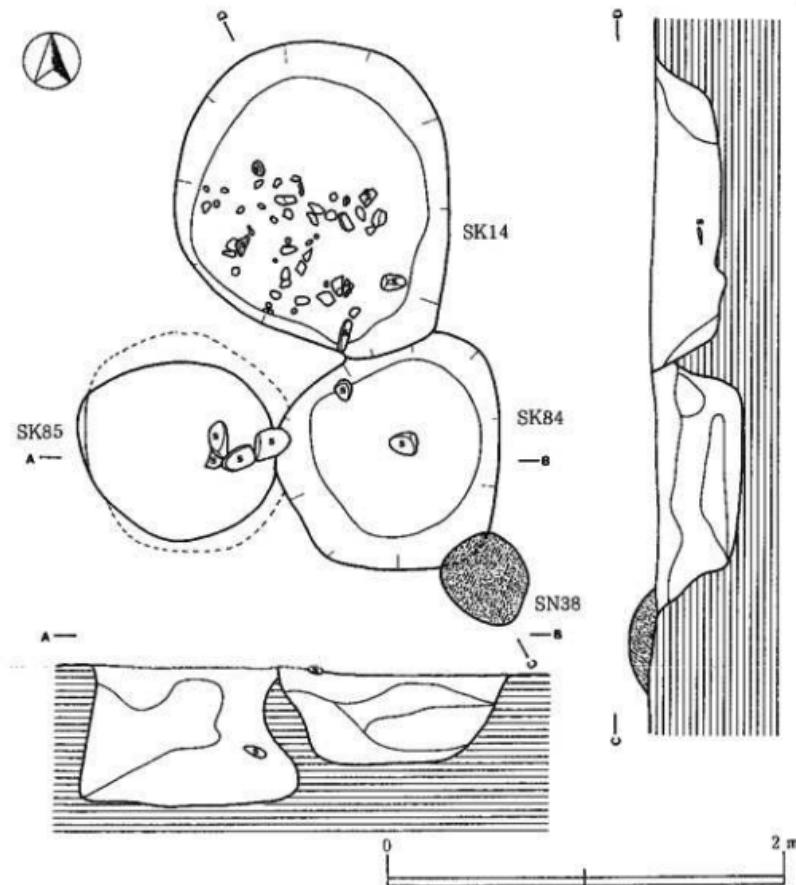
径1.1mの円形を呈し、深さ0.43mで壁はゆるく立ち上がり、底面は平坦で堅く締まっている。埋土は褐色土（7.5YR 3／4・6／8）・橙色土（7.5YR 6／8）などで、上面ほど炭化物・焼上の混入が著しい。南東側の一部をSN38に覆われている。

SK14

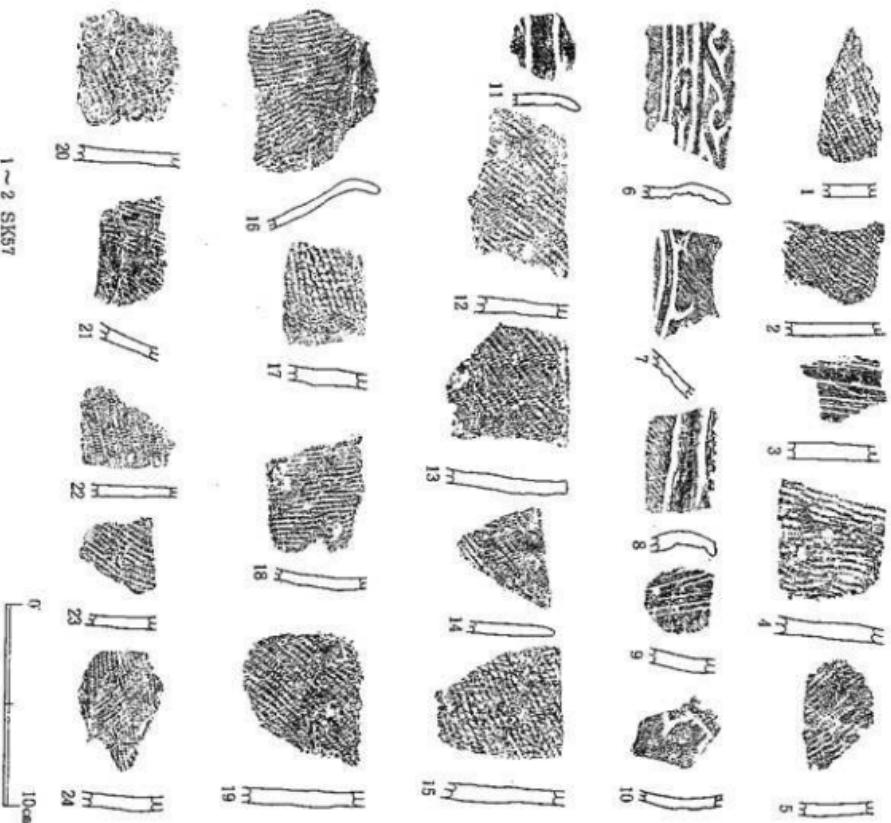
長軸1.7m、短軸1.4mの楕円形を呈し、深さ0.3mで壁は緩く立ち上がる。底面はやや起伏があるものの堅くしっかりしている。埋土は黒褐色土（7.5YR 3／2）で炭化物・焼土が混入しており、特に土器片は西から投げ込まれた状態を呈している。

出土土器（第61図6～24、図版52）：6は、外反する口縁から頸部で一度すばまって丸みのある体部をもつ鉢形土器である。口縁には入組状の三叉文、体部上半には下抱三叉文、以下には緻密なRL縄文が施される。8・11は外反する口縁から直立する無文の頸部、わずかにふ

くらむ体部をもつ鉢形土器である。8は突起を有し小波状を呈し、内面にも1条の沈線がめぐる。11の口縁は山形状を呈し、太い沈線が頸部と体部を画している。いづれも体部にLR繩文が施されている。8の胎土は緻密である。12~14・19・20は平縁で直立する口縁部を有する粗製深鉢形土器である。胎土は粗い砂粒を含んでいる。16は壺形土器の破片であろう。

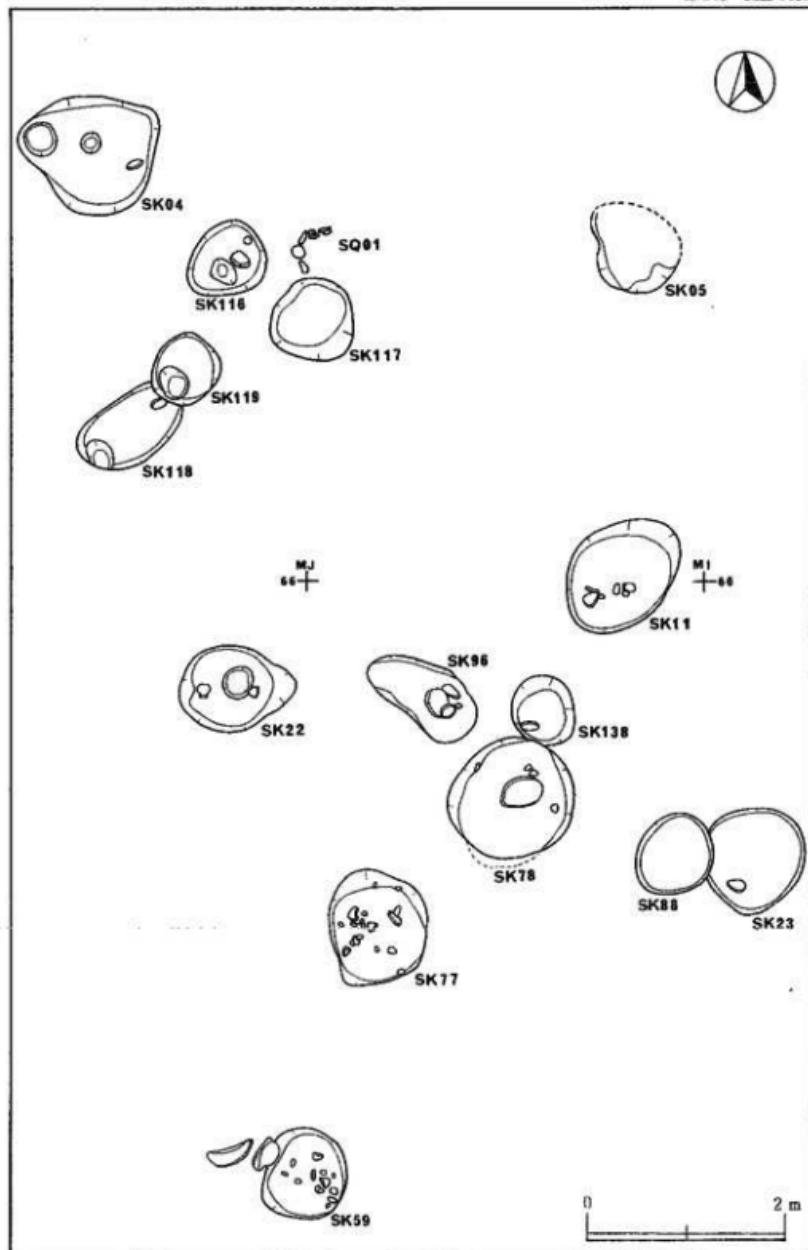


第60図 SK85・84・14土壤、SN38焼土遺構



第61図 土壌内出土土器

1~2 SK57
3~5 SK93
6~24 SK14



第62図 Ⅲ区遺構配置図

SK04 (第63図)

長辺1.4m、短辺1.0m、の不整な長方形を呈し、深さは約0.4mで、壁は東側では垂直に、西側では緩く立ち上がる。底面は堅く平坦で、中央と西側にはそれぞれ径20cm・40cmの浅いピットがある。埋土は炭化物・焼土の混入する黒褐色土(10YR 3/2)である。

出土土器(第67図1~5、図版54)：繩文の付された土器で2を除けば胎土は比較的緻密である。3は直立する口縁をもつ深鉢形土器であろうか。1・4はLR繩文、2・3・5はRL繩文である。

SK05 (第63図)

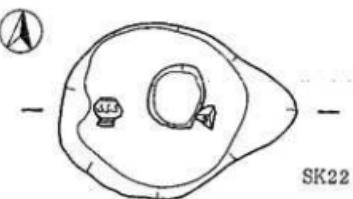
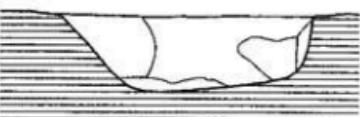
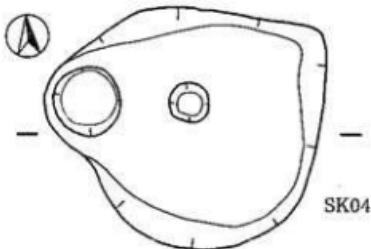
擾乱のため北東半分を削平されているが、径約1.0mの円形を呈する土壇であろうか。深さは30cmで壁は緩く立ち上がる。底面は平坦で堅い。

SK22 (第63図)

径0.9mの円形を呈し、深さは中央部で0.3m、壁は擂鉢状に中央に向かって緩く傾斜している。底面中央には深さ10cmほどのピットがある。埋土中には礫が数点あり、これは床面より浮いている。また西側には壺形土器が口縁部を南側にして横倒しの状態で検出された。埋土は黒褐色土(7.5YR 3/2)が中心で土器片が混入している。

出土土器(第67図10、図版58)：外面赤色塗彩の壺形土器である。大きく外反する口縁から一度頸部ですぼまり、球形に近いふくらみのある体部に至るものである。頸部には三叉文が、体部上半には入組文、下半は無文となる。各部の縁は全て沈線で画される。緻密なLR繩文であろうか。

出土石器(第68図3、図版55)：縦長の剥片に主要剥離面から、片側刃に押圧剥離を施した石



第63図 SK04・05・22土壇

器である。

SK11(第64図、図版40)

長軸1.3m、短軸1.0mの椭円形を呈し、深さ0.3mで壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はやや起状があるが堅くしまっている。埋土は黒褐色土(7.5YR 2/3)と灰褐色土(7.5YR 4/4)が中心で、上面ほど炭化物が多量に混入しており、また確認面から中層まで大小の自然縛がある。

出土土器(第67図6~9、図版54):いずれも胎土は砂粒を含み粗いが焼成は良好である。6・8は深鉢形土器の破片で、6は小波状で直立する口縁からふくらみのある体部、8はやや内湾する口縁から直線的に底部に至るものであろう。7は2条の沈線が、無文の頸部と縦位の繩文が施された胴部とを画する壺形土器の破片である。施繩文は6・8・9がLR、7がRLである。

出土石器(第68図1・2、図版55):両者とも頁岩質の橢型石斧で、主要剥離面に1次剥離面を残し、背面には細かな押圧剥離を施している。

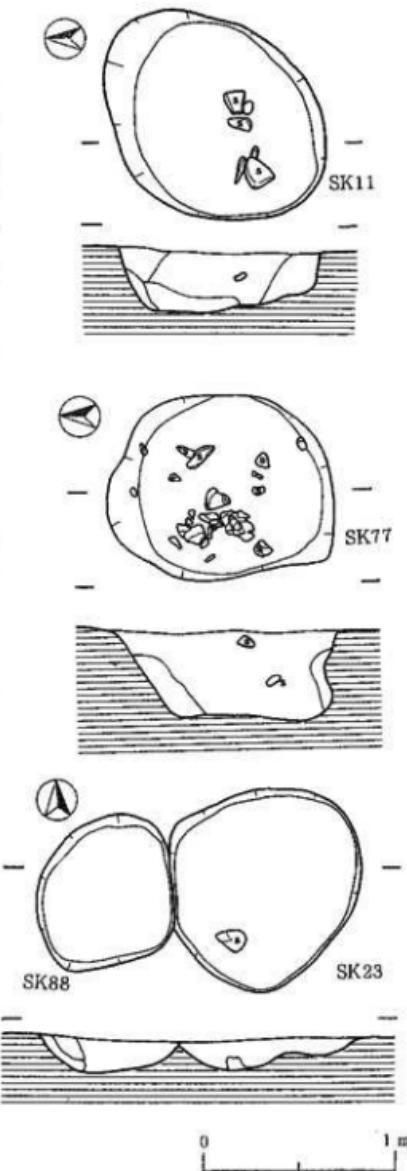
SK77(第64図、図版39)

径1.0mの円形を呈し、深さ0.5mで壁は南側ではほぼ垂直に、北側では傾斜をもって立ち上がる。底面は中央部でやや高く、他は平坦である。埋土は黒褐色土(7.5YR 2/2)である。

出土土器(第67図11~16、図版55):13を除けば全て深鉢形土器の破片である。13はLR繩文施文の体部と無文の体部下端とを画する2条の沈線をもつ浅鉢形土器であろう。12はRL繩文の深鉢形土器で直立する口縁をもつ。

SK88(第64図)

径0.8mの円形を呈し、深さは約0.2mで壁は



第64図 SK11・77・23・88土壙

傾斜して立ちあがる。埋土は黒褐色土（7.5YR 4 / 4）が中心で炭化物・焼上粒子が混入している。

SK23（第64図）

径約1.0mの円形を呈し、深さ約0.2mで壁は緩やかに立ち上がり、底面には起伏がある。埋土は黒褐色土（7.5YR 4 / 4）で堅くしまっている。

出土土器（第67図17・18）：17はLR縄文施文、18は入組文風の磨消繩文が施された土器である。

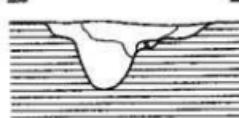
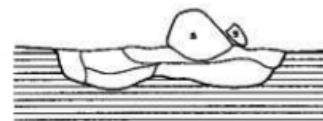
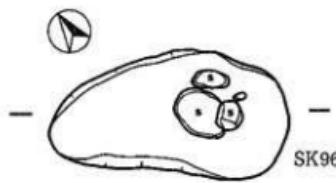
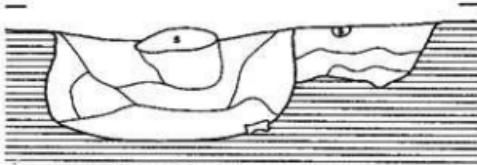
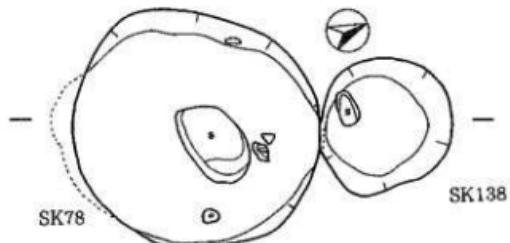
SK138（第65図）

径0.7mの円形で、深さ約0.3mで、壁は傾斜をもって立ち上がり、底面は凹凸がある。埋土はにぶい黄褐色土（10YR 4 / 2）・暗褐色土（10YR 3 / 4）・黄褐色土（10YR 2 / 2）である。南側でSK78を切っている。

SK78（第65図、図版40）

径1.2mの円形を呈し、深さ0.5mで、断面形はやや袋状を呈する。埋土は黒褐色土（7.5YR 3 / 1 ~ 3 / 2）で多量の炭化物や焼上粒子が混入している。確認において、土壤中央部に40×20cmの扁平な跡が配されている。

出土土器（第67図19~23、図版54・58）：研磨された器面に沈線で入組文を施す土器（20~22・25）、23は台付浅鉢形土器の底部



第65図 SK78・138・96・116土壤

で体部下端と台部の屈曲部には、2段の円形の刺突列がある。

出土石器（第68図4・5、図版55）：4は凝灰岩質の磨製石斧、5は頁岩製の打製石斧である。

SK96（第65図）

長軸1.2m、短軸0.6mの楕円形を呈する。深さは0.2mほどで、底面中央部は盛り上がりついていて、壁は傾斜をもって立ち上がる。確認面で土壤中央やや東よりに、大型の礫が配される。埋土は上面に地山土である褐色土（7.5YR 4/3）が広がり、その下に黒褐色土（7.5YR 3/2）・褐色土（7.5YR 4/4）があるが、いずれも締まりのない土である。

SK116（第65図）

長辺0.8m、短辺0.5mの隅丸方形を呈する。深さは0.14mほど底面は平坦で、壁は緩い傾斜をもって立ち上がる。底面中央には扁平な大型の礫とそれに接して径30cm、深さ40cmのピットがある。埋土は、炭化物の混入する暗褐色土（7.5YR 3/3）・褐色土（7.5YR 4/3）である。

SK117（第66図）

径約0.8mの円形を呈し、深さは0.1m～0.2mで底面は傾斜している。壁はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は黒褐色土（7.5YR 3/2）・褐色土（7.5YR 4/6・4/2）で土器片が混入している。

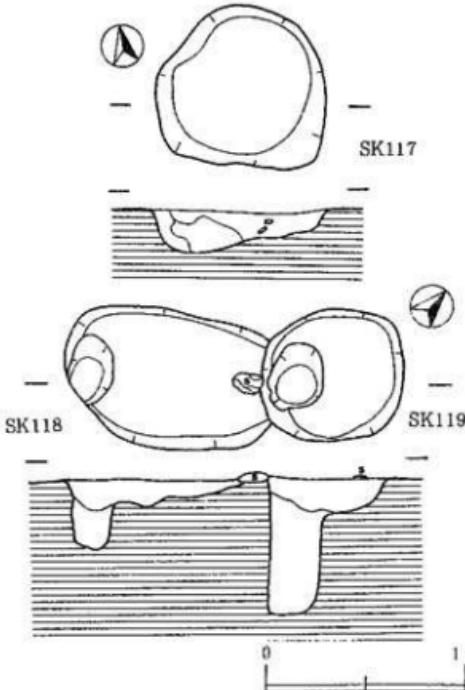
出土土器（第67図24～29）：浅鉢形土器で、R L縞文が施されている。

SK119（第66図）

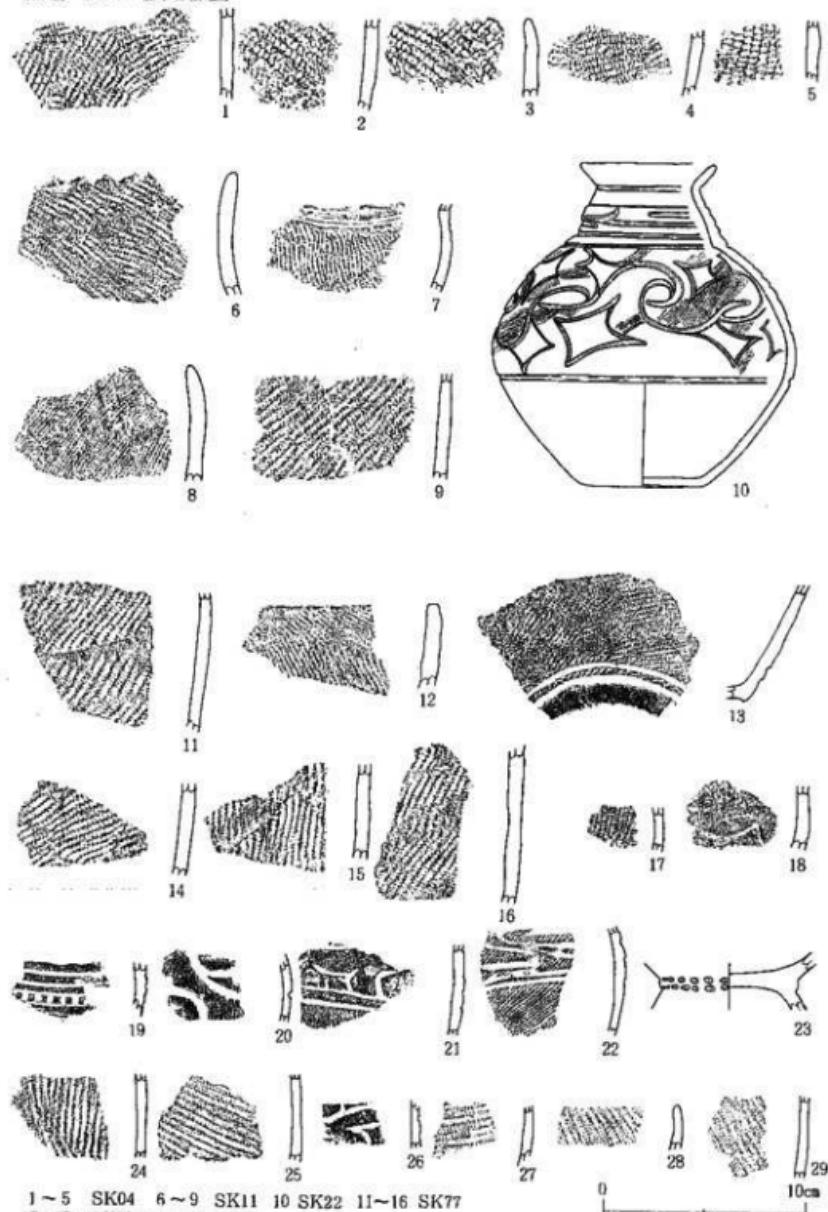
径約0.6mの円形を呈し、深さ0.18m、壁は緩やかに立ち上がる。底面には径25cmのピットがあり、深さは土壤底面より50cmもある。埋土は黄褐色土（10YR 4/3）と暗褐色土（10YR 3/3）である。

SK118（第66図）

長軸約1.1cm、短軸0.7cmの楕円形を呈する。深さは0.1mほどで底面は凹凸があり、壁は緩く立ち上がる。底面には径20cm、深さは土壤底面より20cmのピットがある。埋土は黄褐色土（10YR 4/3）と暗褐色土（10YR 3/3）である。

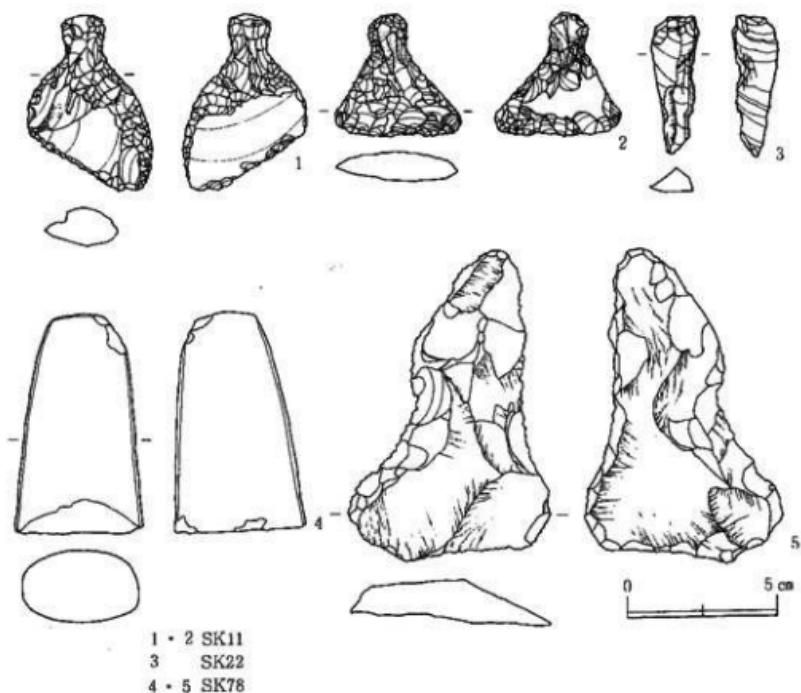


第66図 SK117・118・119土壤

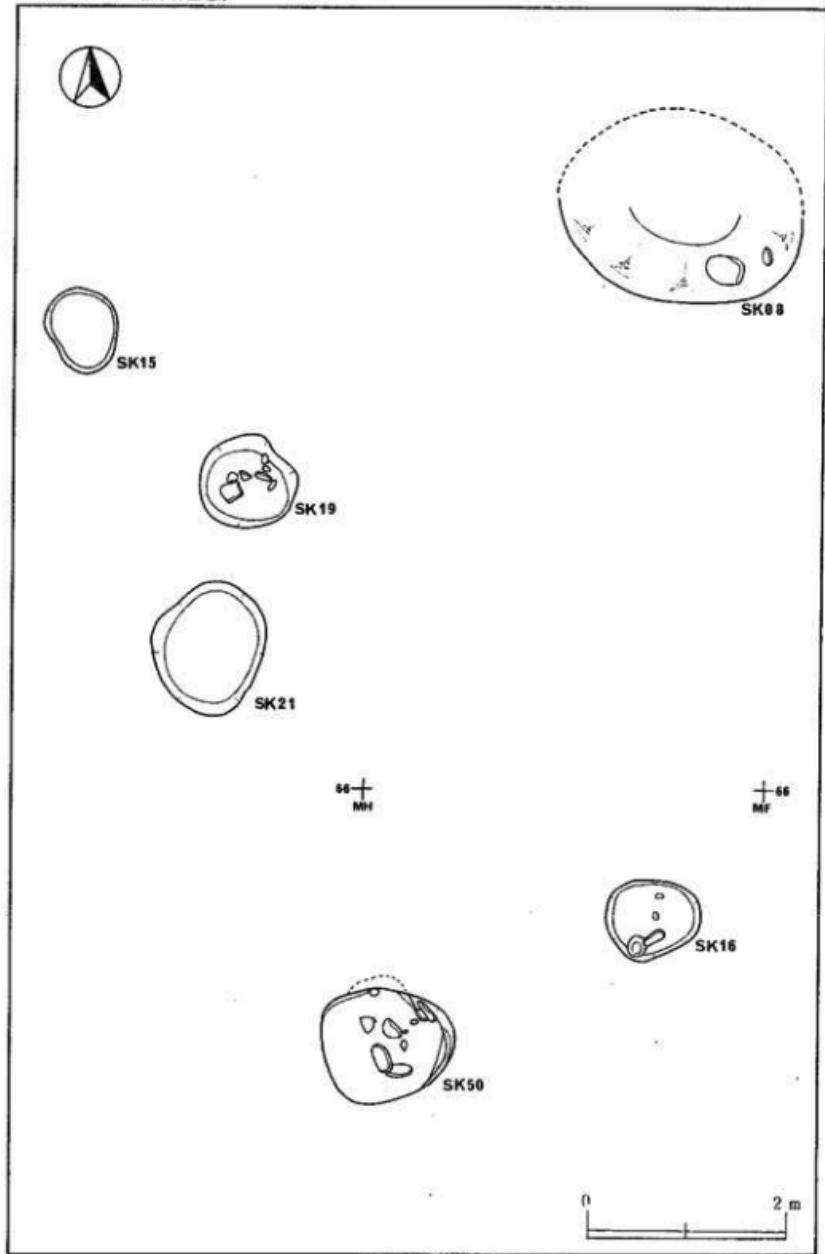


1~5 SK04 6~9 SK11 10 SK22 11~16 SK77
17~18 SK23 19~23 SK78
24~29 SK117

第67図 土壌内出土土器



第68図 土壙内出土石器



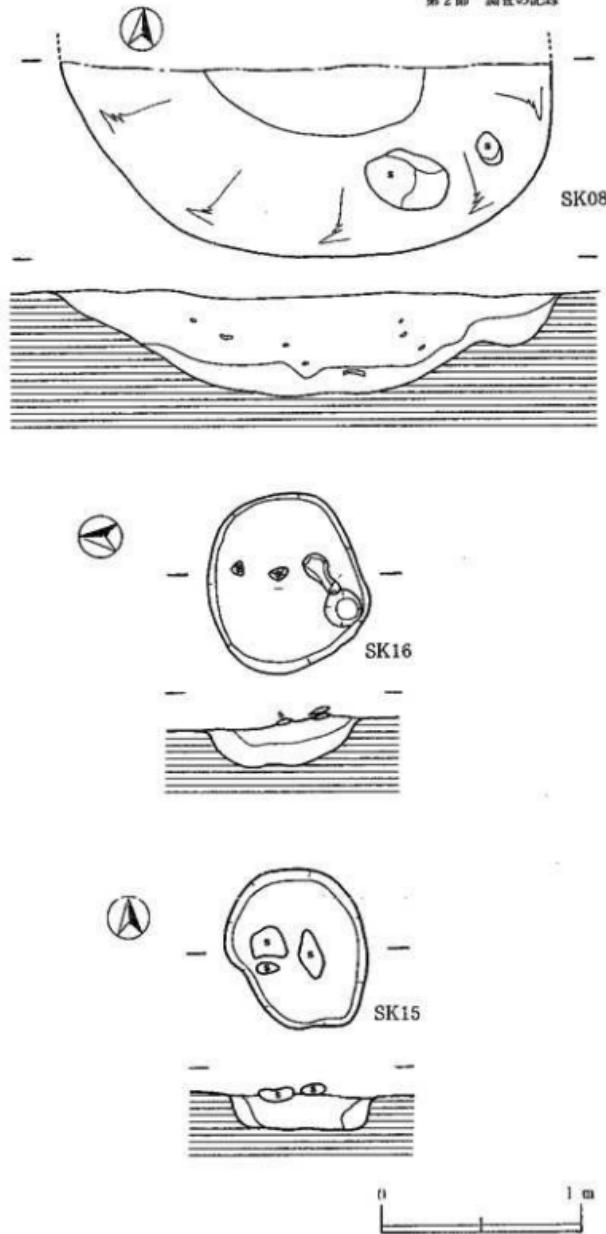
第69図 IV区遺構配置図

SK08 (第70図)

北側半分はすでに削平されているが、直径約2.5mの円形を呈する土壌であろう。深さは0.5mほどで、底部から壁にかけては緩やかに立ち上がり、東側には大型の自然礫が配される。埋土は炭化物・焼土粒子・土器片などを多量に含む黒褐色土(7.5YR 3/2)・暗褐色土(7.5YR 3/4)で両者とも締まりがある。

出土土器(第72図1~9、図版54): 1・2は、口唇部に突起をもち、体部には、三叉文・雲形文の描かれる台付浅鉢形土器の破片である。両者とも外外面赤色塗彩の土器である。3~9は深鉢形土器の破片で、胎土に粗い砂粒を含んではいるが焼成は良好である。口縁部がやや内凹ないしは直立する。体部に間隔のある条痕文の施されている3を除けば、他は全て単節繩文が施される。

出土石器(第73図1): 灰岩質で図の右側縁部に刃部のある搔器である。



第70図 SK08・16・15土壌

SK16 (第70図、図版41)

長軸0.9m、短軸0.75mの楕円形を呈し、深さ0.2m、壁は緩やかに立ち上がる。底面はやや凹があり、南側には径20cmほどの浅いピットがある。埋土は黒褐色土(10YR 2 / 3)で炭化物や焼土粒子が混入する。確認面では(第73図5・6)の扁平打製石斧が、方向を全く同じくして重なって出土している。

SK15 (第70図、図版41)

長軸0.8m、短軸0.7mの楕円形を呈し、深さ0.2mで底面は堅く、壁はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は灰褐色土(7.5YR 4 / 2)と褐色土(7.5YR 4 / 4)で両者とも堅く締まっている。確認面で土壤中央部に礫が配されている。

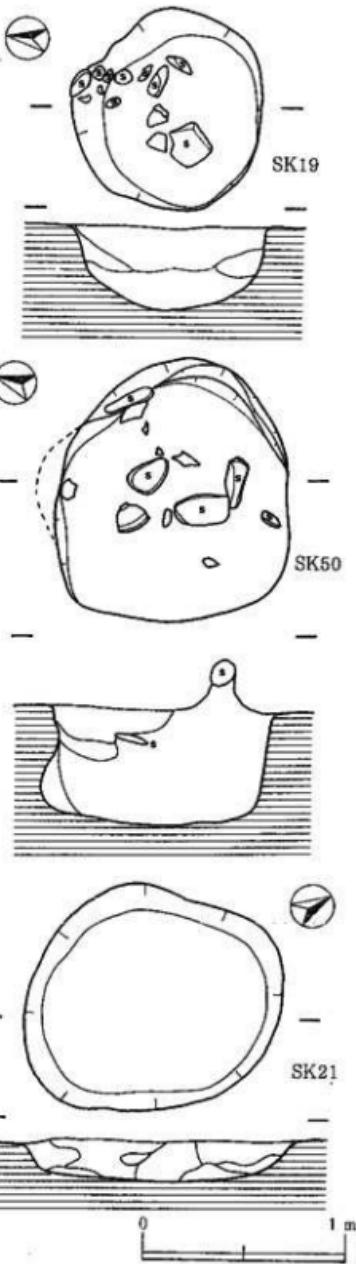
SK19 (第71図、図版42)

径約1.0mの円形を呈し、深さ0.4mで底面は丸みをもっており、壁はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は黒褐色土(7.5YR 3 / 2 + 2 / 2)が中心で土器片・炭化物・焼土粒子が多量に混入している。土壤確認面から底面まで、北側に大小の礫が確認される。

出土土器(第72図12~16、図版54)：いづれも胎土の緻密な土器で、13は入組文風の文様が描かれる。施文縄文は全てRLである。

SK50 (第71図、図版43)

1辺が約1.3mの隅丸方形を呈しており、深さ0.6m、底面は平坦で堅い。壁は西~南にかけてはほぼ垂直に立ち上がるが、北~東にかけては、やや下ぶくらみとなる。埋土は黒褐色土(10YR 2 / 2 + 2 / 3)が中心で炭化物が多量に混入している。確認面すでに大型の礫があり、埋土の下層まで礫が確認できる。第72図27の鉢形土器も埋



第71図 SK19・50・21土壤

土の上層で横倒しの状態で確認され、また第73図6は底面よりやや上の東側壁面より出土している。

出土土器（第72図22～28、図版54・57）：27は直立ぎみの口縁からゆるく底部に至る鉢形土器である。口縁部には末端のかみ合った羊齒繩文が施されており、体部には上半にLR繩文、下半にRL繩文用いて羽状繩文を表出している。内面赤色塗彩されている。28は口縁部が一度屈曲し、末端のかみ合わない羊齒状文が描かれる。体部にはLR繩文で羽状繩文を施している。22～26は深鉢形形器の破片で、22は押圧による波状の口縁部を有するものであろう。

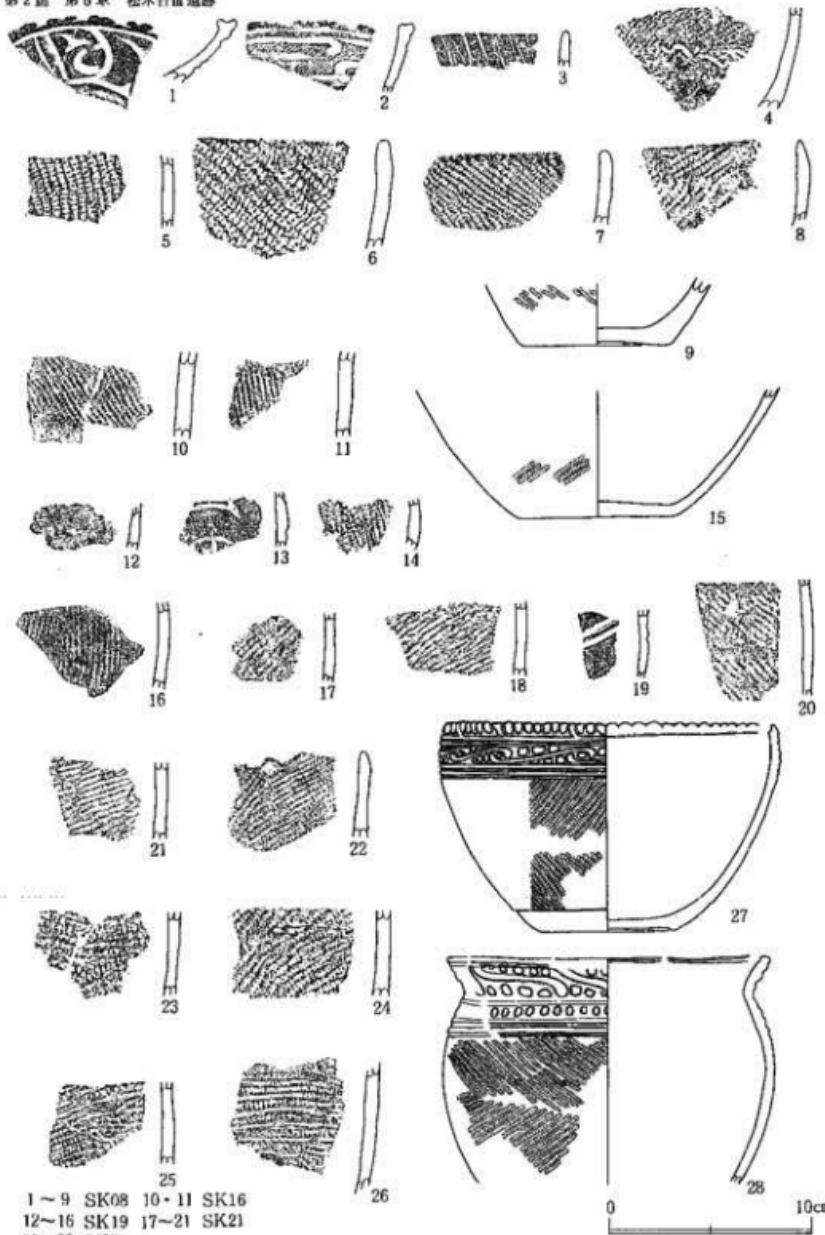
出土石器（第73図4～6、図版55）：4・5は同一母岩による剥片石器で、また6は安山岩質の打製石斧である。

SK21（第71図）

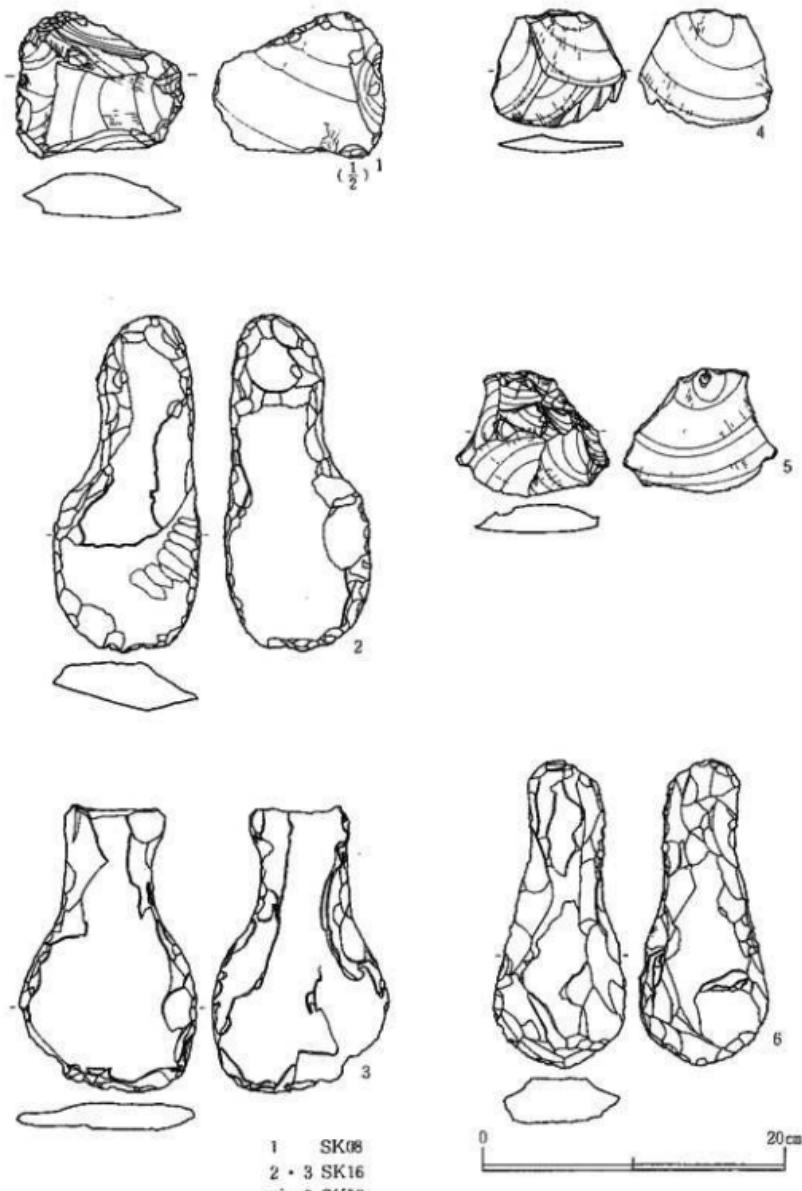
長軸1.3m、短軸1.0mの橢円形を呈し、深さ0.24mで、底面は平坦で堅く、壁は緩く立ち上がる。埋土は炭化物・焼土粒子の混入する黒褐色土（10YR 2/3、2/2）・暗褐色土（10YR 3/4）・褐色土（10YR 4/4）がブロック状に堆積しており、土器片はこの上層に多い。

出土土器（第73図17～21、図版54）：2条の沈線の引かれる19を除くと、他は単節繩文の施される土器で、17・18はLR、20・21はRL繩文である。

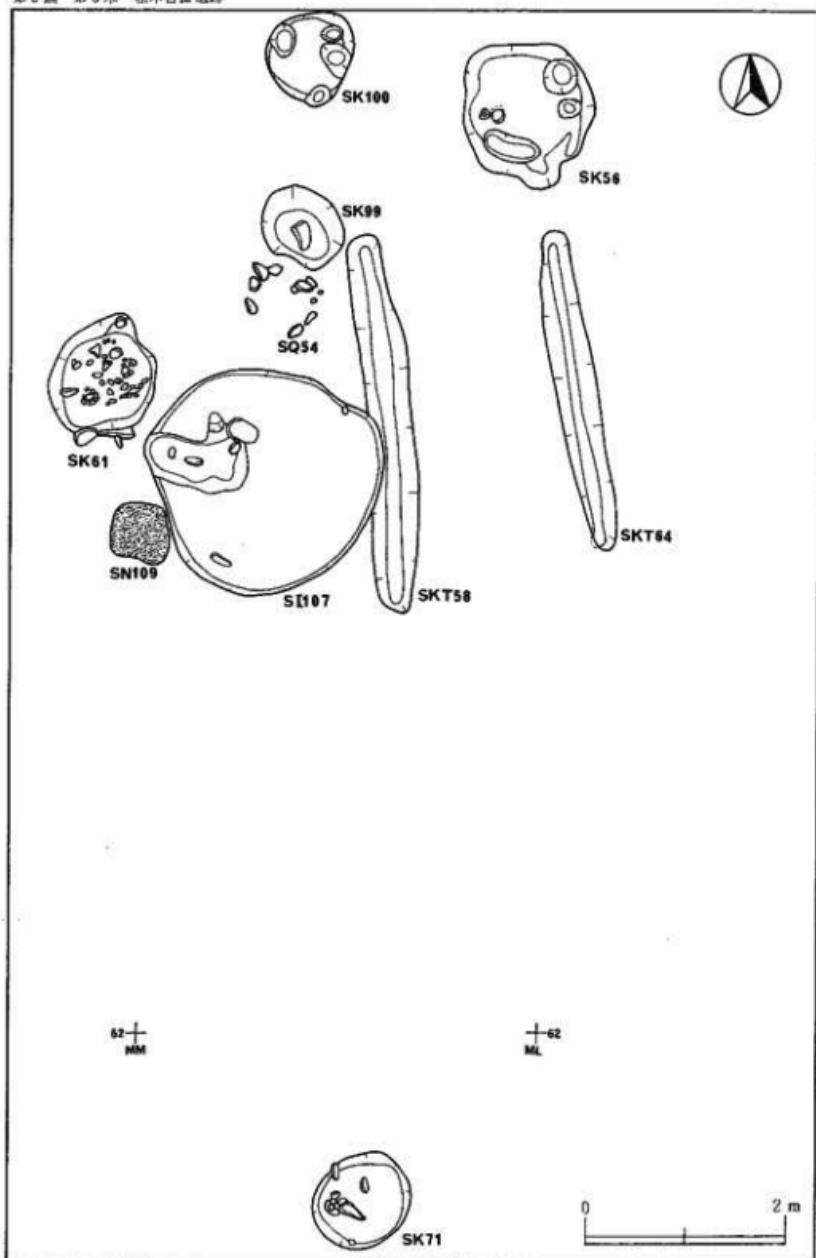
第2圖 第5次 松木台Ⅲ遺跡



第72圖 土壙内出土土器



第73図 土壌内出土石器



第74図 V区遺構配置図

SK56(第75図)

径約1.3mのはば円形であるが、上面プランでは、不整なラインを示している。深さは0.16mで、底面は平坦であるものの大小のピットがあり、東側のピットは土壤底面から10cmほどの深さがある。埋土は暗褐色土(7.5YR 3 / 3 · 2 / 3)・褐色土(7.5YR 4 / 3)が中心で焼土・炭化物が混入し、土器片も含まれる。

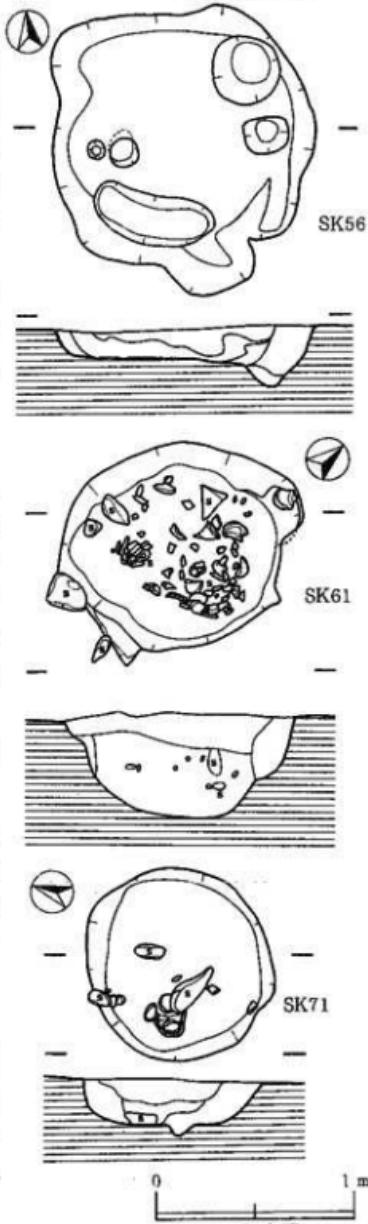
出土土器(第77図1~4、図版57): 1~3は胎土に粗い砂粒を含むが焼成は良好である。縄文は1~3がRLで、2はLRである。また4は半齒状文の施された鉢形土器の口縁部破片である。

SK61(第75図、図版45)

径約1.0mの円形を呈しているが北側で一部張り出している。深さは0.5mで底面は丸みをおび、壁はやや傾斜をもって立ち上がる。埋土は黒褐色土(7.5YR 3 / 3)と褐色土(7.5YR 4 / 2)で後者には多量の土器片や礫が混入している。確認面では南側に大型の疊があり、土壤内にも、特に褐色土層から底面にかけて多量の礫と土器片が検出される。

出土土器(第77図5・6): 5は台付鉢形土器体部下端から台部のものである。RL縄文の施される体部は、下端で一条の沈線によって、無文部と画される。台部は丸くふくらみながら一度ゆるくすぼまり、さらに裾開きの下端に至る。6は深鉢形土器の体部下端から底部破片で縄文はRLである。この他、深鉢形土器の破片が多く出土している。

出土石器(第78図1・2、図版57): 1は有茎の石鎌で、茎部は折損しているものの基部付近にアスファルトの付着が認められる。2は上端がやや薄く平べったくなってしまっており、全体に押圧剥離を施しており先端部は折損している。断面形からすると石匙というよりは石鎌と考えられる。両者とも頁岩である。



第75図 SK56・61・71土壤

SK71（第75図、図版44）

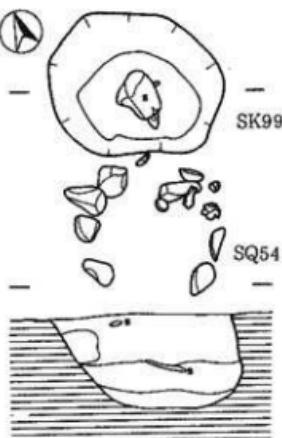
径約1.0mの円形を呈し、深さ0.22mで、壁は北側ではほぼ垂直に、南側ではやや傾斜して立ち上がる。底面は平坦で、中央には径10cm、土壤底面からの深さ8cmほどの小ピットがある。埋土は黒褐色土(10YR 2/3)・暗褐色土(10YR 3/4)で、底面に近くなるにつれて大小の礫や土器片が多量に出土する。

出土土器（第77図7～10、図版57）：いづれも深鉢形土器の破片で、胎土・焼成とも良好で7～8はRL繩文、9はLR繩文で、10は複節繩文である。

出土石器（第78図3、図版57）：継長の剥片を使用してつまみ部に抉りを入れ、その他は側辺部に軽い押圧剥離を施した継長の石匙である。主要剥離面には全く調整が行なわれていない。

SK99（第76図、図版45）

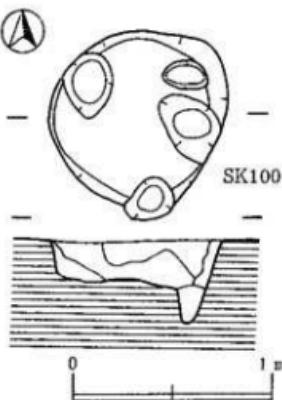
長軸0.8m、短軸0.7mの楕円形を呈し、深さ0.5mで壁は北側では傾斜して、南側ではやや内傾して立ち上がる。埋土は、黒褐色土(10YR 2/2)であるが、炭化物と焼土の含有率によって3層に分隔できる。土壤のはば中央部で、底面から20cmほど浮いて大型の礫が検出される。土壤南側で、径約0.75mの円形を呈する配石遺構(SQ54)と接しているが断面観察から土壤が埋まってから（あるいは埋められてから）造られたものである。配石に使用される礫は全く加熱していないが礫の長軸方向を立てている。



出土土器（第77図15～18、図版57）：胎土・焼成とも良好な同一個体の破片で、細密なRL繩文が施されている。

SK100（第76図、図版45）

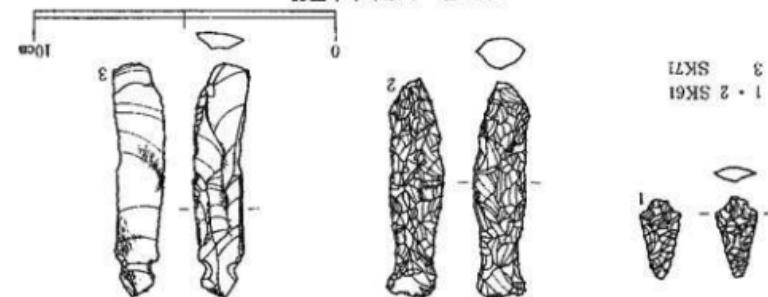
径約0.9mのほぼ円形を呈し、深さ0.2mで、底面はやや起伏しており、壁はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は黒褐色土(7.5YR 2/2・3/2)・暗褐色土(7.5YR 3/2)で底面には径20cm前後の浅いピットがあり、東側のピットは土壤底面からの深さが20cmほどである。



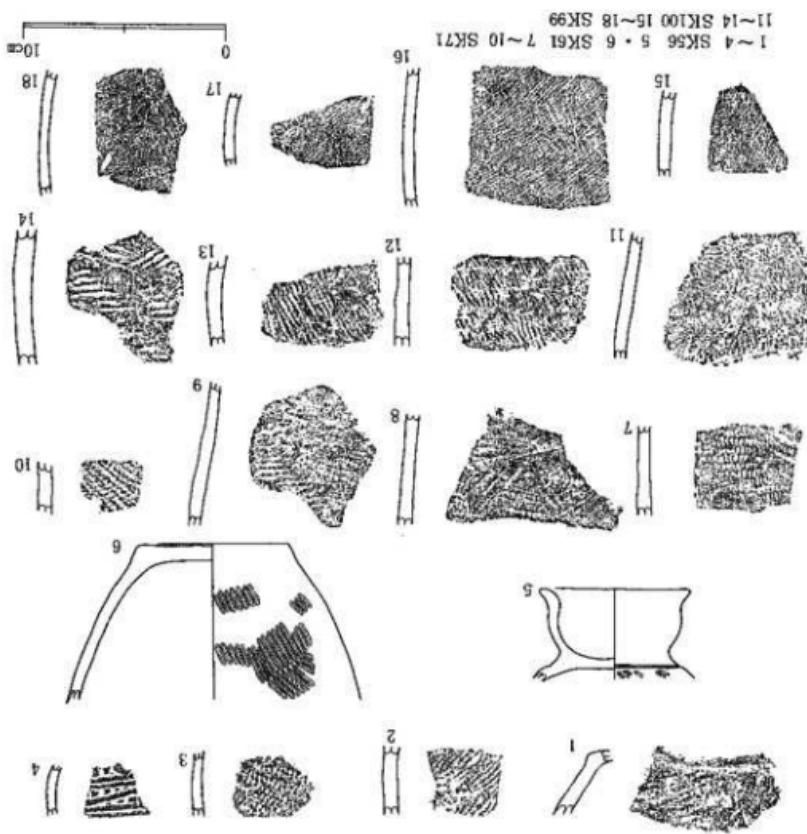
出土土器（第77図11～14、図版57）：胎土・焼成とも良好な土器で、11～13は同一個体でRL繩文、14はLR繩文の短い原体を使用している。

第76図 SK99、100土壤・SQ54配石遺構

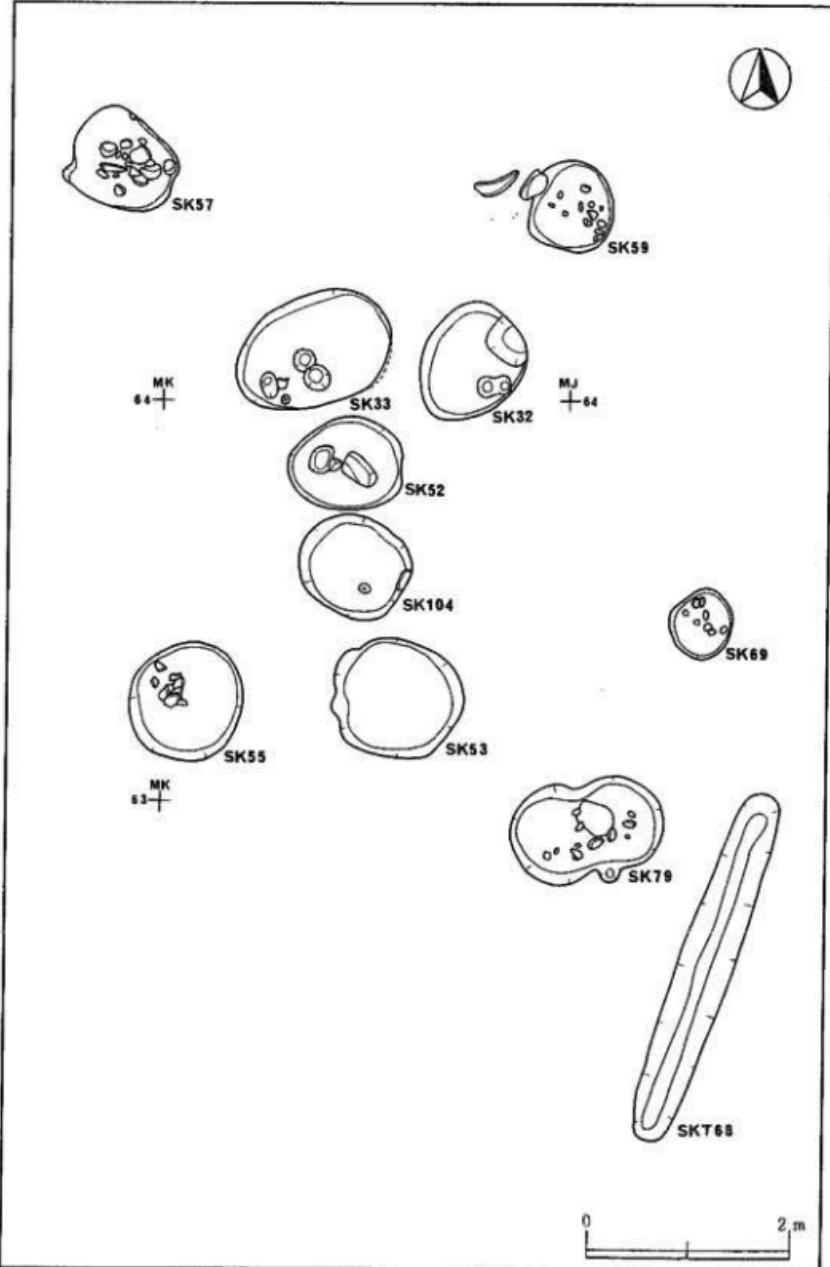
第76圖 土壤內出土石器



第77圖 土壤內出土土器



第2圖 紹興◎記錄



第79図 VI区遺構配置図

SK32(第80図)

長軸1.2m、短軸1.0mの楕円形を呈し、深さ0.2mで、底面は中央部がやや高くなり、東側に緩く落ち込み、2つの小ピットがある。壁はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は黒褐色土(10YR 2/2・2/3)が主で、黄褐色土(10YR 2/3)が壁際に堆積している。

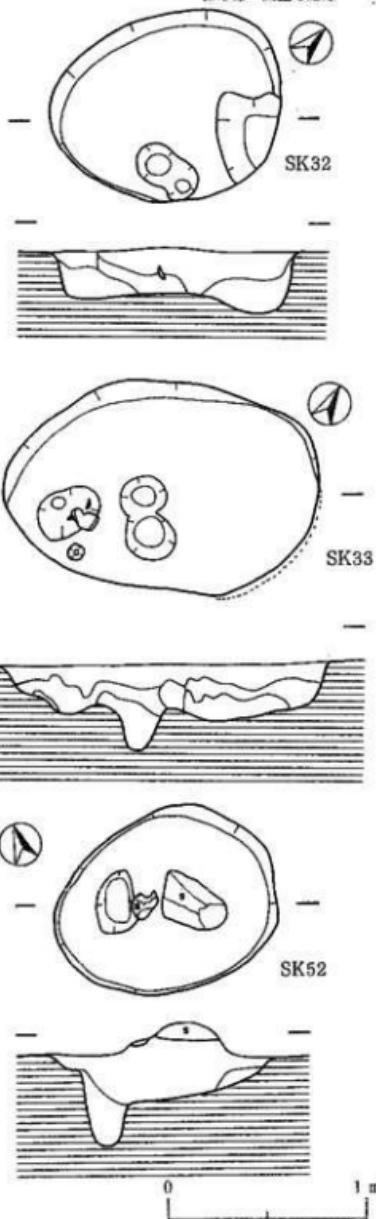
出土土器(第83図1~3、図版56): 1は黒色を呈する無文の破片で、2は外反する口縁部を有する深鉢形土器の破片であろう。

SK33(第80図)

長軸1.6m、短軸1.0mの楕円形を呈し、深さ0.3mで底面には起伏があり、壁は傾斜して立ち上がる。埋土は黒褐色土(7.5YR 3/2)・暗褐色土(7.5YR 3/2)などで炭化物を多く含んでいる。底面中央には径20cmほどの2つの小ピットがあり、そのうちの1つは土壤底面より20cmほど深い。また底面西側には浅いピットがあり、これから鉢形土器(第83図4、図版58)が出土している。この鉢形土器は、外反する口縁から一度すばまって直線的に底部に至るものである。口縁部には小さな刻みが施され、頸部には4条の沈線、体部にはRL繩文が施される。

SK52(第80図、図版46)

長軸1.1m、短軸0.9mの楕円形を呈し、深さ0.4m、底面は丸みをもち、壁は緩やかに立ち上がる。埋土は黒褐色土(7.5YR 3/2)で、炭化物や焼上がり混入している。確認面で土壤中央部には大型の礫が配され、また底面の西側には径20cm、土壤底面からの深さ30cmほどのピットがあり、埋土は炭化物が多量に混入する極暗褐色土(7.5YR 2/2)である。



第80図 SK32、33、52土壤

SK53 (第81図)

径約1.3mの円形を呈し、深さ0.3mで底面は平坦である。壁は東側では凹凸をもちながらもほぼ垂直に、西側では傾斜をもって立ち上がる。埋土は上面中央に地山土である褐色土(10YR 4/4)がブロック状にあって、以下は黒褐色土(10YR 2/3・2/2)が主である。

出土土器(第83図5~8、図版56)：平縁で直立ないしは外反する口縁を有する鉢形土器の破片であろう。5・8がLR、6・7・9はRL繩文である。

SK55 (第81図、図版46)

径1.1mの円形を呈し、深さ0.7mで、底面は平坦で堅く、壁はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は黒褐色土(10YR 2/2)で、炭化物の含有率などから分層できる。確認面で土壤中央部や北西よりに大型の疊があり、その下にも底面まで小疊が混入している。

SK59 (第81図)

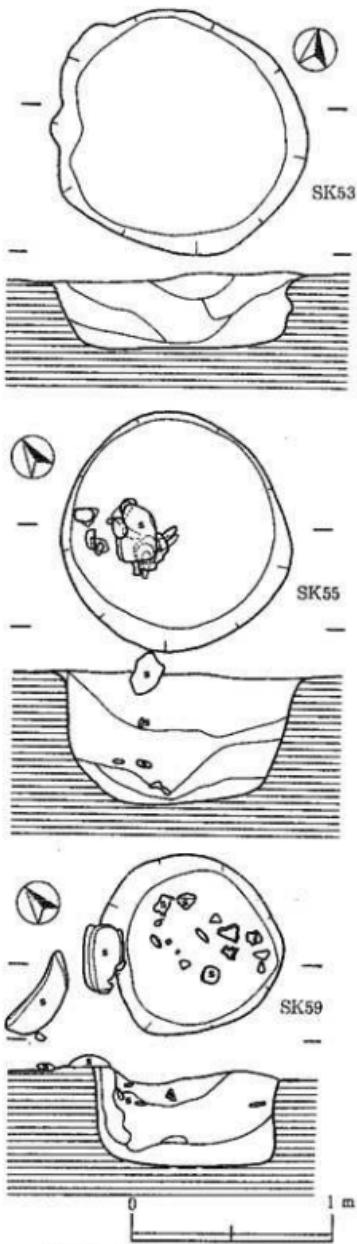
径約0.9mの円形を呈し、深さ0.5mで底面は平坦である。壁は、北側ではほぼ垂直に南側では袋状のラインを示す。埋土は黒褐色土(7.5YR 3/1・2/2)・暗褐色土(10YR 3/4)が主で、埋土中には全体的に炭化物・焼土・小疊・土器片が多量に混入している。確認面で土壤よりやや北西よりに大型の疊が2個ある。

出土土器(第83図12・13、図版46)：同一個体でRL繩文施文後沈線によって渦巻状の文様が描かれ、器面には赤色の漆が塗られている。

SK69 (第82図)

径約0.7mの円形を呈し、深さは0.1mほどで、底面は南側から北側に向かって高くなり、壁は緩やかに立ち上がる。埋土は暗褐色土(7.5YR 3/3)で炭化物・土器片・小疊が多量に混入している。

出土土器(第83図10・11)：胎土に砂粒を含むものの焼成は良好である。10はLR、11はRL繩文である。



第81図 SK53、55、59土壤

出土石器（第88図1・2、図版56）：1は縦長の剥片の両側縁に押圧剥離を施し、2は厚みのある剥片の主要剥離面に押圧剥離を施している。

SK79（第82図）

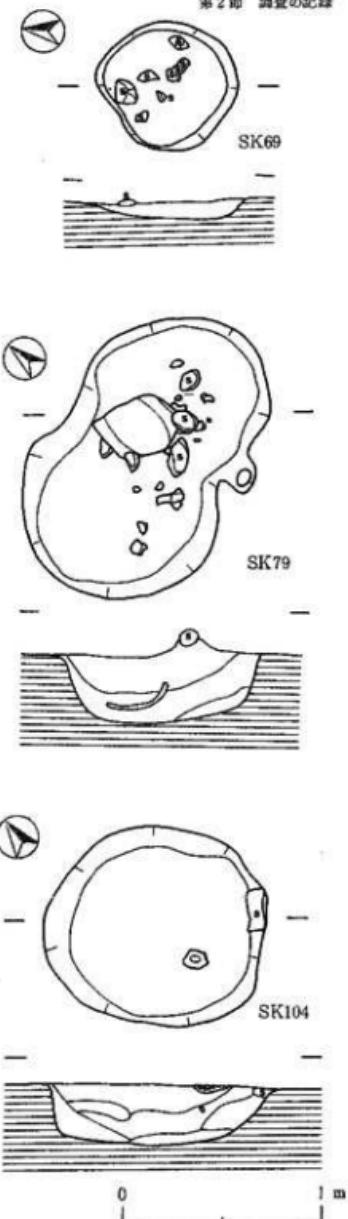
長軸1.5m、短軸0.8mの楕円形を呈し、深さ0.4m、底面は平坦で堅くしまっており、壁はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は黒褐色土（10YR 2/3）で炭化物・土器片などの含有率によって分層できる。炭化物・土器片・小礫が上層ほど多く混入している。確認面よりやや上で土壤のはば中央部に円窓があり、また底面より10cmほど浮いて、深鉢形土器の板状の破片がある。

出土土器（第83図14～17、図版56）：16を除けば、鉢形土器の破片であろう。原体は14～16がRL 17がLR縄文である。

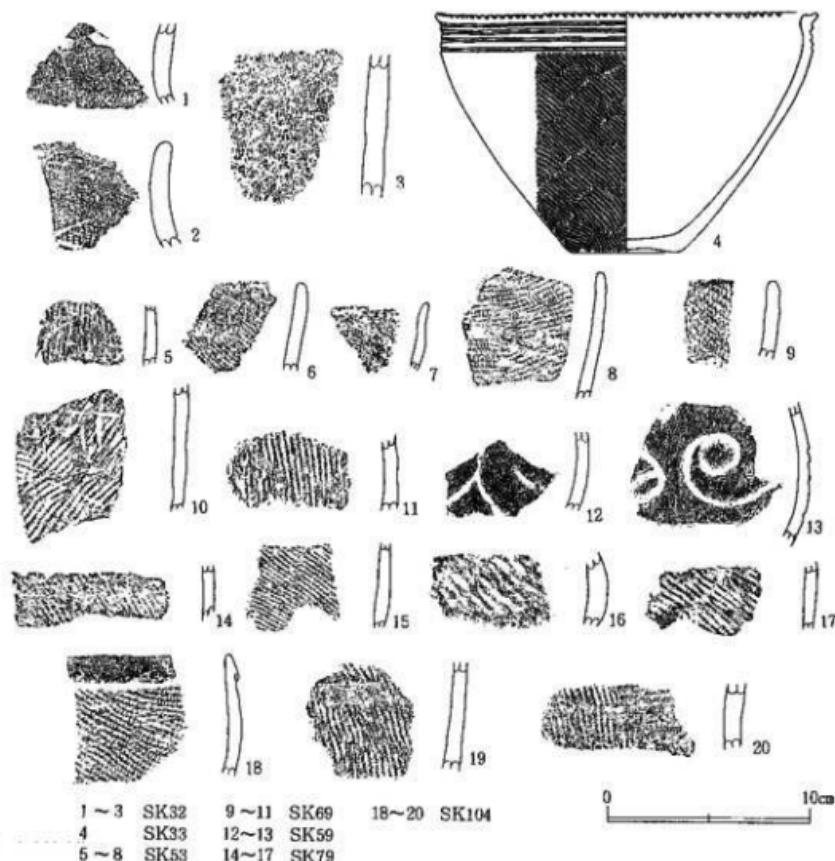
SK104（第82図、図版46）

径約1.0mの円形を呈し、深さ0.3m、底面は平坦で、壁は西側では垂直に、東側では傾斜して立ち上がる。埋土は黒褐色土（7.5YR 3/2・3/1）・ぶい黄褐色土（7.5YR 5/3）が主である。確認面で土壤中央やや東よりに、径15cmほどの範囲に焼土が広がり、さらにその東側には疊がある。

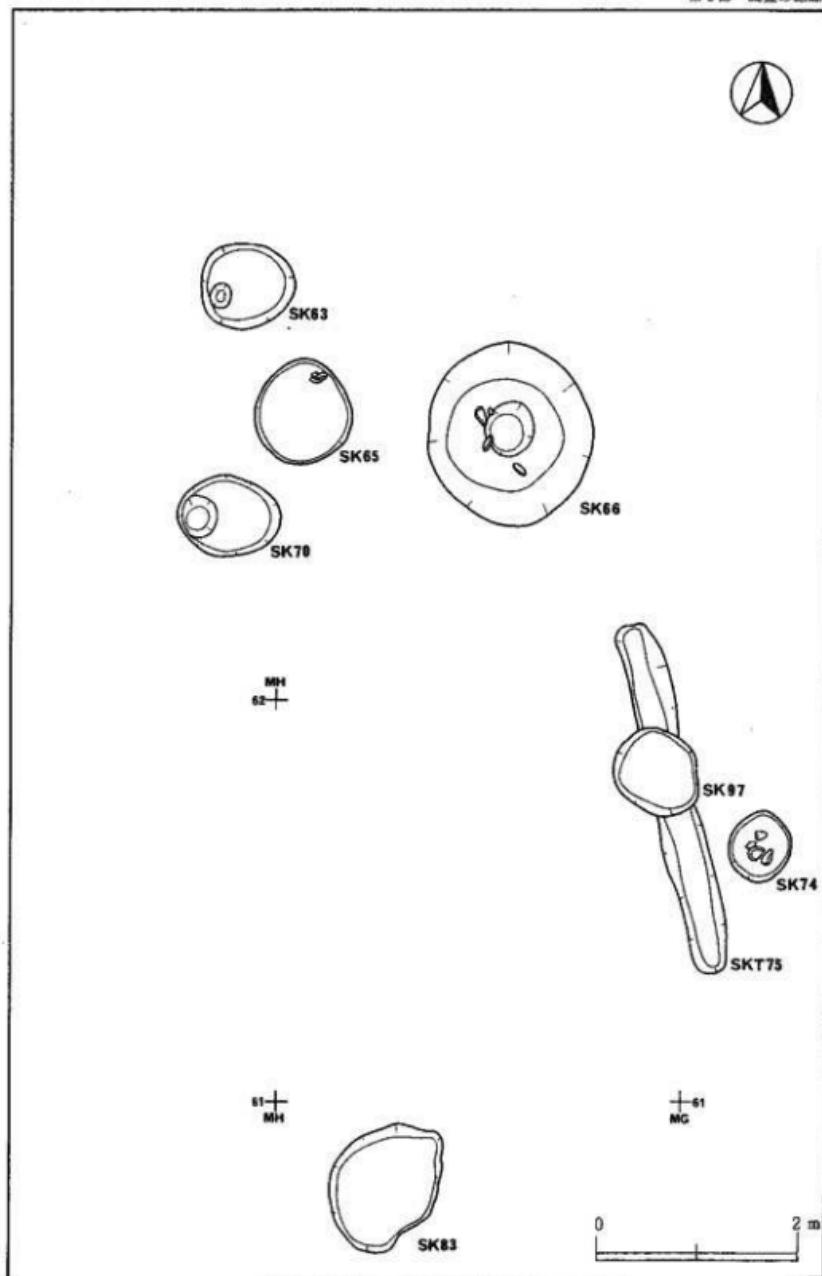
出土土器（第83図18～20、図版56）：18は胎土・焼成の良好な深鉢形土器口縁部破片である。直立する口縁は折り返しとなり体部にはRL縄文が施される。19・20は、同一個体で二次火熱を受けて赤変している。原体はRL縄文である。



第82図 SK69、79、104土器



第83図 土壌内出土土器



第84図 VII区遺構配置図

SK63(第85図)

径約0.9mの円形を呈し、深さ0.2m、底面は東側に向かって高くなり、壁は緩く立ち上がる。埋土は暗褐色土(10YR 3/4)・にぶい黄褐色土(10YR 4/3)であり、土器片などの混入は認められない。底面西側の壁際には径20cmほどの浅いピットがある。

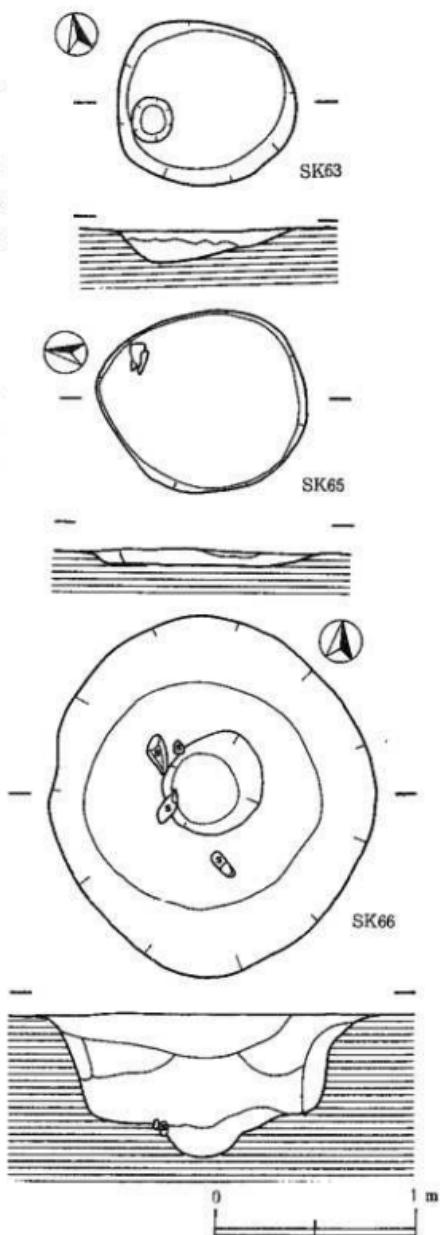
SK65(第85図)

長軸1.1m、短軸0.9mの椭円形を呈し、深さ0.1m、壁は緩く立ち上がる。埋土は黒褐色土(10YR 3/2)・暗褐色土(10YR 2/3)で比較的締まりがあり、全体に炭化物や土器細片が混入している。

出土土器(第87図1~3、図版57)：1は直立する口縁部をもつ鉢形土器で、口縁部は小波状を呈し、文様帶には入組状の三叉文が描かれる。2は小波状の口縁に突起が付き、外反する口縁から一度「く」の字形に屈曲して最大径のある体部上端に至るものである。頸部には羊齒状文が、体部にはLR繩文が施される。

SK66(第85図、図版47)

上面は長軸1.8m、短軸1.6mの椭円形で、底面は径1.2mほどの円形を呈している。深さ0.6m、堅くて締まりのある底面から壁はやや外に開きながら立ち上がる。埋土は土壤上面で地山土である褐色土(7.5YR 4/3)が広い範囲に認められ、その下には黒褐色土(10YR 3/2)が堆積している。全体的に炭化物や焼土が多量に混入している。底面には径50cm、土壤底面からの深さ約20cmのピットがあり、このピットの上面には大小の礫が認められる。また土器片が底面よりやや浮いた状態で検出される。



第85図 SK63、65、66土壤

出土土器（第87図4～7、図版57）：4は直立する口縁からわずかにふくらみながら、体部に至る鉢形土器である。口縁部は小波状を呈し、文様帯には刺突による小波状文と2条の沈線がひかれ、体部にはRL+LRの羽状繩文が施される。5は外反する口縁から一度ゆるくすぼまって最大径のある体部上端に至る鉢形土器である。小波状の口縁部には2個1対の突起があり、頸部には入組状の三叉文が引かれており、LR繩文施文の体部とは、2条の沈線によって画される。6も同一個体である。7は粗い胎土ではあるが焼成の良好な小型の壺形土器の破片であろう。大きく外反する口縁部、無文の頸部、体部にはLR繩文が施される。

出土石器（第88図3、図版56）：不定形の剥片の縁辺部のみに剥離を施している。

SK70（第86図）

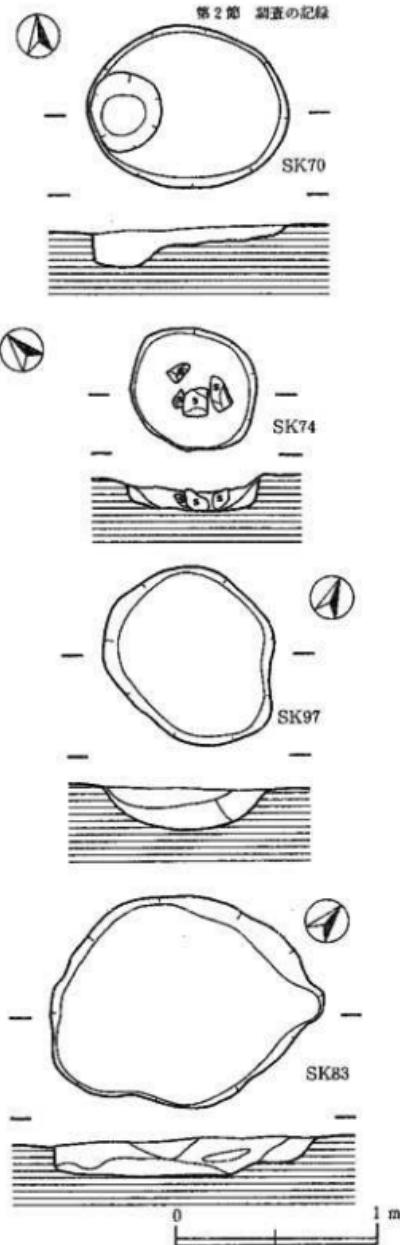
長軸1.0m、短軸0.8mの梢円形を呈し、深さ0.1mで、凹凸のある底面から壁はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は暗褐色土（10YR 3/3）で、炭化物・焼土・土器片の混入は認められない。底面西侧には壁際に径約40cm、土壤底面からの深さ10cmほどのピットがある。

SK74（第86図、図版47）

径約0.6mの円形を呈し、深さ約0.2mで、平坦な底面から壁はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は黒褐色土（10YR 3/2）・暗褐色土（10YR 3/3）で炭化物が多量に混入する。底面中央部には大型の疊が3個まとまって検出される。

SK97（第86図）

長軸0.9m、短軸0.75mの梢円形を呈し、丸みのある底面から壁はゆるいカーブを描いて立ち上がる。埋土は黒褐色土（7.5Y R 3/2）・にぶい黄褐色土

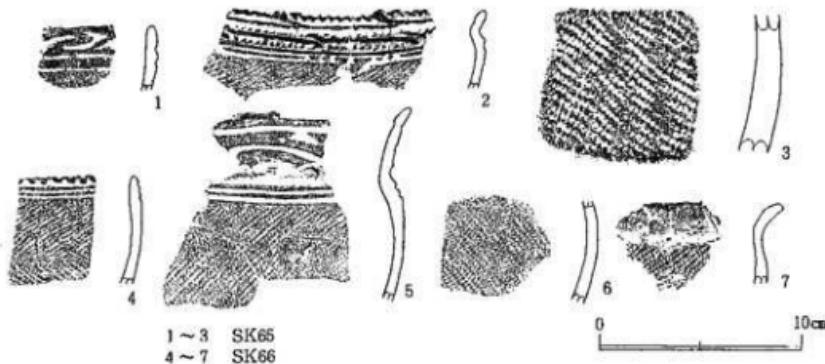


第86図 SK70、74、97、83土壤

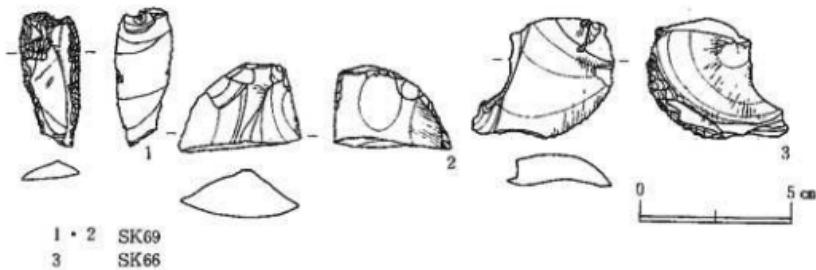
(10YR 4 / 3) で縮まりがあり、炭化物が少量含まれる。SKT75を切っている。

SK83 (第86図)

長軸1.4m、短軸1.1mの橢円形を呈するが上面プランは不整なラインを示す。深さは0.2mではほぼ平坦な底面から、壁は南西側では垂直に北東側ではゆるく立ち上がる。埋土は暗褐色土(10YR 3 / 4)・黒褐色土(10YR 3 / 2)で、地山土である褐色土(10YR 3 / 2)がブロック状に混入している。



第87図 土壌内出土土器



第88図 土壌内出土石器

SK72 (第89図)

径約1.3mの円形を呈し、深さ0.3mで、底面はわずかに起伏があり、壁は傾斜をもって立ち上がる。埋土は黒褐色土(7.5YR 3/1)と褐色土(7.5YR 4/4)で締まりのある土である。底面北側に小疊が2個ある。

SK87 (第89図)

径約0.8mの円形を呈し、深さ0.14mで底面はほぼ平坦で壁は緩く立ち上がる。埋土は炭火物や焼土を含む暗褐色土(7.5YR 3/3)と褐色土(7.5YR 4/4)である。

SK140 (第89図)

長軸1.3m、短軸1.0mの楕円形を呈し、深さは中央部で0.1m、底面はゆるい起伏があり壁は傾斜をもって立ち上がる。埋土は締まりのない暗褐色土(10YR 3/3)と褐色土(10YR 4/6)である。底面南側には赤色(10R 4/8)の粉末が径約20cmの範囲に検出され、さらにその中からヒスイの玉が出土している。玉は11.7mm×8.5mmで厚さ5.5mm、風化が進んでいるものの部分的に透明感のある緑色が残っている。穿孔は片面から行なわれている。

SK142 (第89図)

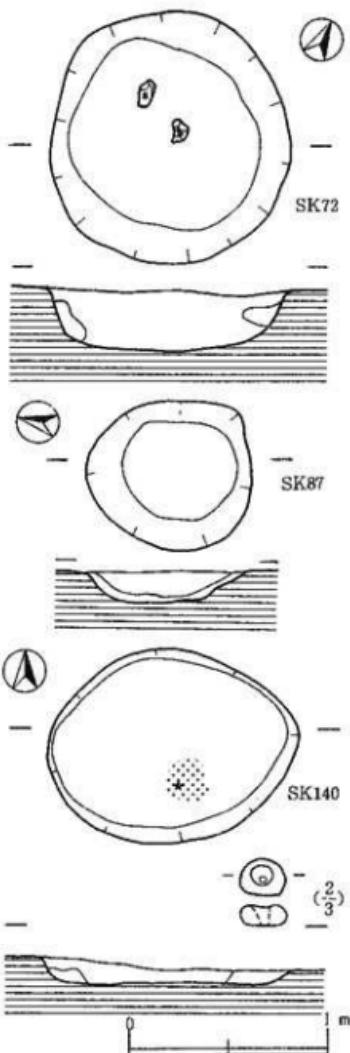
径約0.75mの円形を呈し、深さ0.2mで底面は堅くしまっており、壁は垂直に立ち上がる。埋土は暗褐色土(10YR 3/3・3/2)で炭火物・焼土が含まれる。

SK143 (第89図)

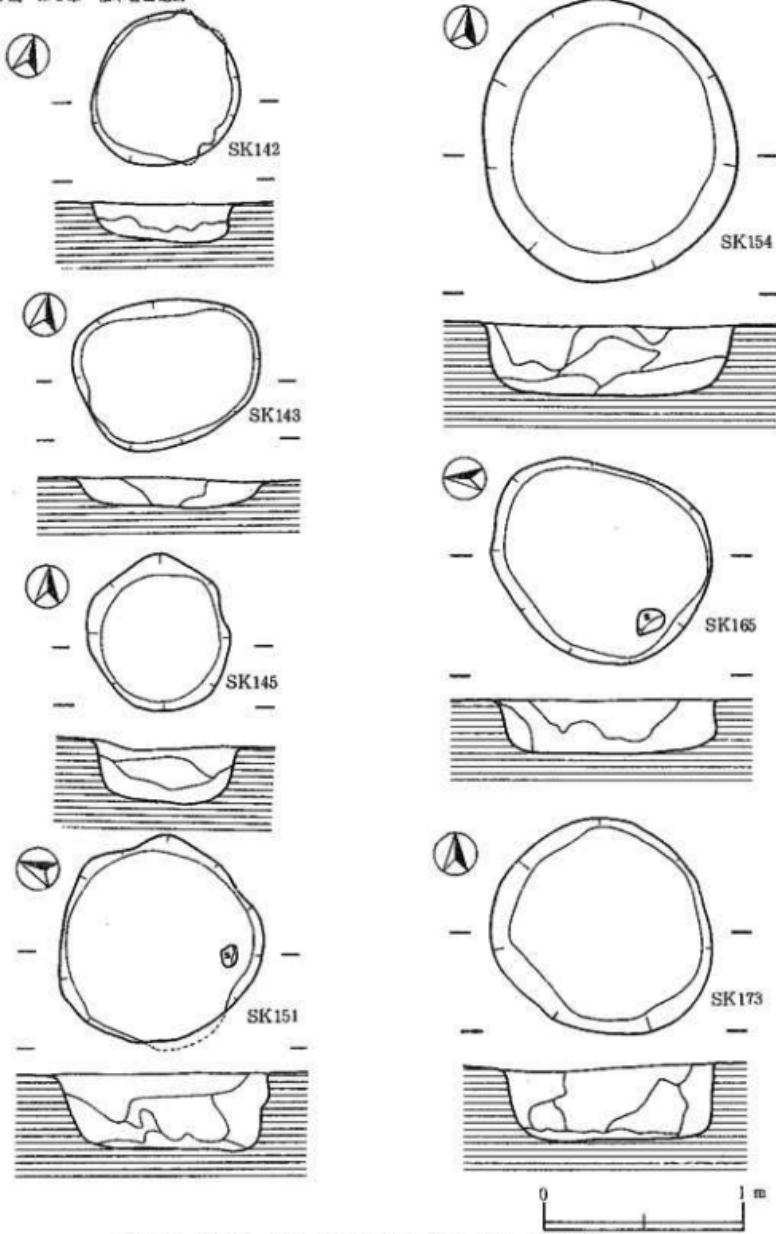
長軸0.9m、短軸0.7mの楕円形を呈し、深さ0.14mで底面は平坦で、壁は傾斜をもって立ち上がる。埋土は黒褐色土(10YR 2/3)・暗褐色土(10YR 3/4)・横褐色土(10YR 5/6)で全体的に炭火物が混入している。

SK145 (第89図)

径約0.8mの円形を呈し、深さ0.3mで底面はほぼ平坦で壁は傾斜をもって立ち上がる。埋



第89図 SK72、87、140土壤



第90図 SK142、143、145、151、154、165、173土壤

土は暗褐色土（10YR 3／3）・黒褐色土（10YR 2／2・3／2）で上面ほど炭火物が多く含まれる。

SK151 (第90図)

径1.0mの円形を呈し、深さ0.4mで底面はほぼ平坦でやや傾斜をもって立ち上がる。埋土は極暗褐色土（7.5YR 2／2）が上面にあり、炭火物が多量に混入する暗褐色土（7.5YR 3／3）が壁に沿って堆積しており、底面には薄く地山土である明褐色土（7.5YR 5／6）がボソボソの状態で堆積している。

SK154 (第90図)

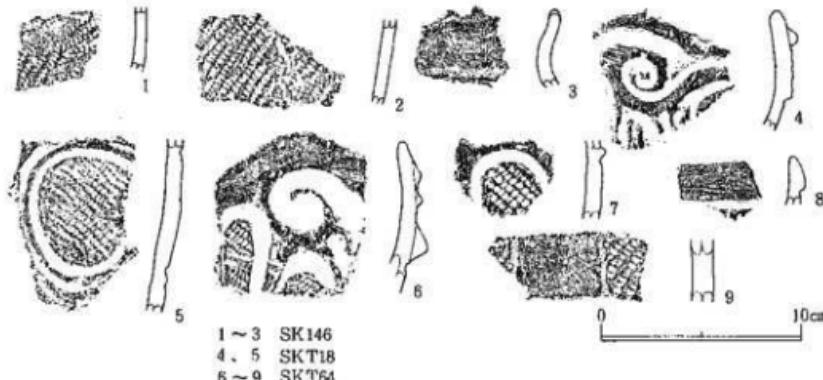
径約1.4mの円形を呈し、深さ0.4m、底面は平坦で堅く締まっており、壁はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は土壤中央部に黒褐色土（7.5YR 3／1・2／2）があり、壁際には灰褐色土（7.5YR 4／2）が堆積している。底面には地山土である褐色土（7.5YR 4／4）が薄く認められる。

SK165 (第90図)

長軸1.2m、短軸0.9mの橢円形を呈し、深さ0.3mで底面は平坦で壁はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は炭化物を含む黒褐色土（7.5YR 2／2・2／3）で、壁際は部分的に、いよいよ黄褐色土（10YR 4／3）がブロック状に入り込んでいる。

SK173 (第90図)

径約1.1mの円形を呈し、深さ0.36m、底面は平坦で堅く締まっており壁は垂直に立ち上がる。埋土は炭化物を含む黒褐色土（7.5YR 2／2・2／3）で、底面には暗褐色土（10YR 3／3）が薄く堆積している。



第91図 フラスコ状ピット・Tピット出土土器

フ拉斯コ状土壤（第92図、図版49）

壙口部よりも壙底部が広くなり、断面形上の最大径が壙底部かそれよりやや上にあり、円形の壙口部から一度径が小さくなり、緩やかなカーブを描いて底部にいたる土壤である。

調査では5基確認され、調査区北端中央部より東側に点在しているSK146を除けば遺物は出土していない。

SKF141

壙口部径0.8m、最小径0.7mで壙口部よりやや下の位置にあり、最大径は0.9mで壙底面より少し上にある。壙底面は径0.8mで堅く平坦である。埋土はほぼ水平な堆積を示し、暗褐色土(10YR 3/3)と黒褐色土(10YR 3/2)が互層をなしている。特に最下層の黒褐色土層は堅く締りがある。

SKF150

壙口部径1.2m、最小径はほぼ中位にあり1.1m、最大径は1.2mで壙底部にある。埋土は黒褐色土(10YR 2/3・2/2)・暗褐色土(10YR 3/3)などでこれらが大きなブロック状で入り込んでいる。また壁際には地山土の崩壊土と考えられる褐色土(10YR 4/4)がブロックで混入している。

SKF172

壙口部径0.9m、最小径は壙口部の直下でわずかにすばまり、最大径は1.1mで壙底部のやや上にあり、底面は中央部が盛り上がっている。埋土は暗褐色土(10YR 3/3・3/4)・黒褐色土(10YR 2/2)でそれぞれがブロック状に入り込んでいる。

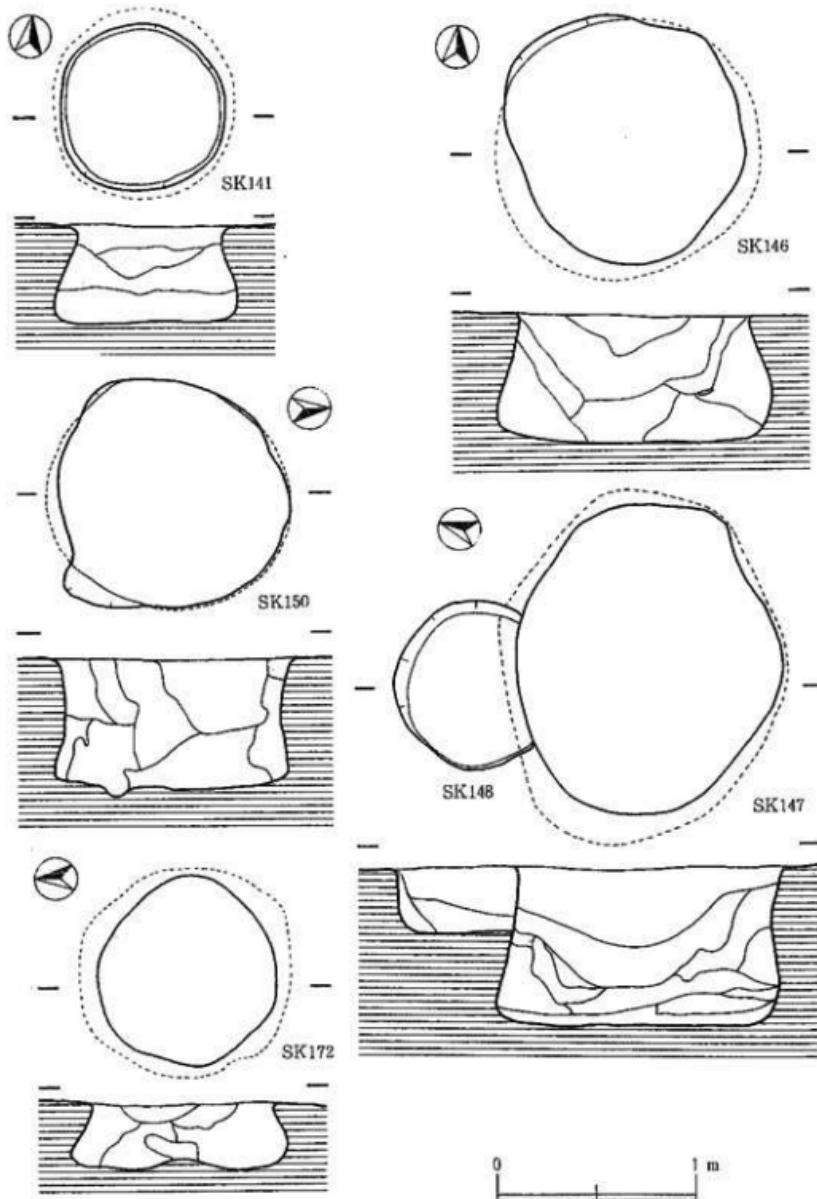
SKF146

壙口部径1.2m、最大径1.3mで壙底部より上位にあり断面形は壙口部から直線的で、深さ0.65mで底面は堅く締まっている。埋土は黒褐色土(7.5YR 2/3・2/3)で中央部には地山土である褐色土(7.5YR 4/3)がブロック状に入り、特に上面の褐色土は径60cmの範囲に広がっている。

出土土器（第91図1～3）：砂粒を含んだ胎土で焼成も良好である。1はLR繩文、2は綾繩文のあるLR繩文である。3は外反する口縁から頸部で屈曲し、胴部でふくらむ鉢形土器であろうか、口縁には粘土粒貼付による2個1対の突起がつく。

SKF147

壙口部は長軸1.6m、短軸1.3mの梢円形を呈し、壙底部も同様で長軸1.8m、短軸1.4mである。最小径は1.2mでほぼ中位にあり、最大径は底面のやや上位にある。深さは1.8mで底面は堅く締まっている。埋土は黒褐色土(7.5YR 3/2)・黒色土(7.5YR 2/1)が中心で全体的に炭化物が混入している。また壁際には地山土の崩落した明褐色土(7.5YR 5/6)のブロックが認められる。底面には薄く極暗褐色土(7.5YR 2/3)が堆積している。



第92図 SK141、146、150、147、148、172 フラスコ状土壤

Tピット（第93～95図）

検出された15基のTピットは、調査区の北側に長軸を南北にして東西に並んでいる。いづれも大きさには差があるものの形態はほぼ同じである。

平面形は細長い椭円形を呈し、縦断面では両端はほぼ直線的に底面に達している。横断面は「V」字形を呈していて、底面は極めて狭小である。埋土状況は黒色系の土と地山土である褐色系の土が互層をなして堆積している。

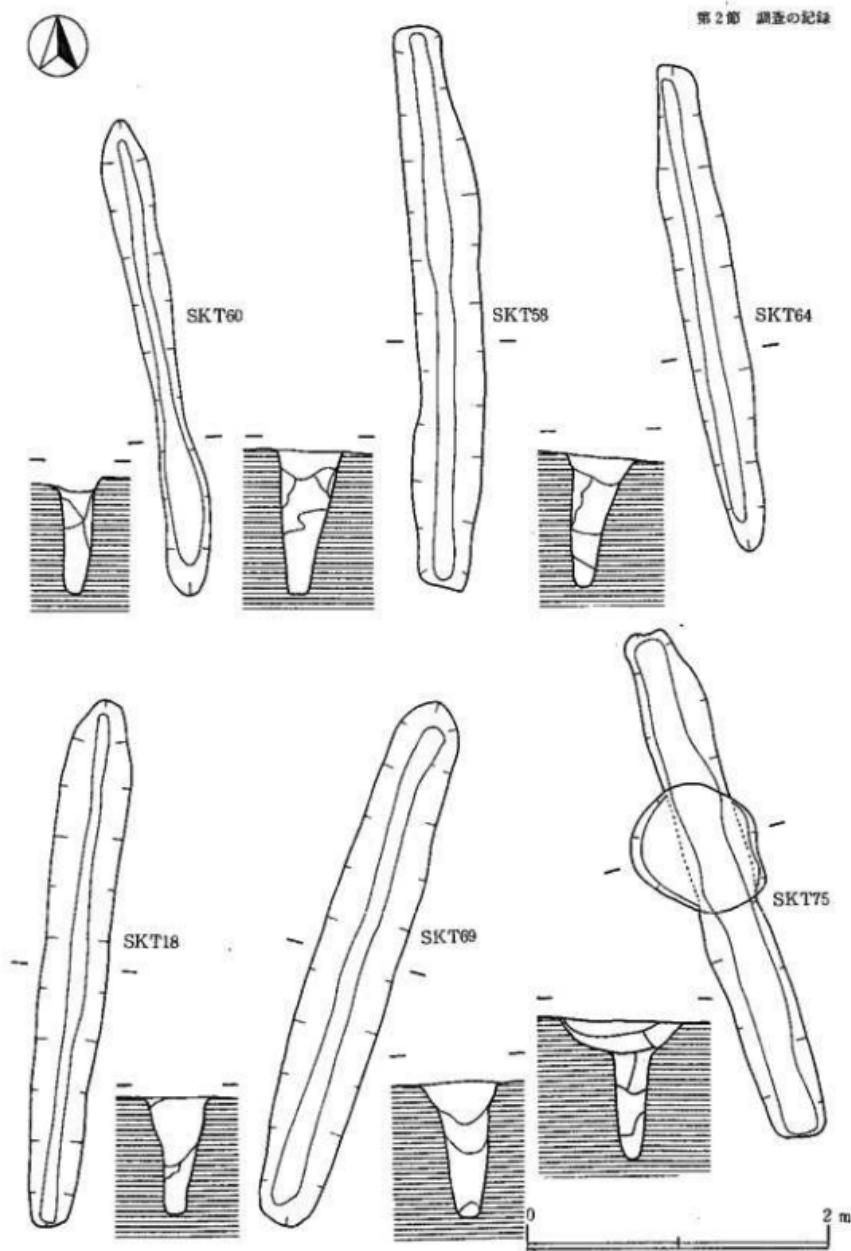
Tピットの平面的分布をみると、15基はそれぞれ数基ずつまとまりがありその中では主軸方向はほぼ一定であり、大きく逸脱するものはない。特にSKT60・58・64、SKT75・49・48のグループではこの傾向が顕著である。また他の遺構との関係では、SKT60がSI107に、SKT49がSK72に、SKT75がSK97によって切られている。

出土遺物は極めて少ないが、SKT18・64から土器（第91図4～9）が出土している。波状の口縁をもつキャリバー形の深鉢形土器で、波頂部には渦巻文が表出され体部には縦方向の太い沈線による椭円形の区画文が施される。9を除けば全てLR細文である。

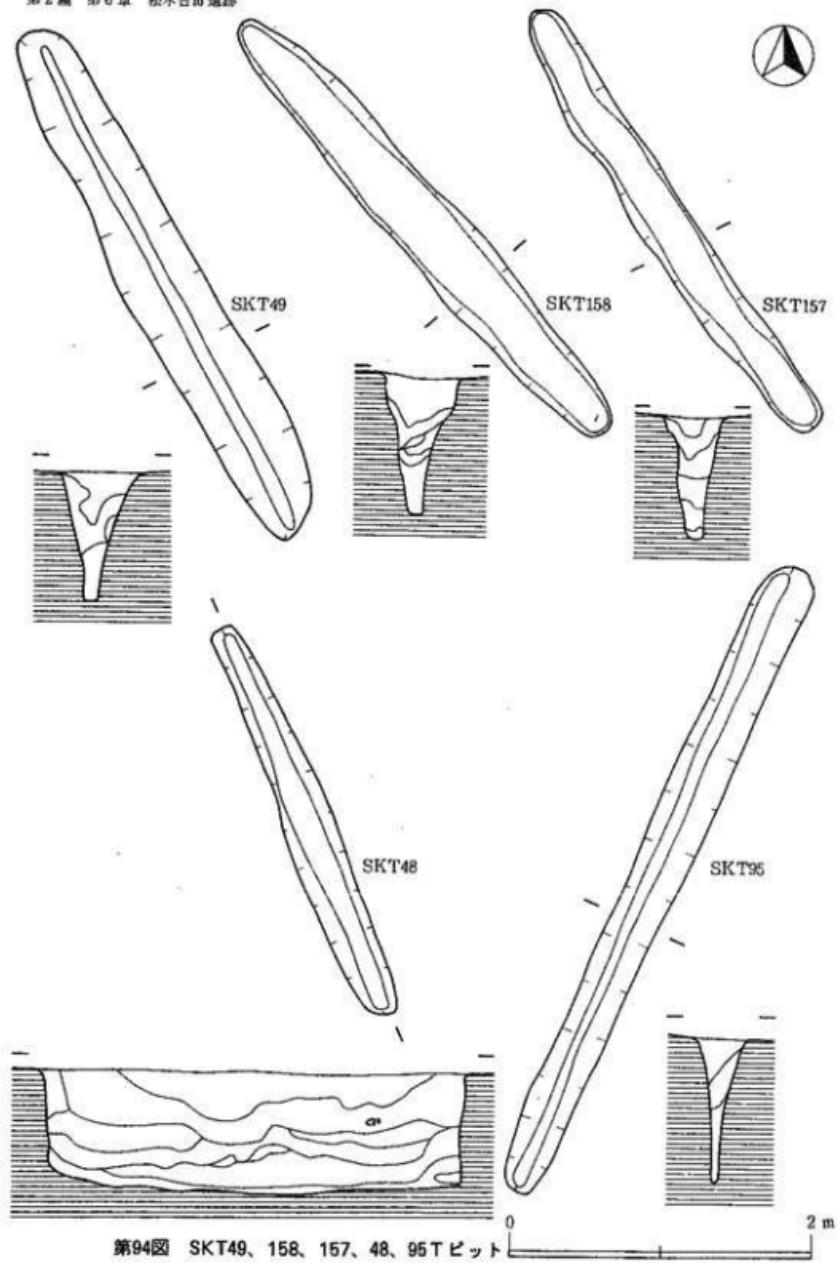
第2表 Tピット一覧表

番号	長軸(上)	長軸(下)	短軸(上)	短軸(下)	深さ	磁北との角度	備考
60	320 cm	286 cm	30 cm	10 cm	80 cm	W-8°-N	SI 107
58	370	360	40	12	96	W-3°-N	
64	330	300	44	11	86	W-9°-N	
18	362	340	40	12	80	N-7°-E	
68	360	330	50	14	90	N-17°-E	
95	450	240	30	6	96	N-24°-E	
75	350	344	42	10	90	W-17°-N	SK 97
49	380	360	50	10	86	W-27°-N	SK 72
48	280	270	34	18	82	W-24°-N	
169	304	284	30	10	110	W-26°-N	
170	400	380	30	20	100	W-48°-N	
171	324	312	38	8	120	W-40°-N	
164	286	281	30	10	108	W-33°-N	
157	334	326	40	10	80	W-35°-N	
158	360	356	50	10	94	W-43°-N	

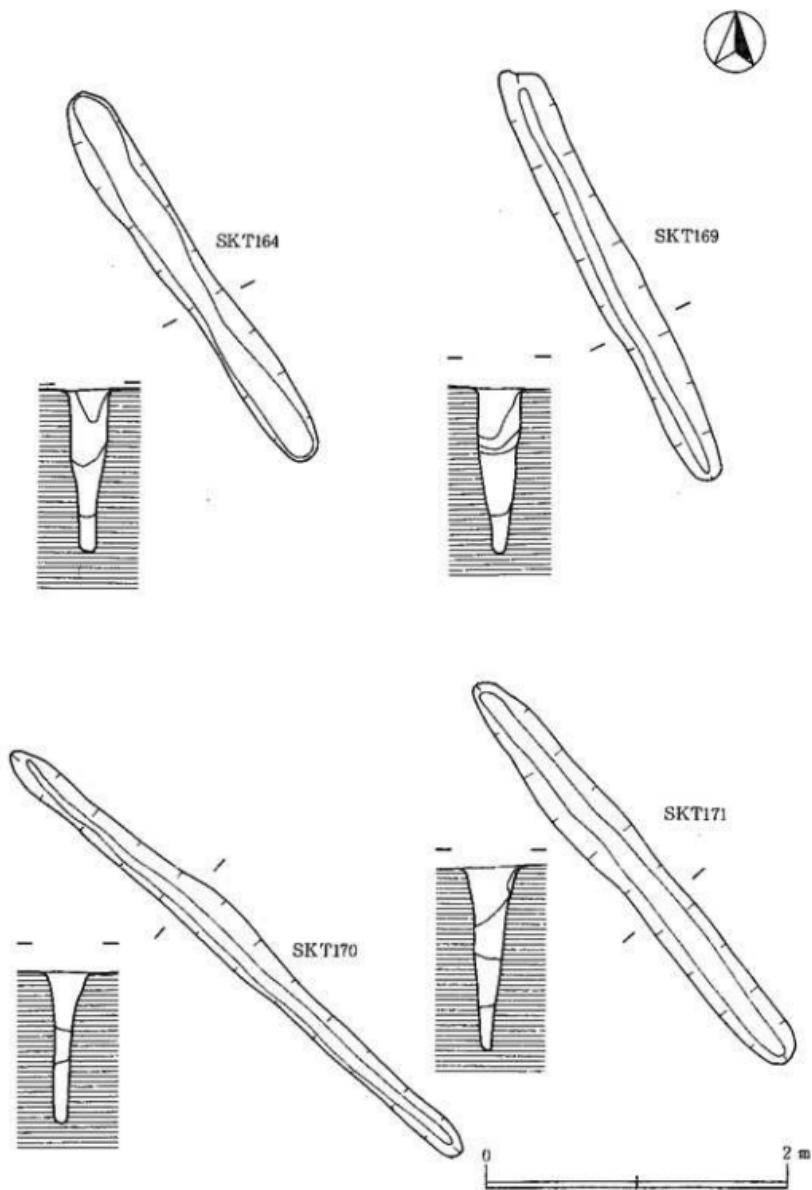
〔備考〕の遺構名はTピットを切っている遺構である。



第93図 SKT60、58、64、18、69、75 T ピット



第94図 SKT49、158、157、48、95 T ピット



第95図 SKT164、169、170、171 Tビット

(2) 遺構外出土遺物

土 器 (第96~100図、図版59~63)

調査による遺構外出土の土器は、断続的ではあるが縄文時代中期～晩期の各時期に相当し、中でも晩期の土器が多いが、完形になるのは極めて少ない。

第1群土器

第1類土器(5)：キャリバー形を呈する深鉢形土器の破片で、口縁部には2本1組の縦位の隆帯があり、これに沿ってRLの押圧縄文が施される。口縁部と体部の境にもこの押圧縄文が一条めぐっている。地文はLR縄文である。

第2類土器（1～4・6～22・25～35・37～39・97）：a. 97は内湾し、波状を呈する口縁からややすぼまって体部上半に、そこから大きくふくらみのある体部下半にいたる深鉢形土器である。波頂部には上面に2つ、左右前後にもそれぞれ1つづつの計6つの円窓をもつ球形の把手がつく。把手からは左右に橋状の隆帯が伸び、渦巻文と連結している。口縁部に沿ってもやはり貼付帶による渦巻文がありその末端は、体部に曲線的な文様を描いている2条1組の沈線とつながっている。地文はRL縄文である。

b. 1・2・4はやや内湾ぎみの口縁が鋭角的な波状になり、波頂部には貼付帶による渦巻状文があり、左右にも渦巻状文がみられる。

c. 3・8・9・12・16・25・39は体部に施された縄文が沈線によって橢円形・円形に区画される土器で、3は指頭状の浅い刺突を中心に縦方向や横方向に区画された縄文部がある。8・12・16では区画された沈線間が「凸」状となり、磨り消しも部分的には縄文を残す8・16・25がある。9・29は浅い沈線によって縄文が区画され、9は磨り消しが不充分であるが29ではやや広い無文部がある。

d. 14・20は垂下して縦に区画された縄文部に深く幅広い沈線で渦巻状文を表出している。

e. 6・7・10・11・13・18・19・21・22・25～28・30～35・37～39・99は縄文部を垂下する沈線で縦方向に区画するもので沈線間が6・27・28・31・34のように「凸」状になるものと、32・33・35のように幅広く平坦になるものとがある。垂下する沈線は体部の上下で連結して長楕円形となるが、35のように体部下端で連結しないものもある。

第3類土器(23・24)：幅広く浅い沈線によって曲線的に区画された中に充填縄文が施されるもので、磨り消しによる無文部は広くなる。外反する口縁をもつ深鉢形土器であろう。

第4類土器(41～44・98)：縄文だけの深鉢形土器である。内湾ないしは直立する口縁部が無文で折り返しとなる41・42がある。41～43はLR縄文で、44はRL縄文である。98は内湾する口縁から、上端に最大径のある体部に至り、そしてゆるいカーブを描きながら底部に至る七器で、口縁部は無文、体部にはR縄文が施される。

第2群土器

第1類土器（45～49・56～58）：条痕の施される土器でいづれも深鉢形土器である。45～49・56は先端部の堅く細い摺齒状工具による条痕が付される。条痕は幅2～3mmで5～6本が1単位である。57・58は同一個体で口縁部がわずかに外反する土器で、57では口縁部に不安定な一条の沈線がある。体部には間隔のある条痕が3～4本を1単位として曲線的に施されている。

第2類土器（36・40・50～55）：36・40はRL縄文に平行沈線が引かれ、その間を曲線的な2～3条の沈線でつなぐものである。50・53～55はR撚糸文を地文として2本1組の平行沈線を、斜位あるいは蛇行する沈線でつなぎ、全面を墨り消すものであるが部分的に撚糸文が残っているものがある。

第3類土器（59）：外反する口縁は波状を呈し、波頂部口唇には円形の刺突が行なわれる。体部上半で2条の平行沈線によって広い無文部と縄文部が画される。体部のRL縄文は沈線の後で施される。

第3群土器

第1類土器（60・63・88）：外反する口縁部と、丸みのある体部の境で一度くびれる浅鉢形土器で、口縁部には入組状三叉文、その下には玉抱き三叉文が描かれる。63・88は深鉢形土器である。63は平縁ではなく直立する口縁部には1条の刺突列があり、88では肥厚する口縁に刻みを有する突起がつき、数条の沈線が引かれる。

第2類土器（62・67～69）：外反する口縁が一度頸部ですばまり、体部上半でわずかにふくらみながら底部に至る鉢形土器である。小波状を呈する口縁には2個1対の突起が付され、文様は羊歯状文が施される。78は壺形土器で入組磨消縄文が描かれる。

第3類土器（64～66・69～77・79～86・99～101）：64～66は口縁部に羊歯状文の名残りをとどめる截根列のある浅鉢形土器で、口縁上端には刺突列が、その下には2～3条の沈線、体部には入組磨消縄文が施される。71～76・79は口縁部が一度屈曲して直線的に底部にいたる鉢形土器で、刻みのある口縁には2個1対の突起が付される。71・74のように体部上半の入組文の起点や屈曲部にも瘤状の突起が付く。体部には入組磨消縄文が描かれる。100も外反する口縁には2個1対の突起が付き、頸部には沈線によって入組文嵐の文様が描かれ。体部との境には瘤状の突起が付される。体部にはLR縄文が施される。99・101は注口土器で、99は体部上半と下半に入組磨消縄文が展開し、中央の隆帯には刻みが付される。赤色塗彩の痕跡があるものの内外面ともアスファルトが厚く付着している。101は無文で大型の注口土器で、外反する口縁、直線的に聞く頸部をもつ。頸部と体部の境には2条の隆帯を結ぶ瘤状突起が付される。77・81・83・84は皿形土器で台付のものもあるかもしれない。口縁部は外反し口唇には刻みが付され、体部には入組磨消縄文が描かれる。77では内面に隆帯があり縄文が付される。

89は口縁が外反し、口唇には指頭状の刻みが、口縁部にはジグザグの沈線が施される。

第4類土器(88)：鋸歯状の口縁が外反し、一度頸部ですばまって体部上半で逆「く」の字状に覗く屈曲して底部にいたる鉢形土器であろう。頸部には数条の細い沈線が引かれる。

第5類土器(81・90～95・103)：81・90・92は鋸歯状の口縁から無文の頸部、やや膨らみのある体部にいたる深鉢形土器である。81のように口縁部に2個1対の突起の付くものもある。103はやや外反する口縁から一度頸部ですばまりゆるやかに底部にいたるもので、鋸歯状の口縁、無文の頸部と体部との境には沈線が1条めぐる。体部にはLR縄文が施される。91は鋸歯状の口縁を有するが、突起とは逆に「凹」状の刻みがあり、頸部には数条の沈線が引かれ最下端の沈線には低い脛条の突起が付く。93は大きく外反する口縁から頸部で屈曲する鉢形土器で、頸部には沈線で閉まれた1条の刺穴列がある。94・95は同一個体で小波状を呈しわずかに外反する口縁から、頸部で一度ゆるくすばまり、体部にゆるくカーブを描く深鉢形土器である。体部には縦位のRL縄文が施される。

石 器（第101～105図、図版64～66）

遺構外より出土した石器には、石鎌・石槍・石錐・石匙・搔器・石斧などがある。出土地区は土器と同様調査区北側で検出されたものが多い。

石 鎌（1～3）：全て頁岩で第1次剥離面を残さない。形態的には大きく有茎鎌と無茎鎌がある。有茎鎌には5のように小型の棒状のものや、無茎鎌には11・12のように基部が「凹」状のものと13のように直線的なものがある。3・5・7・9・10・12にはアスファルトが付着している。

石 槍（14）：両面にやや粗い押圧剥離を施すもので断面はまるみをもつ。頁岩質である。

石 锥（15・16）：頁岩で先端には細かな剥離を施すが、いづれもつまみの部分には節理面を残している。

石 匙（17・18・21～24）：いづれも頁岩で縦型と横型のものがある。17・18のように背面には極めて細かな剥離を施すものと、21～24のように側縁部のみ調整を加え両面とも1次剥離面をのこすものとがある。特に21・22は主要剥離面側に押圧剥離を加えている。

搔 器（25～28）：いづれも頁岩で、両面に1次剥離面をのこしながら側縁部に両面からの押圧剥離で刃部を作出している。

石 筒（29）：頁岩で側縁部にのみ粗い剥離を施している。

磨製石斧（30～42・47）：安山岩や凝灰岩を石材とし、刃部に著しい破損がみられる。形態的にはいづれも同じで両刃のものである。47は長さ約20cmのもので成形痕が明瞭に認められる。34・42は加熱によるものか部分的に黒斑している。

扁平打製石斧（43・45・46）：安山岩で、両面に粗い剥離を施し基部には抉を入れている。刃部はいづれも磨滅している。

石 棒（44）：凝灰岩質で径3cm、両端とも折損している。

石 盆（48）：安山岩で、円形の低い脚がつくものである。

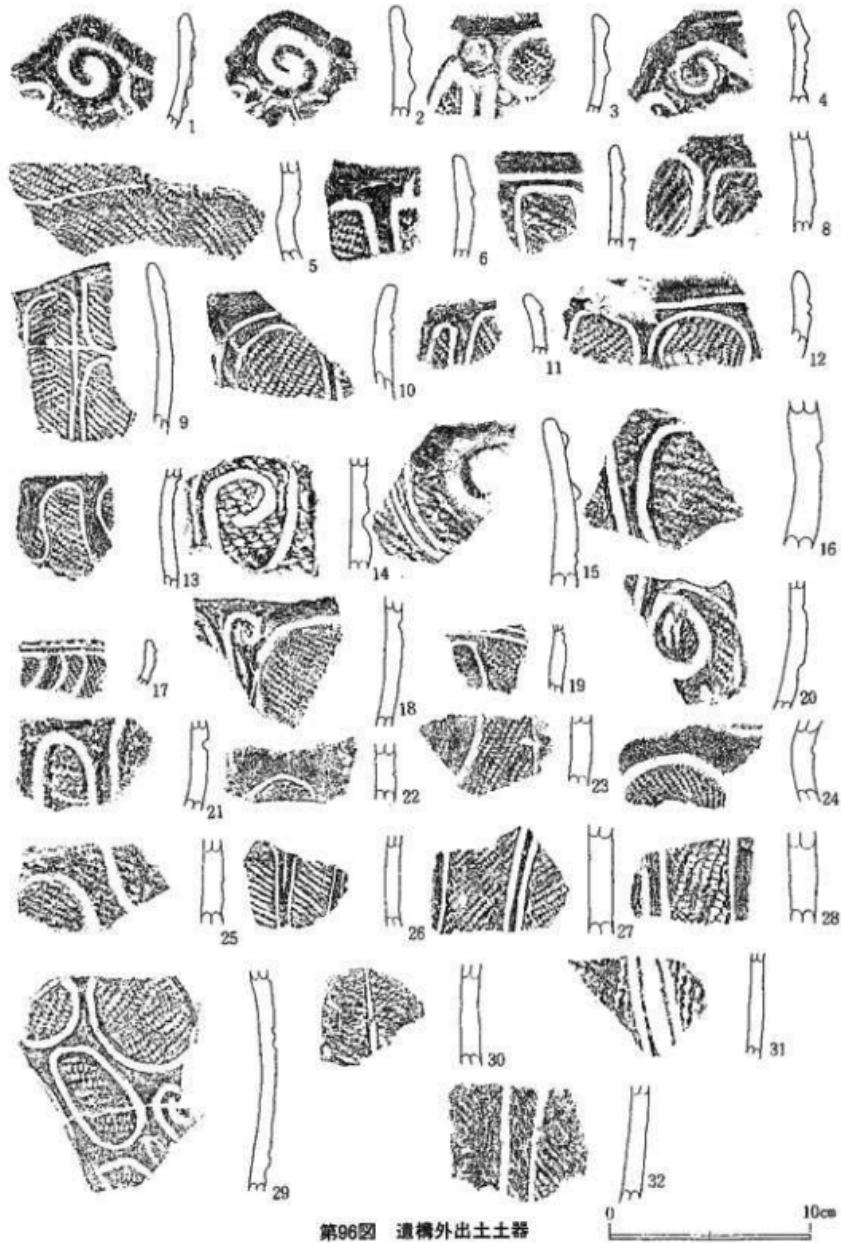
刻線礫（49）：安山岩質で断面形はまるみのある三角形を呈している。刻線は斜め、横方向に加えられている。裏面には敲打痕がある。

土 製 品（第101図20、図版63）

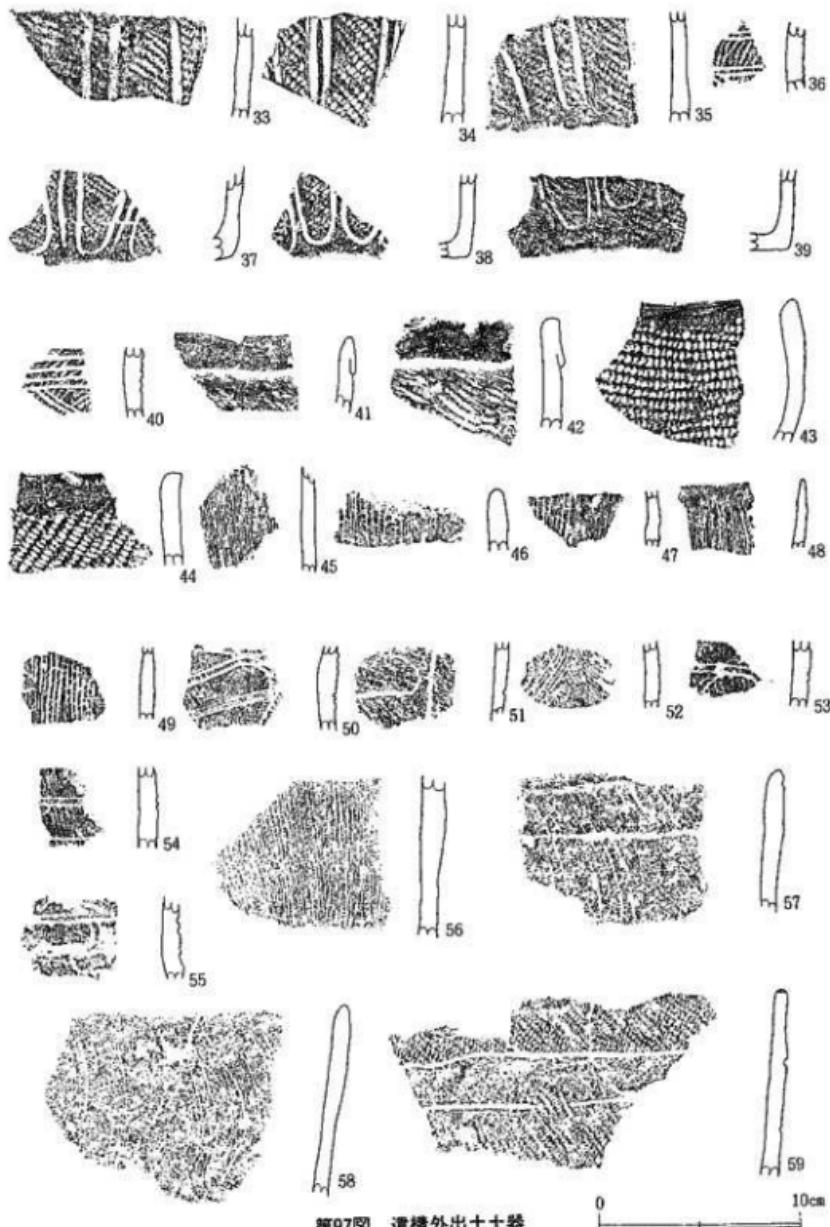
指先でこねた粘土塊が焼けたものであろう。指紋まで明瞭に観察できる。

石 製 品（第101図19、図版63）

垂飾品と考えられる。長さ3cm、幅1.9cm～0.9cm、厚さ0.4cmの橢円形の安山岩に彫刻を施したもので、鋭い沈線は入組文風の文様を表出す。上端には3個の穴があり中央のものは貫孔しており、一見顔面にも見えそうである。裏面には何ら装飾は施されない。



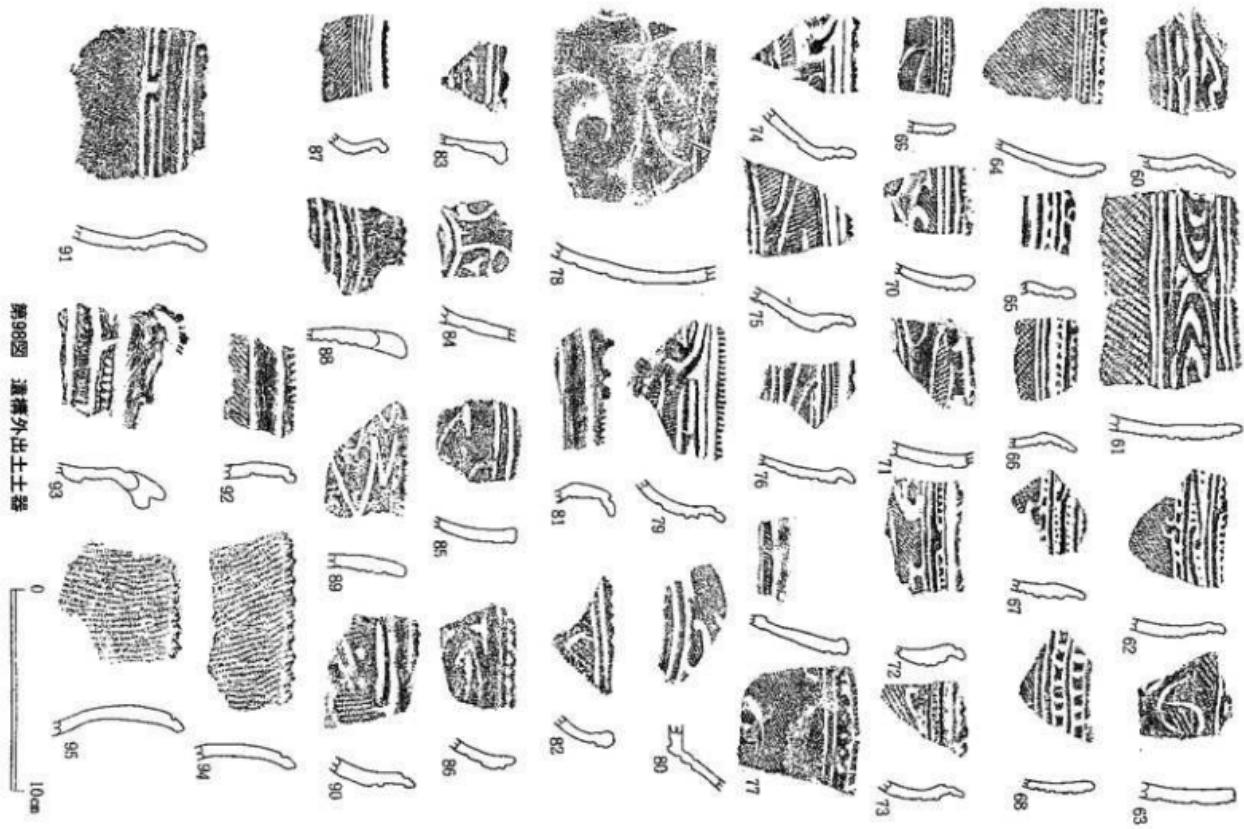
第96図 遺構外出土土器

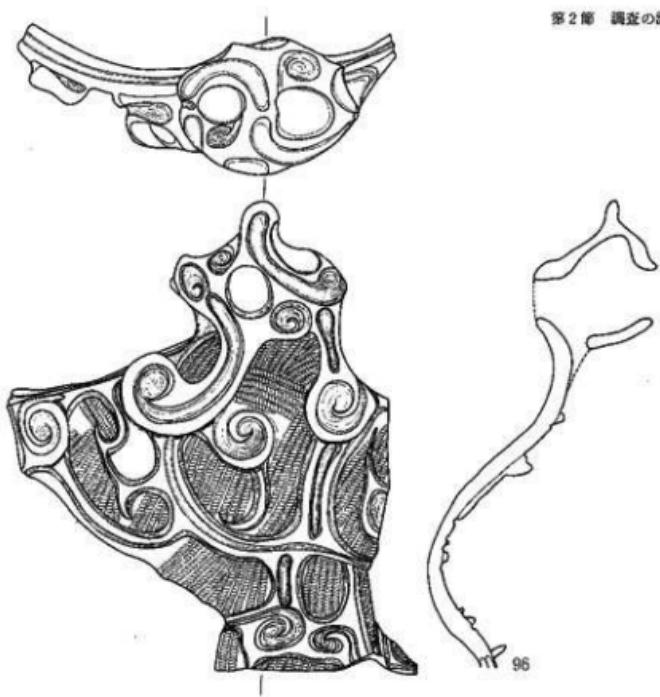


第97図 遺構外出土土器

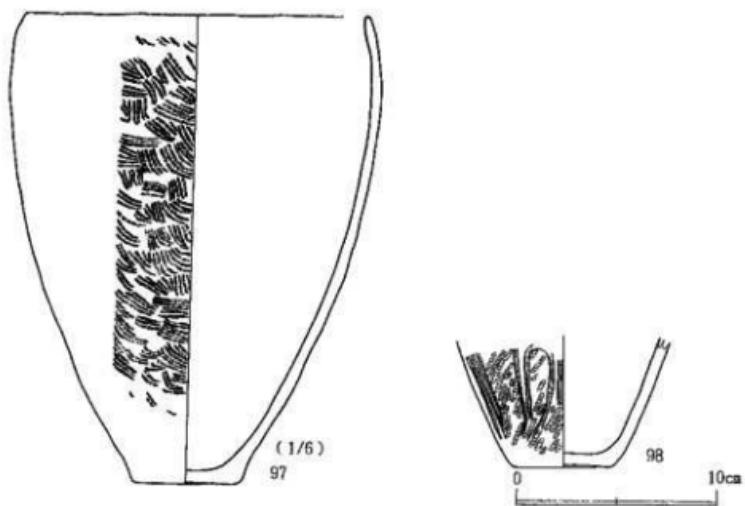
0 10cm

第98圖 遺構外出土土器





96



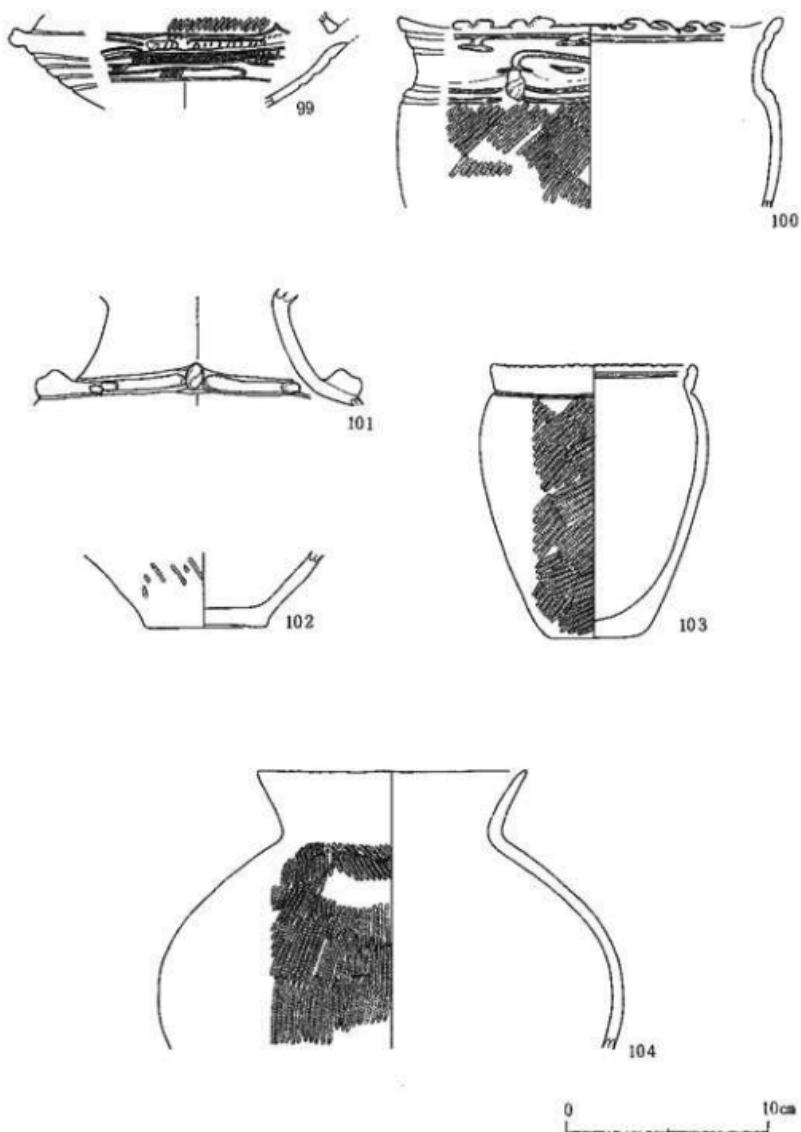
(1/6)

97

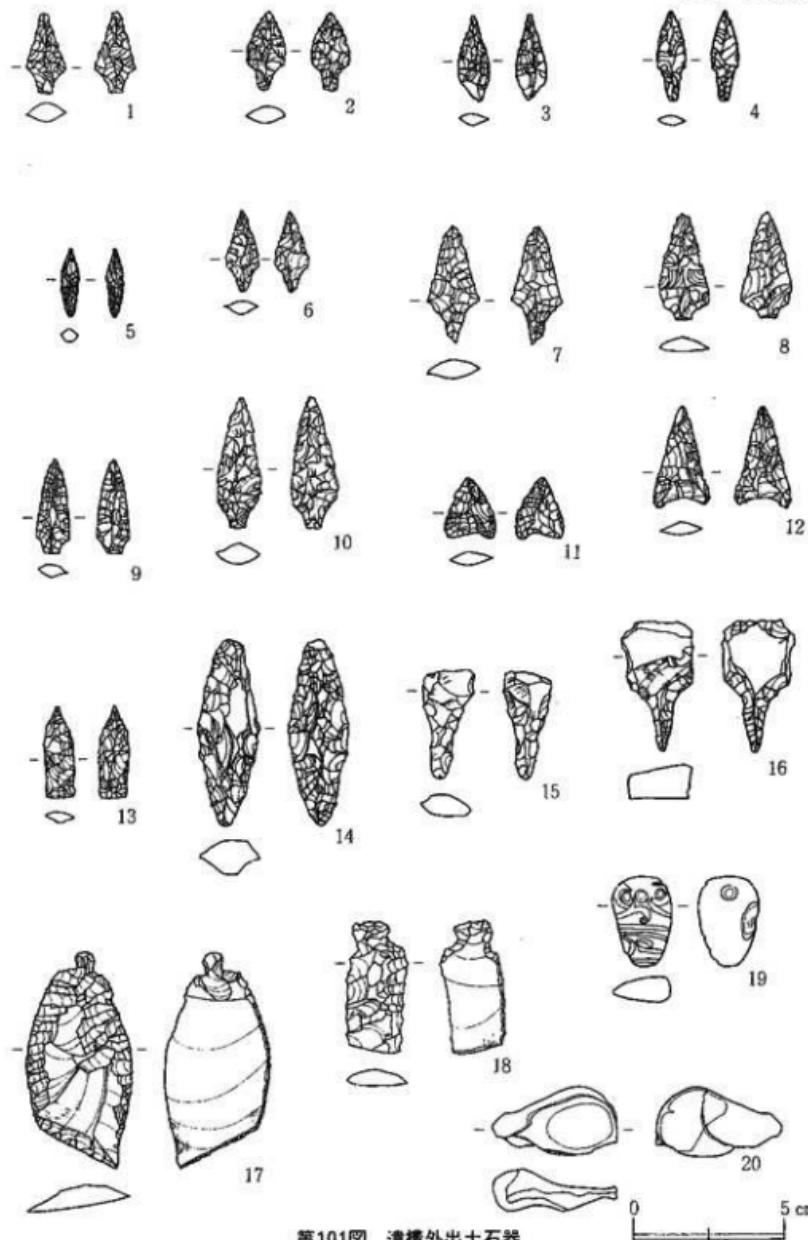
98

10cm

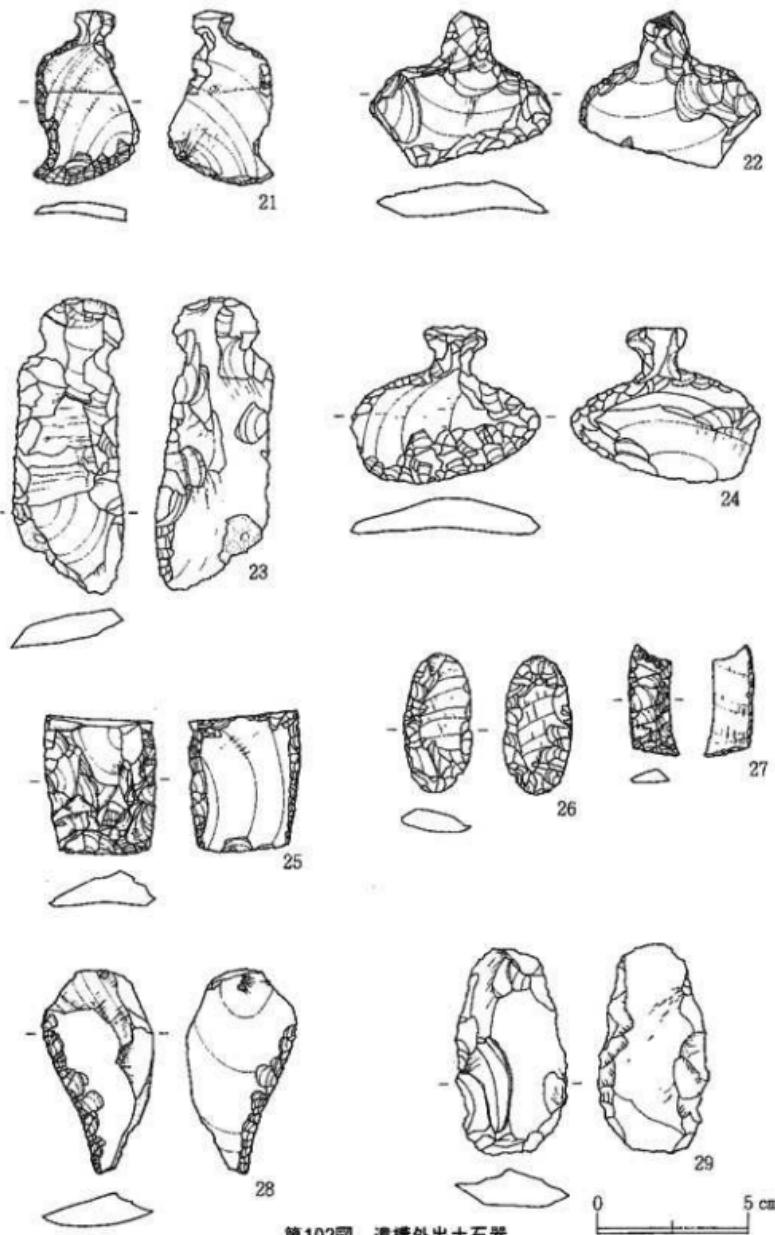
第99図 遺構外出土土器



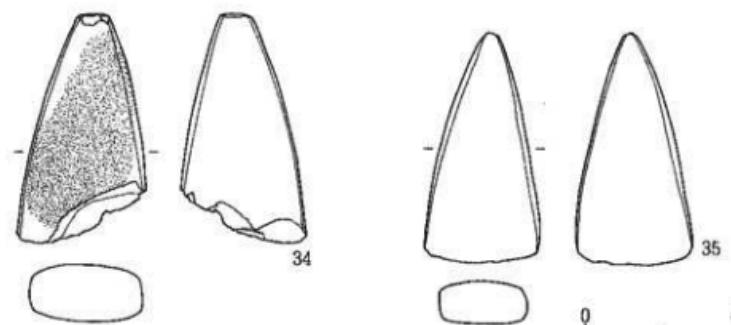
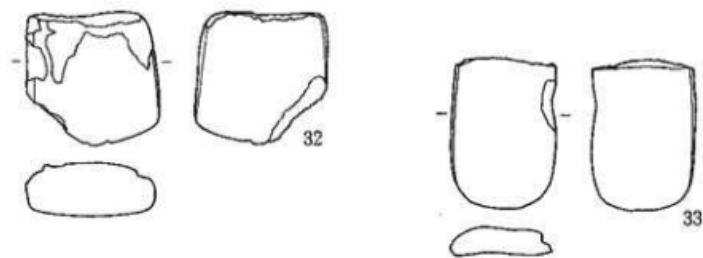
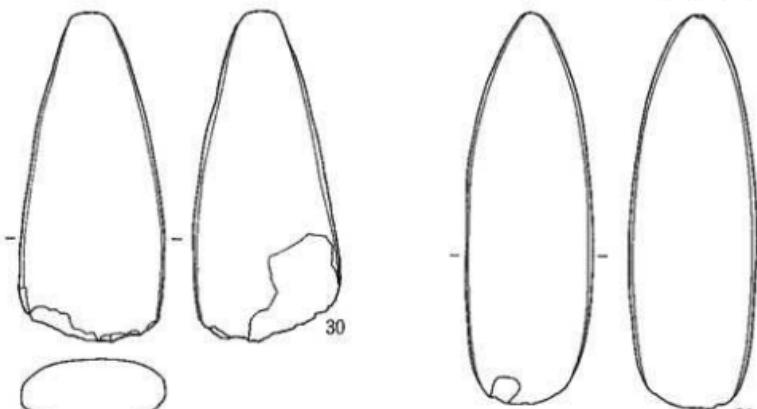
第100図 遺構外出土土器



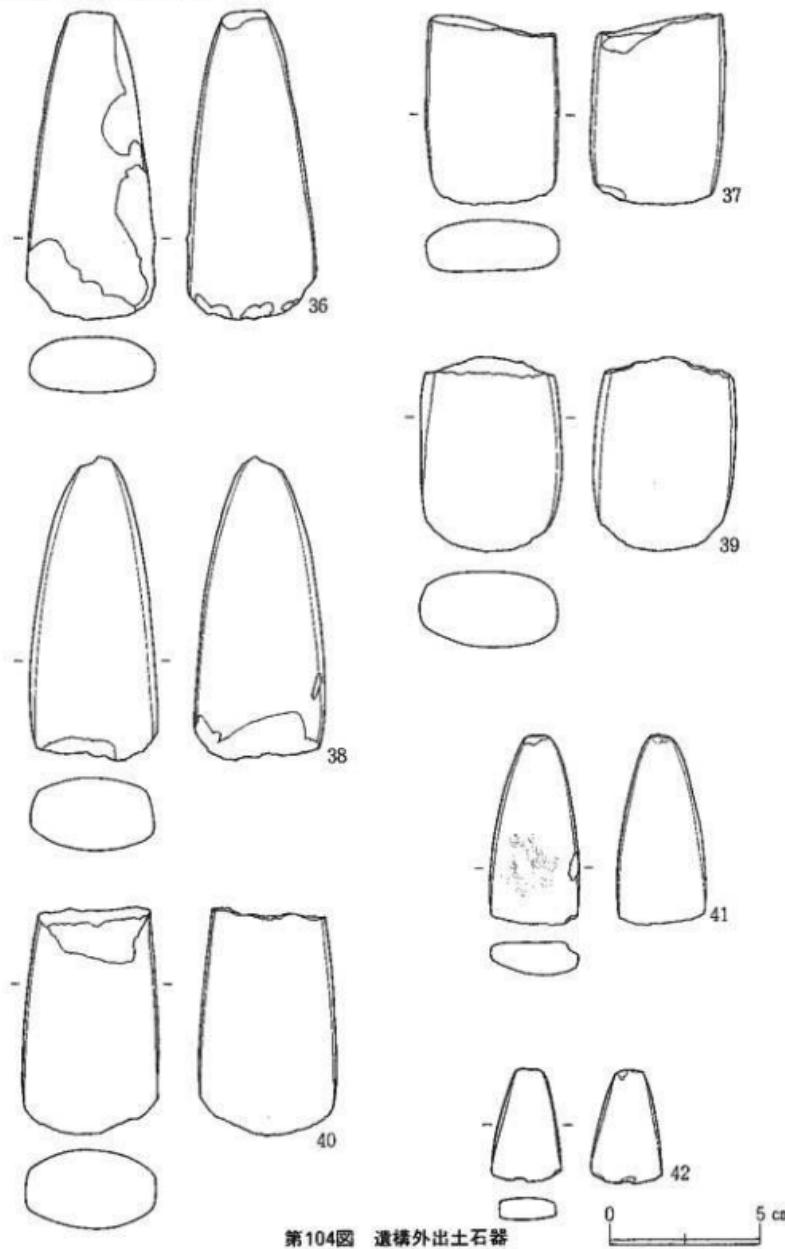
第101図 遺構外出土石器



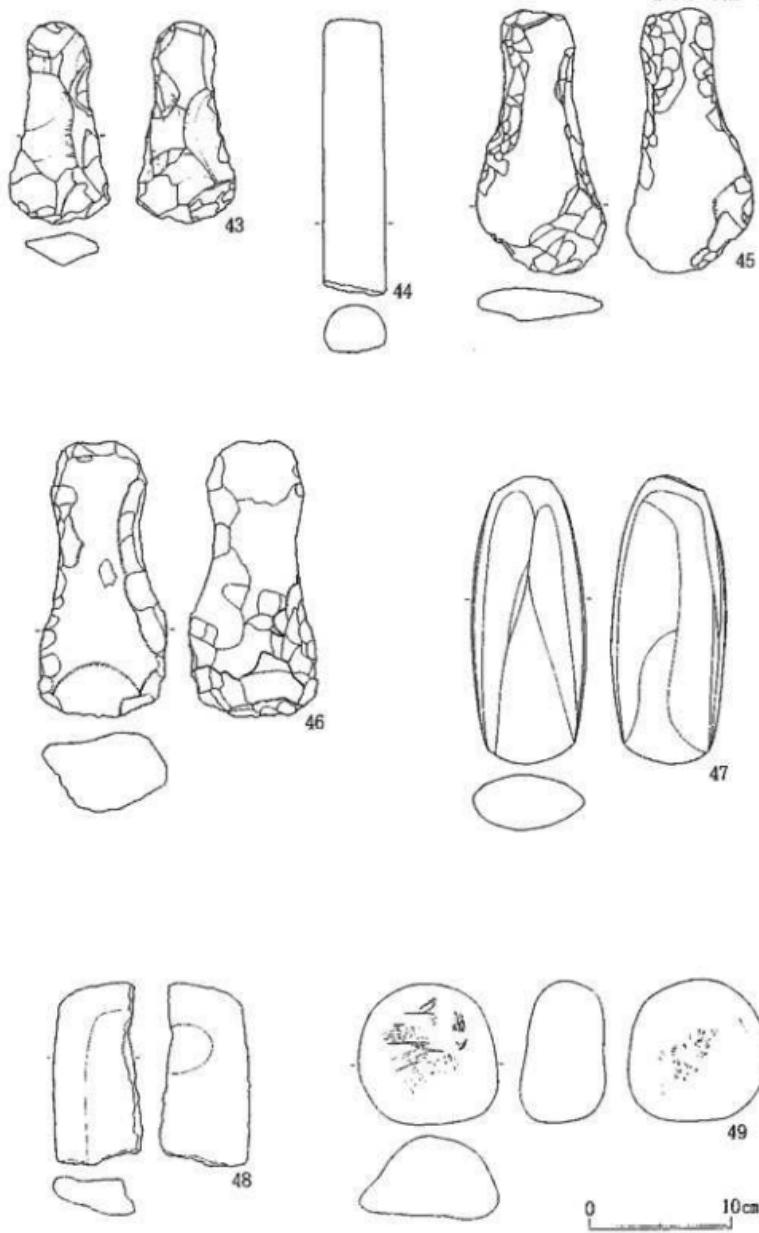
第102図 遺構外出土石器



第103図 遺構外出土石器



第104図 遺構外出土石器



第105図 遺構外出土石器

MD
56

十

十

5

1



十



+

十



十

53+

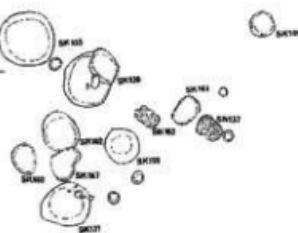


- 53 -

十

十

6



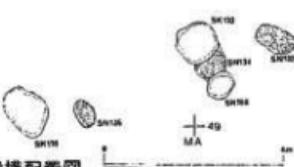
+

+

十

49

十



第106図 平安時代遺構配置図

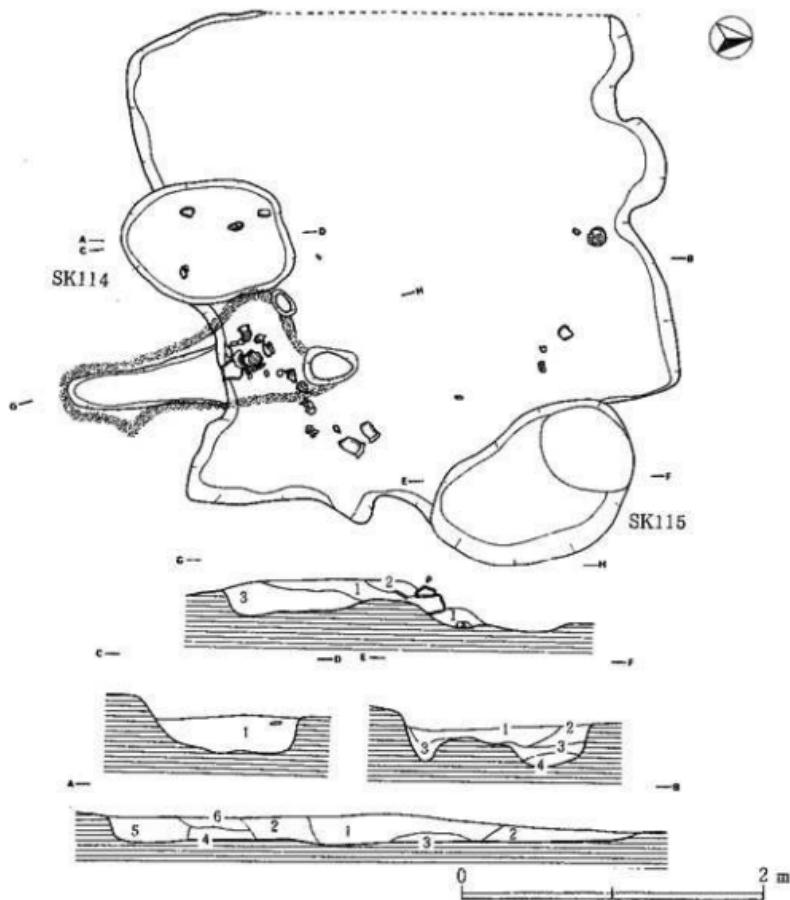
3 平安時代の検出遺構と遺物

(1) 検出遺構と遺物

堅穴住居跡

SI105 (第107図、図版67)

本住居跡は調査区中央の西側にあり、MI56・57グリッドに位置する。住居跡は北側から西側にかけて深い削平を受け、西壁は南側の一部を残すのみで、北壁は高さ0.05~0.1mを測る。規模は東壁が約2.8m、南壁が約3.1m、北壁現存長約2.8mである。主軸方向はS-20°-Eである。



第107図 SI105堅穴住居跡

床面は小さな凹凸を示すがほぼ平坦となり、壁付近を除いてほぼ全面が堅い状態である。また、隨所に攪乱の穴があり、明確な柱穴は確認できなかった。埋土は、1層が黒褐色土（10YR2/2）で炭化物・焼土・地山粒を含有する。2層も黒褐色土（10YR2/2）で炭化物・焼上・地山粒を含有する。3層は暗褐色土（10YR3/3）で地山粒が顕著である。4層は暗褐色土（10YR3/3）で地山・焼土ブロックを顕著に炭化物粒を微量に含有する。5層は暗褐色土（10YR3/3）で焼土ブロックや地山・焼土粒を顕著に含有する。6層は褐色土（10YR4/4）で地山ブロックや、微量の炭化物粒を含有する。

カマドは南向きで南壁東側に位置しており、つぶれた状態で検出された。煙道部の掘方は壁際で幅約40cm、先端部分で約20cmを測る。壁から手前40~50cmの床には、カマド袖部の芯と思われる黄白色の粘土の固まりが二ヵ所検出されている。火床は中央部で緩い段を形成しており、手前の面は灰の搔き出し部分であろう。カマドに関する土は1層が赤褐色の焼土（5YR2/3）である。2層は暗赤褐色の焼土（5YR3/2）である。3層は暗赤褐色の焼土（5YR2/2）で炭化物を含有する。

カマド西側の土壤（SK114）は、長軸1.2m×短軸約0.8mの橢円形を呈し、長軸方向が南壁に直交するように構築されている。底面は緩やかな弯曲を示し、南壁が急に立ち上がるのに對し北壁はなだらかな傾向にある。床面からの深さは、約25cmである。埋土は暗赤褐色の焼土が主体となり、橙色ブロックや炭化物を混入している。磨製石斧や土師器片が、埋土上位から検出されている。

住居跡東壁の土壤（SK115）は長軸約1.4m×短軸約1.0mの橢円形を呈し、長軸方向はほぼ壁の方向に沿っている。本土壤は二つの底面を成すが同一の時期と判断している。二つの底面はともに擂鉢状を呈し、床からの深さは南側で約30cm、北側で約40cmを測る。埋土は、1層が黒褐色土（7.5YR3/2）、2層が暗褐色土（7.5YR3/3）、3層が灰褐色土（7.5YR4/2）、4層が黒褐色土（7.5YR3/1）となり、全体としてボソボソした炭化物混じりの土である。遺物は検出されていない。

遺物（第108~109図）は、概して住居跡の東側から検出している。西側は攪乱のためか、北西部部分の埋土から鐵片を1点を検出したのみである。鐵片は東側土壤付近の埋土中からも検出している。遺物はその検出状況からカマドに伴って検出される一群（1・3~5・7~10・13）と、そうでない一群（2・6・11・12）とに分けて考えられる。前者はカマドの中央部分に集中したり、カマドの焼土で覆われた状態の一括資料である。後者は主にカマド左右の検出遺物と住居跡の北東側から検出された遺物であり床面よりもわずかに高い位置から検出されている。カマドに密着する土器群のうち、カマド中央部分には横転する壺（第109図13）があり、その下に支脚と思われる疊が接している。壺の上下には、接するように壺が認められる。この壺（底部から胸部）は住居跡南東に検出された壺（口縁~胸部）と接合しており、やや南に検出している土器片とともにカマド一括の資料として認められよう。この状況からカマド破壊時の

外部圧力の方向がよみとれる。また、カマドの一括資料遺物とカマド西側検出の土師器が接合関係にある。カマドの一括資料は住居跡廃絶後の流れ込みとは考えられず、住居跡に伴う遺物と判断される。

出土遺物（第108・109図1～14、図版71・72）

土師器坏：1は底部を残存するがその一部を欠損している。調整はロクロで底面は静止糸切である。体部最下端に約1cm幅でヘラケズリを施す。胎土には針状物質（長さが1mm前後の白色針状物質である。以下針状物質と記述する）を認める。焼成は普通で色調は内外面とも橙色を呈する。カマドから出土している。

2は口縁部の一部を欠損するゆがんだ坏である。やや突出ぎみの底部から弯曲して立ち上がる。調整はロクロで底部は静止糸切りである。体部最下端に1cmの幅でヘラケズリを施す。胎土には針状物質を認める。焼成は良好で内外面橙色が主体であるが部分的に浅黄橙色を呈する。口縁部内外面の一部に炭素の吸着がみられる。住居跡北壁中央付近で埋土から約10cm浮いた状態で検出している。

3は口縁から体部の約1/4、底部の大部分が残存する。底部からわずかに弯曲して立ち上がる。調整はロクロで底部は静止糸切りである。体部の最下端に1cm弱の幅でヘラケズリを施す。胎土には針状物質を認める。焼成は良好で色調は内外面橙色を呈する。体部中央の位置に「大」という墨書きが薄く認められる。カマドから出土している。

4は底部と口縁から体部の約1/2を残存する。体部表面には剥落したりひび割れの部分を認める。底部より内湾して立ち上がる。調整はロクロで底面は静止糸切りである。体部の最下端に不明瞭なヘラケズリを施す。胎土には針状物質を認める。焼成は不良で、色調は内外面橙色を呈する。内面口縁～底部の一部に炭素の吸着を認める。カマドから出土している。

5は全体の約1/3を欠損したゆがんだ坏である。底部より弯曲して立ち上がる。調整はロクロであるが底面の技法は不明である。体部の最下端は残存底部円周の約1/3は突出した部分をつくり、との約1/3は不明瞭なヘラケズリを施す。胎土には針状物質を認める。焼成は普通であり色調は内外面橙色を呈する。カマド出土破片とその西側埋土上位の破片が接合している。

6は底部の約1/3と体部の一部を残存する。突出した底面より弯曲して立ち上がる。調整はロクロで、底面は回転糸切りである。内面底部には底部周縁と対応して弱いひび割れを認める。また突出部の上端、円周の約1/4ぐらいには、接合痕のような線状の痕跡を認める。胎土には赤色粒が目立つ。外面の体部に炭素の吸着を認める。焼成は普通である。色調は内面橙色、外面浅黄橙色を呈する。住居跡は北東隅の埋土中の出土である。7は底部と体部からL1縁部の約1/3を残存する。底面より弯曲して立ち上がる。調整はロクロで底面は回転糸切りである。胎土には赤色粒が目立つ。焼成は普通で色調は内面でふい橙色を呈する。カマドから出土している。

8は底部と口縁から体部の約1/3を残存する。底部から両曲して立ち上がる。調整はロクロで底面は回転糸切りである。胎土には赤色粒が目立つ。焼成は普通で色調は内外面橙色を呈する。カマドから出土している。

土器類：9は底部の破片である成形は巻きあげで、調整は非ロクロで底面は砂底である。胎土には金雲母を含有する。焼成は不良で、色調は内面がにぶい赤褐色、外面は淡赤橙色を呈する。カマドから出土している。

10は底部の破片である。成形は巻きあげで、調整はロクロと考えられる。底面の周辺に薬状の痕跡が残り、中央にはヘラの痕跡がある。ロクロ静止状態でのヘラキリを示すかもしれない。胎土には金雲母を含有する。焼成は普通で色調は内外面橙色である。カマドから出土している。

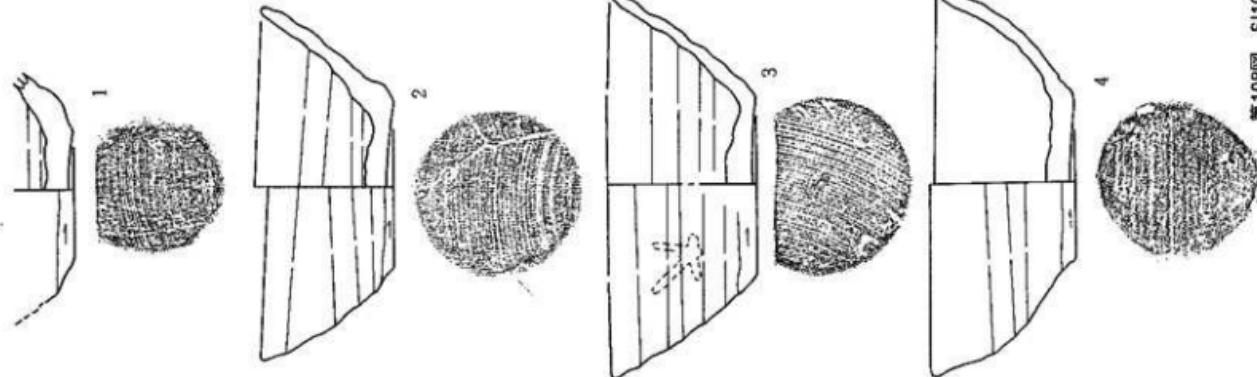
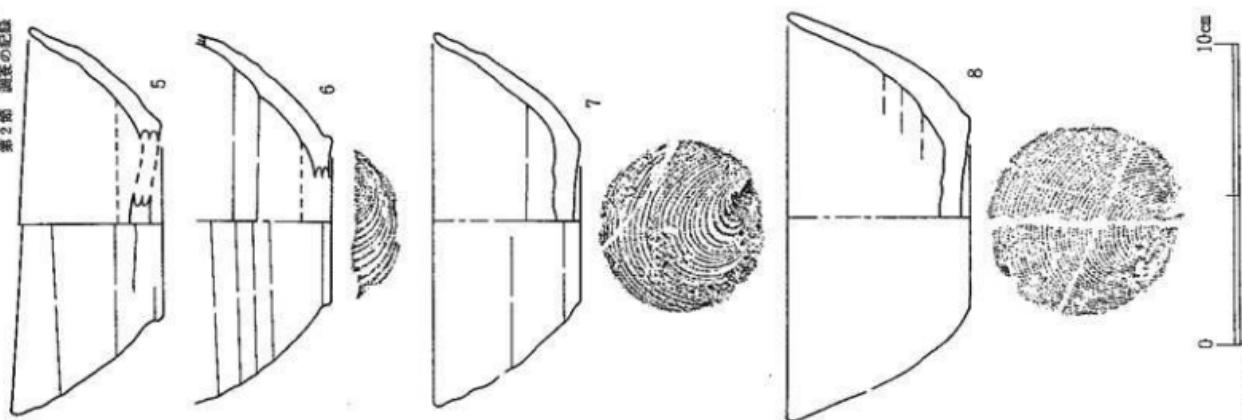
11は小型甕である。体部のほとんどは、二次的な火熱を受けており剥落が著しい。体部の一部を欠損している。器形はわずかにゆがむ。底部より弯曲して立ち上がり頸部で屈曲し、直立する口唇部までやはり弯曲して立ち上がる。成形は巻きあげと思われる調整はロクロである。底面は静止糸切りで、体部最下端には約1cmの幅で途ぎれながらヘラケズリを施す。胎土には約3mmの小石を頗る含有する。焼成は良好で色調は内外面橙色を呈する。カマドから出土している。

13は底部が欠損するのみで、口縁と胴部は約1/3が残存する。底部から立ち上がり、胴部上位で最大となる。頸部は屈折して、口縁は内湾して立ち上がる。成形は巻きあげである。調整は口縁から胴部上位にかけてヨコナデを施し、のちに胴部には縱方向にヘラケズリを施す。内面は胴部に縱の木口状工具のナデを施した後、横位にナデを施す。口縁から胴部上位はヨコナデである。焼成は不良で色調は内外面ともににぶい橙色を呈する。外面は部分的に炭素の吸着をうけている。カマドからは底部が、カマド東側では口縁から胴部の破片が床よりわずかに浮いて出土している。両破片は接合関係にある。

14は口縁部と胴部上位の約1/4を残存する。胴部は頸部まで凸曲ぎみに立ち上がり頸部で屈曲し、口唇部まではやはり弯曲する。成形は巻きあげと思われる。調整は外面で口縁部から胴部上位までロクロ調整と思われ、のち縱位のヘラケズリである。内面は口縁から胴部まではロクロ調整と思われ、のちに、縱位・横位の木口状工具のナデを施す。胎土には赤色粒が顯著である。色調は内外面ともに淡黄橙色を呈する。

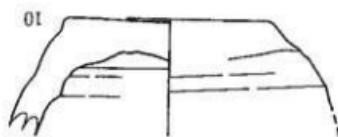
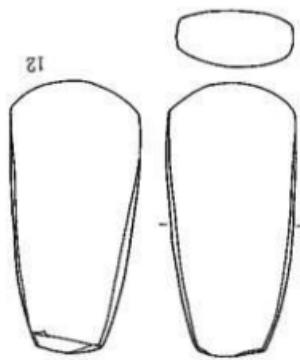
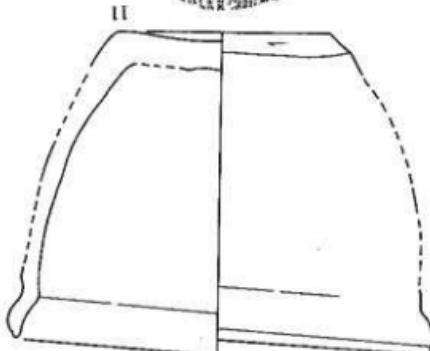
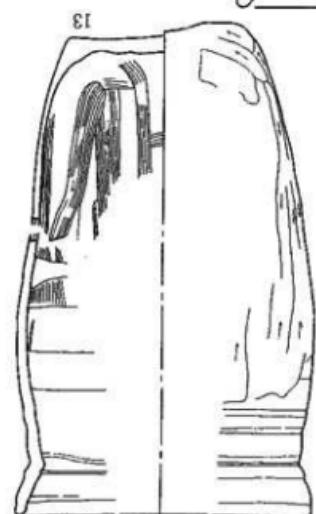
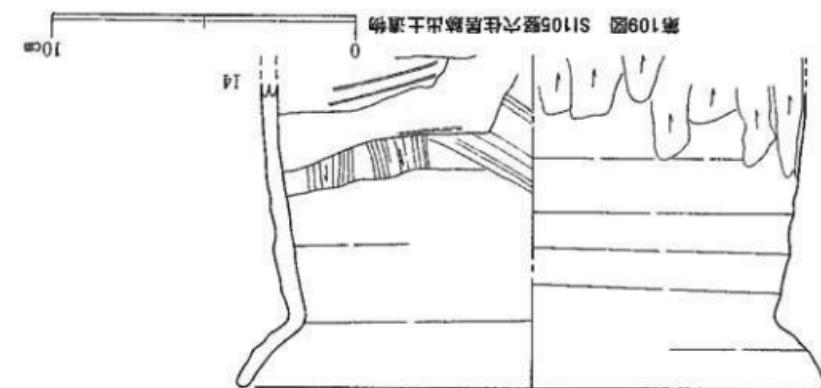
磨製石斧（12）：完形である。縦が9cm、基部と刃部の幅がそれぞれ2.2cm、4.1cm、厚さは1.8cmを測る。重量は120gである。石材は凝灰岩である。カマド西側SK114の埋土上面から、土器片と同レベルで出土している。

第2回 漆表の記載



第105号穴住居跡出土遺物

第109圖 S1105號文化層出土石鏟



第2圖 第6章 銅木合璧器

土 壤

SK113 (第110図)

MC55グリッドを中心位置し、確認は地山面である。底面はやや窪んだ中央へ緩やかに傾斜する。平面は楕円形であり、長軸1.5m、短軸約0.7m、深い部分で約15cmを測る。埋土は暗褐色土(10YR3/3)を呈し、炭化物粒・地山ブロック粒を含有する。中央部分の埋土から土師器片を1点出土している。

出土土器(第118図33、図版76)：土師器の小形甕である。口縁の小破片で、頸部で屈曲する。口縁部は短く、全体に薄く仕上げてある。成形は巻きあげと思われ、調整は内外ともナデである。胎土には砂粒を顕著に含有する。焼成は良好で内外とも浅黄橙色を呈する。

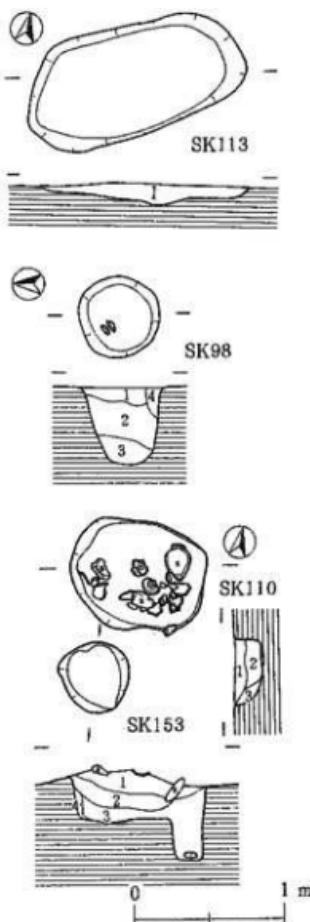
SK98 (第110図)

MB54グリッド南側に位置し、確認は地山面である。底面は平坦で壁は急傾斜となる。平面はほぼ円形であり、径が約55cm、深さは約50cmを測る。埋土は1層が黒褐色土(10YR2/2)を呈する。2層も黒褐色土(10YR2/2)で地山ブロックを含有する。3層も黒褐色土(10YR2/2)だが地山ブロックが2層より細かい。4層は黒褐色土(10YR2/2)で地山土が混在する。床面直上から同一個体土師器片を2点出土している。

出土土器(第118図34、図版76)は土師器片である。口縁部から体部の約1/2を残存する。口縁まで彎曲し、口唇部までわずかに外割する。調整はロクロである。胎土には砂粒を顕著に含有する。焼成は普通で、色調は内外とも橙色を呈する。

SK110 (第110図、図版69)

MB53グリッド中央部分でSK153に近接して



第110図 SK113、98、110、153土壤

位置している。確認面は漸移層であり、焼土ブロック混じりの黒褐色土中に石や土師器片が検出された。土壌の東側には小さな落ち込みがあるが、プラン確認時点で認められず土壤底面を検出したのちは、土壤の類似層が落ち込む状況であった。平面は不整橢円形であり、長軸約90cm × 短軸約70cm、土壤底部までは約35cmを測る。土壤底面における小穴は壁に沿う方向で長軸約40cm × 短軸20cmを測り、そこからの深さは約25cmである。遺物は土壤底部から埋土上位まで連続して投棄された様相を呈している。平安時代の土器を主体に土鍤、鉄滓3点、磁石、礫などを含む。小穴からの出土遺物はないが小穴底面からは焼土を固まりで検出している。遺物はほぼ同時期の所産と考えている。

出土遺物（第117・118図20～32、図版73）

土師器壺:20は約1/3を残存する。底部より弯曲して立ち上がる。調整はロクロで底面は静止糸切りである。体部最下端にはヘラケズリの痕跡をとどめない。胎土には砂粒が顕著で、金雲母も認める。焼成は良好であり、色調は内外面が橙色を呈する。埋土下位からの出土である。

21は底部の約1/2、体部の約1/3を残存する。調整はロクロであり底面は静止糸切りである。胎土には砂粒が顕著で、金雲母を含有する。焼成は普通で色調は内面は橙色、外面はにぶい橙色を呈す。外面の一部には炭素が吸着している。

22は口縁から体部の一部を欠損している。底部から弯曲して立ち上がり口縁部でわずかに外汚みとなる。調整はロクロで底面は回転糸切りである。胎土には赤色粒が顕著である。焼成は普通で、色調は内外面浅黄橙色を呈す。埋土の上位から出土している。

23は底部と他の約1/4を残存する。底部から弯曲して立ち上がり口縁部でわずかに外汚みとなる。調整はロクロで底面は回転糸切りである。胎土には針状物質を認める。焼成は良好で色調は内外面には部分的に炭素が付着している。埋土上位から出土している。

25は約1/5を残存する。底部から弯曲ぎみに立ち上がり口縁部でわずかに外汚みとなる。口縁の先端は薄い。調整はロクロで底面の技法は不明である。胎土には砂粒が顕著である。焼成は不良で、色調は内外面とも浅黄橙色を呈する。埋土中位からの出土である。

土師器鍋:26は口縁部の一部を残存する。体部から口縁にかけて直線的に開く。成形は巻きあげと思われる粘土紐の接合痕が明瞭である。調整は外面は口縁部のヨコナデのうち体部で工具によるナデである。内面は口縁部がヨコナデで体部は工具によるナデである。色調は内面が黒色、外面は灰白色(7.5YR8/2)を呈する。埋土上位からの出土である。

土師器壺:27は底部を残存する。調整は体部にヘラケズリを施し、木葉2枚の痕跡と周辺には多量の砂を認める。胎土には砂粒を多量に含有する。焼成は良好であり色調は内外面とも淡黄色を呈する。埋土上位の出土である。

28は口縁部と胴部上位の1/5を残存する。胴部は弯曲して立ち上がり胴部上位で最大となる。

頭部では「く」の字となり、口縁は外湾する。成形は巻きあげで、調整は口縁部でヨコナデ、胴部は外面でヘラケズリ、内面は木口状工具のナデである。胎土には砂粒を多量に含有する。焼成は不良で色調は内外面浅黄橙色を呈する。外面の一部は朱彩のように見える部分がある。埋土上位から出土している。

29は底部と周辺の一部を残存する。突出ぎみの底部から直線的に立ち上がる。成形は巻きあげと思われる。調整は外面・底部・胴部ともヘラケズリを施す。内面は木口状工具によるナデである。胎土には砂粒を顕著に含有する。焼成は良好で色調は内外ではにぶい黄色、外面では橙色を呈する。

須恵器坏24は約1/2を残存する。底部から弯曲して立ち上がり、口縁部でわずかに外湾する。調整はロクロで底面の技法は不明である。胎土には砂粒が顕著である。焼成は普通で、色調は内外面とも灰白色を呈する。埋土中位からの出土である。

土鍤:30・31は土師質である。30は長さ3.2cm×幅1.2cmで穿孔径は3mmである。穿孔部分の両端は傾斜している。重量は3.1gである。色調は浅黄橙色(10YR8/4)を呈する。埋土中位から出土している。

31は長さ3.8cm×幅1.5cm、穿孔径は約4mmである。穿孔部の両端は刻み状を呈する。重量は7.2gである。色調は浅黄橙色(10YR8/3)を呈する。埋土中位から出土している。

砥石:32は凝灰岩である。石の表裏2面と左右2面とを利用している。すべて平滑な面をつくり、仕上げのために使用されたと思われる。重量は620gである。色調は淡黄色(2.5YR8/3)を呈する。埋土中位から出土している。

SK153（第110図）

MB53グリッド南側で、SK110に近接して位置する。確認は地山面である。底面は南から北へ緩く傾斜している。平面は円形であり、径約45cm、深い部分で約20cmを測る。堆土は1層が黒褐色土(5YR3/1)で、地山・炭化物粒を含む。2層は暗褐色土(10YR3/3)で地山ブロックを含有する。3層は2層と類似するが締まりがない。

SK128（第111図）

MB52グリッド北側で、SK111・SK91に切られて位置している。確認は地山面である。底面はほぼ平坦を成している。平面は楕円形であり、推定長軸1.4m×短軸約0.8mを測る。深さは0.05m前後と浅い。土師器片が1点出土している。

SK111（第111図）

MB52グリッド北側でSK128を切って位置している。確認は地山面である。底面は擂鉢状を呈し、壁は北側がやや傾斜し南側ではわずかにえぐられている。深さは約45cmを測る。埋土は黒褐色土(10YR3/2)地山粒、ブロックを含有する。埋土中位から土師器片と疊を検出して

いる。上位から鉄滓が確認されている。

SK91 (第111図)

MB52グリッド北側で、SK91を切って位置している。確認は地山面である。平面は円形で約40cmを測る。底面は擂鉢状で、中央部がわずかに窪む。深さは約20cmで、地山粒を含有する黒褐色土である。

SK149 (第111図)

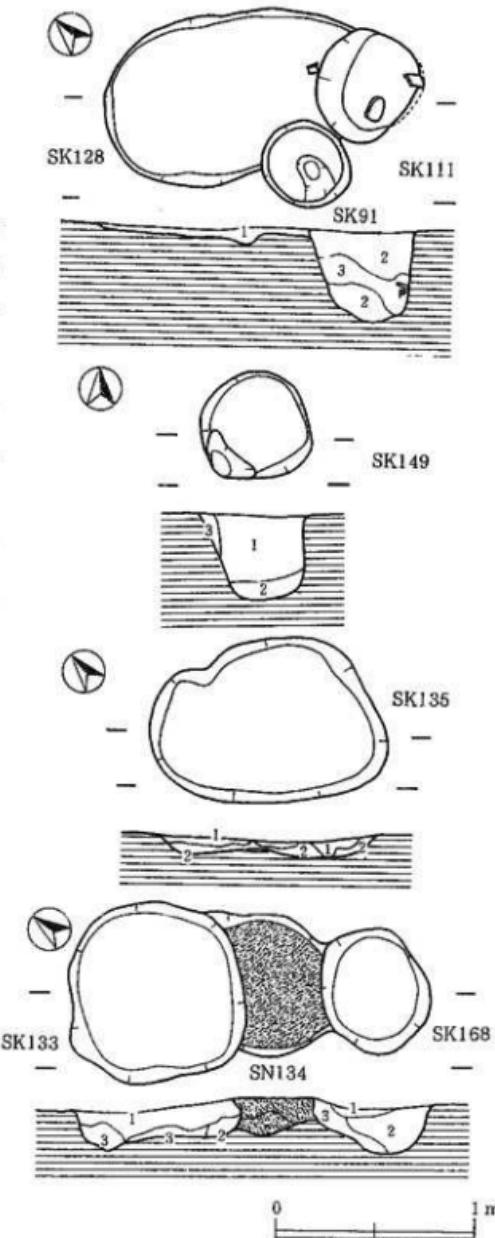
MB51グリッド南側中央部に位置している。確認地山面であり、両側には擾乱がある。形態は不整円形で径は約55cm、深さは40cmを測る。底面は東から西へ緩く傾斜しており、壁は東側で直立ぎみとなる。埋土は1層が黒褐色土(10YR2/2)で、地山粒・ブロックを含有する。2層は明黄褐色土(10YR6/8)で軟かい。

SK135 (第111図)

MA49グリッド東西隅に位置している。確認は地山面である。平面は不整楕円形で長軸約1.2m×短軸約0.85m、深さ約0.1mを測る。埋土は1層が黒褐色土(10YR2/3)で、地山粒・炭化物粒を含有する。

SK133 (第111図)

LT・MA49グリッドにまたがり、SN134を切って位置している。確認は地山面である。底面は北側に傾いている。形態は凹丸方形状を呈し、縦約0.85m×横約0.9m、深さ0.2mを測る。埋土は1層が黒褐色土(10YR2/3)で炭化物粒を含有する。2層は暗褐色土(10YR3/

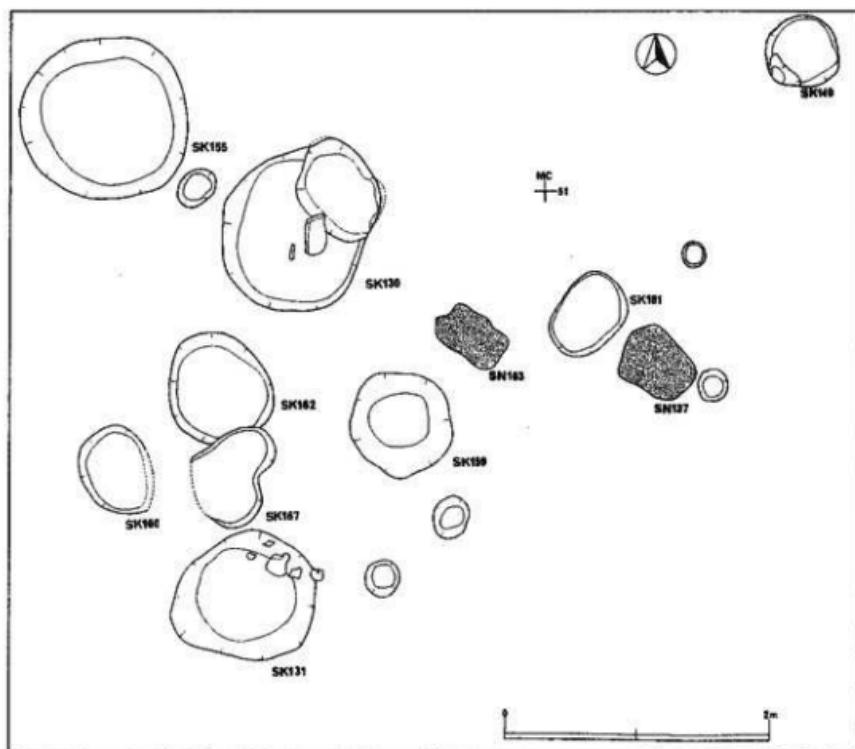


第111図 SK128、111、91、149、135、133、168土壤
SN134焼土遺構

4) で、焼土・地山粒を含有する。3層は2層と類似するが地山ブロックが顕著である。

SK168 (第111図)

LT49グリッド南西隅にあり、SN134を切って位置している。確認は地山面である。底面は南東側に傾斜する形態は不整円形を呈し、縦約0.6m×横約0.5m、深さ約0.25mを測る。埋土は1層が黒褐色土(10YR3/4)で、炭化物粒を含有する。2層が暗褐色土(10YR3/4)で焼土・地山・炭化物粒を含有する。3層は2層と類似するが地山ブロックが顕著である。



第112図 平安時代土壤集中地点

SK130 (第113図、図版68)

MC50・51グリッドにまたがって位置している。確認は地山面である。規模は長軸約1.3m×短軸約1.1mで平面は「だるま」形を呈する。南西側の底面は緩やかに傾斜し、疊付近で最も深く約30cmを測る。北東側の落ち込みは部分的にはえぐれしており、最も深い部分で約0.4mを測る。埋土は1層が黒褐色土(7.5YR2/2)で地山粒・ブロックとフイゴ羽口を含有している。2層は黒褐色土で地山粒を含有する。3層は暗褐色土で地山粒・炭化粒を含有する。南西側の底面からは、長さ約10cmの疊、底面より約3cm上から砾石、埋土下位から中位にかけて鉄滓を数片検出している。本土壙の西侧に接するようにピットが認められる。ピットは30×25cm、深さ32cmを測る。底面はほぼ平坦でしっかりしている。このピットが本土壙に伴うかどうかは別として、土壙周辺の搅乱は深く別のピットが存在した可能性がある。

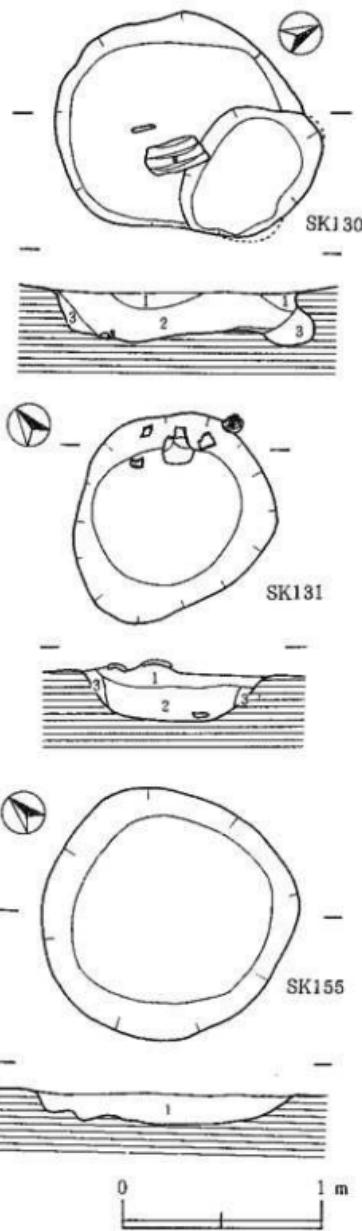
出土遺物 (第119図35・36、図版74)

砥石 (35) :砂岩である。表裏面と一側縁のほぼ全面を使用している。他の、側縁は部分的に使用されている。表裏面には刃を立てて使用した時の痕跡が明瞭に認められ、荒砥用の砥石であろう。土壙中央部のはば底面からの出土である。

フイゴ羽口 (36) :は羽口の先端部の破片である。先端は径1.5cm～2cmと推定される。全体にひびが入るが硬い。先端部分は黒色でガラス化している。胎土には砂粒を少量含有する。焼成は良好で色調は内外面とも淡橙色を呈する。埋土中から鉄滓とともに出土している。

SK131 (第113図、図版70)

MC50グリッド南側に位置している。確認は地山面であり周囲の搅乱が著しい。底面はほぼ平坦で描



第113図 SK130、131、155土壤

鉢状に立ち上がる。平面は不整円形で長軸約1.1m×短軸約1.0m、深さ約0.25mを測る。埋土は1層が黒褐色土(10YR2/2)で焼土・炭化物粒を含有する。2層は暗褐色土(10YR3/3)で焼土ブロックや炭化物粒を含有する。3層は褐色土(10YR4/4)で地山粒、炭化物粒を含有する。東側に40cm離れて径約25cm、深さ31cmのピットを検出している。本土壤に伴うかどうかは不明である。遺物は北東側で5個体検出している。

出土土器（第116図15～19、図版72・73）

土師器壺:16は底部の約1/2を残存する。底部から内窵して立ち上がる。調整はロクロで底面は静止糸切りである。体部最下端には幅約1cmのヘラケズリを施す。胎土には、針状物質を認める。焼成は良好で色調は部分的に内外面ともに橙色を呈する。埋土の上位から出土している。

土師器壺:15は小型壺である。口縁部から胴部の一部を残存する。口縁部は緩やかに外窵する。成形は巻きあげで調整はヨコナデのうちにヘラケズリ、内面は口縁部でヨコナデ、胴部では木口状工具のナデを施す。胎土には針状物質・赤色物質を認める。焼成は普通で色調は内面が浅黄橙色、外面は灰白色を呈する。外部の一部に炭素の吸着を認める。埋土の上位から出土している。

18は底部の一部を残存する。底部は突出ぎみとなる。成形は巻きあげと思われ調整は外面ではヘラケズリ、内面では木口状工具によるナデである。胎土には砂粒が顕著である。焼成は不良で色調は内外面とも浅黄橙色を呈する。土壤の底面付近から出土している。

須恵器壺:17は底部から口縁部の一部を残存する。やや突出した底部から弯曲して立ち上がり、口縁部はほぼ直線的となる。調整はロクロで底部は回転糸切りである。胎土には砂粒を顕著に含有する。焼成は普通で色調は内外面ともに灰白色を呈する。埋土の上位から出土している。

須恵器壺:19は胴部の一部を残存し肩部が張り出す器形である。成形は巻きあげのうちにロクロで調整している。胴部下位の外面はヘラケズリが、内面ではロクロ調整に前後して搔き目状のナデが施される。胎土には砂粒が顕著である。焼成は良好で色調は内外面とも灰色を呈する。埋土の上位から出土している。

SK155（第113図）

本土壤はMC51グリッド南西隅に位置している。確認は地山面であり周辺の擾乱が著しい。平面はほぼ円形で、径が1.25m～1.3m、深さ0.15mを測る。底面は緩やかに内窵し鉢状を形成している。埋土は黒褐色土(10YR3/2)で、炭化物・地山ブロックを含有する。南東部にピットが存在するが本土壤に伴うかどうかは不明である。

SK159(第114図)

MC50グリッド中央付近に位置する。確認は地山面である。擾乱が著しい。平面は不整円形で径約0.8mを測る。底面は北から南にかけて緩やかに傾斜する。埋土は1層が黒褐色土(10YR2/3)で焼山・地山粒子を含有する。2層は褐色土(10YR4/4)で地山ブロックを含有する。3層は黒褐色土(10YR2/3)で地山粒を含有する。南東部には約25cm離れて、約30×約25cm、深さ28cmのピットが存在する。本土壤に伴うかどうかは不明である。

SK161(第114図)

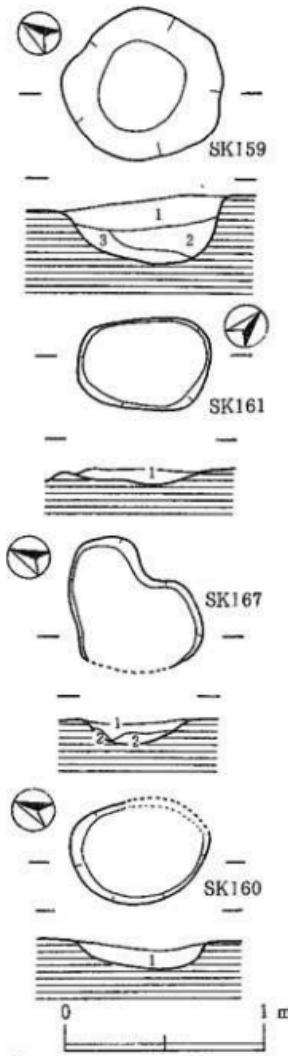
MB50グリッド北西部分に位置する。確認は地山面である。擾乱が著しく浅い落ち込みを形成している。底面は不安定である。平面は楕円形を示し、長軸約65cm×短軸約45cm、深さ約10cmを測る。埋土は暗褐色土(10YR3/3)で焼土・炭化物粒子を含有する。北東約50cmには径約20cm、深さ約10cmのピットが存在する。ピットが本土壤に伴うかどうかは不明である。

SK167(第114図)

MC50グリッド中央付近に位置する。確認は地山面である。擾乱が著しく、西側の一部は消滅している。SK162との切り合い関係は不明である。平面は不整形を示し播鉢状を形成する。最も長い部分で約80cm、それに直交する部分では約50cmを測る。埋土は1層が暗褐色土(10YR3/4)で焼土粒子・ブロック、地山粒子・ブロックを含有する。2層が黄褐色土(10YR5/6)で焼土ブロック・炭化物粒子を含有する。本土壤とSK160土壤との間は深い擾乱が入るが、擾乱部分を除去すると、地山に密着している焼土が部分的に認められ、この場所に別個の土壤が存在した可能性がある。

SK160(第114図)

MC50グリッド西側に位置する。確認は地山面である。擾乱が著しく東側の一部は消滅している。平面は楕円形を示すと考えられ、長軸約70cm×短軸約50cm・深さ約10cmを測る。底面は播鉢形を形成する。埋土には焼土を含有する。



第114図 SK159、161、167、160土壤

焼土遺構

SN73 (第115図、図版70)

MH61グリッド北西側に位置する。焼土範囲は約70cm×約60cmで不整円形を示す。やや東よりには土師器の壺が倒立して設置されている。層位は次の通りである。1層明赤褐色焼土 (5YR5/8) で縫まりがあり一部はブロック状となる。2層は黒褐色土 (5YR2/2)、3層は褐色土 (7.5YR4/4)、4層は明褐色土 (7.5YR3/2) で地山土である。2~4層は自然堆積土であり、カマド状遺構と関連するのは1層の焼土だけである。

出土土器 (第119図37、図版74) : 土師器壺で、底部と口縁部のほんの一部を欠損。ゆがんだ土器で底部から内窵して立ち上がる。調整はロクロであるが、底部の技法は不明である。胎土には砂粒を顕著に含有する。焼成は不良であるが二次焼成の影響と思われる。色調は内外面ともに橙色を呈する。

SN108 (第115図、図版70)

MB55グリッド東側に位置する。焼土の範囲は約40×50cmの不整円形を示す。焼土範囲の南東隅には壺が倒立して設置されている。また北西側には約20×10cmの火熱を受けた礫が配されている。壺の底部は礫の方へ若干傾いている。層位は次の通りである。

1層 赤褐色焼土層 (5YR4/8) 褐色土が混じる。焼土ブロックを含有する。

2層 赤褐色焼土層 (5YR4/8) 焼土ブロックを含有する。

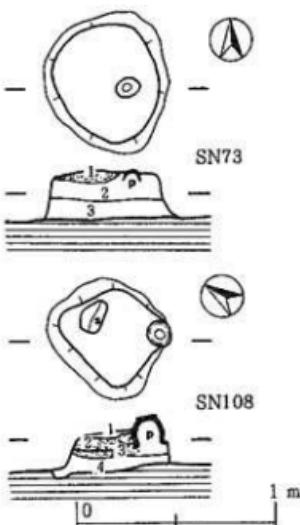
3層 赤褐色焼土層 (5YR4/6) 地山ブロックを含有する。

4層 黒褐色土層 (7.5YR3/2) 自然堆積土ではほぼ漸移層にあたる。

5層 地山土である。

4~5層は自然堆積土であり、カマド状遺構と関連するのは1~3層である。

出土土器 (第119図39、図版70) : 土師器の小型壺である。突出した底部から内窵して立ち上がり頸部からは緩やかに外凸する。成形は巻きあげで、調整は外部が口縁部のヨコナデ、胴部でケズリ様のナデを施す。内面は胴部で木口状のナデを施したのちに口縁部のヨコナデを施す。底部には2枚の木葉を認め、2葉からはみ出た部分と葉の破れた部分には砂粒を多量に認める。胎土には砂粒を顕著に含有する。焼成は良好で、色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。



第115図 SN73、108焼土遺構

SN132（第112図）

LT49グリッド中央に位置している。焼土の範囲は、長軸約80cm×短軸約50cmである。焼土の上面には中央部やや南よりから須恵器の破片が検出されている。焼土底面は漸移層中で窪んでいる。

出土土器（第118図39、図版75）：須恵器壺で約1/4を残存する。底部からほぼ直線的に立ち上がる。調整はロクロで底面は回転糸切りである。胎土には砂粒を顕著に認める。焼成は良好で、色調は内外面とも灰白色（5Y7/1）を呈する。ただし口縁部の外面は1cmの幅でにぶい赤褐色（7.5R4/3）を示し、灰白色との中间は浅黄褐色（10YR8/4）を呈する。

SN134（第112図）

LT49グリッド南西隅に位置しており、SK133・168に切られている。確認は地山面である。平面は約70cmの円形を呈する。底面は緩やかに凹曲し、深さは約20cmである。埋土は焼土層であり1層は褐色土（10YR4/4）が主体である。炭化物・焼土の粒子を含有する。2層は1層と類似するが、1層比べて明るく締まりがない。

SN136（第112図）

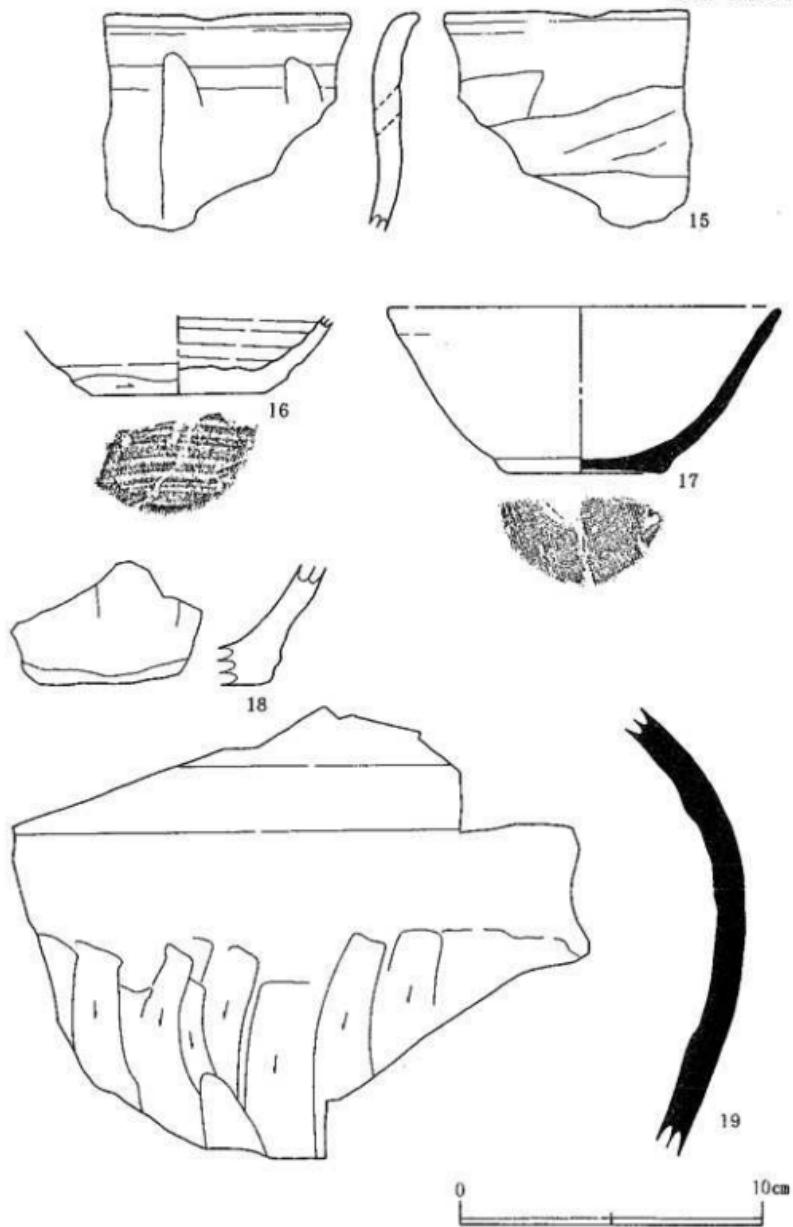
MA49グリッド南側に位置している。焼土の範囲は、長軸約50cm×短軸約40cmで、焼土を除くと緩やかな落ち込みを形成する。底面は漸移層であり若干堅くなる。

SN163（第112図）

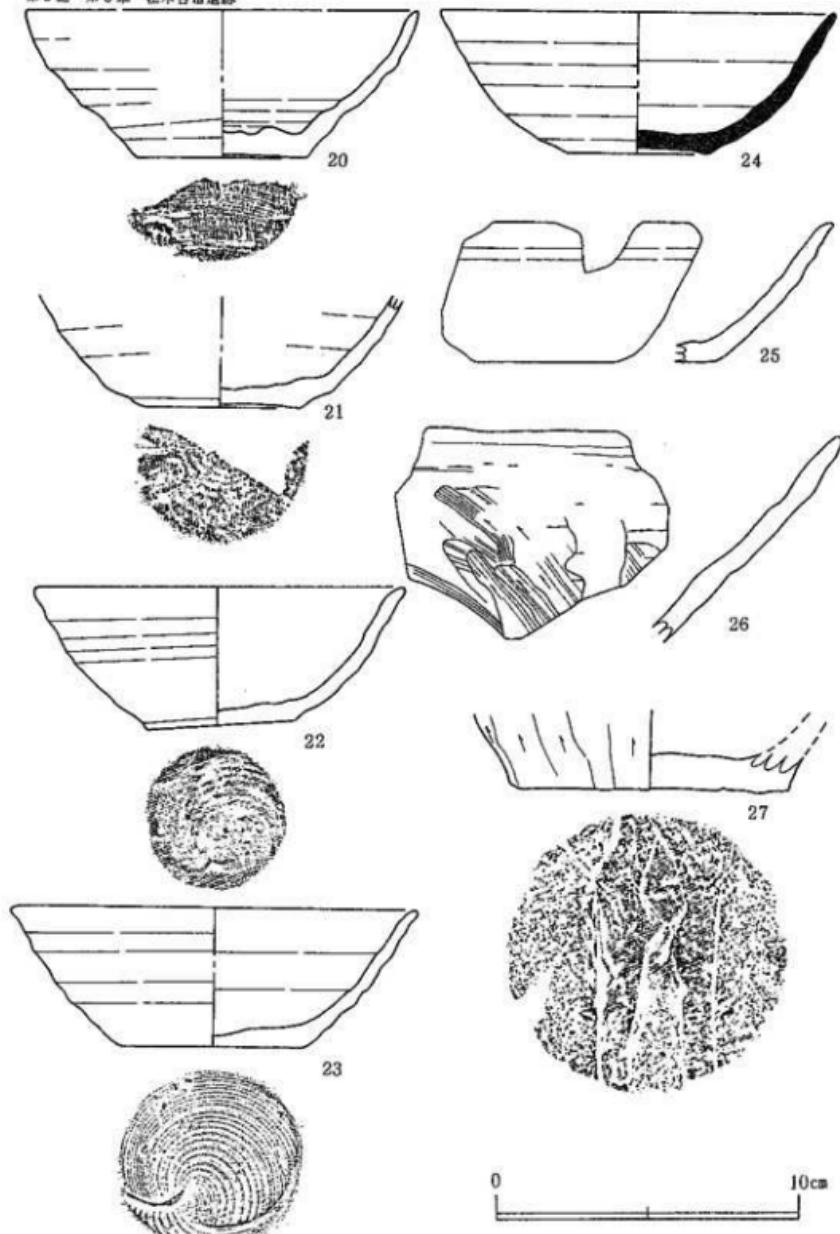
本焼土遺構はMC50グリッド北東に位置している。擾乱土を除去した焼土の範囲は長軸約50cm×短軸約30cmの方形を示す。擾乱土の中には焼土が多量に含まれていたことから推して、焼土遺構は本来大きかったと思われる。焼土を除去すると地山面が浅い窪みとなる。確認焼土上面から土師器片を1点認める。

SN137（第112図）

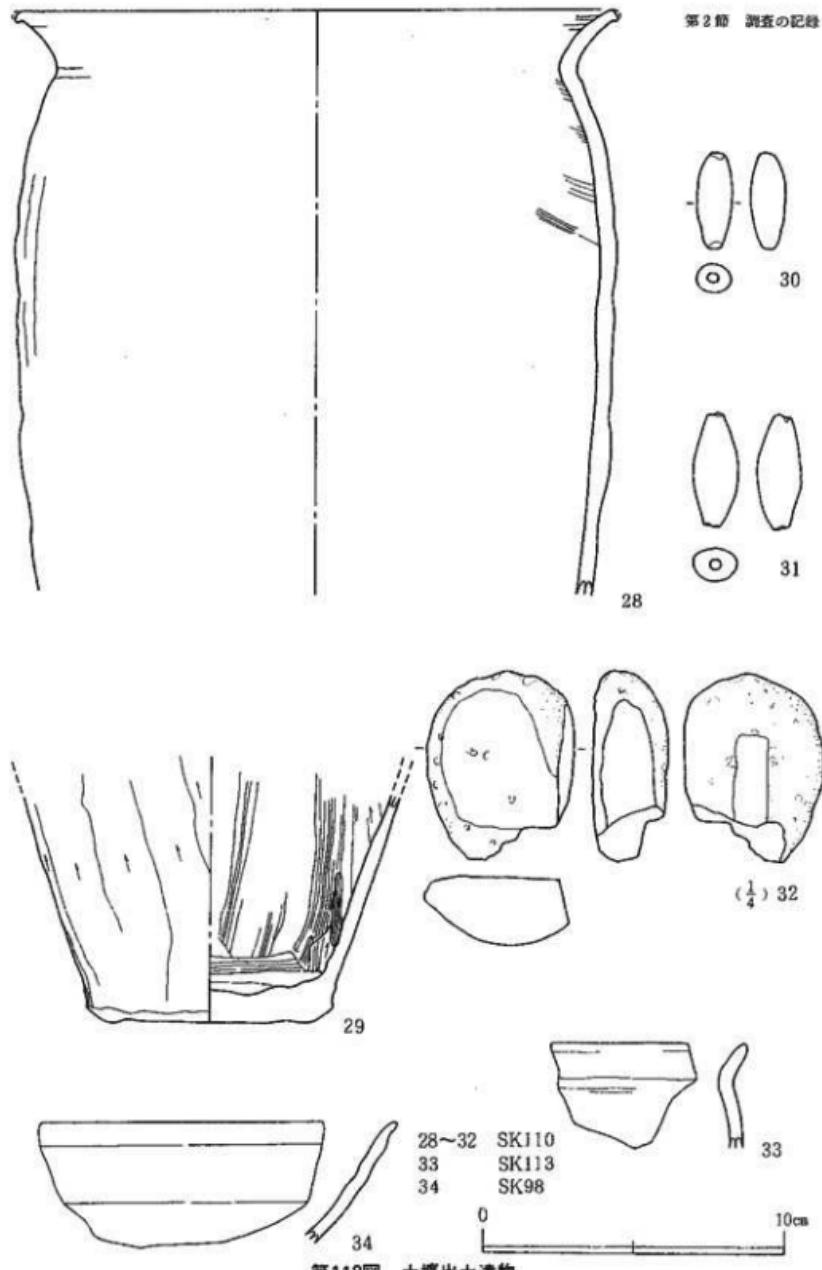
MB50グリッド北西に位置している。擾乱を除去した焼土の範囲は長軸約60cm×短軸約40cmの方形を示す。擾乱土の中には焼土が多量に含まれていたことから推して、焼土遺構は本来大きかったと思われる。焼土を除去すると地山面が浅い窪みとなる。近接して東側には径約20cm・深さ24cmのピットが存在する。ピットが本遺構に伴うかどうかは不明である。

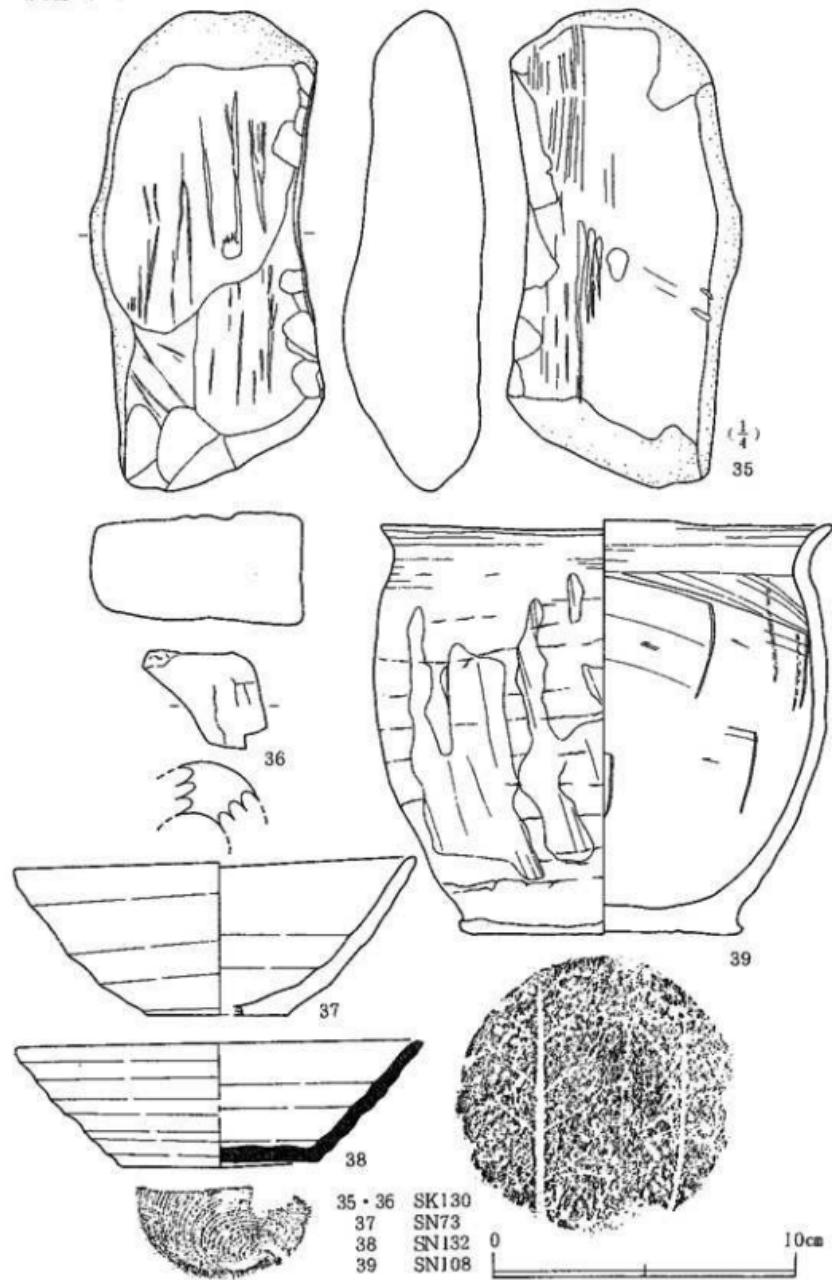


第116図 SK131土壌出土遺物



第117図 SK110土坑出土遺物





第119図 土壌・焼土遺構出土遺物

(2) 遺構外出土遺物(第120~122図、図版75・76)

遺構外から出土する遺物は、調査区全体がI層～Ⅲ層までかなり搅乱を受けているため、ほとんどが破片で検出されたものである。出土地点は、当時期の遺構群が確認された調査区中央部と重なる。ここでは図化できたものに関して説明を加え、また年代の不明な遺物も紹介する。

土器類

环(40・41・44):40は底部の1/2を残存する。底部から内凹して立ち上がる。調整はロクロで底面は静止糸切りである。体部最下端には5mm内外のヘラケズリを施す。胎土には砂粒を顕著に含有し、針状物質を認める。焼成は良好で、色調は内外面ともに橙色を呈する。

41は底部の1/2、口縁～体部の1/4を残存する。底部から内凹して立ち上がり口縁部で外凸する。調整はロクロで、底面は回転糸切りである。胎土には顕著な砂粒をほとんど含有しない。焼成は普通で、色調は内外面で浅黄橙色であるが、外面底部とその周辺は橙色を呈する。

44は底部破片で、調整はロクロで底面は静止糸切りである。胎土には針状物質を認める。焼成は良好で、色調は内外面とも橙色を呈する。底部外面に「王」の字を付す、墨書き土器である。

甕(50~55):50は小型甕で底部の1/3を欠損。底部は直立し、のち内凹して立ち上がる。成形は巻きあげで、調整は外面ヘラケズリ、内面は木口状工具のナデを施す。底面には、木葉痕が認められる。胎土には砂粒を顕著に含有する。焼成は普通で色調は外面で淡黄橙色を呈する。内面には黒色処理を施す。51~55はすべて底部の破片である。53は底部に木葉痕をとどめ、51は木葉痕らしい3本の筋を認める。55の底面と外面はヘラケズリで、52・54は特別な痕跡がない。内面はすべてナデのようである。胎土は、砂粒を顕著に含有し、焼成は55が良好、52~54が普通、51は不良である。色調は51が内面にぶい橙色(5YR8/3)、外面浅黄橙色(5YR8/3)、52が明黄褐色土(10YR7/6)、53が浅黄橙色(7.5YR8/4)、54が淡黄色(2.5Y8/3)、55が橙色(2.5YR7/6)を呈する。

須恵器

环(42・43):42は底部と口縁～体部の1/2を残存する。底部から内凹して立ち上がり、口縁部でわずかに外凸ぎみとなる。調整はロクロで、底面は回転糸切りである。胎土には、砂粒を顕著に含有する。焼成は良好で、色調は内外面ともに灰白色を呈する。

43は小破片。底部から内凹ぎみに立ち上がる。調整はロクロで、底面は回転糸切りである。胎土の砂粒は目立たない。焼成は良好で、色調は内外面とも浅黄色を呈する。

盃(45・47・49):45は底部破片。断面が三角形の付高台である。底部中央が薄く、底部と高台は接地面を同じくする。成形は巻きあげと思われる。調整はロクロで外面底部と胴最下位に木口状工具のナデを認める。内面はロクロ調整のうちに搔き目を認める。胎土には砂粒を顕著に含有する。焼成は良好で、色調は内面で灰白色、外面で黄灰色を呈する。47と同一個体

の可能性がある。

49は外面ヘラケズリ、内面には搔き目のうちにロクロ調整痕が認められる。色調は内面灰白色（7.5Y7/1）、外面灰色（7.5Y6/1）を呈する。

甕（48）：内面に当て目、外面に叩き目を認める。当て目の条には直行する平行な線が並ぶ。色調は内面灰褐色（7.5YR5/2）、外面灰黄褐色（10YR6/2）を呈する。

砥石（46）：材質は凝灰岩である。上下を除く4面はまんべんなく使用され、平滑な面となっている。一部には細かい擦痕が認められる。下部には剥離部分が多く、切断行為を示すかもしれない。重量は340gである。一部には吸炭部分が認められる。色調は淡黄色（2.5YB/3）を呈する。

皿（56～59）：1.5cmの孔をいくつもち、わずかに弯曲した皿状を示す。56の器厚は約5mmと薄く、凸面には細砂が多量に付着する。57と59は同一個体の可能性がある。58は凸面に布目を有する。穿孔部は、凸面が狭く、凹面が広い特徴がある。59の大型破片を復元すると、径約11cmの円形を示すと思われる。同破片の凸面は、火熱のため剥がれ落ちている。胎土は比較的精選されている。焼成は良好で、色調は浅黄橙色を主体とする。

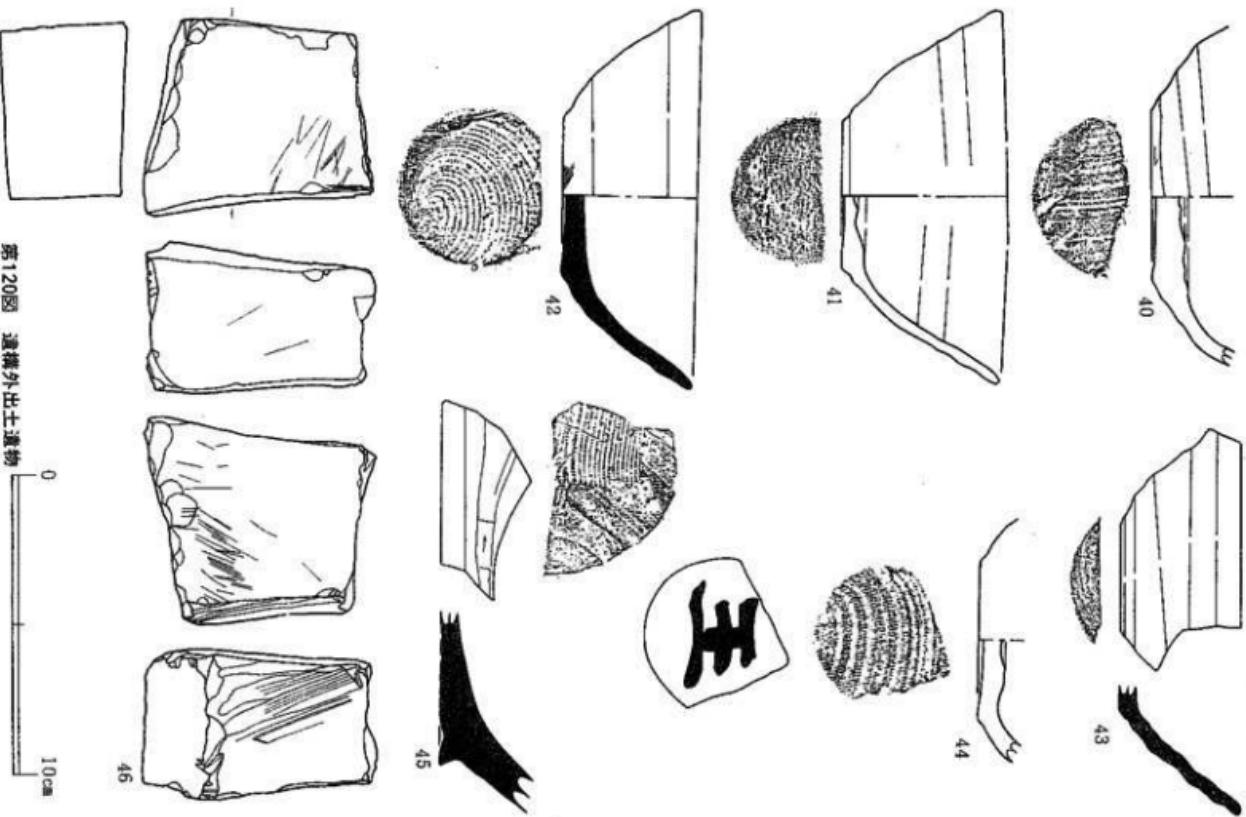
土鍤（60）：長さ約5cm×最大幅約4cmを計り、穿孔径は約1.5cmである。穿孔部の両端は平坦にしている。焼成は普通で、色調は橙色を呈する。

玩貝（61・62）：径1.7cm～1.9cm、厚さ約7mmを計り、碁石状を示す。61は1.8g、62は1.6gを量る。胎土は細砂も含有せずよく精選され、粘土は斑状に混じり合う。焼成は良好で、色調は浅橙色を呈する。当遺物は、非常に均一に作られていることと61の周縁の一部がつまみ出されていることから、型作りの可能性がある。

蓋（63）：つまみ部である。調整はロクロで、裏面は平らで黒く炭素の吸着と思われる。胎土には砂粒が顕著である。焼成は良好であり、色調は浅黄橙色を呈する。

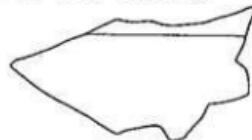
なお、遺構内外から出土の土師器と須恵器についての観察表（第2表）を付してあり若干の説明を加えておく。主な項目は、法量・胎土・焼成・色調であり、土器製作技法に関する特色は特徴として扱っている。法量は、口径・底径・高さについての記載では推定値を表している。胎土では、砂粒・赤色粒の状態について記載している。砂粒は1～2mmを中心とした大きさである。赤色粒は酸化鉄分と考えられるが、土器焼成段階を考える上で重要な要素と考えられる。焼成は良・普・悪と大きく3段階に分け、色調は内外面について主となる色調を「新版標準土色帖」で判別した。

第2節 図版の記録

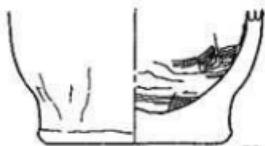


第120図 遺構外出土遺物

第2回 第6章 松木台遺跡



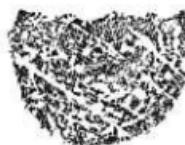
47



50



48



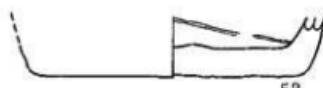
49



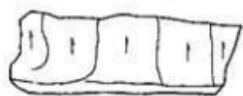
51



54



52



55

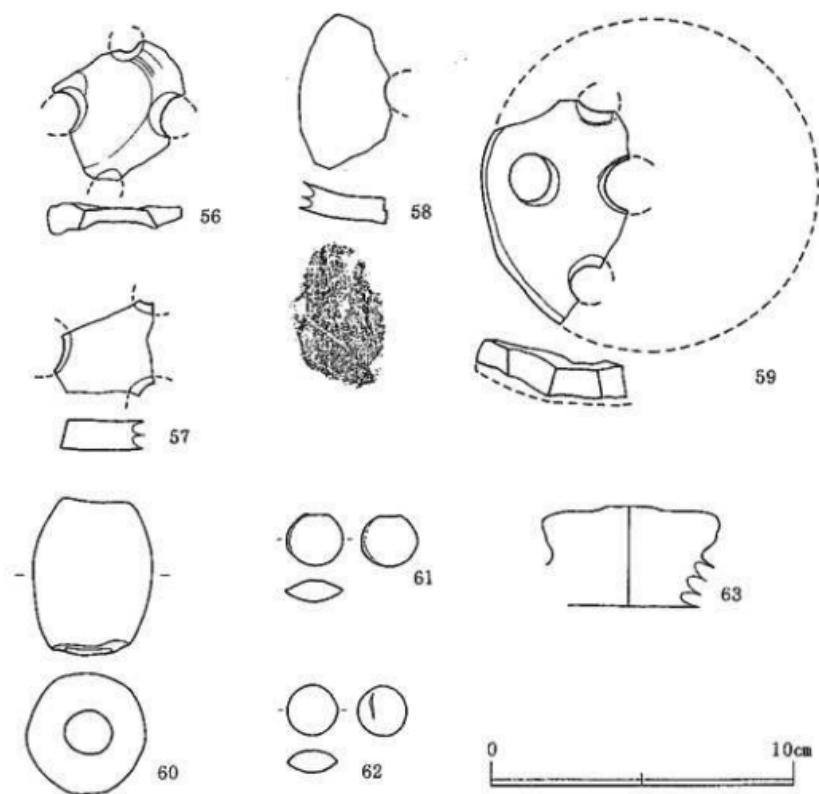


53



第121図 遺構外出土遺物





第122図 遺構外出土遺物

第2表 土師器・須恵器の觀察表

番号	形態	基盤	出土場	基 本 (cm)	地 士	色	質	裏面の特徴など		
1	1	15	L10	SH105	高4.3	砂粒少	青 赤色	SYR7/4	鉛止め切り+ヘラケズリ	
2	2	7	-	-	CH1.0 高5.5 細4.6	-	灰	-	*	
3	3	7	-	-	CH1.0 高5.6 細4.6	-	-	-	-	
4	4	7	-	-	CH1.0 高5.5 細4.6	砂粒多	青	-	-	
5	5	7	-	-	CH1.0 高5.4 高5.1	-	-	-	-	
6	6	7	-	-	CH1.0 高5.3 細4.6	砂粒少	青 赤色	SYR7/4 内赤色 (2SYR7/4)	不明+ヘラケズリ	
7	7	7	-	-	CH1.0 高5.3 細4.6	-	-	内赤色 (2SYR7/4) 外赤色 (2SYR7/4)	削止め切り	
8	8	7	-	-	CH1.0 高5.3 高4.6	-	-	内赤色 (2SYR7/4)	*	
9	9	7	-	-	底6.6	砂粒多	青 赤色	SYR7/4 内赤色 (2SYR7/3) 外赤色 (2SYR7/3)	砂 芯	
10	10	7	-	-	底6.7	-	-	褐色 (8YR7/3)	ヘラケズリ	
11	11	7	-	-	CH1.0 高5.7 高5.7	-	灰	-	鉛止め切り+ヘラケズリ	
12	12	7	-	-	CH1.0 高5.8 高5.7	砂粒多 青色背景	青 赤色	SYR7/4 内赤色 (2SYR7/4)	*	
13	13	7	-	-	CH1.0 高5.8 高5.7	-	青	成層赤色 (7AYR7/4)	-	
14	14	7	-	-	CH1.0 高5.8 高5.7	-	-	成層赤色 (7AYR7/4)	-	
15	15	42	青	SH131	-	砂粒少	青 赤色	SYR7/4 内赤色 (2SYR7/3) 外赤色 (2SYR7/3)	鉛止め切り+ヘラケズリ	
16	16	15	环	-	底5.8	砂粒少	青	SYR6/5 内赤色 (2SYR6/5) 外赤色 (2SYR6/5)	*	
17	17	15	环	-	CH1.0 高5.4 高4.6	-	青	SYR6/5 内赤色 (2SYR6/5) 外赤色 (2SYR6/5)	砂 芯	
18	18	15	土器	-	-	砂粒少	青	SYR6/5 内赤色 (2SYR6/5)	砂 芯	
19	19	15	环	-	CH1.0 高5.4 高4.6	砂粒多	青	SYR6/5 内赤色 (2SYR6/5)	砂 芯	
20	20	15	上部	SH119	LA03 高5.2 高4.6	-	青	SYR6/5 内赤色 (2SYR6/5) 外赤色 (2SYR6/5)	鉛止め切り+ヘラ	
21	21	19	-	-	CH1.0 高5.2	-	-	内赤色 (2SYR6/5) 外赤色 (2SYR6/5)	削止め切り	
22	22	20	-	-	CH1.0 高5.2 高4.6	砂粒少	青	SYR6/5 内赤色 (2SYR6/5)	*	
23	23	21	-	-	CH1.0 高5.2 高4.7	-	青	SYR6/5 内赤色 (2SYR6/5)	*	
24	24	22	环	-	CH1.0 高5.4 高4.7	砂粒多	青	SYR6/5 内赤色 (2SYR6/5)	*	
25	25	23	上部	-	高4.6	砂粒多 青色背景	青	SYR6/5 内赤色 (2SYR6/5)	砂 芯	
26	26	24	环	-	-	-	青	SYR6/5 内赤色 (2SYR6/5)	砂 芯	
27	27	25	青	-	SH1.2	-	青	SYR6/5 内赤色 (2SYR6/5)	本器+砂 芯	
28	28	26	-	-	CH1.0 高5.0	砂粒多 青色背景	青	SYR6/5 内赤色 (2SYR6/5)	*	
29	29	26	-	-	CH1.0 高5.0	砂粒多	青	SYR6/5 内赤色 (2SYR6/5) 外赤色 (2SYR6/5)	砂 芯	
30	30	26	-	-	CH1.0 高5.0	-	青	SYR6/5 内赤色 (2SYR6/5) 外赤色 (2SYR6/5)	砂 芯	
31	31	26	青	-	SH1.2 高5.7	砂粒多 青色背景	青	SYR6/5 内赤色 (2SYR6/5) 外赤色 (2SYR6/5)	本器+砂 芯	
32	32	33	砂器	SH132	CH1.0.22 高5.0 高5.0	砂粒少	青	SYR6/5 内赤色 (2SYR6/5) 外赤色 (2SYR6/5)	砂 芯	
33	33	32	砂器	SH108	CH1.0.22 高5.0 高5.0	砂粒少	青	SYR6/5 内赤色 (2SYR6/5) 外赤色 (2SYR6/5)	砂 芯	
34	34	32	青	上部	SH108	CH1.0.22 高5.0 高5.0	砂粒少	青	SYR6/5 内赤色 (2SYR6/5) 外赤色 (2SYR6/5)	砂 芯
35	35	34	青	-	CH1.0.22 高5.0 高5.0	-	青	SYR6/5 内赤色 (2SYR6/5) 外赤色 (2SYR6/5)	砂 芯	
36	36	35	-	-	SH147	砂粒多 青色背景	青	SYR6/5 内赤色 (2SYR6/5)	*	
37	37	36	-	-	CH1.0.22 高5.7	砂粒多 青色背景	青	SYR6/5 内赤色 (2SYR6/5) 外赤色 (2SYR6/5)	*	
38	38	37	-	-	CH1.0.22 高5.7	砂粒多 青色背景	青	SYR6/5 内赤色 (2SYR6/5) 外赤色 (2SYR6/5)	*	
39	39	38	-	-	CH1.0.22 高5.7	砂粒多 青色背景	青	SYR6/5 内赤色 (2SYR6/5) 外赤色 (2SYR6/5)	*	
40	40	39	-	-	CH1.0.22 高5.7	砂粒多	青	SYR6/5 内赤色 (2SYR6/5) 外赤色 (2SYR6/5)	*	
41	41	40	-	-	CH1.0.22 高5.7	-	青	SYR6/5 内赤色 (2SYR6/5) 外赤色 (2SYR6/5)	砂 芯	
42	42	41	-	-	MB254	CH1.2.20 高5.5 高4.6	砂粒少	青 白色	SYR6/5 内白色 (2SYR6/5)	砂 芯
43	43	42	-	-	LT51	SS3.9	-	浅黄色	SYR7/3	*
44	44	43	-	-	LT51	MB255	-	褐色	SYR7/3	砂 芯
45	45	44	-	-	LT51	MB255	-	褐色	SYR7/3	砂 芯
46	46	45	-	-	LT51	-	-	内赤色 (2SYR7/3) 外赤色 (2SYR7/3)	砂 芯	
47	47	46	-	-	LT51	-	-	内赤色 (2SYR7/3) 外赤色 (2SYR7/3)	砂 芯	
48	48	47	-	-	LT51	-	-	内赤色 (2SYR7/3) 外赤色 (2SYR7/3)	砂 芯	
49	49	48	-	-	LT51	-	-	内赤色 (2SYR7/3) 外赤色 (2SYR7/3)	砂 芯	
50	50	49	-	-	LT51	MB255	-	内白色 (2SYR7/3) 外白色 (2SYR7/3)	本器+内 色	
51	51	-	-	-	MA52	SS5.2	砂粒多 青色背景	青 内赤色 (2SYR6/3) 外赤色 (2SYR6/3)	本器?	
52	52	-	-	-	MA55	SS5.2	砂粒少 青色背景	青 明黄色 (2SYR7/3)	*	
53	53	-	-	-	MA55	SS5.2	砂粒多 青色背景	青 浅黄色 (2SYR7/3)	*	
54	54	-	-	-	MA55	SS5.2	砂粒少 青色背景	青 浅黄色 (2SYR7/3)	*	
55	55	-	-	-	MA55	SS5.2	砂粒少 青色背景	青 浅黄色 (2SYR7/3)	*	

第3節 まとめ

1 旧石器時代

(1) 遺物の出土状況について

今回の松木台Ⅲ遺跡の旧石器時代の調査面積は、25グリッド400m²である。この調査範囲内から出土した旧石器時代の遺物は、現場で出土位置を登録したもの3,168点（炭化物を除く）に、黒色土中から出土したものを加えると約3,250点に達する。その内訳はナイフ形石器などの定形的石器66点、残核27点、剥片約1,900点、自然礫9点、石屑約1,300点である。これらの遺物は、第6図に見る如く調査範囲内からまんべんなく出土したものではなく、平面的には、直径2～3cmの不正な円あるいは楕円形で囲まれる範囲内に集中する部分もある。また、垂直分布を見ても、出土レベルが一様ではなく、特に下位のレベルで緩く波打っている。これは、前述した如くこれらの石器群がインボリューション（この中のブリケーションと呼ばれるものに似ている）の影響を受けた結果、ブリケーションの波の中に包含されることが多かったためと考えられる。

昭和58・59年度の風無台Ⅰ遺跡・風無台Ⅱ遺跡・松木台Ⅱ遺跡の発掘調査においても、我々は旧石器時代遺物包含層の中位～下位にかけて長径0.5～1.5mの楕円形あるいは不正円形状の土色の違いを認めており、その中から石器が比較的多く出土することを認識していた。しかもそれは土壤状には見えるものの、決め手に欠く状況にあった。だが、最後まで石器群が出土し続けるのはそのような土壤状の中からであった。つまり、この時点で我々は、七曲台における旧石器群の包含層がインボリューションの影響を受けていることをしなければならなかったが、それができていなかった。今後一時期の所産であると判断される石器群の垂直分布が、0.5m前後に達する場合は、石器群がインボリューションの影響を受けている可能性のあることに十分留意する必要がある。

なお、松木台Ⅲ遺跡における石器群の分布状況は、これまで調査された同じ台地の風無台Ⅰ・Ⅱ遺跡・松木台Ⅱ遺跡とは異なって、比較的散漫である。

(2) 石器組成について

今回の調査で検出された定形的な石器は、ナイフ形石器32点、搔器31点、削器2点、彫刻刀形石器1(2)点の計66(67)点である。この中では、いわゆる典型的なエンドスクレーパーを含まない搔器の点数が比較的多い。このような形の搔器が定形的な石器組成の約半分を占める例は他に知らない。また、ナイフ形石器は素材となった縦長剥片（石刃）の形状をほとんど変えることなく、基部両側縁を中心に細かい二次加工が施されている。この中では、I類とした

「長さに比べ幅が広く、先端部にも刃を持つ石刃を素材としたナイフ形石器」が極めて特徴あるものである。このようなナイフ形石器はいわゆる「東山型ナイフ形石器」の範疇の中で把えられるものであろうが、器最大幅が先端部にあるようなものもあり、一応ここでは新しい型のナイフ形石器としておきたい。

(3) 剥片剥離技術について

今回の調査区内で何らかの形で剥片剥離作業の行なわれたと推定できる母岩の数は合計16個である。（このうち資料No.3と6は図示も説明もしていない）。この16個の母岩のなかには、分割された後それぞれ1個の石核となって剥片剥離作業が行なわれているものがあり、剥片剥離技術を推定し得る石核の総数は27個となる。これらの各々の石核が石刃技法あるいはそれに類する技術で剥片剥離が行なわれているか否かを基準として分類したのが第3表である。これによると、27個の石核からの剥片剥離技術は広義の石刃技法とすることのできるものが11個（39%）、確実に石刃技法でないとすることのできるものが14個（50%）、どちらともいえない中間的なものが3個（11%）となる。なお、ここでは石刃技法を広義にとらえ1ないし2つの打面から連続的に剥離する技術とした。

このように広い意味での石刃技法と、石刃技法ではなく不定形剥片を生産する剥片剥離技術とが同居するような技術基盤を持つ石器群の編年的位置については、後述するとして、本遺跡において見られる石刃技法を今一度まとめて見たい。本遺跡に見られる石刃技法には基本的に打面再生や打面転位は僅かに認められるものの、打面調整や稜形成のための作業面調整などのいわゆる真正な石刃技法に見られる諸調整技術はないかあるいはごく未発達である。打面は単設のものと両設のみのとがあり、それぞれの打面を持つ石核の形状には大きな差異がある。すなわち、単設打面を有する石核の形状は基本的に円柱か角柱、あるいは逆円錐・逆角錐状を呈する。これに対し、両設打面を持つ石核の形状は、高さの極端に低い三角錐状を呈する（資料No.10のものについては不明）。そして単設打面の石核の一端から円の4分の1周を繰り返すように剥片剥離が進められる。一方両設打面を有する石核においては、平面的には三角形を呈する石核の、底辺を決めて他の2辺を打面にし底辺から頂点に剥片剥離作業が進行する（頂角は30°～60°前後である）。従って、単設打面から得られた目的的剥片は比較的長さに齊一性が見られるものの、両設打面から得られた剥片は短いものから長いもの、厚手のものから薄いものとバラエティーに富んでおり、剥片の側辺には背面や腹面と直交するような面をもつものも見られる。

なお、1例だけの資料であるが、記憶にとどめられたいのは、資料No.4の石核Dにおける剥片剥離技術である。広い板状の一側辺から自然面を打面として打点を左右に移動させながら下

端に明確な面としての底面を持つうすい横長の剥片を剥離し、最後には90°打面を転移して両設打面による縦長剥片を剥離している。この作業の終盤まで得られた底面を持つうすい横長剥片がどのような石器の素材となったのかは、これを素材とした石器が検出されていないので分からぬが、単純的には瀬戸内技法にわずかに似た技法とそれに類するような剥片が想起せられて興味深い。

(4) 松木台Ⅲ遺跡出土石器群の位置について

このようにやや複雑な様相を呈する石器群の旧石器時代における編年的な位地は、どこに求められるべきであろうか。ここに即答できるような比較資料がこれまでのところ得られていないのであるが、ここでは以下に述べるような諸要素から、日本後期旧石器時代における石刃石器群の萌芽期あるいはその初期には位置するものとしておきたい。

①用いられている石刃技法において、諸調整技術の極めて未発達な段階のものであること。このような石刃技法をして、あるいは終末期の石刃技法の1つであると把らえる見方もあるが、その場合には、石器組成のその中に時期に特徴的な石器を若干は含むが通常であったと考えられる。典型的なエンドスクレイバーや尖頭器は1点も出土していない。

②検出された石器群がインボリューションの影響を強く受けていること。このインボリューションがいつ形成されたものか特定できていながら、その影響をほとんど受けていないと見られる第Ⅲ層最上位から、十和田八戸テフラ（噴出年代は¹⁴C年代より10,000～13,000年前とされる）の可能性があるとされるテフラの火山ガラスが検出されており（このテフラの層準は第Ⅲ層最上位よりも上位にあると考えられる）本石器群がこれよりは古いと考えられる。

③ME55～MF55グリッドにかけての遺物集中箇所で、石器群と伴出した多くの木炭の¹⁴C年代が22,750±620BPとされていること。この木炭については、その検出状況（巻頭図版4）からも明らかのように、本石器群と同時期のものとすることができる。

以上、松木台Ⅲ遺跡から出土した旧石器についてまとめたが本来、本石器群から引き出し得る情報はもっと多く多岐に渡るものである。しかし、整理作業の不足から上記のことしか報告できなかった。今後とも、整理作業を延長するつもりでその不備を認うこととに務めたい。また、本石器群に類似した資料の検出も大事であるが、これまで調査された多くの資料についても、精力的な接合作業を通じてより確実な剥片剥離技術の解明などを行い、石器群により多くのことを語らせなくてはいけないのではないかと思考している。

第3表 各資料及び石核の剥片剥離技術

資料 No 及び石核名	石 刀 技 法					中間的なもの	石 刀 技 法 でないもの	
	单 設	両 設	打 面 再 生	打 面 転 移(多打面)				
1 No.1	○		×	×				
2 No.4 石核C		○	×	×				
3 石核D		○	×	○			(○)	
4 石核E							○	
5 石核F		○	×	×				
6 石核G	○		○					
7 No.5 石核B							○	
8 石核C							○	
9 石核D							○	
10 石核E							○	
11 石核F							○	
12 石核G							○	
13 No.11	○		×	×				
14 No.7		○	×	×				
15 No.12			(○)	○	○)	○		
16 No.9			(○)	○	○)	○		
17 No.10	○		○	○				
18 No.10		○	?	?				
19 No.2							○	
20 (5つの石核を 確認)							○	
21							○	
22							○	
23						○		
24 No.8							○	
25 No.15	○		×	×				
26 No.14							○	
27 No.3	○		?	?				
28 No.6							○	
合 计	28	6	5	2(2)	2(2)	2	3	14

2 縄文時代

(1) 遺構について

豊穴住居跡3軒、土壙73基、袋状土壙5基、Tピット15基、配石遺構4基、焼土遺構14基の遺構群は、先述のとおり調査区北側の台地縁辺部で検出されている。特に調査区の西北端に集中する傾向があり、西側の未調査区に遺構群の広がりがあることは充分に予測されるところである。

豊穴住居跡：円形のプランをもつ住居跡で、SI27は炉埋設土器により大木10式期であると考えられるが、SI29・107は出土土器が少なく時期を限定できないがおよそSI27と大差のない時期と考えられる。しかしながらこの3軒の住居跡は、炉の形態に違いを見せていている。SI27では複式炉をもつて対して、SI29では埋設土器に掘り込み部の伴うもので、SI109では地床炉である。ほぼ同期と考えられる住居跡の炉の形態のこうした相異は、住居の構築時期の差によるのか、あるいは各々の住居の使用目的に違いがあるのだろうか。

土壙：73基の土壙群は、その形態、遺物の出土状況から県内の各遺跡で確認されている土壙墓と考えられている土壙群と同じものであろう。本調査で検出された土壙の形態は平面的には円形・楕円形があり、前者が圧倒的に多い。またその断面形をみると両者に浅いものと深いものがある。底面にはSK81・91などのように小ピットをもつものがあることも特徴である。特にSK119のように深いピットの掘り込まれたものもある。

さらに土壙内における遺物の出土状況をみてみると、SK22・SK50からは赤色塗彩の完型土器が底面より浮いた状態で検出されている。またSK16では土壙上面に打製石斧が2枚重ねてあり、SK140ではベンガラの中からヒスイの玉が検出されている。その他大型の礫や土器片が埋土とともに埋められた状況を示すものにSK14・19・50・57・61・71・77・79などに顕著にみられる。さらに土壙上面の中央に大型の礫を配した例がSK15・29・52・74・96・138などにみられ表徴的である。

これまで県内の縄文時代晩期の土壙墓群をみてみると、ほとんどは楕円形でその主軸方向も北を中心とし、その配列にもあるまとまり（グループ）を覚えることが可能である。

本遺跡で検出された土壙も形態的には円形のものが多いが、大型の礫が土壙中央に配置されたり、埋土とともに埋め込まれたり礫の使用が極めて多く、またそれゆえに土壙墓として認定する傍証となりうるかもしれない。

袋状土壙：5基の袋状土壙は調査区東側に他の遺構群とはやや離れて点在している。台地の縁辺部での在り方は、先の七曲台の遺跡群でも確認されており縄文時代後期～晩期の貯蔵穴と考えられている。形態的には深さのあまりない寸づまりの袋状を呈していて本遺跡のものと類

似している。時期的にはSK146出土の土器、SK147がSK148を切っていることなどから縄文時代晩期それも土壙群より後出の遺構とすることができる。

Tビット：長軸を南北方向にとり、東西に並ぶように検出された15基のTビットは長楕円形で断面「V」字形を呈するもので、長さ280cm～400cm、幅30cm～50cm、深さ80cm～120cmの範囲に収まる。長軸の磁北との角度ではW-48°-N-24°-Eの範囲に含まれる。

平面的分布をみるとSKT60・58・95、SKT18・68・95のグループにみられるように、グループ内では大きさ・長軸の磁北との角度が均一化している。このことは1グループがほぼ同時に作られた可能性がある。しかしながらこのグループ間に時間的な差があるのかどうかは詳細できない。仮に15基のTビット群が成立するまでの過程を考えた場合、切り合い関係が全く無いこと、主軸方向をほぼ同じにして東西に並ぶことなどから短期間に、ある規則をもって作られたことが考えられる。

配石・焼土遺構：両遺構とも土壙確認面かそれよりやや上面で確認されており、SK84とSN38、SK99とSQ54の関係から見ても土壙が埋まってから設定されたものであることがわかる。さらに両遺構とも土壙のプラン内には決して存在しないという事実は、土壙の位置を意識して設置されたものであり土壙と時間差のないものと考えられる。

(2) 土器について

3群に分類した土器の時期は点数の少ないとあって詳細に欠ける。

第1群土器：第1類は側面圧痕の使用されていることから大木8a式に相当するであろう。

第2群土器は波状口縁で、隆唇による渦巻文がほどこされており大木9式の中でもa・bは古手のもの、cは楕円区画文が主流をなし新しいものである。

第3類は曲線的に区画された縄文部をもつもので大木10式である。

第2群土器：第1類の条痕の施される土器は縄文時代中期末葉から存在し、第2類土器とも共伴する。従ってこの中には中期末葉のものもあるかもしれない。第2類の地文を撫糸文としてその上に稚拙な沈線で文様を描くものは、県内でも出土例が多くなっているがいづれも破片資料で実体を把握するまでにはいたっていない。おそらくは十腰内I式の前段階に位置付けられるものと考えられる。第3類土器は十腰内II式に相当するであろう。

第3群土器：第1類土器は入組状三叉文の施される大洞B式、第2類土器は羊齒状文を主流とする大洞BC式、第3類土器は入組磨消縄文の施される大洞C₁式、第4類土器は大洞C₂式に比定される。第5類土器は大洞A'式ないしはそれ以降の時期が考えられる。

3 平安時代

本項では、検出されている遺構や遺物の分布を通じて、平安時代の遺構群についての性格を考えてみたい。当遺跡の平安時代の遺構は、住居跡1軒のはかに焼土遺構7基、土壙19基、柱穴5個を検出している。

この住居跡の周囲にはほかに住居跡は認められず、さらに西側未調査部分は20~30mで谷を形成しているために住居跡の存在する可能性は極めて少ない。このことから、住居跡を除くほかの遺構はほとんど調査区中央部に集中しているが、当住居跡との関わりが予想される。

また焼土遺構の中には、性格の異なる2つのタイプがある。1つはSN73・SN108のように焼土の中に倒立した遺物が設置されている遺構、もう1つは遺物を伴わない遺構である。前者は屋外のカマド的な施設と考えられ平面的には独立した様相を示すのに対して、後者は遺跡中央部に集中する土壙群との関連が考えられる。

土壙群のうちでSK130とSK162は鉄滓を含み、特にSK130ではまとまった鉄滓、フイゴ羽口と底面に置かれたような磁石が検出している。両遺構ともに焼土面が認められず、鍛冶遺構とすることはできないが、鍛冶作業に関連した遺物から本遺跡のどこかに鍛冶遺構が予想される。また土壙は平面的にはMC51グリッドを中心とする群とその北東と南東に集中する部分とを認める。MC51グリッドを中心とする群は8基あり、そのほとんどが焼土粒・炭化物粒を含んでいる。また、SN137・163が近接し、SK159の東約1mにある搅乱した焼土から焼土遺構の存在した可能性がある。このようにみていくとSK130を含む土壙群は、一連の鍛冶遺構に関わっていた可能性がある。SK110は礫・磁石・土錐・鉄滓・土器と多種類の遺物が出土し、土器は破片ばかりが豊富に出土している。そして本土壙東側にあるピットの底部からは、焼土の固まりが確認されている。このことから、土壙の機能を終えてから捨て場として利用されたと考えられる。

このように性格の言及できる遺構について個々に述べてきた。次に時間的な位置付けはどうであろうか。本遺跡から検出されている遺構は重複関係がほとんどなく、前後関係をとらえることができない。そこで遺構から検出した遺物を参考にしてみる。

SI105からは多量の遺物が検出され、その一括資料の中には静止糸切痕と回転糸切痕を有する土師器が共伴している。静止糸切痕を有する土師器は、秋田城跡・鹿角市高市向館・峰浜村中田面遺跡に例を認めるが、県内での遺跡数は少ない。この静止糸切痕を有する土師器は本住居跡から5点検出されている。このことから本遺跡における静止糸切痕を有する土師器は、ほぼ同一時期とみなすことができる。さて、この静止糸切痕を有する土師器は、SK110・SK131からも検出されている。すなわち、SI105・SK110・SK131の3遺構は、ほぼ

同時期とみなせる。

次にSN73とSN108の遺構について考えてみる。両遺構は遺物を倒立した焼土遺構として特徴的であり、同時に連続する時間帯とみなせる。そしてSN73出土土器は回転糸切痕を有する。土師器で、底部から内窓して立ち上がる形態はSI105出土土師器に類似した例がある。一方SN108出土の土器は、底部に木葉痕を有する小型甕である。この甕と形態を同じくする土師器はないが、木葉痕は二枚の木葉からはみ出した部分に多量の砂が付着する特徴的な技法である。そしてこの技法を有する甕の底部がSK110より出土している。この特徴的な技法の木葉痕を同時期製作の所産と考えると、SN108とSK110はほぼ同時期とみなすことができる。またSK110からは鉄滓も認められており、SK130・162とはほぼ関連性を有している。

このように遺物を通じて遺構を検討してみると、SI105・SN73・SN108・SK110・SK130・SK131は同時に存在していたとはいえないまでも、各遺構とも近接した時間帯に存在していたと思われる。以上のように考えてみると、先に性格を言及している遺構については、ほぼ同時期に存在していたということができ、これらの遺構はSI105に直接関連した遺構群と考えることができる。

次に遺構群の年代について、SI105・SK110の遺物を中心にして考えてみる。両遺構は、回転・静止糸切りの土師器環を共伴しており、SI105では静止糸切り土師器の小型甕を、SK110では回転糸切りの須恵器環をそれぞれ伴う。静止糸切り土師器の出現時期は不明瞭であり、伴出遺物を中心として推測してみる。

小型甕の類似品は、秋田城跡のSI306住居跡から出土している。そしてSI306の年代は、回転ヘラ切りで再調整のない須恵器環群と新しい要素の小型甕が伴うことから、9世紀前半～中頃より新しい時期と考えられている。^(註1)

一方SK110出土の須恵器環は、形態的特徴から9世紀の後半を中心とした時期と考えられる。^(註2) また糸切りの土師器で再調整のヘラケズリを施す技法に注目すれば、払田柵跡の嘉祥2年

^(註3) (849) の木簡を伴った土師器環を指摘することができる。以上より、SI105・SK110の遺物は、9世紀中葉～後葉を中心とした時期と考えておきたい。

よって遺構群の年代については、上記の年代を中心をおくと考えられる。なお、回転糸切り土師器環や小型甕の土師器は、秋田城跡第39次発掘調査の泥炭層出土遺物群の中に形態的な類似品が認められることを付記しておく。

註1 秋田市教育委員会 秋田城跡発掘調査事務所 「秋田城跡」1978(昭和53年)

註2 岩見誠夫・船木義勝 「秋田県の須恵器および須恵器窯の編年」「秋大史学」第32号 1985(昭和60年)

註3 秋田県教育委員会 払田柵跡調査事務所 「払田柵跡」1976(昭和51年)

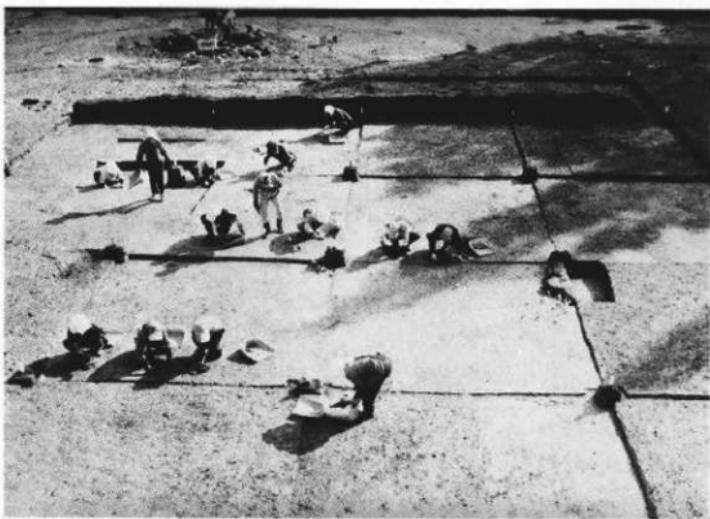
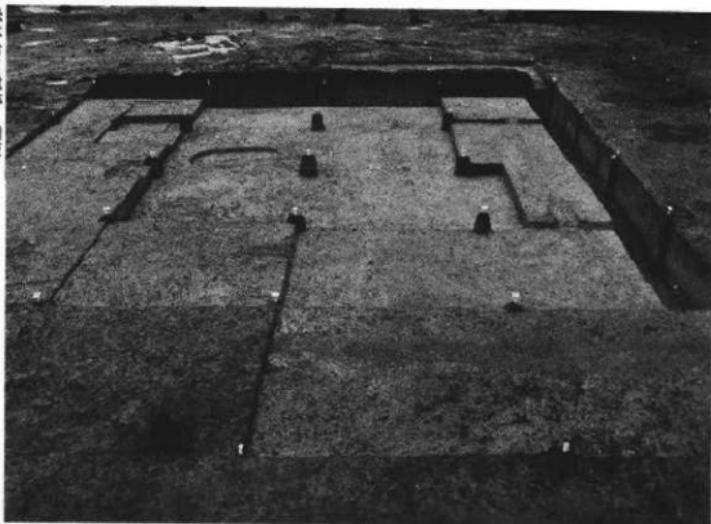
註4 秋田市教育委員会 秋田城跡発掘調査事務所 「秋田城跡」1985(昭和60年)



除土作業の状況

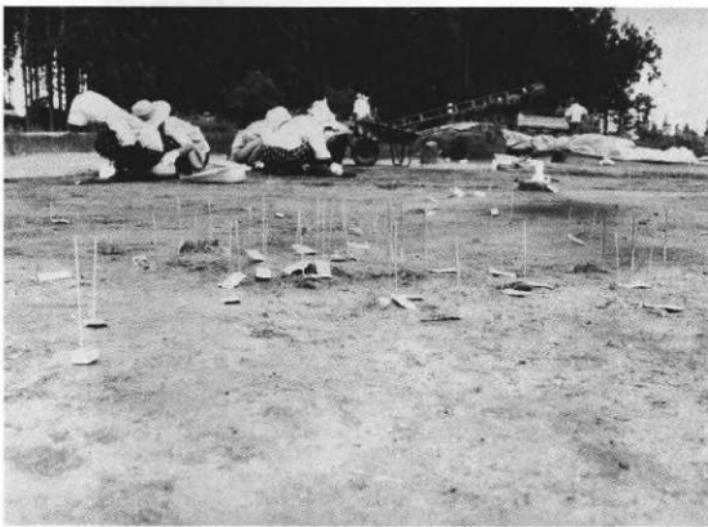
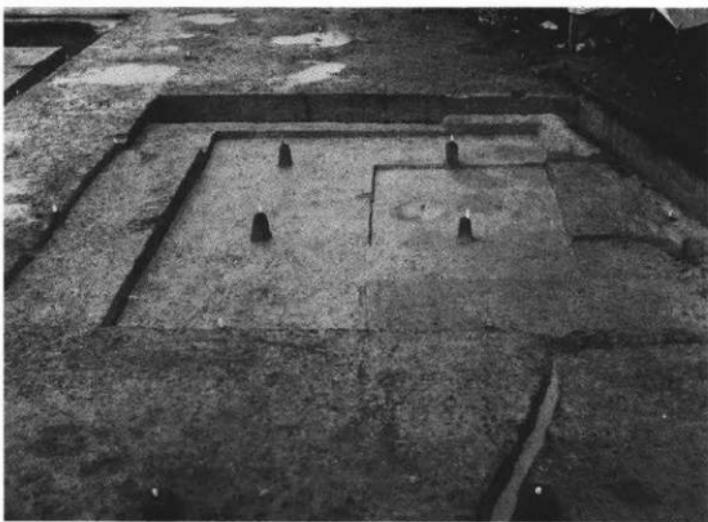


全景



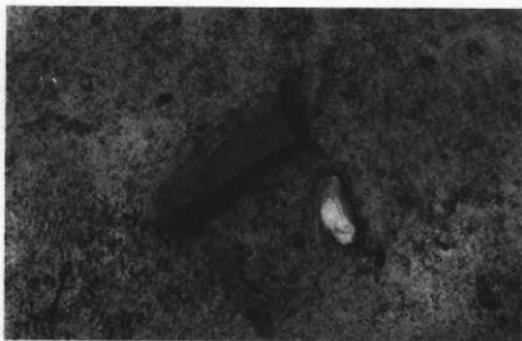
上 旧石器時代A区調査終了後（北▶）

下 同上調査風景（北▶）

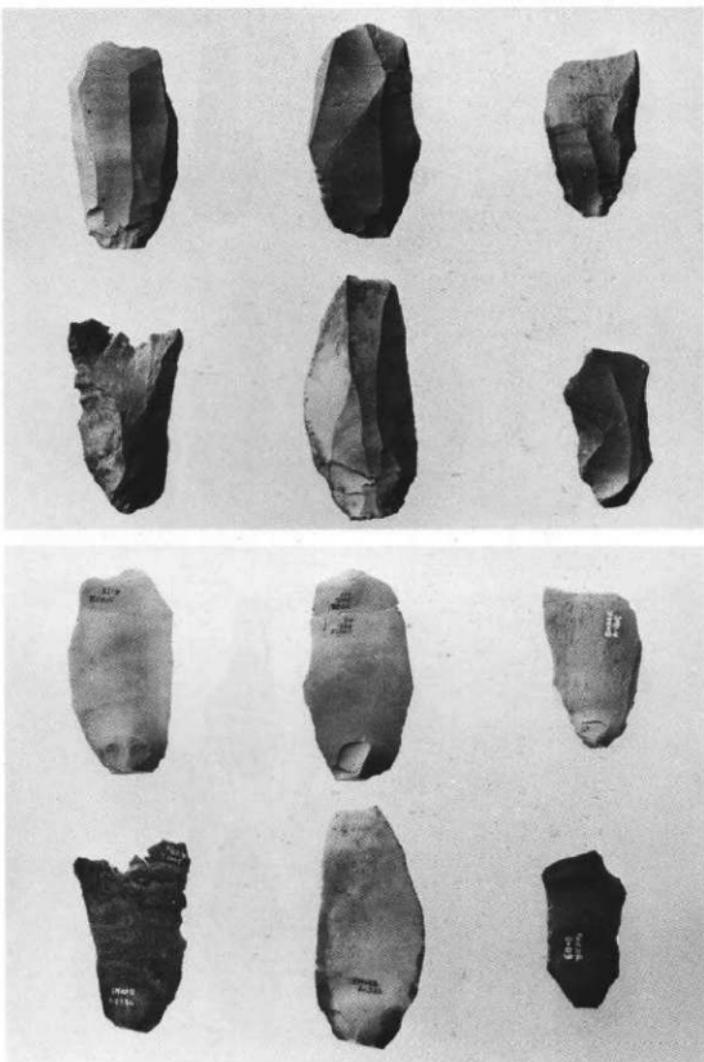


上 旧石器時代B区調査終了後（北►）

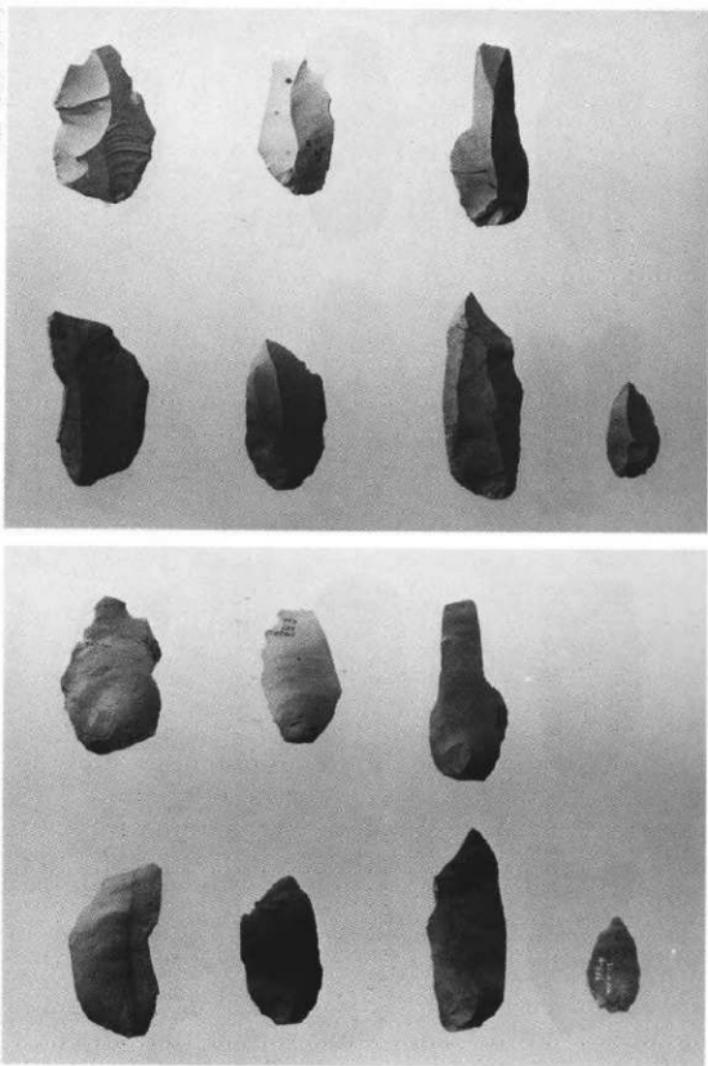
下 旧石器時代調査区調査風景（南東►）



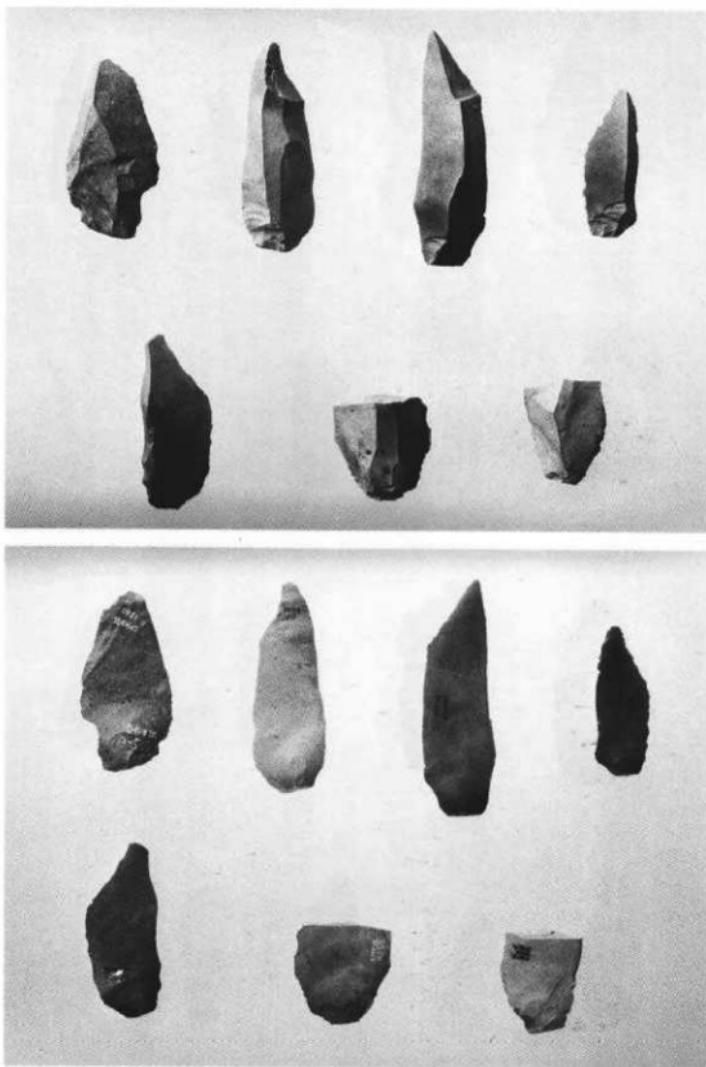
上・中・下 旧石器出土状況



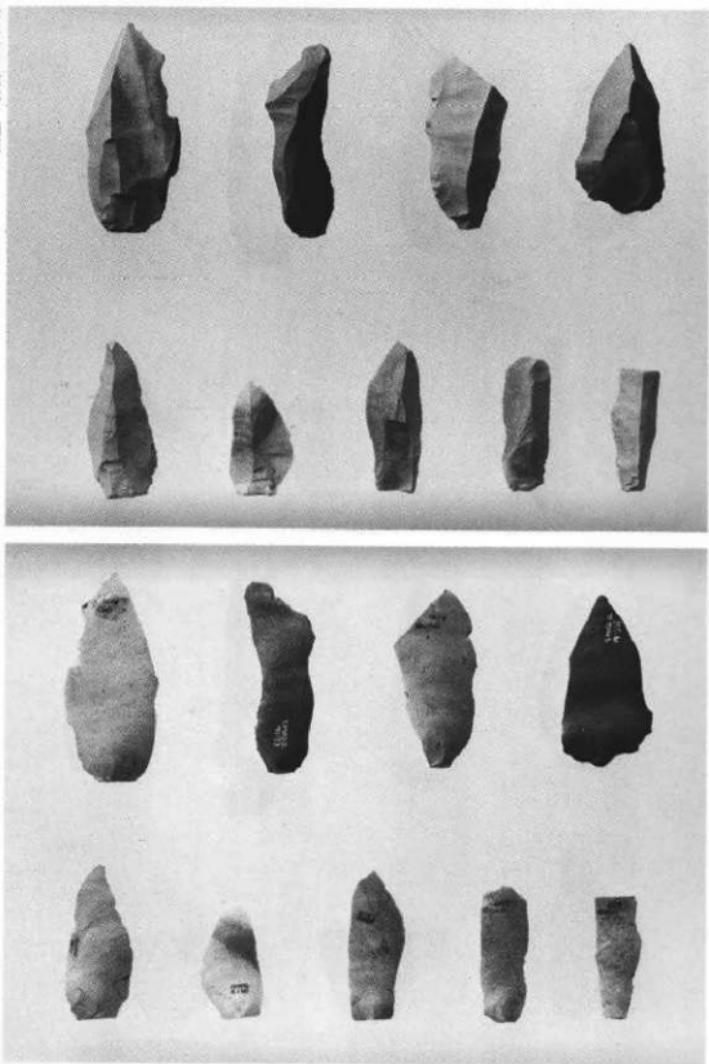
ナイフ形石器(1)



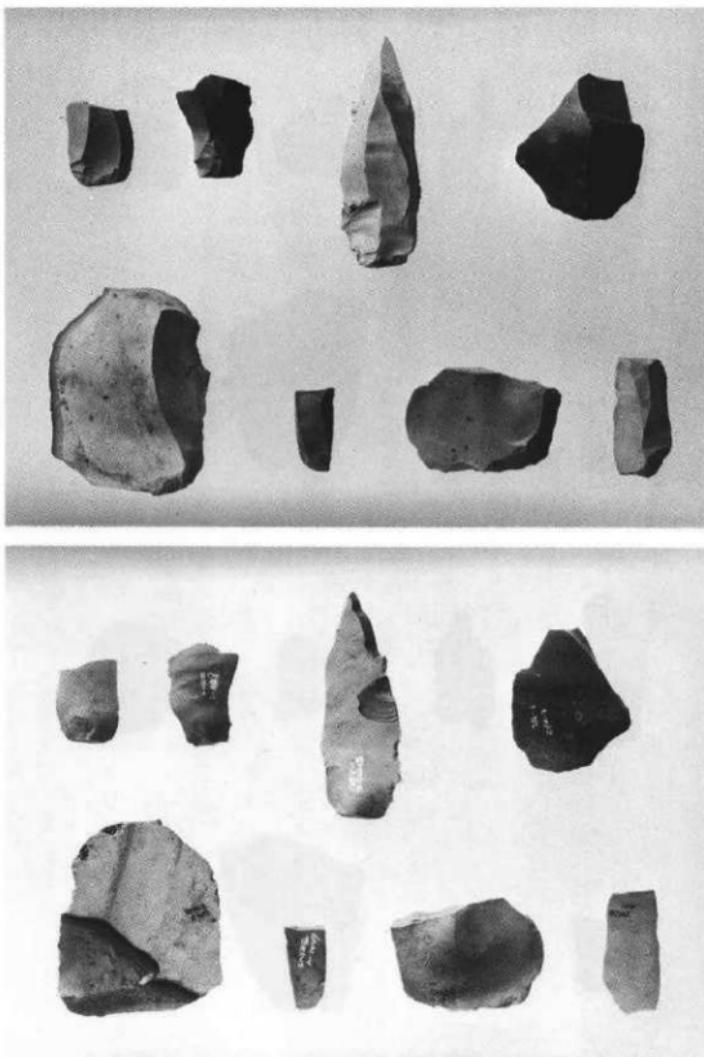
ナイフ形石器(2)



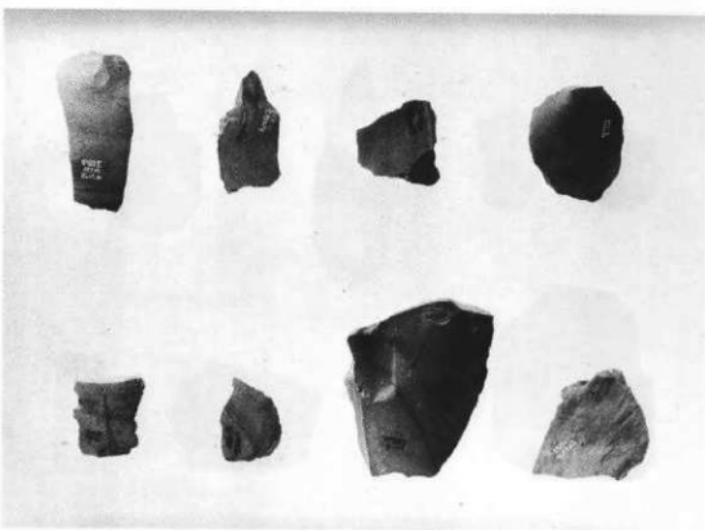
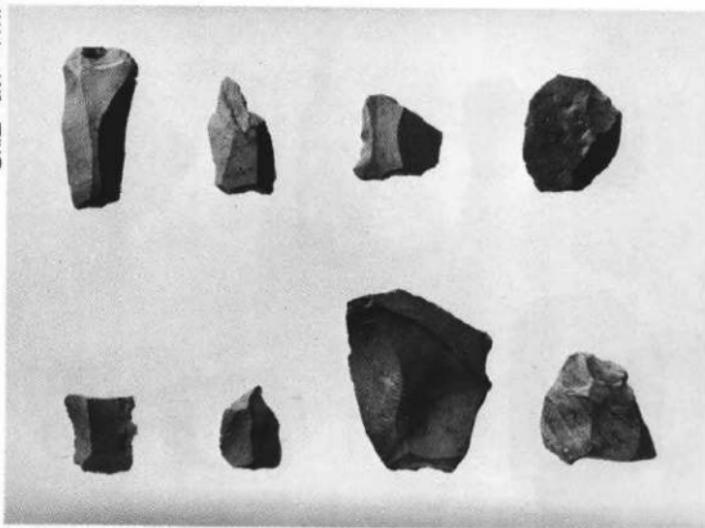
ナイフ形石器(3)



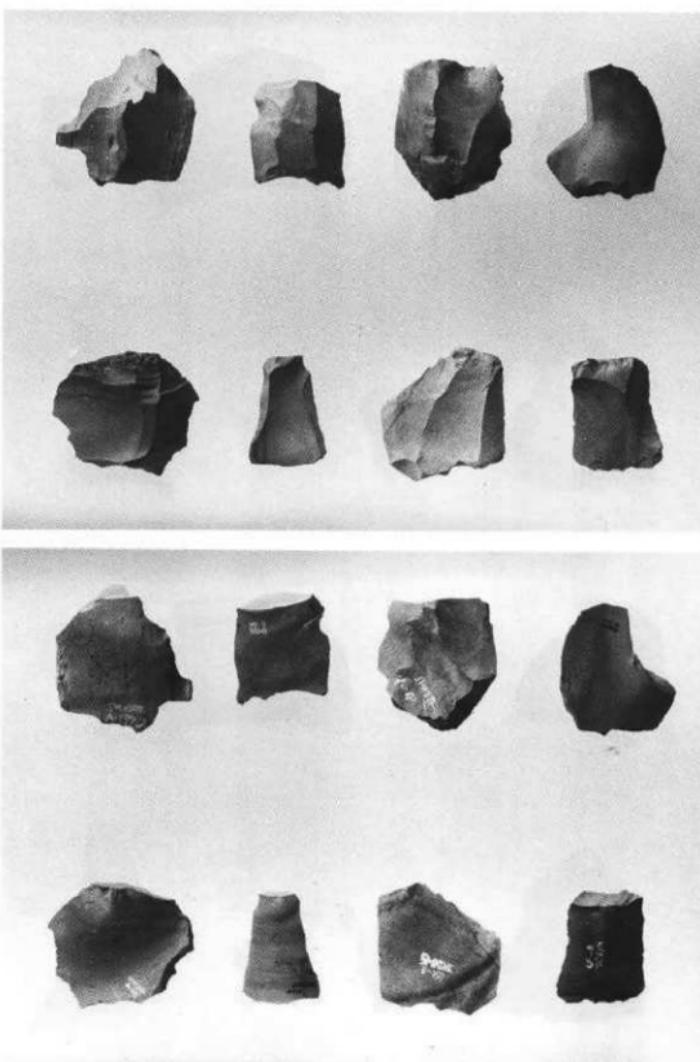
ナイフ形石器(4)



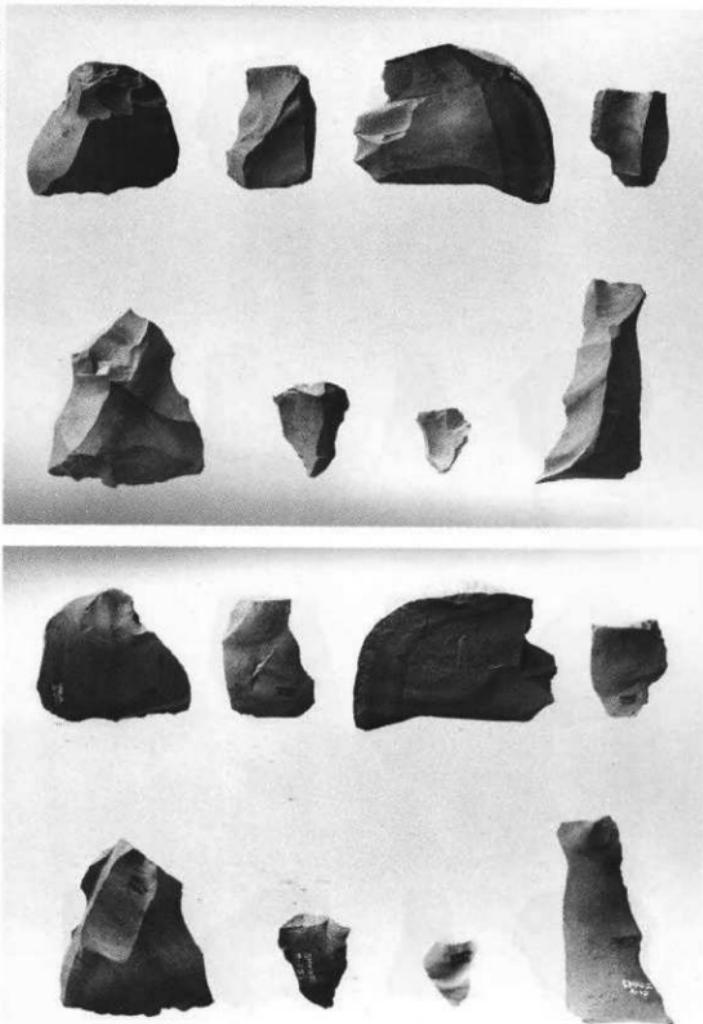
ナイフ形石器(5)・搔器(1)



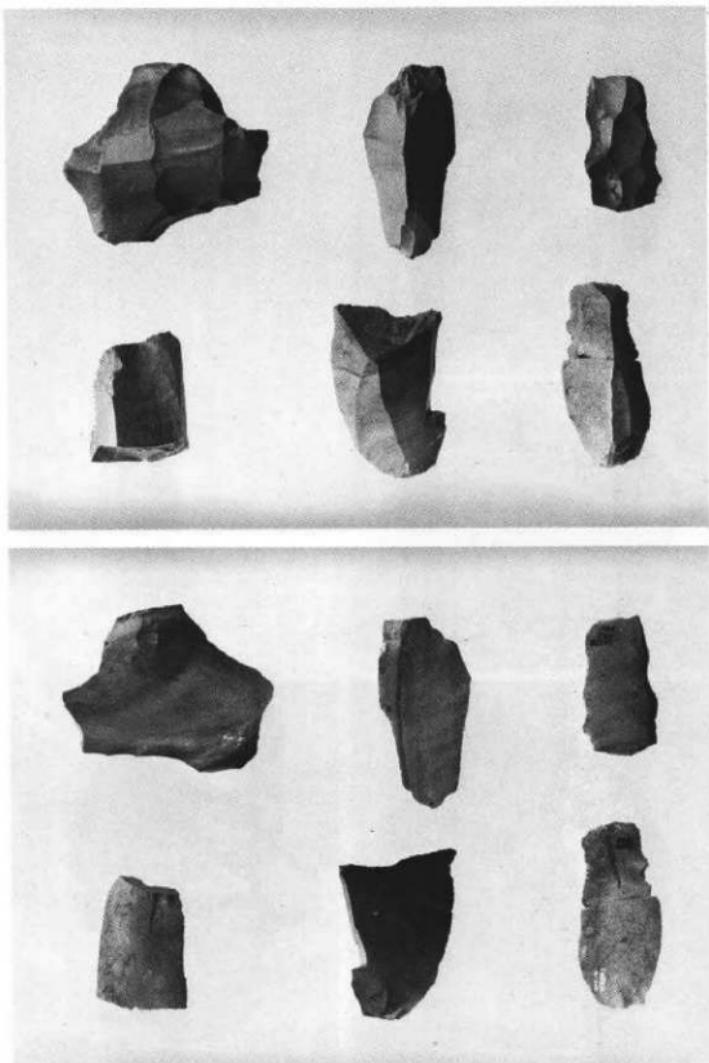
撃器（2）



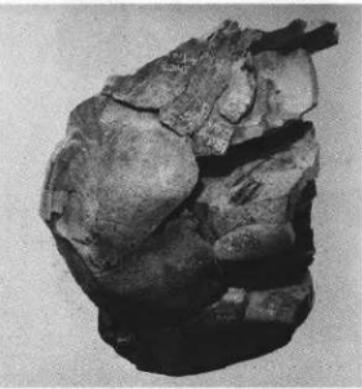
撃器（3）



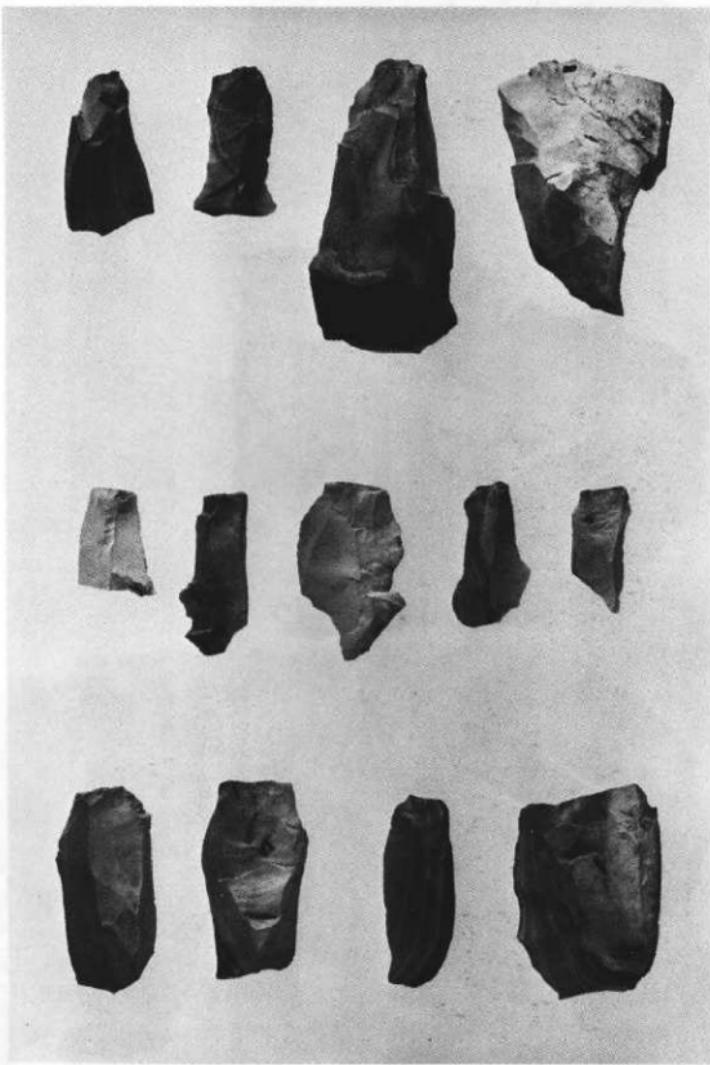
撲器（4）



搔器(5)・削器・彫刻刀形石器

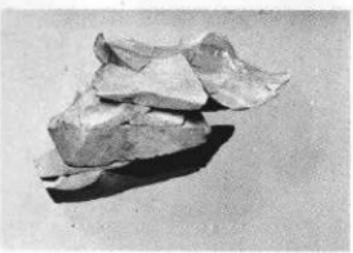
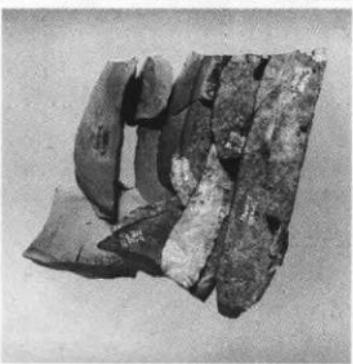


資料 No. 1

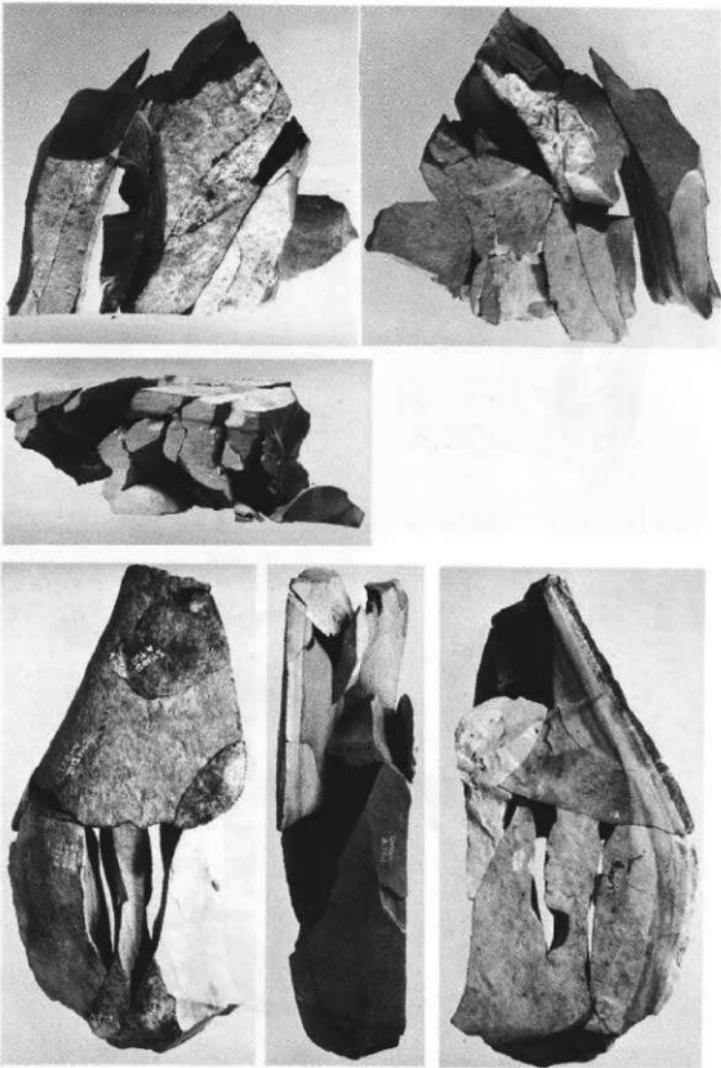


資料 No. 1

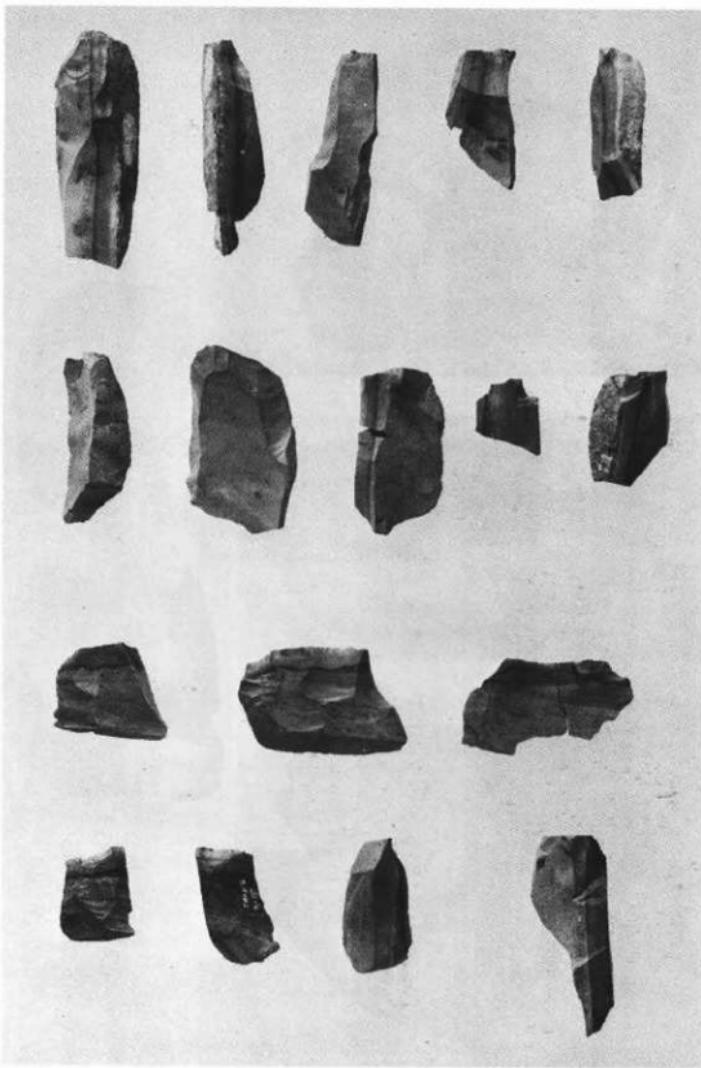




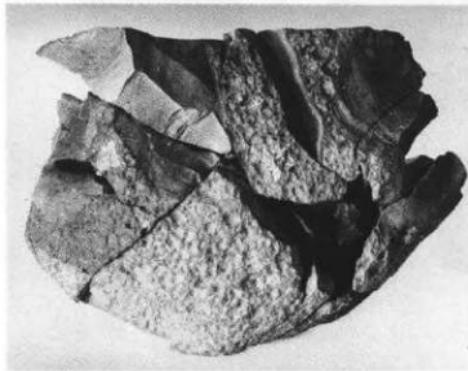
資料 No. 4



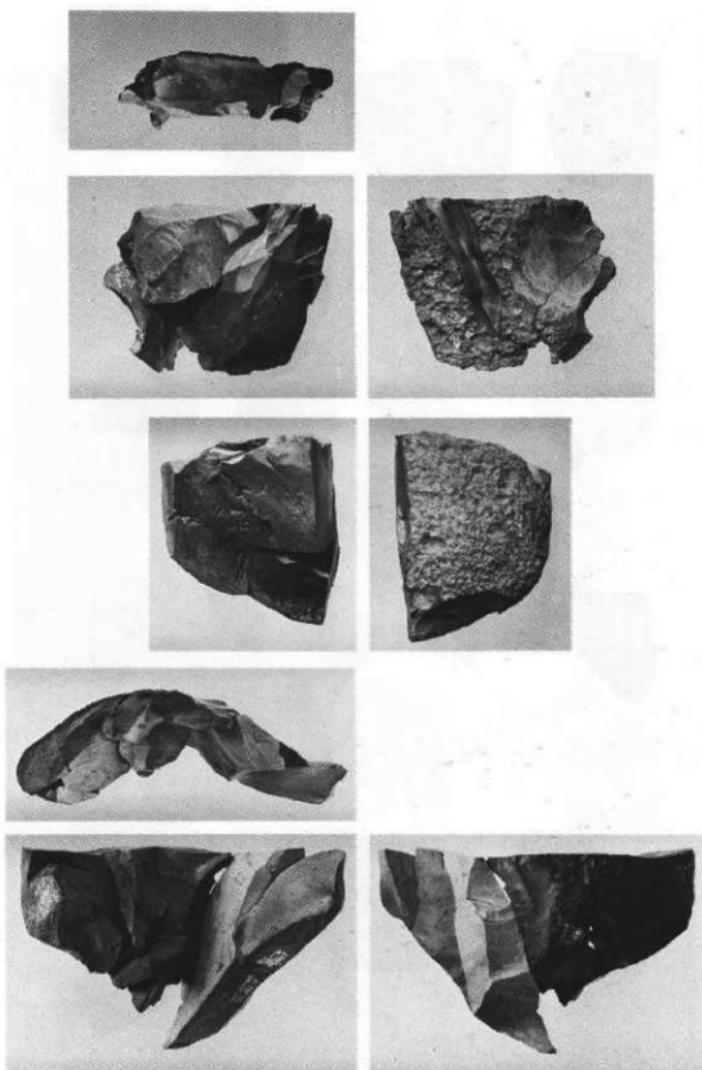
資料 No. 4



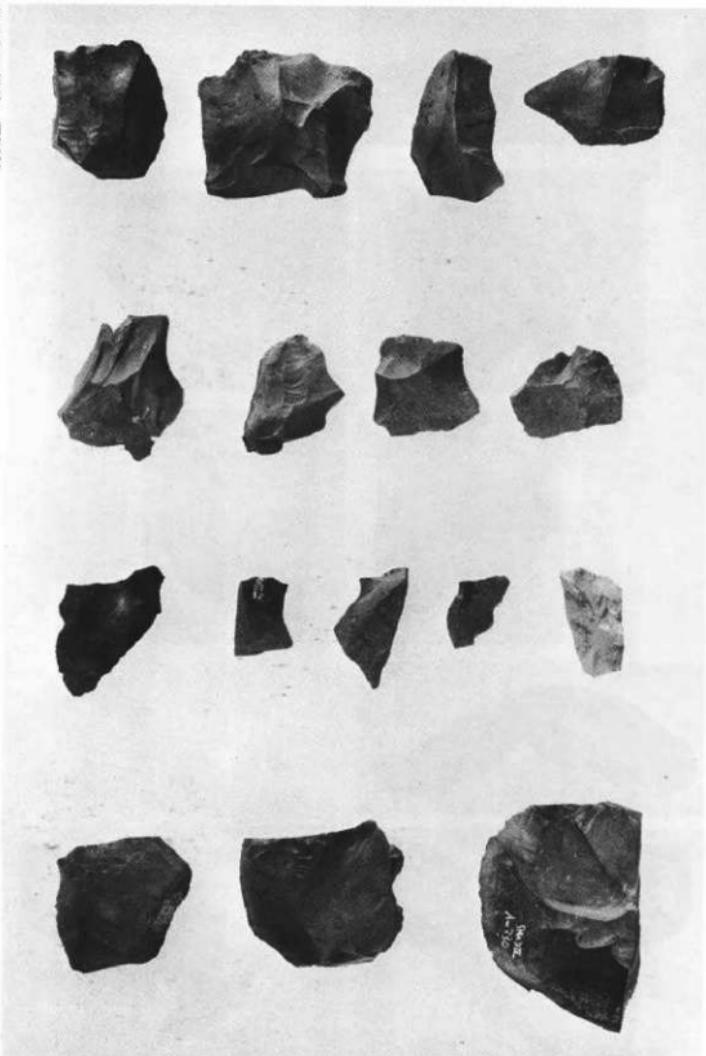
資料 No. 4



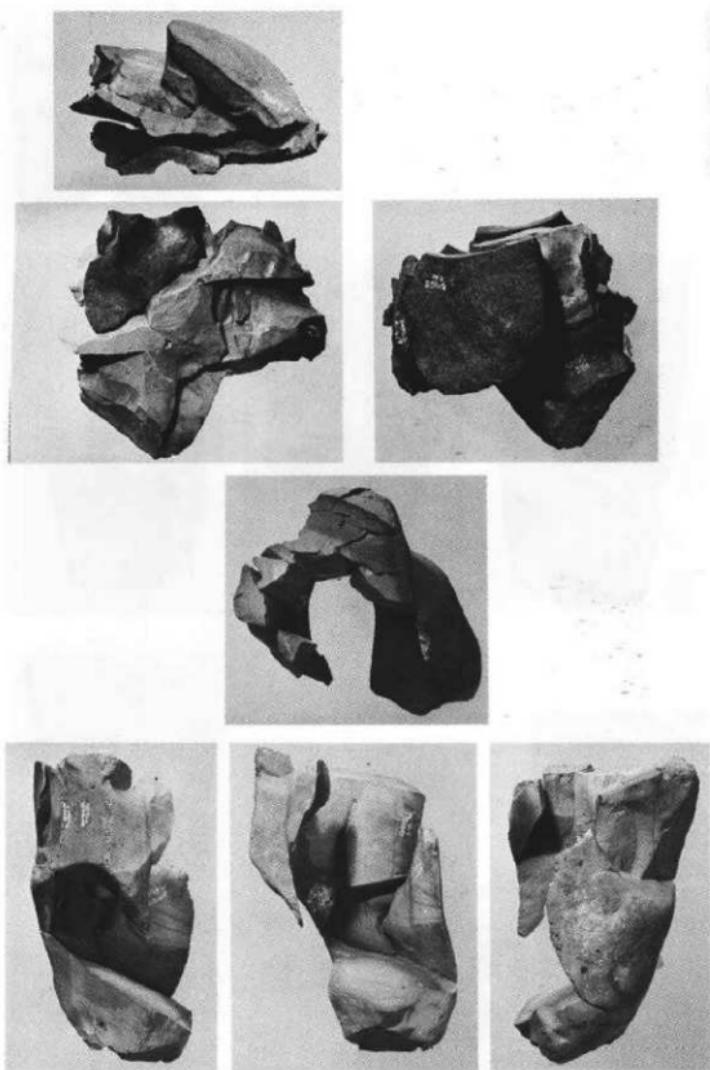
資料 No. 5



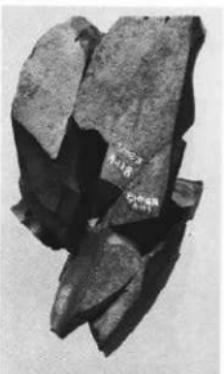
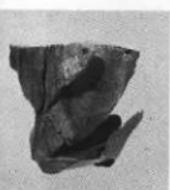
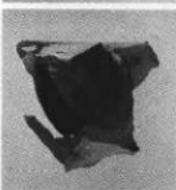
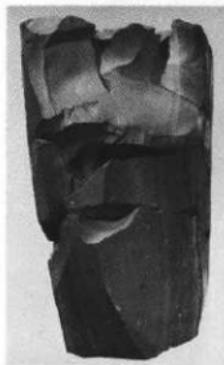
資料 No. 5



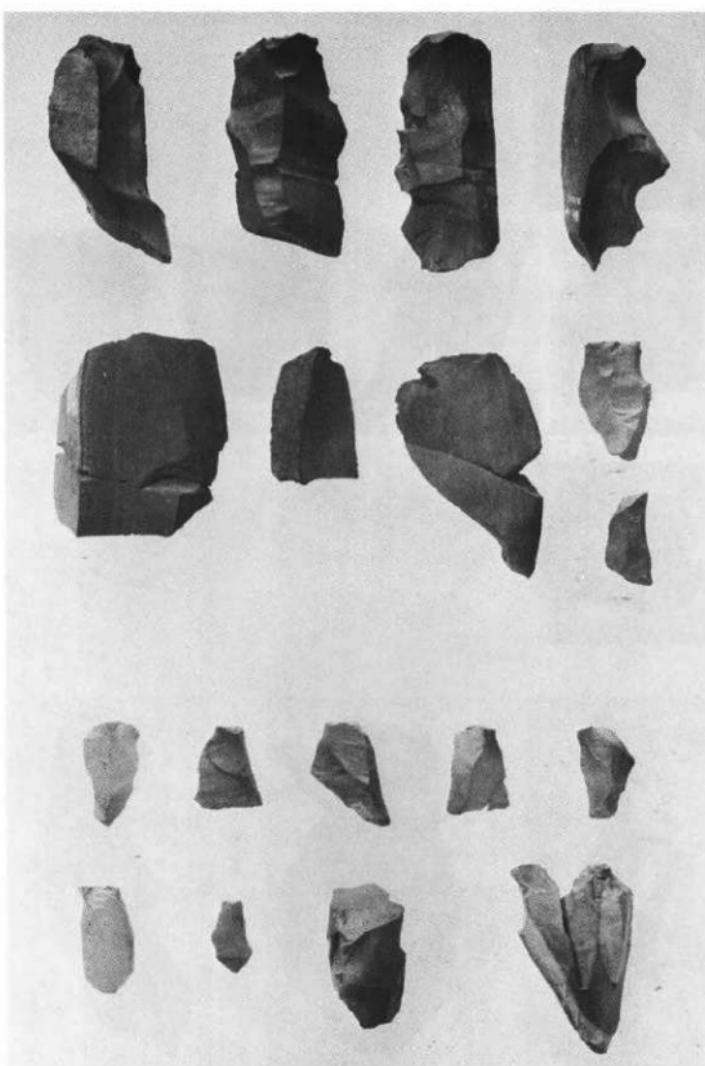
資料 No. 5



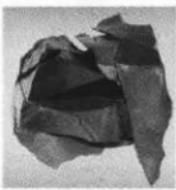
資料 No. 5 • 資料 No. 11



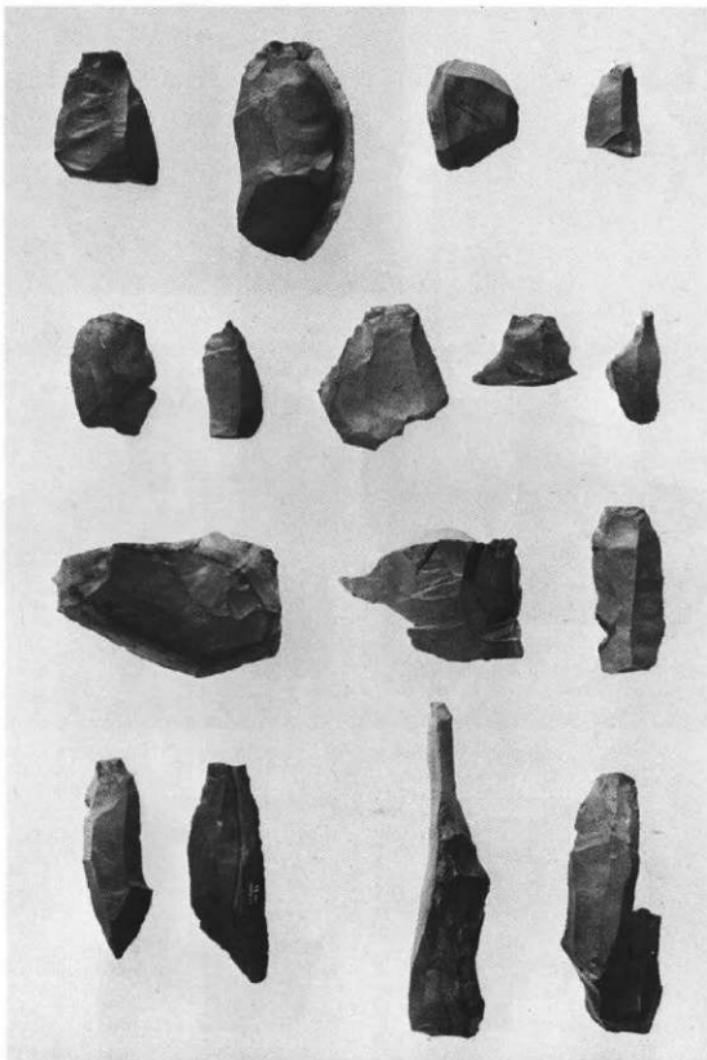
資料 No. 7 · 資料 No. 12



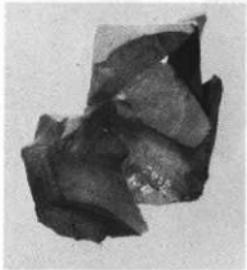
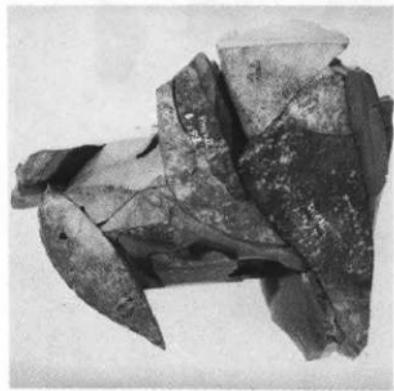
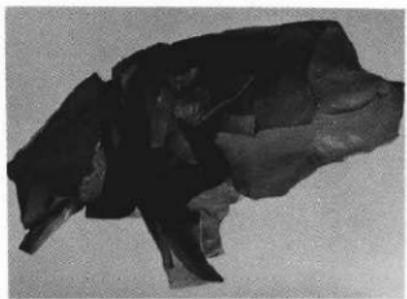
資料 No. 7・資料 No. 12



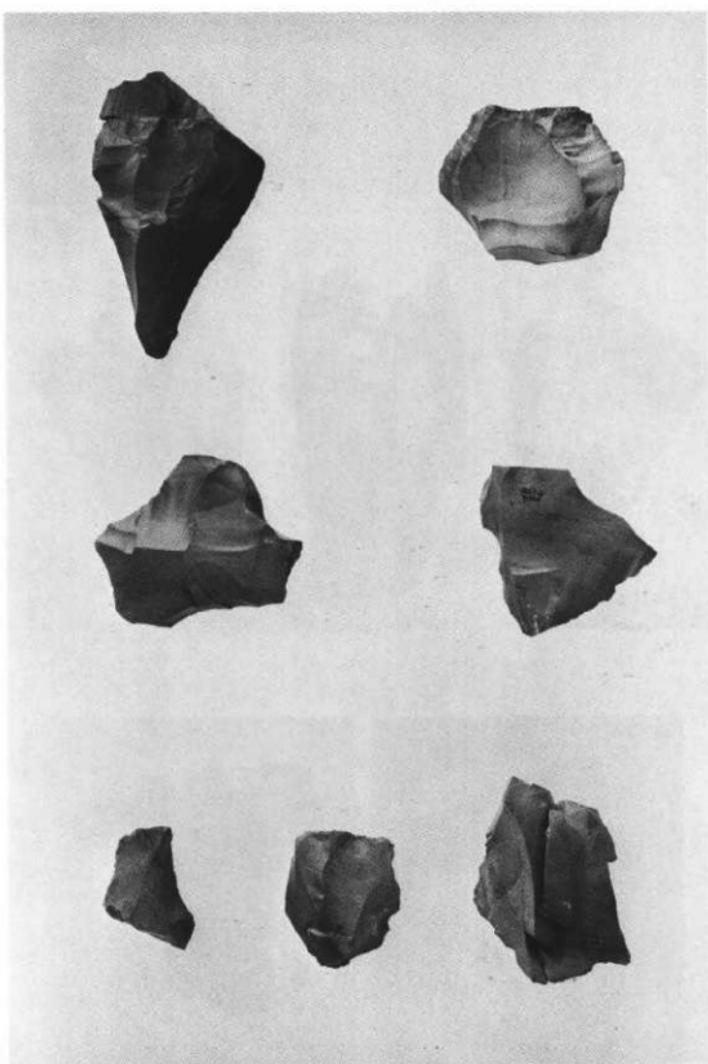
資料 No. 9 • 資料 No.10



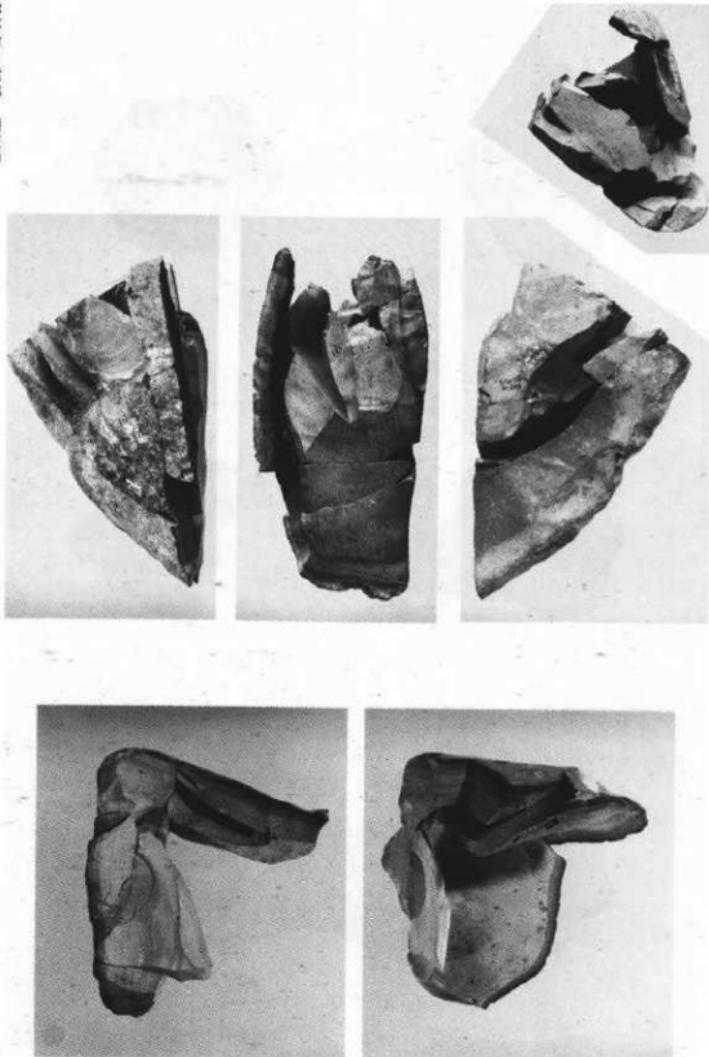
資料 No.10



資料 No. 2



資料 No.30



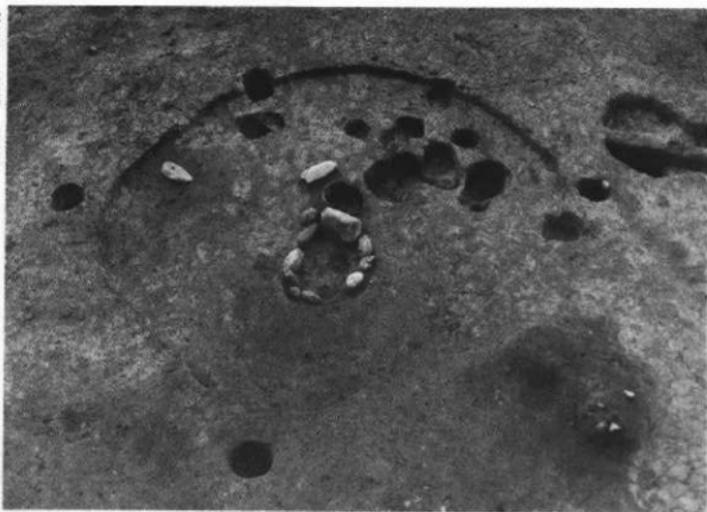
資料 No.15・資料 No.14



遺構確認状況



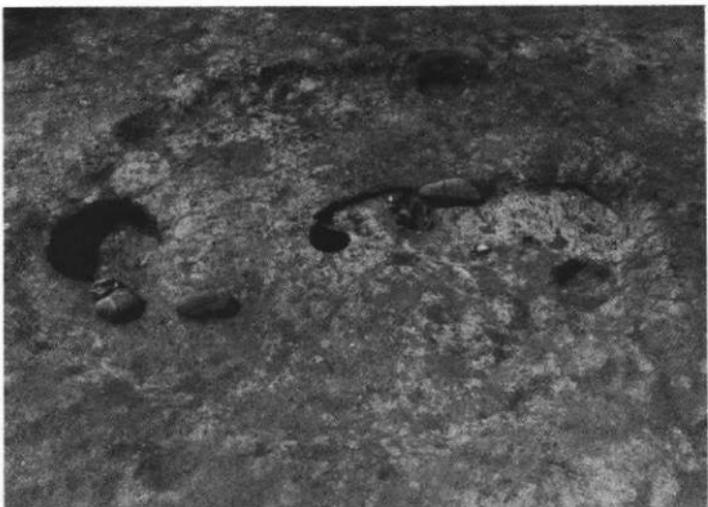
同上 完掘状況



S127 住居跡



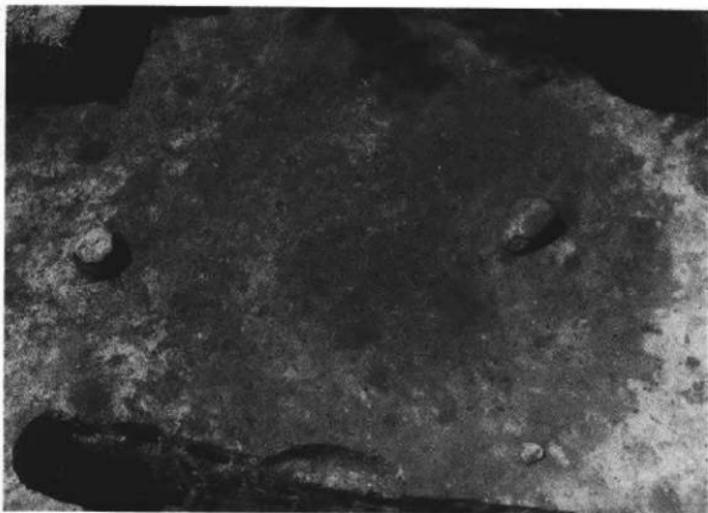
同上 複式炉



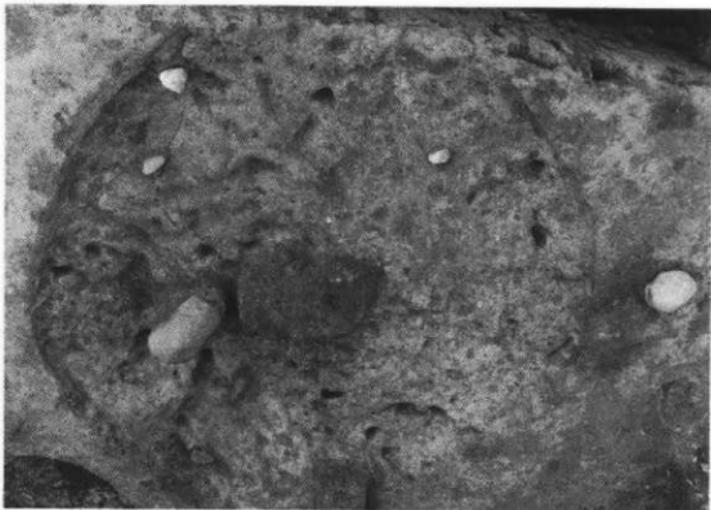
S192 住居跡



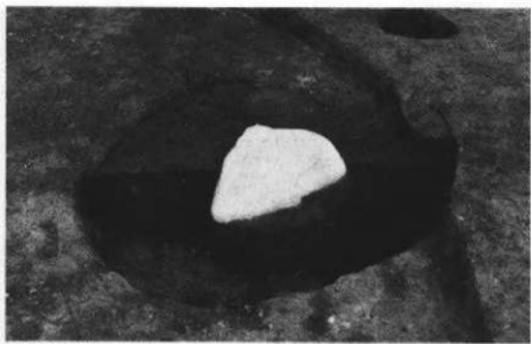
同上 爐埋設土器



SI107 住居跡



同上



SK89 土壤



SK25 土壤



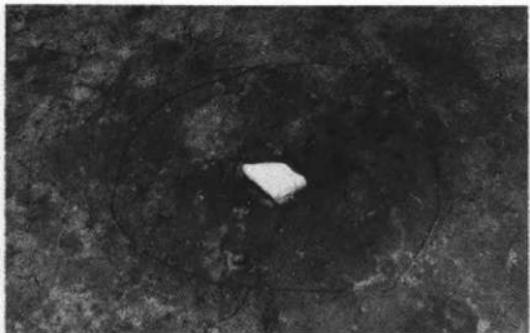
同上



SK29・101・102 土壌



同上



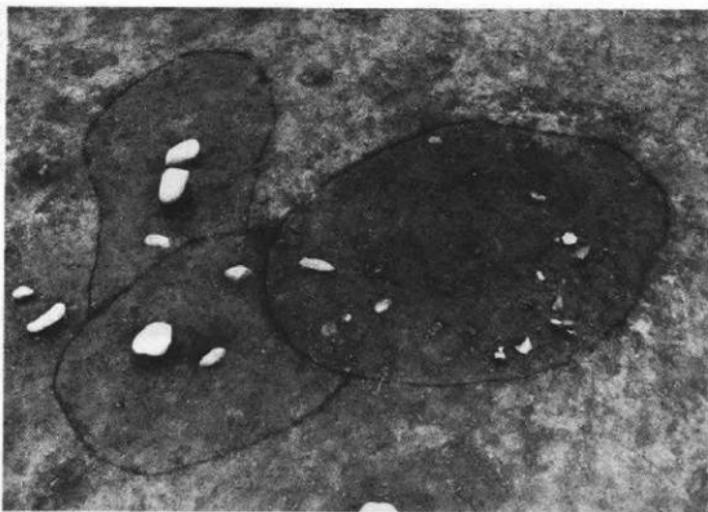
SK81 土壌



SK57 土壌



同上



SK14・84・85 土壙



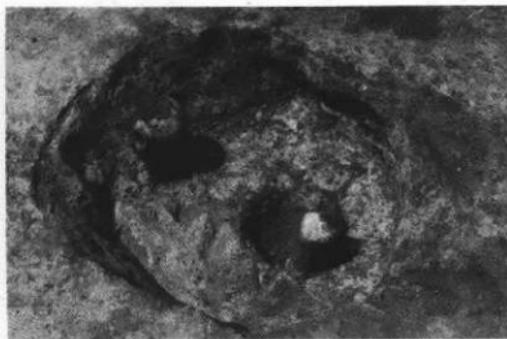
同上



SK77 土壙



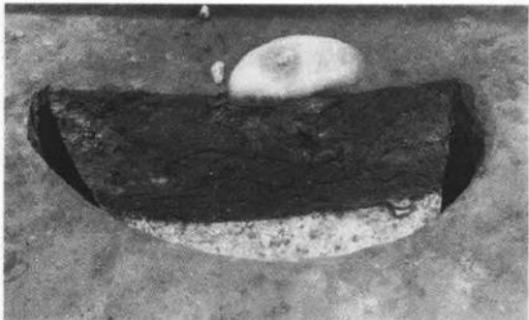
同上



SK22 土壙



SK78 土壙



同上



SK11 土壙



SK 15 土壠



SK 16 土壠



同上



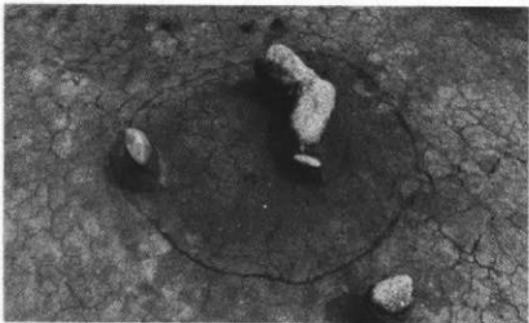
SK19 土壙



同上



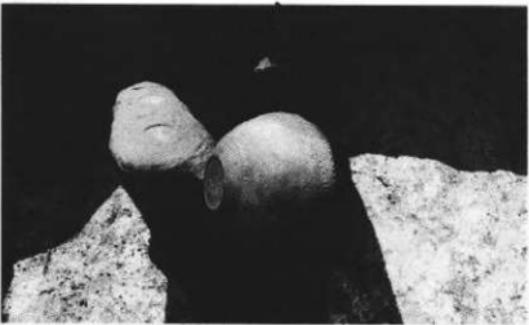
同上



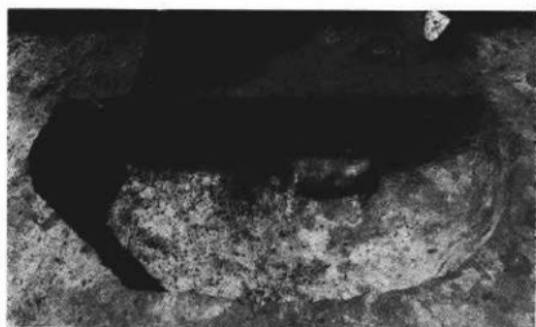
SK50 土壙



同上



同上



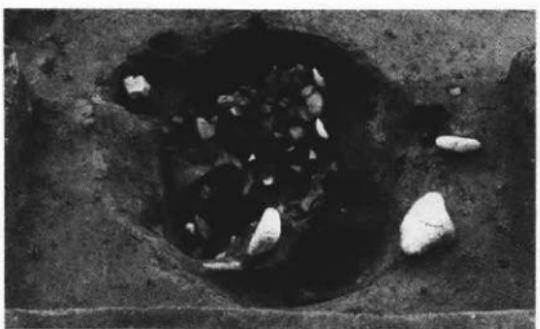
SK71 土壙



同上



同上



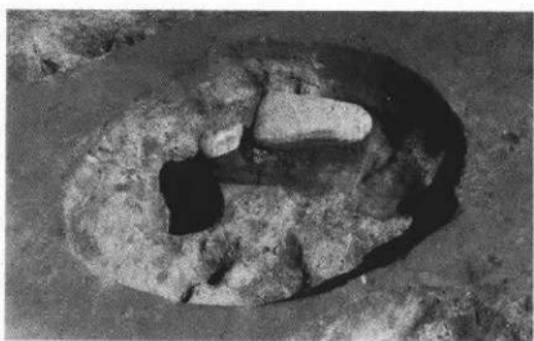
SK61 土壌



SK99 土壌



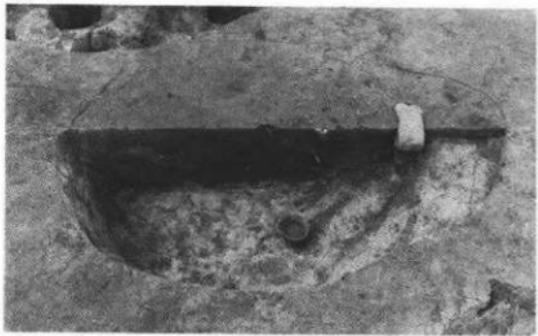
SK100 土壌



SK52 土壙



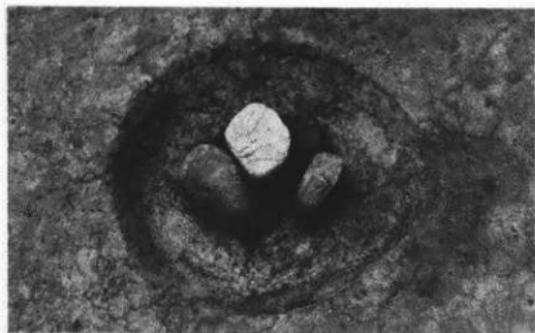
SK55 土壙



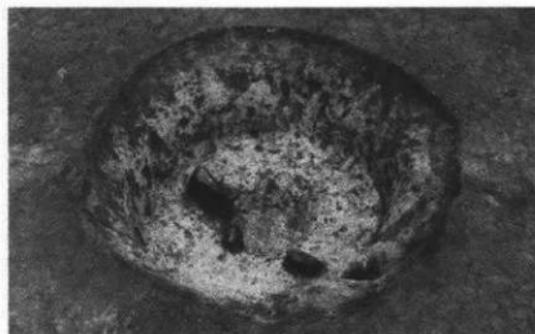
SK104 土壙



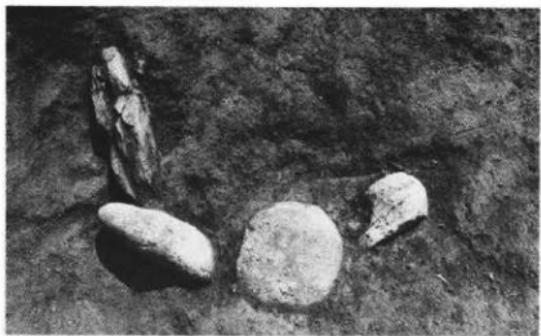
SK74 土壌



同上



SK66 土壌



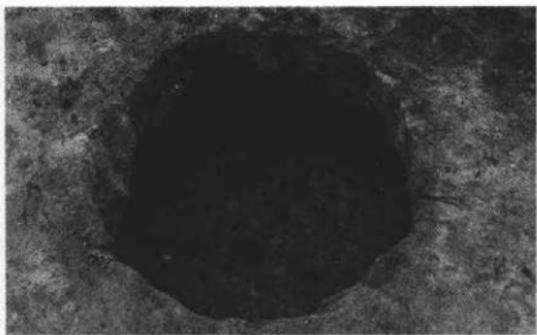
SQ01 配石



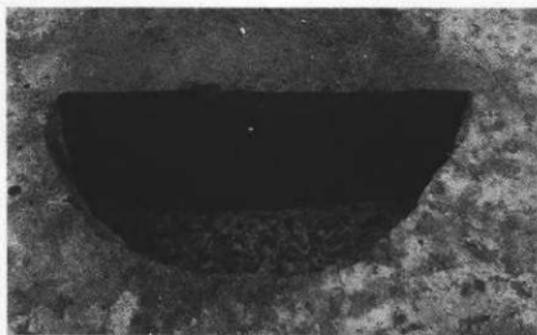
SQ10 配石



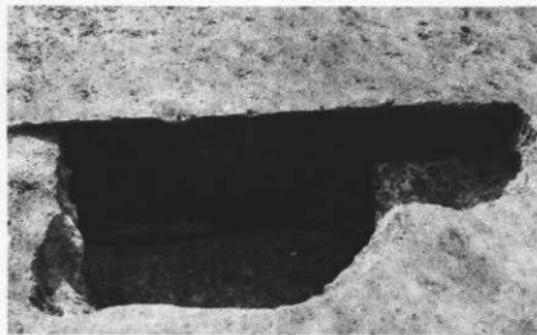
同上



SK14 土壤



SK146 土壤



SK147・148 土壤



SKT18 Tピット



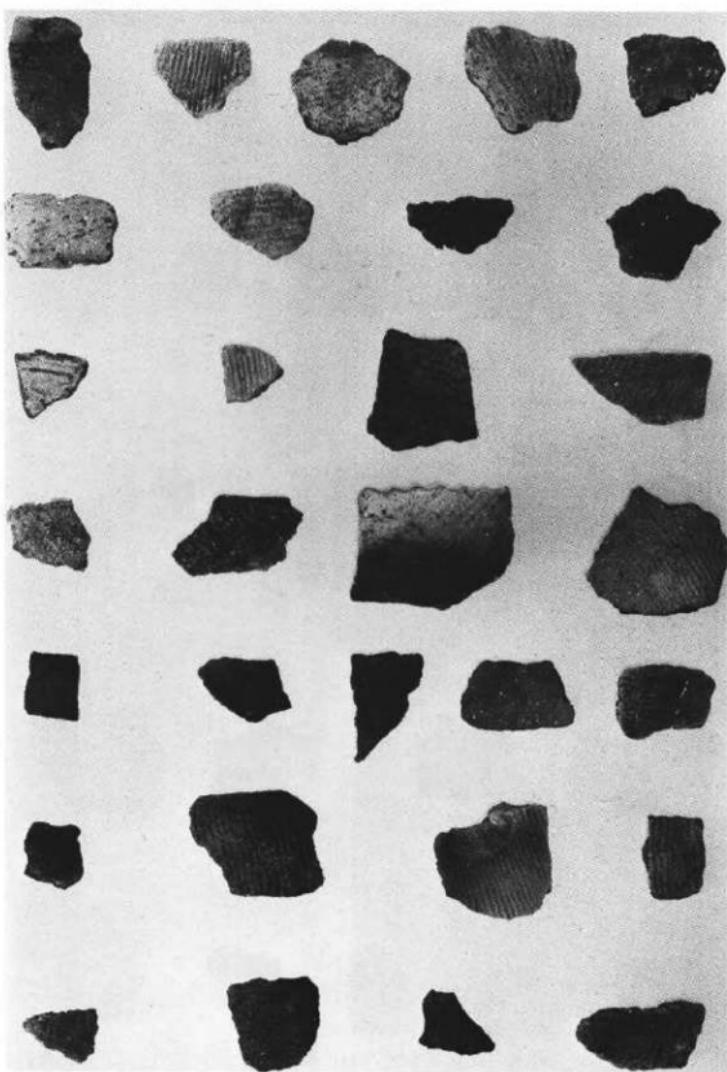
SKT49 Tピット



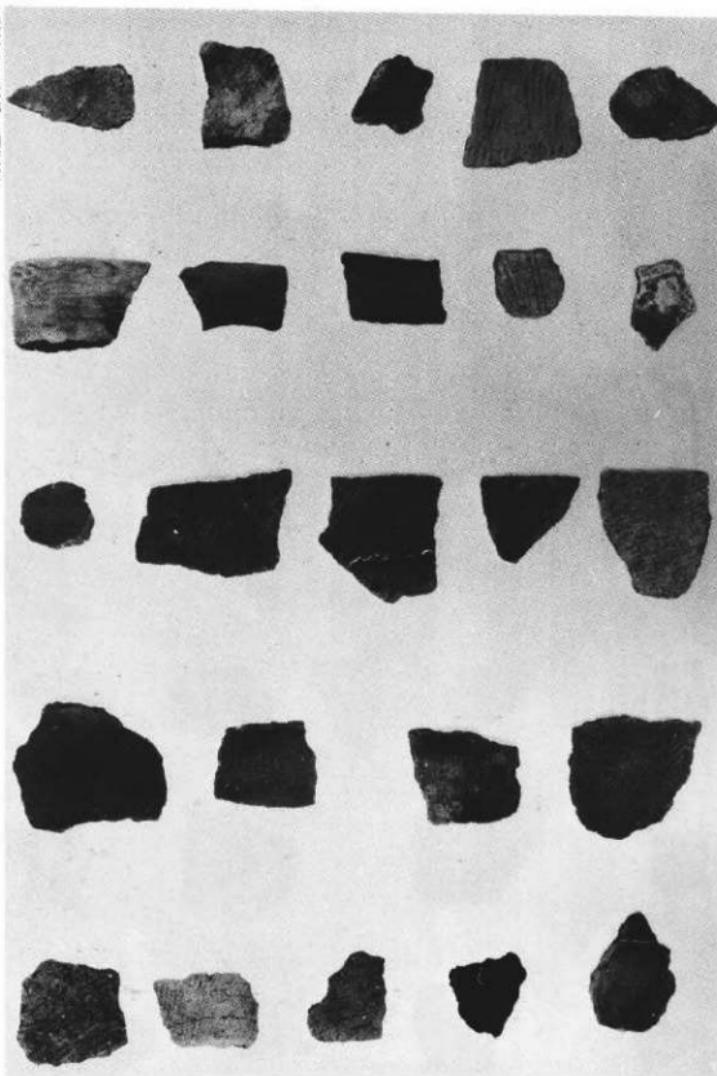
SKT75 Tピット



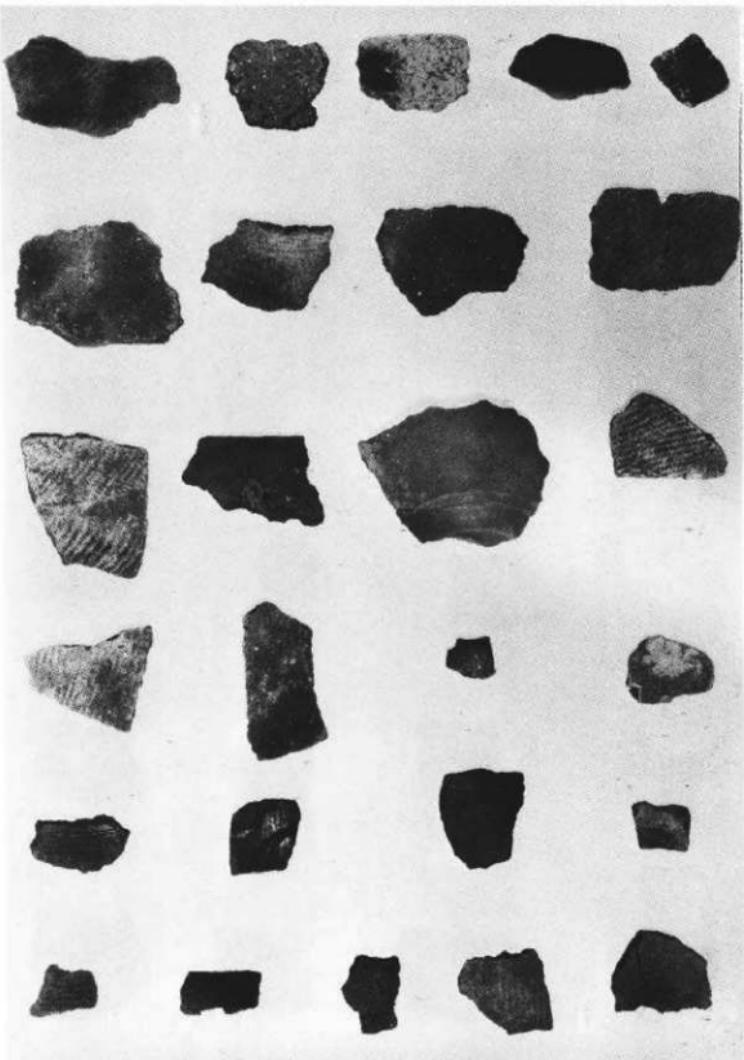
SKT68 Tピット



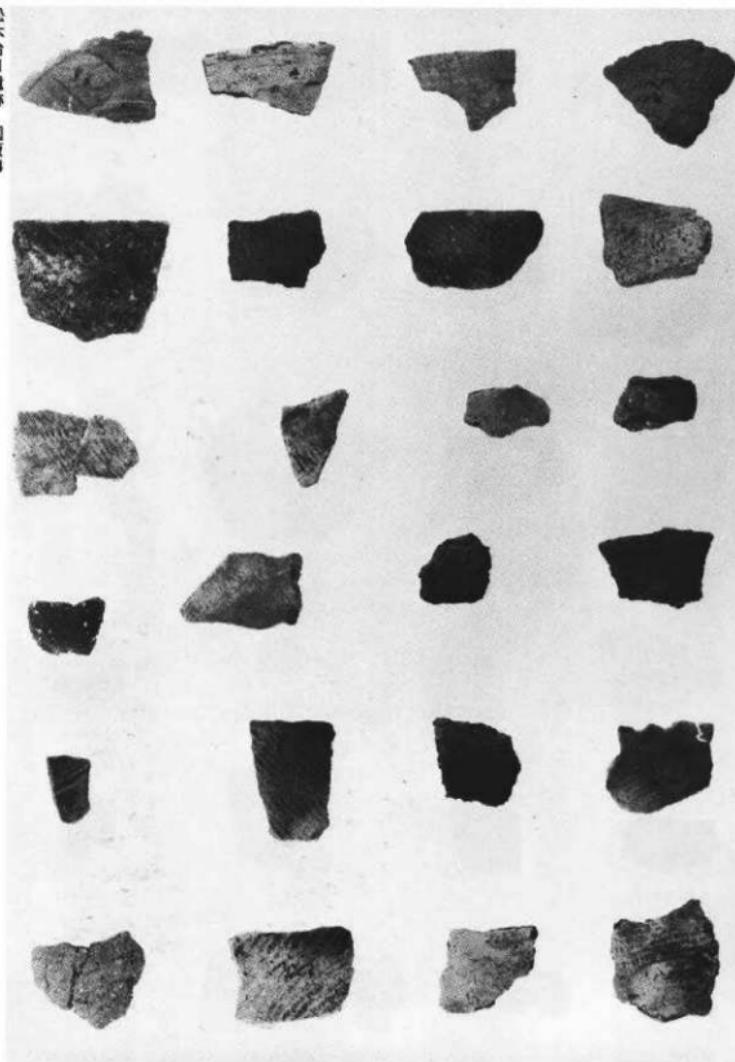
土壤内出土土器



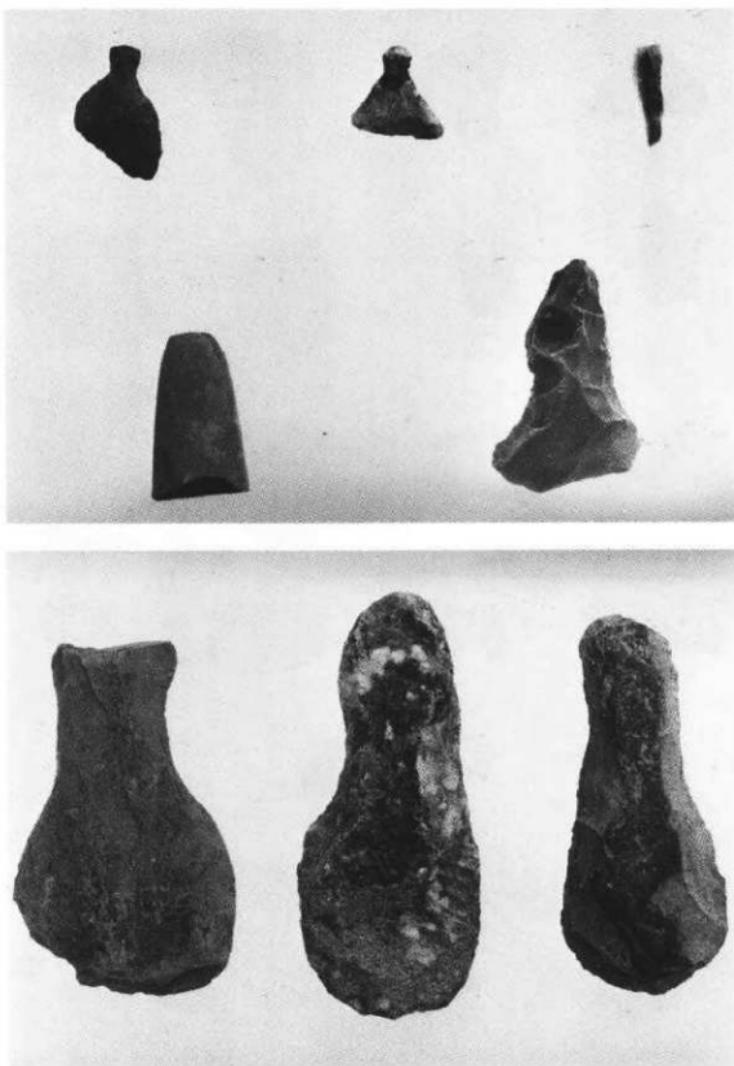
土壤内出土土器



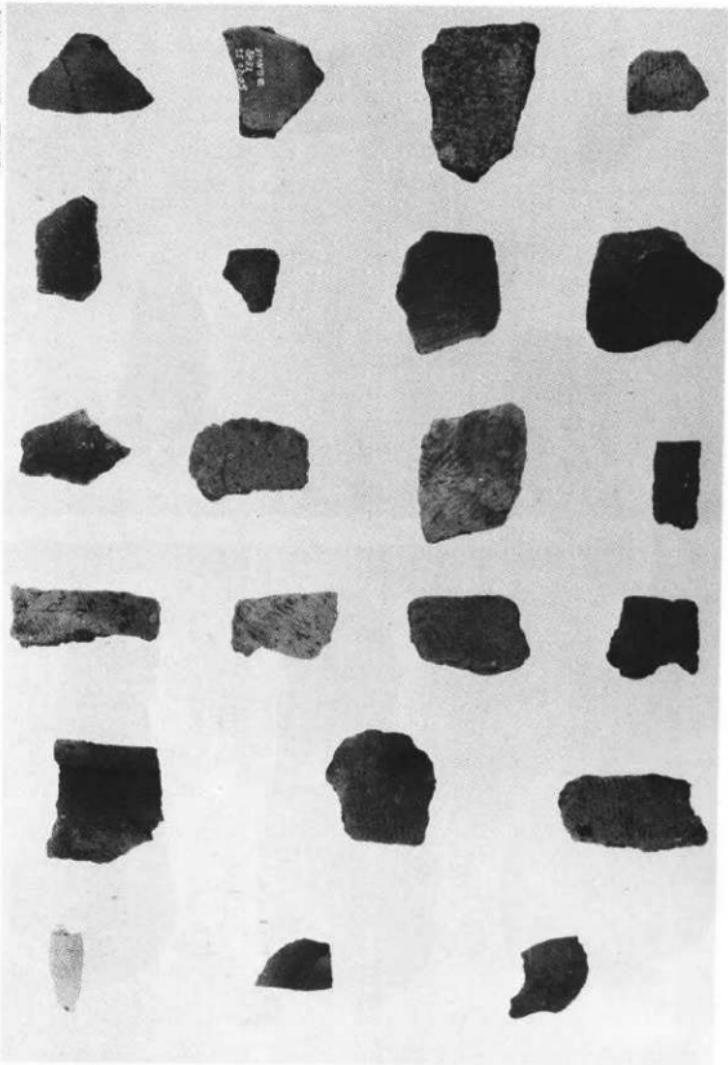
土壤内出土土器



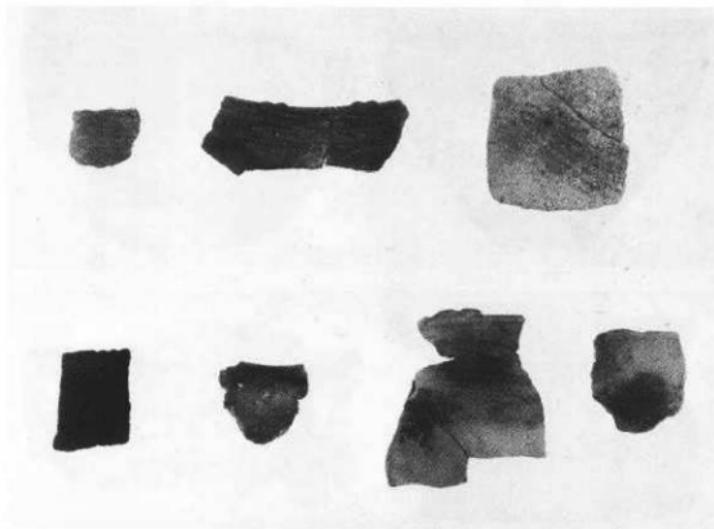
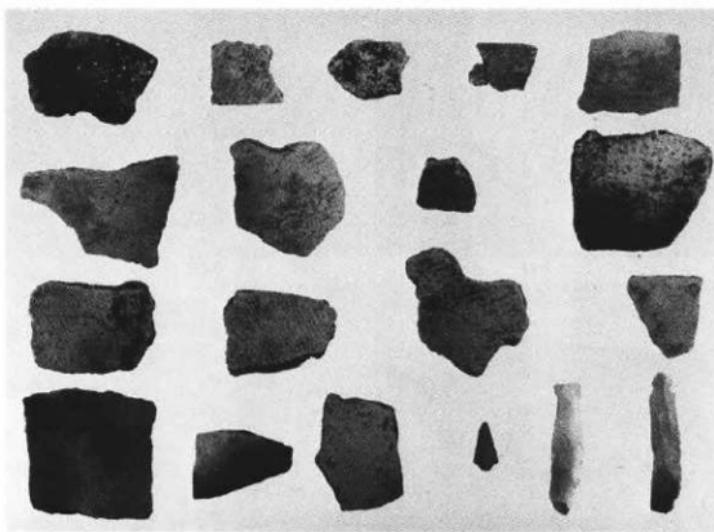
土壤内出土土器



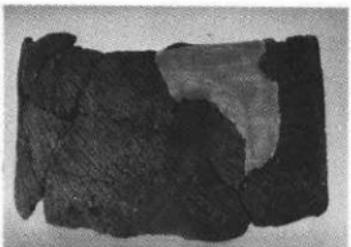
土壤内出土土器



土壤内出土土器



土壤内出土土器・石器



SI27



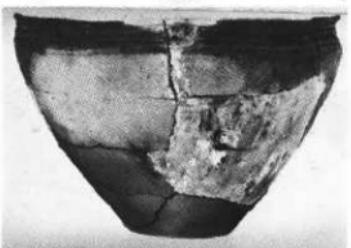
SI92



SK15



SK22



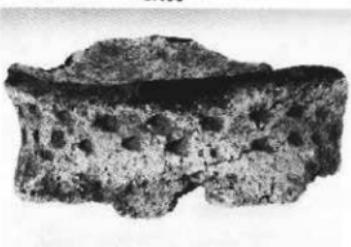
SK33



SK50

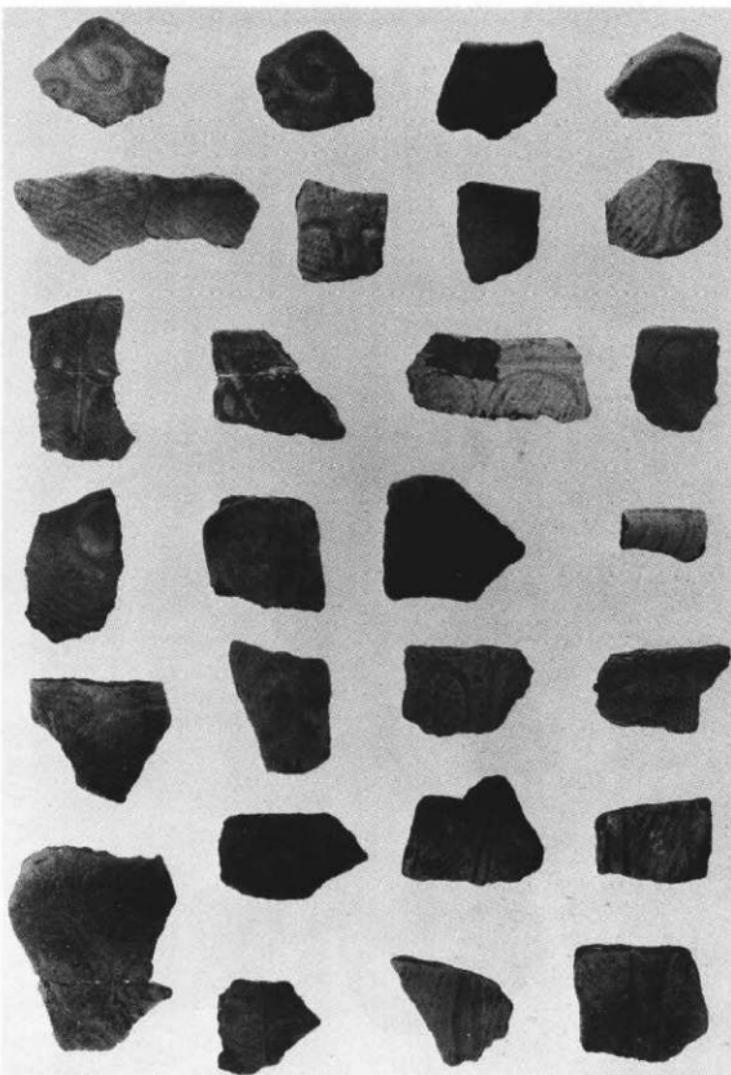


SK61

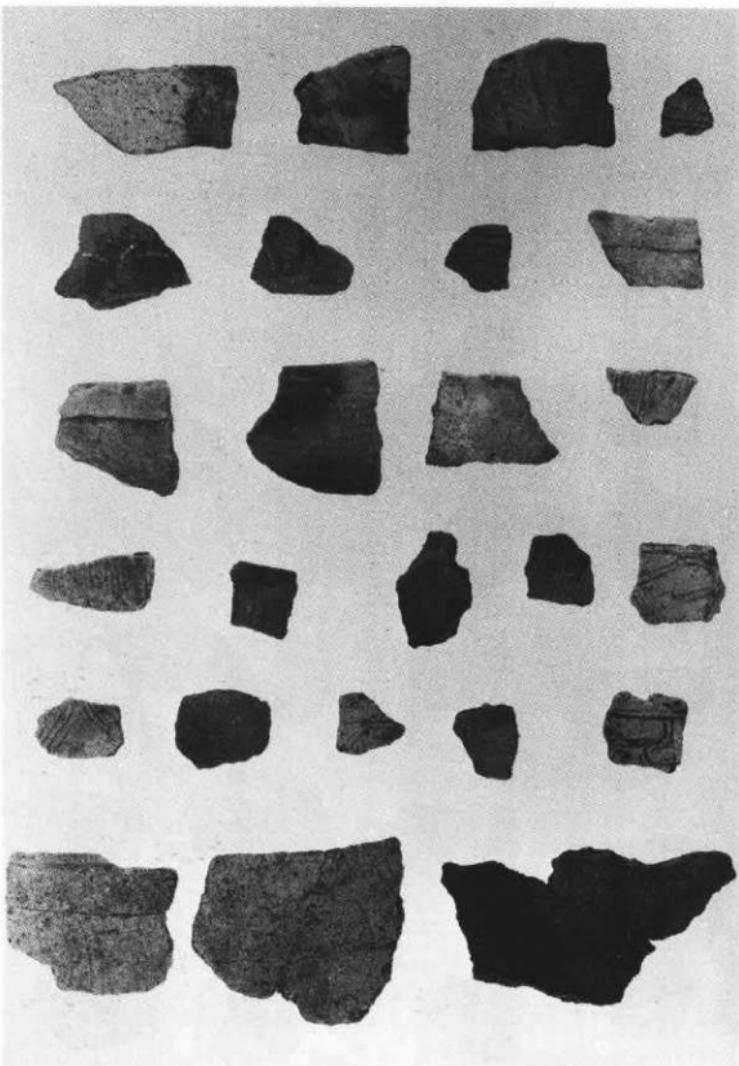


SK78

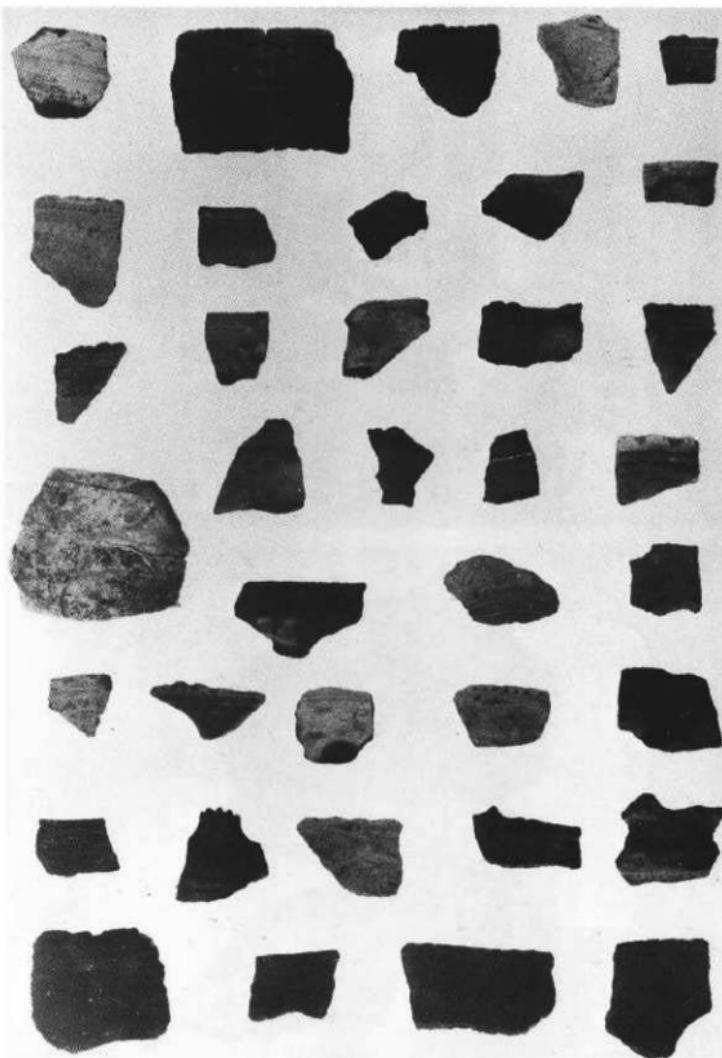
遺構内出土土器



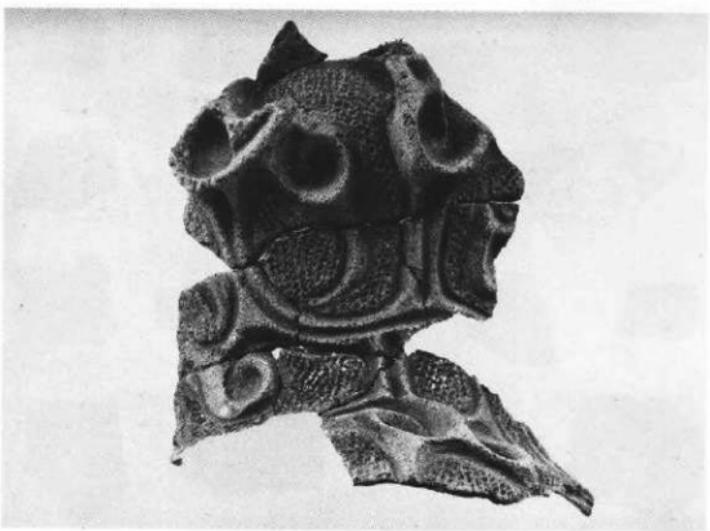
遺構外出土土器



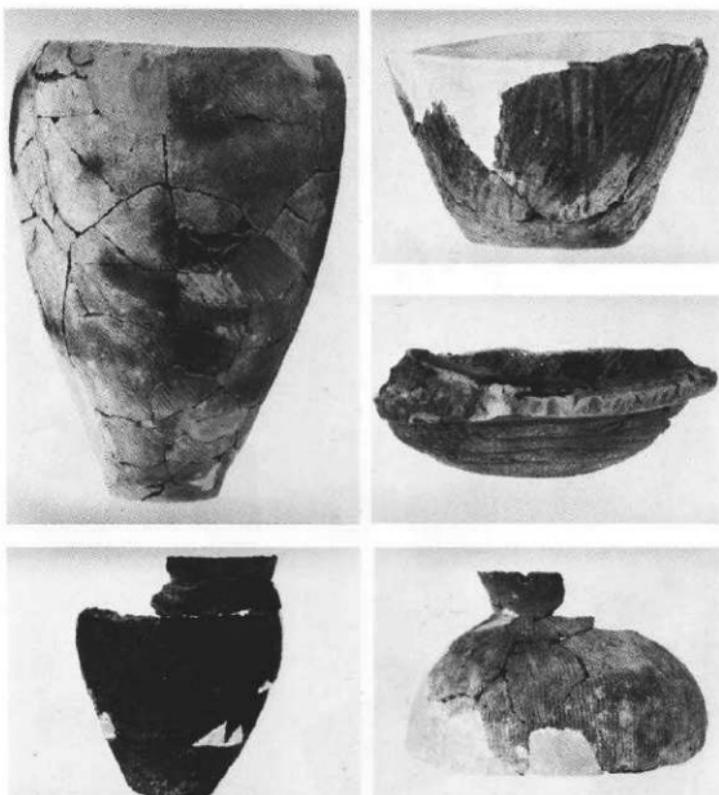
造構外出土土器



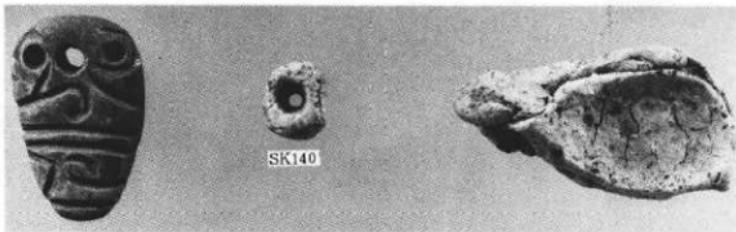
遺構外出土土器



遺構外出土土器



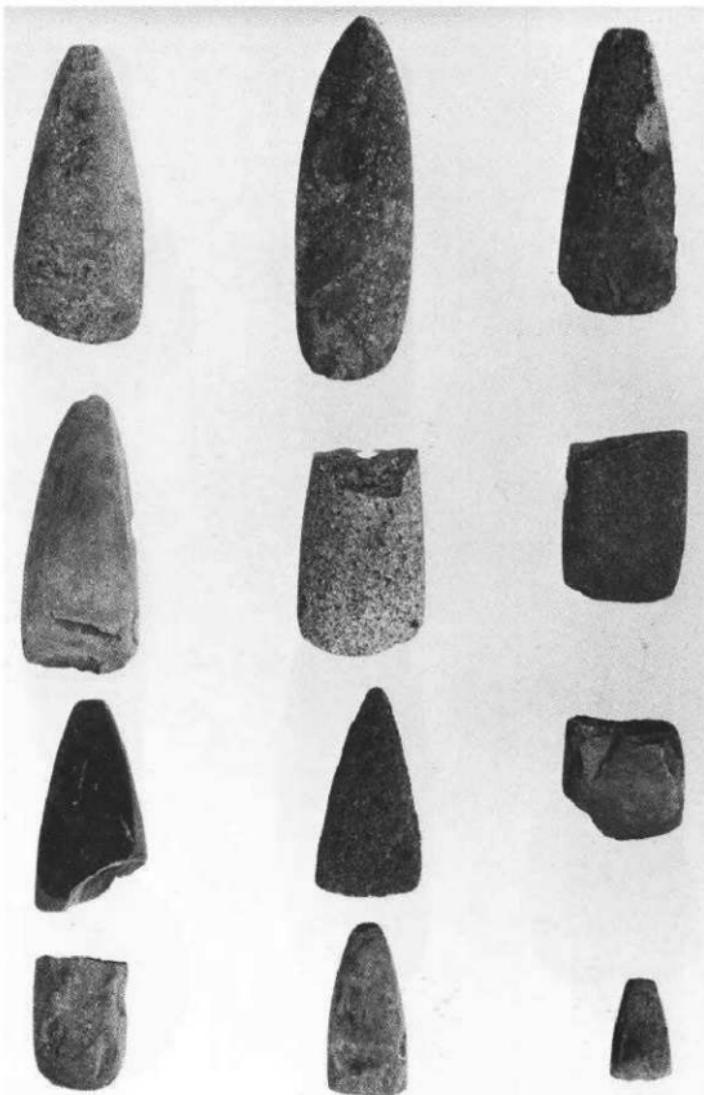
遺構外出土土器



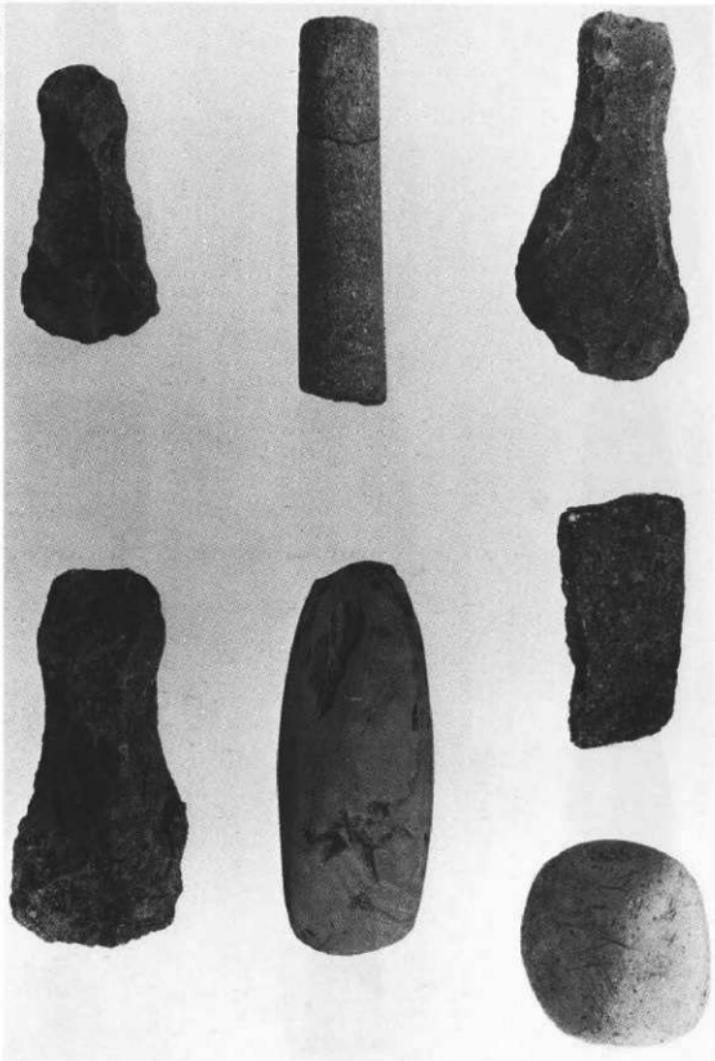
土製品・石製品



這樣外出土石器



遺構外出土石器



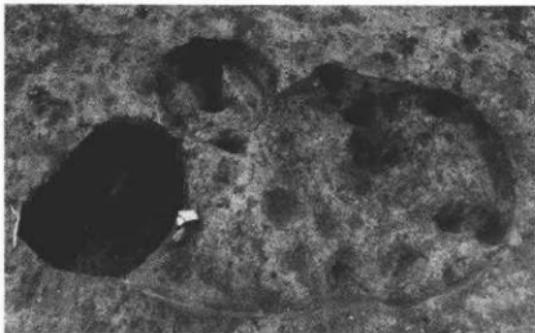
遺構外出土石器



SI105 住居跡



同上 カマド



SK91・111・128 土壌



SK130 土壌



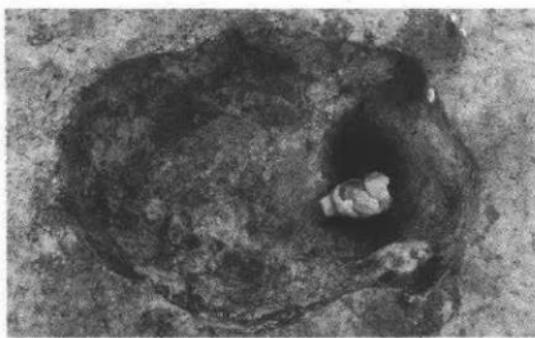
同上



SK110 土壤



同上



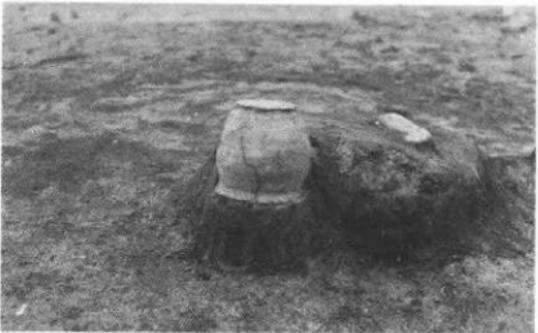
同上



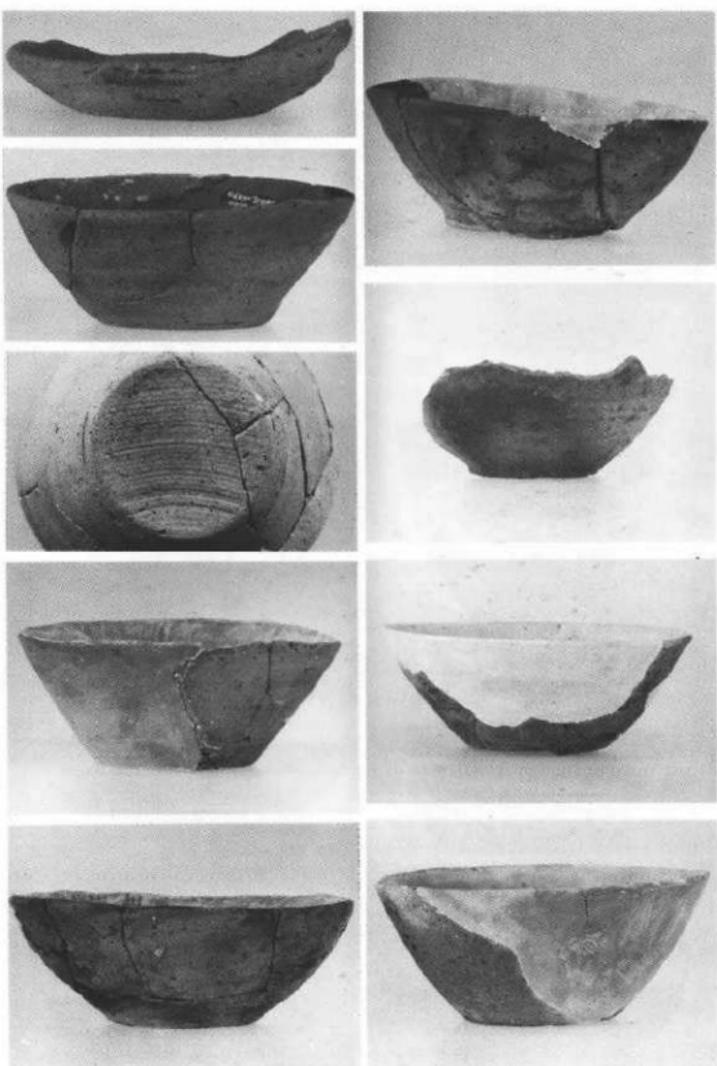
SK131 土壙



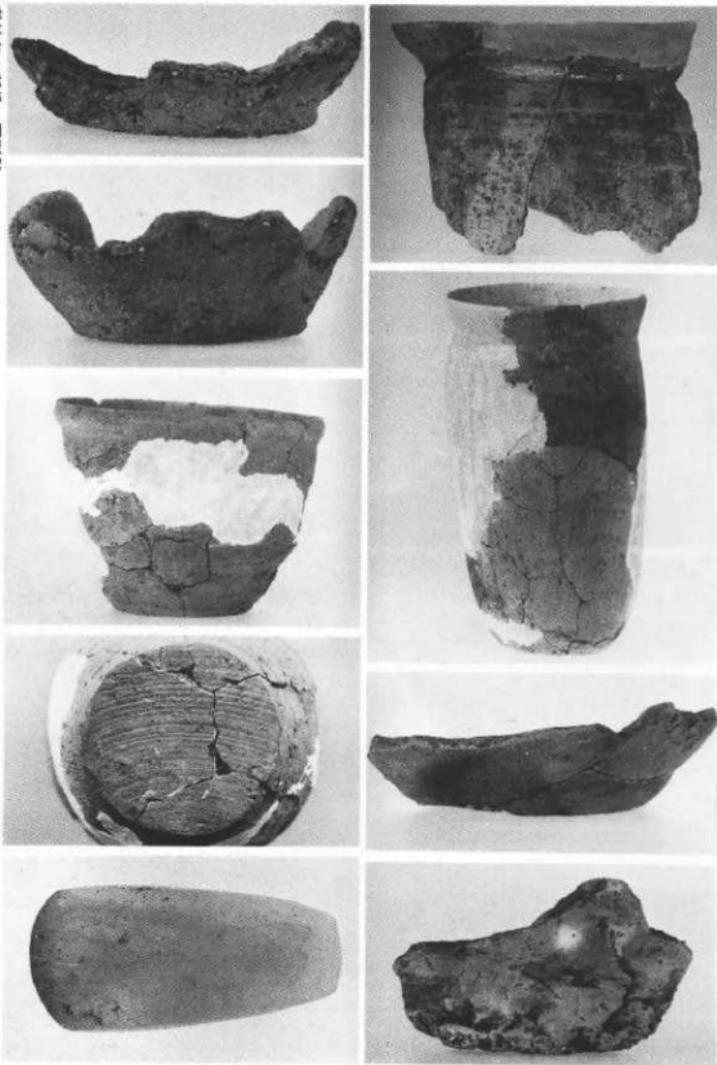
SN73 燃土遺構



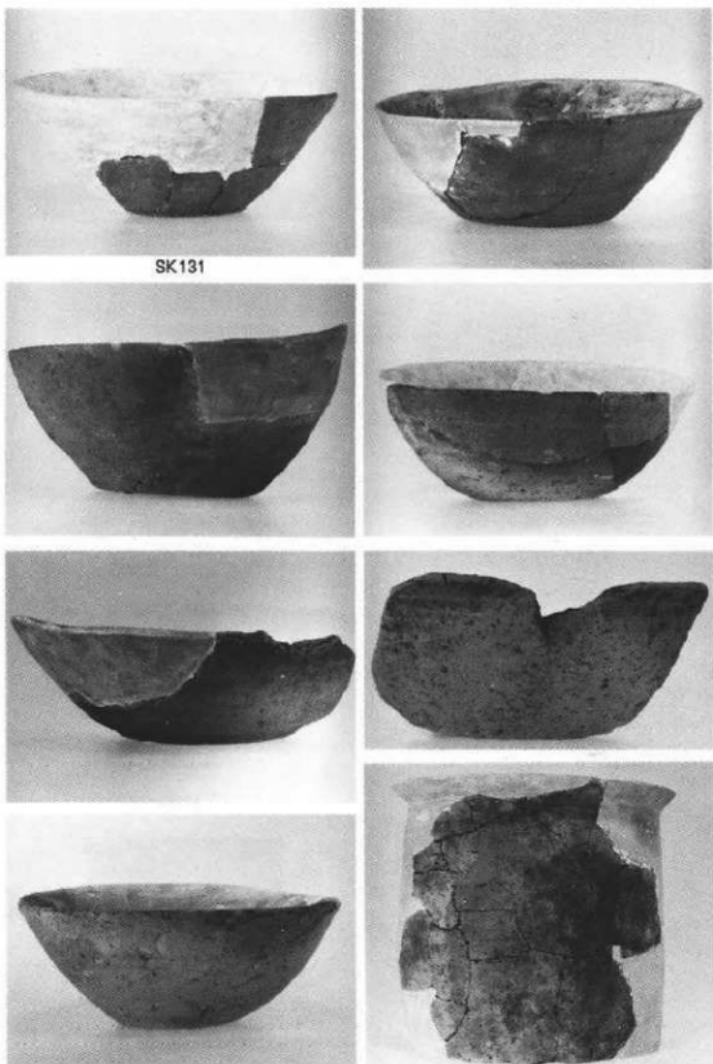
SN108 燃土遺構



SI105 壘穴住居跡出土遺物



SI105 穂穴住居跡出土遺物



SK110 土壤内出土遺物



SK110



SK130



SK110



SK130



SK110



SN73



SK110

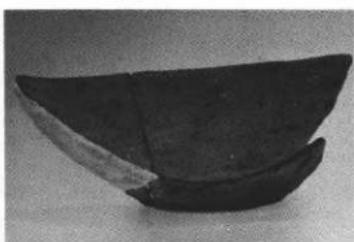


SN108

遺構内出土遺物



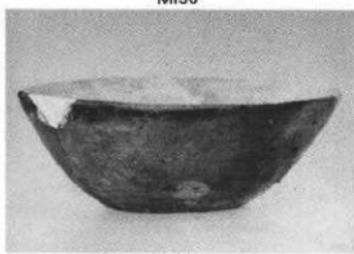
SN132



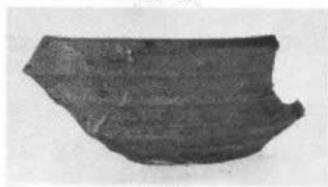
MI56



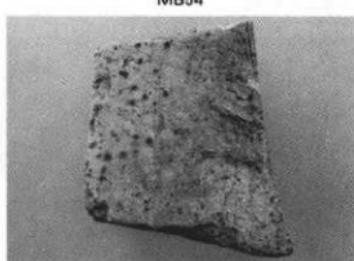
表 探



MB54



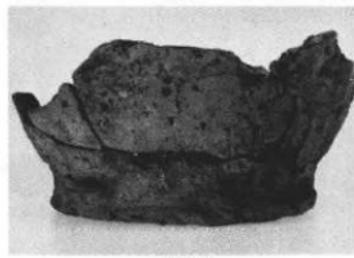
LT51



MI61



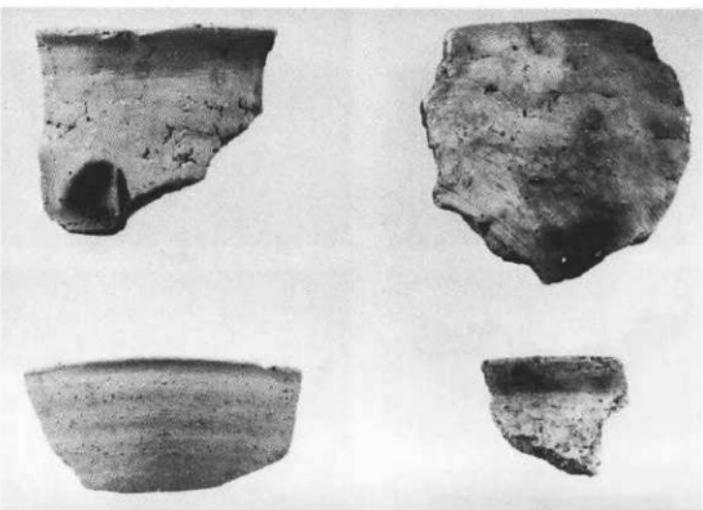
MI56



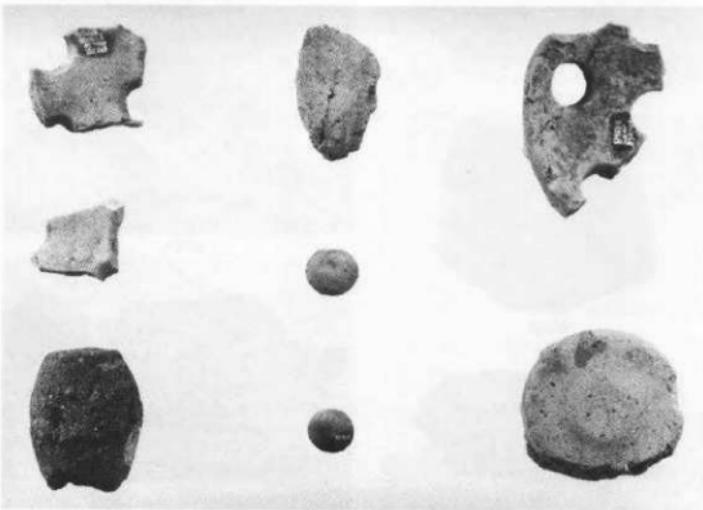
MB52

遺構外出土遺物

LT47



遺構內出土遺物



遺構外出土遺物

第 3 篇

第1章 七曲台における遺構と遺物

河辺郡河辺町に所在する通称“七曲台”は、雄物川の一支流岩見川が形成した下流域河岸段丘群中にある。ここには低い方から七曲台面、上野台Ⅰ面、椿台面の三面があり、それぞれ平坦な面をなしている。この七曲台においては、昭和58・59年度11遺跡、同60年度6遺跡、合計17遺跡の発掘調査が実施されている。その主たる原因は、前者が七曲臨空港工業用地造成工事、後者が東北横断自動車道秋田線建設工事に係るものでいずれもその事前発掘調査として行なわれたものである。また、その調査成果については既に、前者は昭和60年3月に秋田県埋蔵文化財調査報告書第125集として報告され、後者についても本報告書に掲載されている。ここでは、この3ヶ年にわたって調査された17遺跡を七曲台における遺跡群の主要なものとして把え、各時代毎に検出された遺構・遺物についていくつかの点でまとめてみようとするものである。

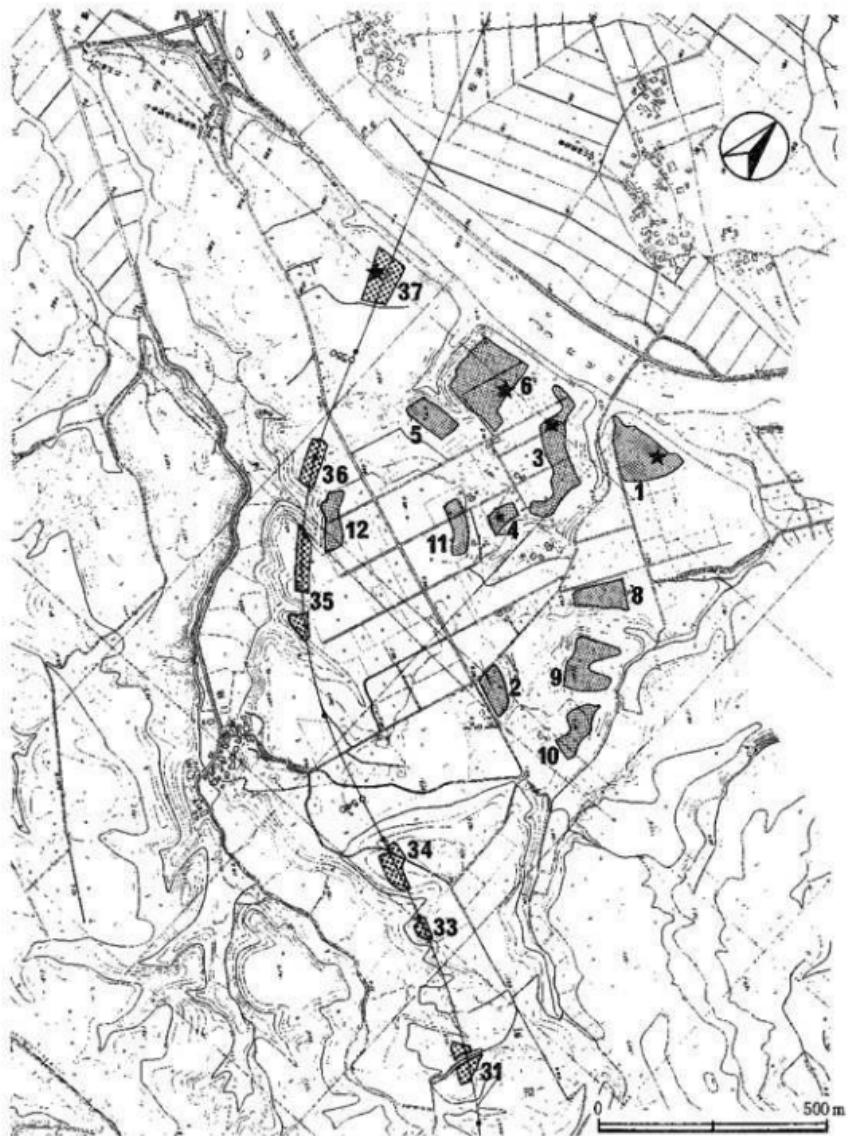
第1節 旧石器時代

1 遺跡群の立地と石器群の出土状況

七曲台における旧石器時代の石器群は、風無台Ⅰ遺跡・風無台Ⅱ遺跡・松木台Ⅱ遺跡（以上3遺跡は昭和58・59年度調査）・松木台Ⅲ遺跡から検出されている。これら4つの遺跡は、七曲台では最も低い段丘面である七曲台面（七曲台付近での標高は38～43.5m）上にあり、遺跡群付近で流路を西に取る岩見川に面して東西に並んでいる。これら4遺跡における石器群の出土地点（以下、石器群の出土地点をその遺跡名で呼ぶ）は各々1カ所づつで、第I図に示したごとく、やはり岩見川の現流路に沿っており、上流側から風無台Ⅰ・風無台Ⅱ・松木台Ⅱ・松木台Ⅲ遺跡の順に東西に連なっている。すなわち、4つの遺跡は東西約750mの略直線上に並び、風無台Ⅰ遺跡と風無台Ⅱ遺跡は断面V字形の開析された谷をはさんで約250m、風無台Ⅱ遺跡と松木台Ⅱ遺跡は同一台地上にあり約120m、松木台Ⅱ遺跡と松木台Ⅲ遺跡はやはり谷をはさんで約400mほど離れている。なお、4遺跡の現段丘縁辺からの距離は30～70mで比較的縁から内側に入っている立地といえる。

七曲台における七曲台面の基本層序は、各遺跡によってその層厚等に若干の差異があるものの基本的には以下のとおりである。第Ⅰ層黒褐色土（30～40cm）、第Ⅱ層暗褐色～黄褐色漸移層（20～40cm）、第Ⅲ層黄褐色土（40～50cm）、第Ⅳ層明黄褐色漸移層（10～20cm）、第Ⅴ層オリーブ黄色～青灰色砂質粘土（20～50cm）、第Ⅵ層段丘砂礫層。このうち石器群は主に第Ⅲ層中から出土し、それぞれ単一の時期のものであると考えられている。

各遺跡における石器群の平面的な出土状況は、風無台Ⅰ・風無台Ⅱ・松木台Ⅱ遺跡において



第1図
七曲台における
遺跡の位置
(★印は旧石器
出土地点)

- 1 : 風無台 I 2 : 石坂台 I 3 : 風無台 II 4 : 風無台 III 5 : 松木台 I
6 : 松木台 II 8 : 風無台 V 9 : 餅田沢 I 10 : 餅田沢 II 11 : 石坂台 II
12 : 石坂台 III 31 : 石坂台 IV 33 : 石坂台 VI 34 : 石坂台 VII 35 : 石坂台 VIII
36 : 石坂台 IX 37 : 松木台 III

は直径12~13mの円で囲まれる範囲に石器群が集中するという同一の傾向が見られる。これに対し、松木台Ⅲ遺跡では長径17m、短径12mの楕円形の範囲に1カ所、直径10m前後の円で囲まれる範囲に1カ所の、計2カ所に集中部分が分かれるよう見えるが、両者の間に明確な線引きができる程ではない。また、前3遺跡では石器群が密集するのに対し、松木台Ⅲ遺跡では集中度がそれ程ではなく、上記の範囲内に、直径2~3mの円形あるいは楕円形のまとまりが数カ所認められる、という状況にあった（なお、この小さなまとまりは、微視的に見れば前3遺跡でも同様である）。また、石器群の垂直分布を見ると、各遺跡とも0.5~0.7mの幅を持っており、松木台Ⅲ遺跡ではその下端を結ぶ線が大きく波打っている（他の3遺跡ではこのことを検証していない）。

松木台Ⅲ遺跡と、他の3遺跡での石器群の平面的な分布状況の若干の差異は何に起因するであろうか。これが石器群の残された年代的な差によるものか、ほぼ同一年代ではあっても居住形態、生活形態の差等によるもののかは判然としない。また、平面的に見られる小さなまとまりと垂直分布に見られる下端の波打ち現象の理由は前述したように（315ページ）、インボリューション（特にこの場合はブリケーション）の影響を強く受けた結果であると判断される（このインボリューションは松木台Ⅲ遺跡だけではなく、他の3遺跡にも見られた）。このインボリューションの年代がいつ頃であるのかは特定できなかったが、少なくとも十和田八戸テフラ降下前であることは確定である。

2 石器組成と剥片剥離

4つの遺跡に見られる石器組成と剥片剥離技術を比較すると、これら4遺跡は大きく2群に分けられる。1つはナイフ形石器を石器組成の主たるものとする風無台Ⅰ・松木台Ⅲ遺跡群（これをA群とする）で、他の1つは台形様石器を主体とする風無台Ⅱ・松木台Ⅱ遺跡群（これをB群とする）である。このA群・B群は石器組成及び剥片剥離技術において、全くといってよいほど違いを持つ。

A群である風無台Ⅰ遺跡と松木台Ⅲ遺跡の石器組成と剥片剥離技術を見てみよう。風無台Ⅰ遺跡では石刃を素材としてその基部両側縁に細かな二次加工を施したナイフ形石器と、比較的小さな不定形剥片の一端、および小さな石刃の先端に刃部を持つ搔器、B群中に見られる台形様石器とは異なる形態の台形様石器、局部磨製石斧の4器種を組成とする。ここに見られる剥片剥離技術は諸調整技術の未発達な石刃技法（しかしその中で打面再生は多く見られる）と、打面と作業面を頻繁に変えて不定形剥片を得る技術があり、前者の占める割合が高い。また、松木台Ⅲ遺跡では、風無台Ⅰ遺跡のものと同様のナイフ形石器、およびこれとは先端部の形態で大きく異なるナイフ形石器、分厚い剥片や打面調整剥片などの一端あるいは一側辺に分厚く

急角度の刃部を作出した特徴のある搔器と、僅かな削器・彫器を組成とする。見られる剥片剥離技術は諸調整技術の未発達な石刃技法と、不定形剥片を得る剥片離技術、および両者の中間的なものの3者でその割合は約4:5:1（この数値は各石核において見られる技術を1つと数え、その合計の比で表している）である。

B群である風無台II遺跡と松木台II遺跡においては、石器組成・剥片剥離技術とも大きな差はない。すなわち両遺跡とも石器組成としてはI・II類に分けられた台形様石器を主体とし、これに比較的厚手の不定形剥片の一端に急斜度の刃部を作出した搔器を若干併だけである（風無台II遺跡では、これにハンマー・ストーンがある）。また、剥片剥離技術も一種類だけ共通しないものの、不定形剥片だけを得る技術で、石刃技法あるいはそれに類する技術は全く見られない。主に、打面と作業面を頻繁に変え（あるいは1打毎に変え）ながら剥片剥離作業を進行させ、残核は小さなサイコロ状あるいは6面よりも多くの面を持つ多面体となるものである。

3 石器群の編年的な位置

これら4つの石器群のうち、風無台I遺跡については、「真正な石刃技法」の前段階であり、風無台II・松木台II遺跡については、尖頭器文化あるいは細石刃文化などとは相当隔たりを持つ石器群の1つ、という見解を示していた。そして、松木台III遺跡については、日本後期旧石器時代における石刃石器群の萌芽期あるいはその初期に位置するものとした（本書155ページ）。

ここで、このことについてもう一度考えてみたい。風無台I遺跡における石器組成及び剥片剥離技術は、大むかでは松木台III遺跡と異なるものではない。しかし、諸調整技術の未発達な石刃技法と、その他の剥片剥離技術の割合を比較すると、風無台I遺跡では前者が支配的であるのに対し、松木台III遺跡では、両者が拮抗するかあるいは、後者の方が若干上回る。そして、定形的な石器組成では、風無台I遺跡では台形様石器と局部磨製石斧をそれに含むのに対し、松木台III遺跡ではそれがなく、典型的でない搔器が多く彫刻刀形石器も僅かであるが仲間に入っている。このような差について、定形的な石器の組成から前後関係を云々することはできないが、剥片剥離技術の内容からは、松木台III遺跡が風無台I遺跡よりも僅かに先行するものと考えられる。すなわち、石刃技法がそれ以前の剥片剥離技術の中から生み出され、ある意味で独立した歩みを続けた技術であると考えられるとすれば、その初期の段階（「真正な石刃技法」が確立しない段階）では、比較的形の整った縦長剥片を連続的に生産する技術（広義の石刃技法と考える）と、それ以前から持っていた技術が1つの石器群の中で同居しており、初期の段階であればある程、後者の技術の用いられる頻度が高いと考えられるのである。

また、B群の風無台I・松木台II遺跡については、その主な石器である台形様右器と同様の石器群が、北陸以西ではAT（姶良丹沢火山灰）よりも下層あるいはほぼ同時期の層位から多

く検出されており、それらと歩を一にする可能性がある。剥片剥離技術の比較でも、そのことに矛盾はない。

さて、約2万年前、あるいはそれよりも少し遡ると考えられる4つの遺跡についてまとめてみたが、それほどの時期差を持たないと見られるこれらの中に、剥片剥離技術の上では、大きく異なるA・B2つの石器群がある。このことをどのように考えれば良いのであろうか。1つの仮説としては、以下のように考えることもできる。石刃技法がそれ以前に持っていた剥片剥離技術（専ら不定形剥片のみを生産する技術と考えられる）の中から生まれたものであるとした場合、それ以降、石器の素材生産のための剥片剥離技術が全て石刃技法に移行し、日本全国を席巻したのではなく、これを積極的に取り入れて最終的にはほとんどの素材を石刃技法によって生産したグループと、この技法を消極的にしか（あるいは全く）取り入れず、従来の技術を継続させたグループとがあり、それぞれのグループ独自の石器群を誕生させた。勿論、日本周辺から石刃技法が入って来た場合でも、大きくは2つの系統がしばらくの間同時に存在したことは確実であろう。また、このように全く異質の技術があった場合、両者が排他的に存在し続けたのではなく、時によつてはそれぞれが影響し合い新しい技法・石器群を生み出すこともあります、両者を取り入れた第3の系統が生まれたと考え得ることも当然である。そして、七曲台遺跡群のA群は第1系統、B群は第2系統に属するものと考えられる。

註1 秋田県教育委員会「七曲台遺跡群 秋田県文化財調査報告書第125集」1985・3
(昭和60年)

第2節 繩文時代～弥生時代

1 繩文時代の土器について

七曲台工業団地造成と東北横断自動車道秋田線の建設工事に關係する17遺跡の調査では、その総ての遺跡から縄文時代の遺物を出土している。ここではこの縄文時代の遺物のうち、より細かな時期区分の指標となる土器について簡単にまとめたい。

七曲台地域内で最も古い時期を示す資料に石坂台I遺跡、石坂台II遺跡で出土した羽状縄文系土器がある。県内では今のところこの種の土器の蓄積は少なく、県北部の鹿角盆地でわずかな量の資料がみつかっているにすぎない。隣接する青森、岩手ではこの羽状縄文系土器に類する資料が多くみつかっており、編年の整備も進んでいる。しかし、石坂台I遺跡でみつかっているような爪形文列を施す例は県内外とも初めてのようである。羽状縄文系土器については前

期初頭の時期が与えられており、七曲台で出土した資料についても同じ時期の所産であるといえよう。

前期後葉の土器としては、円筒土器下層d式に比定可能な土器が石坂台Ⅶ遺跡、石坂台Ⅷ遺跡で出土している。ただ石坂台Ⅶ遺跡の資料は、口縁部文様帯に縄文原体の先端による刺突列を施したり、体部に格子目状に縄文を交叉させて施したりといった、県北部の円筒下層d式にはない特徴を指摘することができる。秋田平野では、雄和町の金ヶ崎遺跡で円筒下層式の範疇でとらえられながらも、かなり異質な趣を伝える土器もあり、円筒土器の分布圏内での差異を示すものであろう。その他、前期末葉には北陸系の土器が秋田平野を中心として、日本海沿岸および秋田県を横断する3つの河川の流域に大量に流入する。そうした土器の分布によってくくられる地域の設定に関しても、錯綜した様相の現れる時期であり、いづれ将来、入り組んだ土器様相の解明が期待される。

縄文時代中期前葉～中葉にかけては、資料は断片的である。円筒土器上層a式、同c式、同d式および大木7b式、同8a式に比定可能な土器が散見する。

縄文時代中期後葉は、住居跡に伴っての埋設土器や、埋土内からの一括資料などが出土しており、七曲台では最もまとまった量の土器が出土している時期である。大木9式土器は、石坂台Ⅸ遺跡、石坂台Ⅹ遺跡松木台Ⅲ遺跡で出土している。いずれも横円区画文、懸垂区画文など、器面に対して縦長の文様区割りがされるものであり、大木9式土器の中では新しい段階に属する。大木10式土器は、石坂台I遺跡、餅田沢II遺跡、石坂台Ⅺ遺跡など出土している。体部の文様帯に横位に展開するS字状区画文、C字状区画文を施しており、大木10式土器の内では古い段階にある。

大木10式土器に後続する後期初頭の土器は、風無台I遺跡で出土している。鎖状の陰線を頭部にめぐらせたものである。また、それとはほぼ同じ時期とおもわれる、沈線による弧線を組み合わせての文様を施した土器も同じ風無台I遺跡から出土している。後期前葉に属する土器としては、石坂台IV遺跡で出土した平行沈線による精円形の構図を描く土器がある。

縄文時代晩期の土器は、石坂台Ⅹ遺跡や松木台I遺跡、松木台Ⅲ遺跡で出土している。土壤に伴い比較的まとまった資料であるが、時期的には大洞BC式、同C1式の晩期中葉の土器型式に比定できるものである。

2 縄文時代の居住形態について

七曲台は第1節で述べたように更新世から既に何らかの人間活動の場として利用されていた。しかし今回調査された6遺跡を含めて過去3年間で発掘調査された17遺跡から得られた結果からみる限り、更新世の最終末期から完新世の縄文時代早期までは人間活動の痕跡は認められな

い。（第1表）その後も前期前葉の遺物が例外的に石坂台I遺跡で出土したのを除いて前期中葉までは遺物が出土していない。

前期後葉になって七曲台では5カ所で遺物が出土し、その中の風無台I遺跡では土壌も検出されている。これらの5遺跡では堅穴住居跡は検出されていない。また、遺跡の所在地は低位段丘七曲台面、同じく上野台面、中位段丘椿台面のいずれにも及んでいる。さらに、七曲台の前期後葉の5遺跡のうち4遺跡までが、中期まで継続して利用された痕跡が認められない。前期後葉に何らかの活動の場として利用されていた場所が中期前葉にも継続して利用されているのは、既に前期後葉において土壌が構築されていて他の4遺跡よりも濃密な人間活動の痕跡が認められた風無台I遺跡のみである。各遺跡から出土した遺物量は少なく、土器は破片のみである。これらの特徴から、前期後葉の七曲台では土器の移動を伴う何らかの活動が広範囲に行なわれていたことはわかるが、それが居住も含めた諸活動のうちのどんな活動であったのかを限定することは難しい。

七曲台では中期前葉になって初めて堅穴住居跡が営まれたようである。風無台I遺跡では前期後葉の土壌と重複して円筒上層a式期の堅穴住居跡が検出されている（第2表）。この堅穴住居跡は床面積が27.3m²で七曲台で検出された繩文時代の堅穴住居跡の中では最大である。風無台I遺跡の地点は、中期前葉には当時のこの地域にあって数少ない居住地として選択され、人々の生活の中心的な場所としていたようである。しかし、七曲台ではその後大木8a式期までは人間活動の痕跡が認められない。

中期中葉になると再び遺跡数が多くなり、6遺跡から遺物が検出されている。その内の3カ所が堅穴住居跡は検出された居住地である。また中期後葉には更に遺跡数が増えその中にかけ

第1表 七曲台の繩文時代遺跡一覧表

No.	遺跡名	前期			中期			後期			晩期			段丘面
		前葉	中葉	後葉	前葉	中葉 (8b)	後葉 (9)	前葉	中葉	後葉	前葉	中葉	後葉	
1	風無台I	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	七曲台面
2	石坂台I	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	上野台面
3	石坂台II				◆	◆	◆							上野台面
4	石坂台III		◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	上野台面
5	石坂台IV		◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	上野台面
6	松木台I		◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	七曲台面
7	石坂台V	◆			◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	上野台面
8	鶴田沢II				◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	上野台面
9	松木台II	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	七曲台面
10	風無台VI				◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	七曲台面
11	松木台III							◆	◆	◆	◆	◆	◆	七曲台面
12	石坂台VII		◆					◆	◆	◆	◆	◆	◆	椿台面
13	石坂台IV	◆			◆			◆	◆	◆	◆	◆	◆	椿台面
14	風無台II							◆	◆	◆	◆	◆	◆	七曲台面
15	石坂台VI							◆	◆	◆	◆	◆	◆	椿台面

◆—住居跡が検出された遺跡、住居跡の数 ◇—遺物が出土した遺跡

る居住地の割合も高くなる（第1表）。

大木8a式期になると4遺跡で遺物が出土し、風無台I遺跡、石坂台I遺跡で各1軒の堅穴住居跡が検出された。大木8b式期には3遺跡で遺物が出土し、石坂台II遺跡で1軒堅穴住居跡が検出された。大木9式期になると3遺跡から遺物が出土し、石坂台I遺跡、石坂台IV遺跡から計4軒の堅穴住居跡が検出されている。大木10式期では7遺跡から遺物が出土し、その内の5遺跡から計11軒の堅穴住居跡が検出された。これらの堅穴住居跡のありかたにはいくつかの特徴がある。

まず、大木8a～大木9式期の遺物が出土した遺跡数が3～4遺跡であるのにに対して、大木10式期の遺跡数は7遺跡で約2倍に増えている。また、各時期の総

第2表 七曲台縄文時代住居跡一覧表

No.	遺跡名	住居跡No.	床面積	炉	時期
1	風無台I	56	27.3m ²	地床炉	円筒上層a
2	風無台I	16	11.0	土器埋設炉	大木8a
3	石坂台I	22	6.7	-----	大木8a
4	石坂台II	01	7.7	-----	大木8b
5	石坂台IX	01	17.2	複式炉B	大木9
6	石坂台IX	02	5.7	地床炉	大木9
7	石坂台IX	03	11.6	複式炉B	大木9
8	石坂台IV	01B	10.3	複式炉A	大木9
9	石坂台I	01A	9.8	複式炉A	大木10
10	石坂台I	12	6.3	複式炉A	大木10
11	耕田沢II	02	5.3	複式炉B	大木10
12	耕田沢II	03	2.5	複式炉B	大木10
13	耕田沢II	19	4.8	複式炉B	大木10
14	松木台III	27	4.6	複式炉B	大木10
15	松木台III	92	5.0	複式炉B	大木10
16	松木台III	107	3.9	地床炉	大木10
17	風無台I	07	4.9	土器埋設炉	大木10
18	風無台I	15	5.9	土器埋設炉	大木10
19	石坂台VII	04	5.5	複式炉B	大木10
20	石坂台VII	11	-----	地床炉	後期
21	耕田沢II	12	4.0	地床炉	晚期前葉
22	風無台II	104	-----	地床炉	晚期
23	松木台II	01	-----	地床炉	晚期
24	風無台II	37	40.8	石圓炉	弥生
25	石坂台I	20	5.1	地床炉	-----
26	石坂台I	24	-----	石圓炉	-----

複式炉A = 堆積土器+石圓炉+掘り込み部
複式炉B = 堆積土器+掘り込み部

遺跡数における居住地遺跡数の割合は、大木8a、8b式期では約50%なのに対して、大木9、10式期では約70%に上昇する。さらに、大木9～10式期以外は一時期の一遺跡に営まれる堅穴住居は1軒であるが、大木9～10式期には石坂台VII遺跡を除いた他の4遺跡はいずれも2～3軒が営まれている。また、各堅穴住居跡の床面積は時期によって一定の傾向性が認められる。すなわち、中期前葉の円筒上層a式期では上述のように27.3m²と大型である。ところが再び七曲台に人々が居住し始めた大木8a式期、8b式期の堅穴住居跡はそれに比べて床面積は小さく、風無台I遺跡のSI56堅穴住居跡の5分の2～4分の1である。大木9式期には10m²を超えるものが多く、中期中葉に比べてやや大型になる。そして大木10式期では小型化が顕著になり、約5m²と大木9式期の2分の1になる。

さて、大木10式期の堅穴住居跡が11軒も検出されているのに対して、後期初頭～前葉になると遺物は9遺跡で出土したものの住居跡は石坂台VII遺跡で1軒検出されたのみである。七曲台では後期初頭になると突然居住地遺跡が激減する。後期中葉以降は居住地遺跡がほとんどない。

以上のような居住形態の変化から、七曲台を生活の舞台とした各時期の人々が七曲台の各地点の利用価値をどのように評価していたかが推定できる。すなわち前期後葉の人々が何らかの

活動の場として利用し始め、中期前葉の円筒上層a式土器を使用した人々は竪穴住居を構築して居住するにまで至る。しかし、その後の時期の人々にとっては七曲台はそのような積極的な意味を持つ場所ではなかったようである。中期中葉の大木8a式土器、大木8b式土器を使用した人々は七曲台を再び居住を含めた諸活動の場として利用し、大木9式期から大木10式期では主に居住地として利用される。ところが後期初頭になって人々の七曲台に対する評価は大きく変わる。それまでのようすに竪穴住居を構築して居住する場ではなく、たとえば採集活動のような居住以外の諸活動の場としての利用価値が認められ、居住地は他の場所に移るようである。

このような七曲台に対する評価の違いは、繩文時代という長期間の中で起こっていたであろう自然環境の変化にその一因が求められよう。人々が居住することによって周囲の環境を変えてしまうといった自然環境の変化もある。また、そのような自然環境に適応すべく生活していた人々の人間関係や人々が行っていた諸活動の内容、生活の様式等の違いにも原因があろう。各時期におけるそれらの違いが、七曲台では前期中葉までと中期前半ではほとんど積極的な利用価値が認められない場所、中期後葉には居住地、後期以降では居住以外の何らかの活動の場所、晩期には墓域を含む何らかの活動の場所となって現れているのであろう。ここで各遺跡の様相から自然環境の変化や人々の人間関係、諸活動の具体的な内容、生活様式等を述べる余裕はないが、たとえば大木9式期の様相と大木10式期の様相を比較すると、竪穴住居跡の存在形態に大きな違いがあり、自然環境の変化よりも人々の人間関係の変化や人々が行う諸活動の内容の変化が強く反映しているように思われる。また、大木10式期と後期初頭とでは、竪穴住居跡の有無にまず大きな違いが認められ、自然環境の変化に起因する大規模な生活様式の変化を反映しているものと思われる。

3 壓底面にピットをもつ「陥し穴」について

本年度発掘調査した6遺跡を含めて、過去3カ年の“七曲台”における調査は17遺跡に及ぶ。このうち、本項で取り上げようとしている「陥し穴」遺構と考えられるものには、Tピットと呼ばれるものと円形の土壤壙底面にピットを有するものの二者が想定できる。前者については風無台I・石坂台I・石坂台III・石坂台IV・石坂台Ⅴ遺跡でそれぞれ1基、松木台III遺跡で15基のTピットが検出されている。一方後者は、石坂台IV遺跡で検出した3基が該当する。本項では後者の「陥し穴」と考えられるものについて若干言及してみたい。

石坂台IV遺跡で検出された土壤のうちA群とした3基については、逆茂木を有する「陥し穴」ではないかと先に述べた。現段階ではこのような遺構を「陥し穴」と断定はできないが、明らかなることは、ピットに杭状のものを立てていたこと。それが廃棄された時点においても、そのままの位置にあり、土壤がある程度埋まってから（あるいは意図的に埋めてから）、杭が朽ち

ることによって堆積土内に空洞あるいはブカブカの状態を残してくれている。平面・断面形態・立地さらには東北でも近年同種の遺構検出例が増えつつあること等から、「陥し穴」と肯定的に考えてもよいであろう。

石坂台IV遺跡では土層の状態が決め手となり、県内では初見となった。しかしながら形態からみると、同様の遺構を検出した遺跡を見いだすことができる。昭和58年に調査された横手市
(註1)
 のオホン清水（オホン清水B遺跡、オホン清水北遺跡）では、壙底面にピットをもつ土壤が6基確認されている。平面形は、円形の他に、楕円形、不整形のものがあり、基本的に壙底面中央に1個のピットをもつ。楕円形を呈するものは、長軸方向に並んで2個のピットを有する。規模は、開口部で径80cm前後のものが多く、深さも70~80cmと石坂台IV遺跡よりは小ぶりである。出土遺物はなく時期不明としている。報告では「陥し穴」の可能性を示唆しているものの、明言はしていない。

ここで平面円形を基調とし、壙底面にピットを有する類を近県の例から抽出してみよう。

(註2) (註3) (註4) (註5)
 岩手県では、水沢市南矢中、同市袖谷地、胆沢郡金ヶ崎町館山、岩手郡岩手町川口I、二戸
(註6)
 郡淨法寺町五庵I遺跡などで類例が検出されている。平面形態は、円形を基調とするものが多いが、明らかに楕円形、長方形を意図して作られたものもある。壙底面のピットは、円形・方形を呈するものに1個の場合が多く、楕円形、長方形のものには、長軸方向に2個並ぶ例もある。南矢中・袖谷地・川口I遺跡では、土壤内の出土遺物はなく、単に縄文時代ではないかとしている。館山遺跡は、円形もしくは方形の「陥し穴」（D型としている）が41基検出された。うち7基から縄文土器・土師器・須恵器等が出土しており、出土遺物や「陥し穴」に関する文献史料から合わせて、「D型の遺構については、平安期にまで下る可能性もあるうかと考えられる。」と報告している。また昭和59年に調査された五庵I遺跡では、円形を呈するものが32基検出された。うち6基については、埋土に杭の立ち上がりが確認され、その最大の長さは28cmになるという。時代については、縄文時代としている。

青森県ではどうであろうか。近年、県南の三八地方で類例が増えているという。八戸市鶴庭
(註7)
 遺跡では15基の円形の「陥し穴」（報告では「おとし穴」としている）が検出されている。秋田・岩手の例からすると、大型のものが多く、開口部が径2mを超すものもある。断面形態は漏斗状・すり鉢状を呈しており、壙底面のピットは1個より、4~7個を有する場合が多い。またピットをもたない類もある。出土遺物は縄文土器（前期初頭頃）小片とフレークがあり、埋土における中微浮石との関連から、陥し穴の構築年代を縄文時代早期末~前期初頭と位置づけている。報告では、考察の中に「おとし穴」の項目を設けて、形態分類や年代観と合わせて、「陥し穴」の用途、機能といった遺構の本質にせまる論を復元的に試みている。なかで、対象獣や狩猟方法について言及している一文は民俗事例との関わりかも教示を受ける点が少な

くない。さらに、「おとし穴の使用想定図」を付し、イノシシを主たる対象獸と考えているようである。

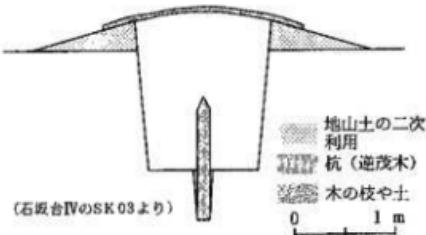
この他、八戸市長七谷地7号、同市長者森、三戸郡南郷村外長根(4)、同村鶴平(1)遺跡などでも円形の「陥し穴」と考えられる土壙が検出されている。長七谷地7号では、縄文時代早期末の年代を与えており、他は不明となっている。

一方、北海道江別市東野幌4遺跡では、逆茂木の基部が底面の小ピット内に立った状態で検出されたという。

今まで「陥し穴」の立地、配列等についてはふれてこなかった。円形の「陥し穴」と溝状の「陥し穴」(Tピット)の関係についても同様である。検出例の多い岩手県館山や八戸市鶴廻遺跡では、同一形態のものが、遺跡のある区域に占地して、他の形態のものとは異なる立地を示していたり、等高線との関係から配列にふれている。『七曲台』においては、松木台Ⅲ遺跡で検出した15基のTピットについてみると、長軸方向を南一北にとるTピットが、2~3基の小グループ単位で東一西方向に並ぶように位置している。その他の遺跡については検出例が少なくこの問題に言及すべく情報はないに等しい。ただ、埋土の堆積状態と立地から石坂台IV遺跡の円形の「陥し穴」が機能を果たしていた当時の景観を想定してみたい。

まず埋土の状態から、「陥し穴」が廃棄された直後、あまり時間を隔てることなく、地山に類似した土が流入、あるいは意図的に埋めていると考えられる。この土は明らかに陥し穴掘削の際の地山であり、排土となった地山土をそのまま埋め戻したようである。事実、土壤を掘り込んでいく際、周壁と埋土との区別がつけにくい状態が続いた。このことは、「陥し穴」が機能している段階には既に、後に埋められる地山土(排土)が用意されていたと考えるのが自然である。竪穴住居跡に排土を利用して周堤を巡らす例があるように、「陥し穴」のまわりにも、周堤とは性質は異なるが、緩いスロープ状に土を盛っていたと考えるのはどうであろうか。盛土によって「陥し穴」を掘り込んだ深さ以上の落差を生じさせができるわけで、排土の再利用と合わせて、一石二鳥の効果をあげることができる。さらには、立地からみても獲物が自然に穴に落ちるのを待つというものでは

なく、幾人かが1組となって獲物を穴まで追い込む方法(獵)によっていたと考えられ、「陥し穴」の回りの盛土部分がその目印の役割を果たしていたと想定される。もちろんこの目印は、人が誤って落下することも未然に防いでくれるであろう。



第2図 「陥し穴」しかけ断面想定模式図

4 土壙について

七曲台における縄文時代の土壙は、大きくはフ拉斯コ状土壙あるいは袋状土壙と言われる1群と、土壙墓と考えられる1群とに分けることができる。七曲台の遺跡を通して、この両土壙を概観してみたい。

(1) フ拉斯コ状土壙

風無台Ⅰ・Ⅲ、松木台Ⅲ、石坂台Ⅷ遺跡で集中しているが、他の遺跡でも少いながら確認されている。いずれも台地の縁辺に沿って構築されている。時期的には風無台Ⅰ遺跡のSK91とした前期後半の土壙が最も古く、風無台Ⅱ遺跡の弥生時代の土壙が新しいものであるが、晩期の前半に位置づけられるフ拉斯コ状土壙が圧倒的に多い。フ拉斯コ状土壙は一義的には貯蔵穴と考えられているが、風無台Ⅱ遺跡のSK17、石坂台Ⅸ遺跡のSK07からはこれを裏付けるように炭化栗が多量に出土している。

七曲台では、これらフ拉斯コ状土壙群が、縄文時代前期後半から弥生時代までの長期間に渡って食料採集と貯蔵が行なわれていたことを物語っている。

(2) 土 壙

七曲台の各遺跡から検出された土壙墓と考えられる1群の土壙も、松木台Ⅱ・Ⅲ遺跡、石坂台Ⅷ遺跡にみられるように台地縁辺部に集中している。平面的には円形ないしは橢円形で、断面は擂鉢状を呈しており、深さは30~50cmである。これら3遺跡の土壙墓群は、その出土土器から晩期の前半と考えられ、石囲炉様の配石・マウンド状の焼土を作りうるという共通する点がある。

七曲台ではこのほか、餅田沢Ⅱ遺跡、石坂台Ⅰ遺跡でも2~3基の土壙墓が確認されており墓域を構成する土壙墓数に大きな相違がある。また石坂台Ⅰ遺跡のSK23は後期、風無台Ⅱ遺跡のSK09は弥生時代の土壙墓であるが、晩期のものと形態的に変わるものではない。

これら土壙墓群からは副葬品と考えられる遺物が極めて少ないが、大型の礫を中心配したり、赤色塗彩の完形土器を出土する土壙があり、また松木台Ⅲ遺跡のSK140からはヒスイの玉の出土がある。特に同遺跡SK16のように扁平打製石斧を使用する例が、石坂台Ⅰ遺跡のSK17でもみられ、また石坂台Ⅸ遺跡では土壙には伴わないが扁平打製石斧がやはり2枚重なって検出されている。

縄文時代晩期の土壙墓は、近年秋田県内でも検出例が多くなっており、形態・墓域を構成する遺構（焼土・配石・土器埋設遺構など）も明らかになりつつある。しかしながら各遺跡とも七曲台の遺跡同様、土壙墓のバックボーンである集落の構造に関しては不明な点が多いのである。

また扁平打製石斧の使用例も他の遺跡では検出例がなく、松木台Ⅲ遺跡他で確認された出土状態は何か特別の意味を持つのであろうか。さらに扁平打製石斧そのものも出土例が多いわけではなく、かなり限定された時間と地域に帰属しそうであるが、このことに関しては稿を改めて論ずる必要があろう。

5 弥生時代の遺構について

七曲台における弥生時代の遺構・遺物は、風無台Ⅱ遺跡を除くと非常に希薄である。何らかの形で遺構が検出された遺跡は17遺跡中4遺跡、遺物が検出されたのは7遺跡と、いずれも調査された遺跡の半数にも満たない。

これらの中にあって風無台Ⅱ遺跡では比較的多くの遺構が検出された、竪穴住居跡1軒、土壙7基、土器埋設遺構1基がそれである。竪穴住居跡は、県内では2例目の発見で最古のものと思われるものである。段丘縁辺から約40m離れて構築されており地山面への掘り込みはほとんどなく、墻溝からその大きさが分かる。その規模は東西8.3m、南北7.3mで平面形は略円形を呈する。中央には大きな石窓い炉があり、これを中心にしてその周囲に4本の柱穴があり、重複している住穴などから2回の建て替えが行なわれていることがわかった。壁溝は南西部で途切れおりこの部分が入口部と明確に分かる。入口部から内部方向を見て右側の墻溝端部に深さが約60cmで先端が杭状に尖るピット4本と、深さが約20cmのピットが交互に並んで検出され、住居跡の壁が上部構造の一部に伴う何らかの施設のあったことが推定されることである。このような例は、現在までのところ管見にない。また、この住居跡の入口部の南西約3mの地点から本住居跡と深い係りを持つと考えられる土器埋設遺構が検出されている。埋められている土器は壺形土器である。

土壤の検出されたのはこの他に、風無台Ⅰ遺跡で、3基石坂台Ⅲ遺跡で1基で、焼上遺構は松木台Ⅰ遺跡で1基検出されている。

土器を主体とする遺物がその多寡にかかわらず検出されたのは、風無台Ⅰ・風無台Ⅱ・松木台Ⅰ・石坂台Ⅰ・石坂台Ⅲ・石坂台Ⅳ・石坂台Ⅴ遺跡である。これらは弥生時代中期～後期にわたるが、このなかでは風無台Ⅱ。石坂台Ⅳ遺跡で検出されている、器面全体に纏糸文が施された土器や、石坂台Ⅴ遺跡で検出された後北C式土器などがその分布範囲を知るうえで注目される。

註1 横手市教育委員会『オホン清水第一3次遺跡発掘調査報告書』1984(昭和59)年

註2 岩手県教育委員会「南矢中遺跡」『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書—IV—

(水沢地区)』1981(昭和56)年

- 註3 岩手県教育委員会「袖谷地遺跡」『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書一IX-（水沢地区）』1981（昭和56）年
- 註4 岩手県教育委員会『館山遺跡第2次発掘調査報告書』1983（昭和58）年
- 註5 岩手県教育委員会『川口I遺跡発掘調査報告書』1984（昭和59）年
- 註6 岩手県教育委員会「五庵I遺跡」『岩手県埋蔵文化財発掘調査略報（昭和59年度分）』1985（昭和60年）
- 註7 青森県教育委員会『鶴庭遺跡』1983（昭和58）年
- 註8 八戸市教育委員会『長七谷地遺跡発掘調査報告書（昭和55・56年度）』1982（昭和57）年
- 註9 青森県埋蔵文化財調査センター「長者森遺跡」『埋文あおもりI』1982（昭和57）年
- 註10 青森県教育委員会「外長根（4）遺跡」『国営八戸平原開拓建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書I』1981（昭和56）年
- 註11 青森県埋蔵文化財調査センター「鶴平（1）遺跡」『埋文あおもりI』1982（昭和57）年
- 註12 註7と同じ

第3節 古代～近代

1 ロクロ土師器坏の製作について

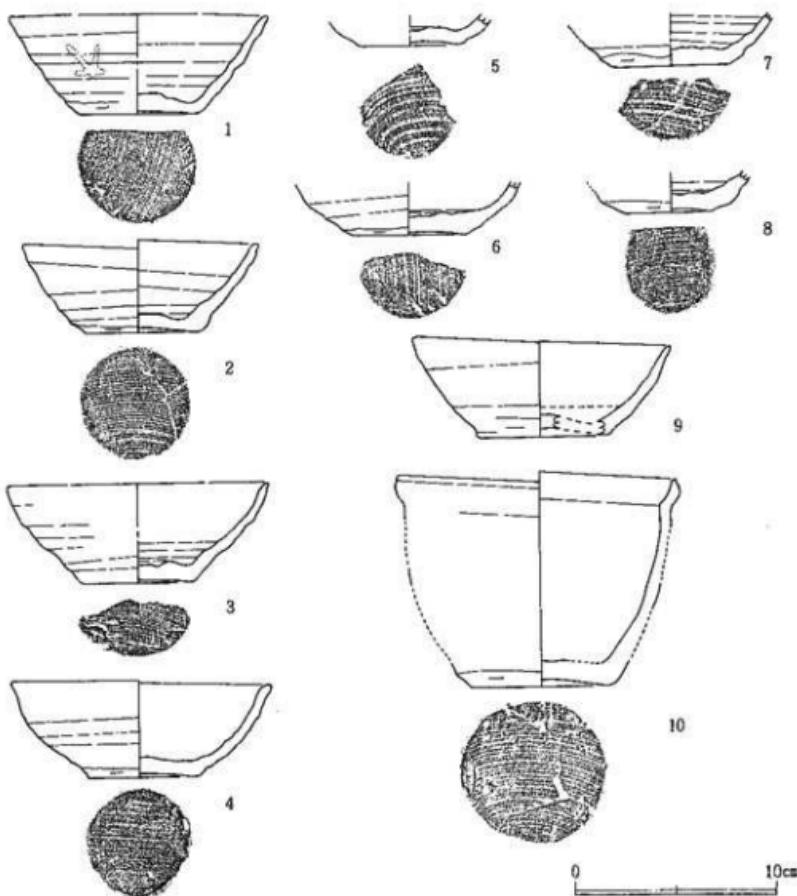
松木台Ⅲ遺跡から検出された土師器は、9世紀の中葉～後葉を中心を置く土器群と考えられるが、これらのロクロ使用の土師器の中には、回転糸切り技法と静止糸切り技法がある。静止糸切り技法の土師器は周辺の遺跡から検出されておらず、当遺跡で特徴的である。本文では、ロクロ使用の静止糸切り痕を有する土師器坏A類（第3図1～9）と回転糸切り痕を有する土師器坏B類（第4図1～8）について、それらの製作技法を考えてみることにする。

ロクロ回転を利用する土器には、粘土塊から直接器形を造り出す場合と、粘土紐で器の大略を造りロクロ調整を施す場合の2つがある。そして、それらの土器をロクロから切り離す直前の状態として、次の3つの場合が想定できる。

- 〔1〕 ロクロ盤の直上で粘土紐で器を成形し、ロクロ調整を行った状態
〔2〕 底部円柱糸切り技法などのように、底部を造る粘土塊の上に体部から口縁部までを粘土紐によって成形し、ロクロ調整を行った状態
〔3〕 粘土塊から口縁部・体部・底部内面を成形（調整）した状態
- となり、〔2〕・〔3〕の場合、切り離し手法は器形を最終的に決定づけることになる。そしていくつかの切り離し手法が、ロクロ上の土器製作法の相異（〔1〕・〔2〕・〔3〕）とどのように対応するか否かは、大きな問題となっている。

〔註2〕

〔註3〕



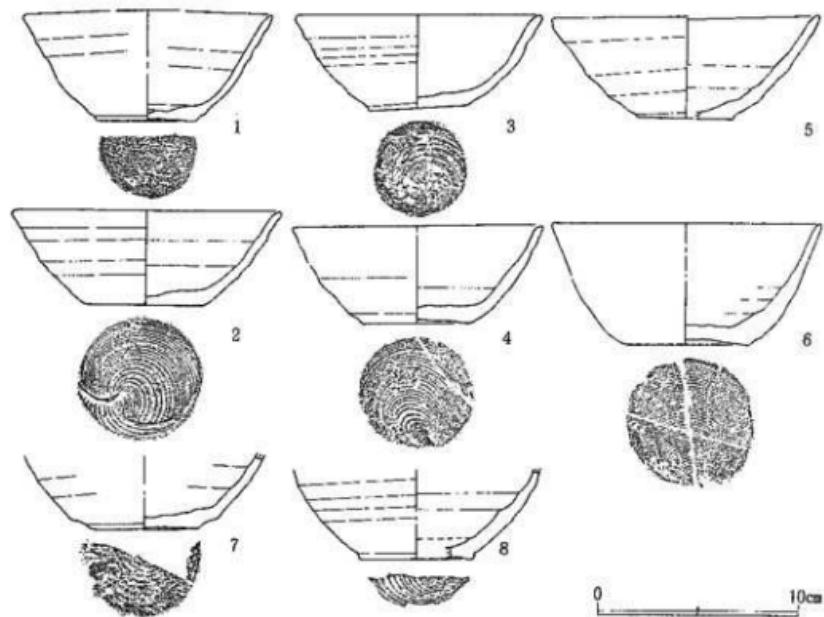
第3図 A類と小型要

A・B類の底部断面には、対称的な特徴が認められるようであり、その断面観察を検討することからはじめる。A類の底部断面の特徴は、3つにまとめることができる。

- ① 底部中央部が厚く、端部が薄くなる。（1・2・7）
- ② 底部中央部と端部ではほぼ均一になる。（3～5・8）
- ③ 底部中央部が薄く、端部ほど厚くなる。（6）

B類の特徴は2つにまとめることができる。

- ① 底部中央部が薄く、端部が厚くなる。（1～5・7・8）



第4図 B類

② 底部中央部と端部では、ほぼ均一になる。(6)

これらの結果から底部の断面についてA・B類を比較してみると、B類の中には中央部が厚く端部の薄くなる例はなく、6を除いて中央部が最も薄く端部ほど器肉を増している。A類は6を除き、中央部が最も厚いか端部とほぼ同じである。以上の結果は、同時に底部内面の状態を規定している。A類の場合は、底部から体部への移行がしっかりした角度を持つものに対し、B類の場合は緩い角度で徐々に上ぼり勾配になる。このことからA類は底部成形の段階で、底部内面の周囲を入念に押された結果と考えられる(a)。

A類とB類の相違は、再調整を有するか否かも表れている。再調整のヘラケズリと体部最下位の関係を観察すると次のことが言える。A類で再調整のヘラケズリを施す例は、ロクロの凹面に相当している。ヘラケズリの角度は、底部から体部にかけて連続した傾斜を示している。この結果、体部最下部のヘラケズリを施す前の状態は、凹面より下で突出部分を形成していたと想定できる。ヘラケズリを持たないB類については、底部から体部にかけて滑らかに連続するのがほとんどで、体部最下位までロクロ調整痕を観察できる。そして、8を除くと土器接地面と体部の立ち上がりは、おおむね 45° 以下の角度におさまる。この状態からB類の場合は、

底部が台状となる場合を除き〔1〕の方法でロクロ調整を底部最下位まで施し切り離したとするのは不自然なことであり、粘土塊を想定するのが自然である〔b〕。この場合切り離し面以下の状態は、体部と底面の接点で作る円よりもさらに内側に指が延びていたと想定できよう。また、仮にA類が切り離し面以下に粘土塊を用いていたと仮定するならば再調整のヘラケズリを施さなくとも成形や調整の段階で意図した形態を作ることができたはずである〔c〕。

次にA類で、ヘラケズリの認められない土器に注目してみる。5の場合は小片であり詳しく観察できないが、3は体部中央部から底部まで指と考えられるナデが丁寧に施される。この例は、中田面遺跡に1点（底部の1/2・体部の1/6を残存）認められる。これらの再調整と考えられるナデは、器形を整える働きがあったと考えられる。そして、ロクロ調整の段階では体部最下位まで調整を施さず、切り離しの後に仕上げとしてナデを施している可能性がある〔d〕。

ここで粘土紐による成形を示唆する資料としてA類と考えられる9があげられる。この壺には、底面より1.5cm前後の内面に粘土紐の接合痕を認め、少なくとも水びき成形とは考えられない遺物である。この遺物の底面は剥落によって糸切り手法は不明であるが、体部最下端にはヘラケズリを部分的に認め底部中央部が厚く端部が薄い。これらの特徴はA類に認められる特徴であり、このことから9の底面には静止糸切り痕があったと考えられる〔e〕。

このように〔a〕～〔e〕とした考え方から、A類とB類とでは、切り離し手法前の土器製作方法に相違のあることがうかがえる。すなわち、A類では、ロクロ盤上で粘土紐を巻き上げて器の形態を形成した〔I〕の方法による可能性が高く、B類ではA類との対比から〔II〕もしくは〔III〕の可能性が高い。

以上のように松木台遺跡の中には、壺底部に静止糸切り痕と回転糸切痕を有するタイプがあるが、観察から両者には総体的に切り離し手法上の相違以外に成形方法上の相違のあることが導かれると思う。糸切り技法の相違自体が、その成形方法上の相違としては直接的に結び付かないのが現状である。この意味で、ロクロ上の成形状態と切り離し手法との間にロクロの回転力を考慮することが、今後両者を結び付ける上で理解を助けることになると思う。ロクロの回転力については從来から問題となっているが、回転糸切り技法におよばず抵抗力と回転力との関係は今後の課題である。

2 炭窯について

今回、石坂台IV遺跡で3基、石坂台VII遺跡で2基検出された伏焼様の炭焼窯は、隣りの雄和町流ノ沢II遺跡で昭和56年に確認している。報告では、「これは戦中から戦後にかけて地元住民が使用した簡便な炭焼用の施設であり、本報告には記載しなかった。」としており、この種の遺構の性格を考える上からも、ここに流ノ沢II遺跡の検出遺構についての報告を行いたい。

滝ノ沢Ⅱ遺跡は河辺郡雄和町椿川字滝ノ沢に所在する。遺跡は、石坂台Ⅳ遺跡の南西約2kmの丘陵平坦面に位置する。標高はおよそ76mである。昭和56年4月に秋田県立中央公園スポーツゾーン建設工事に伴う事前調査として行なわれたものである。検出された遺構は炭焼窯と考えられるもの5基、土壙1基である。

SN01～SN04（第5図）

4基は、ほぼ2.1～2.6mの間隔をおいて並列している。形態は長楕円形を呈し、長軸方向は、北西～南東にとっている。4基の法量は下のとおりである。

	長さ	幅	深さ
SN01	8.00	1.30～1.40	0.15～0.20
SN02	7.90	1.40～1.50	0.30～0.40
SN03	8.20	1.40～1.70	0.35～0.40
SN04	9.20	1.30～1.60	0.20～0.30

(単位m)

4基はいずれも、床面に焼土・炭化物の広がりが認められ、埋土中にも多量の炭化物が堆積している。

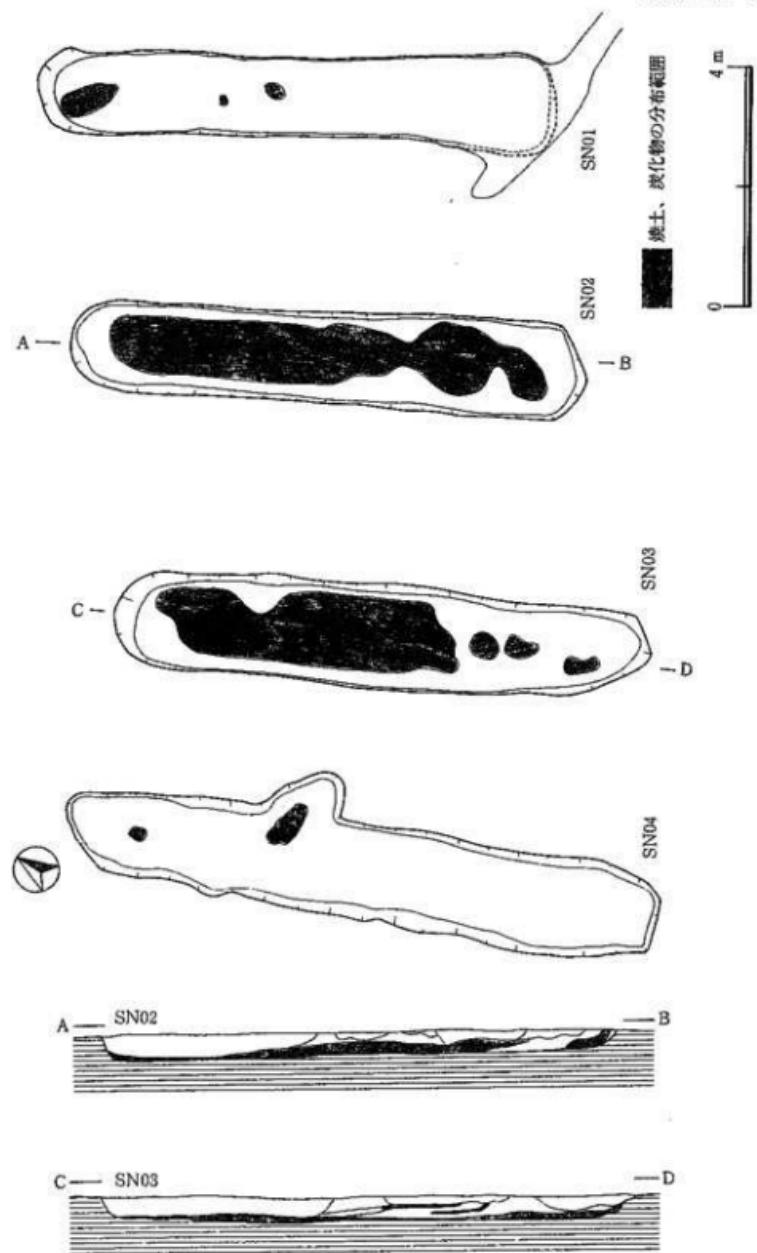
SN05はSN04の西約20mに位置する。長さ4m、幅1.7m、深さ10～18cmの隅丸長方形を呈するものでSN01～04の4基とは形態を異にする。西壁中央に、奥行40cm程の半円形の突出部が認められる。床面や周壁には熱を受け赤変している部分は看取できなかったが、形態と埋土に多量の炭化物が堆積していることから炭焼窯と理解できる。この他、埋土に焼土ブロック・炭火物の充填している土壙が1基検出されている。

滝ノ沢Ⅱ遺跡においては、石坂台Ⅳ・同Ⅶ遺跡で確認されたものと同タイプの長楕円形の炭焼窯と隅丸長方形の炭焼窯の二種が存在する。ここでこれらの炭焼窯が伏焼法による窯であろうという根拠となった文献にあたってみよう。秋田山林会編の『木炭と其製造法』^(註6)には、伏焼法の項目があり、この中で長野式伏焼法について詳細な記述がある。形態上から要約すれば、窯の大きさは随意ではあるが、長さ4、5間まで、幅5尺内外までを可とする。形は正長方形に作成することが原則であるという。これに、それぞれ2尺までの点火部と煙道部を設ける。床面の勾配は、1間に對し5寸の割合で煙道部を高くする。ただし火窓は4寸内外の勾配とする。この規定からすると、長楕円形の窯は、長さ、幅の上限値を示すものであり、長方形の窯は、半円形の突出部が煙道部に対応できよう。形態の異なる二種の窯も伏焼法の規定からは同一の範疇に入るものとなる。

今まで述べてきた伏焼様の窯について考古学的に調査された例はないのであろうか。

東京都の多摩ニュータウン関係の調査で3例、神奈川県川崎市栗木Ⅳ遺跡で1例の発掘が報

(註7)



第5図 SN01, 02, 03, 04焼窯

告されている。多摩ニュータウン関係では、No.540・No.559・No.740遺跡でそれぞれ1基ずつ検出されている。

No.540遺跡は2号土坑としたもので、一部削平されており残存する長さ2.5m、幅1.5m、壁高20~50cmで「全体に焼けており、炭化材が残存している。」「検出された炭火材は丸太材でクヌギ、コナラに同定」されたという。

No.559遺跡は、1号炭焼窯としたもので全長6.35m、最大幅は1.4m程、深さ0.2m、の溝状を呈する。窓口部で狭くなり、その前面には焼成に際して掘き出された炭化物、焼土の広がりが認められるという。

No.740遺跡は4号炭焼窯としたもので、「平面形は溝状を呈し、長さ約7m、幅約1.2m、確認面からの深さ約0.6m」で「覆土中には炭化物と焼土が認められるが、底面、壁面は焼けていない。」と報告している。

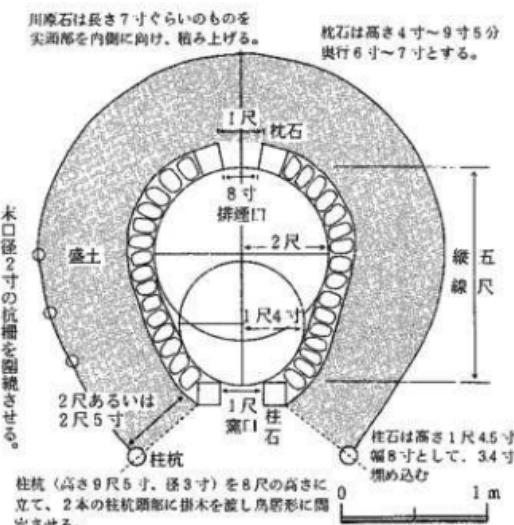
一方、石坂台Ⅳ遺跡で確認された炭窯（SX16）は、前述のように吉田窯と称される白炭窯であることが判った。吉田窯は製炭教師の肩書きをもつ秋田県の吉田頼秋が築窯し、かつ奨励した窯形態のものを指す。

吉田窯を製炭法の中で位置づけると次のようになる。製炭法には大きく、築窯製炭法と無蓋製炭法・堆積製炭法の別がある。吉田窯は前者に相当し、後者には石坂台Ⅳ・Ⅴ遺跡などで検出された長方形のいわゆる伏焼の類が入る。築窯製炭法はさらに、炭材を窯内で消化させ出炭する場合と炭材を窯の外に取り出して消火する2つの方法がある。前者を窯内消火法といい、後者を窯外消火法という。前者は製品としての木炭に樹皮がつき全体が黒く、黒炭と呼ばれ、その窯を黒炭窯と称する。後者は、黒炭窯に比し温度が高くなるため、樹皮が燃えてしまうため木炭の表面は白っぽく見える。それで白炭といい、白炭窯と呼ばれる。吉田窯は窯外消火法の白炭窯に属することになる。

白炭窯（吉田窯）については、詳細な築設法が図示されている。前出の『木炭と其製造法』によると、次のようになる。窯の形は、窓口と煙道を結ぶ中軸線の長さ（縦線）を基準とする。排煙口（煙道）から縦線の4割に相当する長さを半径にして円を描く。同じように窓口から2割8分の長さを半径にして円を描き、両円の接線が窯の形=窯型となる。窯型はそのまま炭化室の大きさを示すものであり、窯壁の川原石は、その外側に積み上げていく。その他、窓口の柱石を置く位置や周囲の杭の長さ、太さまで数字で示してある、これらについて縦線を5尺にした図（第6図）があるので参照されたい。これをSX16と比べてみると、多少の差はあるものの基本的には、この教本にのっとった方法で築造されているとみなしてよいであろう。

昭和30年代まで、河辺町岩見で吉田窯で製炭に従事されていた方の話をうかがうことができ

た。話を総合してみるとSX16は非常に丁寧な作りであり、規範に合致するのであれば比較的古いのではないか、ということであった。となると白炭窯の築設法を具体的な数字で明示し、築窯を奨励していた大正末年から昭和初期の年代を想定できるであろう。



第6図 吉田窯(白炭窯)築設模式図

- 註1 第2篇 第6章 第3節参照
- 註2 糸をロクロの中心に結び、その上で器形を造って切り離す中心切り枝法(神奈川考古第21号1986)があるが、この場合は粘土塊の素材がなく〔1〕に含まれよう。
- 註3 松本富雄「須恵器の製作技法の復元について」『新聞遺跡I』埼玉県三芳町教育委員会 1982(昭和57年)
- 註4 「中田面遺跡発掘調査報告書」1980(昭和55年)では小破片のために取り扱っていない。
- 註5 秋田県教育委員会「滝ノ沢Ⅱ遺跡」「秋田県立中央公園スポーツゾーン地域内発掘調査報告書」1982(昭和57年)
- 註6 秋田山林会『木炭と其製法』1923(大正13)年
- 註7 註10に同じ
- 註8 (財)東京都埋蔵文化財センター「Na540遺跡」「多摩ニュータウン遺跡—昭和55年度」(第2分冊)1981(昭和56年)
- 註9 (財)東京都埋蔵文化財センター「Na559遺跡」「多摩ニュータウン遺跡—昭和56年度」(第4分冊)1982(昭和57年)
- 註10 (財)東京都埋蔵文化財センター「Na740遺跡」「多摩ニュータウン遺跡—昭和58年度」(第7分冊)1984(昭和59年)

別篇　自然科学的分析

別篇　自然科学的分析

1 放射性炭素年代測定

(学習院大学)

2 花粉分析／重鉱物分析・
屈折率測定／材・種子同定

(バリノ・サーヴェイ株式会社)

1986年 3月10日

秋田県埋蔵文化財センター 編

1985年12月16日受領致しました試料についての¹⁴C年代測定の結果を下記の通り御報告致します。

なお年代値の算出には¹⁴Cの半減期としてLibbyの半減期5570年を使用しています。また付記した誤差は β 線計数値の標準偏差 σ にもとづいて算出した年数で、標準偏差 (one sigma)に相当する年代です。試料の β 線計数率と自然計数率の差が 2σ 以下のときは、 3σ に相当する年代を下限とする年代値 (B. P.) のみを表示しております。また試料の、 β 線計数値と現在の標準炭素についての差が 2σ 以下のときには、Modernと表示し、 $\delta^{14}\text{C}\%$ を付記しております。

記

Code No.	試 料	B.P. 年代 (1950年よりの年数)
GaK-12693.	Charred wood from Ishizakadai, Test trench No.34. Sample No.1.	32,000 ± 1830 30,050 B.C.
GaK-12694.	Charcoal from Ishizakadai, Sample No.2, 5IZDVII, SK07	3680 ± 120 1730 B.C.
GaK-12695.	Charcoal from Ishizakadai, Sample No.3, 5IZDVIII, SK108.	2580 ± 140 630 B.C.
GaK-12696.	Charcoal from Ishizakadai, Sample No.4, 5IZDVII(No.35) SK64.	6640 ± 140 4690 B.C.
GaK-12697.	Charcoal from Ishizakadai, Sample No.5, 5IZDVIII(No.35) SK23.	3740 ± 90 1790 B.C.
GaK-12698.	Charcoal from Ishizakadai, Sample No.6, 5IZDIX, SK06.	4270 ± 140 2320 B.C.
GaK-12699.	Charcoal from Matsukidai, Sample No.7, 5MKDIII, SK105.	2690 ± 140 740 B.C.
GaK-12700.	Charcoal from Matsukidai, Sample No.8, 5MKDIII, SK21.	3250 ± 100 1360 B.C.
GaK-12701.	Charcoal from Matsukidai, Sample No.9, 5MKDIII, SK56.	1780 ± 100 A.D. 170
GaK-12702.	Charcoal from Matsukidai, Sample No.10, 5MKDIII, Unit MF55	22,750 ± 620 20,800 B.C.

学習院大学 本越 邦彦

東北横断自動車道秋田線関係遺跡
 七曲台遺跡群 石坂台IV・石坂台VII・石坂台IX
 松木台III各遺跡試料における花粉、重鉱物分析
 屈折率測定及び材・種子同定報告

貴、秋田県埋蔵文化財センター様より御依頼のありました、東北横断自動車道秋田線関係遺跡七曲台遺跡群石坂台IV・石坂台VII・石坂台IX・松木台III各遺跡試料の花粉・重鉱物分析、屈折率測定及び材・種子同定が終了しましたので、下記の通り結果を御報告致します。

記

〔I〕 石坂台IV遺跡

I-1 材 同 定	p. 575
I-2 種 子 同 定	p. 579
I-3 花 粉 分 析	p. 580~581

〔II〕 石坂台VII遺跡

II-1 花 粉 分 析	p. 584~586
II-2 重 鉱 物 分 析・屈 折 率 測 定	p. 593~595
II-3 種 子 同 定	p. 598

〔III〕 石坂台VII・石坂台IX・松木台III遺跡

III-1 土器胎土重鉱物分析	p. 599~600
-----------------	------------

〔IV〕 松木台III遺跡

IV-1 花 粉 分 析	p. 604~605
IV-2 重 鉱 物 分 析・屈 折 率 測 定	p. 610~611

〈表・図・図版〉

〔I〕 石坂台IV遺跡

表 I-2 樹種同定結果

表 I-3 花粉分析結果

図 I-3 花粉ダイアグラム

図版 I-1-1

～I-1-3 樹種写真図版

図版 I-2 樹種写真図版

図版 I-3 花粉化石写真図版

〔II〕 石坂台VII遺跡

表 II-1-1 花粉分析試料表

表 II-1-2 花粉分析結果

表 II-2 重鉱物組成

図 II-1-1 花粉・重鉱物分析試料採取地点土層模式柱状図

図 II-1-2 花粉ダイアグラム

図 II-2 重鉱物組成

図版 II-1-1

～II-1-3 花粉化石写真図版

図版 II-2-1

～II-2-2 鉱物写真図版

〔III〕 石坂台VII・石坂台IX・松木台III遺跡

表 III-1-1 試料表

- 表III-1-2 重鉱物組成
図III-1-1 重鉱物組成
図III-1-2 三角ダイアグラム

- 図版III-1-1
* III-1-2 胎土鉱物写真図版

(IV) 松木台Ⅲ遺跡

- 表IV-1-1 花粉分析試料表
表IV-1-2 花粉分析結果
表IV-2 重鉱物組成

図IV-1 花粉ダイアグラム
図IV-2-1 重鉱物分析試料採取地点土層模式柱状図
図IV-2-2 重鉱物組成

図版IV-1 花粉化石写真図版
図版IV-2 鉱物写真図版

[I] 石坂台IV遺跡

I-1 材 同 定

I-1-1 試 料

試料はNo.39, 40, 41の3点であり、1.8万年以前の堆積物と考えられる5IZD IV深掘トレンチ基本層位15層中より採取されたものである。

I-1-2 方 法

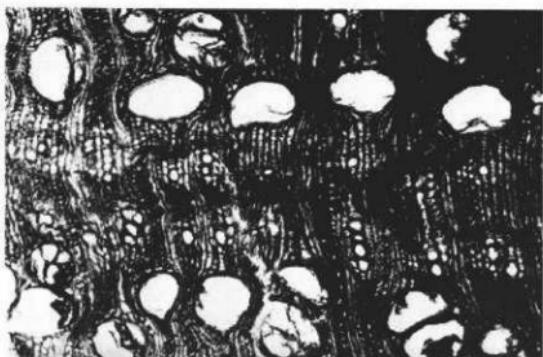
剃刀の刃を用いて、試料の木口・柾目・板目三断面の徒手切片を作成、ガム・クロラール(Gum chloral)で封入、生物顕微鏡で観察・同定した。同時に、顕微鏡写真図版(図版I-1-1~I-1-3)も作成した。

I-1-3 結 果

試料は全て、Fraxinus sp. (トネリコ属の一種)と同定された。次に、各試料の主な解剖学的特徴や一般的性質などについて述べる。

環孔材で孔圈部は1~2列、孔圈外で急激に管径を減じのち漸減する。道管壁は厚く、横断面では円形~橢円形、単独または2個が複合、複合部は更に厚くなる。道管は單穿孔を有し、壁孔は小型で密に交互状に配列、放射組織との間では網目状~篩状となる。放射組織は同性、1~2(4)細胞幅、1~40細胞高であるが、20細胞高前後のものが多い。柔組織は周囲状およびターミナル状。年輪界は明瞭。

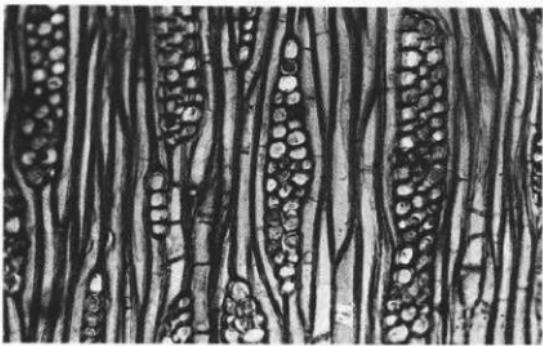
トネリコ属はモクセイ科の落葉高木であり、シオジ(Fraxinus platypoda)、トネリコ(F. japonica)、アオダモ(F. lanuginosa)など約8種が自生する。このうちヤマトアオダモ(F. longicuspis)・マルバアオダモ(F. sieboldiana)・アオダモは、北海道・本州・四国・九州に、ヤチダモ(F. mandshurica var. japonica)は北海道・本州(中部地方以北)に、トネリコは本州(中部地方以北)に、シオジは本州(関東地方以西)・四国・九州に分布する。材の性質は種によって異なるが、一般には中庸~やや重硬で、韌性があり、加工は容易で、建築・家具・器具・旋作・薪炭材などの用途が知られる。



木口
×56



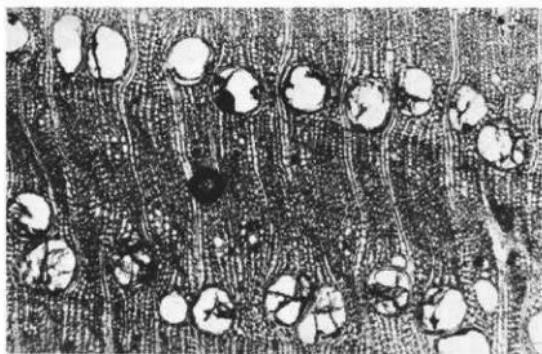
板目
×140



板目
×140

図版 I-1-1

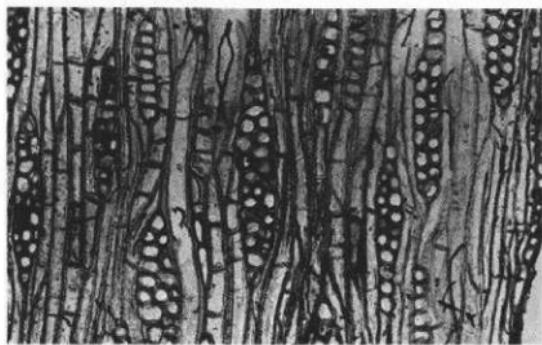
Fraxinus sp.



木口
×56

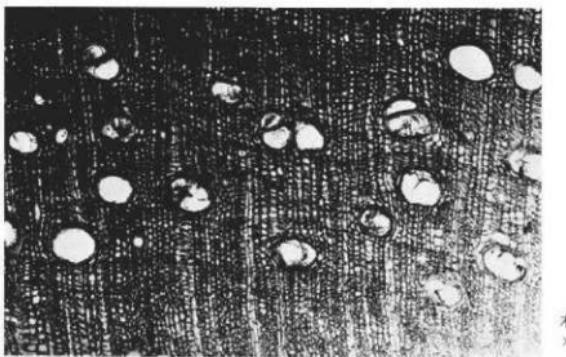


桿目
×140



板目
×140

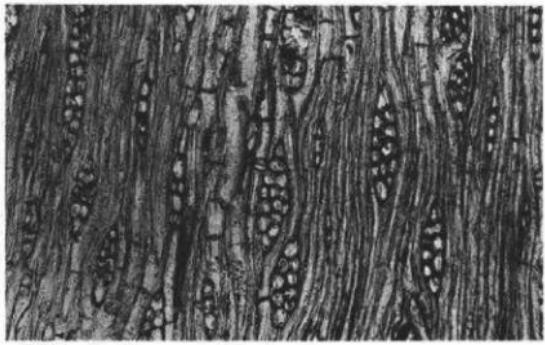
圖版 I - 1 - 2 *Fraxinus* sp.



木口
 $\times 56$



径向
 $\times 140$



板目
 $\times 140$

圖版 I—1—3

Fraxinus sp.

I-2 種子同定

I-2-1 試料

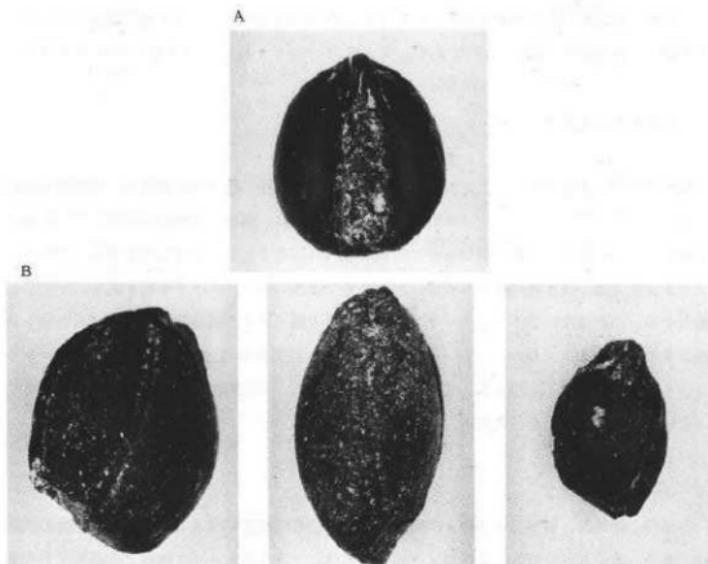
試料はNo.42の1点で、材試料と同じ層位から採取されたものである。

I-2-2 結果

同定結果を一覧表で示し（表I-2）、拡大写真図版（図版I-2）も作成した。

表I-2 同定結果 破片も1個体にかぞえた

種	名	個体数
<i>Magnolia</i> sp.	(モクレン属の一種)	1
<i>Styrax</i> sp.	(エゴノキ属の一種)	100
その他(破片・芽)		5



図版I-2

A : *Magnolia* sp.

B : *Styrax* sp.

スケールは 5 mm

I-3 花粉分析

I-3-1 試料

今回の分析に供した試料は、石坂台IV遺跡の5IZD IV深掘トレンチ基本層位15層（材出土層位と同層）1点である。試料の岩質は、暗灰黄色シルト質砂（炭片を含む）である。

I-3-2 分析方法

花粉・胞子化石の抽出は、試料（15g）を秤量し、HF処理—重液分離（ZnBr₂・比重2.15）—アセトトリル処理—KOH処理の順に物理・化学処理を行なった。分析後の残渣をグリセリンゼリーで封入し、検鏡に供した。

I-3-3 結果

計数においては、プレパラート全面を走査し、その間に出現したすべての分類群及びその個数を表I-3に示した。また樹木花粉が100個体以上検出された試料については、花粉ダイアグラムとして図示した（図I-3）。出現率は、樹木花粉は、樹木花粉総数からハンノキ属を引いた数を基数とした百分率で算出した。なお、複数の分類群をハイフンで結んだものは、分類群間の区別が不明確なものである。T.-C.は、イチイ科—ヒノキ科—イヌガヤ科を示す。

分析結果を以下に示す。

樹木花粉が、全体の80%以上と高率に出現する。草本花粉・胞子は出現数も、種類数も極めて少ない。樹木花粉では、ハンノキ属が高率に出現するが、極めて局的に生育していたものと考えられ、広域な花粉化石群集をわい曲する恐れがあるとして、先述したように、花粉ダイアグラム上では、樹木花粉総数から除いた。ダイアグラムでは、コナラ亜属が高率に出現し、優占する。これに次いでクマシデアサダ各属、ビナ属・カエデ属が比較的高率に出現する。他にトネリコ・オニグルミ・ニレーケヤキ・カバノキ各属を伴う。草本花粉では、カヤツリグサ科が比較的多く出現する。また、餅田沢I遺跡の、本試料の採取層位に相当する層での¹⁴C年代測定値はB. P. 28900±1900年前である。

I-3-4 考察

本試料の年代は、餅田沢I遺跡との層序対比と¹⁴C年代測定結果より28000年前後後の堆積物であると考えられている。花粉ダイアグラムでは、コナラ亜属・ブナ属などの落葉広葉樹が

優占しており、カエデ・トネリコ・カバノキ各属を伴なっている。マツ科の針葉樹は、極めて少なく、温暖要素を示すカシ・シイ類などの植物も認められていないことから、現在の冷温帯落葉広葉樹林の景観が推定される。また、カエデ・トネリコ・ハンノキ各属などが検出されることから、河辺林のような環境も示唆されるが、断言はできない。

東北地方南部地域の阿武隈山地中央部では、約35000～23000年前には、モミ・トウヒ・ツガ・カバノキ各属が優占しており、ブナ属・コナラ属・スギ属を伴なっていることなどから、最終氷期の亜間氷期の植物相を示していると考察している。また、ほぼ30000年前を境にして温帯性のタクサをより多く含むようになるとして、亜間氷期を2つの花粉帯に区分している（鈴木、1980）。このことと、¹⁴C年代測定結果に従えば、本試料は亜間氷期に相当すると考えられる。しかし、本地点では、上述したような亜寒帯性のモミ・トウヒ各属などの針葉樹は、ほとんど検出されていない。これは、本地点が山地上ではなく、低地に位置していたために、気候的に温暖であって、冷温帯落葉広葉樹の発達に適した環境であったことを意味しているのかもしれない。しかし現時点では、断言できず、今後低地における一連の連続した試料を分析することにより明らかにされると考えられ、今後の研究に期待したい。

引用文献

- 鈴木敬治・真鍋健一・吉田 義・柏馬恵吉・竹内貞子（1980）最終氷期における植物相の地
史的変遷と自然環境—東北地方南部地域を例として—、日本第四紀学会講演要旨集、
10p. 5～8.

Sample No.	15
<i>Pinus</i> (Unknown)	3
<i>Sciadopitys</i>	1
<i>Cryptomeria</i>	7
T.-C.	1
<i>Salix</i>	1
<i>Pterocarya</i>	6
<i>Juglans</i>	22
<i>Carpinus - Ostrya</i>	30
<i>Corylus</i>	4
<i>Betula</i>	10
<i>Alnus</i>	540
<i>Fagus</i>	25
<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalans</i>	92
<i>Castanea</i>	1
<i>Ulmus - Zelkova</i>	11
Rosaceae	1
cf. <i>Phellodendron</i>	1
<i>Acer</i>	26
<i>Parthenocissus</i>	1
Araliaceae	1
<i>Fraxinus</i>	20
<i>Viburnum</i>	2
Gramineae	22
Cyperaceae	62
<i>Polygonum</i> sect. <i>Persicaria</i> - <i>Echino.</i>	7
Ranunculaceae	1
<i>Artemisia</i>	9
Carduoideae	1
Unknown	26
other Pteridophyta	26
Arboreal pollen	813
Nonarboreal pollen	182
Unknown	26
Fern spores	26
TOTAL	967

表 I-3 石坂台IV遺跡試料花粉分析結果

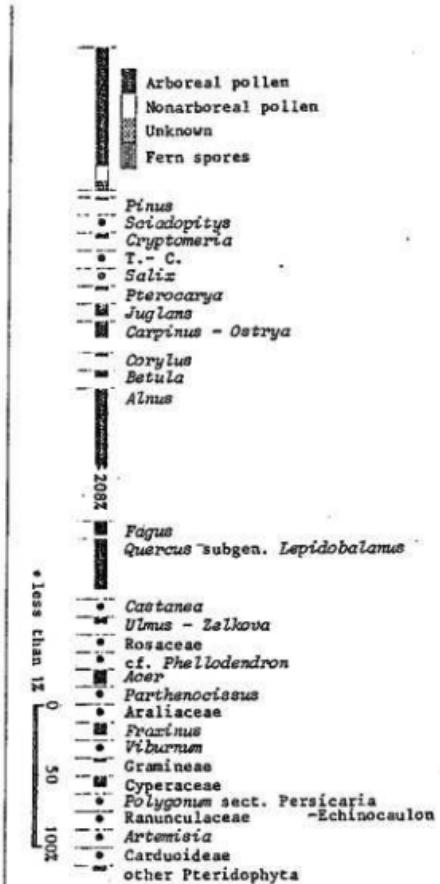


図 I-3 石坂台IV遺跡試料花粉ダイアグラム

図版説明

(図版 I-3)

写真番号	花粉化石名
1	<i>Juglans</i>
2	<i>Betula</i>
3	<i>Alnus</i>
4	"
5a,b	<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>
6	<i>Acer</i>
7	<i>Fraxinus</i>
8	<i>Cyperaceae</i>
9	<i>Polygonum</i> sect. <i>Persicaria-Echinocaulon</i>

図版 I-3

9

[II] 石坂台VII遺跡

II-1 花粉分析

II-1-1 試料

試料は、石坂台VII遺跡の5IZD VII インボリューションサンプル 851118 試料15点、5IZD VII 深掘サンプリング試料5点の計20点である。試料の岩質等については、表II-1-1を参照されたい。

表II-1-1 花粉分析試料表

試料名(試料採取地点)	試料番号	色調	岩質
5IZD VII インボリューションサンプル 851118	A	明黄褐色	砂まじりのシルト質粘土
	B	"	"
	C	橙-明褐色	粘土質シルト
	D	"	シルト質粘土
	E	"	"
	F	明褐色	"
	G	"	"
	H	明黄褐色	"
	I	黄褐色	"
	J	明黄褐色	"
	K	"	"
	L	"	"
	M	"	"
	N	黄褐色	砂
	O	"	"
5IZD VII 深掘サンプリング 851119	A	暗褐色	砂質シルト質粘土(植物根含む)
	B	"	" (" ")
	C	"	" (" ")
	D	褐色	" (" ")
	E	"	" (" ")

II-1-2 分析方法

花粉・胞子化石の抽出は、試料(15 g)を秤量し、HF処理—重液分離(ZnBr₂・比重2.15)アセトトリル処理—KOH処理の順に物理・化学処理を行なった。分析後の残渣をグリセリンゼリーで封入し、検鏡に供した。

II-1-3 結 果

計数においては、プレパラートゾ面を走査し、その間に出現した、すべての分類群及びその個数を表II-1-2に示した。また樹木花粉が100個体以上検出された試料については、花粉ダイアグラムとして図示した(図II-1)。樹木花粉は、樹木花粉総数、草本花粉・胞子は総花粉・胞子数を基準とした百分率で算出した。なお、複数の分類群をハイフンで結んだものは、分類群間の区別が不明確なものである。T.-C.は、イチイ科—ヒノキ科—イヌガヤ科を示す。

以下に分析結果を示す。

インボリューションサンプルのNo.A～Oでは、花粉・胞子化石は、ほとんど検出されなかつた(状況写真参照)。深掘サンプリングのNo.A、B、Cは、検出された花粉・胞子化石数は少ないが、100個体以上検出されたので、花粉ダイアグラムとして表示した。深掘サンプリング試料No.D、Eは、花粉・胞子化石は、ほとんど検出されなかつた。No.A～Eのすべての試料で、黒褐色の有機物片が多量に含まれていた。花粉ダイアグラムとして表示したNo.A、B、C試料の花粉出現傾向を採取層位の下位より順に以下に示す。

No.C：樹木花粉では、ヤナギ属が高率に出現し、コナラ亞属・クリ属を伴なつてゐる。草本花粉では、カヤツリグサ科が比較的多く検出される。

No.B：樹木花粉では、クリ属が高率に出現し、コナラ亞属がこれに次いで比較的高率に出現する。地にブナ属・クマシデーアサダ各属を伴なう。草本花粉では、カヤツリグサ科が比較的多く出現し、イネ科・ヨモギ属・アリノトウグサ属を伴なう。

No.A：樹木花粉では、コナラ亞属が高率に出現し優占する。これに次いで、スギ属・マツ属が比較的多く検出される。他にクリ属・ブナ属を伴なう。草本花粉・胞子では、イネ科・カヤツリグサ科が比較的多く出現し、アリノトウグサ属・ヨモギ属、胞子のヒカゲノカズラ属などを伴なう。

II-1-4 考 察

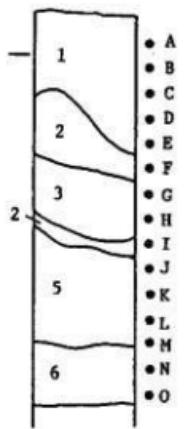
インボリューションサンプルのNo.A～Oの試料では、結果で示したように、花粉・胞子化石

は、ほとんど検出されなかった。そのため、周氷期現象の起った時期の植生環境については、考察することはできない。花粉・胞子化石が検出されなかった原因が、直接インボリューションという現象に起因するものとは考えにくく、むしろそれらの堆積物が堆積した当時に、直射光や酸素により化学的に酸化分解し、消失したと考えた方が良いと思われる。

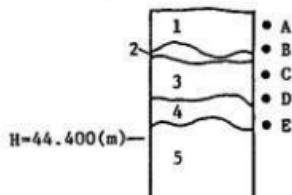
深掘サンプリングのNoA～Eの試料は、結果で示したようにNoA～Cでは花粉が検出され、D・Eでは、ほとんど検出されなかった。検出されなかった原因としては、上述したような酸化分解による分解・消失が考えられる。NoCは、ヤナギ属が高率に出現し、他の樹木花粉は、ほとんど検出されない。このヤナギ属は堆積物中に後から混入したものか、あるいはヤナギ属の花が、何等かの原因で地表に落ち、そのまま堆積したため、花粉ダイアグラムで高出現率を示したものと考えられる。これらのことより、NoCの結果から古植生を考察するには問題があると思われる。NoBでは、クリ属が高率に出現している。クリ属の花粉は、虫媒花であるために風媒花ほど飛散しないので、花粉ダイアグラムで多く出現する場合は、ごく近くにクリ属の母植物が存在した可能性が高いと考えている。ここでクリ属もまた、ごく近くに生えていたクリ属の影響と考えられる。クリ属を除いた花粉の出現傾向は、NoAの花粉の出現傾向と極めて調和的であり、ほぼ同じような植生であったことが推定される。本地点周辺にはナラ類などの落葉樹が広く分布していたと推定され、マツ属・スギも丘陵地や山地に存在したと考えられる。NoA・B試料が表層近くの試料であることから、年代的には新しい堆積物だと考えられるので、ここでマツ属は、二次林としてのアカマツ林の可能性が高く、スギも植林による可能性が示唆される。

Sample No.	5 I Z D W インボリューション・サンプル 851118												5 I Z D W 深掘サンプリング						
	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	A	R	C	D
<i>Pinus</i> (Unknown)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	20	1	-	-	-
<i>Cryptomeria</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	27	5	-	-	1
<i>T.-C.</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
<i>Selix</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4	2	129	-	-
<i>Pterocarya</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
<i>Juglans</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-
<i>Carpinus - Ostrya</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	5	6	-	-	-
<i>Betula</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	1	-	-	-
<i>Alnus</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	7	10	1	-	-
<i>Fagus</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4	7	-	-	-
<i>Ostrya</i> subgen. <i>Legiobalanus</i>	1	4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	47	33	8	1	5
<i>Castanea</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	12	109	3	-	-
<i>Ulmus - Zelkova</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	1	-
<i>Populus</i>	-	10	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
<i>Rhus</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
<i>Ilex</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	3	-	-	-
<i>Erythronium</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Acer</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	6	1	-	-
<i>Prunus</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	7	2	-	1
<i>Malus</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	6	-	-	-
<i>Styracaceae</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	-	-	-	-
<i>Fraxinus</i>	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-
<i>Caprifolia</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
<i>Gramineae</i>	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	51	32	1	1	-
<i>Cyperaceae</i>	1	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	53	57	11	2	-
<i>Chenopodiaceae</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-
<i>Caryophyllaceae</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
<i>Thlaspium</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	-	1	-	-
<i>Polygonia</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
<i>Heuchera</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	47	7	-	-	-
<i>Gentiana</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	2	-	-	-
<i>Fatoumia</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
<i>Artemisia</i>	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	6	7	-	-	-
<i>Carduus</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	45	22	-	-	1
<i>Cichorium</i>	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	12	6	1	-	-
Unknown	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	1	-	-	-
<i>Lycopodium</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	23	-	2	3	-
other Pteridophyta	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	45	3	-	-	-
<i>Pseudoschizaea</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	36	12	1	-	-
ArboREAL pollen	1	15	8	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	146	195	144	4	7
Nonarboreal pollen	2	6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	227	135	14	3	1
Unknown	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	23	0	2	3	0
Fern spores	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	81	15	1	0	0
TOTAL	4	21	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	477	345	161	10	8

表II-1-2 石板台Ⅵ遺跡試料花粉分析結果



SIZD VII インボリューションサンプル 851118
(当地点では、花粉、鉱物両分析を行なった。)



SIZD VII 深掘サンプリング 851119

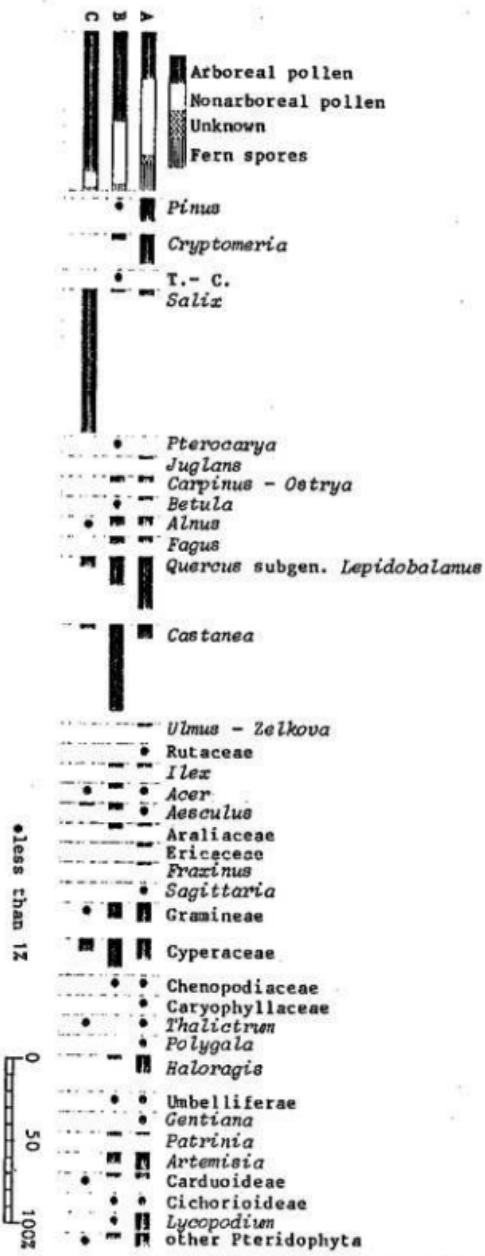


図 II-1-1 石坂台VII遺跡 花粉、
風鉱物分析試料採取地点土層模式柱状図

図 II-1-2 石坂台VII遺跡 (SIZD VII深掘サンプリング)

図版説明

写真番号 花粉化石名

試料番号

図版 II-1-1

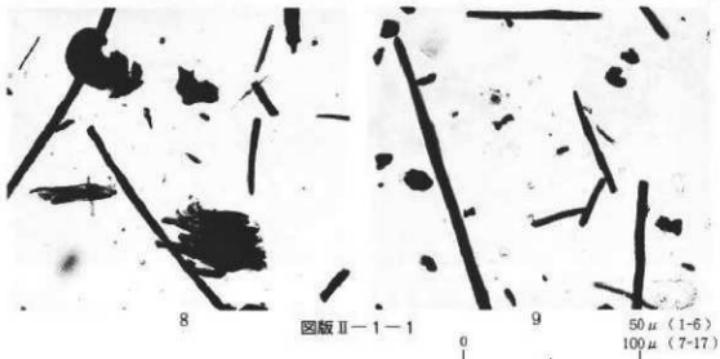
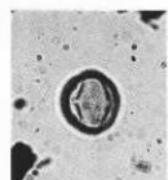
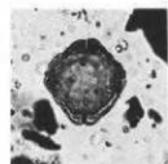
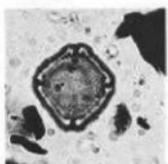
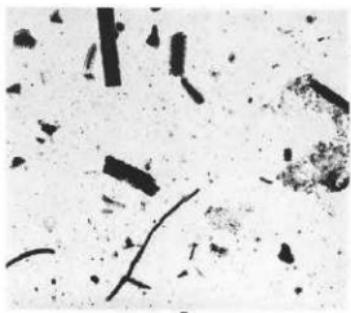
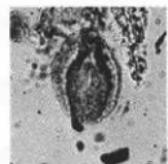
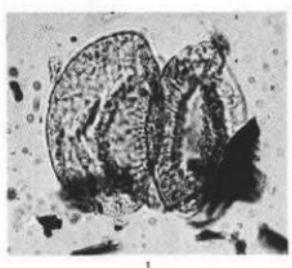
1	<i>Pinus</i>	深掘サンプル	A
2	<i>Salix</i>	"	C
3	<i>Quercus subgen Lepidobalanus</i>	"	A
4 a, b	<i>Haloragis</i>	"	"
5	<i>Patrinia</i>	"	"
6	<i>Artemisia</i>	"	"
7	状況写真	インボリューション・サンプル	A
8	"	"	B
9	"	"	C

図版 II-1-2

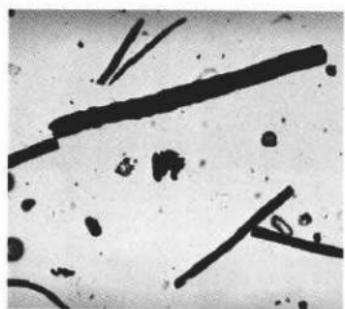
10	状況写真	インボリューション・サンプル	D
11	"	"	F
12	"	"	H
13	"	"	J
14	"	"	L
15	"	"	M

図版 II-1-3

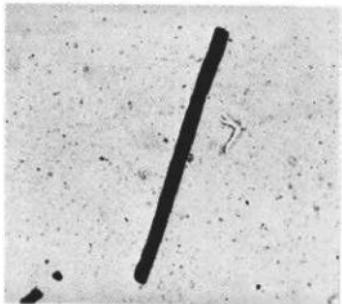
16	状況写真	インボリューション・サンプル	O
17	"	深掘サンプル	D



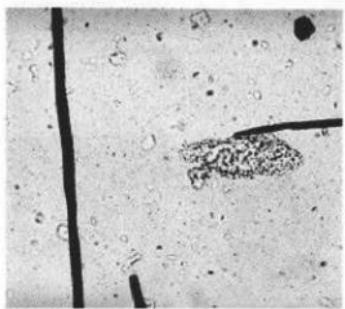
図版 II-1-1



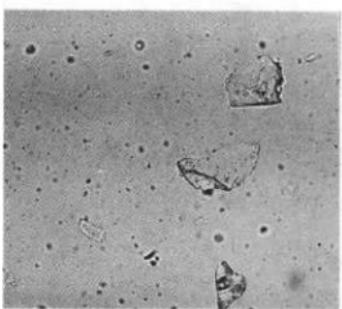
10



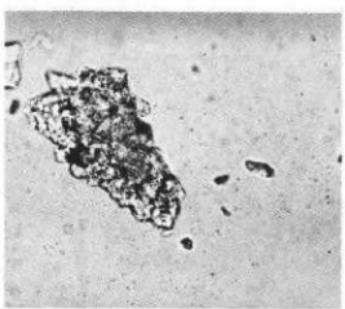
11



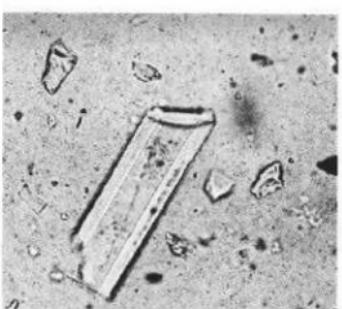
12



13

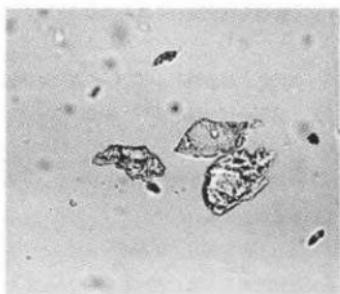


14

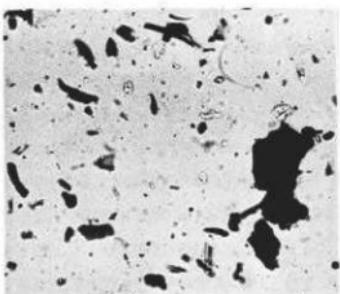


15

圖版 II - 1 - 2



16



17

図版 II-1-3

II-2 重鉱物分析・屈折率測定

II-2-1 試料

試料は石坂台地遺跡の1層から6層までより採取された15点（No A～O）で、花粉分析試料と同一試料である（表II-1-1・図II-1-1参照）。1層から6層は、1万年以前の堆積層と考えられ、インボリューションとみられる地層の乱れが認められている。

II-2-2 分析方法

試料約50 g 秤量（砂分の少ないものは約200 g）、超音波装置により粒を分散、#250の分析筋を用いて水洗し1/16 mm以下の泥分除去、乾燥の後分析筋（#60・#115）により篩別、得られた1/4～1/8 mm粒径砂分をテトラプロモエタン（比重約2.9）を用いて重液分離、重鉱物を封入し偏光顕微鏡下で同定した。また、軽鉱物は双眼実体顕微鏡による観察を行なった。

不透明鉱物は、斜め上方からの落射光下で黒色金属光沢を呈するものをA、それ以外をBとした。風化変質物は「その他」として計数した。

屈折率の測定は、新井（1972）の方法に従った。

各試料の重鉱物組成を表II-2・図II-2に示す。

No O, Nは、緑レン石・角閃石が多く、次に黒雲母・単斜輝石が多い。斜方輝石はNo Nに少量含まれ、No Oには全く含まれない。一般に火成岩中には、あまりみられないカミングトン閃

石（表中では「他の角閃石」と表示）が比較的多い。この様な組成は、6層が变成岩起源の風化堆積物を多く含む可能性をうかがわせる。

No L, Kは、不透明鉱物Aが多く、次に単斜輝石・角閃石・斜方輝石が多い。不透明鉱物Aの中にチタン鉄鉱の自形結晶が認められた。緑レン石・黒雲母は少量になる。No Mの組成はNo O, Nとし、No Kの中間的な組成を表わす。

No Jは、砂分が極めて少なく、試料200gで得られた砂粒は81個しか数えることができなかつた。したがって砂粒の重鉱物組成を正確に表わしているとは言えない。

No I～Fは、不透明鉱物Bが多く、以下多い順に角閃石・斜方輝石・単斜輝石となる。不透明鉱物Bは、落射光下で赤褐色を呈することから褐鉄鉱であると考えられる。下位からみてNo Iから斜方輝石が単斜輝石より多くなり、上位までこの関係が続く。

No E～Cは、重鉱物のほとんどが不透明鉱物Bである。不透明鉱物Bは下位と同じく褐鉄鉱と考えられる。No E～C採取層位は、インボリューションの上部に相当することから、インボリューションを形成するような状況は鉱物粒にも影響を与えたことが推定される。

No B, Aは、不透明鉱物Bが多いが、下位に比べ斜方輝石・角閃石・単斜輝石の量がずっと多くなる。

以上述べた重鉱物組成の変化は、野外における地層の区分をほぼ反映していると言える。

軽鉱物の観察では、No A, Bに、やや多量の火山ガラスが認められた。火山ガラスは、淡褐色を呈し比較的大きな気泡を持つ。遠藤・鈴木（1980）の形態分類ではC型に属する。火山ガラスの屈折率は $n = 1.502 \sim 1.505$ であった。No A, B採取層位と火山ガラスの形態（比較的大規模な噴火を示す）及び屈折率から、この火山ガラスを主体とするテフラは十和田八戸テフラの可能性が考えられる。噴出年代は ^{14}C 年代より1万～1.3万年前とされている（町田ほか、1984）。ただし、本遺跡の位置は從来の分布域から西にはずれており、また火山ガラスの屈折率も町田ほか（1984）の値 $n = 1.503 \sim 1.508$ と若干のずれがあることなどから、今後の検討の余地はある。

軽鉱物の観察ではまた、全試料に海綿骨針が認められた。特にNo J～Fに多い。海綿骨針の産出から当時は現在よりも海岸が遺跡に近いところにあった可能性が考えられる。

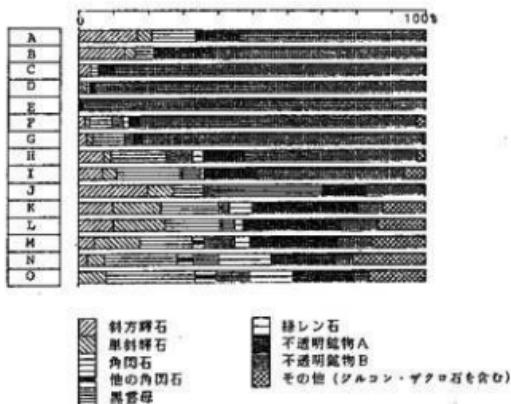
引用文献

- 新井房夫（1972）斜方輝石・角閃石の屈折率によるテフラの同定—テフロクロノロジーの基礎研究—、第四紀研究、11、p.254～269。
- 遠藤邦彦・鈴木正章（1980）立川・武蔵野ローム層の層序と火山ガラス濃集層。考古学と自然科学、13、p.19～30。
- 町田 洋・新井房夫・小田静夫・遠藤邦彦・杉原重夫（1984）テフラと日本考古学—考古学研究と関係するテフラのカタログ—。『古文化財の自然科学研究』、古文化財編集委員会編、同朋舎、p.865～928。

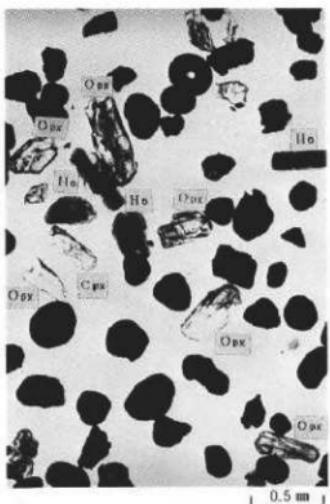
試 料 番 号	重 鉱 物 組 成												同 定 鉱 物 粒 数		
	斜 方 輝 石	単 斜 輝 石	角 閃 石			酸 化 角 閃 石	他 の 角 閃 石	黒 雲 母		緑 レ ン 石	ジ ル コ ン 石	ザ ク ロ 石	不 透 明 鉱 物		
			緑 色	褐 色	青 緑 色			褐 色	綠 色				A	B	
A	53	J3	40										40	170	2 318
B	38		9	15									49	180	291
C	J1			7									1	14 281	1 315
D	3	3	3										3	254	257
E	1	1	1											288	292
F	6	4	20						7 3 5				9	250	8 312
G	10	7	37	1	1				6 1 3				11	340	3 419
H	26	7	49	1	5				21 6 11				1	42 177	7 353
I	22	12	55	2				2	8 8 3	1	2	48	133	16 312	
J	15	1	6	-7						28			10	14	83
K	27	37	35		11			3 5		18 5 1	83	20	27	272	
L	41	60	49	3	13			3	14	10 4	1 114	44	51	407	
M	15	44	43	2	5			12	1 29 15	1	1 86	34	51	341	
N	8	15	45	1	16	1	14		23 46 3	1	1 56	17	59	305	
O			24	55	1	21		19 29		38 1	1	1 53	13	47	301

(数値は粒数)

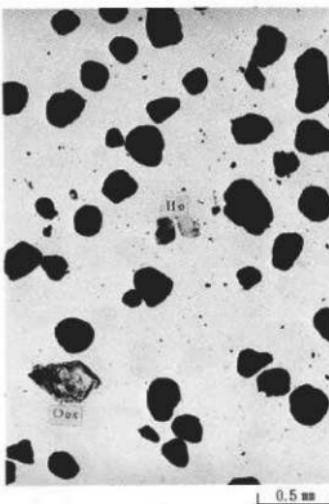
表II-2 石板台面遺跡試料量鉱物組成



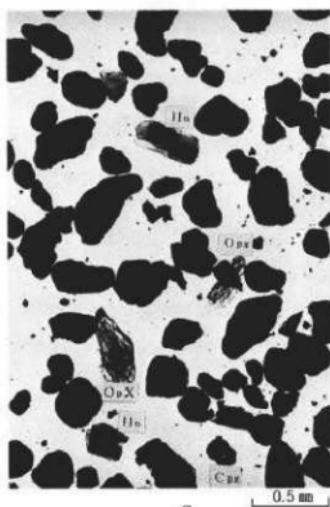
図II-2 石板台面遺跡試料量鉱物組成



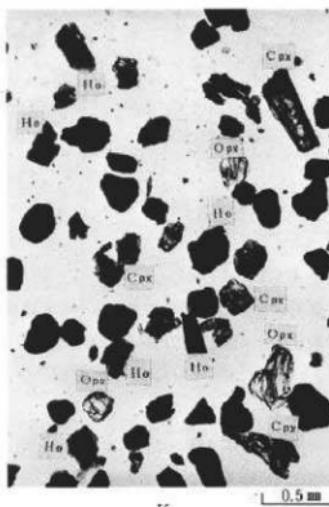
A



C

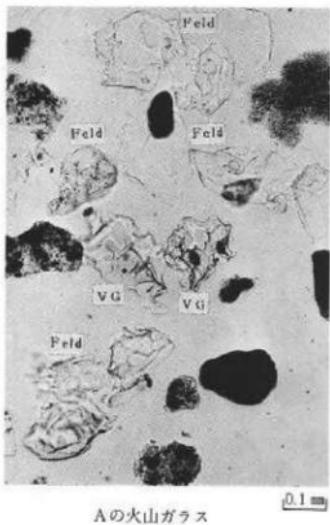
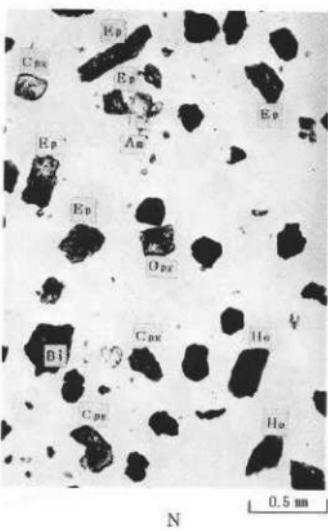


G



K

図版 II-2-1



Aの火山ガラス

図版II-2-2

Opx : 斜方輝石
Cpx : 単斜輝石
Ho : 角閃石
Bi : 黒雲母
Ep : 緑レン石
VG : 火山ガラス
Feld : 長石
下方ポーラーのみ。

II-3 種子同定

II-3-1 試料

試料は2点で、縄文時代晩期～弥生時代の焼土遺構（5IZDW-SN28）から採取されたNo 43と、弥生時代初頭の土器付近（5IZDW-SX36-A）から採取されたNo 44である。

II-3-2 結果

No 43には2個の、No 44には13個の小型の炭化種子があったが、いづれも種類は同定できなかった。

[Ⅲ] 石坂台Ⅷ・石坂台IX・松木台Ⅲ遺跡

Ⅲ-1 土器胎土重鉱物組成分析

Ⅲ-1-1 試料

試料は、石坂台Ⅷ・石坂台IX・松木台Ⅲの各遺跡から出土した縄文式土器5点と、弥生式土器1点である。遺跡名、時代、表面観察の結果等を表Ⅲ-1-1に示す。

表Ⅲ-1-1 試料表

出土 遺跡名	試料 番号	試料及び 時 代	色 調		表面観察	軽鉱物・岩片など※
			表	裏		
石坂 台 Ⅷ	1	LL33 弥生(縄縄文)	浅黄橙	にぶい 褐	1mmほどの石英・長石 粒が多く見られる	石英・長石・安山岩・ チャート
	2	SX36 縄文晚期	浅黄橙	浅黄橙	0.5mmの石英粒が少量見 られる	石英・長石・微量の 軽石とチャート
石坂 台 IX	3	SK06 縄文後期	明褐灰	浅黄橙	1~1.5mmの風化した長 石粒が見られる	石英・長石
	4	SI01 縄文中期	浅黄橙	浅黄橙	1.5~2mmのチャートが 少量見られる	石英・長石・チャー ト
松木 台 Ⅲ	5	SK14 縄文晚期	灰褐	灰褐	砂粒がほとんど見られ ず	石英・長石・微量の 火山ガラス
	6	SK78 縄文晚期	褐灰	にぶい 棕櫚	0.3~0.7mmの風化した 長石粒が多く見られる	石英・長石

※：重液分離により得られた軽鉱物粒

Ⅲ-1-2 分析方法

試料約10gを鉄乳鉢で粉砕した後、土壤試料と同じ分析を行なった。

Ⅲ-1-3 分析結果及び考察

試料の重鉱物組成を表Ⅲ-1-2、図Ⅲ-1-1に示す。

No.1は、不透明鉱物Aが多く約50%以上を占める。不透明鉱物以外では、斜方輝石・角閃石・单斜輝石の順に多い。

No.2は、不透明鉱物Bがかなり多い。不透明鉱物Bは落射光下で赤褐色を呈し、ほとんどが褐鉄鉱であると考えられる。

No.3は黒雲母が非常に多い。黒雲母は、薄膜状の結晶であることや比重が重液のそれに近いなどの理由から正確にその量をとらえることが困難であり、鉱物組成の指表にあまり用いられない。しかしNo.3のように非常に多い場合は、重鉱物組成の特徴としてとらえてよいと考える。黒雲母の他に緑レン石が多いことも注目される。

No.4もNo.3同様に黒雲母が多く、緑レン石も多い。

No.5は、不透明鉱物を除けば角閃石・斜方輝石・単斜輝石の順に多い。少量の黒雲母と緑レン石も含まれる。

No.6は、黒雲母が多いが、それを除くとNo.5同様、角閃石>斜方輝石>単斜輝石である。

一般に、胎土中に含まれる砂粒の重鉱物組成から土器の分類を考察する場合、斜方輝石—単斜輝石—角閃石の三角ダイアグラムがよく用いられる。今回の分析結果から作成した三角ダイアグラムを図III-1-2に示す。

図III-1-2より、No.1, 2, 5, 6はほぼ同一グループに属すると考えられる。ただしNo.1は不透明鉱物Aがかなり多いことと他の3点にはないカミングトン閃石（表III-1-2の「他の角閃石」）が含まれることから、別グループとも考えられる。

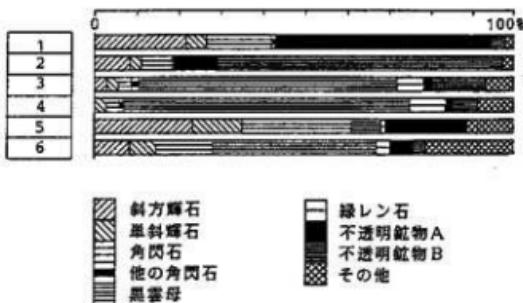
No.3とNo.4はダイアグラムの三成分がかなり少ないため、全体の重鉱物組成を正確に反映していないと考えられる。したがって三角ダイアグラム上ではかなり離れた位置にあるが、No.3とNo.4は黒雲母・緑レン石が属すると考えられる。

以上のグループ分けに土器製作時期を対応させると、No.1, 2, 5, 6は縄文晩期（このうち続縄文期のNo.1は別グループの可能性もある）、No.3, 4は縄文中～後期となる。このことから、製作時期と胎土の組成との間に関係があることも推測されが、今後より多くの情報と検討の必要がある。

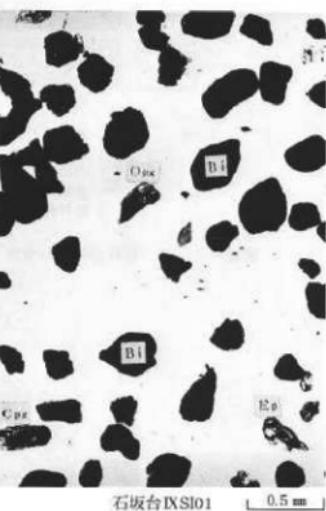
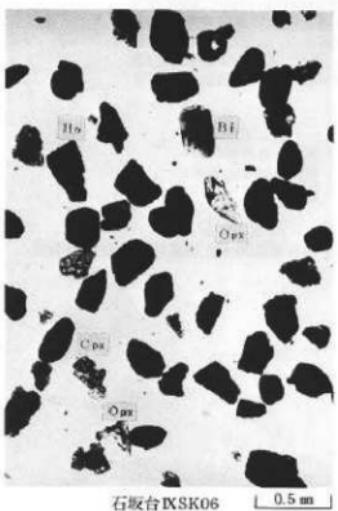
試 料 番 号	重鉱物組成											同定鉱物粒数			
	斜方輝石	單斜輝石	角閃石			他の角閃石	黒雲母		緑レンン石	不透明鉱物	その他の他				
			緑色	褐色	青紫色		褐色	緑色							
			1	68	15	29	19	3		1	160	11			
1												7	313		
2			15	5	5	8		1			18	123	5	180	
3			9	8	7	2		5	144	40	19	6	39	21	300
4				9	3	7		3	207	10	27	5	20	28	319
5			65	33	69	3			10	10	3	53	2	32	280
6			29	22	42	4	1		24	113	11	19	11	75	351

(数値は粒数)

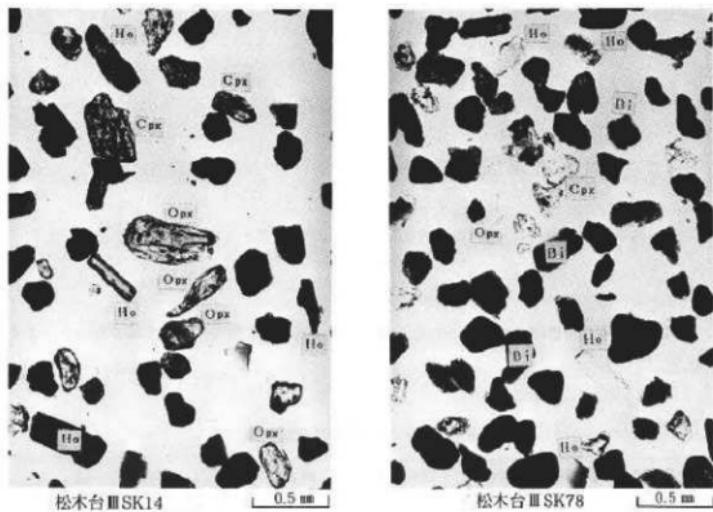
表III-1-2 石坂台Ⅶ・石坂台IX・松木台Ⅲ遺跡出土土器試料胎土重鉱物組成



図III-1-1 石坂台Ⅶ・石坂台IX・松木台Ⅲ遺跡出土土器試料胎土重鉱物組成



図版Ⅲ-1-1



図版III-1-2



図III-1-2 石坂台9号・石坂台IX・松木台III遺跡出土土器試料 斜方輝石 - 単斜輝石 - 角閃石三角ダイアグラム

[IV] 松木台Ⅲ遺跡

IV-1 花粉分析

IV-1-1 試料

試料は、松木台Ⅲ遺跡より採取された4点である。試料の岩質等については表IV-1-1に示した。

表IV-1-1 花粉分析試料表

試料名(試料採取地点)	試料番号	色調	岩質
MKDⅢ・MH-55 南壁	5	黄褐色	砂質シルト質粘土(植物根含む)
インボリューション 851120	6	"	" (" ")
MKDⅢ SN163	7	"	砂質粘土質シルト
MKDⅢ SK110R P6	8	褐色	" (植物根含む)

IV-1-2 分析方法

花粉・胞子化石の抽出は、試料(1.5g)を秤量し、HF処理-重液分離(ZnBr₂・約2.15)アセトリシス処理-KOH処理の順に物理・化学処理を行なった。分析後の残渣をグリセリンゼリーで封入し、検鏡に供した。

IV-1-3 結果

計数においては、プレパラート全面を走査し、その間に出現したすべての分類群及びその個数を表IV-1-2に示した。また、樹木花粉が100個体以上検出された試料については、花粉ダイアグラムとして図示した(図IV-1)。出現率は、樹木花粉は、樹木花粉総数、草本花粉・胞子は総花粉・胞子数を基準とした百分率で算出した。なお、複数の分類群をハイフンで結んだものは、分類群間の区別が不明確なものである。T.-C.は、イチイ科-ヒノキ科-イスガヤ科を示す。

以下に分析結果を示す。

試料No.5・6・7では、花粉・胞子化石は、ほとんど検出されなかった。No.8は、花粉・胞子化石数は少ないが、樹木花粉が100個検出されたので、花粉ダイアグラムとして表示した。出現傾向は樹木花粉ではコナラ亜属が比較的高率に出現し、これに次いでスギ属・ブナ属・マ

ツ属が多く出現する。草本花粉では、イネ科が高率に出現し、カヤツリグサ科・アカザ科・ヨモギ属を伴なう。

IV-1-4 考 察

インボリューションサンプルのNo.5・6は、結果で示したように花粉はほとんど検出されなかった。石坂台遺跡の考察で示したように、酸化分解による消失が考えられる。土師器片を多く含む焼土内からのサンプリング試料であるNo.7もまた、ほとんど花粉が検出されなかった。花粉・胞子は熱に弱く、簡単に分解してしまうので、焼土内に堆積していた花粉・胞子は酸化・分解や熱によって分解したものと考えられる。土壤内に伏せられた平安時代の杯形土器の内部から採取されたNo.8試料は、結果で示したように、花粉・胞子化石の含有数が少なく、保存状態が良くないので、結果として古植生を考察するのには十分ではないと思われる。花粉ダイアグラムの出現傾向は、能代市の分析結果(辻, 1981)と極めて調和的であるが、先述した理由により、ここでは比較検討することは控えることにする。

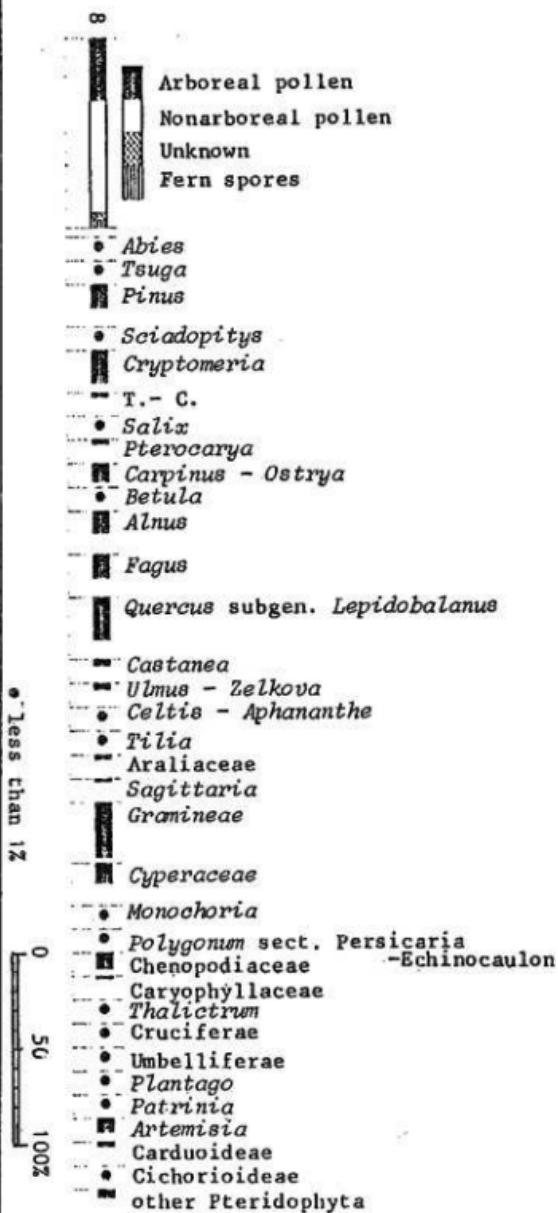
引 用 文 献

辻誠一郎(1981) 秋田県の低地における完新世後半の花粉群集・東北地理、第33巻、第2号。

Sample No.	5	6	7	8
<i>Abies</i>	-	-	-	1
<i>Tsuga</i>	-	-	-	1
<i>Pinus</i> (Unknown)	-	-	-	12
<i>Sciadopitys</i>	-	-	-	1
<i>Cryptomeria</i>	-	-	-	17
T. + C.	-	-	-	2
<i>Careinace - Ostrya</i>	-	-	-	9
<i>Betula</i>	-	-	-	1
<i>Alnus</i>	-	-	-	11
<i>Fagus</i>	-	-	-	12
<i>Quercus</i> subgen. <i>Leptobalanus</i>	-	-	-	23
<i>Castanea</i>	-	-	-	3
<i>Ulmus</i> - <i>Zelkova</i>	-	-	-	3
<i>Celtis-Aphananthe</i>	-	-	-	1
<i>Parthenocissus</i>	-	-	-	1
<i>Araliaceae</i>	-	-	-	2
<i>Sedge</i>	-	-	-	4
<i>Gramineae</i>	-	-	1	87
<i>Cyperaceae</i>	-	-	-	31
<i>Monochoria</i>	-	-	-	1
<i>Chenopodiaceae</i>	-	-	-	25
<i>Caryophyllaceae</i>	-	-	-	4
<i>Thlaspiaceae</i>	-	-	-	1
<i>Cruciferae</i>	-	-	-	1
<i>Umbelliferae</i>	-	-	-	1
<i>Plantago</i>	-	-	-	1
<i>Patrinia</i>	-	-	-	1
<i>Artemisia</i>	1	-	2	22
<i>Carduoideae</i>	-	-	-	5
<i>Cichorioideae</i>	-	-	-	1
Unknown	2	-	3	12
ether Pteridophyta	1	1	-	12
Arboreal pollen	0	0	0	100
Nonarboreal pollen	1	0	3	185
Unknown	2	0	3	12
Fern spores	1	1	0	12
TOTAL	4	1	6	309

表IV-1-2 松木台Ⅲ遺跡試料花粉分析結果

檢出花粉・孢子化石名一覽表



図IV-1 松木台Ⅲ遺跡試料花粉ダイアグラム

IV-2 重鉱物分析・屈折率測定

IV-2-1 試料

試料は松木台Ⅲ遺跡のⅢa層からV-b層まで各層1点づつ採取された7点である。試料の岩質等については、図IV-2-1に示した。当遺跡の地層は、旧石器包含層を含む。

IV-2-2 分析方法

試料約50g秤量（砂分の少ないものは約200g）、超音波装置により粒を分散、#250の分析篩を用いて水洗し1/16mm以下の泥分除去、乾燥の後分析篩（#60・#115）によび別、得られた1/4~1/8mm粒径砂分をテトラブロモエタン（比重約2.9）を用いて重液分離、重鉱物を封入し、偏光顕微鏡下で同定した。また、軽鉱物は双眼実体顕微鏡による観察を行なった。

不透明鉱物は、斜め上方からの落射光下で黒色金属光沢を呈するものをA、それ以外をBとした。風化変質物は「その他」として計数した。

屈折率の測定は、新井（1972）の方法に従った。

IV-2-3 分析結果及び考察

各試料の重鉱物組成を表IV-2・図IV-2-2に示す。

No.38は、角閃石がかなり多く次に不透明鉱物が多い。輝石は両輝石とも少量で斜方輝石が単斜輝石よりやや多い。他に黒雲母と微量のカミングトン角閃石を含む。

No.37は、No.38とほぼ同じ組成であるが、斜方輝石が単斜輝石に対してやや多くなる。

No.36は下位に比べ両輝石の割合が増す。また、カミングトン角閃石はNo.36より上位には産出しない。

No.35、34は全試料中最も両輝石が多い。輝石は斜方輝石が単斜輝石に対しかなり多い。

No.33、32では、再び角閃石が増える。輝石は単斜輝石が斜方輝石よりも多くなる。

以上の重鉱物組成の変化から今回分析の石坂台Ⅲ遺跡との対比を考察する。

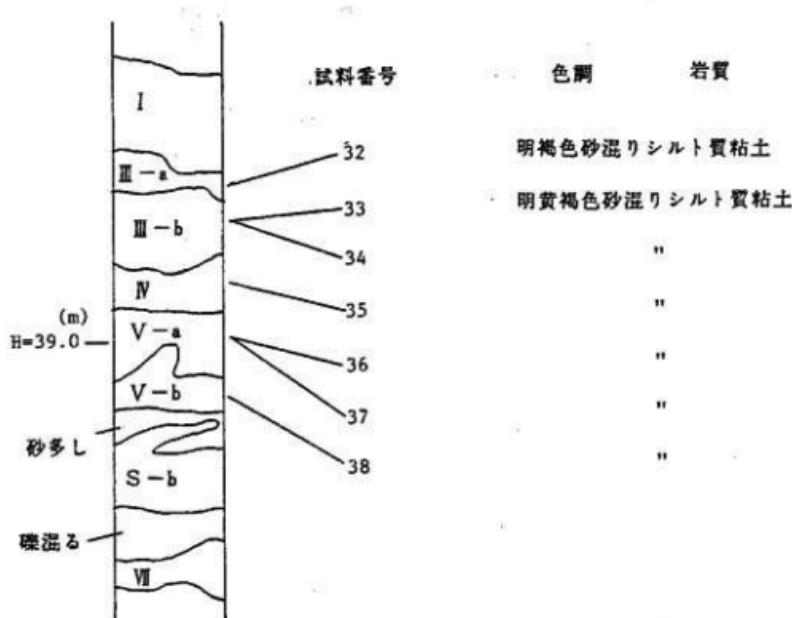
カミングトン閃石の産出と角閃石>斜方輝石>単斜輝石の関係から、No.38~36はNo.J~I付近に対比される。したがって上位のNo.35、34はNo.H~E付近、また単斜輝石が多いNo.33、32はNo.D~C付近に対比されると考えられる。

軽鉱物の観察でNo.32、33に石坂台Ⅲ遺跡のNo.A、Bにみられたとはほぼ同じ特徴を持つ火山ガラスが比較的多く認められた。火山ガラスの屈折率は $n = 1.502 \sim 1.505$ であり石坂台Ⅲ遺跡のものと同じ値が得られた。したがってこの火山ガラスを含むテフラは石坂台Ⅲ遺跡で認められたテフラと同一である可能性がある。

上述の重鉱物組成による対比から松木台Ⅲ遺跡におけるこのテフラの層準はNo.32の上位にあると考えられ、テフラ降灰後の拡散によりNo.32, 33にも火山ガラスが含まれると考えられる。また、海綿骨針も全試料に少量認められた。

引用文献

新井房夫（1972）斜方輝石・角閃石の屈折率によるテフラの同定—テフロクロノロジーの基礎的研究一、第四紀研究、11、p. 254～269。

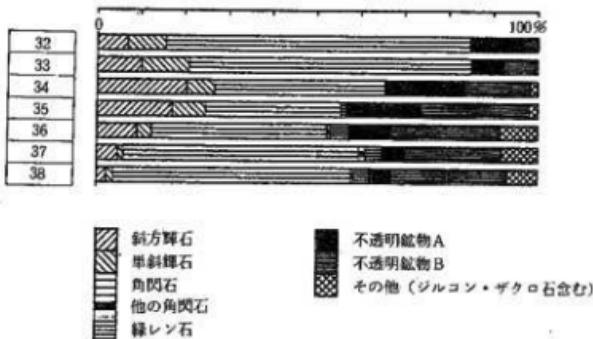


図IV-2-1 松木台Ⅲ遺跡 重鉱物分析試料採取地点土層模式柱状図

試 料 番 号	重 鉱 物 組 成												同 定 鉱 物 粒 数	
	斜 方 輝 輝 石	單 斜 輝 輝 石	角 閃 石		酸 化 角 閃 石	他 の 角 閃 石	黑 雲 母		綠 青 石	ジ ル コ ン 石	ザ ク コ ン 石	不 透 明 鉱 物		
			綠 色	褐 色			褐 色	綠 色				A	B	
			石	石			石	石						
32	29	37	283	7	1							50	14	421
33	41	44	256	2	1							29	29	2 404
34	72	22	132	1	3							63	52	6 351
35	52	23	92	1			1	3	2			51	74	4 303
36	27	10	116	2	1	2	8	5	2		3	28	74	20 298
37	16	4	175	2	2	5	7	6		2	3	17	73	22 334
38	7	5	167	2	2	2	9	1	1	1	1	15	82	19 313

(数値は粒数)

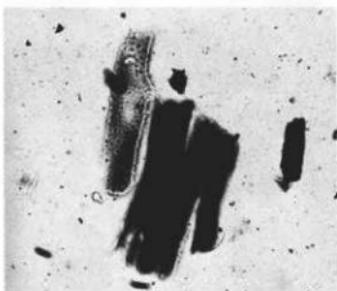
表IV-2 松木台Ⅲ遺跡試料重鉱物組成



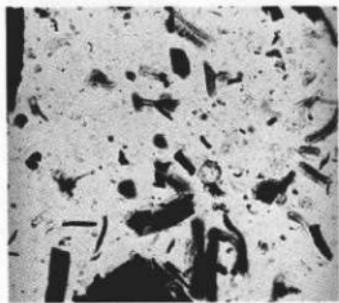
図IV-2-2 松木台Ⅲ遺跡試料重鉛物組成



1 No. 5 (状況写真)

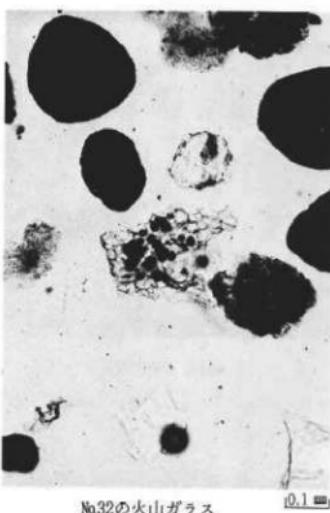
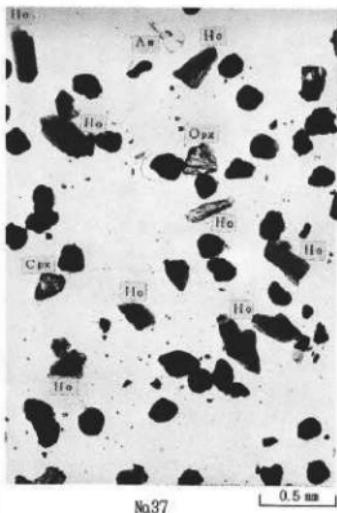


2 No. 7 (状況写真)



0 100 μ

3 No. 8 (状況写真)



Cpx : 斜方輝石 Cpx : 単斜輝石 Ho : 角閃石 Am : カミングトン閃石
下方ボーラーのみ。

MK

MJ

MI

MH

MG

MF

ME

MD

MC

58



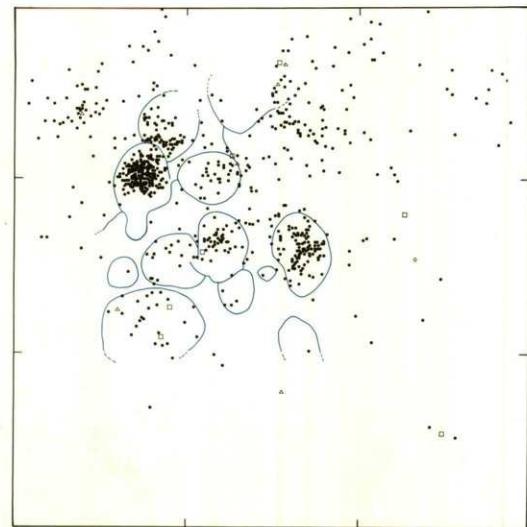
57

56

55

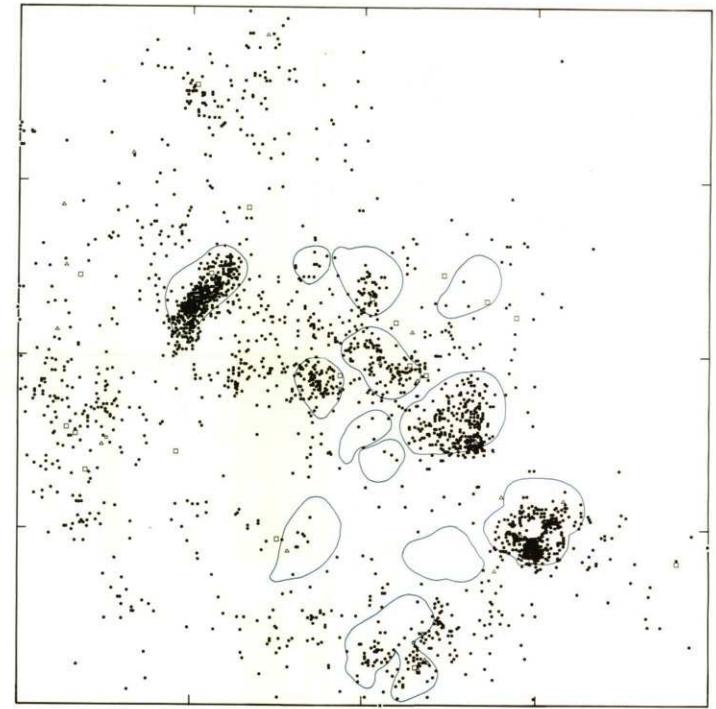
54

53



● 剥片
△ ナイフ形石器
□ U形器
○ 刨器

第6図 旧石器時代遺物出土平面・垂直分布図



(東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書 I)